
仮面ライダー逆鬼と夜天と魔法少女と

フロスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー逆鬼と夜天と魔法少女と

【Nコード】

N6067J

【作者名】

フロスト

【あらすじ】

戦国時代で戦った九人目の鬼、その名は逆鬼^{サカキ}。彼は戦国時代で死んだと思い、気付いたら現代に居た！？そこで、逆鬼は少女達と出会う……。

この小説は、『劇場版・仮面ライダー響鬼と七人の戦鬼』のオリジナルライダーと、『魔法少女リリカルなのは』のクロス小説です。

予告？

フェイト「これから始まるのは、私がなのはと出会って半年後の物語」

なのは「はやてちゃんや、守護騎士のみんなとの出会い」

はやて「そして、うちの子たちと一緒に私のために戦ってくれたあの人……」

(場面が変わり、映るのは四本角の鬼)

なのは・フェイト・はやて『魔法少女リリカルなのはA・S、始まり……』

????『ちよつと待ったああああああああつ!!』

(突然聞こえた声。)

それに驚く少女三人を尻目に、撮影現場の壁を破壊して現れるヤツ)

サカキ「俺抜きにして話し始めようとすんなっ！ 主役は俺だぞ！
」

(どこぞの桃赤鬼のセリフを言うのは、本編の主人公の鬼。
突然の登場に、少女三人は驚く)

なのは「さ、サカキ君っ!?!」

はやて「アンタ何でおるんっ!?! 今日収録は私らだけのはずや
でっ!?!?」

サカキ「知るか。っーか主役を差し置いて収録始めるな」

(なお、本編から10年後の機動六課で収録しています。だからみ
んな19歳)

フェイト「でも、勝手なことしたら怒られるんじゃないっ」

なのは「・・・フェイトちゃん、あれ・・・」

(何かに気付いたエース・オブ・エース。その先には黒焦げになったプロデューサーの歌舞く鬼)

はやて「・・・まあ、この小説のことやけど」

なのは・フェイト「無視したっ!?!?」

はやて「えーんよ。それより、話しが始まるのはウィータがなのはちゃんを襲う前やな」

フェイト「あ、うん。具体的にははやてが守護騎士のみんなと会おう前だよな?」

(資料を見る心優しき閃光。それに頷くのは魔導の赤鬼)

サカキ「そうだな。それではやてと会って、ザフィーラ達と会って・・・そんな感じだな」

はやて「そこから、サカキも闇の書事件に巻き込まれて・・・そんな感じやね」

(しみりする夜天の主。やっぱり思うところがあるらしい)

なのは「・・・あー、うん。それで、基本的には『仮面ライダー×リリカルなのは』・・・でいいんだよね？ この小説」

サカキ「そうだな。俺自身が『仮面ライダー響鬼(劇場版)』の鬼だしな」

(そう、本編はオリジナルライダーとリリカルなのはのクロス小説なのだ)

サカキ「まあ、最初は変身できないんだけどな」

フェイト「音撃は使えるよね？」

サカキ「まあーなあー」

(軽くネタバレする赤鬼。そこで復活した歌舞く鬼からフリップが出る)

サカキ「あー、これ以上はネタバレになるし時間みたいだわ」

はやて「あ、ほんまや。えー、本編は作者が書くのに手間取ってるため、不定期更新となります」

フェイト「他にも、サカキ以外のオリジナルキャラも出ますし、オリジナルストーリーになる可能性があります。その所は御了承下さい」

なのは「本編に対する感想はもちろん、コラボ企画も大歓迎です」

サカキ「つーかマジで頼む。作者、ヘタレで淋しがりだから」

（なお、収録現場にいるスタッフはもちろん。作者本人からのお願いであります）

サカキ「うし、それじゃあ行くぞ。せーのっ」

サカキ・なのは・フェイト・はやて『『仮面ライダー逆鬼と夜天と魔法少女と』始まります！！』

(四人綺麗にタイトルコールしたところでフェードアウト。
BGM、仮面ライダー響鬼OPテーマ『輝』かがやき)

はやて「あ、壊した壁ちゃんと直しといてな」

サカキ「うーい」

(終わり)

一ノ巻『鬼と夜天の主』（前書き）

駄文で無理やりかも知れませんが、宜しくお願ひします。
byフロスト

一ノ巻『鬼と夜天の主』

・・・・・・・・イテエ。ちよっくら、ドジ踏んだか。目の前真っ赤だし・・・・・・・・。

はは、まさか子供に刺されるとはな。・・・・・・・・まあその後、崖から落ちたわけだが・・・。

それが原因だ。うん。

あ……。何か、いろんなのが出てきた。

ヒビキ、イブキ、トドロキ、トウキ、キラメキ、ニシキ、ハバタキ、カブキ・・・・・・・・。

そっぴや人って死ぬ前に昔の事思い出すって聞いたな……。

て事は、俺死ぬのか。ちよっど目開けるの疲れてきたし。

まあ。あんま悪くない人生だったな。

気が合う奴らとも会えたし、旨い酒も呑めた。満足だ。

・・・あ。そういやあいつどうしてんだろ。悔いっつっならあいつだけが気掛かりだわ。

あー。でも、もう限界みたいだわ。頭が真っ白になってくし。・・・
・・・悪いな、紅葉^{もみじ}。

カブキ、今逝くわ・・・・・・・・。。。

バーカ。お前はまだ早いだよ

・・・・・・・・は？ カブキ？

仮面ライダー 逆鬼と夜天と魔法少女と

一ノ巻 『鬼と夜天の主』

んー！

あー、えー天気や。これなら洗濯物もよー乾くわ。

とりあえず外出んなあ。新聞やら牛乳ビン取らんと。

そう思うて、車イスを前に進めようと操作しようとする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

人が倒れとった。

「・・・・・・・・・・何でや」

そう言うてしまふ。

そりゃそうやる。人が気持ち良う、外に出たら人が倒れとるんやから。

・・・・・・・・まあ、でも。このままやとご近所さんに見つかって騒ぎなるんも嫌やし、とりあえず近づいてみる。

倒れとるんは、たぶんわたしと同じくらいの男の子。

着とるのは朱色の和服。よーは知らんけど、良いものや。

腰の帯にCDみたいなのが3枚に、二つに折られた何か。

んで、男の子の横に太鼓で使うようなバチに、火の玉が三つ追いかけてあつてるような模様が描いてある円状の何か。・・・何やこれ？

「・・・・・・・・ん」

あ、男の子が起きそつや。

「あの一。大丈夫ですかー？」

相手と同じくらいの子でも、初対面の人には敬語を使う。

今はお星様になった両親が教えてくれたことや。

「・・・・・・・・」

目を開けた男の子は、何も言わんでジツとわたしを見とる。

わたしは車イスに座ってても、男の子は倒れとるからわたしが見下ろす形になつとる。

にしても、わたしの顔に何か付いとるんやろーか？　ジッとわたしを見たまま動かんし。

「……………狸が喋ってる」

瞬間、わたしはハリセンでおもいつきり男の子を叩いた。

『スパーンツ！』っていい音がしたけど、これは絶対に罪にならん。

……………車イスの少女にハリセンで叩かれてから数日後。うん。
数日経つのよ。

俺は車イスの少女、八神はやての家に居候することになった。

何故かと言うと、ハリセン叩かれた後、完全に目を覚ました俺は、自分が死んだ場所とは違う場所にいたことに驚き、さらには周りの家が知ってる物とはまるつきり違うことにも驚き、混乱した。

……さらにそこに追い討ちをかけるように、俺は子供に若返っていた。

こんな事（特に後者）があれば誰でも驚くだろう。

そんな混乱してる俺を、はやて（名前で呼んでいいと言われた）が落ち着かせてくれた。

俺が事情を説明すると、はやては驚き、俺がいた時代は戦国時代と言い、今はそれから何百年も経った未来である事を説明してくれた。

何百年も未来……。もと居た場所に帰れない事は、すぐにわかった。

そして、右も左もわからない場所でどう生きればいいのか……。

そんな俺を見たはやてが、『そんなら、家に住むかー？』と言った。

さすがに断ろうとしたが、『そんなら、どうするつもりなん？』と言われ、言葉に甘える事にした。

それに……。

「わたし、もう親おらんから、家族が増えるのはうれしいねん」

……と言われたら断れない。

それで俺が『ここに住む』と言うと、それからはやては凄まじかった。

まず、俺の現代の着物（服と言っらしい）を仕入れ、現代の言葉や文字、カタカナ一般常識を教えてくれた。

現代のことは興味があったし、生きる上では必要という事で、それ

はすぐに覚えた。・・・だから俺が車イスやらハリセンを知ってるわけよ。

んで、今はここに住むようになってから日課となっている修練中。

内容は体術と基本トレーニング。そして音撃棒を振るい、音式神の操作。・・・いわゆる鬼の修練。

・・・現代に来てわかった事、若返りの影響で『鬼』になれなくなっていた。

まず、鬼なるにはとにかく鍛えること。

鍛えて鍛えて、鍛えまくって、そして正しい心を持ってやっと鬼になれる。

若返っても俺は俺のまま。だから心に問題はない。

だとしたら、やはり身体。鍛えた身体が若返つたために、鍛える前の状態になった。俺はそう考える。

だから、鍛え直す。

音撃棒を縦に、横に。振り下ろし、薙ぎ払い、穿つ。

「はあああああああああ……ッ!!」

音撃棒を持った両手を上に上げ、力を入れる。

すると音撃棒の先に取り付けている鬼石に火が灯る。……だが、すぐに消える。

「だめかあ……」

ヒビキから教わった『烈火弾』を試したが、不発に終わった。……
まだまだ鍛えねえとなあ。

「サカキー？ 朝ご飯できたでー」

と、はやてが呼んでんな。ちょうど腹も減ったし、朝はこんぐらいにすっか。

「わかったー。すぐ行くー」

そう返事をして近くに置いてたタオルで汗を拭き、家の中に入る。

俺は逆鬼^{サカキ}。早くも現代の生活に慣れ始めた『鬼』だ。

(二ノ巻に続く)

一ノ巻『鬼と夜天の主』（後書き）

いかがでしょうか？ このまま駄文が続くかも知れませんが御了承
下さい。

二ノ巻『目覚める闇？／鬼は少女を何も知らない』（誤字修正版）（前書き）

逆鬼が戦国時代の鬼という事で、ディスクアニメル音式神は漢字表示です。

また、はやてが若干キャラ崩壊します。

後書きに逆鬼のプロフィール載せます。

二ノ巻 『目覚める闇？／鬼は少女を何も知らない』（誤字修正版）

「え？ 明日ってはやての誕生日なんですか？」

「そうよ。知らなかったの？」

そう言ってきたのははやての主治医の石田先生。

なんでも、明日ははやての誕生日とか。・・・っーか初耳だよっ！！

「・・・その様子だと本当に知らないのね。君、はやてちゃんの従兄弟よね？」

「すみません・・・」

石田先生を含めた、事情を知らない人には俺ははやての従兄弟って事になってる。

そんな俺は、はやての定期検診に付き添いでここ、『海鳴大学病院』に来て、検診が終わったから帰ろうとしたら石田先生に呼び止められて・・・この状況である。

なお、はやては廊下で待ってもらってる。

「私のはやてちゃんを呼んで食事・・・あ、ちゃんとサカキ君も含めてね？ をしようと思っただけど、急な用事ができたからそれを含めてどうするのかなって思ったから、聞いたんだけど・・・まさか知らなかったなんてねー」

「ホントすいません・・・」

しかし、誕生日か・・・よし。

「石田先生」

「なに？」

「ちょっと相談したい事が・・・」

仮面ライダー逆鬼と夜天と魔法少女と

二ノ巻『目覚める闇？／鬼は少女を何も知らない』

はやてを家に送った後、俺は適当な理由をつけて家を出た。

目的はもちろん、はやての誕生日『ぶれぜんと』と『けーき』って言う菓子を買ったためだ。

前に読んだ書物（雑誌）には、誕生日祝いには付き物らしい。

それで石田先生に相談した。

プレゼントは何にしたらいいか、ケーキはどこで買ったらいいか。

ちょっと角が生えてた石田先生は角を引っ込めて、笑顔で教えてくれた。

まずは……。

「ありがとうございますー」

『あくせさりーしょつぷ』つー所から出る。

石田先生の『あどばいす』通りの物を買えた。

ちよつと高かったが人に送るもんだ、そのぐらいが良い。

ちなみに銭ははやてが定期的にくれるもんだ。世間じゃ俺みたいのを『ひも』と言つらしいが、意味がわからん。

と、次はケーキだな。

その時、空から不可視状態の音式神『茜鷹』が戻つて来た。

実のところ、店の名前は聞いたが肝心の場所を聞くのを忘れてた。

それで茜鷹に探してもらつたのだ。

人気がない所へ移動して『音角』を取り出し、振る。

茜鷹はそれに応えるように見えるようになり、円状になって俺の手元に収まる。

そして音角に茜鷹を挟めて回転。・・・ふむふむ。

茜鷹を上投げる。それで茜鷹は鳥型に変形する。

「案内、頼むな」

茜鷹は頷き、不可視になって飛んで行く。

俺はその後を追う。

茜鷹案内の元、目的の場所に到着した。

石田先生が言うには、この店がいらいしい。

『翠屋』と書いてある垂れ幕がある。

「『すいや』。・・・いや『みどりや』か」

なんて思いつつ中に入る。

「いらっしゃいませー」

俺はすぐに透明な板で作られたデカイ箱の所に近づく。(途中、はやてと同じくらいの栗色の髪を二つに纏めてる少女が目に入ったが無視)

箱の中には大量の菓子が入ってる。・・・何にすりゃいいんだ？

「んー・・・」

「どうしたの？」

「沢山あって何にすりゃわからん・・・」

「そうなんだ。ね、もしかして何かのお祝い・・・誕生日かな？」

「ああ、いつも世話になってる奴の誕生日で・・・」

「・・・ん？」

「アンタ誰っ!?!」

「んー？ 店員さんだよー？」

え？ ……あ、ホントだ。前掛け付けてるし。

胸の所に付いてる板に書いてあるの、名前か？ えーっと、『美由希』か。

眼鏡に栗色の髪を三つ編みにして、中々の美人だ。

「ね、お世話になってる人って、どんなケーキが好きなのかな？」

「え？」

「だって、沢山あってどのケーキを買えばいいかわからないんですよ？

だったら、その人の好きなケーキを買えばいいんだよ」おー。そりゃ確かに名案だ。 ……あ、でも…。

「俺、アイツの好みしらねえ…。」

それに考えてみたら、はやてに世話になってばっかで、はやてに何もしてなくて…。それに、はやての事、何も知らねえ…。

「あ…。ねえ、大丈夫？」

「・・・あつ、大丈夫。・・・すみません」

いけねえ・・・。なんか暗くなつてたみたいだわ。

「・・・ね、その人つて、男の人？ 女の人？ 歳はどのくらい？」

はい？

「あ、うんとね、その人の性別や、歳がわかれば私がオススメを選んであげられるかなーって思つて。・・・ダメかな？」

・・・いや。

「頼む！ じゃなかった、頼みますっ！！」

俺じゃ何買つたらいいか分からねえ。だから頼る！！

「う、うん。お姉さんに任せといて」

店員はその立派な胸を張り、俺ははやての事（こじんじょつぽつ？
つてのに引つ掛からないぐらい）を伝える。

それを聞いた店員が、はやての好きそうなケーキを選んでく。

「……………この時はまだ知らなかった。」

この店員の妹（具体的に言うと俺の後ろで世話しなく動いてるはやてと同じくらいの少女）と、深い関係になるとは……………。

「ただいまー」

「あ、おかえりー」居間に行くと、はやてが夕飯の準備をしてた。

「すぐに夕ご飯できるから、座って待っててなー」

「ああ……………いや、なんか手伝うわ」

色々考えたけど、こんぐらいしか出来ねえからな。俺、ヒビキみたいに器用じゃねえし。

なお、ケーキとプレゼントは茜鷹と緑大猿が俺の部屋に運んだ。石

田先生に『当日に出してビックリさせたほづがいいわ』と言われたので、はやてには内緒だ。

「そーかあ？ そなら、できた料理テーブルに出してくれるかあ？」

「おっ」

へへ、楽しみだなあ。何てったって、はやての飯は『極旨』だしな。

「できたでー。今日は肉じゃがやー」

「おおっ」

出来たばかりの料理をテーブルに並べる。うん、旨そう

そして俺もはやても椅子に座る。

「食つかー！」

「うん」

二人で手を合わせて……。

「「いただきます」」

箸を持って・・・何から食うかなあ。うん、まずは肉じゃがを一つ。

「皿さー」

はあー、相変わらずサカキは凄い食べっぷりやったなあー。見てるだけでお腹がいっぱいになるわあ。

・・・ホント、サカキが家に来てから毎日が楽しい。まるで・・・。

「お兄ちゃんが出来たみたいや」

わたしはベッドに横になって、サカキが来てからの毎日を思い出す。

最初はホント危なっかしかつたなあ。事あるごとに暴れて、刀出して・・・。

だから、わたしが全部教えとった。

・・・まあ、サカキは昔の人やから今の生活に戸惑うんわ分かる。でも、毎回フォローする身にもなれってちゅーねん！

なんか思い出したらイライラしてきたわ・・・。よし、明日いたずらで『お兄ちゃん（さんでも様でもちやまでも可）』て呼ぼう。絶対戸惑うはずや、くくくく・・・！

・・・あ、あれやよ！？　べ、別にわたしが呼びたいんじゃないんやからねっ！？

「・・・あれ、もう12時」

さすがにもう寝んと、明日もサカキのご飯作らな。・・・ホントにお兄ちゃんて呼ぼうかな。

・・・その時、わたしは気付いた。

わたしの後ろにある本棚。そこに置いてある、茶色で表紙に金の十字がある鎖で開かなくなってる、わたしがもの心ついた時から大事にとつてた本が光ってた事に。

その本はわたしの前まで来ると、脈打ち、鎖を引きちぎって開く。

え？　え！？　わたしから光の球が出てきて・・・いったいどうなってるんっ！？

『起動』

本から声が聞こえて・・・ま、眩しい！

な、なんなんや、急に本が光ったと思ったら・・・。なっ！？

「我ら、主様に仕えるヴォルケンリッターにございます」

な、なんかピンクのポニーテールの女の人と、金髪ショートカットの女の人と、赤毛で三つ編みを二つ作ってる女の子と、えらくデカくて犬耳付いとる男の人があるー！？ アンタら誰っ！？

・・・きゅ。

俺ははやてに渡すプレゼントが入った袋を見る。・・・明日なんだよな。

「・・・寝よ」

ベッドに倒れる。……………なんじゃこりゃっ!!

俺はベッドから跳び起き、感覚を集中する。

ここ（海鳴市）に住むようになって、時々感じる事がある感覚。感じるだけだったそれも、集中すりゃ、大体の場所が解る。

場所は……はぁ！？ はやての部屋っ！？

音角と音式神を持って部屋を飛び出す！ はやてが危ねえっ!!

（三ノ巻に続く）

二ノ巻『目覚める闇？／鬼は少女を何も知らない』（誤字修正版）（後書き）

名前：逆鬼^{サカキ}

年齢：10歳前後（実年齢20代後半）

髪：黒髪のザンバラセミロング

瞳：鋭い黒眼

好きなモノ／趣味：

家族・勝負・昼寝・はやての料理

嫌いなモノ：

ちまちました事・難しい事

デバイス？／武装：

音叉・音角（鳴刀・音叉剣）

音撃棒・烈撃

音撃鼓・爆鼓

茜鷹

瑠璃狼

緑大猿

三ノ巻『目覚める闇？／鬼と守護騎士』（前書き）

やっと三ノ巻更新っ！すいません、遅れましたっ！！

またまた駄文ですっ！！

そしてまたキャラ崩壊しますっ！！

三ノ巻『目覚める闇？／鬼と守護騎士』

……あれ？

かしいなあー。いつも……今までの主なら偉そうに命令してくんだけどなあ。

アタシは新しい主を見て、近づいてみる。……これ、もしかして……。

とりあえずシグナム達に念話してみる。

“なあ”

“しっ、ヴィータちゃん黙って”

“でもさあ”

“ヴィータ、主の前だぞ”

シヤマルとシグナムが止める。黙ってるけどザフィーラも同じっぽい。いや、でもなあ。

“ つーかコイツ気絶してんだけど ”

“ ”

沈黙。

“ . . . 何？ ”

“ ええー！？ ”

“ ”

うん。そりゃあ驚くよな。つーかザフィーラは喋る。分かりづらいから。

でも、これどうすっか

「 テメエ等っ！！ 」

. その声が聞こえた時、アタシに銀の煌めきが襲い掛かってきた。

仮面ライダー逆鬼と夜天と魔法少女と

三ノ巻『目覚める闇？／鬼と守護騎士』

「テメエ等っ!!!」

部屋に飛び込んだ俺は音式神を放つ。茜鷹、瑠璃狼、緑大猿は少し離れた所にいる男と女二人の注意を引く。その内に音角を『鳴刀・音叉剣』に変化させ、はやての近くにいた子供に切り掛かる。

だが子供は何処から取り出したのか、金属性の柄の長い金づちのよ
うな物で防ぐ。

互いの得物の交差で火花が散り、均衡する。

「ぐ・・・っ！ 何なんだテメエ！！」

「ただの・・・」

腕に力を込める。

「居候だっ！！」

音叉剣を薙ぎ払い、子供を吹き飛ばすっ！！

子供は吹き飛ばされた勢いを殺し、着地する。それで俺を睨む。

俺は構わず音叉剣の切っ先を眼前の敵に向け、言い放つ。

「テメエ等こそ何モンだ。俺の大事な奴を襲いやがって・・・盗っ人かつ！？ 人さらいかつ！？」

子供は一瞬、面食らった顔をする。けど直ぐに鋭い殺気を込めた目で俺を見る。

「アタシ達騎士を……そんな奴らと一緒にすんじゃねえええええええええええつ!!」

子供は俺に向け得物を振り下ろすっ!!

俺は音叉剣で受けるっ!! 痛……ッ! 重い……!!

「だったら何だっつてんだ……! 怪しいを絵に描いたような格好しやがって……!!」

重い一撃に耐えながら言う。

この連中は明らかに怪しい。いくら春先でもまだ寒い、にもかかわらず目の前の子供は黒のワンピース一枚。他の奴らも袖無しで寒そうな格好だ。

そんな連中が同居人の部屋にいたらどう思うか……。

「っー訳でテメエ等、怪しいだ、ろっ!!」

音叉剣を振り、子供の得物を弾く。

子供は弾かれた勢いで距離をとって着地。俺を睨むが、少し考える顔をして横目で仲間の方を見る。

釣られて俺も見る。見て……………。

「……………なして？」

“なあ”

“言つなヴィータ”

でもな……………自覚はあるんだよ。アタシ達の格好、怪しいのは。

“誤解があるようだ。それを解かねば”

“そうね。それにあの子、主様の家族みたいやー！ 髪引っ張んないでー！！”

全員同意見みてーだな。……………湖の騎士が赤い鳥に髪引っ張られてっけど。てか、他も一緒か。

アタシは自分のデバイス『グラーフアイゼン』を降ろす。

目の前の奴はそれで疑問顔になった、というか、シグナム達を見て微妙な顔になった。

「すまない。我々は決して怪しい者ではない。事情を説明したいので、武器を収めていただきたい」

そう言ったのはシグナム。．．．だけど、ピンクのポニーテールの先に、青い犬っぽいのが噛み付いてぶら下がって『ぶーらぶーら』なってるからイマイチ決まってる。

ザフィーラも、緑の猿っぽいのに耳引っ張られてる。

「．．．．．なして？」

うん。それはアタシも同意見だわ。

．．．．．はっ！！　だ、誰もおらん！？

・・・はぁー、びっくりしたぁー。なんか怪しいを絵に描いたよう
な人達がおった気がしたけど、夢だったみたいやなぁ。

頭を掻きながら目覚まし時計を見る。7時・・・ご飯作くらな。

ベッドから車椅子に移ってリビンググに移動する。

あれ？ 明るい・・・サカキ、もう起きとるんかなぁ？

「ごめんなぁ、遅くなってもう・・・て・・・」

「おう、おはよう。よく眠れたか？」

サカキがのんびりお茶飲んどる。けどそこはええ。問題は・・・。

「な・・・な・・・な・・・っ!？」

「サカキー、おかわりー」

「あいよ。シグナム、シャマル、ザフィーラはどつする?」

「ああ、頂こう」

「それじゃあ私も」

「貰おう」

夢だと思っとなった怪しい人達とサカキが仲良くお茶しとなった。

わたしは車椅子に仕込んだハリセンを取り出し、気円斬ばりにサカキに向かって投げた。

「なんでやねんっ!!」

「んがっ!!」

「なるほどな、これが『闇の書』かあ」

「はい」

「ただの本にしか見えねえけどな」

「見た目は、ね。でも、今はリンカーコアを蒐集してないから、ただ本かもね」

はやてのハリセンを喰らった後、俺とはやてはシグナム達守護騎士と闇の書について説明を受けていた。

ちなみに、さっきははやて、シグナム、俺、シャマルの順で喋った。

ようするに、闇の書ってのは旅をする本で、色んな場所、主人の所に飛んでる。で、そこで『リンカーコア』つう力の源を食って、ページを埋めて、全部のページを埋めれば主人はスゲエ力が手に入る。シグナム達は主人と闇の書の護衛。・・・てな感じか？」

「うむ。簡単に言つとそんな所だ」

「読まれた!？」

「いや、途中から声に出てっから」

「マジでか」

・・・あのあと、刀を収めた俺は、シグナム達と話をした。

俺はすぐにシグナム達を気に入った。

特に理由はない。ただシグナム達の人柄が嫌いじゃなかった。それだけだ。

「まあ、わたしの物心ついた時からあつたし、綺麗な本やったから大事にしてたんやけど・・・」

はやてはそう言って車椅子を移動させて机に向かい、机の引き出しから何かを取り出し、戻って来る。・・・あー、こりゃアレだな。

「とりあえずわかった事は、闇の書の主として守護騎士たちの衣食住、しつかり面倒見なあかんちゅーことや。

とりあえず、みんなの服買わなあかんから、サイズ計らせてな」

そう言うてはやてが取り出したのはメジャー。それでシグナム達のサイズを計ってく。

当のシグナム達はかなり困惑してる。うん、分かるわ。俺も経験したことがあるし。

「ふむふむ、シグナムとシャルは大きいんやな・・・よしと。

服買ってくるから、みんなは待っててな？ サカキ、行くで」

はやてそう言うて俺の腕を掴んで・・・って！

「俺もかよー！」

「あたり前やん。それとも、サカキは女の子一人に荷物持たせるんか？」

あー・・・それもそうだな。

「それでしたら、私もお供します」

「シグナムは家で待機」

俺とはやてはハモった。それでシグナムは面食らった顔になった。

「な・・・何故ですっ!？」

だって、なあ？

「シグナムがそれで外出ると、お巡りさんにご厄介になるからや」

はやて!？

「いくらなんでも正直すぎるだろっ! いくら『本当の事』でも」

「あかんよサカキ。『本当の事』だからこそ正直に言わな」

いや・・・そうだけどもさあ。

「あ、あのー」

「ん？ どないしたんシヤマル」

「あれ・・・」

シヤマルが指差した所を見る。見て・・・・・・・・。

「行こか」

「そだな」

「ちょ、ちよつと待ってー！！」

シヤマルが止める声が聞こえる。だが何も見ていない。烈火の将が隅っこでいじけてた所なんて、見ていない。

・・・あのあと、俺とはやてが服を買って家に戻り、すぐに女性陣は着替え。俺とザフィーラは廊下で待機中である。

なお、シグナムは見事復活したことを追記する。

「サカキ」

ザフィーラに呼ばれて『下』を見る。

ザフィーラは今、犬

「狼だ」

・・・狼になつてた。なんでも、まだ小さいはやてに合わせてだとか。・・・それで、何ですか？

「うむ。お前は魔導師なのか？」

・・・はい？

「違うけど・・・なして？」

「いや、すまない。お前から魔力と似た力を感じたのでな」

ああ、なるほど。確かに、ザフィーラ達……かなり弱いけど、はやてからもそんなのを感じる。これが魔力か。

「まあ、お前らの言う魔力みたいなのはあるけど、違っわ」

「そうなのか？」

「そつ。それが何なのかは言わないがな」

ザフィーラはそれ以上聞かなかった。人の秘密を詮索する気はないみたいだ。………ありがたいな。

『終わったよお』

扉の向こうからはやての声が聞こえた。着替え、終わったみたいだな。

「行くか」

「ああ」

……急に増えた同居人。なんだか騒がしく、楽しくなりそ
うだ。

(四ノ巻に続く)

三ノ巻『目覚める闇？／鬼と守護騎士』（後書き）

戦闘描写苦手ですので、次もこんな感じになります。
なのはとフェイトはまだ出ませんっ！！

サカキ「へタレ」

グサツ！！

四ノ巻『現れるD／復活の逆鬼』（前書き）

戦闘描写は苦手で、どうしてもギャグが入ります。
あと、新キャラも出ます。

四ノ巻 『現れるD / 復活の逆鬼』

「騎士甲冑？」

「はい」

大人数になったちゅー事で、買い出しに近所のスーパーに来たら、シグナムがそう言うてきた。

なんで？

「我々は武装はあるのですが、甲冑は主から授けて頂けねばなりません」

「自分の魔力で作りますので、はやてちゃんはイメージしてください
い」

シグナムに続いて説明してくれるんわシャル。

わたしへの呼び方を、名前で呼ぶように頼んだ。『主』なんて呼び方、わたしには合わへんし、あんま好きやない。

シャルとヴィータは直ぐ名前で呼んでくれたんやけど、シグナムは『主はやて』、ザフィーラは『主』のままや。二人とも全然折れ
てくれへん。ほんま強情やな。

でも、甲冑ちゅーことは戦うためのもんやろ？ わたし、みんなを戦わせる気なんてあらへんし……。あ、そや

「なあ、服はどうなん？ 騎士らしい、カッコイイ服」

「はい」

「はやてちゃんにお任せします」

決まりやね。そやったら、カッコイイ服作ってあげなな！。まずは資料集めやね。

仮面ライダー逆鬼と夜天と魔法少女と

四ノ巻『現れるD／復活の逆鬼』

と、言うわけで、シグナム達の騎士甲冑……いわゆる鎧を作るため、はやて、シャマル、ヴィータ、そして俺は玩具店『トイザ ス』に来た。……って、なして玩具店？

「以外と資料になるんがあるんよ」

らしいよ？ はやて曰く。

『カツコイイの考えんとな』とか言いながら、シャマルに車椅子を押してもらってるはやて。その少し後ろを俺とヴィータが歩いてる。

「にしても、現代いまの玩具はスゲーなあ。俺の時とは大違いだ」

「そんなにちげえーのか？」

「ああ。俺の時は木とか竹がほとんどだしな。それに、走れる場所があればそれで充分。道具はいらねえーし」

実を言うと、ヴィータ達には俺が昔・・・戦国時代から来たって事は話した。・・・というか、はやてにバラされた。鬼の事も含めてちくしょう、あの狸め・・・！！

「そっか。・・・そーいや、アタシも見たことあるな。ずいぶん昔だけだ」

なお、シグナム達はちよつとだけ驚いた。ちよつとだけ。大事な事なので二回言った。

ちくしょうっ！ 鬼の事どう隠すか悩んでた俺が馬鹿みたいじゃんかっ！！

「ん？ どした？」

「・・・いや、何でもない」

うなだれながら歩く。隣にはヴィータが・・・居ない。

「ヴィータ？」

俺は下げてた顔を上げて周りを見渡す。

すると居た。人形が並べられている棚の前に。

近づいてみると、目つきの悪いウサギの人形を凝視してた。・・・なるほどな。

はやての方を見る。一応、はやてに確認。

はやても気付いてたみたいで、俺が考えてる事が分かったらしく笑顔で頷いてくれた。

それを確認して、ヴィータが凝視してたウサギを持ち上げる。

「あ・・・」

「行くぞ」

そのままレジに持ってて、金払って

「ほじ」

ウサギが入った袋をヴィータに渡す。

「・・・サカキ、ありがとう」

袋を見つめたまま、小さな声でそう言う。慣れてないのか、気恥ずかしいのか。

だから、一言だけでそれに答える。

「いってことよ」

………トイ　らスからの帰り、海沿いの道を歩く。

なお、はやて達とは別。

「………そろそろ出て来たらどうだ？」

海に面した道、誰も居ない。

居るのは俺と……もう一人。

「……………バレてたか」

木の陰から出て来たのは、二十代前半の男。

服装は黒の上着に黒のズボン。髪は茶色のザンバラ。目はサングラスで見えない。

「尾行ならもつと上手くやったほうがいいぜ。それとも、見付かるようにやってたのか？」

「さあ？ どうだろうな」

両手を上げておどけて言う男。

ただ、かなりデキる。それもシグナムやザフィーラ達並、それ以上か。

右手を音角、左手を音式神に伸ばして、臨戦体制をとる。

「まあまあ、そう身構えな。別にどうこうしようなんて思っていない。俺はただ、『オロチを倒した鬼の一人』であるお前と話がしたいだけなんだからさ」

「お前……何者だ……ッ!!」

こいつ、何で俺と響鬼達がオロチを倒した事を……。そもそも俺達がオロチを倒してから何百年も経ってる。それをどうやって知った……。!？

「俺は荒木錬矢^{あらしぎれんや}。またの名を……」

そいつは上着のポケットから、黒のメモリースティックを取り出す。

《DRAGON!!》

「仮面ライダー、ラハブ」

「さて、お前、何にする？」

「………何でもいい」

「んじゃ、定員さん、ストロベリーサンデーとカフェオレ」

そいつは、呑気に定員に注文する。

それで定員は一礼して下がってく。

俺は今、そいつに連れられて、ある喫茶店に居る。

目の前に居るのは、荒木錬矢と名乗った男。

その後、荒木（面倒なのでこう呼ぶ）は『まあ、ここで話すのも何だ、お茶でもしながら話そうや』……………と言って、近くにあるこの喫茶店に入ってた。

「……………で、お前は誰だ」

「だから言っただろ？ 仮面ライダーラブって」

答えになってねえしっ！ つーか仮面ライダーって何だよっ！？

「ちなみにお前も仮面ライダーな。仮面ライダー逆鬼」

「俺もかよっ！！」

思わずツッコんじまったよっ！ つーか仮面ライダーって真面目に

何っ!?

「罪を憎んで人を憎まず、己が正義を信じ、人を護り戦う者。それが仮面ライダー……。ま、戦う理由は様々だし、中には私欲にためにやってる奴もいるけどな。」

お前で言う、鬼の別名だと思ってくれればいい」

人を護り……。ね。てことは、トドロキあたりがそうか？ 私欲

ってことは……。ニシキだな。……。って

「そんな事はどうでもいい。それより、何で俺が鬼って事を」

「まあ、そんな急かすな。頼んだ物がきたぜ」

荒木の言う通り、定員が注文した物を持ってきた。そこで、俺の所にストロベリーサンデー、荒木の所にカフェオレが置かれ、そいつがツツコミを入れたりした。

「んじゃ、さっきの続きな。何で俺がお前や響鬼などの鬼の事、才口チの事を知ってるかは言えない」

俺は言い寄ろうとするが、荒木が手で制する。

「話は最後まで聞け。確かに言えないが、それは今の話だ。時が来たら話してやる。それよりも、俺が話したいのは『闇の書』の事だ」

………静かに、音角に手を伸ばす。

こいつは危険だ。俺の事だけでなく、闇の書のことまで知っている。遅かれ早かれ、はやて達に危害を加える可能性もある。

もしかしたら、シグナム達が言ってた『時空管理局』とか言うヤツかも知れない。

時空管理局のことを聞いた時、胸糞悪くなった。やってる事は間違いない。だが、気にいらぬ。

だから、殺る。

だがここじゃマズイ。ここでやったら騒ぎになる。そうしたら、はやてやシグナム達に迷惑になる。

殺るなら人気のない場所がいい。

「闇の書には『呪い』がある」

………そいつの一言で、一瞬思考が止まる。

呪い？ なんの事だ？ シグナム達はなんにも………。

「呪いについては守護騎士も知らない。俺もどんな呪いか知らないがな」

そいつは俺の心を見透かしたように言う。

鬼の技の中にも呪術があり、俺もいくつか修得している。その恐さを知るためだ。

そしてそれらの呪術は禁忌とされ、使うことを堅く禁じられている。

もし使えば、その者に死より辛い災いが訪れる。

「だから、俺が呪いを止めようとしたんだが、お前が居るならちよつどいい」

荒木は、ストロベリーサンデーを食うのに使っていたスプーンを俺に向ける。

「お前が闇の書の呪いを止める」

………確かに、呪術と一緒にそれを無効にする解呪も修得し

てる。だがこれは、あくまで『鬼の呪術』に対するものであって、
『闇の書の呪い』に対するものではない。

そもそも『呪術』と『呪い』は別のもんだ。解呪が効くとは思えない。
い。

「おい、いくらなんでも待」

「うーん。だが今のままじゃ無理だな……。よしっ」

荒木は俺の話を聞かず、ストロベリーサンデーを掻き込んで、立ち
上がった。……。つて、俺の話を聞けーっ！！

「俺が鍛え直してやるよ」

「はあっ！？ だから話を聞けええええええええええええええええっ！
！」

………と云う訳で、話を聞かない馬鹿に首根っこ掴まれて、
無理矢理近くの森に来ました、まる。

「って作文!？」

「おーい、なに自分にツッコんでんだ。さっさとやるぞー」

そして、その馬鹿は離れた場所に居る。その腰にはいつの間にか、バックルが龍の形をしたベルトを巻いている。

荒木はバックルの龍の上顎を上上げる。龍の顔が二つに裂かれた感じだ。

そして、俺と会ったときに見せたメモリースティックを取り出す。

《DRAGON!》

「変身っ!！」

メモリースティックを上げられた龍に差し込み、上顎と下顎を合わせて元の形に戻す。

《DRAGON!》

すると、龍を思わせる咆哮とともに嵐が吹き、黒い炎と黒い雷が現

れ、荒木を包む。

それらが収まった時、そこに荒木は居なかった。

居たのは、黒き龍人。

黒い鎧に黒い仮面。全体が漆黒。胸部の鎧は龍の顔に見える。

そして、身体の至る所に銀色のトッキントッキンした角のような物。

というか、凄く黒くて痛そうです。

「龍はただ、喰らうまでよ」

黒き龍人は俺を見据える。まるで、エサを見てるように。

「……これがもう一つの俺。仮面ライダーラブだ」

……左手に音式神を持ち、右手に持った音角を音叉剣する。

さっきとは違う。荒木の時もただ者じゃなかったが、姿を変えた途端、それが余計に上がってる。かなりマズい。

「来ないのか？ だったら、こっちから行くぞ」

瞬間、ヤツの姿が消えた。

そして、後ろに気配がし、咄嗟に音叉剣を盾にする。

衝撃を感じ、後ろに吹き飛ばされる。

「かはっ………！」

吹き飛ばされた勢いを殺せず、木にぶつかつた。……くそつ。

ヤツは俺を蹴り飛ばした格好のまま、俺を見ていた。

すぐに左手に持ってた音式神を放つ。

茜鷹、瑠璃狼、緑大猿はラハブに襲い掛かり、そのうちに俺は周りの木の陰を使いながら移動、ヤツの後ろに回り込む。

ヤツは音式神に気を取られて俺には気付いていないはずだ。

そして、後ろから切り掛かる。

「又ルい」

だが、ヤツは回し蹴りで音式神を吹き飛ばし、切り掛かった俺の首を掴む。

「ヌルい。ヌル過ぎる。しばらく戦場から離れて、鈍ったか？」

くそっ、何とかあがこうとしても、身長差と力の違いでどうにもできねえ……！

「ガツカリだ。サカキいつ……！」

「ぐう……！ がはっ……！」

首を掴まれたまま振り回され、遠心力で首が絞まり、そのまま投げられた。

地面を転がり、木にぶつかってやっと止まった。

……っーか、痛い。首絞められたのと、木にぶつかったのだから痛い。

くそお、前の身体だったなら何ともなかったが、子供の身体が恨めしい。

「オラアっ!!」

咄嗟に声のした方向を向く。

その方向から、大木が飛んで来た。一本じゃなくて六本ぐらい。

……あれー？

そこら辺の木を引っこ抜いて、ヘタレ込んでるアイツに投げた。

うん。投げた。でも……。

「何で避けんっ!？」

アイツ何で避けねえんだっ!？ あんぐらい余裕で……あ、ちょっと待てよ、そーいや、アイツ今子供の身体だよな？ 子供の身体があれだけ転がって木にぶつかったら、普通動けないよな？ てこと

は……………。

「やり過ぎた？」

……………うん。

やり過ぎたあああああああああっ！！　　うわ、マジで
うしよっ！？

よ、よし。落ち着け落ち着くんた俺。こっいつ時はタイムマシン、
または時の列車を探すんだ。

ボウツ。

「……………え？」

ゆっくりと『嫌な音』がした方向をみる。

萌えていた。もとい、燃えていた。

うん、燃えてた。サカキに投げた木が。凄く、緑です。

……………うわあああああああっ！！　　何か燃えてるっつっ
うううううううっ！？

「じつじつ時は110番!? 119番!? 177番!?

『………はああああああああ………ッ!
』!』

………その声が聞こえた時、混乱してた頭が冷静になる。

そういう事が。

『ダアッ!』!』

その声で深緑の炎と、もはや炭となった木は吹き飛ばされ、その場に『鬼』が現れた。

黒の体色、腕と顔の縁取りは赤。前に伸びた角が二本。後ろに向かって伸びる左右非対象の長さの角が二本。合計四本角の鬼。

「やっとお出ましか、仮面ライダー逆鬼っ!」

逆鬼

(五ノ巻に続く)

四ノ巻『現れるD／復活の逆鬼』（後書き）

ラハブは、『嵐』や『傲慢』、『凶悪』といった意味を持つ海の怪物であり、ラハム、ラカムなどとも呼ばれる。

アツカド人が記した『創世神話記』では、すべての神を生み出した地母神ティアマトが生んだ十一匹の怪物の一つとされる。

b y キバット・バット三世

誰っ!?

b y サカキ

やり過ぎたか？

b y 作者

五ノ巻『鬼と籠』（前書き）

やっと五ノ巻更新。遅くてすみませんっ！

さらに、今回から書き方を変えました。ご迷惑をおかけしましたっ

！！

では、どーぞー！。

五ノ巻『鬼と龍』

「・・・・・・・・・・はあ、危なかった・・・」

鬼へと変身を遂げた逆鬼は、重い息を吐いた。

鬼になるために修行を行っており、シグナム達ヴォルケンリッターが八神家に住むようになってからはシグナム達を相手に組み手をしてはいたが、鬼になるに至らなかった。いくら襲われているからと言つて、鬼に変身したのは賭けだった。

「いやー悪かったな。お前が子供だつて事忘れてた。あはははははは」
「！」

(この野郎・・・・・・・・!!)

変身した逆鬼を見て、謝罪しながら笑うラハブ。反省の色は全く見られない。

それに逆鬼は明確な殺意を覚える。

「まあやっと変身したんだ、続きをやるうぜ」

先程からふざけた態度崩さないラハブは、右手を左腰に回し、何も無かった空間から約2m20はある大砲のような大剣
巨砲大
劍・夜刀ノ神やこのかみを取り出した。

「ちょっと待てええええええええええつ！ それどつから出したあ
あああああああつ！！ あと何で形がテムジンっ！？」

声を上げてツッコむ逆鬼。

目の前で何も無い空間から2m20もある大剣を出され、さらにそれがバーチャロンマーズのテムジンの武装ならば当然だろう。

なお、逆鬼ははやての勧めもあつてバーチャロンマーズをプレイした事があり、それ以来ハマって深夜までヴィータと対戦して怒られてたりする。

ラハブは逆鬼のツッコミをスルーし、ドラゴンメモリとは違うメモリを取り出す。

《BREAPH!》

そして、『ブレスメモリ』を夜刀ノ神の横のスロットにセットする。

《BREAPH!》

「おらっ!!」

「おわっ!?!」

ラハブは夜刀ノ神の銃口を逆鬼に向けて発砲する。

逆鬼は迫るエネルギー弾を横に跳んで避け、装備帯に装着している『音撃棒・烈撃』を両手に持ち。

「お返しだ! だあぁッ!!」

響鬼から教わった技、『烈火弾』を放つ。

ラハブは夜刀ノ神の腹を盾にして防ぐが、その間に逆鬼はラハブに接近し、拳に炎を宿す。

「紅蓮拳ッ!!」

「ッ!!」

逆鬼の拳を再び夜刀ノ神で防ぐが、強力な一撃に流石のラハブも踏ん張る。

それを好機と見た逆鬼は、両腕の拳に炎を宿す。

「連打ッ！！」

紅蓮拳の連打を次々と叩き込む。

一方、ラハブは紅蓮拳の連打を夜刀ノ神で全て防いでいる。

逆鬼は拳を打ち込みながら、今度は右足に炎を纏う。

「紅蓮脚ッ！！」

そして、炎を纏った右足を叩き込む。だが・・・

「なっ！？」

武器で防御している相手を武器ごと吹き飛ばすほどの力を、逆鬼は右足に乗せて叩き込んだはずだった。だが、ラハブはその一撃を踏ん張り、耐えた。

逆鬼は予想外の出来事に、右足を打ち込んだ姿勢のまま硬直してしまふ。そして、その隙を見逃すラハブではない。

「ラアアッ！！」

ラハブは盾代わりに横に構えていた夜刀ノ神を腕の力だけで振り抜く。

それにより、逆鬼は弾き飛ばされ木に打ち付けられる。本日三度目である。

「ガ痛う……………ッ!!」

「ラアアッ!!」

ラハブは夜刀ノ神を上段から振り下ろす。逆鬼は痛みで動けない。

(くそ……………ッ!!)

逆鬼は強烈な一撃を覚悟して身構える、が、その一撃はいつまで経っても来ない。不審に思っ見てみると……………。

「ふんぬっ！　ぬおおおおおおおっ!!」

間合いを間違えたのか、夜刀ノ神の切っ先が木に深々と刺さり、それを必死に抜こうとしているラハブが居た。

「……………なして?」

逆鬼は思わずそう呟いてしまう。「瞬手伝うとも思ったが、先程の殺意を思い出して『音撃鼓・爆鼓』をラハブの腹部に取り付ける。

「あ……………」

「『音撃打・猛撃必壊』ッ!」

音撃打・猛撃必壊

「だあああああああああああッ!」

「なあああああああああッ!」

逆鬼が音撃棒・烈撃を振るい、音撃鼓・爆鼓を叩く。

本来、音撃は妖怪に似た異形である『魔化魍』を、『清めの音』で倒すためのものであるが、仮面ライダーにも有効なようだ。

「はあああああああああああ．．．．．だあッ！！」

「こ、これが音撃．．．！！　なああああああああああッ
！！」

音撃を叩き終えた時、爆発が起こりその場に立っていたのは逆鬼だけだった。

「．．．．．ふう」

ラハブが居ない事を確認し、音撃棒を装備帯に戻すと、逆鬼の身体を光が包む。光が収まると、そこには10代前後の子供の姿のサカキが立っていた。

なお、戦国時代の鬼の神秘か、服は着ている。

(倒した．．．．．のか?)

手加減はしていない。師から『音撃を放つときは自分の最大の力を込める』．．．．．との教えもある。

だが、サカキはラブ 荒木錬矢という男はこの程度では死な
ない。 と考えていた。

「 帰る」

考え過ぎか。そう思い、サカキはその場を後にしようとして踵を返して
歩こうとする。

「あれー？」

だが、急に脱力感に襲われ倒れてしまう。
何とか動こうとするも、指先一つ動かせない。
そして、サカキはを意識手放した。

「 ん 」
「 」
「 」

「あら？ 気がついた？」

サカキが目覚めた時、眼前にはシャマルの綺麗な顔が広がっていた。かなり近い。

状況確認。ここはどこ？

恐らく八神家。

自分はどんな状況？

ソファで横になってる。後頭部に柔らかい物あり。

何故シャマルがこんなにちは？

俺をひざ枕してるから。

なしてこんな状況？

理解不能、理解不能、理解不能。

「……………」

「サカキ君？」

「……………」

「の？」

「のわああああああああああつ！？」

自分の置かれている状況にパニックを起こしたサカキは、慌てて起き上がるようにする。が

「痛つでっ!!」

全身に痛みが走り、起き上がる事すら出来ない。

「まだダメよ。サカキ君、あなた全身筋肉痛なんだから」

シヤマルは優しくサカキを抑える。と言っても、痛みで動けないのだが。

「……………なあ、シヤマル。何で俺、ここに居るんだ?」

サカキは思った疑問をぶつけてみた。

森の中で倒れたことは覚えている。だがそれ以降の記憶が無いのだから、自力で帰って来たわけではないだろう。

「それは、実際に会ったのはシグナムなんだけど、変な男の人が連れて来たらしいわ」

「変?」

「そう、変」

(遅い……………)

シグナムは、八神家の門前に立っていた。帰りが遅いサカキを待つためだ。

すでに夕食は過ぎ、空が暗くなってもいまだに帰って来ない。

(心配無いと思うが……………)

サカキの実力は、組み手の相手をしたシグナム自身がよく知っている。並の相手……………一般の人間相手なら、引けを取らないだろう。

(……探しに行くか)

とわ言っても帰りが遅過ぎる。

自分達の大切な主をこれ以上心配させないため、サカキを探しに歩き出した時、そいつは現れた。

「よう、サカキの家はここか？」

シグナムは後ろから声をかけられ、振り返ると一人の男が立っていた。

・・・何故かアフロで。所々が焦げている。

一瞬、異様な相手に思考が固まるシグナムだったが、その男
錬矢が背負っている子供 サカキを見た瞬間、視線を鋭くし身
構える。

「ほら」

だが、錬矢はシグナムの考えとは裏腹に、背負っていたサカキをシグナムにほおり投げた。

相手の予想外の行動に、シグナムは慌ててサカキを受け止める。
その際、シグナムの豊富なマスクメロンにサカキの顔が埋もれたりする。

「じゃあな。そのラッキースケベによろしく」

そう鍊矢が言った時、突然突風が吹き、シグナムは思わず目をつぶる。そして、目を開けた時には鍊矢の姿はどこにも無かった……

「……で、シグナムもすぐにサーチしたんだけど、察知出来なかったらしいわ。それでシグナムが、『ただ者ではない』……だそうよ」

「……そうか」

サカキは、ほんの数時間前に戦っていた鍊矢 仮面ライダー
ハブを思い出していた。

あの時、奴が^{ラハブ}間合いを間違えていなかったら、自分は負けていた。もしかすると、手加減されていたのかも知れない。 と。

「……つーか、やっぱり生きてたか」

「え？」

「いや、何でもない」

サカキが軽くごまかすと、リビングにシグナムと狼形態のザフィーラ入って来た。シグナムの手には、何かが握られていた。

「サカキ、気が付いた様だな」

「お蔭さまで」

「あまり、心配を掛けるな。主とヴィータが心配していたぞ」

「ふーん。じゃあ、ザフィーラは心配してくれなかったわけか」

「当たり前だ。お前の実力は我らはよく知っている」

「そらどうも。はやてとヴィータは？」

「もう、寝てるわ。サカキ君、遅いんだもん」

「………すみません」

軽く、皮肉を含めた会話をした後、サカキはシグナムが持っている物に気がつく。

「シグナム、それ何だ？」

「ああ、これか。お前宛てに荷物が届いたのだが、ヴィータが勝手に開けてしまつてな。これは中身の一つだ」

「ああ、そう……」サカキは苦笑して、自分に何か送ってくる相手が居ただろうか？ そう考えながらシグナムからそれを受け取る。直後、サカキは目を見開いた。

シグナムから渡された物は、弦での音撃で核とも言つべき『音撃震』だっからだ。

そして考える。届けられた荷物の中身の一つがこれなら、もしかしたら、と。

「……シグナム、その荷物つてのは、どこにある」

「？ お前の部屋だが」

「そうか……悪いけど、俺を部屋に連れてつてくれ」

シグナム達は意味が分からなかったが、言われた通りにサカキを部屋に連れていく。

そして、シグナムが言った通り、部屋には木で作られた箱が大少合わせて四つあり、音撃震が入つたと思われる一つは開けられていた。

箱には墨字で『弦』『管』『震』『鳴』と書かれている。

(・・・やっぱりか)

サカキは、差出人の名前を確認してそう思った。

『差出人：荒木錬矢』

と書かれていたからだ。

(アイツ何者なんだ・・・?)

さらに深まった錬矢の謎。考えようとするサカキだが、

(・・・まあ、いつか)

あっさりと考えるのを放棄してしまう。
基本的に、サカキは考えるのが苦手だ。

「今日はもう遅い。寝るとしよう」

「そうね、明日もあるし」

「ああ」

「そだな」

ザフィーラの意見に賛同して、サカキを連れてサカキの部屋を出る。ちなみにサカキはシグナムに背負われている。

「……………あれ？　ちょっと待て。何で俺を背負ったまま出るんだ？」

「だって、サカキ君全身筋肉痛だから私がしつかり見てないと。だから、今日は私と一緒に寝るの。」

「だそうだ。安心しろ、シャマルは回復魔法のエキスパートだ。明日には全快する」

「別の意味で安心出来ないんですけど。てか、シグナムとシャマルって同じ部屋だよな？　それでいいのかよ!？」

「私は問題無い」

「むしろ私は大歓迎」

(ザフィーラあああつ！　助けてええええつ！！)

サカキは最後の希望でザフィーラを見る。が、ザフィーラはピイッと目を背けた。

(ザフィーラあああああああつ！ テメエエエエエエエエエ
っ！！)

……その夜、サカキは寝ぼけたシャマルに抱き着かれるな
ど、寝むれない夜を過ごした……。

『……それで、そちらの世界にライダーが生まれたんだね
？』

「ああ。それで俺が頼んだのは送ってくれたか？」

『音撃管と音撃弦のことだね？ そこは問題無い。ちゃんと君の名
前で送った。けど、君はもう少し穏やかに出来ないかな。いくら何
でも荒治療だよ』

「しょうがねえだろ。時間が無いんだ。いそがねえと『アレ』が復
活しちまう」

『それはそうだけど・・・』

「この『響鬼の世界』・・・いや、『逆鬼の世界』の未来は、アイツに掛かってるんだ。お前だつて分かってるだろ？」 『・・・分かった。引き続き、彼らを見てくれ、錬矢』

「ああ」

〔六ノ巻に続く〕

五ノ巻『鬼と龍』（後書き）

この小説に関するご意見、ご感想を送ってください。
悪い所がありましたら、皆様の意見を参考に直していきたいと思っ
ています。

六ノ巻『動く闇』（前書き）

だんだん更新が遅くなってく……。。。。。。
そして、A・s 偏にようやく入った&新キャラ登場です。

六ノ巻『動く闇』

私が神であつたら、青春を人生の終わりにおくだろう。(A・フランス)

俺が神であつたら、アレだ、学校の制服をすべて巫女服にするだろう。女子限定で。(逆鬼)

巫女好きなんやな……………。(八神はやて)

俺が神だったら、世の中のイケメンは全て地獄に墮とすだろう。(ラハブ)

最低だな……………。(ヴィータ)

ある日の夜。サカキとはやては、家族のシグナム達の帰りを待っていた。

「遅いなー」

「そだなあ」

「シャマル、買い物ついでにシグナム達呼んでくる言うてたけど、遅いなー」

最近、シグナム達の帰りが遅くなっていた。

はやては「やりたい事があるんやろ」と言っではいたが、サカキは不振に思っていた。

「見つけるのに時間が掛かってんだろ。心配することねえよ」

サカキは言うが、はやては「うん」と唸る。サカキはやれやれと頭を掻きながら椅子から立ち上がった。

「だったら俺が探して来るよ」

「えっ？　せやけど……」

「大丈夫だって。見つかなかつたらすぐに帰ってくる」

そう言うと、サカキはさつさと上着を持って玄関まで歩いて行く。もちろん、音角と音式神も忘れない。

「無理して探さんで、すぐに帰って来てな？　何かあったら」

「電話しろ、だろ？」

サカキは買ったばかりの携帯電話を見せた。それにはやては笑顔を見せる。

「ほな、きいつけてな」

「行ってきまーす」

サカキは手を上げ、のんびりと玄関を出たのであった。……
これから厄介事に巻き込まれるとも知らずに。

30分後・・・・・・・・。

「全然いねえ……。あいつら、どこにいやがるんだ……」

道場、近所のスーパー、公園、カワイイ犬がいる家。シグナム達が行きそうな場所は探したが見つからなかった。

そして、20分ほど前に放った音式神を待ちながら、夜の道を歩いていた。

「じゃあねえ。一回家に戻って……ん？」

一度家に帰るか、と思案した時、上空から茜鷹が飛んで来た。

それも、何かを見つけたらしく、サカキの頭上を旋回している。

「何か見つけたのか？」

そう聞くと、茜鷹は一度頷き何かを見つけた場所へ飛んで行く。

サカキは茜鷹のあとを付いて行った。

「……………なんじゃこりゃ」

茜鷹に案内された場所。そこには“壁”があった。

この場所まで来る際に遠方から確認すると、“壁”は半球体状になっており、ドームのようになっている。

その黒とも紫とも言える壁の前でサカキが棒立ちしていると、右肩に乗っている茜鷹がひと鳴きする。すると、壁の向こうから瑠璃狼と緑大猿が出て来た。

サカキが右手を出すと、瑠璃狼が右手に、緑大猿が左肩に乗る。

「中に何かあったか？」

その問いに、瑠璃狼と緑大猿が頷き、壁・・・その向こう側を指す。

サカキは指を鳴らして音式神を待機状態にして腰に戻すと、目の前の壁に触れる。だが何も起こらない。

一度息を吐き、今度は音叉・音角で叩いてみる。

すると叩いた所を中心に波紋が広がり、サカキはもう一度壁に触れてみると、今度はズブリと音を立てながら手が沈む。

「・・・・・・・・よし」

サカキはそのまま足を進め、壁の向こうに入って行った・・・・・・・・。

人型形態のザフィーラは、橙色の髪的女性……フェイトの使い魔アルフを殴り飛ばす。

戦況はこちら（守護騎士側）が有利、そうシャルマルは思った。

相手はミッド式の魔導師。腕も中々のモノだ。

だがこちらは対人戦に特化しているベルカ式の騎士。さらに『カートリッジ』で攻撃力の底上げをしている。正面からの戦いではまず負けないだろう。

「はい……はい……。みんなと合流したら帰りますので……え？ サカキ君が？ はい、分かりました。サカキ君にも連絡します……。はい、それでは」

はやてへの連絡を切り、自分がいるビルの隣のビル……そこに居る、栗色の髪をツインテールにした少女……高町なのはを見る。

なのははヴィータとの戦闘で満身創痍。立っているのもやっとの状態だ。今はユーノが張った防御壁の中で休んでいる。

（はやてちゃんと同じ年くらいの子よね……）

シャルマルは内心痛んだが、“目的”のために仕方ないと割り切り、

リンカーコア抽出の準備に入ろうとした。だがその時、異変が起こった。

《 ！！ 》

《 ！！ 》

突然聞こえた、どこか機械のような獣の鳴き声。

シャマルがその鳴き声が見ると、シグナムとフェイトが戦っていた所に赤い大きな鷹が、ザフィーラとアルフの所に青い大きな狼が割り込み、戦闘の邪魔をしていた。

「な・・・なんなの!?!」

予想外の事態に困惑するシャマル。だが、これだけではなかった。

《 ！！ 》

「うわあああああああつ!?!」

またもや聞こえてきた鳴き声。こちらも機械のようで、猿っぽい。

と同時に、仲間のヴィータと、戦っていたユーノの声が聞こえた。

シャマルが慌ててヴィータ達の方を見ると、先程の二体より遙かに巨大な緑の猿が、キングゴングばりにビルに登り、巨大な腕をヴィータとユーノに振るっている。

こちらも戦闘に割り込むようにやっているようだが、当たったらかなり危ない。そのためヴィータとユーノは全力で避けている。

「あれ、もしかして・・・サカキ君の」

シャマルは戦闘に割り込んできた三体（特に赤い鷹）に見覚えがあった。

だが、最後まで言葉を言い切る前に、シャマルの後ろから大きな音がし、振り返ると同時に押し倒される。

自分を押し倒し、胸倉を掴んでいる相手を見て、シャマルは固まった。

「シャマル・・・こいつはどついつこつた!!」

ここには居ないはずの人物・・・サカキだった。

「エイミー！　まだか！？」

「ごめん！　結界のプログラムが解析できなくて………。あー！　こんな事初めてだよっ！！」

一方、『アースラ』のブリッジでは時空管理局執務官、クロノ・ハラウンが自身の同僚で補佐官のエイミー・リミエッタに大声を掛ける。

フェイト達をなのはの救出に送り込んだが、結界の中がアースラのメインスクリーンに映らず、状況が分からないでいた。

エイミーも非才ではない。今までも、クロノの補佐官として、アースラのオペレーターとして恥ずかしくない働きをしたきた。が、そんな彼女でも今回は焦っていた。

「……………」

そして、アースラの艦長、時空管理局提督のリンディ・ハラウンは冷静に黙っていた。

もちろん、なのは達が心配じゃない訳ではない。むしろ、クロノと

エイミイと同じで内心焦っている。だが、彼女はアースラの艦長だ。彼女が冷静さを無くせば士気に関わる。

だからこそ、リンディは冷静に事態が好転するのを待つしかなかった。

その時、

「ハラオウン提督」

後ろから声を掛けられ、リンディは振り返る。

そこに居たのは、シスター服を着、藍色の腰まで届くポニーテール。青く、鋭い瞳。幼いながらも凛々しい顔の少女が立っていた。

少女の横には、使い魔なのか銀色のコウモリ(?)が飛んでいる。

「私達も行きます」

「……………そうね、お願いします」

少女は一度頷き、踵を返して転送ポートに歩いて行く。もちろん、コウモリ(?)も一緒だ。

「…………艦長」

「彼女なら襲撃者を倒せなくても、撃退できる。それに、今回の相手はおそらく……」

まあ、彼女なら大丈夫でしょう。今は信じましょう？」

「……そうですね」

リンディは真面目な顔からいつものこやかな表情で答えると、クロノは呆れながらも納得した。

そこで、エイミィは少女の素性を呟いた。

「聖王教会与りの騎士、ソラ・ザ・ファルコンとその相棒キバット・ブレード世。……またの名を、『蒼剣の“キバ”』」

七ノ巻『蒼剣』（前書き）

うう、やっとここを更新できた。

今回、雑です。

七ノ巻『蒼剣』

人生で重要なのは、生きることであって、生きた結果ではない。
(ゲエテ)

でも、世の中結果が全てですよ。 (ソラ・ザ・ファルコン)

世知辛いねえ。 (逆鬼)

結界に入ったサカキは、中の状況に絶句した。

自身の家族であるシグナム、ヴィータ、ザフィーラが見ず知らずの
少年少女に得物を振るっていたからだ。

サカキはすぐに音式神を取り出し、投擲する。

音式神は茜鷹、瑠璃狼、緑大猿に変形する。だがそれだけでなく、茜鷹、瑠璃狼は3メートル程の大きさに、緑大猿はそれを越える6メートル程の大きさに変化する。

三体の音式神はそれぞれの方向に散り、サカキは周りを見渡す。

すると、あるビルの屋上にシャマルが居たのが見えた。

・・・普通なら見えない距離じゃ？ というツッコミはそこはサカキが鬼だからと答えておこう。

サカキはすぐに走り、ビルの扉を蹴り破るか音叉剣で破壊しながらして屋上を目指して行く。

そして、屋上の扉を思いつき蹴り破り、そのままの勢いでシャマルに掴み掛かる。

勢いのあまりシャマルを押し倒してしまっただが、そんな事は気にしてられない。

サカキは馬乗りになってシャマルの胸倉を掴み寄せる。

「シャマル・・・こいつはどういうこつた!!」

サカキは目が血走り、まさに鬼の形相だ。

普段はおちゃらけて、笑顔を見せているサカキの変わり様に、シャルは思わず息を飲む。

「答えるっ！ シャマルっ！！」

「そ．．．それは．．．．．」

言い淀むシャル。サカキに本当の事を言っべきか．．．言わざるべきか．．．。

その時、

「えっ！？ 魔力反応が増えた．．．誰かが結界に入って来たっ！
？ それに、この魔力は．．．！！」

「ひでぶっ！？」

．．．シャルが勢いよく起き上がり、サカキは後頭部をコンクリートの床にぶつけた。

「みんな………」

なのははユーノが張った防御壁の中から戦いを見ていた。

出来ることなら自分も戦いたい、そう思っても、ヴィータからの攻撃のダメージが治らず、動けない。

さらに赤い鷹、青い狼、緑の猿が乱入し、事態は悪くなっている。

我慢できない、そうなのはが思った時、背後から凄まじい魔力を感じ、身構える。

(増援……！ あの人達の……！?)

そして、警戒するなのはの前に現れたのは、なのはより少し上ぐらいのシスター服の少女。横に銀色のコウモリ(?)が飛んでいる。

「……高町なのは様ですね？ 私はハラOWN提督の依頼で貴女方の救援に来ました、聖王教会騎士、ソラ・ザ・ファルコンと申します。こちらは相棒のキバット」

「キバット・ブレード八世だ。よろしくな、お嬢さん」

「ハラオウン提督・・・リンディさんのですか・・・？」

なのははその言葉を聞いて安心する。

「はい。状況は・・・よくありませんね。というか何ですかこれ？」

「まるでどこぞのB級映画だな」

「にゃ・・・にゃはは・・・」

「ですが・・・」

ソラは一度^{まぶた}瞼を閉じ、開いた時には先程までの呆れた顔ではなく、戦闘者の表情になっていた。

「脱出にはちょうどいいかも知れませんね。・・・キバツ
つ！..!」

「一意専心！ キバって行くぜっ！ ガブッ！..!」

「!?!」ソラが袖を捲り、腕を出すと、キバツが噛み付いた。

予想外の出来事になのはが目を見張る。

するとソラの頬にステンドグラスのような模様が現れ、腰に鎖が現れ蒼いベルトを形成する。

「変身ッ!!!」

ソラが叫ぶと、キバットがベルトの止まり木に止まる。

するとソラの身体が変化し、蒼と銀の体色、身体に鎖カテナ、籠手と具足、腰に蒼い日本刀を装着した、キバ・ブレードフォーム（以後キバ）に変身した。

「ふ……ふええええええええええつ!?!」

「では、行きます」

キバは白い複眼を輝かせ、ビルの屋上から跳び降りた。

（さて、まずは……）

跳び降りたキバは、シグナムとフェイト、乱入した茜鷹が戦闘している場所を見据え、両足に力を集中する。

すると足元に月と牙を組み合わせたキバの紋章が現れ、それを足場に一気に跳躍した。

「な………つ!？」

シグナムはキバの接近に気付いたが、遅かった。

キバは手前の茜鷹を踏み台にし更に跳躍。左腰の日本刀『雪月牙』を抜刀し、シグナムに切り掛かる。

シグナムはレヴァンティンで何とか防ぐが、反応が遅れたため吹き飛ばされてしまう。

キバは再び紋章を出現させ、その上に着地する。

「………あなたは、一体………」

突然現れたキバに警戒するフェイト。

フェイトはソラとキバットとは面識があったが、“キバとは”初対面であった。

キバは相手を安心させるように、優しく声を掛ける。

「ご安心を、フェイト様。私です」

「その声………ソラさんっ!？」

はい、とフェイトに告げたあと、キバは先に吹き飛ばした相手を見

据えた。

「覚えのある魔力を感じたと思ったが、やはりお前だったか、キバ」

「キバを知っている。という事は、やはりベルカの騎士様でしたか」

キバとシグナムは、互いの得物を収め、目の前の相手を見据えた。

「単刀直入に聞きます。何故このようなことを？」

理由を聞くキバ。だがシグナムは答えず、鞆からレヴァンティンを抜いた。

「ソラ……！」

「……仕方ありませんね」

キバも鞆に収められている雪月牙に手を掛ける。

（私も……！）

「フェイト様」

フェイトもバルディッシュを構えようとするが、キバに呼び止められる。

「貴女は他の皆さんの所に向かって下さい。・・・ここは私が」

「えっ？ でも」

二人で戦ったほうが良い、そうフェイトが言おうとした時、キバのベルトからキバットが外れ、フェイトの前に来た。

「俺達は大丈夫だ。それに相手はベルカの騎士。戦い慣れてないアルフ達が心配だ。頼む」

「・・・・・・・・分りました。けど、気をつけてくださいね？」

そう言い残し、フェイトは仲間の元へと飛び去って行った。

「・・・・・・・・そろそろ良いか？」

「はい。けど、止めなくてよろしかったのですか？」

「なに、後ろから切り掛かるのは私の主義・・・騎士道に反する事だ。それに、お前が許さないだろう？」

「ふふふ。それもそうですね」

「戦う前に、名を聞いておこう。私は守護騎士ヴォルケンリッター、
烈火の将・シグナムだ」

「聖王教会騎士。そして八代目“蒼剣のキバ”。ソラ・ザ・ファル
コンと申します」

そしてシグナムは上段に、キバは居合いの構えを取る。

「尋常に」

「真っ向」

「勝負ッ!!」

一方サカキ、シャルは……………

「やっぱり、キバ……………。管理局に就いてたなんて」

「そんなにヤベー奴なのか？」

「うん。シグナムが負けるとは思えないけど……………」

互いの得物を振るい、火花を散らすキバとシグナムを見ていた。
……真剣に話しているのだが、サカキの後頭部のタンコブがシリア
スさをぶち壊している。

「ん？　ありゃあ」

サカキが何かに気付き、目を細める。

そこにはフェイトが、緑大猿の猛攻を避けているヴィータとユーノ
が居る場所に向かって見えた。

「あんにやるっ!!」

「さ、サカキ君っ!？」

それを見たサカキは、すぐにビルの屋上から跳び降りた。と同時に、

指を鳴らす。

すると、キバに踏み台にされコンクリートの地面に落とされていた
茜鷹が飛来し、サカキを背に乗せて飛翔して行った。

そして、屋上に残されたシャマルは・・・

「はぁ・・・。もう、びっくりさせないでよ」

その場に座りこんでいたのだった。

シグナムをキバに任せ、一時離脱したフェイトは、直接的な戦闘能力を持たないユーノを援護するため、向かっていた。

そして、必死に緑大猿の拳を避けているユーノとヴィータを視界に捉えその場に停止。まずは緑大猿をどうにかしようとして砲撃の準備をする。

《Thunder Smasher》

「ファイ」

砲撃が放たれようとした瞬間、フェイトの前に赤い陰が現れた。

「ッ!？」

《Sonic Move》

フェイトは砲撃を中止し【ソニックムーブ】を発動、赤い陰と距離を取る。

「よお」

「え………?」

不意にかけられる声。発信元は目の前の赤い陰 茜鷹。

フェイトは目を丸くした。喋れたんだ、と思ったがすぐにその考えは否定された。

何故なら、茜鷹の背中に少年が乗っていたからだ。

「初めましてだなあ、管理局」

少年　　サカキは不敵に笑っていた。

八ノ巻に続く

七ノ巻『蒼剣』（後書き）

はい、今回は趣向を変えて本編の主人公の逆鬼と、ヒロインのソラにお越しいただいた。

逆鬼「あー、逆鬼だ」

ソラ「どうも、ソラ・ザ・ファルコンです。しかしフロスト様、私がヒロインなんて初めて聞きましたよ？」

逆鬼「そーいやそーだな。何でなんだ？ 普通の流れだと、アイツら（なのは達）の誰かだろ」

うむ。当初はそう考えていたのだが、それじゃあ面白くないと思ってな。元々ソラは出すつもりだったから、思いきってソラをヒロインにしたんだ。

逆鬼「なるほどな。まあ、ソラの事は好きだからいいけど」

ソラ「えっ!?!? あ、あの・・・ありがとうございます・・・」

さーて、主人公とヒロインがストロベツてる間にソラのプロフィールを公開して今回は終了だ!!!

名前：ソラ・ザ・ファルコン

年齢：12

容姿：

腰まで届く藍色のポニーテール

瞳は青

幼いながらも凛々しい顔立ち（幼いシグナムをイメージ）
身長はなのはよりちよい上

趣味・特技：

空の散歩・動物との会話

好きなモノ：

空・甘い物

嫌いなモノ：
管理局上層部

八ノ巻『鬼と雷』

「初めましてだなあ、管理局」

フェイトの前に立ち塞がったサカキ。フェイトを挑発するように、不敵に笑う。

「君は……………一体」

「相手の事を聞く時は、まず自分からって親に教わらなかったか？」

サカキは不敵に笑い、フェイトを挑発する。

「……………時空管理局嘱託魔導師、フェイト・テストロッサ」

「おお、ちゃんと自己紹介できたじゃねえか。偉い偉い」

「……………っ!?!」

サカキはわざとらしく拍手する。

それにフェイトは苛立ちの覚えた。

「それじゃあ、俺も自己紹介すつか。
俺はサカキ。そしてコイツは茜鷹だ」

《 ！ 》

サカキが茜鷹を撫でると、茜鷹は一鳴きする。

そこでフェイトはある事に気付いた。

「もしかして、あの大きな青い犬や、緑色の猿は君が・・・」

「ああ、俺がやった」

決まった。理由は不明だが、サカキが行った事は完全な公務執行妨害だ。

フェイトは顔を引き締め、バルディッシュを構える。

「君が行ったのは重大な公務執行妨害だ。今ならまだ、弁護の機会が君にはある。武装を解除して投降を」

犯罪者の未来も守る。あくまで時空管理局の方針に従い、フェイトは投降を呼び掛ける。

だが、サカキは

「はっ、バカか」

そう言い放った。それでフェイトは目を点にする。

「ば、バカっ!？」

「っーか、うだうだ抜かすな。そんな細かい事はキレエなんだよ。もつと単純によっ・っ・っ・俺は管理局なんかに頭を下げるつもりはねえっ！俺は管理局の敵でお前の敵っ！それで充分だろっ！！」

「……それに、俺を大人しくしたかったら力付くで来な」

最後にサカキは不敵に、挑発的に笑う。

それにフェイトは頬を膨らませた。

「分かった。私が勝ったら投降してもらおうよ」

「っしゅあっ！話が分かるじゃねえか。んじゃ早速……」

サカキは音角を鳴らし、額に翳す所である事を思い出した。

(そついや荒木の奴、変わる前に『変身』って言ってたな……
・よしっ!)

そしてサカキは口にした。仮面の戦士達はその姿になる時に口にした言葉を。

「変身ッ!」

瞬間、サカキの姿が深緑の炎に包まれ、サカキは『仮面ライダー逆鬼』に変身する。

「じゃあっ、行くぜっ!」

《!!》

茜鷹は逆鬼の言葉に反応し、フェイトに向かって突撃する。

「! バルディッシュ!」

《Sonic Move》

フェイトは【ソニックムーブ】で上に避け、バルディッシュを鎌型の【サイズフォーム】にする。

（姿が変わった。……変身魔法を使ったのかな？ でも）

フェイトは逆鬼に接近し、鎌となったバルディッシュを振り下ろす。

「音叉剣っ！！」

逆鬼は音叉剣でバルディッシュを受け止め、弾く。

フェイトは距離を取る。

「バルディッシュ」

《魔力反応、ありません。また、魔力とは別エネルギーを感知》

フェイトは逆鬼が変身した際、変身魔法を使ったのだと思ったが魔力を感じなかった。

違和感を覚え、バルディッシュに調べてもらったのだ。

（やっぱり魔力じゃない……………でも、魔力以外のエネルギーって）

「戦いの途中に考え事かっ!？」

フェイトが思考している間に、逆鬼が乗った茜鷹が突撃して来る。

「っ……っ……!」

フェイトは前転するようじに避けると、逆さのままバルディッシュを逆鬼に向けた。すると、フェイトの周りに四つの魔力スフィアが形成される。

《Photon Lancer》

「ファイアツ！」

発射された四つの【フォトンランサー】が逆鬼に迫る。

逆鬼はすぐに音叉剣から【音撃棒・烈撃】を両手に持ち、すぐさま【烈火弾】を放つ。

放たれた二つの烈火弾はランサーを二つ相殺。残りのランサーは逆鬼が烈撃を振るい叩き落とした。

(落とされたっ!？ でも)

フォトンランサーを全て落とされたのは予想外だったが、フェイトは再び逆鬼に接近し、バルディツシュを振るう。

逆鬼は烈撃で受け止める。

拮抗。だが一瞬で崩れる。

「らあッ!」

逆鬼が烈撃を力任せに振るい、フェイトを弾き飛ばした。

(正面からじゃ力負けする。ここは距離を取って……)

フェイトは弾かれた勢いのまま後方に飛び、逆鬼から離れる。

そして、ある程度離れると、バルディツシュを担ぐように構えた。

「アークセイバーッ!」

ぐん、と横薙ぎに振るわれたバルディツシュから金色の刃が飛ぶ。

逆鬼は迎撃すべく、烈撃を構える。

だが金色の刃が逆鬼の眼前まで迫った時、バルディッシュがコマンドを発動する。

《Saber blast》

「な………っ!？」

瞬間、爆発。

完全に不意を突かれ、逆鬼は茜鷹から落とされ落下。茜鷹も墜落する。

「らあっ!！」

「ッ!？」

落下している逆鬼は、どこからか縄を取り出し、投げる。縄は見事にフェイトをす巻きにした。

縄によって身動きが出来なくなったフェイトは、縄の先にいる逆鬼に引っ張られ落下していく。

この時、逆鬼の顔は変化がない。はずなのだが、『してやったり』『墜ちるならもろとも』『……と、どこか勝ち誇ったような、悪い笑いをしてるような顔をしているように見えた。』

それを知ってか知らずか、フェイトは頬を引き吊らせ、一筋の汗が流れた。

「きゃあああああああああああつ！！」

そして激突。

咄嗟にバルディッシュがフィールドの出力を上げていたため、ケガはないが、落下の衝撃で気絶していた。

「あー。危なかった」

そして逆鬼は瑠璃狼の背中に乗り、ちやっかり無事だった。

実は、逆鬼が迎撃する寸前に瑠璃狼が助けたのだ。これにより、逆鬼は無傷。

「さて・・・おい。生きてるかー？」

「・・・きゅっ」

「生きてるな」

逆鬼はフェイトの生存を確認すると、顎に手をあて考える。

(うっん。勢いで出て来たけど、シャマルにこの騒ぎの理由、聞いてなかったなあ。シャマルの所に戻るにしても、茜鷹はさっきのでかなり傷ついたし・・・)

【セイバーブラスト】の爆発で墜落した茜鷹は、かなりダメージを負ってしまい戦闘不能。すでに回収済みだ。

つまり、茜鷹に乗っての移動は不可能。シャマルの所に戻れない。

だが事情を聞く必要がある。

シグナム・・・キバっていうのと戦闘中。戦闘狂だから人の話を聞かない。故に却下。

ヴィータ・・・近づいた途端、グラーファイゼンの頑固な汚れにされる。・・・却下。

「・・・一番まともなのはザフィーラか」

と呟き、逆鬼は瑠璃狼を走らせザフィーラの元に向かった。

逆鬼VSフェイト・テストロッサ 逆鬼Win
決め手・鬼縄術による魔導師落とし

「はあッ!!」

シグナムがレヴァンティンを振り下ろす。

だがシグナムの眼前でキバが消えた。

(またかつ!)

直後、シグナムの背後にキバが現れ、雪月牙を横薙ぎに振るう。

シグナムは鞘で防ぎ、左足でキバを蹴り飛ばす。

キバとシグナムの距離が離れた。

互いに右手に愛剣、左手に鞘を逆手に持っているが、キバは身体（正しくは鎧）が所々が傷つき、息を上げている。

対するシグナムは、騎士甲冑の所々がボロボロになり、頬に一筋の傷を負い血を流していた。

（やはりベルカの騎士様・・・強い・・・!!）

キバ ソラは、純粹にそう思った。

事実、剣の腕はシグナムの方が上。“キバの鎧”の力でここまでもっている状態だ。生身のソラでは敵わないだろう。

それ故に思う。シグナムは素晴らしい騎士なのだ。

（なのに・・・なんでこんな事を・・・!!）

(・・・いい腕だ)

シグナムは素直にそう思った。

(テストロッサもそうだが、若いのにたいしたものだ。キバの力を
使いこなしている)

自然と頬が緩む。

(出来れば違う出会い方をしたかったものだな。ファルコンとも、
テストロッサとも。・・・だがっ!!!)

《Explosion》

電子音とともに、レヴァンティンから薬莖が排出され、刀身に炎が宿る。

(主と仲間のため、絶対に負けられんッ！！)

それを見たキバは、雪月牙の柄尻に取り付けてあるフェッスルを取り外した。

そして、フェッスルをくわえたキバツトが吹こうとした時、

「え……………っ!？」

「何……………っ!？」

黒い火柱が天を“喰らった”。

一方、結界の端に荒木錬矢こと、仮面ライダーラハブが居た。

「おーおー。やってるねえ。・・・まあ、だけど」

ラハブは【巨砲大剣・夜刀ノ神】を取り出し、【ブレスメモリ】を差し込む。

《BREAPH!》

「“最初”の祭はここまで。解散だ」

《BREAPH! Maximum-Drive》

夜刀ノ神を結界の中心部に向け、引き金を引いた。

そして、黒い炎の放流が結界を喰らい、破壊した。と、同時に、いくつかの光が空を走った。

「・・・・・・・・さて、やる事はやったし、長居は無用。帰るか」

ラハブの背後に銀のオーロラが現れ、ラハブはそれを潜って行った。

「……あつ、翠屋のケーキ買っの忘れてたっ！」

……イマイチ締まらないのがラハブ（錬矢）クオリティ。

九ノ巻に続く……のか？

八ノ巻『鬼と雷』（後書き）

よし、京都に行こう。

逆鬼「暴走すんな作者っ！！」

ええー、だつてえー。

逆鬼「『ええー、だつてえー』じゃねえっ！ お前は子供かっ！！」

子供に戻りたいっ！！

逆鬼「駄目だコイツっ！！」

ソラ「えー、次回も見て下さい」

九ノ巻 『動き出す“魔”』 (前書き)

うー、凄い久しぶりの更新。遅れてすみません。

九ノ巻 『動き出す“魔”』

海鳴のとある海岸。そこに、黒い陰が動めいていた。

『ンギイ・・・ンギイ・・・!』

「たぁんとお食べ」

「おっきくなれよっお」

『・・・で、マキシマムドライブで結界を破壊した。・・・
何でそうなるのかな？ 錬矢』

「え？ ノリ」

・・・賑やかな街中のある店。某、有名なチキンの店の店内に仮面ライダーラブこと、錬矢が居た。

錬矢はフライドチキンをほうばりながら、さも当然とばかりに携帯電話の相手に言い放つ。

『・・・たまに君に殺意を抱くよ』

「まあ、そうカリカリすんなよ。管理局に見つからないように、『次元の扉』を使ったんだ。問題ねえだろ」

実際、アースラは錬矢を見失っている。

それを聞いた電話の相手は、一度ため息を吐いて、話を変える事にした。

『しかし、ホントかい？ そっちの世界にキバが現れたってのは』

「ああ。見た目はちょっと違ってたが、ありゃキバだったな」

『・・・確か、君の調べではそっちの世界は『響鬼の世界』から分岐した『逆鬼の世界』のはずだよな？ なのに何でキバが』

「うーん。あれだ。この世界は『一つの世界に複数の次元世界がある』、特殊な世界だからな。あのキバは『複数の次元世界』の一つにいたんだろ」

『……………と、いう事は』

「ぶっちゃけ、俺の調査不足」

あっけらかん言う錬矢。電話の向こうでため息が聞こえたのは気のせいじゃない。

「……………んだよお。俺だつてなあっ！ 色々大変なんだよおっ！！ バイトしたりバイトしたりバイトしたりフライドチキン食ったりバイトしたり」

『ほとんどバイトじゃないかっ！！』

しばらくお待ちください。

「すまん。取り乱した」

『頼むよ、なんか君の顔がこっちに飛び出したんだけど。．．．
こ
う、マンガみたいに』

と、錬矢は咳ばらいし、話を変える。

「で、そっちはどうなんだ？ ．．．．．『撃王の世界』は

『こっちは平和そのものさ。イメージも出て来ないし．．．もちろん、他の怪人もね。』

今日の黒猫君は、彼女達とデートさ』

「あはは、そうか。で」

この後、鍊矢は軽く話し、電話を切った。

「……………ふう。さてさて」

鍊矢は懐から一枚の写真を取り出した。ピンボケしているが、黒い陰が写っていた。

「ついに出て来たか……………あー、めんどくせ」

鍊矢が電話をしていた翌日の昼頃、サカキは海鳴の街を歩いていた。格好は朱色の着物に帯に音角と音式神。背中には【音撃弦・烈断】が背負われている。

(どんな時代でも、居るのは居るんだな……)

そう思いながら、歩く。その足取りは重かった。

サカキがこうして気を悪くして歩くのには、ある理由があった。それは、今日の朝の事だった。

「ぶっ、はぁっ！」

「ぬっ、ふんっ！」

早朝の事、サカキは【音撃棒・烈撃】を振るい、シグナムがレヴァンティンで受け止め、弾く。

それはサカキ・・・逆鬼がフェイトと戦い、シグナム達ヴォルケンリッターが一人の少女を襲った次の日の事、いつも通りの光景だった。

・・・サカキはその後、シグナム達になにも言わなかった。

それは黙認。

サカキはシグナム達の行動の理由を聞いた。闇の書の侵食によって、はやての命が危ない。はやてを助けるためだと。だが認めたくはない。

はやてを助けたいのはサカキも同じだ。だが、だからと言ってあの時の少女達（なのはやフェイト達）を襲っていいという理由にはならない。

でも、だが・・・。

故に、サカキが取った行動は黙認。蒐集活動に一切口を出さないのだ。

「サカキー、手紙やでー？」

と、はやてに言われたのでシグナムとの手合わせを中断し、はやての元に歩く。

「誰から？」

「荒木錬矢って人から」

「よし、捨てる」

「あかんやろっ！！」

久しぶりにハリセンの一撃を貰ったサカキは、渋々手紙を読む事にしたのだった。

「前略、逆鬼様。今はいかがお過しでしょうか？
最近はめつきり寒くなり、鍋が美味しい……って、待て待てっ！
破るなっ、俺が悪かったっ！！」

「……あー、簡単に言うと、お前の力を借りたい。この手紙が入ってた封筒に、一枚の写真が同封してある。ピンボケで何が写ってるか分からないが……お前には分かるだろ？ これは俺が独自に手に入れた、ある釣り人が撮った写真だ。場所は海鳴の海岸。昼頃、音撃弦持って来い。詳しい話はそれからだ」

「よお、遅かったな」

サカキが海岸に着くと、そこには鍊矢がいつも通りの様子で居た。

「………で、相手は何だ？」

「さっそく仕事の話か………まあ、いい。まず、今回の相手は『バケガニ』だ」

やはりか、とサカキは思った。まあ、音撃弦を持って海岸に来いと

言われたら、『魔化魘』に対する知識を持っている人間が聞けば大概がバケガニだと予想できるだろう。

「産まれてから随分経ってるみたいでな、結構な大きさだ」

「居場所は」

「不明。相手は動き回ってた。さすがの俺でも無理」

錬矢は手を上げてお手上げのポーズを取る。

サカキは「そうか」と言っつて帯の音式神に手を伸ばすと、錬矢に止められた。

「何で止めんだよ」

「そつちじゃなくて、こつちを使つてほしくてね」

そう言つて錬矢はどこからかケースを取り出した。

なお、サカキはもうツツコまない。

ケースは三つあり、側面に鈍色、黄、青磁の色が塗られている。

錬矢が三つのケースを開けると、銀色のディスクがひとケース三十枚入っていた。

「こいつは……音式神か？」

サカキがディスクの一枚を持ち、自分が持っている音式神と見比べる。

音式神は石できているのに対し、ディスクは金属できている。

「半分正解だ。そいつは【ディスクアニマル】。お前等が持つてる音式神を、現代の技術で再現したモンだ。

ま、試しに起動させてみ。やり方は音式神と一緒にだから」

「さあさあ」という感じで鍊矢が促すため、サカキは言う通りに音角でディスクを叩く。

するとディスクが黄色に染まり、勢いよく飛び上がり蟹に変形した。

《 ！ 》

「コイツは……蟹か？」

「そつ。そいつは【キハダガニ】。見た目通り蟹型のディスクアニマルで、主に川辺や海などの水中での活動に特化してる。

んで、こっちが【ニビイロヘビ】に【セイジガエル】。キハダガニと同じ水中での活動が出来るディスクアニマルだ」

そしてディスクアニマルのレクチャーをすると、錬矢は折りたたみ式のテーブルと椅子を出し、テーブルの上に地図を広げた。

「さて、そろそろ………蟹狩りに行きますか」

ここからは準備の説明をしよう。まず、ディスク状態のディスクアニマルを音角に挟め左右に数回動かす。これで探索する場所を決める。

そして一枚のディスクの設定が終わったら、そのディスクに設定した場所に色の玉付きの画鋲を刺す。キハダガニなら黄、ニビイロヘビなら白、セイジガエルなら緑だ。

なお、沼や湖などの狭い範囲ならやる必要はないが、魔化魍搜索は山一つ二つが基本範囲のため、やはり必要だ。

ちなみに逆鬼等の戦国時代の鬼達は、手持ちの音式神か、自身の脚で捜すしかなかった。

全てのディスクアニマルの設定が終了。サカキは三つのディスクケースの前に立ち、音角を鳴らした。

するとケースからディスクが勢いよく飛び出し、キハダガニ、ニビイロヘビ、セイジガエルに変形し、各30体、計90体のディスクアニマルが海に飛び込んで行った。

数時間後・・・

「・・・・・・・・」

「どうだ？」

「駄目だ。ハズレだ」

サカキは音角からディスクを外し、元のケースに戻す。

「これで11体目。やっぱすぐには見つからないか」

「なあ、やっぱりもつと範囲を広げたほうがよかつたんじゃないか？」

「俺はそれでもいいが、困るのはお前だろ」

「うう……」

今回、ディスクアニマルに命じた探索範囲は広くはない。それはサカキが早く帰るようにするためだ。

範囲を広くすると探索時間も長くなる。そうすると、必然的に帰る時間も遅くなる。前回、やはり帰りが遅くなり、はやてに怒られたばかりなのだ。

「ま、ディスクアニマルが全部戻ったら、今日は退散しようぜ」

そう言って鍊矢はサカキにコーヒーの入ったマグカップを渡す。サカキは素直に受け取り、一口。

「苦ッ!!」

あの方達はいったい何をしているのでしょうか？

初めて来た街に、私はさっそく探索に出ました。すると、ギター（？）を担いだ男の子を見かけました。

その男の子……確か、サカキ様でしたか。サカキ様はシグナム様達、ベルカの騎士の仲間……または主であると疑いがあります。

それに、公務執行妨害ですし、見つけたら逮捕……とハラオウン執務官が言っていました。

まあ、個人的にもお話がしたいので、そのサカキ様を尾行したのですが……ここ、海鳴市のある海岸に来て、あの黒づくめの男性に会って何かやっているようですが……何をしていますのでしょうか？ 遠くてわかりません。

「どじするっ」

「・・・もう少し待ちましょう。ハラオウン執務官たちに連絡も、もう少し様子を見てから」

「了解した」

「・・・なあ錬矢」

「なんだあ？」

「アレ、どじするっ」

チラッと目だけで後ろを見る。……………うわぁ、何か居るぅ。
藍色の髪が見えてるぅ。

「危害加える気はないようだが……………」

錬矢が頬をかく。うん、どうしようかなぁ。

十ノ巻に続く

九ノ巻『動き出す“魔”』（後書き）

なのは「どうも、今回の司会の高町なのはです」

フェイト「同じく、フェイト・テストロッサです」

なのは「さっそくなんですけど……何で私とフェイトちゃん
が司会なの？ 全然本編に出てないのに」

今回は出番のないキャラの救済です。まあ、原作では主人公だから。

フェイト「あはは。ところで何をすればいいのかな？」

二人には逆鬼の音撃武器の名前と必殺技……音撃の名前を紹介し
てもらおう。

なのは「あ、はい。えー、逆鬼君が基本使っている武器、【音撃棒・
烈撃】」

フェイト「それと対になっているのが、【音撃鼓・爆鼓】」

なのは「そして必殺技が、【音撃打・猛撃必壊】！」

なお、音のイメージは『劇場版・仮面ライダー響鬼と七人の戦鬼』

のOPです。

フェイト「今回本編で出たのは、【音撃弦・烈断】だね」

なのは「対になってるのは【音撃震・爆震】。必殺技は【音撃斬・一刀両断】」

フェイト「そして管。【音撃管・烈波】と【音撃鳴・爆鳴】」

なのは「必殺技は【音撃射・爆風烈波】！・・・これでいいの？」

はい、お二人さんご苦労様。逆鬼の鬼闘術・鬼法術等の紹介はまた今度。

なのは・フェイト「次回も読んでください」

十ノ巻『死の海』（前書き）

かなり遅くなってすみません。

今回のタイトルは、本編の響鬼から取りました。

十ノ巻『死の海』

．．．．．あれ？ 何で俺寝てんだ？

『ンギイ．．．ンギイ．．．！』

「おいっ！ さっさと起きろ、逆鬼ッ！！」

あー、錬矢が変身したラハブだったか？ とにかく錬矢がバケガニと戦い合いながら叫んでる。なして？ ．．．．．ん？

「あ．．．．わた、し．．．．私．．．．」

「ソラっ！ しっかり気を持ってっ！ ソラッ！！」

コイツは．．．．あーそうだった。確かキバっつーのに変身してた奴だったな。横のコウモリは何だ？ 錬矢に声が似てるが．．．．。

とりあえず、何でコイツ泣いてんだ？ あれ？

俺、何で．．．．確か、何十体目のディスクアニマルで当たりが出て、それで．．．．。

アレからさらに数十分後。一体のキハダガニが当たりあり、サカキと錬矢はそのキハダガニの案内でその場所に向かっていった。向かっていたのだが……。

「……なあ、錬矢」

「……何だあ？ サカキ」

サカキは錬矢に話し掛けた。かなり小声で。目だけで後ろをチラチラ見ながら。

「どうすんだよ、アレ」

「どうすっかなあ」

鍊矢もチラリと目だけで後ろを見る。すると居た。姿は隠れてるが、藍色の長い髪が見えている。まさに頭隠して尻隠さずの状態だ。

「まあ・・・大丈夫だろ。アイツもライダーだ。童子や姫、魔化魍が出て来ても逃げるなり戦うなり出来るだろ」

「そうか？ だけどなあ・・・」

サカキは、自分達鬼以外が魔化魍と戦う事はかなり渋っている。

それは鬼は魔化魍を倒す事が出来るが他のライダーは出来ない、と鍊矢に言われたからだ（なお、鍊矢の心配は一切していない）。

「なあ、やつぱり」

刹那、サカキと鍊矢はその場から大きく後ろへ跳ぶ。そして元居た場所を見据える。

そこに居たのは、一組の男女。

両方共、着物を纏い、容姿はかなり良い方だ。だが、その纏っている雰囲気は尋常ではなく、サカキと鍊矢を睨み、殺気をぶつけていた。

「・・・・・・・・鬼か」

女から憎しみを込めた言葉が発つせられる。 だが、その声は男。
女から男の声が発つせられたのだ。

「鬼は外だ」

今度は男が口を開く。だが、その声は女だった。

「・・・・・・・・“童子”と“姫”か」

『童子、姫』。それは魔化魍の“親”である。

男女一組で一体の魔化魍を育てる存在。

魔化魍と同じく、どう発生し、どう繁殖するのか謎が多い。

「カアアアア・・・・・・・・！」

童子と姫の身体が変異し、戦闘形態である“怪童子”と“妖姫”になった。

バケガニの童子と姫であるため、片腕は蟹のハサミになっている。

「さて、俺達もやるか、サカキ」

「ああ」

サカキは背負っていた【音撃弦・烈断】を地面に刺し立て、音角を鳴らし、鍊矢は龍型のバツクル【ラハブドライバー】を装着し、黒いガイアメモリ【ドラゴンメモリ】のスタートアップスイッチを押す。

《DRAGON!!》

「変身……!!」

《DRAGON!!》

サカキの身体が深緑の炎で燃え、鍊矢の身体が黒の炎、雷、嵐を纏う。

「はあああああああ……ハアツ！」

炎を振り払い、サカキは仮面ライダー逆鬼に、鍊矢は仮面ライダーラハブに変身した。

「龍はただ、喰らうまでよ」

「ただ打ち砕くのみだ」

な．．．．．何なんですか、“アレ”は。

私は目を見開いて見るしか出来なかった。

地球にあのような生物が生息していたのでしょうか？

答えはNOです。私がアースラで見た地球のデータにはあのような生物がいるとはありませんでした。

だとしたら、古代ベルカ時代に消えた私の祖先．．．ファンガイアと同じような。ですが、ファルコン家の文献にあるウルフェン、マーマン、フランケン、レジエンドルガ．．．．．そのどれも違

います。

それに、サカキ様は変身魔法なのか、姿が変わる事は知っていました。ですが、サカキ様と一緒にいたあの男性の方が“変身”したのには驚きました。

「魔力反応・・・魔皇力の反応が無い。サカキという子供はまた違う力を感じるが、あの男からそういったモノが感じない」

キバットの言う通り、サカキ様は魔力ではない別の力を持っているようです。フェイト様の報告や、バルディッシュのデータでもそうでした。

魔皇力は私の一族・・・ファルコン家特有の、まあ、魔力のような物です。

魔力とは別の反応をするのですが・・・サカキ様は違うようです。

それに、あの男性・・・・・・・・一体何者なのでしょうか？

「オラッ！」

「ガッ！！！」

怪童子がハサミの腕を振るが、逆鬼は軽くかわしてボディを叩き込む。

それにより怪童子が後退しようとする。が、

「フン」

逆鬼が怪童子の足を踏み、動きを止めた。さらに、両腕の甲から【鬼爪】を出す。

「悪いが、さっさと決めさせてもらう。あまり遅いと、はやてに怒られるし・・・フンッ！」

怪童子の腹部に鬼爪を刺す。だが、一度だけではない。

「フンフンフンフンフンフンッ！！！」

「ガアアアアアアアツ!!」

両腕の鬼爪を交互に次々と怪童子の腹に刺していく。

怪童子は悲鳴を上げ、腹から魔化魍特有の白い血が吹き上がる。

「フンツ!!」

そして、逆鬼が鬼爪を引き抜き、怪童子は力無く倒れ木葉となって散った。

「ふう………錬矢の方は」

グギッ

「………ん？」

不意に聞こえてきた音に、逆鬼は音のした方を向く。そこには妖姫の首を掴み上げたラハブが立っていた。

ラハブは妖姫を放すと、地面に倒れるのと同時に妖姫の身体は木葉となって散っていった。

「……………えげつねえな、おい」

「鬼爪で腹メツタ刺しするお前に言われたくない」

そう言いながら、ラハブは近付き、逆鬼は地面に刺していた烈断を回収する。

「童子と姫は片付いたな」

「だな。後はバケガニだけなんだが……………」

と、逆鬼は周り見渡す。

（俺達はディスクアニマルに当たりがあつて、ここに来た。そして童子と姫が居た。そこまではいい。問題は、肝心の魔化魍が“居ない”事だ）

そうして逆鬼は改めて今居る場所を見た。

ここは海に面した岩場、見晴らしが良く、隠れる場所も、バケガニが隠れられる所も無い。

……岩場に隠れてる一人と一匹が騒がしいが無視する。

(録音されてたのはバケガニ特有の軋むような音。俺達が来たから魔化魍だけ逃げたのか？ だとしたら、海の中か……だが)

普通なら、『海の中に逃げた』で納得するだろう。だが、逆鬼には何とも言えない不快感があった。

「逆鬼いー、今日は帰ろうぜー？ もう日が傾いちゃったしい」

ラハブの気の抜けた声を聞いて、逆鬼が顔を上げると、確かに日が傾きはじめていた。

「ん？ ああ、分かつ ザバアアアアアアアッ！！」

そこまで言いかけた時、逆鬼の声を打ち消すように海の中から“何か”が飛び出した音が聞こえた。

「す………凄い」

自分が隠れているのを忘れ、ソラは呟いた。

謎の生物（童子と姫）を数分も掛からずに一蹴したのだ。

ソラは【キバの鎧】を僅か十代で受け継ぎ、周囲からは“神童”と言われた。

だが、だからと言って慢心せず、日夜修練に明け暮れた。アースラに乗っているのも、“キバの鎧を受け継ぐ者”として世界を見てみたかったからだ。

それでも………

（私は、まだまだですね………）

ソラは素直にそう思った。

あの二人と自分とでは実力の差がありすぎる。

「よし」

「待てソラ。どこに行くつもりだ」

「どこってあのお二人の所です。私はあのお二人に弟子入りします」

「はあっ!? いやいやいやっ! 待て待て待てっ! 何故その考えになるんだっ!?!」

「私はもつと強くなりたいんですっ! 具体的に言つと悪を絶つ剣のあの方のように敵ボスのBGMを自分のBGMに変えられるぐらいにっ!!--」

「お前は一体何を言ってるんだっ!?!」

ザバアアアアアアアツ!!

「.....え?」

突然後ろから聞こえた大きな音。ソラとキバットはゆっくりと振り返った。

そこに居たのは.....

『ンギイ.....ンギイ.....!』

巨大な蟹だった。

「は……………はいいいいいいいつ!?」

突如現れたバケガニに、キャラ崩壊して驚きの声を上げる一人と一匹。

そしてバケガニが右のハサミを上げ、ソラとキバットに振り落とす。

「あ……………」

突然の出来事に、キバに変身できず、何の対抗策も無い。ソラは心で、「あ、もう駄目なんだな」と冷静に自分に落とされるハサミを見ていた。

「……………がッ!」

自分の前に現れた紅い影と、大量の血を見るまでは。

(あー、そうだった。俺、こいつの事庇ったんだっとな)

「おい。そう泣くなって。俺は大丈夫だから」

「……………ですが、私のせいで」

さらに落ち込むソラ。逆鬼は「あれ？ トチった？」と思った。

「その状態で言われても、説得力が無いんだが」

「それもそうか。よっ」

今の逆鬼の身体には、左肩から腹部まで深い傷があり、そこから大量の血が流れている。

キバットの言葉に納得した逆鬼は、寝てる状態から上半身だけを上げた。

「なっ、何をしてるんですかっ！？ 動いたら出血が」

「ふんっ！」

それを見たソラが慌てて止めようとするが、逆鬼は無視して身体に力を込めた。するとみるみるうちに逆鬼の傷は塞がっていき、最終的には傷など無かったよう、無傷の状態になった。

あまりにも予想外の出来事に、ソラは女の子相応に、キバットはもう地面に当たる位、口をあんぐりさせていた。

「ふうん……よしっ」

逆鬼は立ち上がり、異常がないか身体を数回捻った。

そして異常がないと確認すると、足元に転がっていた烈断を拾い上げ肩に担ぎ、ソラに向き直る。

「ありがとな。俺なんかのために泣いてくれて」

逆鬼は座り込んでいるソラに視線を合わせる様にしゃがみ、空いてる左手で頭を撫でた。

「あ……」

「んじゃ、行ってくるわ」

逆鬼は一人、バケガニと戦っているラハブの元へと駆けて行った。

その場に残されたソラに、キバットが近付く。

「どつする？」

「……………」

ソラは、一度バケガニと戦っている逆鬼とラハブを見て、先程の事を思い出す。

『ありがとな。俺なんかのために泣いてくれて』

そう言って撫でられた時、鬼としての顔で逆鬼の表情は見えなかった。だが、ソラには逆鬼が微笑んでいるように見えた。

そして、ソラは立ち上がり、腕を上げる。その胸にある決心を秘めながら……………。

「キバットっ！」

「応っ！ ガブッ！！」

「変身ッ！…！」

傷を回復させた逆鬼は、バケガニと戦闘しているラハブの元に駆け付けた。

「悪いっ！ 遅くなっ たっ！」

「ホントに遅いわっ！！」

ラハブは【夜刀ノ神】でバケガニのハサミを弾き返す。

「だから悪い、ってっ！！」

逆鬼は烈断を振り回し、バケガニに切り掛かる。

『ンギイイイイイイイイイイイイイイイイッ!!』

傷付けられた痛みからか、両のハサミを振り回し、逆鬼とラハブを潰そうとする。

「オリヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

だが逆鬼とラハブは互いの得物でバケガニのハサミを砕く。

『ンギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ
!!!』

「おうおう、いい声で泣くねえ。・・・もっと泣きな」

ラハブはサドスティックな笑みを浮かべ、ギジメモリ【ブレスメモリ】を夜刀ノ神に挿入しようとする。が

「はあああああああああつ!!」

「はい?」

突然蒼い陰が、銀色に輝く刃でバケガニを切る。

逆鬼とラハブは突然の乱入に間抜けな声を出した。蒼い陰はバケガ
二の反撃を受ける前に大きく跳躍し、二人の前に降り立つ。

「あっ！」

「お前は……」

「どうも」

蒼い陰 ソラが変身したキバ・ブレードフォームは二人に丁寧に
頭を下げた。……キバの姿でお辞儀をする姿はかなりシユールだ。

だが、そこで逆鬼が一言。

「……誰だ？」瞬間、ラハブとキバはズッコけた。

「お前は……！」

「そ、そういえば、この姿で会うのは初めてでしたね」

キバは気を取り直して、雪月牙を構える。

「微弱な身ではありますが……手伝わせていただきます」

「ふうん。・・・だとよ、どうする？ 逆鬼」

キバの言葉に、分かっているが、ラハブは隣の逆鬼に一応聞く。

「手伝うって言うなら、手伝って貰うか。行くぞッ!」

「はいっ!」

「了々解ッ!」

その後の戦いは一方的だった。

バケガニの足を全て壊し、転倒させ、トドメに逆鬼の【音撃斬・一
刀両断】で退治した。

文字にすると簡単だが、その様子はバケガニが気の毒になる程であった。

バケガニを倒したサカキ、錬矢、そしてソラとキバットの三人と一匹は、海岸に程近い駐車場に来ていた。理由は錬矢の車が停めてあるからだ。

サカキと錬矢はソラとキバットに魔化魍の説明をしながら、車にデイスクアニマルの入ったケースを積んでいた。積んでいたのだが、ソラの発言で中断された。

「ごめん、もっかい言って？」

「ですから、今後ともよろしくお願いします。・・・と言ったのです」

「いやいやいや、ちょっと待て。何でそうなるんだ？」

「先程おっしゃいましたよね？ 『手伝うって言うなら、手伝って貰うか』と。ですから今後、魔化魍が出現した場合私も手伝わせていただきます」

「でもよ、錬矢はともかく俺はシグナム達の仲間だぞ？ お前、いいのか？」

当然の反応だ。ソラは正式ではないとはいえ、時空管理局の人間。サカキは敵対する守護騎士の家族だ。本来は許されない事なのだが、ソラは折れなかった。

「その点は問題ありません。私は聖王教会と三提督の方々の助力のお陰で、いかなる場合でも自由に行動できる権限があります。でするので、どのような方にも私に命令できませんし、拘束する事もできません」

最後に、「責任は自分が全て負わなければなりません」と付け加えた。

サカキと錬矢はキバットを見る。が、キバットはすでに諦めたらしく、「こうなったソラは止められない」と目で物語っていた。

その後も、ソラを説得したのが、結局折れたのはサカキと錬矢であったのは、言うまでもない。

十一ノ巻に続く。

十ノ巻『死の海』（後書き）

鬼法術・鬼火

火属性の鬼が使う基本の技。口から火を放つ。
逆鬼の場合、火の色は深緑。

鬼闘術・鬼爪

全ての鬼が使える基本中の基本。手の甲から四本の爪を伸ばす。

鬼闘術・紅蓮拳

拳に炎を纏わせて相手を殴る、逆鬼オリジナルの技。

鬼闘術・紅蓮脚

紅蓮拳と同じく、脚に炎を纏わせて蹴り飛ばす逆鬼オリジナルの技。

鬼闘術・爆瞬動

脚に力を溜め、瞬間に爆発させ瞬時に移動する移動技術。加速と移動距離はあるが、一直線のみ。
今回、逆鬼がソラの元に移動する際に使用。

鬼棒術・烈火弾

音撃棒の先に付いてる【鬼石】に炎を発生させ、火球を発射する技。
元々は響鬼の技。

鬼棒術・烈火剣

本編未登場。烈火弾と同じく、【鬼石】に炎を発生させ、音撃棒に
炎の剣を発生させる。元々は響鬼の技。

鬼縄術

歌舞鬼から教わった技。使用用途は多数。

鬼傘術

本編未登場。歌舞鬼から教わった技。主に防御時に使用。

十一ノ巻『メイドと巫女と暗躍』(前書き)

今回のタイトル、完全にネタです。

オリジナルの魔化魍出します。

逆鬼「本編をどーぞー」

十一ノ巻『メイドと巫女と暗躍』

海鳴のとある山中。そこに逆鬼、キバ、ラハブ。そして一体の魔化
魁 『ユキグモ』が対峙していた。

ユキグモ

【ツチグモ】の亜種。体色が白と黒の個体が多く、糸の他に氷の塊
を吐き出す。だが、その他ツチグモとの違いはない。主に北海道や
東北などの地域に出現。

《BREAPH! FIRE!》

ラハブは【巨砲大剣・夜刀ノ神】に【ブレスメモリ】を差し込み、
炎の弾丸を撃ち出す。

「はあっ！」

同時に、キバがユキグモの脚を切る。

それにより、ユキグモの体制が崩れ倒れた。

「逆鬼っ！」

「応っ！！！」

ラハブの声に応じて逆鬼が飛び出し、大きく跳ぶとユキグモの背中に乗り、【音撃鼓・爆鼓】を取り付ける。そして【音撃棒・烈撃】を両手に持ち、高々と構えた。

「音撃打・猛撃必壊ッ！！！」

音撃打・猛撃必壊

「でいやあああああああああッ!！」

逆鬼は気合いを込め、烈撃を振るった。

「サカキ様、頼まれていた件なのですが」

「? ……ああ! アレな!」

ユキグモ退治を終えたあと、ディスクアニマルの入ったケースを錬矢の車に積んでいると、不意にソラが言い出した。

当のサカキは忘れてたようで、ソラに言われて思い出した。それを錬矢は「やっぱバカだ。コイツ」という目で見ていた。

「で、どうだった？」

「はい。私が調べられる範囲では、サカキ様のような事例はありませんでした」

ソラは申し訳なさそうに言うと、すみませんと頭を下げる。

数日前の事、サカキはソラに戦国時代から来た事と若返った事を話していた。

自分で調べられないサカキは、管理局のデータベースならと思い、ソラに調べてもらうためだ（鍊矢提案）。

ソラはサカキの話信じ、快く受けてくれたのだ。

「いやソラが謝る事じゃねえよ。……………また」お前じゃねえだろうな、鍊矢」

“また”を強調して鍊矢を睨む。

それを受けて鍊矢は手をヒラヒラさせた。

「さすがに無理だったの。時間を越えるのは難しいし」

「そうか……………」

その後、ソラを管理局のアースラ組が使ってるマンションに、サカキを八神家の近くに送り届け、俺は人気のない駐車場で休んでいた。
・・・・にしても、ホントに誰なんだ？ サカキを子供にした
うえ、この時代に連れて来たのは。

言っちゃえば、時間を越えることは出来ない。ただ難しいんだ。
・・・オーナーが厳しくて。

時の列車じゃなきゃ、ハイパーゼクター？ いや無理だ。

ハイパーゼクターが使えるのはカブトライダーだけ。逆鬼、キバ以外のライダーはこの世界に居ない。

じゃあタイムベント・・・・・・は無理だな。遡る事しか出来ん。

それに気になる事もある。サカキは死んだと思ったらはやての家の前で寝てた、って言ってた。それに死んだ仲間の声も聞いたって言

ってたし……ん？ 死んだ？

そこである仮説が思い浮かんだ。なるほど、“アレ”なら可能かもしれない。

キーワードは、『死者』と『時間』だ。

ぴろっ、ぴろっ、ぴろしさうん

あ、電話だ。

「なあ、こんなもんか？」

「うん。そんでええよお」

サカキが切った野菜を見て、笑いながら言うはやて。

何故サカキが台所に立ってるかと言うと、今日ははやての友達である、『月村すずか』が遊びに来るらしい。

それでついでの夕食をご馳走しよう、というはやての考えで、夕食の鍋の準備をしているのだ。

「わかったか？ 諸君」

「……さっきからなに言ってるのや」

「いや、少し電波が」

などとたわいのない会話しながら準備をする二人。

シグナム達は例の如く居ない。

））

不意に聞こえた、F のレベルアップ音。サカキのケータイからだ。

これは以前、錬矢に勝手に設定された物だ。しかも設定変更ができない。

(まあ、気に入ってるからいいんだけどな)

そう思いつつケータイを取る。

着信画面には『荒木錬矢』とあった。

「錬矢、どした？」

『おお、サカキ。いや実はな、お前のとこの守護騎士と管理局の魔導師が戦り合ってるだよ』

「あ、そうなの」

即答。つーか興味無し。

『そうなの。……って随分だな、オイ』

「だってそれはあいつ等の勝手だろ？ 俺には関係ないしー」

「関係ないから止める気はないけどな」と言うと、錬矢は呆れる風もなく、「そうか」とだけ言った。

『いやな、一応管理局側ってことで、ソラとキバットも出てるんだよ。それでソラがお前が出て来るか気になってるみたいだな』

「そうなのか？」

『そうなの。まあ、出てこないならそれでいんだ。ソラにそれなりに伝えとくわ』

「ん、頼む」

電話を切る。

(そういや、どうやって伝えるんだ？)

「くんにはー」

そう思っていると、玄関の方から声が聞こえた。どうやら来たようである。

「来たみたいやね。はい」

玄関に向かうはやての後を、サカキは着いて行った。

玄関には紺色のコート着た、紫色のウェーブのかかった髪に白い力チューシャを付けた少女。月村すずかと、すずかより薄い紫の髪をショートカットにした女性が立っていた。

「いらっしゃいー、すずかちゃん。 “ノエル” さんも」

「こんばんは、はやてちゃん」

「こんばんは」

はやてとすずか、そしてノエルと呼ばれた女性は笑顔で挨拶をし合う。

なお、サカキ的にすずか、ノエルともいだ。

「あ、あなたがはやてちゃんの」

すずかは、はやての後ろに居るサカキに気がついたようで、はやてはすずかが見えるように移動する。

「はじめまして、サカキです。いつもはやてがお世話になってます」

「はじめまして、月村すずかです」

「はじめまして。私、月村家でメイド長やらせていただいています、ノエルと申します」

「メイドっ!?!」

『メイド』という単語に、サカキが反応した。

目を見開き、口を大きく開け、まさにビックリ仰天という顔だ。

「スゲーーっ！ はやて、俺初めてメイドさん見たっ！！」

「やかましいわっ！！」

スパアアアアッ！

「ぐはっ！！」

それは一瞬だった。サカキのボケ発言にツッコみ、それと同時に車椅子に仕込んでいたハリセンを取り出し、上半身を回転させ威力を上げた一撃を繰り出す。

まさに電光石火の一撃だった。

あまりの出来事に、すずかとノエルは驚くしかなかった。

“ それでは、サカキ様は来ないんですね？”

“ ああ。なんか協力する気もないみたいだし、安心していいぞお”

サカキが吹き飛んだ頃、錬矢は念話を使い、ソラにサカキが来ない事を伝えていた。

“ わかりました。わざわざありがとうございます。それでは、サカキ様に宜しくお伝えください”

“ んー。じゃなー”

錬矢は念話を切り、一度息を吐いて、3メートル程離れた場所で繰り広げられている戦いに目を向けた。

そこでは、なのはが魔力誘導弾を放ち、ヴィータが障壁を全体に張って防いでいるが、徐々に障壁にヒビが入る。

一方、フェイトが【フォトンランサー】の強化型、【プラズマランサー】を放つと、シグナムが上空に飛び避ける。だがランサーは一度停止し、シグナムが避けた方向に向き直り、再び発射された。

「カートリッジシステム……か」

呟くように錬矢は言う。

なのはにしても、フェイトにしても技の威力が格段に上がっていた。それは自身等のデバイスに組み込んだ【カートリッジシステム】によるものだった。

リリカルなのはのファンには説明不要だろうが、カートリッジシステムはなのは達魔導師が使う【インテリジェントデバイス】ではなく、シグナム達騎士が使う【アームドデバイス】に使用する物で、使えば一時的に技の威力が増大する。だがその分使用者とデバイスに負担が掛かる、両刃の剣なのだ。

「確かに有効な手だが、よく使う気になっただな」

内心呆れ気味に言うが、ふとある事を思い出し苦笑する。

「ガイアメモリ使ってる俺が言う事じゃねえか。……さて」

と、錬矢は戦っている面々から、少し離れたビルの上にいるソラに向けた。

「暇そうだなあー」

錬矢の言うように、ソラは暇だった。

実は、当初はソラも参加する予定だったのだがなのはとフェイトが「私たちにやらせてくださいっ！」と頼まれ、さらにはリンディとクロノに「レッドオーガ（管理局が付けた逆鬼の呼称）が出て来たら対処してくれ」と言われ、待機になった。

だがソラは錬矢に逆鬼は来ないと言われた。ということは、ソラの出番はなく、暇になってしまったのだった。

「つーかまさか、鬼サカキ小僧が来るか気になってたのって、自分の出番があるかどうか確かめるためじゃ・・・」

まさかと思ったが、錬矢はそう考えずにはいられなかった。

「・・・・・・・・・帰る」

しばらくして、錬矢は考える事を放棄し、帰る事にした。騎士と魔導師の戦いも飽き、ソラも動かない以上、この場に留まる理由もない。

錬矢は眼前に灰色のオーロラを発生させ、入ろうとしたが、ふと足

を止める。

「……………外、なんかありそうだな」

そう呟き、オーロラの行き先を離れた森の中から、結界の外に変更し、入って行った。

一方、結界の外では【闇の書】を持ったシャマルが結界を破壊するため、闇の書に記されている大魔法を発動させるか迷っていた。その一瞬の隙を突かれ、クロノに背後取られるが、突然仮面を付けた謎の男が現れ、クロノを蹴り飛ばした。

「……………闇の書の手を使え」

「え……………！」

仮面の男は闇の書に記されている魔法を使うよう、促した。

シャマルは困惑した。確かにそうすれば、結界を破壊して仲間を助ける事が出来る。だが使えば、これまで蒐集してきた闇の書の頁が減るからである。

「減った頁はまた蒐集すればいい。それよりも、仲間の方が大事なろう？」

シャマルの迷いを見透かしたように、なおも仮面の男は促す。

それにより、シャマルは闇の書を発動させることを決意した。

“みんな、今から闇の書を発動させて結界を破壊するわ。巻き込まれないように気をつけて！”

“おっっ！”

“分かった”

“心得た”

シャマルはシグナム達に念話を飛ばすと、闇の書を展開し、発動させようとした、が。

「はいそこまで」

不意に声が聞こえた直後、シャマルの前に開かれていた闇の書が何者かに取られ、強制的に閉じられてしまった。

突然の出来事に、シャマルにクロノ、仮面の男も無言だが驚いた。

そして、シャマルはもう一つの意味で驚いた。

「あ………貴方は」

「よっ」

闇の書を取った人物　　錬矢は闇の書を左手に持ち、右手を上げて軽く挨拶する。

「な……なんだお前はっ!？」

「お嬢さん……シャマルだったか？　今まで苦労して集めたんだ。ここで使っちゃうのはもったいないだろ？」

「無視するなっ!！」

復活したクロノをさらに無視し、錬矢は「だから」と続けた。

「俺がなんとかしてやるよ」

そういう錬矢の腰には、いつの間にか【ラハブドライバー】が巻かれおり、右手には【ドラゴンメモリ】が握られていた。

「あ、貴方はいつたい・・・」

「俺か？ 俺は『仮面ライダー』さ」

《DRAGON!!》

「変身」

《DRAGON!!》

錬矢がラハブに変身すると、周りから驚愕の声が聞こえたが、ラハブは無視し【夜刀ノ神】を取り出し、【ブレスメモリ】を差し込んだ。

「今日は雷にするか」

《BREAPH! Maximum-Drive》

夜刀ノ神から電子音が聞こえると、刀身にプラズマが発生しラハブは高々と夜刀ノ神を上げた。

「ブレス、ライジング」

そして、雷の刃を振り下ろした。

「ブレイエエエエエエエエエエエエエエエエドツ！！」

刃となった雷は結界にぶち当たり拮抗。だが拮抗は一瞬で崩れ、結界は切り裂かれた。

「よっ」と

「え？」

結界の破壊を確認したらハブは、夜刀ノ神をしまつと、シャマルを片手で抱え上げ、灰色のオーロラを発生させた。

「ま、待てっ！！」

シャマルを抱え、闇の書持ったまま灰色のオーロラを潜ろうとする

ラハブに、クロノはデバイスを向けるがラハブはまたも無視。そのままオーロラを潜って行ってしまった。

そしていつの間にか仮面の男も居なくなっていた。

「くそおおおおおおおおおおおつ!!」

その場に、クロノの怒声が響き渡った。

その頃、サカキ&はやてはといつと・・・。

「はいチーズっ!!」

カシヤッ

「いいよお、二人共すごくいいよお」

「あ、あははは・・・」

暴走気味にカメラを乱写するサカキと悶えるすずかの姉『月村忍』。

メイド服を着たすずかと、巫女服を着たはやては、そんな二人を見て苦笑するしかなかった。

さて、何故はやてとすずかがコスプレし、サカキと忍が暴走しているかというところ、当初は八神家でシグナム達の帰りを待っていたのだが、あまりにも遅いのですずかが「家に来る？」と言ったのだ。

はやては断ろうとしたのだが、初めて生メイドを見て暴走したサカキの頭の中に『すずかの家』ノエル（メイドさん）の家もつとメイドさんが居るっ！！』という図式が出来上がり、はやてを説得して月村家に上陸したのだ。

月村家の家（屋敷）を見たサカキは元居た時代のブルジョアジー、イブキを思い出したのはいうまでもない。

メイドはノエルともう一人のメイドだけだったが、すずか専属メイドの『ファリン』という『ドジツ娘+メイド』というメイドとしては致命的な属性を持つ人物との出会いでさらに加速。

さらに出された食事でファリンが水と思いサカキに出した飲み物は実は酒。

酒の力でさらにさらに暴走が加速し、同じく酒の入った忍と意気投合して何故かメイドと巫女の素晴らしさに語りだし、すずかはメイド。はやては巫女が似合うのでは？ と言い出し、現在に致るのだ。

ちなみに、すずかのメイド服はミニではなくロングスカートだ。理由はというと

「「こだわりと美学だっ！！」」

だそうです。

「あのー、忍さん。すずかちゃんが着とるメイド服はまあ、わかります。せやけどわたしが着とる巫女服は何であるをですか？」

「そっだよ。何であるの？」

はやての疑問ももつともである。メイド服はノエルやファリンがいるのであるのは当たり前だ（すずかのサイズがあるのかはあえてツッコまない）。

だが何故巫女服があるのか。すずかも疑問だったらしくはやてに便乗した。

「え？ 知り合いから貰ったの？」

「あんだあっ！？ はやて、オメエ巫女さんをバカにそのかつ！？」

はやてとすずかの疑問に忍は答えるのだが、酒とメイド、そして巫女で暴走したサカキがどこぞの不良（どちらかというと銀髪天然パーマの侍？）風に突っ掛かる。

だがギャグパートのサカキがはやてに勝てただろうか？ 答えは否だ。

「やかましいっ！！」

「ぐほっ！？」

本日二度目のハリセン。だが空を舞うサカキの顔は晴れやかだった。それははやての現在の服が巫女服だから。．．．なのかは定かではない。答えはサカキのみぞ知る。

「．．．．．何これっ！？」

「お姉ちゃん、二人にはこれが普通みたいだから．．．ああ、やっぱり慣れないよお」

「．．．．．首尾のほうは？」

「予定通り．．．．．と言いたいのですが、いくつか問題が」

「……なるほど、キバとレッドオーガ、そしてこの黒い戦士か」

「はい。管理局の呼称はレッドオーガに続き、“ブラックドラゴン”となりました」

「黒龍か。確かにこの攻撃力、脅威だな。しかも魔力反応がないとは」

「以前の結界破壊も、ブラックドラゴンによるものだと思われます。いかがします？ レッドオーガ、ブラックドラゴン共に計画に支障をきたすと思われます」

「ふむ。……引き続き監視を続けてくれ。この二人の対策は追って連絡する」

「わかりました。お父様」

「 という訳だ」

「なるほど。貴方が言いたい事はわかりました。ですが」

「事情はわかっている。けどもし、“アレ”復活すれば、この世界にも影響が出るかもしれない」

「ですが・・・」

「いいじゃん。やってやるっぜ、姫っち」

「瞬しゆん・・・」

「この人の言う通り、もかしたらうちにも影響が出るかも知れないんだぜ？ それに、この人の提案、侑斗さんもやったじゃん。大丈夫だって！」

「・・・・・・わかりました。協力します」

「そうか！ ありがとうっ！」

十二ノ巻に続く。

十一ノ巻『メイドと巫女と暗躍』（後書き）

今回の逆鬼は完全にネタです。

すみません、すずかは出したかったんです。好きなキャラなので。かーなり、暴走しました。ではでは。

十二ノ巻『過去・前編』（前書き）

『帰ってきた名（迷）言コーナー』

我らは成功によってよりも、失敗によってこそ多くの智恵を学ぶ。
（スマイルズ）

でもだからってStrikes7話9話はないだろ。ティアナはまだ若いしオメエらが無駄に優秀過ぎるせいで圧力感じてんだ。それをオメエらは・・・聞いているか？ バカ隊長陣 （逆鬼）

うう・・・ （隊長陣一同）

この後2時間程逆鬼の説教は続きますが・・・ああ、コラボやりたい。でも文才が （フロスト）

まあ、A's偏終わらせようや。

つーわけで、前後編だから今回の後書きは無しだ。 （荒木錬矢）

始まります （ソラ・ザ・ファルコン）

十二ノ巻『過去・前編』

前回の戦闘後、ソラとキバットを含めたアースラ組は、クロノから『闇の書』について話を聞いていた。

「『闇の書』っていう魔導書は、完成前も完成後も、自由に制御が利くようなものじゃなくて、純粋な破壊にしか使えないんだ」

「そして、それを守る守護騎士は人でも使い魔でもない。魔法技術で作られた疑似人格プログラムなんだ」

守護騎士は人でも使い魔でもない……。ソラとキバットは事前に聞かされてはいたが、やはり驚愕の事実である事は違いない。なのはと淫じゅ……。フェレットモードのユーノはこの事実に大きく目を開き、フェイトは俯き、思ったことを口にした。

「使い魔でも人間でもない……。私みたいな？」

「それは違うわっ!!」

フェイトの言葉を、リンディが即座に否定した。

「貴女はちゃんと命を受けて生まれた人間よ」

「検査でも、君は何も変哲もない人間だって結果も出ただろう。それに、守護騎士は闇の書に組み込まれたプログラムが人の形をとったものでしかない。感情がないんだ、君とは違う」

リンディとクロノの言葉に、フェイトは「ありがとうございます」とうつすら涙を浮かべた。

事情を知らないソラとキバットは、何故フェイトがそんな事を言ったのか疑問だったが、自分達が聞くべき事ではないと思いついた。聞かなかった。

そこでなのは、クロノの言葉に疑問を覚えた。

「え……感情がない？」

「うん。守護騎士はあくまでプログラムだから、前の事件で対話能力があるのはわかってるんだ」

「ちょっと待って下さい」

エイミイの説明に、ソラが意義を唱えた。

「私はシグナム様と打ち合いましたが、あの一刀には明確な“意思”を感じました」

「それは、私も同じです」

「それに、ヴィータちゃんも怒ったりしてたし……」

ソラの意見に、フェイト、なのはが続く。

実際に守護騎士の面々と話、戦った彼女たちには守護騎士が意思を持たない人形だと思えないのだ。

それはザフィーラと戦ったアルフ、ソラと常にいたキバットも同じようで、三人の意見に賛同して頷いた。

それを受けてエイミーは首を捻った。

「う〜ん。闇の書もロストロギアだし、私達も全部知ってるわけじゃないからなあ〜」

「まあ、この話はここまでにしよう。次はこれだ」

話が平行線になりそうだったので、クロノは話を変え、端末を操作してある映像を映した。

「あ、これって」

「ああ、“レッドオーガ”と“ブラックドラゴン”だ」

2画面化された映像には、サカキと錬矢が映されており、変身して逆鬼とラハブになった所で映像が止められた。

「両方共見つけしだい任意同行。抵抗、または拒否する場合は身柄の拘束。多少、手荒な事をして構わない」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

全員が厳しいのでは、と思ったが、レッドオーガ（逆鬼）はAAAランクのフェイトを撃墜し、ブラックドラゴン（ラハブ）は魔力を使わずに結界を破壊した。管理局は危険と判断し、いかなる方法でも捕まえる気であるのだ。

なのは達もそこは充分理解しているし、守護騎士の仲間、または主かもしれないのだ。どうしても話をする必要がある。だから黙っているのだ。

その中で逆鬼とラハブを知るソラとキバツトは、二人が（ギャグ的に）死に体となった武装局員の上で高笑いをしているのが容易に想像ができた。

その想像を頭の中から消そうとして、ソラは頭を振っていると、悩んでいるのか隣に座っているのはが首を捻っているのが目に留まった。

「なのは様、如何しましたか？」

「あ、いえ。…………あの、レッドオーガさんって、“鬼”……
ですよね」

「鬼……ですか？　そうですね、レッドオーガという呼称も、その見た目から付けられましたから。それがどうかしましたか？」

サカキから鬼であることを聞いていたソラは即答してしまいそうになるが、ミッドチルダ出身の自分がすぐに肯定するのもおかしいと思ひ、遠回しの言い方をした。

なのは言おうか迷ったが、悩んでいた理由を話始めた。

「あの、昔話が思い出せなくて」

「昔話……ですか？」

「はい。そのお話、鬼が出てくるんですけど、なんてお話なのか思い出せなくて」

「なるほど、だからなんですね」

「はい」

なのはが悩んでいた理由にソラは納得した。

「んっ、二人共」

「「うう、ごめんなさい……」」

「それじゃあ、よろしく願いしますう」

「はい、お任せ下さい」

「うん、任せて、はやてちゃん」

「ごめんなあ、うちのバカが」

翌日、月村家の玄関の前にはやて、すずか、ノエル、ファリンがいた。

あの後、サカキとはやては月村家に泊まり今帰るところなのだが・
・サカキの姿がない。

「いえ、元々はこちらの不手際ですから」

「うう、ごめんなさい」

「お、お、お……!」

「サカキ君大丈夫……じゃないね」

「オンドウルウウ……うう……うう……うう……うう……!」

「・・・今サカキらしき生物の声が」

「お姉ちゃんが看病してくれてるけど・・・大丈夫かな？」

「やっぱり私もサカキ君の看病を」

「」「それはやめて(なさい)」「」

「みなさんひどいですう」

サカキは前日、ファリンのミスで酒を飲んでしまい暴走。

今朝になって目が覚めると頭痛と吐き気に襲われ・・・まあ、二日酔いである。

さすがに死に体となったサカキを連れ帰る訳にもいかず、月村家で養生することになったのだ。

「サカキ、ほんまに大丈夫やるか？・・・なーんか嫌な予感するわ」

「うう……頭いてエ。飲み過ぎたああ」

なんとか歩けるまで回復したサカキは、月村邸の廊下を歩いていた。

サカキ自身としては直ぐに帰る気だったが、忍に「もうちょっとゆっくりしてってね」「……と笑顔で（何故か圧力込みで）言われたので、こうしてぶらぶらしているのだ。

「……こうゆうふうには二日酔いになんの、いつぶりだろ」

思えば八神家に来て半年。さすがに子供の姿で酒を飲むわけにはいかず、ずっと飲んでいなかった。

久しぶりですっかり弱くなっていたが、久しぶりの酒の味で“昔”を思い出し、目を細めた。

「……………ん？　ここは……………」

何も考えずに歩いていたせいか、気がつくところある部屋の前に来ていた。

そこは昨日、はやてと共に来たはずかの部屋であった。

閉め忘れたのか、扉が少し開いており部屋の中が見えていた。

サカキは扉を閉めようと思えばドアノブに手を掛けるが、そこで思い止まり少し悩んだ末部屋の中を覗こうとして

「何してるのかなあ〜？」

「スタープラ　ナっ!？」

某有名な波紋幽霊の名前を叫んでしまうのだった。

慌てて振り返ると、そこにはニヤニヤと笑っている忍が居た。

「ちよっ……………あんたいきなり何すんですかっ!？」

「えー？　女の子の部屋を覗こうとしてる子を見付けたら誰でも声掛けるでしょ？　自分の家なら尚更」

「っ……………!」

とまあ正論言われて何も言えなくなるのだ。

さらに忍はサカキに顔を近付ける。

「で、何しようとしたの？」

「い、いや、昨日ちょっと気になる物があつてそれが今もあるかなあーっと」

と言つのだが、これは言い訳ではない。

実は昨日、すずかの部屋に入った時に気になる物があつたのだが、流れに流れて結局確認できなかったのだ。

それを聞いた忍は、何故か残念そうな……実際残念な顔をした。

「なーんだ。私はてつきり可愛い女の子の部屋であんな事やこんな事をしようとしたのかと」

「はあッ!?!」

「あ、でもすずかはもうちょっと待ってほしいな。その点ノエルとファリンならスキンケアという事で合法的だし。あ、私も一緒にお風呂で洗いっこならいい」

「アホかあああああああああああああッ!！」

サカキは何処からともなくねこちゃんスリッパを取り出し忍の頭を打ったいた。

「なんでそんな考えずになるんじゃあああああああああああああああッ!！」

「え? 面白いから」

「ッ………!!！」

「ゴメン、謝るから許して? というかその太鼓のバチ二本どこから出したの?」

「それじゃ入ろっか」

「え？」

「気になる物があるんでしょ？」

「は？ いや、いいんすか？」

部屋の扉を開いて中に入ろうとしている忍に、思わず聞くサカキ。

「いいのいいの。ほら」

「ん……」

笑顔で中に入っていった忍に、サカキは何も言えず付いて行くさかなかった。

部屋の中に入ると、まず目に付くのは数多くの猫グッズ。

サカキが昨日部屋に来た時に見て、引いたのは秘密である。

そして部屋に居た猫たちに襲われ、『猫の木』になっただのは良い思い出だ。

(まあ動物は嫌いじゃないけどね……っと)

そう思いつつ、サカキは机の上に置いてある一冊の絵本を手に取った。

「ああ、それね。すずかが好きなんだ。あとそれ、昔“海鳴市に実際にあった”お話ししい……サカキ君？」

忍が反応がないことを不信に思い、サカキを見ると、サカキは絵本を開いたまま、動かなかつた。いや、あまりの衝撃に“動けない”でいたのだ。

何故なら、その物語はサカキにとって 逆鬼“達”にとって忘れられない、一人の友との別れの物語だったからだ……。

ボロボロの椅子。

ボロボロの壁。

薄汚れた窓。

今にも消えそうに、証明の弱々しい光が“ここ”を照らす……

椅子の並び、広さと形、そして内装で“ここ”は列車 所謂機関車の中だとわかる。

その客車に、四人……いや、三人と一体の異形が居た。

一人は男。見た目はボロいが丈夫な着物を着ており、両目の下に赤いペイントをつけている。傍目から見たら歌舞伎役者に見えなくもない。

男の向かいに座っているのは少女。綺麗な金色のロングヘア、笑顔を浮かべ、真紅の瞳で目の前の男を見ていた。

「……俺の顔になんか付いてるか？」

「ううん。ただ見てるだけ」

男の問いに、少女はなおも笑顔を絶やさずに男を見続けていた。

「~~~~~ッ」

男はそっぽを向くが、その頬は少し赤かった。

「・・・・・・・・なあ」

「はい？」

男と少女から少し離れた席に座っている、ボロボロの黒い布を纏い、髑髏の顔を持つ異形がコーヒーカップ片手に、お盆を持つ薄茶のシヨートカットの女性に尋ねた。

「これ、何回目だ？」

「えーっと、三十回目以降から数えてません」

「そうか・・・・・・・・」

異形はカップに入っている珈琲を一気に煽り、深いため息を吐いた。

「はあ・・・・・・・・変な契約者のとこに着ちまった」

「まあまあ、楽しいじゃないですか」

そう言つて微笑む女性を見て、異形はまた一つ　先程より大きなため息を吐いた。

やっぱり変なとこに着ちまった　かつてこことは別の世界、【電
王の世界】で倒された【ゴーストイマジン】は頭を抱えずにはいら
れなかった。

十三ノ巻に続く。

十三ノ巻『過去・後編』（前書き）

錬矢「さあ、始まるザマスよ！」

逆鬼「行くでガンス」

ソラ「フガー」

フロスト「更新遅れてすみません」

本日のOP『もってけ！セーラーふく』

十三ノ卷 『過去・後編』

兄さん……………。

あなたはどこに居るのですか？

兄さんと別れて、私は無事、ヒビキさんの元に付きました。

ですが、あなたは帰って来ません。

兄さん……………。

サカキは、海鳴市の図書館に来ていた。

何故かというと、あの絵本が原因だ。

絵本という物は、子供が読みやすいように改編されているものだ。

有名な童話のモモタロ・・・桃太郎、シンデレラや白雪姫などがその最たる例だ。

それはサカキが月村家で見た絵本も同様であり、その内容はサカキが知っているものとは異なるものであった。

故に、サカキは絵本の基となった物がないか忍に尋ねたところ、図書館にならあるかも知れない。そう言われ図書館に訪れたのである。図書館に入ると、直ぐに歴史の本が列んである本棚に向かい、絵本の原本を探すと、意外にも直ぐに見付かり、サカキは『戦鬼物語』と書かれた本を手に取り、その場で読み始める。

「・・・・・・・・やっぱり、そうなんだな」

静かに本を閉じる。しばらく目を閉じると、本を本棚に戻し、その場をあとにした。

『紅葉^{もみじ}、お前はヒビキのところに行け。俺が囿になる』

『えっ！？ でも、兄さん』

『いいから行けっ！ ヒビキなら何とかしてくれる。必ず帰る。だから行くんだっ！…！』

『待って、兄さああああああああんっ！…！』

俺は、名前もない小さな村に歳の離れた妹と一緒に暮らしてた。畑を作りながら、裕福じゃないがそれなりに楽しかった。

もちろん、俺が鬼だつて事は秘密だ。バレたら追い出される。俺は宿なしでも大丈夫だが、妹は無理だ。

それに、産まれてからずっとあの村に住んでたんだ。いまさら離れるなんて出来なかった。

魔化魍を倒しながら、バレないようにやってたんだが、とうとうバレしまった。

俺が『オロチ』の出た村に行つて、無事帰ってきたのが原因らしい。噂が広がつて、それでだ。

仲良い奴が居なかつたわけじゃない。が、村の奴らは俺が鬼だと知ると、手の平を返しやがった。

ずっと住んでたボロ家は燃やされた。まあ、嫌な予感があったから、燃やされる前に村を出たんだが。

だが奴らは、俺と妹が居ないと分かると追い掛けてきやがった。

そんで、このままじゃ追い付かれると思つた俺は、妹をヒビキのところにかわせて俺が囷になる事にした。

それで言つたんだよ、「必ず帰る」つて。

今考えたら、死亡フラグなんだよな。

そのせいか、崖に追い詰められて子供に刺されて崖から落ちて・・・

・・・。

ああ、これ死ぬかな、と思って気付いたらはやての家の前に倒れた。しかも縮んで。

ははっ、笑えねえ。

「・・・・・・・・ここは、あんま変わってねえんだな」

海鳴のとある海岸。図書館を後にしたサカキは、昔の記憶を頼りにこの場所に来ていた。

「この場所で戦ったんだよな」

サカキは砂浜を歩きながら、目を細めた。

この場所は、かつて逆鬼達がオロチと戦った場所であった。

サカキは当時の戦いや、その後の事……。特にヒビキの元へ逃がした妹・紅葉の事……。サカキがそれに気付いたのは、それらを思い出しながら歩いていた時だった。

「……………ん？」

サカキが気付いたのは、小さな洞窟であった。

サカキはその洞窟に近付くと、それは見覚えのある洞窟である事を思い出した。

「懐かしいな。ここ、俺が猛たけしに教えた場所だ」

当時、ヒビキの弟子であった猛は、ヒビキの為に一本の刀を作った。だが、猛の腕は未熟で、あまり出来のいい物を作れなかった。

そこで猛はサカキに相談を持ち掛けた。

サカキは出来は悪くても渡せばいい。ヒビキなら喜んで受け取る、と言ったのだが、猛が断固として譲らなかつたため、サカキは仕方なくこの場所を教え、猛はこの洞窟に刀を隠したのだ。

サカキとしては後でこっそり持ち出し、ヒビキに渡そうと思ってい

たのだが、不慮の事故で猛が亡くなり、ヒビキも鬼を辞め隠居状態になってしまったため、渡すに渡せず、結局隠したままになった。

その後、誤解もあつたが猛の弟の明日夢からヒビキに渡され、ヒビキも鬼に復帰したのだ。

「猛が生きてる頃は、ヒビキに弟子自慢をよくされたもんだ」

「あ、今の時代だとヒビキも死んでんだな」などと呑気な事を言いながら、洞窟の中に入って行く。

洞窟と言っても中は広くなく、どちらかと言えば洞穴のほう为正しいかも知れない。

奥に進むと、台座のような形をした石があり、そこで行き止まりとなっている。

そしてサカキはある物に気が付いた。

「こいつは………」

それは台座のような形をした石の上、藁わらに包まれて置かれていた。

不審に思ったサカキは、それを手に取り、巻かれていた藁を取る。そこには、一本の刀があつた。

「おいおいおいっ！ 何でコレが此処にあんだっ！？ コレはヒビキが持つてる筈だ………」

そこまで言い掛け、気付いた。

猛がヒビキに作った刀には、刀身に『響鬼』と彫られていた。

だが、今サカキが持っている刀に彫られているのは『逆鬼』。サカキの名が彫られていた。

「はい？ いや待って待って待てっ！ 何で俺の名前っ!？」

予想外の事に混乱するサカキ。

よく見れば、ヒビキの刀と似ているが、細かい所が違っている。

誰かがヒビキの刀を元に、自分に作ったのか？ いったい誰が？

(のおおオオオオオオオオオオオ……!!!)

無い頭で考えたためか、サカキの頭部から煙が上がり始めた。

〜
〜
〜

とその時ケータイが鳴り、サカキは煙を上げながらケータイを取る。

「あい、もしもし」

『サカキか？ 俺だ』

「ああ、錬矢か」

電話の相手は錬矢だった。

「魔化魍か？」

『ああ。いつものトコで合流でいいか？ あ、あと弦と管も持って来てくれ』

「ん？ いいけど、どうしてだ？ つーか、今回の何？」

『まあ、それは合流してから。んじゃ』

電話が切れ、疑問に思いながらも洞穴を出ようとして、動きを止めた。

「これ、どうすっかなあ・・・」

サカキは手に持った刀に目を下ろす。

自分に贈られたのは確かだが、誰が作ったのかが分からない。

「・・・しょうがねえか」

サカキは刀を藁に包み直し、それを脇に持ち洞穴を出た。

一旦八神家に戻り、音撃弦と音撃管を持つと、近場の駐車場に向かう。この駐車場が錬矢とのいつもの合流場所となっている。

ちなみに、家に居たのははやとシヤマルのみで、シグナム、ヴィータ、ザフィーラは居なかった。

サカキはまた闇の書の蒐集に行ったのだらうと思い、駐車場に車を停めて待っていた錬矢と合流、車に乗り込みすぐに現場に向かった。

「なあ、そっぴやソラはどうしたんだ？」

「あー、なんかタイミングが悪くてな。お前んとこのビツクメロン（シグナム）とムキムキマッチョ（ザフィーラ）が出たから、待機なんだと」

「ふうーん」

車での移動中、いつもは居るはずのソラが居ないので、サカキは何となしに聞いてみた。

錬矢は連絡して聞いた事そのまま伝えた。そしてサカキの反応を見て、ニヤニヤ、というか、口は三日月のような形に変わり、目も同じ形に変わる。

まるでピエロの仮面のような、不気味な表情に変貌した。

「ん？ 何だ？ 寂しいのか？ ん？ お兄さんに話してみ？ ん？」

「うるせえ。つか『？』がウザイ」

その表情と言葉に殺意を覚えつつ、サカキは【音撃管・烈波】を錬

矢のこめかみに突き付けた。

「あははははは。流石にこの距離は逝くわ。つか、音撃管の初使用がコレってどうよ」

錬矢は湯いた笑いをした。

ちなみに、サカキは助手席に座っているが、ソラが居る時は何故か一緒に後部座席だったりする。

「にしても、ホントどしたんだ？ ソラの事聞くなって」

「いや・・・なんか気になったから、何となく」

「そうか」

錬矢はそう返したあと、「フラグ？ 両想いフラグなのか？」と呟いたが、それはサカキには聞こえなかった。

「あ、そっぴや今回の魔化魍って何なんだ？ 聞いてなかった」

「んー、分からん」

再び、烈波が向けられた。

「……………うん。俺も悪かったけど、話は最後まで聞こう、な？」

仕方なく、サカキは烈波を下ろした。

「仕方なくなんだ。……………まあ、真面目な話をすると、いくら候補は上がったんだが、そこから絞り込めなくてなあ」

「殺し方で分かんねえのか？」

魔化魍を特定する際、気温や湿度で調べるが、人間の殺し方で判断することもある。

例えばバケガニは、人間の骨を食べるために強力な溶解泡で溶かして骨を食べる。

他にも、肛門に顔を突っ込んで内臓を食べるなど、魔化魍の人間の殺し方 エサの食べ方は多種多様なのだ。

その事から、サカキは殺し方で分らないのか、と聞いたのだ。

だが鍊矢は「うーん」と唸った。

「そうなんだが、どうもな……………」

珍しく歯切れの悪い相手にサカキは疑問顔になる。

錬矢はそれに気付き、理由を話し始めた。

「魔化魍らしい事件が二つ。

まず、山に入ってしまった女性二人が休憩所に荷物を残して行方不明。もう一つは、山道に何かに押し潰されてペシャンコになった車が一台。乗ってた人間は言わずもがな」

ちなみに、どちらも今朝のニュースで放送されたのだが、サカキは二日酔いで見ていない。

「……………魔化魍だな」

「だよな」

サカキの言葉に、錬矢は頷いた。

「一つ目は、バカな人間が道に迷っただけで済む。だが二つ目は明らかに魔化魍の仕業だろ」

「そうだな……………なあ、サカキ」

「何だ」

「お前、もしかして人間嫌い？」

「・・・・・・・・少し」

「そっか・・・・・・・・」

事件のあった山のふもとに到着すると、サカキと錬矢はすぐにデイスクアニマルを放ち魔化魍の搜索を行い、意外にもすぐに見つかり現在、その場所に向い、着いたのだが・・・・・・・・。

「な・・・・・・・・なんじゃありやあああああああああああ
あっ！！！」

サカキは予想の斜め上に行く出来事に絶叫。
錬矢は「やっぱりか」と呟いていた。

二人の目の前に現れた“モノ”、それは・・・黒くて巨大な、岩山であった。

『ノオオオオオオオオオオオオオオオオオオ・・・!』

二人の前に現れた魔化魍の名は、【オトロシ】。亀のような体にサイのような頭部を持つ、『100年に一度』現れる魔化魍だ。

「えっ！ 何これっ！？ これって魔化魍っ!?!」

「うるせえ、俺に聞くな。つか、面倒なのが相手だなあ」

100年に一度しか現れないという相手に、テンパるサカキ。

実際、サカキはオトロシと戦った事が無い。

話には聞いていたが、100年に一度という事もあって、実際に見たのは初めてなのだ。

一方、鍊矢は冷静にオトロシを見上げながら、ある事を考えていた。

(童子や姫より先に魔化魍が見つかった・・・・・・・・。もしかして別の所でエサ探してもしてるのか？ それとも・・・・・・・・))

「ノオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！」

と、オトロシが二人を敵もしくはエサと確認して突っ込んで来たため、錬矢は考えを中断して大きく跳び、その場を離れた。

サカキも錬矢が跳ぶのと同時に動き、子供と大人の体型差か錬矢より2アクションほど多く動き、その場を離れた。

ちょうど二人で、オトロシを挟み込むように立った。

「サカキ、やるぞっ！！」

「応っ！！」

壁オトロシの向こう側に居る錬矢の声に応じて、サカキは背負っていた烈断を地面に突き立て、音角を鳴らし額かぶに翳した。

「変身っ！！」

瞬間、深緑の炎に包まれ逆鬼へと変身した。

今回は音撃棒だけでなく、管と弦も持ちという事で装備帯の右側に音撃鳴と音撃震を吊して装備している。

「っしゃあっ!!」

逆鬼は右手に烈波、左手に烈断を構えた。その時

「ニヤアツ!!」

「しまったっ!!」

不吉な猫のような鳴き声と、鍊矢の音が聞こえた。

「サカキ、やるぞっ!!」

「応っ!!」

サカキに声を掛けた錬矢は、いつものようにドラゴンメモリを取り出し、スタートアップボタンを押そうとした時

「ニヤアツ!!」

「しまったっ!!」

不意に飛び掛かって来た何かによって、ドラゴンメモリを弾き飛ばされてしまった。

「っ……! 糞……っ!!」

錬矢は飛び掛かって来た何かと距離を取り、睨む。

錬矢の前に現れたのは、猫が二本足で立ち、成人男性並の大きさになったような魔化魍、【バケネコ】であった。

「のわっ! 何でバケネコがつ!?!」

どうやら逆鬼の方にも現れたらしく、オトロシの脚の隙間から二体のバケネコと戦っているのが見えた。

そうこうしている間にも錬矢の方にももう一体現れ、合計二体のバケネコが立ち塞がった。

「ちっ……」

錬矢は舌打ちし、顔はそのままに目だけを動かした。

(ドラゴンメモリ……あそこか)

弾き飛ばされたドラゴンメモリは不幸にも二体のバケネコの向こう。錬矢にとっては二体のバケネコをかい潜り、ドラゴンメモリを回収するのは問題ない。だが、それは非常に“面倒”であった。

「仕方ない、こっち使うか」

そう言い、錬矢が上着の内ポケットから取り出したのは、黒い龍の紋章が入った漆黒のカードデッキ。

錬矢がカードデッキを取り出すと、腰に銀のベルト　Vバックルが装着され、錬矢はカードデッキを構えた。

「変身……」

カードデッキをVバックルに装填すると、幾つものシルエットが錬

矢に重なり、そこに暗黒の龍騎士【仮面ライダーリュウガ】が現れた。

変身を終わると同時にバケネコが襲い掛かって来るが、リュウガはそれを軽く避け、一体のバケネコの後頭部に裏拳を叩き込む。

そしてVバックルのカードデッキから一枚のカードを引き抜き、左腕の召喚機【ドラグバイザー】に装填した。

《SWORD VENT》

ドラグバイザーから電子音が鳴り、何処からか漆黒の剣【ドラグセイバー】が現れリュウガの手に収まった。

リュウガはドラグセイバーに振るい、二体のバケネコに切り掛かる。バケネコは切られ吹き飛ばすが、すぐに立ち上がった。ダメージは通っているが、致命傷には到らない。

「ちっ、やっぱ音撃じゃねえと倒せねえか。……………何とか逆鬼と合流しねえと」

リュウガはドラグセイバーを肩に担ぎ、二体のバケネコ、そしてオトロシと戦闘している逆鬼に目を向けた。

現在、逆鬼は突然現れた二体のバケネコとオトロシを相手に苦戦していた。

「糞っ！ 何でバケネコが……っ！？」

本来、バケネコは夏にしか現れない魔化魍であり、今は冬間近。バケネコが現れる筈がないのだ。

「糞っ！ 錬矢の奴、絶対何か知ってやがるなっ！！」

後で絶対吐かせるやる、そう呟き逆鬼は飛び掛かって来たバケネコに回し蹴りを喰らわせ、もう一体のバケネコが両手の鋭い爪で襲い掛かるが、左手に持った烈断で防ぎ、右手の烈波の銃撃をバケネコの腹に叩き込んだ。

オトロシが突っ込んで来るが、大きく後ろに跳躍しその際に烈波で銃撃するが、オトロシの甲羅に弾かれてしまった。

「糞っ！ 硬い……っ！」

本日二度目の悪態をつく。

状況は明らかに不利。二体のバケネコが素早い動きで牽制し、逆鬼の動きが止まった所にオトロシが突っ込む。

別に打ち合わせした訳ではないだろう（それ以前に魔化魍同士が意思疎通が出来るか不明）。大型であるオトロシはその巨体さ故に、どうしても動きが遅くなり、小型で素早いバケネコが先制になるため、どうしてもそういう動きになる。それが非常に厄介だった。

すると、逆鬼が着地するのを狙ってバケネコが飛び掛かって来る。

逆鬼は烈断で受け止めようとするが、体制が整っていない状態で受けたため、倒されてしまう。

バケネコは馬乗りになる状態でなおも攻撃を続け、逆鬼は烈断を両手に持って防いでいた。

（やべっ………！）

横目で見ると、もう一体のバケネコとオトロシが近づいていた。

マズイ、と思った時

ADVENT

突然、何処からか電子音が聞こえると、何処からともなく漆黒の龍が現れ、オトロシに体当たりをする。

突然の不意打ちに流石のオトロシも怯み、漆黒の龍は口から黒炎を放ち追撃する。

「何だありやつ!？」

突然現れた漆黒の龍の乱入に驚く逆鬼。

この漆黒の龍は、リュウガの契約モンスターの【ドラグブロッカー】なのだが、その事を知らない逆鬼は新手の魔化魍？ 共食い？ と思った。

「だが………だああああああッ!!」

チャンスと見た逆鬼は、口を開け【鬼法術・鬼火】を放つ。

馬乗り状態だったバケネコはそれをまともに喰らい、のけ反り逆鬼から離れた。

逆鬼はすぐに起き上がり、近づいていたもう一体のバケネコに烈断を投擲。烈断はバケネコの腹に深々と刺さり、バケネコは倒れる。

最後までそれを見ずに、逆鬼は鬼火でのけ反ったバケネコに肉薄し、その腹部に爆鼓を取り付けた。

「はあッ!!!」

腰の烈撃を引き抜き、爆鼓を叩いた。

瞬間、爆鼓が回転し、バケネコは木の葉となって四散。逆鬼はそれに違和感を覚えつつ、烈断を腹に刺され倒れてるバケネコに近づき、同じように音撃打を叩き込む。

先程と同じように、バケネコは木の葉となって四散した。

「ん？ かしい」

《STRIKE VENT》

「あ、危ない」

「え？ どわああああああつ!!!」

やはり違和感が拭えない。と、その時、電子音とやる気のない声が

聞こえ、逆鬼が聞こえた方向を向くと、二体のバケネコ、を巻き込みながら黒い炎の放流が迫っていた。

逆鬼はどこぞの狩人のように、身を前に投げ出した緊急回避でギリギリ避けた。

「っ！ 何しやがる錬矢ああああああっ！！」

「いやー悪い悪い。でも言ったじゃん。『危ない』って」

『こついう事をする奴』錬矢』の図式の元、怒鳴る逆鬼。

錬矢ことリュウガは、右手に【ドラグクロー】を装備して謝りながら歩いて来る。

なお、謝っているが謝罪の気持ちは一切籠っていない。

「あんなやる気の無い声で言われても分からんわっ！ もっとテンション上げろっ！！」

「だが断る」

「断るなっ！！」

「ニヤアツ！！」

「邪魔っ！！」

「ウザイ」

次元世界の魔導師を含め、トップクラスの實力を持つ故か、漫才？
をしながらも襲い掛かって来たバケネコを逆鬼は烈撃で、リュウ
ガはドラグクローを使って殴り飛ばした（リュウガの言葉が酷かつ
たり、バケネコの毛が真っ黒に焦げているのはスルー）。

「あー、もういいや。錬矢、援護頼む」

「了解」

逆鬼は殴り飛ばされた一体のバケネコに爆鼓を取り付け叩く。

その間リュウガは起き上がろうとしているもう一体に、ドラグクローの鉄拳（？）を喰らわせた。

そして音撃を叩き込むと、逆鬼はリュウガが押さえ付けている（何故か四の字固め）バケネコにも爆鼓を取り付け音撃を叩き込んだ。

バケネコを倒した二人は、今もドラグブラッカーと戦っているオトロシを見上げた。

「さーて、どうすつかなあ……」先程も言ったように、逆鬼はオトロシと戦った事がない。故に、対処の方法も知らないのだ。

「あーお前初めてだったな。あの魔化魍、オトロシは背中の中の甲羅が硬くてな、非常に厄介な奴だ。だがあれを見る」

リュウガはそう言って指差す。その先にはオトロシの甲羅、にある巨大な目であった。

「あそこが弱点だ」

「なるほどな」

リュウガの説明を理解した逆鬼は烈波を構える。

「んじゃ行くか」

そう言うとリュウガは駆け出し、逆鬼は烈波をオトロシの甲羅の目に向け、烈波の上部にあるスイッチを押してから発砲。

すると烈波から赤い弾丸　鬼石が発射され、オトロシの甲羅の目に着弾。オトロシは声を上げ、甲羅の目を閉じた。

逆鬼はすぐに装備帯に吊してた【音撃鳴・爆鳴】を烈波と合体させ、音撃モードに移行する。

「音撃射・爆風烈波ッ！！」

音撃射・爆風烈波

逆鬼が音撃を奏でると、それに反応してオトロシに撃ち込まれた鬼石が発光し、爆発を起こした。

『ノオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！』

爆発により甲羅の片方の目を潰され、オトロシは声を上げてのけ反る。が、その方向には、サドスティック星の帝王リュウガが居た。

《FINAL VENT》

ドラグブロッカーがリュウガの周りを飛び、リュウガの身体がゆっ

「はぁッ!」

後は帰るだけ、そう思いリュウガは変身を解こうとカードデッキに手を掛け、気付いた。

音撃を叩き込んでいる逆鬼に、うっすらと巨大な翼が見えたのだ。

翼だけではない。逆鬼の身体にも鎧のような物が陽炎のように見えた。

「はぁッ!」

そうこうしている中に逆鬼は音撃を叩き終え、オトロシは爆散した。

「ん? 錬矢、どした?」

逆鬼はリュウガに声を掛ける。どうやら先程の事は気付いていないよ、リュウガは「なでもない」と答えた。

(今のは何だった? 逆鬼は気付いてないようだし、俺の見間違いか・・・?)

「・・・なあ、錬矢」

「ん？ なんだ？」

「お前見た目違うね？」

「って、今更かよっ！！」

ちょうど同じ頃、蒐集のため別世界に行っていたヴェータが闇の書を持っていたのだが、『巨大な翼を持った逆鬼』を錬矢が見えた時、闇の書が脈打っていたのは、誰も知らなかった……。

十四ノ巻に続く。

十三ノ巻『過去・後編』（後書き）

約3週間ぶりの更新、遅れてすみません。夜勤だったもんで・・・

これから展開が早いかも知れませんが、これからもよろしくお願ひ
します。

byフロスト

十四ノ巻『堕ちる逆鬼』（前書き）

すみません。本当ならもっと早く投稿できるはずだったのですが、確認中に書きたい事が増えまして、遅くなりました。

そして昨日は超・電王のディエンド編の公開。絶対見るぞー！！

十四ノ巻『墮ちる逆鬼』

「あああああああああああつ!!」

海鳴のとある山中……そこに逆鬼は居た。

いや、逆鬼だけでない。

『ピイイイイイイイイイイイイイイイッ!!』

『モオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

『ガアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

迫り来る鋸のいかりのような尾、巨大な針、火球。

逆鬼は鋸の尾を前転して避け、針は左手に持った音撃弦で弾き、火球は【鬼鬪術・紅蓮脚】で粉碎する。

逆鬼と対峙しているのは、『イツタンモメン』『ヤマアラシ』『カ
エングモ』の三体の魔化魍……。いや、三体だけではない。

他にもツチグモやユキグモ、バケネコ、バケガニ、『カップ』『ド

ロタボウ』 『ヌリカベ』 『ヤマビコ』 『オオアリ』。

空にも『ウブメ』や『オオクビ』など、様々な魔化魍がそこには居た。

逆鬼から少し離れた場所には、鍊矢が変身したリュウガがドラグセイバーを振るい、空中ではドラグブロッカーが黒炎を放ち、空に居る魔化魍を落としていく。

何故、逆鬼達は大量の魔化魍と戦っているのか？ それは数日前に遡る……。

前回の魔化魍退治の後、サカキは例の刀を持って、八神家に帰宅し、自分の部屋のベットに寝転がっていた。

(結局これ、分かんなかったんだよなあ……)

サカキはこの刀は誰が作ったのか分からないままであった。

「……………ま、いいや。寝よ」

サカキは考えるのを放棄し、刀をテーブルの上に置き、ベットに身体を静める。

(明日は昼まで寝る。はやてが起こしに来てもし起きないぞ……………)

眠りにつくサカキ。だが翌日の朝、すぐに目が覚めた。一階が騒がしいのだ。

サカキは一階に降り、目を擦りながら、ちょうど居たシャマルに声を掛けた。

「どうしたシャマル、また料理に失敗したかあ？」

「サカキ君っ！ はやてちゃんが……………はやてちゃんが……………!!」

『はやてが倒れた』。その言葉を聞いたサカキの頭は覚醒した。

直ぐに掛かり付けの病院にはやてを連れて行き、担当の石田医師に診断してもらった。

「……………うん。特に異常はないようね」

石田医師はそう言い、はやてに当てていた聴診器を離す。

それを聞いて、サカキ達はとりあえず胸を撫で下ろした。

ちなみに、ここに居るのはサカキ、シグナム、シャマル、ヴィータでザフィーラは病院の外である。

「もう、ただ胸と手がつっただけなのに、みんなが大騒ぎするから。すいません、石田先生」

謝るはやてに、石田医師は「いいえ」て答えるとシグナムとシャマルを呼び病室を出る。

その間病室に残ったサカキ、はやて、ヴィータの三人は簡単な会話をする。

暫くすると、シグナムとシャマルが戻って来た。

「主はやて、石田先生が暫くの間診察したいそうなので、入院する事になりました」

「ええー、入院かあ？」

シグナムが石田医師から言われた事を伝えたと、はやては顔をしかめた。

「でもはやてちゃん、今は大丈夫でもちゃんと診てもらわないと」

「んー、でも入院するとみんなのご飯作れなくなるし……」

自分の身体より、サカキ達の食事を心配するはやて。

それにサカキ達は苦笑するしかなかった。

「シグナムとヴィータ、ザフィーラは料理出来へんし、サカキはどんな料理しても焼きうどんになるしなあ」

「あの、はやてちゃん・・・私は？」

「大丈夫だつて。いざとなったらレトルトで」

「あのぉー、もしもーし」

「レトルトはあかんて。せやから」

「あのぉー」

「はやて、大丈夫だつて。サカキの焼きうどんは旨いし。それよりはやてはちゃんと休まないとダメだつて」

「あの」

「うー、分かったわ。せやけどいざとなったら出前頼んでなあ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・皆、

酷いっ！ー！」

「・・・・・・・・・・最後に言っておく。この話のシャマルは料理が壊滅的にダメだ」

「サカキ、誰に言つとんのや？」

こうしたやり取りの後、サカキ達は病室を後にした。

だが、誰も気付いていなかった。

「ぐっ………うう………ああ………っ!!」

一人になった病室で、はやてが胸を押さえて苦しんでいた事に……。

八神家に戻った四人と一匹(?)は、家のリビングに集まっていた。

「正直に答えてくれ。………はやてが倒れたのは、闇の書のせいなのか」

「………ああ」

サカキの問いに、シグナムが重々しく答えた。

今、リビングは重い空気が支配しており、シグナム達守護騎士は全員俯き、サカキはシグナム達を真っ直ぐ見据えていた。

「闇の書の主のリンカーコアへの侵食が早くなってきている。このままでは、主は……………」

「……………そうか」

それを聞いて、サカキはソファーに座り込み頭を抱える。

話を聞いた時からこうなる事は、遅かれ早かれ分かった事じゃないか。それが速まっただけだ……………頭の中で必死にそう考え、冷静になろうとする。だが、簡単に割り切れる事ではない。

「糞……………っ!!」

はやては、何故か現代に来てしまった自分を助けてくれた恩人であり、鬼である事を知っても接し方を何一つ変えなかった人間だ。

なにより、約半年間を一緒に過ごし、サカキにとっては実の妹のような存在であった。

だが、だからと言って闇の書を完成させるべきなのか？ 鬼としての、戦いの中に居た者としての“勘”が、警告を鳴らしていた。

(どつすりゃあいいんだ……っ!?)

サカキは頭を抱える。すると、今まで黙っていたヴィータが重々しく口を開いた。

「……………サカキ、蒐集手伝ってくれよ」

その言葉に全員驚くが、ヴィータは続ける。

「そのままじゃ間に合わないんだ。だから」

「ヴィータっ!」

「そのままじゃ、このままじゃはやてがっ!」

ザフィーラの制止も聞かず、ヴィータはサカキに詰め寄る。

ヴィータはサカキを巻き込みたくはなかった。一度管理局の邪魔をしたとはいえ、自分達と比べれば軽い。このまま介入しなければ、もし捕まったとしても、そこまで重い罪にはならないだろう。だが……もう余裕がないのだ。

シグナム達も、巻き込みたくはないと思っていたが、サカキの實力はかなり高く協力してくれれば今より蒐集のペースは上がる。その考えが頭の隅にあるため、ヴィータを本気で止める事が出来なかった。

また、サカキも答える事が出来ない。

どうすればいいのか……。それに答えたのは、サカキでもシグナム達でもなかった。

「悪いが、出来ない相談だな」

全員が声のした方向……リビングの入口を見る。そこに居たのは、いつも通り、サングラスと黒一色の格好をした錬矢が立っていた。

「何なんだテメエ……!!」

いきなり現れた錬矢を、ヴィータは今にも襲い掛かりそうな形相で睨む。

だがサカキが止める。

「待てヴィータ、コイツは敵じゃない。……よく分からな

「奴だけだな」

事実、錬矢と出会って暫く経つが、謎の事が多い。故に、サカキはこう言ったのだ。

それを聞いたヴィータは素直に従う。……睨んだままではあるが。

他のメンバーも一応構えるのを辞め、警戒だけする事にした。

「……………どういう事だ」

「言ったままの意味だ」

先程、錬矢が言った言葉の意味をシグナムが聞くと、錬矢は即答する。

「あの、だからどういう意味なんですか？ よく分からないんですけど……………」

「あー、それもそうだな」

錬矢の言った意味が理解出来ず、今度はシャマルが質問する。

錬矢は頭を掻きながら、詳しく説明する事にした。

「まず魔化魍については、サカキから聞いてるか？」

シグナム達は頷く。サカキが鬼である事を聞いた時に聞いており、最近出始めた事も聞いていた。

「まあそれで、最近どうも多い。しかも夏にしか出ないやつも出る。それで気になって調べてみたんだが……」

それはサカキも気になっていた事だった。最近、魔化魍の出現頻度が多い。さらに、夏の時期にしか出ないはずのバケネコまで出て来た。これは明らかに異常であった。

「べつやら、『オロチ』が原因らしい」

『オロチ』ってのは二つある。

まず、昔サカキ達鬼が戦った魔化魍としての『オロチ』。

もう一つは時期とかを無視して大量の魔化魍が発生する、現象としての『オロチ』だ。

そんでもって、この海鳴市の海の底に、『魔化魍のオロチ』が封印されてんだ。だが半年前、どっかの馬鹿がオロチが封印されてる所の近くで、大規模な魔力を発動させやがった。そのせいでオロチの封印が弱まって、『現象のオロチ』が起こってんだ』

「あああつ！ 何処の誰だつ！！ んな事やったのはっ!？」

冒頭に戻り、逆鬼は迫り来る魔化魍を音撃管で銃撃し、音撃弦で切り裂きながら愚痴った。そして泣き出すまでお仕置きしてやる、と心の中で誓った。

「ッ!?!?」

「ふえ? どうしたのフェイトちゃん」

「な、何か寒気が……」

「風邪? 保健室行く?」

「ううん、大丈夫」

場所は戻って山中。逆鬼は音撃管を数体の魔化魍に向け、鬼石を発射する。

バケネコやカツパなどにも当たったが、『オロチ』で発生した魔化魍は通常より耐性が低いため、どの音撃でも通用する。

鬼石が当たったのを確認すると、装備帯に吊していた音撃鳴を音撃管に合わせ音撃モードにし、魔化魍に向かって吹き鳴らす。

すると鬼石が当たった魔化魍は、鬼石の爆発とともに四散。逆鬼は息する間もなく、今度はリュウガが相手している魔化魍に向かって行った……………。

魔化魍を退治したサカキと錬矢は、すぐにあの場を移動していた。留まる理由がないのもあるが、一番は管理局に見つからないためである。

ソラ経由の情報で、サカキと錬矢は管理局に目を付けられている事を知った。

サカキは狙われる事は慣れてるし、錬矢は『出し抜く方法はいくらでもある』というふうに、二人としては何ら問題はなかったのだが、魔化魍は違う。

魔化魍は本能で動いているため、人目を気にしない。もし魔化魍が管理局に見つかれば、管理局は捕まえて解剖・調べようとする。だが魔導師とて、魔化魍からすればそこら辺の“餌”と代わらない。必ず魔化魍を捕獲しようとした魔導師は、魔化魍の栄養に早変わりするだろう。

そうになると、そんな危険な存在を管理局はどうするか？ 答えは発生する世界ごと消そうとする。勿論、何らかの隠蔽をした上で、だ。管理局とはそういう組織だ。（鍊矢談）
そして、変身したサカキ達を見たら管理局はどう思うか？ 何かと戦闘していたと思うだろう。表舞台に出ていないとは言え、鬼と魔化魍の存在は何らかの形で残っている。故に、逆鬼という鬼の存在から、魔化魍の存在を知られないために管理局に見つからぬよう、動いているのだ。

「……………今回ナレーション長いな」

「鍊矢……お前何言ってるんだ？」

「いやちよつと」

などとメタ発言をしながら、鍊矢の車に乗って移動する二人。

ちなみにソラとキバットは居ない。

前回、逆鬼とリュウガがオトロシと戦闘してた頃、シグナムと戦闘していたフェイトが檜山ボイスの謎の男の奇襲に合い、リンカーコアを蒐集されたため、アースラでの待機となったようで外に出られなくなったのだ。

サカキは鍊矢に冷ややかな目を送りつつ、両手に持った音撃棒に視線を移す。

「ん~~~~」

「どした」

「いや……………烈撃がちよつとなあー」

音撃棒を持つて微妙な声を出すサカキに、錬矢は目だけを動かし、一見してすぐ前に戻した。

「音撃棒、限界か？」

「ううー、そろそろ変えようと思ってた時にこつち来たからなあ」

音撃棒の先端で頭を搔くサカキ。

音撃棒は弦や管と違い、先端の鬼石以外は木で出来ている。さらにそこら辺の木ではなく、神木や霊木と言った木が使われる。サカキが元居た時代では、山の中に入れば直ぐ手に入ったのだが、今の時代ではそうもいかない。それ故に、サカキは悩んでいた。

「錬矢ー、お前なんかいい木持つてねえか？」

「アホ、流石に無理だつーの。」

……………てか、お前はやてちゃんのお見合い、じゃなくしてお見舞い行かなくていいのか？ 今日クリスマスイブだし」

「あ……………」

実は、サカキは現在入院中のはやてのお見舞いに一度も行ってない。ついでに言えば家にも戻っていない。それだけ魔化魍退治が忙しいとも言える。

「今日はもう出ないだろうし、行ってみたらどうだ？」

「あー、そうすっかな。てか錬矢」

「ん？」

「クリスマススイブってなんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あー、お前クリスマスない時代の生まれだからな」

「……………なして？」

鬼小僧サカキがそんな事を言う。でも、仕方ないと思う。

だって、俺も言いたいもん。

俺達はあその後、クリスマス用のプレゼントを買って病院に来た。それではやてちゃんの病室に来た。来たのはよかった。

だが……………何この状況？

はやてちゃんが座ってるベットを真ん中に、窓側に守護騎士メンバー。そして廊下側に、管理局魔導師の栗色ツインテールの子と金髪ツインテールの子、ブラウンの髪の子と紫の髪の子の小学校仲良し組（予想）。俺とサカキが入口につっ立ってる。

事情を知らないはやてちゃんを含めた三人は、普通につっか、はやてちゃんが俺とサカキの事を説明してる。

つか、紫の髪の子は知り合いなのね。さっき『サカキ君』って言うてたし。

ていうかこの子……………まあいいや。

問題は他だ。

恐らくは偶然だろう、仲良し四人組ではやてちゃんのお見舞いに来たんでしょ。それで守護騎士メンバーが先にお見舞い来てて……………何このカオス？

守護騎士メンバーと管理局魔導師の子達、かなり動揺してるもん。
ヴィータちゃん睨んでるし。

「おっす、はやて」

そして、サカキっ！ お前は何で普通っ！？ 最初の『なして？』
はなんだっ たんだっ！？

「おっす、はやて」

サカキは片手にクリスマスプレゼントを持って、はやてが座っているベットに近づいて行く。

最初病室に入った際、ヴィータがなのはとフェイトを睨んでいたの
で、『なして？』と言った。だがヴィータは元々目が鋭かったので、

あまり気にしない事にした。

「ちょっと久しぶりやね、サカキ」

「だな。悪いな、来れなくて」

「ううん、忙しいんならしゃあないよ」

サカキは「それでも悪い」と言った後、すずか達を見る。

「で、どちら様で？ すずかは知ってるけど」

「あ、うん。左から、アリサちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん。みんな、わたしのお友達だよ」

「ん、俺はサカキだ。よろしく！」

「アリサ・バニングスよ。アリサでいいわ」

「た、高町なのはです・・・」

「ふえ、フェイト・テストロッサです・・・」

挨拶して『シュッ！』とするサカキにそれぞれ挨拶するアリサ達。

サカキはなのはとフェイトが“何故か”歯切れが悪いのか気になっ

だが、色々あるのだろうと思い、聞かなかった。
ちなみに、サカキはいちいち負かした相手を覚えぬ主義である。

「ん、アリサに双馬一号二号だな」

『双馬つて何っ!?!』

「ツインテールだから双馬。問題ないな」

「問題あるよっ! 私はなのはだよ、な・の・はっ!?!」

「分かってるって、双馬一号」

「だあかあらあー!?!」

「あなた、いい性格してるわね」

「いやー、よく『性格が良い』って言われるよ」

「それ180度意味違っからっ!?!」

「ねえすずか、これってあだ名なのかな? 私、そっ言っの初めてだから」

「フェイトちゃん、絶対違っから」

二人はイジると面白いと本能的に悟ったサカキに、なんとか修正しようとするのは、アリサがツッコみ、フェイトの天然に笑顔で優

しく否定するすずか。

「だからのはって呼んでっばっ!!」

「だがことわ」

「ドアホっ!!」

「グハッ!？」

まだ続けようとするサカキに対し、今まで沈黙していたはやてがハリセンを取り出し、バカ鬼をシバく。

「みんなゴメンなあ、うちのバカがアホ言つて」

()(あぁ、またか)()

申し訳ないという顔で謝るはやて。その下では鬼が沈んでいた。そして守護騎士メンバーは慣れていた。

『.....えええええええええええええええええええええつ

!??』

「あははは、最初は驚くよね」

「だよなー。つか、すずかちゃんだっけ？ 慣れるの早いねえ、お兄さんびっくりだ」

「まあ、一日中見てれば………と、というか、まだ名前聞いていませんでしたよね？」

「あ、うん。俺、空気だったもんね。エアだったもんね。でもいいの、だって主役あいつ（サカキ）だし。ほら、タイトルにだって『逆鬼』ってあるし」

「何言ってるんですかっ!?!?」

何故こうなったのだろう………。

何故こうなってしまったのだろう………。

何故………。

とあるビルの屋上。アリサとすずかが帰った後、はやてを除いた病室に居たメンバー、そしてフェイトから連絡を受け転送されたソラとキバットは、ここで激突していた。

なのはがシューターを放ち、ヴィータがグラーファイゼンを振るう。フェイトが防御力を徹底的に削ぎ落としたソニックフォームになり、シグナムと正面から激突する。

そしてサカキとソラ……逆鬼とキバも、戦いを繰り広げていた。

キバは最大の持ち味のスピードを使うため、空中にキバの紋章の足場を作り縦横無尽に跳び回る。

対する逆鬼は、今までの経験を元に、キバの一閃をかわし音撃棒を構え一撃を叩き込む一瞬を狙う。

一方、錬矢は手を出さない。いくら暴虐非道、ドSな彼も、一対一の戦いに水を差すような真似はしない。

(やはり、戦うしかないのでしょうか……?)

戦いの中、キバ……ソラは迷っていた。

立場上、彼(逆鬼)と戦わなければならないのは分かっている。

(……あの方とは……あの人とは……)

戦いたくない。刃を向けたくない。今こうして刃を振るう度に、胸が締め付けられる。

何故、彼と戦うのが、こんなにも苦しいのか……。それは、その気持ちは、今のソラには分からなかった……。

キバの動きには、いつものキレがない。

本来の逆鬼であれば、その隙を狙い仕留める事が出来た。だが今の逆鬼には出来なかった。それは、逆鬼にも迷いがあるからだ。

(何とか……。何とか動きを止める事は出来ねえか……。？)

逆鬼は、キバの動きを止める方法を考えていた。

今までの逆鬼なら、こんな事は考えなかった。現に相手がなのはやフェイトだったら、首を掴んで捻るだけだった。

例え相手が子供だろうと、敵に情けを掛ける必要はない。武器(殺し道具)を向けていいのは、“覚悟”がある者だけなのだから。

だが逆鬼には、キバ(ソラ)を殺す事……。敵と認識するなと出来なかった。

何故なら、彼女とその相棒キバットもまた、はやてや守護騎士達と同じく、彼の大切な『荷物』の一つだからだ……。

故に逆鬼は、はやてが闇の書の主である事が知られた今、この事実を知っている者全員を始末し、ソラとキバットは殺さず捕らえようと考えた。

(あーあ、拘束魔法とか使いりゃよかつたんだがなあ)

逆鬼たち『鬼』は、『気力(もしくは鬼力)』を使い、鬼への変身、鬼闘術や鬼法術を発動している。

だが『気力(鬼力)』は『魔力』と違い、身体から離れると力を失いたため魔力のようにには使えなかった。

(ちっ、無い物ねだりしてる場合じゃねえか)

逆鬼は心の中で舌打ちすると、再びキバの捕獲方法を考え始めた。

聖夜の前日に起きた激戦。だがDSすら手を出さなかった戦いに、水を差す輩が居た。

「きゃっ!?!」

「なっ!?!」

突然、逆鬼とキバの身体をバインドが縛る。よく使われる輪型のバインドやチェーン型など、数種類だ。

「ちい………っ!?!」

鍊矢も逆鬼とキバと同様に、複数のバインドで縛られていた。他の面々も三人程ではないが、バインドで縛られている。

「お前達は念入りだ」

声が聞こえ、全員が空を見ると、そこには仮面の謎の男が居た。しかも二人。

「二人居たのか……！！？」

仮面の男が二人居たことに驚くフェイト。

「闇の書、蒐集」

《蒐集》

一人の仮面の男が手を上げると、そこにはシグナム達が持っていたはずの闇の書が現れた。

闇の書から無機質な声が聞こえると、シグナム達の胸元から光の球リンカーコアが現れ、シグナム、シャマルのリンカーコアは闇の書に吸収された。

「ぐあああああああああああああああああああつ!!！」

「ぎゃあああああああああああああああああああつ!!！」

「シグナムっ!! シヤマルっ!!！」

『っ!!！』

リンカーコアを吸収され、元々プログラムであった彼女達は消える。残されたのは、彼女達が着ていた私服だけ……。

ヴィータは二人の名を叫び、なのはとフェイト、逆鬼とキバはその光景に目を見開き、練矢は仮面の男達を睨む。

「なんなんだテメエらっ!?!」

「プログラム風情が、知る必要は無い」

「次はお前だ」

仮面の男達はヴィータの怒声を一蹴すると、浮遊魔法でヴィータを浮かせ、ヴィータのリンカーコアを蒐集しようとする。

「はあああああああああああつ!!！」

その時、他世界に蒐集活動をしていたザフィーラが駆け付け、仮面の男に拳を振るう。

「もう一匹居たか」

だが、ザフィーラの拳は仮面の男の一人が展開したホイールプロテクションに阻まれ弾かれる。

さらに、もう一人の男に蹴り飛ばされビルの屋上に落とされる。

「まだか」

「待て、もう少しだ」

男が魔法陣を展開すると、バインド縛られた逆鬼、キバ、錬矢、なのは、フェイトが消え、代わりに病院に居たはずのはやてが転送されて来た。

同時に、男達は光に包まれバリアジャケットの印象が違う、なのはとフェイトに変わった。

「へ？ ここ……ザフィーラっ!!」

突然病室からビルの屋上に移動し驚くはやては、ザフィーラが倒れている事に気付き足を引きずりながら近づく。だが

「蒐集」

「ぐあああああああああああああああああああつ!!」

「ザフィーラっ!？」

リンカーコアを蒐集され、消えてゆくザフィーラ。

はやては声のした方向を見上げると、そこにはヴィータを浮かせその両側に立つ仮面の男達が化した偽なのはと偽フェイトの姿が……。

「なのはちゃん……? フェイトちゃん……?」

ザフィーラをどうしたん? ヴィータに何してるん?」

偽者とは知らず、二人に問うはやて。だが、彼女は気付いてしまった。自分のすぐ近くに、シグナムとシャマルの衣服が落ちている事に……。

偽なのはと偽フェイトは手に魔力を込め手刀を作ると、ヴィータに振り下ろそうと構える。

「やめてえええええええええええええええええつ!!」

はやての悲鳴が響き渡ったと思ったら、はやてが黒い光に包まれ、光が晴れるとそこには、銀色の長い髪、漆黒の衣服を纏い、身体には戒めるような赤いラインとベルト。漆黒の翼をはためかせている。その名は……『闇の書の意志』。

闇の書の意志は、血のように紅く染まった瞳を開き、涙を流す……。

闇の書の意志の出現に、なのは達はそれに目を奪われる。

なのはとフェイトは、その強大な魔力に。キバはその悲しそうな瞳と、涙に目を奪われた。

だが二人、闇の書の意志を見えない者が居た。逆鬼と錬矢だ。

錬矢は闇の書の意志が現れた際、なのはとフェイトの擬態を解いた二人の仮面の男を、それだけで殺せるのではないかと思える形相で睨んでいた。

（あいつら、塵一つすら残さず“消して”やるのか……！！）

自身の体を縛る物を破壊するため、動こうとする。刹那　沸騰しかけた錬矢が瞬間的に我に返ったのは、自分以上の憤怒を感じたため

「……………してやる」

逆鬼は体を縛る縄を引きちぎると、仮面の男達がいる場所へと跳んでいった……。

擬態を解いた仮面の男達は、闇の書の意志から場所へ移動した。

「覚醒したか」

「ああ。『デュランダル』は」

「準備は万全だ」

そう言つと、懐から金属のカードを取り出す。だが直後、それは現れた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

「なっ!?!」

『激情態』となった逆鬼が、跳躍して来た勢いのまま男の一人に襲い掛かる。

男と組み合ったまま、逆鬼・激情態はビルに激突。男は離脱しようとするが、逆鬼が男の仮面ごと顔を掴み、逃げられない。

「グルルル……………!!」

「があああああああああつ!!」

逆鬼は男の顔を握り潰そうとする。

「はっ!?!」

残ったもう一人は仲間を救出しようと、逆鬼に飛び蹴りをする。だが、

「……………つ!!」

「なっ!?!」

男は目を疑った。何故なら、本来、逆鬼を狙ったはずだった蹴りは救出するはずだった男に入っていたからだ。しかも、逆鬼の姿がない。

「ど、どこに………上っ!!」

「G A A ツ!!」

男は上を見て逆鬼を発見する。だが、遅い。逆鬼は、男達に向かって“着弾”した。

「ふっ」

一方、残された錬矢達は、錬矢が（素手で）バインドを破壊していた。

「ありがとうございます。錬矢様」

「おおう。でなのはちゃんとフェイトちゃんは……………」

錬矢は二人を見て……………思わず納得してしまう。

なのははその場に座り込み、フェイトは震えていた。無理もないだろう。まだ9歳の彼女達には、逆鬼が発した殺気は耐えられない。

錬矢はしかないと言うふうに頭を掻き、しゃがむと二人の肩を掴んで揺らした。

「おいっ」

「は、はいっ!?!」

「二人はあつちの方頼むわ」

そう言って闇の書の意志が居る方を指差す。そして立ち上がり、今度はキバを見る。

「ソラとキバットは、俺と一緒に逆鬼の方だ。ライダーにはライダ

「じゃないとキツイ」

「はい」

「心得た」

一人と一匹の返事を聞いた錬矢は、顎に手を当てて考え始める。

「さて……ラハブは温存するとしてリュウガは飽きた。G
4は“魔”改造中だし……これで行くか」

錬矢は自分の影に手を突っ込み、影の中から『SMART BRA
IN』とロゴの入ったアタッシュケースを取り出した。

なのは達が驚いているが、錬矢は構わずアタッシュケースを開く。
中には金属のベルトと短剣が入っている。

ベルトを装着し短剣をベルトの右側につけ、懐からケータイを取り
出し『000』を押し『ENTER』ボタンを押す。

《Standing by》

「変身っ!!--」

《Complete》

ケータイ 【オーガフォン】をベルトに差し込み、倒すと、ベルトから金色のラインが伸び錬矢を包み輝く。
そして輝きが納まると、金色のフォトンストリームに黒の鎧とロブ。『』を模った戦士、『仮面ライダーオーガ』がそこに居た。

「よしっ」

右手をスナツプさせ、感度を確かめるオーガ。周りがハトが豆鉄砲を喰らった顔をしていたが、とりあえず無視する。

「んじゃ、二人は危なくなったら無理せず逃げろよ。
ソラ、行くぞ」

「あ、はいっ！」

オーガは一気に跳躍し、逆鬼が跳んでった場所に向かう。
キバも慌てて返事をし、オーガの後を追いかける。
その場にはなのはとフェイトの二人が残された。

「……………フェイトちゃん」

「……………うん」

「錬矢さんって、優しい人だったね」

「うん、そつだね」

オーガとキバが跳んでった方向を見つめ、ついさつき思った事を口にする。

二人の錬矢の第一印象はあまり良くなかった。常にサングラスを掛け、全身黒づくめ。クロノやリンディから『要注意人物』と言われていたのも手伝い、『とても恐い人』というのが二人の印象だったが実際はよく笑い、人を笑い、からかい、イジメ、弄び……。で恐いが、なのは達がはやてのお見舞い中にウサギのリンゴやジュースをご馳走してくれた。今も、二人の身を案じて無理はするなど言った。

そんな事から、二人の錬矢の印象は『とても恐い人』から『優しいけどやっぱり恐い人』になった。

「それで、あの子……。サカキ君の事なんだけど……」

「……うん」

二人は先程の、激情態となった逆鬼を思い出す。

『怒り』を形にしたような悪鬼のような仮面……。再び震えるが、それを抑えてなのはは意を決して口にする。

「……私、友達になりたいんだ！ さつきは驚いちゃったけど、きつとあれが本当のサカキ君じゃないよ！」

脳裏浮かぶのは逆鬼・激情態ではなく、病室で楽しそうに笑っていたサカキ。

なのはは『それに、ちゃんと名前で呼んでほしいし』と微笑む。

「……………そうだね。私も友達になりたい。それに、名前で呼んでほしい……………」
『フェイト』って

「うん！」

二人向き合って笑うのはとフェイト。そして、そのために今のこの状況を何とかしよう。そう、心に誓う。

……………数年後、『お友達』が『絶対的な上下関係』になるとは、まだ誰も知らなかった。

《……………バルディッシュ、なにやらおかしな事が聞こえたのですが……………私、故障したのでしょうか》

《安心しろ、私も聞こえた。Sir達は……………ああ、また二人だけの世界に》

《将来が心配です》

「このままだと完全にI K I O K U R Eだな。とゆうか、公式で百合だし」

「………錬矢様？」

「あ、すまん。ちょっと電波が」

こちらは逆鬼の元へ向かうオーガとキバ。オーガのメタ発言が気になりつつ、キバはある事を聞いた。

「あの、錬矢様。その鎧は一体………」

キバが聞いたのは【オーガギア】の事だった。彼女はキバ以外のライダーを知らず、地球に来て初めて他のライダーを見たのだが、錬矢が複数の変身ツールを持っているのは知らなかった。

「こいつはオーガ。ある企業が作ったライダーで、二つある『帝王のベルト』の一つだ」

『ちなみに貰い物』と言うオーガ（錬矢）。だが本来、オーガを含めた『ファイズライダーズ』は『オルフェノク』と呼ばれる怪人しか使えない筈なのだが……。

「んっ!?!」

「どうされました?」

「ちとマズいな……急ぐぞっ!」

速度を上げビルの屋上を跳躍して行く。

その先で、何が起こっているのか……??

立ち上がった砂煙が収まり、そこに居るのは激情態となった逆鬼と二人の“女性”の姿が……。

二人の女性の名はリーゼアリアとリーゼロッテ。ギル・グレアムの使い魔であり、クロノの師匠である二人がそこに倒れていた。

二人は先程まで、変身魔法を使い仮面の男になっていたのだが、逆鬼の怒涛の攻撃により魔法が解け元の姿に戻ったのだ。

だが、相手が男だろうが猫女だろうが逆鬼には関係ない。今、目の前で倒れているのがシグナム達を消したのには変わらないのだから……。

逆鬼はトドメを刺そうと口を開け、【鬼火】で焼き払おうとする。だがそれはリーゼ達に放たれなかった。

「ステインガーブレイドッ!!」

「ッ!？」

突如、複数の青い剣が降り注ぐ。

逆鬼は本能でそれを察知し、リーゼ達に放つ予定だった鬼火で焼き払う。

「ロツテっ！ アリアを連れて離脱しろっ！！」

聞こえた声に、リーゼロッテは迷わず痛む身体に鞭打ち、自分よりダメージがあり動けないリーゼアリアを連れて空に上がる。

「なんとか間に合ったようだな」

空に上がったリーゼ達を待っていたのは二人の弟子であり、管理局執務官のクロノであった。

「クロノ……………」

「二人には色々聞きたい事はあるが、まずあれをどうにかしないと……………」

クロノはポロボロだがなんとか無事のリーゼ達を確認すると、視線を二人からこちらを見上げ咆哮している悪鬼 逆鬼に向けた。

「こちら時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだっ！ サカキだつたなっ！？ この二人には色々聞きたい事があるっ！ 出来れば君にも話を聞きたいっ！ 同行を願えないかっ！？」

3メートルはあろう巨体。それを支える巨大な両足。大木のように太い両の手。貫けない物はないのではと思える程鋭く、巨大な二本の角。

そして、巨体を守るように全体に纏われた鎧が鈍く光っていた。

そこに伝説の 『鬼から生まれた魔化魍』、 『牛鬼』 が現れた。

牛鬼

とある列車の中。その車両の一つである食堂車に、二体の異形イマジンがあり、近くに何故か巨大な氷塊がある。

「面倒臭せえ。何で俺がこんな事しなきゃならねえんだ。・・・
面倒臭せえ」

「まあまあ、瞬とオーナーから頼まれたのですから」

象がイメージのイメージ　エレファント・イメージが愚痴り、恐
竜がイメージのイメージ　トレックス・イメージがなだめる。

「たくつ、瞬も瞬だがオーナーもオーナーだ。こんな事したら時の
運行にどんな影響が出るか・・・」

「まあ、確かに。“過去の時間”から人間を連れ出すというのは、
正直ただけませんか」

そう言うと、トレックス・イメージは扉を　今居る食堂車の後ろ
の車両を見る。

エレファント・イメージも一瞬だけ見て、また悪態つく。

「だろ？　それで何かしら影響が出たら俺達が何とかしなきゃなら
ん。　面倒臭せえ」

「そうですね。ゼロノスが何らかの原因で消えてしまい、電王が調
査中の今、我々しか動けません」

「 ですが、これも必要な事です」

二体のイマジンの会話に、一人の少女が加わる。

「 オーナー」

二体のイマジンは声を揃える。

金髪で黒い衣服を身に纏った少女 オーナーは、食堂車に備え付けてあるカウンターに向かい、コーヒーカップを取り出す。

「確かに貴方達の言う事はわかります。ですが、あの方の言う通りなら、時の運行……いえ、私達『撃王の世界』にも影響が出ます。」

そして、『アダム』や『クロウ』、『ギラファ』の世界にも……

「わかってますよ、オーナー。ちょっと試してみただけです」

「どっちにしても、面倒臭せえって事だ」

肩を竦めるトレックス・イマジンと、口癖を言うエレファント・イマジンに微笑み、オーナーはムース状ではない普通のコーヒーを二体に出す。そして、氷塊に目を向けた。

「ところで、瞬とキッドはいつまでこのままなんですか？」

「いいんだよ、コイツ等の自業自得だ」

「さすがの私も、フォロー出来ません」

氷塊の中では、イカがイメージのイメージン スキッド・イメージン、に憑依されてる少年が、『ちよつと待った』のポーズで固まっていた。

「あのバカ、牛鬼になりやがった」

「ねえ、どつするの？」

幽霊列車の中。そこでは空間モニターの映像を見ている男と少女、

そしてゴースト・イマジンと女性が居た。

「いざとなったら私、行くよ？　ね、ゴースト、金剛」

「ああ」

《御意》

少女の問いにゴースト・イマジン　ゴーストと、少女が握っている赤いアクセサリーは答える。
だが、男がそれを止める。

「いや、俺達は手を出さない。あくまで死んだんだからな。
出るとしたら最後だ。それでいいな？　アリシア」

「うー、わかったよ。　カブキ」

十五ノ巻に続く。

十四ノ巻『墮ちる逆鬼』（後書き）

ども、フロストです。読んでいただきありがとうございます。
ここでは、原作とは違う所などを説明します。

・『オロチ』について

これは私の独自解釈で、オロチは最強の魔化魍なので倒せずに封印
……って言うのがあるのでは？と思います。

現象のオロチは前触れで、『コダマの森』というのが発生するの
ですが、封印されているオロチの影響での発生なので無しにしました。

・『気力（鬼力）』について

これは完全にオリジナルです。

簡単に言ってしまうえば、キバの魔皇力のような物です。

『魔力とは別エネルギー』というのはこれになります。

・『逆鬼・激情態』について

これは逆鬼の怒りを分かりやすくするために作りました。『仮面』
ライダーです。

・『牛鬼の形状』について

これは本来の牛鬼だとパンチが弱いので、巨大化&凶暴化しました。
イメージはミノタウロスです。

・『錬矢』について

今回、錬矢はオーガに変身しましたがオルフェノクではありません。
G4はおそらく『Strikes』出るはずですよ。

ではではー

「クロノ様、あとそちらの猫の方々、大丈夫です。この方は味方です」

「猫って・・・ああ。そう言えば初対面だもんね。納得したわ」

名前で呼ばれなかった事に反論しようとするが、初対面である事を思い出し納得するリーゼロッテ。

そしてクロノはオーガの声に聞き覚えがあった。

「その声・・・・・・・・お前はブラックドラゴンっ!!」

バシィィィッ!!

瞬間、オーガはベルト装備している【オーガストライザー】でクロノの頭を叩く。なお、【ミッションメモリー】を装填していないため短剣モードのままだ。

「誰がブラックドラゴンだっ! 体黒光りのガチマッチョじゃねえし、腕もサイコガンじゃねえだろっ!! ああっ!?!」

「いったい何の話だっ!!」

「あ、あの・・・・・・・・ッ! 避けて下さいっ!!」

オーガとクロノの言い争いにキバが仲裁に入ろうとするが、何か
に気付き叫ぶ。

それを聞き、全員がその場から跳び退く。直後、先程までオーガ
達が居た場所を何かを通り過ぎ、その下にあつたビルを倒壊させな
がら落ちた。

「おいおい、あのデカさで跳べんのかよ……………」

近くのビルの屋上に着地し、オーガは呟いた。

同じビルにキバ、クロノ、リーゼ達も居る。

ビルが建っていた場所に、落ちた何か　牛鬼がこちらを見据え、
唸り声を上げていた。

どうやら、オーガ達を敵と認識したようだ。

「じゃあね。おい、黒いのと猫二匹、あとソラもだ。全員逃げろ、
俺が足止めする」

《Ready》

オーガフォンについているミッションメモリーを、オーガストラ
イザーにセットし、長剣モードにする。

「待って下さい。いくら鍊矢様でも、一人では……………」

「そうだ、お前の力がどれ程のものか知らないが」

「お前ら居ても、足手まといなんだよ」

キバとクロノの言葉を遮るように、オーガは言い放つ。それでクロノの顔が険しくなるが、言葉を続けた。

「牛鬼には、音撃以外は効かないんだよ。もちろん魔法もな」

「待って下さいっ！ それではまるで」

「ああ、牛鬼は魔化魍だ」

キバは、驚愕の事実には呆然とするしかなかった。

「それに、お前はその猫供をシバくんだろ？　なのはちゃん達も頑張ってたんだ、お前は自分のやるべき事をやれ」

「……………分かった」

そう言つと、クロノは転送準備を始める。
そして、オーガはキバを見る。

「ソラ、お前も」

「嫌です」

「黒いのと一緒に……っではあっ!？」

オーガは驚く。キバはオーガではなく、牛鬼を見据えていた。

「嫌ですっってお前な……」

「確かに、未熟な私では錬矢様の足手まといになるかもしれませんが」

キバは静かに、雪月牙を抜刀する。

「私も、『仮面ライダー』ですから」

キバのその言葉に、オーガは『はあ』とため息を吐いて頭を掻くと、オーガストライザーを一振りし牛鬼を見据えた。

「しょうがねえな。……怪我しても知らねえぞっ!！」

「はいっ!！」

た。

「ソラっ！ 手数増やすぞっ！！」

「はいつ！！」

ベルトにぶら下がっているキバットに比べ、キバはベルトの右側に備え付けてある三つのフェッスルの内、蒼い鳥の頭の形をしたフェッスルを取り出し、キバットに吹かせた。

「スカイファルコンッ！！！」

キバットがフェッスルを吹き、鳥の鳴き声のような音色が鳴り響くと、空にキバの紋章が現れ、そこから巨大な鳥　ファルコ族のスカイファルコンが飛び出した。

「ピイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！！！」

呼び出されたスカイファルコンは急降下し、牛鬼に体当たりする。

急降下によってスピードの乗った体当たりには、死角からの攻撃もあつて牛鬼は怯む。

スカイファルコンは体当たりすると一度上昇し、再び急降下し体

当たりする。

スカイファルコンが牛鬼の注意を引いているうちに、キバは別の
紅い獅子の頭の形をしたフェッスルを取り出した。

「続けて行きますっ！」

「応っ！ レオクローツ！！」

キバットがフェッスルを吹くと、獅子の雄叫びのような旋律が響
き渡った。

第1管理世界・ミッドチルダ。

聖王教会に程近い森の中……。

その木の根元に、紅い獅子のような怪人 ライオ族のレオが

座っていた。

レオは微動だにせず静かに座っていると、彼の耳に、自分を呼ぶフエッスルの旋律が聞こえた。

「……………ファルコンだけでなく、ワシもか」

レオは重い腰を上げ、立ち上がると、紅い彫像に姿を変え、彼方へと飛んでいった……………。

空中に再びキバの紋章が現れ、そこから紅い獅子の彫像が飛んで来た。

彫像は二つに分かれ、一对の爪になりキバの両手に装着されると、両爪から鎖カテナが伸び、キバの両腕、肩、胸を包む。

鎖が弾け、鎖に包まれていた部分が紅く染まっている。

そしてキバの複眼が紅く輝き、キバは『キバ・レオフォーム』に

牛鬼の拳がキバLFに入り、キバLFは吹き飛ばされ、その先にあ
る建物に激突する。

よろよると立ち上がるキバLF。だがすぐに雄叫びを上げ、牛鬼
に突っ込んで行く。

(おいおい、もしかして使いこなせてないの catt!?)

今までとは明らかに戦い方が違うキバに、オーガは危機感を覚え
た。

ソラが装着している『蒼剣のキバ』と同じように、『黄昏のキバ』
も『アームズモンスター』の力を借りフォームチェンジする。

その際、アームズモンスターの影響で装着者の性格も変化するが、
今のキバLFのように我を忘れる事はない。

その事から、オーガはソラが『使いこなせていない』と思っただ。
だ。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

「G A
A ツ!」

オーガの考えをよそに、キバLFと牛鬼は殴り合いを繰り返して
いた。

レオフォームは高速戦闘に特化したブレイドフォームとは逆に、力と防御力に特化した形態だ。故に、牛鬼との殴り合いを可能にしているのだが……。

「G A
A ツ！！！」

「ガアア、ガアアアアアアツ！！」

「マズっ！！！」

やはり質量に差があるため、徐々に押され始める。

オーガは慌てて援護に入ろうとするが、その時には牛鬼が大きく振りかぶっていた。

一方、闇の書の意志と戦っていたのは達は、闇の書の意志がな

のはの魔法【スターライトブレイカー】の詠唱をし始めたため、全速力で闇の書の意志から離れていた。

闇の書の意志は、闇の書時に蒐集したリンカーコアの持ち主の魔法を行使出来る。

「ねえ、フェイトちゃん。そんな急がなくても……………」

「ダメ。あの魔法は防御の上からでもかなり削られる。急いで離れないと……………」

フェイトは一度スターライトブレイカーを受けた事があるため、その恐ろしさを充分知っている。

本来の使い手であるのはは、親友の焦る顔に苦い顔するしかなかった。

高速で飛行する二人に、バルディッシュからある事が報告された。

《Sir、300m先に生態反応を確認しました》

「「えっ!?!」」

バルディッシュからの報告に、なのはとフェイトは驚いた。

現在、オーガやキバ、なのは達が戦闘している一帯は結界が張られており、なのは達以外の生き物はいない筈なのだ。

「もしかして、巻き込まれちゃったのかな？」

「うん。急いで向かおう」

通常、結界が展開されると魔法が使えない人間は、結界内で起きる出来事に巻き込まれないよう隔離・・・結界が張られている間、一時的にその時間から弾かれる。

だがたまに、結界内に魔法が使えない一般人が取り残される事がある。

ちなみに、なのは達や時空管理局は知らないが、仮面ライダーやその関係者は結界が展開されても弾かれず、自由に入りも出来る。

バルディッシュの案内で、生態反応があつた場所に向かうのはとフェイト。

その場所が肉眼で確認出来る程近付くと、確かに人間が二人。なのは達と代わらないだろう少女達が誰も居ない街をさ迷っているのが見えた。

なのはとフェイトは頷き合つと、フェイトはその少女達の近くの電灯の上に着地し、周りを警戒する。

なのはは少女達に状況を説明するため、少女達の上空から声を掛けた。

「あー！ すみません、少し待っていただけますかー!？」

少女達は突然掛けられた声に驚きながら、慌ててなのはの方を見上げる。

目が合った瞬間、少女達は勿論、なのはも驚きの声を上げた。

「なのはっ!?!」

「なのはちゃんっ!?!」

「アリサちゃんっ!?!?　　すずかちゃんっ!?!?」

「えっ!?!」

なのはと少女達の声に、フェイトも驚きの声を上げた。

なんと、結界内に取り残された二人の少女達は、なのはとフェイトの友人である、アリサとすずかだったのだ。

なのはは二人の前降り、フェイトも二人の前に着地する。

「アリサちゃん、すずかちゃん、何でこんな所につ!?!」

「何でって聞きたいのはこっちよっ!　いきなり誰も居なくなっただと思っただら空が変な色になってるしっ!?!」

「いつかあんた達もどうしたのよっ!?!?　空飛んでるし、変な格好してるしっ!?!」

「そっだよっ!　私もアリサちゃんもビックリしんだからっ!?!」

「え、えーっと……………」

いつもより声を張り上げるアリサに、いつもは大人しいすずかもなのはとフェイトに詰め寄り、なのはとフェイトはなんと説明すればいいか悩み言葉を濁す。

「こ、これはね」

なんとかなのはが説明しようとした時、“何か”がビルを貫通し、彼女達の頭上を通過し、向かいのビルに激突し道路に落ちた。

なのは達が驚いてその何かに目を向けると、そこには牛鬼と戦っていた筈のキバが倒れていた。

ダメージが大きいのか、レオフォームからブレードフォームに戻っていた。

「ソラ（さん）っ!？」

「うう……………」

呻き声を上げるキバに、なのはとフェイトは慌てて駆け寄る。アリサとすずかがキバに驚いているが、気にしてはいられない。

だがなのはとフェイトがキバの所に着く前に、新しい黒い陰がキ

バが貫通したビルに新しい穴を開け、キバが激突した同じビルに激突して落ちた。

「うげっ!!」

ただキバと違う事は、頭から落ちた所か。

「痛たあ……………。くそ、思いつ切り頭突きしやがった……………」

落ちた黒い陰……オーガは頭を摩りながら立ち上がる。
どうやらキバが飛ばされた後、牛鬼に頭突きされ飛ばされて来たようだ。

346

「「錬矢さんっ!!?」」

「ん? おお、なのはちゃんとフェイトちゃん。どうしてここに?」

「どうしてって、錬矢さんが飛んで来たんじゃないですかっ!!?」

「あー、そうだったな。あははははっ!!」

こんな状況でもボケるオーガ(錬矢)。

ツッコんだのはは疲れた顔をし、その横でキバに肩を貸してい

るフェイトは苦笑していた。

「きゃあああああつ！ 何よあれえええええええええつ！？」

すると突然、アリサの絶叫が聞こえ全員アリサの方を見ると、アリサが口を大きく開け、隣のすずかも目を大きく見開いていた。

オーガ達もアリサとすずかが見ている方向を見る。見て・・・固まった。

何故なら、その方向からピンク色の壁が迫っていたからだ。

それは、闇の書の意志が放ったスターライトブレイカー・・・
・。オーガがボケている間に発射されたのだ。

オーガ達は一瞬の硬直の後、弾けるようにアリサ達の方に走り出した。

「にやああああああああつ！ 忘れてたああああああああ
あああああああつつ！！」

「何でこんな大事な事忘れてんだよつ！ ボケたかつ！？」

「ボケたつて何ですかっ！？ それは錬矢さんですよっ！？
というか錬矢さんのせいですよっ！！」

「あーあー、人のせいにするなんて親御さん悲しむだろうな！・・・
・これだからゆとりは」

「何ですかそれっ!?! 意味わからないですよっ!?!」

「お前らいつまで漫才をするつもりだっ! いい加減にしろおおお
おおおっっっ!?!」

「「あ、あははは・・・」」

上からなのは、オーガ、なのは、オーガ、なのは、キバット、最
後にキバとフェイトの順。

そしてこの瞬間、なのははツッコミ役の称号得た。

「何か不名誉な称号付いたっ!?!」

「なのはっ!?!」

「あ、うんっ!?!」

アリサとすずかの前にフェイト、その隣にキバ、さらに前になのはが立ち、自身の相棒を構える。

「ジッとっっ」

《Defenser Plus Round Shield》

バルディッシュがカートリッジを2発使用し、フェイトはアリサ達に半球型のバリアを、左手を構え魔法陣型のシールドを発生させ、隣のキバも紋章を発生させ防御体制に入る。

《Wide Area Protection》

レイジングハートもカートリッジを2発使用、なのはは自分だけでなく、フェイトやキバ、アリサ達も包むように広範囲のバリアを発生させ、スターライトブレイカーの衝撃に備える。

オーガはなのはの後ろに立ち、彼女を支えるように肩に手を置く。

「……………落ち着いて。君なら出来る。心は熱く、だけど頭はCOOLにだ」

「……………はいっ!!」

「いい子だ。……………来るぞっ! 全員耐えろよっ!!」

オーガの言葉を合図に、オーガと少女達は盾ごと桜色の壁に飲み込まれる。

暫くして桜色の壁が消え、中からオーガとキバ、なのは達が現れる。

アリサとすずかは初めて見た攻撃魔法で精神的に、直接防御を行

ついていたキバ、なのは、フェイトは肉体的に負担が大きい。
特に、広範囲にバリアを展開していたのはが一番負担が大きい
らしく、オーガが支えていた。

「全員、無事か？」

オーガの問い掛けに、キバとなのは、フェイトが頷く。
アリサとすずかは現在の状況に付いて行けず、呆然としていた。

『……………なの……………ちゃ……………イト……………ん……………
……………なのはちゃんっ！ フェイトちゃんっ！ 大丈夫っ！？』

「「エイミィ(さん)っ!!」「」

スターライトブレイカーの影響で一時的に悪くなっていた通信が
回復し、アースラのエイミィと通信が繋がる。

「エイミィさん、あの」

『分かってる。アリサちゃんとすずかちゃんの事だよね？ すぐに
安全な所に転送するからっ!!』

その言葉通り、エイミィはすぐに転送準備に入る。

「ちょ、ちょっと待ちなさいっ!!」

今まで呆然としていたアリサは、エイミィの言葉にハツとなり声を荒上げる。

「なのはっ！ それにフェイトもっ！ これはいったいどういう事っ?!? 説明しなさいっ!!」

「あの、アリサ。今は危ないから、後から」

「ダメっ！ 今すぐ説明しなさいっ!!」

「アリサちゃん……」

「まあまあ、落ち着きなって」

なのはとフェイトに詰め寄るアリサを、オーガが止めた。

「まあ、あれだよ？ 君の言いたい事は分かるけどさ、今は引くれないかな？ ちょっと今立て込んで、なのはちゃんもフェイトちゃんも、まともに話せない」

「で、でも………。ていうかその声………もしかして錬矢さん？」

「ご明答。ま、これ（仮面ライダー）については今のこの状況と一緒には、な？」

「ん……………」

オーガは優しく声を掛け、アリサの頭を撫でる。アリサは目を細め、落ち着きを取り戻す。

「すずかちゃんも、それでいいか？」

「あ、は、はいっ!!」

「ん、ありがとな」

「あ……………」

オーガは同じように、すずかの頭を撫でる。

「…………まあ、あれだ。今じゃなきやいいんだ。今じゃなきや、煮るなり焼くなり売れ飛ばすなり脅迫するなりしてもいいんだし」

「「ちよつとっ!?!」」

「「分かりました」」

「「アリサ（ちゃん）もすずか（ちゃん）も返事しないでっ！！」

『はい、転送するよー』

「「エイミー（さん）もスルーしないでっ！！」

なのはとフェイトの叫びも虚しく、アリサとすずかの足元に魔法陣が現れ二人を転送する。

その際、アリサは睨み気味に、すずかは“笑顔で”なのはとフェイトを見ていた。・・・合掌。

「・・・・・・・・見られちゃった・・・・・・・・」

なのははアリサとすずかが転送されしばらく呆然としていたが、急に暗くなる。フェイトも同様に、表情を暗くしている。

「どした？」

「・・・・・・・・魔法の事、バレちゃったなって」

「・・・・・・・・うん」

俯くなのはとフェイト。

彼女達は魔法という、普通とは違う力を持っている事で友人達から怖がられる事を恐れているのだ。

オーガは「ああ、そうか」と呟く。

「ま、バレた以上腹決めて話すしかないだろ。今までの事も、包み隠さず。ここでまた隠したら、余計に辛くなる。お兄さんの、約束な？」

「……………はい」

「よし。……………さて、お客さんが待つてるみたいだし、話は終わりだ」

オーガはそう言って上を見上げる。そこには、まるで話が終わるのを待っていたように、闇の書の意志が居た。

闇の書の意志に気付いたなのはとフェイト、キバはそれぞれの得物を構える。

オーガもオーガストライザーを構え闇の書の意志を……………否、自分達が居る場所の横のビルを見据える。

「……………こつちも来たみたいだな」

オーガの言葉を合図にしたように、ビルが吹き飛んだ。

飛んでくる小さい破片をなのは達は障壁で防ぐがオーガは気にせず、大きな破片をオーガストライザーで切り裂く。そして、ビルがあった場所を見据えた。

「チツ、無傷かよ」

オーガは舌打ちする。そこには、唸り声を上げる牛鬼の姿が……。

牛鬼もスターライトブレイカーを受けた。さらに、なのは達やキバのように障壁などの防御が出来ないため、直撃の筈。だが牛鬼の見た目には変化がない。

つまり、持ち前の防御力で耐えきつたのだ。

「チート並に硬いな、おい」

「……………今の状況を、地球の言葉で『前門の虎、後門の狼』
というんですね」

「ソラ、誰も上手い事を言えって言ってないから」

だが確かにその通り、前方には闇の書の意志、後方ではなく横に牛鬼、まさにピンチ。

「……………よし、逃げよう」

「はいっ!!!……………って、なんでそうなるんですかっ!?!?
いや気持ちはわかりますけど、どうやって逃げるつもりですか」

漫才をしている間に牛鬼と闇の書の意志が突っ込んで来た。
なのは達が気付いた時にはもう遅く、回避出来ない。「ふんっ！
」

牛鬼がなのは達の直前まで突っ込んで来た時、今までボケだった
オーガが間に入り、頭から突っ込んで来た牛鬼の頭を体全体で受け
止めた。

『ベキツ！』と嫌な音を聞きながら、牛鬼の突進を受け止めた
オーガは牛鬼の頭を掴んでいる両腕に力を入れる。すると、超重量
の牛鬼の体が浮き上がった。

「どっ、せいやああああああああああああああああああああ
あああああああツツツ！！」

『投げたあああああああああああああつ！？』

少女三人とコウモリ一匹の驚きの叫びとともに飛ぶ牛鬼。

なんと、オーガは何十トンもあるう牛鬼を巴投げの要領で投げた
のだ。さらに、飛んで行く牛鬼の先には闇の書の意志が……
。

闇の書の意志は急停止するが間に合わず、飛んで来る牛鬼に直撃。
そのまま牛鬼とともにその先にあったビルに直撃、倒壊させた。

それを見届けたオーガは満足げに頷いた。

「よし、逃げよう」

「やっぱり言うと思ってましたっ!!
と、いつか何でそんな事言うんですかっ!?! 真面目にして下さいっ
!?!」

ツツコミを入れたなのはに対し、オーガは仮面の上からでも分かるぐらい面倒くさそうな顔をする。

それになのはは腹が立った。

「やだよ面倒くせえ、俺そついうキャラじゃねえし。俺は面白可笑しく周りを引つ掻き回すキャラっつー設定なんだよ」

最後に、「そんな事もわからないから『魔王』って言われるんだ」と言っつて失礼にも溜め息。

なのはは体の底からドス黒いものが込み上げてくる気がし、ディバインバスターをぶつ放そうとレイジンググハートを構えた。

「錬矢様っ! なのは様っ! あれをつ!?!」

突如キバに声を掛けられ、オーガはすぐ、なのはは込み上げてくるドス黒いモノを引つ込め、キバが指差す方向を見る。見て……
……思考が止まった。

そこには、倒壊したビルの瓦礫ガレキに埋もれた牛鬼を闇の書の意志が抱きしめ、牛鬼が光の粒子となっていた……。

時間は少し戻ってオーガとなのはが漫才をしていた頃、投げ飛ばされた牛鬼に巻き込まれビルに突っ込んだ闇の書の意志は、倒壊したビルの瓦礫から抜け出し、ゆっくりと浮き上がった。

闇の書の意志は衣服についた汚れも気にせず、こうなった原因漫才をしているオーガを見据える。が、その表情に怒りといった感情はない。

ただ無表情に、見ているだけ……。

闇の書の意志は移動しようとする。が、すぐに動きを止め、倒壊したビルに目を向けた。

そこには瓦礫に埋もれ、身動きが取れない牛鬼の姿が。

牛鬼のパワーなら瓦礫など簡単に除けられるのだが、スターライトブレイカーの直撃を受け、無傷のように見えたが、実際はかなり体力を削られていたのだ。

闇の書の意志はゆっくり牛鬼の前に降りる。

「GURURURURU……!!」

牛鬼は唸り声を上げるが、闇の書の意志は気にせず牛鬼を抱きしめた。

「サカキ…………大丈夫だ。お前の怒り、私が果たす。だから…………私の中で、眠れ」

闇の書の意志がそう言うと、牛鬼を光りが包み、そして粒子となり闇の書の意志の近くに浮かんでいる魔導書に吸い込まれた。

「……………ふいが？」
奇妙な声を出し、サカキは目覚めた。

（あれー？ 俺いつ寝たっけか？）

まだ眠たい頭で考える。

守護騎士が蒐集され、ドス黒いモノが込み上げ仮面の男 に変身したリーゼアリアとリーゼロッテ を叩き潰した所までは覚えている。だがそれ以上が思い出せない。

「……………まあ、いつか」

まだ眠いたため、思考を止め再び眠ようとする。

まぶた 瞼を閉じ、意識が落ちる。 前に顔面に強い衝撃を受けた。

「があっ!?!」

顔面に痛みが走り、跳び起きるサカキ。とそこに、背後から声を掛けられた。

「おはようございます。兄さん」 サカキが顔を抑えながら後ろを振り返ると、そこには黒髪を腰程まで伸ばし、朱色の着物を着た少女が、サカキ愛用の音撃棒を片手に笑顔で立っていた。

どうやら手に持っている音撃棒でおもいきりサカキの顔面を叩いたようだ。

「なにしやがるっ!?!」

「いつまでも寝ている兄さんが悪いんでしょう？ 自業自得」

サカキは睨むが、少女は意に返さず踵を返す。

「もうご飯できてるんだから、ちゃんと起きて下さい」

「わあったよ。“紅葉”」

少女の名は紅葉。戦国時代に居る筈の、サカキの妹だ。

十六ノ巻に続く。

おまけ・その1

オーガ

「な・・・・・・・・なんじゃありやつ!？」

キバ

「吸収・・・・・・・・いえ、蒐集でしょうか」

オーガ

「なんでまた・・・・・・・・まあ数が減ったから、楽になったな。・
・・・・・・・・よし」

なのは

「逃がしませんよ」

(少女、魔導師の杖を構える)

オーガ

「・・・・・・・・いや、さすがに冗談」

(直後、金色のラインがベルトに戻り、輝く)

錬矢

「あれ？」

キバ

おまけ・その2

アリシア

「金剛ー、暇だねー」

金剛

《しかないだろう、我々は簡単には介入出来ないのだから》 I
ガンダム（SDサイズ）ボディで飛行中

カブキ

「……………ちょっと待て。金剛、なんだそれは」

金剛

《Iガンダム（SDサイズ）ボディだが？》

カブキ

「んな事は分かるわっ！なんでそんなのがあるか聞いてんだっ！」

金剛

《なに、ちょっと未来の技術を盗用して母上に作って貰ったのだ。他にもアストレアFとF2、あとハイペリオンボディもあるぞ》

カブキ

「盗用すんなよっ！！あと何でMSVばっかつ！？」

アリシア

「そんなの作者の趣味に決まってるじゃん。ねー？」

金剛

《ねー？》

カブキ

「『ねー？』じゃねええええええええええええええええええつ！！」

続く。

・スカイファルコン

キバが召喚した鳥型モンスター。ファルコ族。

『蒼剣のキバ』と関係が深く、ソラのファミリネームの由来はここ。

通常は30cm程の大きさだが、状況によって巨鳥形態になる。

・キバ・レオフォーム

キバがライオ族のレオが変身した【レオクロー】を装着し、変身した姿。

ブレードフォームとは逆の力と防御力が特化しているが、力が有りすぎ現在のソラでは使いこなせていない。

十五ノ卷『闇の中』（後書き）

かなり久しぶりの更新です。

すいません、スランプに入ったもんで……。

結界の説明は独自解釈です。

フロストでした。

十六ノ巻『夢』（前書き）

おはこんにちばんわー。

今回はちよいしリアス。納得できないところがなくとも、愛嬌です。

錬矢「さあ、始まるザマスよ」

サカキ「いくでガンス」

ソラ「フガー」

闇の書の意志に蒐集された牛鬼……サカキが目覚めると、そこには過去の時間に残してしまっただ妹が居た。

「ここは夢の中。はたしてサカキは幸せという名の夢から抜け出せるのか……？」

「ああー」

「どうですか？ 兄さん」

「すんげえいいー。肩もみ上手くなったなあ、紅葉」

「ふふふ、ありがとうございます」

「……抜け出せるのか？」

「~~~~~」

現在、サカキは家の前にある畑の草刈り中。よほど楽しいのか、鼻唄を歌っている。

「楽しそうですね、兄さん」

「ああ、久しぶりだからな。なんか楽しくてなあー」

「久しぶりって何を言ってるんですか。毎日やっている事じゃないですか」

「あー、そうだったな」

「ふふふ、変な兄さん」

サカキとしては約半年間を八神家で過ごしていたので、畑弄りをするのはかなり久しぶりだ。

紅葉は当然知らないので、笑って家の中に戻っていく。

「おおーいつ！ サカキー！！」

紅葉が家に入った後も、サカキが鼻唄を歌いながら草刈りをして
いると、不意に声を掛けられた。

サカキは声の主を探して周りを見渡すが、この辺りには自分と妹
が一緒に住む家と畑、それ以外に人は住んでいないはず……。

「ここだここー！！」

「んあ？」

再び声が聞こえ、サカキは上を見上げる。するとそこには一つの
大おお凧たこが。

とりあえず、手に持っていた草刈りの鎌を投げた。

投げた鎌は手裏剣となり、大凧の一部を切り裂き、大凧は逆さま
になって落下。『あああああああああああつ！！』と
聞こえたが、きつと気のせいだ。

飛んでった鎌を音式神・茜鷹に取りに行かせ、こんどはクワを持つ。

「さーて、続き続き」

「相変わらずですね、サカキさん」

持ったクワを野球のバットを振る要領で後ろに投げる。こういうのは続ける事が大事だ。

だが標的は慌ててしゃがんだため、クワはその後ろの木に突き刺さった。

「ちっ」

「舌打ちっ！？ …… 本当に相変わらずですね」

そう言って恨めしそうに見るのは、上物の袴と着物に髪をポニーテールにした好青年と言ってもいい男性。

サカキは木に突き刺さったクワを抜き取り、肩に担ぐ。

「つーかイブキ、お前また城抜け出したのか？」

「ははは、城暮らしは窮屈でして」

男性の名はイブキ（威吹鬼）。サカキと同じ鬼で、戦で手柄を立て大名になった鬼一番の出世頭。ただ地位や権力に執着心がなく、よく仕事を放り出したり簡単に捨ててしまう。

「お前も相変わらずだな。……ま、上がれよ。茶ぐらいなら出すぞ？」

「はい。それじゃあお言葉に甘えて」

「うし。……キラメキも来るなら来い」

「お前やっぱりわざとやっただろっ!？」

いつの間にか　　と言っても分かっていたが　　二人の後ろに、ボロボロとなった着物を着た同じくボロボロとなった大凧を持った男が居た。

男の名はキラメキ（煌鬼）。サカキとイブキの仲間の鬼で、普段は街で土産物売って生活している。

「キラメキ、どうしたんだ？ ボロボロになつて」

「本当ですね。キラメキさん、どうしたんですか？ ボロボロになつて」

「お前がやつたんだろっ！？ あとイブキも見てたよなっ！？ 上から見えてたぞっ！！」

「「いやー、まったく身に覚えがないなー」」

「お前らあああああああああああああああああああつ！！」

とりあえず、“何故か”叫んでいるキラメキを無視して家に入つてくサカキとイブキ。

とその時、茂みから鎌を取りに行かせた茜鷹が出て来た。が、サカキの所にこずに茂みの中に視線を送っていた。

「なんかあんのか？」

《《ピューー》》

肯定の意味でひと鳴きする茜鷹。

サカキは茂みに近づく。イブキとキラメキも付いて来る。三人が茂みを覗くと、そこにはまだ若い男が倒れていた。

「トドロキ……だよな？」

「トドロキさん……ですね」

「トドロキだな」

三人は行き倒れの男に見覚えがあった。

男の名はトドロキ（轟鬼）。サカキ達の仲間の鬼だ。

「……墓でも作ってやるか」

「「そうだな（ですね）」」

そして三人はそれぞれ道具を手に取り、穴を掘って旅立った仲間をその中に……。

「まだ死んでないっすううううううううううううっ!!」

入れたら飛び出して来た。

「本当に助かりましたあー！ サカキさん、ありがとうございますっ
っ!!」

「分かったから食いながら喋んな。米が飛ぶ」

結果を言えば、トドロキが倒れていたのは腹が減ったからだ。サカキは鬼三人を家に上げ、イブキとキラメキには茶を、トドロキには米と漬物を出した。

「それにしても、トドロキさんはよく食べますね」

一切れの漬物を口に入れると一気に大量の米を掻き込むトドロキを見て、イブキが苦笑気味に言う。サカキとキラメキも同意の意味で苦笑した。……と一番苦笑していたのが居た。紅葉だ。

「どうした紅葉」

「いや……その……」

サカキが様子がおかしい妹を心配して声を掛けるが、紅葉はよほど言いにくいのか苦笑するばかり。……ではなく、チラリとある方向を見たりしている。

サカキも釣られてその方向を見ると、そこにはまた大量の米を掻き込むトドロキが。

「ま……まさか……!？」

「えーっと……はい」

その言葉を聞いた途端、サカキは台所の釜の中を見る。中は……空。

続いて米を入れている籠の中を見る。こちらも……空。

「少なくなっていたので、今度買おうとは思ってたんです。ただ……あと数日はもつと思っただけです……」

サカキは人より食べる方だ。もちろん紅葉もその事は知っているので、それも計算して『あと数日はもつ』と考えた訳なのだが……。

「……トドロキイイイイイイっ！ 今すぐ米俵買って来いやああああああああああっ！！！」

一瞬でトドロキを放り出し、米を買いに行かせる。何か騒いでたが、鎌、包丁、クワ等を投擲して無理やり行かせた。

「・・・紅葉、米以外で無くなった物は？」

「えーっと、他は大丈夫です。トドロキさん、ご飯以外は普通です
から」

トドロキは少量のおかずで大量の米を食べるため、米の消費量と
比べ漬物の消費は普通の一人前と同じであった。

「そうか。・・・トドロキの奴、戻ってきたら してやる」

「「「あ、あはは・・・」」」

「・・・なに物騒な事を言ってるんだ」

サカキの『してやる』発言に周りが苦笑する中、冷静にツッコ
ミを入れたのが居た。

サカキ達が声のした方向を見ると、土間に髭を生やした男が野菜
を持って立っていた。

「おお、ハバタキ。どうした？」

「うちで取れた野菜を分けにきたんだ。」

・・・入れ違いで、トドロキが泣いて走っていったんだが、何をしたんだ？」

「馬鹿やったから放り出しただけだ。

あと、野菜ありがとな。ま、茶でも飲んでけ」

「ああ、そうさせてもらおう」

髭を生やした男はハバタキ（羽撃鬼）。仲間の一人で妻子持ち。

サカキはから受け取った野菜を籠の中に入れていく。

（・・・いいなあ、こういうの。はやて達ともこんな・・・
・・・あれ？ はやてって・・・誰だ？）

「はあああああつ!!」

キバが雪月牙を、フェイトがハーケンフォームにしたバルディッシュを振るう。

闇の書の意志は襲い掛かる銀と金色の刃を体を捻り、最低限の動きだけで避ける。

《TORND》

「アクセルシューターツ!!」

ラハブは風の弾丸を、なのはは誘導弾を発射。闇の書の意志に肉薄していたキバとフェイトは、持ち前のスピードを活かして離脱する。

「ブラッティダガー、プラズマランサー・マルチショット」

闇の書の意志は周囲に血で塗られた短剣を、中央にフェイトの魔

法である【プラズマランサー】のバリエーションである、単発にする事で威力を高めた雷の槍を発生させ、そして左手を振り短剣を发射し、雷の槍を右手で殴り撃ち出す。

短剣はアクセルシューターに、雷の槍は風の弾丸に当たり、一つ残さず落としてゆく。

「ラアッ!！」

シューターと風の弾丸が撃ち落とされた時に発生した爆煙に紛れ、ラハブは一瞬で闇の書の意志に近付き、手に持っている【巨砲大剣・夜刀ノ神】を振り下ろす。

巨大な刃が闇の書の意志に迫る。だが、それは意外な物で防がれた。

「なっ!？」

『ギユイイイン』という独特の音が鳴り響き、ラハブは目を見張った。

ラハブの一撃を防いだ物、それは逆鬼の音撃武器の一つ、【音撃弦・烈断】だった。

ラハブが驚いていると、ラハブを囲むように紅い短剣が発生された。

「ちっ！！」

それに気付いたラハブはすぐに離れる。直後、ラハブが居た場所に短剣が殺到し、爆発した。

「はああああああつ！！」

キバとフェイトが左右から挟撃する。

だが闇の書の意志は音撃弦を消し、今度は両手に【音撃棒・烈撃】が現れ、さらに【鬼棒術・烈火剣】でキバとフェイトの攻撃を受け止め、体を回転させ二人を吹き飛ばした。

「おいおいマジかよ……」

さすがのラハブもこれには驚いた。

確かに闇の書の意志は、闇の書と同様に魔導師のリンカーコアを蒐集する事でその魔導師の魔法を使用する事が出来る。だが闇の書の意志が使っているのは、魔導師ではない逆鬼の武器と技。本来なら出来るはずがないのだ。

“ 錬矢様、あれは……！！ ”

“ 分かってる。落ち着け ”

混乱気味のキバの念話に短く答え、ラハブは頭を回転させる。

元々魔法以外の技術が使えるのか、鬼の技が魔法に近いから使えるのかは分からないが、使っているのは事実。ならば逆鬼が使える技は全て使えると見ていいだろう。

「 デイバイン………バスターアアアアアアアアアアツ！
」

なのはがお得意の砲撃を撃ち、桜色の放流が闇の書の意志を飲み込もうと迫る。

闇の書の意志は避けようとせず、直撃。……かと思われたが、新たに手にした“何か”で砲撃を防いでいた。

砲撃の放流が止み、闇の書の意志が持っていた“何か”が現あいつになる。それは……傘。

日本古来の『和傘』と呼ばれる竹と紙で出来た物で、闇の書の意志が持っていた和傘には黒と紫の色が塗られていた。

もちろんこの傘は【鬼傘術】と呼ばれる立派な鬼の技なのだが、まさか得意の砲撃が傘で防がれるとは思っても見なかったのは、目と口を大きく開けて固まっていた。

「（はは、そりゃ固まるか……）……ふんどし締め直さなきゃ駄目だな、こりゃ」

ラハブは夜刀ノ神の持ち手を握り直し、闇の書の意志を見据えた。

『一気っ！！ 一気っ！！ 一気っ！！ 一気っ！！』

「んく・・・んく・・・んく・・・」

夜。現在、サカキ・紅葉宅はお祭り騒ぎとなっていた。というのも、ハバタキが来た後、トウキ（凍鬼）が『仏の声を聞いたから来た』と言って訪ねて来て、その後に食料を借り（盗み）にニシキ（西鬼）が忍び込んで紅葉に音撃棒でボコられ、さらに米俵を買って帰ってきたトドロキと街で偶然会ったというヒビキ（響鬼）が来て・・・というふうには、サカキの友人（友鬼？）達が集まり、ヒビキとニシキが持ってきた酒で宴会を開いたのだ。

「ういゝ・・・ひっく」

サカキは盃に注がれた酒を飲み干すと、盃をドンツと置いて・・・泣き出した。

『いきなり泣き出したっ!?!』

「に、兄さんっ!?!? どうしたんですかっ!?!?」

「うう・・・紅葉iiiiiiiiiiiiiiiiっ!?!」

心配して駆け寄った妹に抱き着く。・・・顔から出すもの全部だしながら。

「すまねえ・・・すまねえ・・・!?!」

「だからどうし・・・またその事ですか? 私は好きでやってるんですから、兄さんは気にしなくていいんですよ?」

「うう・・・」

「・・・なあ、ヒビキ。サカキって泣き上戸だったか?」

「いや・・・違かったはずだけど・・・ああ、あの事が」

泣きながら謝るダメ兄を、優しく抱き返して慰める妹。

そんな兄妹の姿を見て、キラメキは小声でサカキと付き合いの長いヒビキに尋ね、ヒビキは首を傾げたが、心当たりがあり、それを思い出した。

「なんかあったのか？」

「ああ。．．．．．紅葉って、もう25だろ？ それでどこにも嫁がないでサカキの世話してるから．．．．．」

「．．．．．なるほど、サカキさんはそれを気にしてるんですね？」

ヒビキの説明に、いつの間にか加わっていたイブキ．．．．．だけでなく、サカキと紅葉以外の全員が納得した。

サカキと紅葉は36と25という歳の離れた兄妹である。二人の親は紅葉が産まれた直後に魔化魍に食われた。それからサカキは妹を守るため、親の仇を討つために鬼になり、紅葉は物心がついた頃から兄を支えるためずっと身の回りの世話をしていた。

25歳はこの時代では結婚適齢期を過ぎており、サカキはその事を気にしていた。

「そうなんだよ。サカキはそれとなく言ってるんだけど、紅葉がやる気なくて。それでサカキに相談されたんだよ」

「なるほどなあ。紅葉、サカキしか見てないみたいだし」

「むう……」

「てーか、そこまで心配やったらサカキが責任取ればええやん。あいつら、端から見たら夫婦めおとやで？」

『ですよー』

余談だが、この時代は身内同士の夫婦が珍しくないとか……。

(待て)

その後、サカキが正気に戻ったところでお開きとなり、ヒビキ達は(何故か暖かい目をしながら)帰っていき、サカキは縁側で一人、盃を傾けていた。

「・・・・・・・・ふう」

「また飲んでたんですか」

紅葉が後ろから声を掛けるが、サカキは構わず再び盃を傾ける。

紅葉はなにも返さなかった事に何も言わず、サカキの隣に座り新たに持つてきた盃に酒を注ぎ、口元を持つていき、傾けた。

盃に注がれていた酒が体に流れ、頬を薄く紅くする。

「・・・・・・・・今は酔いたい気分なんです」

「・・・・・・・・そうか」

サカキはそれだけ言うと、盃に酒を注ぎ、それを口に流した。

「・・・・・・・・さてと」

暫く二人で酒を飲んでいると、サカキが盃を置き、勢いよく立ち

上がった。

「兄さん？」

「悪い、俺行くわ」

「……………そうですね」

紅葉はそれだけ言つと、一度家の中に戻り、何かを持って戻つてきた。

「これを」

紅葉は藁わらで包まれたそれをサカキに差し出す。

サカキは受け取り、藁を外すと、中から『逆鬼』と彫られたあの短剣が出てきた。

「……………ヒビキさんに教わって作つたんです……………その……………出来は良くないですけど、お守りになればと……………」

・・・」

恥ずかしそうに目を逸らす紅葉。

確かに短剣は良い出来とは言えない。だがサカキは微笑み、紅葉の頭を撫でた。

「ありがとな」

「あ・・・・・・」

「それじゃ、行ってくる」

撫でてる手を離し、紅葉に背を向け歩き出す。

紅葉は懐から火打ち石を取り出し、打ち合わせ、ただ一言

「行ってらっしゃい」

と、それだけ言う。

サカキはそれを背に受け、眼前に現れた灰色のオーロラを通り、その場から姿を消した。

十七ノ巻に続く。

十七ノ巻『来たる大蛇。そして絶望（あくむ）となる』（前書き）

十七ノ巻です。原作とはセリフ等が違いますが、それは自分が原作をうる覚えだからです。

ソラ「さあ、あなたの罪を数えなさいっ！！」

サカキ「さあっ！ 振り切るぜ」

錬矢「さあっ！ 地獄を楽しみなっ！！」

十七ノ巻『来たる大蛇。そして絶望（あくむ）となる』

灰色のオーロラを抜け、サカキが出たのは真っ暗な場所だった。

いや、上も下も、右も左も真っ暗。なのにサカキの姿ははっきりとしてるので、場所と言うよりは空間と言ったほうが正しいかもしれない。

サカキは真っ暗な空間を進んでいると、進行方向に二つの人影を見付けた。内、一つはサカキの見知った顔だった。

「はやて！」

「・・・誰？」

手を上げて近付いたサカキだったが、はやての一言でズッコケ、派手に（火花と土煙を上げながら）ヘッドスライディングを決めた。ちなみに、現在のサカキは元の姿である大人の姿であり、はやては子どもの姿しか知らない。

「痛い……！俺だよ俺っ！ サカキだっ！！」

「ええっ！ サカキなんっ！？ ……いやいやありえんやろ、サカキはもつとアホっぽいし、子どもやし」

「ほほお……お前俺の事そう思ってたのか……」

思わずサカキに対する第一印象を喋るはやてに、サカキは拳を握りしめた。

と、そんな二人に仲裁が入った。

「あ……主はやて。こちらは紛れも無く、本物のサカキです」

はやてと一緒にいた銀髪の女性が間に入ったのだ。

女性の姿は、現在錬矢達が戦っている闇の書の意志とそっくりなのだが、はやては外の状況を知らず、サカキは牛鬼で断片的でしか覚えていないため、この場にツッコむ者はいなかった。

「え、そうなん？ ……まあ、リインフォースがそう言うやったら、そうなんやろうな」

「……なあはやて、こっちは誰だ？」

あっさり納得したはやてに、サカキは質問する。もちろん、目の前の女性についてだ。

「あー、うん。こっちはリインフォース。闇の書……うん。夜天の書の管制人格……て言えば分かるかな？」

これは別にサカキを馬鹿にしてる訳ではない。サカキは戦国時代……昔の時代の出身のため、管制人格と言って通じるか分からなかったのだ。

「かんせいじんかく？ ……なるほど、大体分かった」

だがはやての予想とは違い、サカキはすぐに理解した。

これにははやて、そしてリインフォースも驚いたが、話を進めるため追究しなかった。

……だが、サカキの頭の中では『管制人格』物が変化した妖怪。または物に憑いてた妖怪』となっており、『リインフォース』妖怪の類』という図式が出来ていた。

「んで、これからどうすんだ？」

「夜天の書のマスターとなった主はやての権限で、夜天の書……
・つまり私と防衛プログラムを切り離す」

サカキの質問にリインフォースが答える。

1・夜天の書は元々は無害な優秀な魔法を保管するのが目的の魔導書だったのだが、代々のマスターによる改編によって現在の形に変わり、その際に防衛プログラムも凶悪な物に変わった。

2・改編された部分が多過ぎるため、元の形に戻すのは不可能。
そのため外にいる管理局魔導師とキバ+ に協力してもらい、分離した防衛プログラムをどうにかする。

3・現在、外でラハブ達と戦闘している闇の書の意志……
防衛プログラムははやてのマスター権限でも止める事が出来ず、このままでは分離出来ない。

「………という訳だ」

「あーつまり、まずは外で暴れてるのを止めねえと何にも始まらないって事が」

「大体はそんな所だ」

自分なりの解釈で話の内容を理解したサカキは考え、再び質問する。

「なあ、それって俺は何か出来ないのか？」

「ああ、実は頼みたい事がある。外で止めたのと同時に、内側からありったけの力でこじ開けて欲しい。私は自分に攻撃は出来ないし、主はやての魔導では、我々まで危険になる」

何故はやての魔導……魔法だと、自分達まで危険になるのか？ その意味が分からず、聞いてみると、はやての魔法はリインフォースと同じで 闇の書の意志もだが 広域攻撃型。つまりMAP攻撃で、威力はともかくこちらまで巻き込まれるとの事。

「……………はやて、お前どこのグラゾン？」

「言わんとして、わたしも聞いた時同じ事思ったから……」

(グゾン……?)

グラン　ンの意味が分からないリインフォースは、首を傾げた。

「とりあえずや、外の人達が何とかしてくれんと、わたしらは何も出来へん。……そう言えばリインフォース、止めるって具体的にどう止めるんや？」

まだ聞いてなかったのか、はやてがリインフォースに聞く。
サカキが「まだ聞いてなかったんかいっ！！」とツツコもうとしたが、ハリセンの一撃にあえなく撃沈した。

「簡単です。力ずくで止めればいいんです」

「力ずくでか」

「力ずくです」

「……分かった。それ、外の人達に伝える事出来るか？」

「はい。主の声を外に流します。それで伝えて下さい」

「分かったわ。それじゃぁリインフォース、お願いな？」

「はい」

はやてとリインフォース（+撃沈したサカキ）の話がまとまった
ちようどその頃、外では防衛プログラムとラハブ、キバ、フェイト
+ 白い悪魔なのはが街中から海上へと戦場を移していた。

ちなみに、空を飛べないラハブとキバはスカイファルコンの背
中に乗っている。

「ちよつとっ！ 悪魔ってなにっ!？」

「なのは危ないっ!!！」

「うっ!やあっ!..?」

ツッコミを入れている隙に防衛プログラムに砲撃を撃たれ、慌ててそれを避ける。

さらにラハブに『なによそ見してんだバカッ！』と怒られた。

「ったく……………」

凹んだなのはをよそに、ラハブは悪態づきながら現在の状況を確認する……………までもなく、不利だ。

防衛プログラムの攻撃は凄まじく、反撃してもなのはとフェイトの攻撃は和傘に防がれ、単独飛行能力がないラハブとキバは海上に戦いを移した事により、ロクな攻撃が出来ないでいた。

(あー、ラハブじゃなくて“アモン”なら楽なんだけどなあー。でも使ったらオンドウルと音ちゃんの子息がうるさいし、そもそも一世温泉行ってるし)

「つーかあの戦闘力おかしくね？ クウガ・アルティメットフォームとタメ張れるよ、と考えながら夜刀ノ神を構え、今まさにこちらに突っ込んで来る防衛プログラムに備える……………」と、異変が起きた。

「え・・・・・・・・・・？」

「何・・・・・・・・・・！？」

キバとキバットが異変に驚きの声を上げる。突っ込んで来た防衛プログラムが突然動き止め、震え出したのだ。

全員が怪訝に思っていると、防衛プログラムからはやての音が聞こえてきた。

『あのー、外に居る方、聞こえますかー？ わたし、八神はやて言いますう』

「「はやて（ちゃん）っ！？」」

「はやて様・・・・・・・・・・。確かサカキ様の・・・・・・・・・・」

「ああ、家族だな」

なのはとフェイトは驚き、キバとキバットは以前サカキから聞いた事を思い出していた。

……ただ、誰もが驚く中、『ああ、デパートの迷子の呼び出し思いだすなあ』と、考えていたのがいた。

『もしかしてなのはちゃんとフェイトちゃんかっ!?!?
あと、アホな事考えてんのが居るみたいやなあ?』

急に怒気を纏う防衛プログラム。というかはやて。

その場にいた全員は、目線をそっぽを向いて口笛を吹いているアホ龍に向けた。なのははレイジングハートをに向けた。

『まあ、今はどうでもええ。そんな事より、この子止めてくれへんか?』

リインフォースから聞いた事を簡潔に説明する。

なのは達はすぐに理解する。そして、はやてがリインフォースにしたのと同じ質問をした。

「でも、止めるってどうすればいいの？」

『それはな』

はやてが説明しようとした時、予想外の所から横槍が入った。

『ぶっ潰せ、以上だ』

『サカキ（様／君）っ！？』

皆さんもご存知、サカキだ。内部でノックダウンされていたサカキが復活し、割り込んできたのだ。

サカキを心配していた面々は、その声を聞いた時驚き、そして安堵した。

特にキバ……ソラは、全身の力が抜けたのか、スカイフアルコンの背中座り込んだ。

この時、力らが抜けすぎたせいで変身が解けそうになったのをキバットが必死に抑えていたとか。

「っーかサカキっ！ お前牛鬼から戻れたのかよっ！！」

『あー、なんやかんやあつて』

『「なんやかんやつて何つ!?」?」』

内側と外側からのWツッコミ。悲しくも、ツッコミスキル所持の少女二人は目先のボケに反応してしまふ。

まあ実際、気付いたら戻っていたのである意味正しいとも言える。

『ま、そんな訳だからよろしくー』

『ドアホツ!』

『グハツ!』

「ドアホッ！！」

「グハッ！！」

内部。サカキに強烈な一撃が入った。

「サカキっ！ あんたバカやバカだと思ってやけど、そこまで大バカやったんかつ！！」

「酷っ！ 俺そこまで言われる事やったっ！？」

「やったわっ！ 『ぶっ潰せ、以上』って急に言われても困るわっ！！ そんなんで……」

だが、彼女は忘れていた。外に、目の前のバカ鬼と同類の“アホ龍”が居た事を。

『分かったあッ！！』

「ええええええええええええっ！？」

真つ暗な空間に、はやてとリインフォースのシャウトが響き渡った。

「分かったあッ!」

勢いよく返事をしたラハブは、ベルトの横にあるボタンを弾くように叩く。すると、ラハブのマキシマムドライブが発動した。

《DRAGON!! Maximum-Drive!!》

「ソラっ! お前もやれっ!」

「はいッ!！」

今までに無いぐらいの良い声で返事をしたキバは、ベルトの右側に備え付けていた三つのフェッスルの内、蒼いフェッスルを取り出しキバットに吹かせた。

「ウェイクアップッ!！」

「はあああああああ……!！」

高々と右足を上げると、巻き付けられていた鎖が弾け飛び、隠されていた『ヘルズゲート』が姿を現した。

「はあっ!！」

ラハブは両足で、キバは右足を上げた姿勢のまま器用に片足だけで跳び上がった。

そしてウェイクアップによって現れた蒼い月をバックに、ラハブは両足を、キバはヘルズゲートがある右足を突き出し、防衛プログラムに向け落下した。

「ドラゴンインフェルノツ!!」

「はあッ!!」

ラハブの炎、雷、風、吹雪を纏った【ドラゴンインフェルノ】とキバの【ブルーネスムーンブレイク】が防衛プログラムに直撃した。

再び内部。二人のライダーが必殺キックが放たれる直前、変身した逆鬼が紅葉の剣を構えていた。

変身プロセスを初めて見たはやてとリインフォース（特にはやて）は『水っ！ 消化器っ！ 消防車っ!!』と騒いだ。

「行くぜ、紅葉・・・・・・・・!!」

逆鬼は紅葉の剣を振り下ろす。すると真っ暗な空間はガラスのよう
に割れ、光が三人を包んだ。

その時、逆鬼の持っていた紅葉の剣が、一瞬大太刀のように見え
た・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・へ？」

思わずマヌケな声が出る。光に包まれたと思ったら、空の上に居
た。

「ええええええええええええええええつ!?」

空に叫び声が響き渡り、逆鬼は落下を始めた。

あまりにも予想を超える状況だったため、音式神・茜鷹を出して飛ぶという考えまで頭が回らず、重力に従って落ち続ける。すると、眼下に見慣れた顔……ラハブ、キバ、その他が見えた。

「錬矢あああああああつ！ 受け止めてくれえええええええええええつ!!」

メンバーの中で一番ガタイがいいラハブに叫ぶ。

ラハブは逆鬼の声に気付き、空を見上げる。そして、両手を広げた。

「よし来いっ!」

ラハブは受け止める態勢になる。キバも逆鬼の存在に気付き、
『サカキ様ー!!』と声が上がっていた。

《DRAGON!! Maximum-Drive!!》

『・・・・・・・・・・・・・・・・へ?』

だが聞こえてきた電子音に、その場居たラハブ以外の全員の声が
重なった。

「ふふふふ……。オーガギアの恨みじゃあああああああああ
あああつ!!--」

カブトもビックリな回し蹴りが綺麗に炸裂。直撃を受けた逆鬼は
声を上げる暇もなく、海に落下していった。

「サカキ様あああああああああああああつ!!--」

「えっ!? ちょっ! ソラっ!?!」

キバ……否ソラは、落ちていった逆鬼を追いスカイファルコンから飛び降りた。……変身も解けて。

キバットは慌ててその後を追ってつた。

ラハブの一撃で意識を刈り取られたサカキ、そして変身が解けているにも関わらず真冬の海に飛び込み、サカキに抱き着きついた状態で意識が飛んだソラを置いとぎ、話は進んだ。

なお、変身が解けたサカキの姿は子どもである。

まず、外に出たはやてとリインフォースがユニゾン。守護騎士たちのリンカーコアを送還し、守護騎士たちが復活。

ギル・グレアムから渡された『デュランダル』を携えたクロノと合流、リインフォースと分離した防衛プログラムをどうするか話し

合った。

話は難航したが、はやて、フェイト、なのはの機転で防衛プログラムのコアを取り出し、宇宙に飛ばして衛星軌道上にいるアースラが搭載している『アルカンシャル』で消し飛ばす事に決まった。

そして今まさに、コアを取り出し宇宙に飛ばそうとしていた。

「座標捕捉、転そ」

シャマルがいざコアを転送しようとした時、海の中で息を潜めていた“それ”は現れた。“それ”の存在に気付いたのは、ラハブ、そしてはやてとユニゾンしているリインフォースだった。

【ツ！？ シャマル、避けろっ！！】

「え・・・・・・・・・・？」

「オオオオオオオオオオオオツ！！！」

リインフォースの警告を聞いてシャマルが気付いた時には、“それ”は海から飛び出し巨大な口を広げシャマルを飲み込もうとして

いた。

だが間一髪の所でラハブが救出し、シャマルは飲み込まれずに済んだ。

“それ”はそのままの勢いで宇宙に転送しようとしていた防衛プログラムのコアを飲み込み、再び海の中に潜った。

「……………ありがとうございます、錬矢さん。危なく……………」

「しまった……………」

「え……………?」

シャマルが礼を言うが、ラハブは聞いておらず“それ”が潜った海面を見据えていた。

その声には、普段のふざけた彼とは思えない程、真剣さと焦りが感じられた。

「闇の書の覚醒、防衛プログラムの暴走、トドメにはやてちゃん達の砲撃……………。 “奴”が目覚めないはずがない……………」

「おい錬矢っ！ オロチって封印されてたんだろっ！？ 何で居るんだよっ！！！」

「抜かった……。ここはオロチが封印されていたすぐ近く……！！ただでさえ緩んでた封印がさっきので完全に解けたんだ……ッ！！！」

犯してしまったミスに、自分に怒りつつ頭を回転させる。

相手は魔化魍……しかも最凶のオロチ。ならば気絶しているサカキをたたき起こし、自分とサカキ以外のメンバーをアースラに避難させる。

魔化魍であるオロチを倒すにしても再び封印するにしても、音撃戦士（鬼）であるサカキの力は絶対。そして高ランク魔導師とは言え、ただの人間であるはやて達ははつきり言えば足手まとい。こちらから“餌”を提供しているものようだ。現に、現れたオロチの姿に恐怖し、震えている。

「おいつ！ 執務か」

考えを纏めたラハブは、この場で一番の指揮権を持つであろうクロノに叫ぼうとする。だがその時、オロチに異変が起きた。

一つ二つ三つ……合計八つの首が伸び、尾も同じ数だけ伸びた。

もはやオロチであって大蛇に非ず、あえて言うなら

- ヤマタノオロチ -

「カブキっ!!」

「分かってる。……アリシア、ゴースト、金剛、行くぞっ
！！」

「うんっ！！」

「ああ」

《御意》

「……そろそろ『逆鬼とキバの世界』に着きます。瞬、フ
アント、ティラ、キッド、準備をお願いします」

「分かったぜ、姫っち」

「面倒臭えなあ……」

「はい」

「了解ッス！」

十八ノ巻に続く。

十七ノ巻『来たる大蛇。そして絶望（あくむ）となる』（後書き）

やっとここまで来た・・・。

あと二〜三話でA・S編終了です。

十八ノ巻『羽ばたく夜天』（前書き）

逆鬼達とヤマタノオロチとの戦いが、ついに始まる。

タカ！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ！ タトバタ・ト・バ！！

オーズも始まりましたっ！ あの歌に惚れたっ！！

十八ノ巻 『羽ばたく夜天』

この地に封印されていた最凶の魔化魍・オロチ。

復活したオロチは闇の書の防衛プログラムのコアを取り込み、
『ヤマタノオロチ』となってしまうた。

「チィ………ツ!!」

ラハブは現在狼形態のアルフの背中で気絶しているサカキの胸倉を掴み、その頬を平手で叩き始める。

ちなみにソラもアルフの背中に乗っている。

「おい！ 起きろ！ サカキ!!」

「な……あ、あんたっ！ 何やってんだいつ!!」

いきなりの事に驚きつつ、ラハブを止めようとするアルフ。

サカキは一瞬起きるが、すぐに意識を刈り取られた。

「おい執務官っ！！」

「なっ、何だっ！？」

アルフの制止を無視し、今度はクロノに叫ぶ。・・・平手打ちを続けながら。

「ここに居る全員連れて逃げろっ！ 後は俺とサカキ、ソラとキバツトでやるっ！！」

『！？』

その場に居た全員が驚いた。あんな怪物を相手に、ヤマタノオロチ たった三人と一匹だけで戦うと言うのだから無理もない。クロノ達は直ぐさま抗議する。

「待てっ！ いくらなんでも無茶だっ！！」

「そうですっ！ 錬矢さん達だけなんて……」

「私達も一緒に戦いますっ！！」

クロノ、なのは、フェイトが声を上げる。だが……。

「うるせエツ！ 俺は執務官の小僧と話てんだっ！！ お前らは黙
ってるっ！！」

怒鳴り付けられ、二人の少女はビクツと震え目に涙を溜める。

ラハブ………錬矢は子供好きだ。何時いかなる時でも、子供には優しく。それが彼の信条でもあったが、今は構ってられない。それだけ余裕がないのだ。

「お前ツ！！ フェイトとなのはお前達の事を思ってるんだぞっ！？ それに二人は強いんだっ！ あんな怪物相手でも……」

直ぐさまアルフが噛み付く。確かに彼女の言う通り、なのはとフ

エイトはAAA相当の高ランク魔導師。彼女の言い分も理解出来る。……だが、ラハブにしてみれば、たった“それだけ”だ。

ラハブは舌打ちしながら再び怒鳴ろうとする。だがその前に、今まで黙っていたシグナムが割って入った。

「チツ……！ あのなあ」

「『魔化魍には魔法が効かない』。……そうだろうか？ 荒木」

「……ああ」

シグナムに視線で『落ち着け』と言われ、ラハブは声のトーンを下げる。

「ちよっ……魔法が効かないって、どういう事さっ!？」

「言葉通りの意味だ。いや、正しくは『魔法も効かない』か。そうだろうか？」

「ああ、シグナムの言う通り、魔化魍には、音撃を除いた攻撃は効果薄い。そして、決定打にならない。特にオロチにはな」

落ち着きを取り戻したラハブは、魔化魍について簡潔に説明する。なのは達は、まさか自分達が住む世界にそんな恐ろしい存在が居ると知り、顔を青くしながら質問する。

「あの・・・・・・・・それじゃあその音撃が使えるのは・・・・・・・・」

「サカキだけだ」

実際は『世界の破壊者』と呼ばれるライダーも、魔化魍を音撃無しで倒せるが、タイミング良く現れる筈もない。

それに、ラハブはこの世界について調べ、サカキ以外の鬼は存在しない事が分かっている。

「それに君達・・・・・・・・はやてちゃんももう限界だ」

これがもう一つの理由であった。

なのは達は防衛プログラムのコアを取り出す際に、コアを守る強固な防壁を破るため一斉攻撃を掛けた。そのためかなりの魔力を消費しているのだ。

特に、はやては何の訓練も受けておらず初戦闘をしたため、魔力も体力も限界で、現に、リインフォースとのユニゾンには既に解け、リインフォースとシヤマルに支えられている状態であった。

「あの……でも」

「分かった」

「クロノっ!？」

「彼の言う通り、僕達はもう魔力が限界だ。それにあの怪物に魔法が効かないのなら……僕達は足手まといだ」

「ッ……!!」

なのは、フェイトは奥歯を噛み締め悔しいそうな顔をする。自分達が今まで培い、一生懸命練習してきた魔法が、何も出来ない事が悔しいのだ。

クロノは何も言わず転送の準備をする。

「……シグナム、お前達も」

「断る」

「管理局の船につて、はあっ!？」

予想外のセリフ。ラハブだけでなく、クロノ、なのはフェイトもハトが豆鉄砲を喰らったような顔になる。

魔化魍には魔法が効かないのはシグナムも重々承知のはず。それはベルカ式だろうが、ミッド式だろうが代わらない。なのに何故・
・
・
・
・?

ラハブが突っ込もうとすると、シグナムはフンと胸を張り、言い放つ。

「攻撃が効かないのは承知の上だ。だが、怯みはするだろうか？
でなければお前が残る理由が無い」

「いや、そりゃそうだけど……」

「魔力の方も、デカブツに一撃入れただけだから問題無い。それに・
・
・
・
・」

そう言つてシグナムは、懐からある物を取り出す。
それは箱。それも何処にしまったたとツッコミたくなる程。計二
十箱。

ラハブが箱の中身を見る。中身はカートリッジだった。一箱三ダース。

「前に主はやてとサカキが見ていたアニメで、『戦いは予備弾装を
持っていたほうが勝つ』というのがあってな」

「フルタル・パニックっ!? てーかそれ言った奴死んだよなっ
!?!」

「問題無い。それと、私だけでなく、ヴィータとザフィーラ、そし
てリインフォースも残る。主はやてには既に話をして許可を得た」

『ええっ!?!』

四人ははやてを見る。リインフォースとシャマルに支えられてい
るはやては、苦笑混じりに頷いた。
「どうやら、ラハブとなのは達が言い争っている間に話し合ったら
しい。」

「……………はあああ、しょうがねえな。足引っ張んなよ」

「フッ、吐かすな」

ラハブはとうとう折れ、シグナムは不敵に笑う。

話も纏まり、アースラに避難するのはクロノ、なのは、フェイト、アルフ、はやて、直接戦闘に向かないシヤマル。ヤマタノオロチと戦闘するのはシグナム、ヴィータ、ザフィーラ、リインフォース、サカキ、ソラ（+キバット）、錬矢となり、避難組はクロノを中心に集まっていた。

「……………それじゃ、みんな気いつけてな」

「「「はい」」」

「分かってるって」

はやては心配そうに言うと、シグナムとザフィーラ、リインフォースとヴィータははやてを安心させるように返事をする。

「分かってるとは思うが、援護とか言って武装隊連れて来るなよ。来ても役立たずだ」

「分かっている。命を捨てるような事はしない」

意識が無いサカキとソラの首根っこを掴みながら、ラハブはクロノに念押しする。

クロノはそう返事をする、はやてとシヤマル、悔しいさと納得出来ない顔をしているのはとフェイト、二人を心配するアルフを連れ、アースラへ転送。その場から消えた。

「……………さて」

見送りを終えたラハブは、ヤマタノオロチを見上げる。

ヤマタノオロチは唸り声を上げ、八つの頭を全てラハブ達に向けていた。

ラハブは「ふう」と息を吐くと、サカキを起こすため拳を振り上げた。

『ちょっと待てっ…!』

逆鬼は巨大化させた茜鷹に乗り、何とか取り付こうとするが、八つの首が暴れ回り近付くことが出来ない。

「マ・・・マズイな・・・！！」

ヤマタノオロチの首の一つに食われそうになっているを何とか踏ん張りながら、ラハブは呟いた。

戦況は極めて不利。元々凶悪だったオロチが防衛プログラムのコアを取り込んだ事でさらに凶悪になり、魔法耐性も付いたようで並の攻撃が効かない。

それにこちらが六人に対し、ヤマタノオロチの首は文字通り八つ。数が足りない。

「まあサカキ達も、オロチ一体倒すのに八人掛かりだったし・・・。。

っ！か誰か助けろー！！ マジで食われるー！！」

「駆けよ、隼っ！ シュツルムファルケンツ！！」

「ぐぐぎゃああああああつー！！」

Side：リインフォース

『ガアアツ!!』

「く………!!」

首の一つから放たれた、雷を纏まった金色の放流……これは砲撃だ。砲撃を避けながら、私は悪態付く。

今の砲撃はフェイト・テストロツサの魔法だ。どうやら防衛プログラムのコアを取り込んだ事で、闇の書の際に蒐集したリンカーコアの持ち主である魔導師の魔法が使えるようだ。この調子なら、守護騎士達や高町なのはの魔法も使えるだろう。

私は首からの攻撃に注意しながら、眷属である巨大な鳥の背に乗っているキバを見る。

私が断片的に覚えている記憶………いつの頃かは分からない

い。その中で覚えているかつての友、アーク、闇のキバ、黄金のキバ……そして、『白銀のキバ』。

『白銀のキバ』がその力を封印したのが、蒼剣……つまり、目の前にいるキバだ。

もし、蒼剣ではなく、白銀であったなら、今の状況はよかったかも知れない……。

だが、首からの……今度は桜色の砲撃を避けながら、その考えを捨てた。

『もしも』の考えをした所で、何もなりはしない。今は目の前の、主達に仇なす存在を何とかしなければならぬ。だが、どうすれば……。

“……私の声、聞こえますか？”

「!?!?」

……突然頭の中に聞こえてきた声に驚いて、私を食おうと伸びてきた首を避けるのに紙一重になってしまった。……何だっ!?!?

“ ああ、すいません。突然声を掛けて驚きましたよね ”

頭の中に聞こえた声は謝罪する。……………声は若い女の声。
若い、どこか落ち着いている、感じからして主はやてより上。私
の知っている人物の声ではない。……………悪意は無いようだが・
……………。

“ お前は誰だ。どこから話している ”

警戒しながら、念話の要領で返す。

相手は何処の誰とも分からない女。目的が分からない以上、警戒
は必要だ。

“ ……すみません。私が誰かは言えません。ですが、あな
た方の敵ではありません。それは信じて下さい ”

再び謝罪する女の声。声だけのはずなのに、頭を下げる姿が目
に浮かぶ。……………はあ。

“………用件はなんだ？”

“え？”

“用があるから私に念話を送ってきたんだろ？ 言ってくれ”

首に銀色の砲撃を放ちながら、そう言う。………ダメージは無しか。

“えと、その………”

“どうした？”

“あ、はいっ！”

戦闘中とわかっていながら、場違いにも微笑んでしまう。

“用件と言いますが、お願いなんです。………兄に、力を貸してほしいんです”

“兄？”

“はい。魔化魍は兄しか倒せません。ですが、あの魔化魍……
・オロチ相手では、兄一人では倒せないんです。だから、兄に力を
貸して下さい。……” “私を” 通せば、貴女と兄は一つに……
・…… 『ヨミ夜天を羽ばたく鬼』 になれます”

“待て、『一つ』になると言つのはまさか……”

“はい、その方法は ”

「はあっ!!」

音撃棒を振るい、逆鬼は烈火弾を放つ。が、予想通りヤマタノオ
ロチにはダメージは無い。

『ガアアアツ!!』

「うわっ!?!」

《!!》

首から放たれた金色の砲撃を、茜鷹が翼を羽ばたかせ避ける。

逆鬼は心の中で舌打ちする。

かつて、逆鬼達が戦ったオロチは、逆鬼を含めた戦鬼が八人掛かりでやっと倒した。だが今回は八つ頭のオロチ。対して逆鬼達は六人。圧倒的に火力が足りない。いったいどうれば……。

「サカキっ!!」

逆鬼がどうしようか頭を捻っていると、別の首と戦っていたはずのラインフォースがこちらに飛んで来た。

逆鬼は驚いて、烈火弾を放ちオロチの首を牽制しながら茜鷹を移動させ、ラインフォースに近付く。

「おいおいっ！ 何で来たんだよっ!!！」

「すまない。どうしてもな……………。サカキ、手を出せ」

「はい？ いや何で……………」

「いいからっ!!！」

「あ、ああ……………」

リインフォースに押され、逆鬼は右手を出す。

そして、リインフォースも自身の右手を逆鬼の右手に重ねた。

「行くぞ……………」
『ユニゾン・インツ!!!!』
「」

瞬間、逆鬼とリインフォースを、黒い光が包んだ。

「あ、あれは……」

黒焦げになった（元々黒いが）ラハブを、スカイファルコンに乗せていたキバは、目の前の光景に目を奪われていた。

いや、キバだけでなく、シグナム達もだ。

リンフォースが逆鬼に近付いたと思ったら、二人が黒い光に包まれたのだ。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!』

本能がそうさせたか、ヤマタノオロチの三つの首が逆鬼とリンフォースを包んだ黒い光に襲い掛かったのだ。

光に見とれていたキバ達は反応が遅くれ、急いで向かうが残る五つの首がその行くてを邪魔するように、キバ達に襲い掛かる。

「く……………！」

ヤマタノオロチの猛攻を避ける。そのうちに、逆鬼達を包んだ光に、三つの首が襲い掛かる。

だが、黒い光が弾け、何かに“切られ”、三つの首は残る五つの首を巻き込み、ヤマタノオロチはクロノの魔法の【エターナルコフィン】の影響で凍った海に倒れた。初めてのダメージだ。

光が弾けた場所、そこには黒い羽が舞い散り、巨大な漆黒の翼を持った鬼が、大太刀を振り抜いた状態で飛翔していた。

「……………降臨」

光から現れた漆黒の翼の鬼は、男と女の……………逆鬼とリインフォース二人の声を発しながら、左手を高々と上げ、宣言した。

「【満を持って………!】」

十九ノ巻に続く。

十八ノ巻『羽ばたく夜天』（後書き）

逆鬼もパワーアップ！ 次回、勢揃いです！！

ただ今SttSの構想を練っているのですが、気付いたらエリオの存在が抹消されてました。……………ダメですかね？

十九ノ巻『集う戦鬼』（前書き）

リインフォースの喋り方に違和感があるかも……。そんな十九ノ巻です。

十九ノ巻 『集う戦鬼』

「【降臨、満を持して……………!】」

光の中から現れ、襲い掛かるヤマタノオロチを切り裂いた漆黒の翼の鬼、その名は『逆鬼夜天（さかきやてん）』。

逆鬼夜天は高々と左手を上げて名乗りを上げ、そして

「……………つて、『降臨』つて何だあああああつ!?!?」

【自然と出て来たな……………】

絶叫した。どうやら名乗りセリフは自然と出たらしい。

「つーかお前っ! コレ何だよっ!?!?」

【それは……………。! 来るぞっ!?!】

リインフォースの警告と同時に、ヤマタノオロチが傷付けられた事に激情してか、八つの首全部で逆鬼夜天に襲い掛かる。

逆鬼夜天は内心舌打ちし、まずは避けようと行動を起こし・・・
・驚かされた。

(!?)

それは一瞬だった。逆鬼夜天は迫り来る首を避けるため、新たに体の一部となった翼を動かした。だが気付いた時、逆鬼夜天は七つの首を避け、八つ目の首のすぐ横を通り過ぎようとしていた。

逆鬼夜天は慌てて右手に持った大太刀を横に薙ぎ払い、角を切り落とす。

(反応が、出来なかった・・・)

ヤマタノオロチの遙か後方。ヤマタノオロチの悲鳴を聞きながら、逆鬼夜天は自分の力に驚きを隠せなかった。

改めて、自分の姿を見る。

体は黒の鎧に変わっており、金の装飾に赤のラインが入っている。左手には肘から指先まで覆う、黒鉄に光る無骨な籠手。対称的に右手は動きやすい、軽装の籠手。両足は左手と同じように、膝から爪先まで具足で覆われている。

マスクは目から下の部分が銀色になっており、ゴーグルのようになっている。

そして、一番目を引く巨大な翼。鋼のような硬質を持ちながら、動物の翼と同じようにしなやかに動かせる。

最後に、右手に持った大太刀に目を向ける。

大太刀は鍔つばの部分が筒状になっており、その前面部に小さな刃がついている。

形はまったく違うが、それは紅葉が作ったあの短剣であるのが分かった。

『グワアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

【サカキっ!!】

「!!」

リンフォースに叱咤され、我に返った逆鬼夜天は、角を切り落

とされ怒るヤマタノオロチの砲撃を避ける。だが、強すぎる力と慣れない飛行で避けたため、上手く止まれずバランスを崩し数回回転してしまう。

「わだだだだっ!？」

【のわっ!？……………何をやっているんだっ!！】

「い、いや、上手く飛べなくて……………」

【飛ぶ事を意識しなくても、落ちわしない。攻撃に集中しろ……………
……………そのために私がいる。お前が手が回らなくても、私がサポ―トする。サカキ、今はお前と私、二人で一人なんだ】

「……………分かった。任せる」

本来、サカキは出会ってから数時間しか経っていない相手に背中を任せるほど甘くはない。錬矢やソラに対してもそうだった。だが、この時は自然とリインフォースを信頼出来た。

みたひ
三度襲い掛かるヤマタノオロチ。逆鬼夜天も三度翼を羽ばたかせ……………今度はリインフォースが制御し、ジグザグに飛行しながらも安定した飛行でヤマタノオロチの首の一つに接近し、大太刀に変化した紅葉の剣を振るう。

「ははっ。……………マジかよ」

思わず渴いた笑いが出るラハブ。キバ、キバット、シグナム達も同様だ。

それもそうだろう、自分達が苦戦した相手をユニゾンしたとは言え、圧倒しているのだから。

「……………しかし、サカキは何故ユニゾン出来たんだ？」

シグナムの疑問はもっともであった。

本来、融合騎は主か一部の魔導師か騎士としかユニゾン出来ない。ユニゾンデバイスロードしかし、サカキはそのどちらでもない。なのに何故……………？

シグナム達は何度頭を捻つてもわからなかった。

「それはな、主人公補　　パアアアアアアアアツ！！

ラハブがメタ発言をしようとした時、突然列車の汽笛のような音が妨げた。

「あ、あれは……………！？」

キバが指差す方向、そこには、虹色の穴から線路が伸びていた。

「……………やっと来たか」

パアアアアアアアアツ！！

「な、なんだっ！？」

列車の汽笛は逆鬼夜天の耳にも届いていた。

ヤマタノオロチと戦闘していた逆鬼夜天は、音のした方向に目を向ける。そこには虹色の穴から線路が伸びており、逆鬼と逆鬼の中のラインフォースは首を傾げた。

【これは……………】

「線路……………か？」

そこにある場違いの物に、二人は怪訝な顔になる。すると、再び汽笛が聞こえ、虹色の穴から線路をつたって黒い列車が現れた。

「【なっ・・・・・・・・！？】」

黒い列車は先頭の第一車両の上部が開き、四連装の砲身が現れヤマタノオロチに攻撃を始めた。

『グワアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！？』

ダメージを受け、雪崩のように倒れるヤマタノオロチ。

黒い列車は凍った海の上を滑るように停車した。

ラハブ達が列車に集まっているため、逆鬼夜天も降りる事にした。

「よつと・・・・・・・・なあ錬矢、コレは何なんだ？」

「時を走る列車、『ゲキライナー』だ」

凍った海に着地した逆鬼は、まず知っているだろうラハブに聞く。そして案の定知っていたラハブは、黒い列車　ゲキライナーについて話し始めた。

「時の砂漠を走り、過去と未来、そして今を行き来する事が出来る。それが時の列車。このゲキライナーは、複数ある時の列車の一つだ」

「ちょっと待て、それじゃあド　えもんのタイムマシンみたいじゃねえかつ！　スゲー！！」

「ヴィータ、そこでドラえ　んをチヨイスするか。俺はタイムボンを思い出したが」

「サカキ、そのチヨイスのほうがどうかと思うぞ？」

「そうそう」

そこに新たな声。その人物は第一車両から降り、逆鬼達に近付いてきた。

「タイ　ボカンはないでしょ。せめてマツハゴー　ーゴーで」

「そののほうが分からんっ！　っかそれ作者が幼稚園児の時の新装版だろっ！！　分かる人少ないからっ！！」

てかお前いきなり出て来て誰だよっ!!」

逆鬼、久しぶりのツッコミ。登場早々ボケをかました人物は、
「あ、そっか」と言う。

「名乗るのが遅れたな。俺は黒谷瞬くろたにしゅん、『仮面ライダー撃王』さっ!
!」

自己紹介し、サムズアップする人物 撃王。
今逆鬼達の前に居るのは撃王の複数の変身フォーム内の一つ、黒
いアーマーの『撃王・ストレイフォーム』だ(以後、撃王SF)。

撃王SFは逆鬼夜天、キバ、ラハブに仮面の下からでも分かる笑
顔を向けた。

「あんたらがこの世界ライダー!? いやー、ディンゴさんから聞
いてたけど、ホントに変わってるなー!!」

「は、はあ……………」

「な、なんだコイツ……………」

逆鬼夜天に近付き背中をバシバシ叩く、馴れ馴れしい撃王SFにキバと逆鬼は戸惑う。

「瞬君、それぐらいにしまたらどうだい。皆、戸惑ってる」

「あ、ディンゴさん」

さらに新たな声。その声の主……灰色の髪に何故か白衣を着ている人物 『ディンゴ・サーペント』は、逆鬼達の目の前の車両から降りるやいなや、ラハブに不敵な笑みを向けた。

「久しぶりだね、守護者も恐れる悪魔王くん？」

「遅いじゃねえか、捕食者よ」

Side・ディンゴ・サーペント

「久しぶりだね、守護者も恐れる悪魔王くん？」

「遅いじゃねえか、捕食者よ」

久しぶりに会って早々皮肉を言う。まあ、これはいつもの事だ。

「錬矢、こいつ誰だ？」

錬矢が変身したラハブにそう聞いたのは、漆黒の翼を持った黒い鬼。

以前錬矢が送ってきた画像とはかなり違うが、彼が逆鬼。その後ろにさりげなく居るのがキバ……この世界のライダーか。

「ああ、こいつはディンゴ・サーペント。俺のダチだ」

「初めまして、ディンゴ・サーペントだ。よろしく」

鍊矢が紹介してくれたので、笑顔で右手を差し出す。

そして彼は……手を出さない。どうやら警戒されているようだ。その近くの守護騎士も同じく……特に赤毛の女の子の視線がキツイ。

僕は苦笑しながら手を引き、視線を撃王……瞬君に向けた。

「瞬君、彼らを降ろしてもらえるかい？」

「はいっす！」

元気よく返事をした瞬君は、僕が降りた車両に飛び乗る。そして、僕は鍊矢に視線を戻す。

「鍊矢、オーナーに頼み込んで君に頼まれた“者”を連れて来たよ」

そう言って車両に視線を向ける。そして、彼らが頼まれてい“者

”を持って降りてきた。

「ふんっ」

両肩に成人男性三人を担いで降りたのは、瞬君の契約イメージの一体。赤茶色の象がイメージのフロント君。

「ふう」

フロント君と同じように二人の成人男性を担いで降りたのは、銀色の恐竜……ティラノサウルスがイメージのティラ君。

「よっどー！」

男性一人を肩に担いだのは、海の底のように深い青色をしたイカがイメージのキッド君。

その場に居た全員……錬矢以外ね。錬矢以外の全員が警

戒心をむき出しにする。その中で、三人はそれぞれ担いでる男性を・
。。。。。

「」「よっ」「」

その場に投げ捨てた。って、ちよつと待てっ!!

「おいコラッ！ お前らなに捨ててんだっ!!」

瞬君も残った男性一人を背負って降りて……。いや瞬君っ!？
君もだからねっ!？ 背負って来た一人今その場に捨てたからね
っ!？ 『ぐえ』って言ったからっ!!

「だって瞬、こいつら重いし」

「だからって捨てるなっ!!」

「いや、貴方も捨てましたからね?」

「……面倒臭え」

コントを始めてしまった撃王チーム。ああ、周りが呆気に取られてるよ。

「……………まさか、おいっ!」

いや、一人だけ違った……………そうだね、彼は倒れてる男性達とは繋がりが強いからね。

「……………まさか、おいっ!」

逆鬼夜天は声を荒上げ撃王チームが投げ捨てた男達に駆け寄る。
そして男の一人の胸倉を掴み、無理矢理起こした。

「おいっ！ 起きろっ！！ ヒビキッ！！」

逆鬼は大太刀をその場に突き刺し、平手で（手加減して）男
ヒビキの頬を叩く。

「イブキッ！ トウキッ！！ ハバタキッ！！ ……あと
ついでにキラメキ、ニシキ、トドロキ起きろ」

続いて豪華な着物を着た男 イブキと和尚の格好をした男
トウキ、髭を生やした男 ハバタキを揺すり、ついでにキラメキ、
ニシキ、トドロキに蹴りを入れる。

『っておいっ！！』

【……その三人の扱いは酷いな】

「大丈夫、俺の中じゃそういうキャラだから。こいつら」
「なるほど」

いきなり蹴りを入れた逆鬼に、その場に居た全員がツッコみ、リ
インフォースが呆れながら聞く。そして逆鬼の説明にラハブだけが
納得した。

「と、遊んでる暇は無いみたいだ」

デインゴがそう言うと、全員が彼が見ている方向を見る。そこに
は倒れていたヤマタノオロチが起き上がるうとしていた。

「瞬君、ゲキライナーで先行してもらえるかな」

「了解っ！」

撃王SFは返事をする、すぐに仲間のイマジン達とゲキライナ
ーに乗り込む。

撃王が乗り込んだ後すぐにゲキライナーは動き出し、線路を空に伸ばしバトルモードへ移行、ヤマタノオロチに攻撃を開始した。

「錬矢、僕達も行くぞ」

「おうっ！」

デインゴはどこからか錬矢のオーガベルトに似た、銀と黒のベルトを取り出し装着すると、懐からまたオーガフォンに似た銀と黒のケータイを取り出し開き、『3・3・3』と押し続いて『ENTERR』ボタンを押す。すると、電子音とともに変身待機音が鳴り響く。

471

《Standing by》

「変身っ！！」

《Complete》

ケータイを高く上げ、ベルトに差し込み横に倒すと電子音とともにベルトから銀色のフォトンストリームが全身に伸び、光り輝く。

輝きが収まると、その場に黒のスーツに銀色のフォトンストリーム。オレンジの複眼のライダー、『仮面ライダーデルタ』を強化した『仮面ライダーデルタ・リヴァール』が居た（以後、デルタR）。

変身が完了したデルタRは、感触を確かめるとベルトに納められているケータイ デルタフォンRを外し、開いて『3・8・2・1』を押しENTERボタンを押した。

《Jet s r i g g e r C o m e c l o s e r》

デルタフォンRから電子音が響くと、凍った海面を砕き、海中から大きなスラスタが目を引く超大型バイク（？）・『ジェットスライガー』が出現した。

「「な、なんじゃこりゃあああああああああつ!?!?」」

突然現れたジェットスライガーに逆鬼とヴィータが絶叫する中、デルタRは『はっ!』と言いながら跳び上がり、空中捻りを見せながら無駄に格好良くジェットスライガーに搭乗するとラハブに声を掛けた。

「錬矢っ！」

「応っ！」

デルタRの声に答え、ラハブは何故か空中三回転捻りを披露してジェットスライガーのジェットエンジンの上に着地し、夜刀ノ神を構えた。

「出せデインゴッっ！！」

「了解っ！！」

デルタRはハンドルを操作し、ゲキライナーの銃撃を受けているヤマタノオロチに向けジェットスライガーを発進させた。

「我々も行くぞ」

「ああ」

「はい」

「ま、待てっ！！」

ア然としていたシグナムが我に帰り、止めに入った時にはすでにグラーフアイゼンの尖った先が、トドロキの頭に入る直前だった……。

「へ………？ ひゃあっ！？」

だが、スパイクが食い込む直前にトドロキが意識を取り戻し、眼前に迫るスパイクに驚きながらも驚異の反射神経で頭を下げグラーフアイゼンの一撃を避けた。

「………ちっ」

『【舌打ちしたっ！？】』

明らかに悪ノリモードの逆鬼とヴィータ。

意識を取り戻したトドロキは、頭を振りながら周りを見る。そして、ヒビキ達が倒れているのを見て、慌ててヒビキ達を揺すり起こ

す。

「ヒビキさんっ！ ヒビキさんっ！！
イブキさんっ！ トウキさんっ！！」

「ん……………？ ううん……………。ここは……………」

「あれ……………確か僕は……………」

「むう……………。確かお経を呼んでいたら……………」

「畑仕事をしてる時に急に……………」

「そや、城の蔵に忍び込んだ時に後ろから……………」

「後ろから殴られて……………！！」

次第に意識が覚醒していき、自分達が気絶する前の事を思いだしてゆく。そんなヒビキ達に、不穏な陰が……………。

「グイータっ！ ギガントだっ！！」

「……おっ」

まだ悪ノリモードの逆鬼とヴィータが、当初の目的を忘れ、とにかくヒビキ達に一撃を入れようとしていた。

『え．．．．．？ のわあああああああああああ
っ！！』

「「待て待てー！！」」

二人は完全に目的を忘れ、ヴィータはギガントフォームのグラール
ファイゼンを、逆鬼は大太刀を振り回しヒビキ達を追い掛け始めた。

477

「．．．．．はあ、ザフィーラ、ファルコン」

「ああ．．．」

「はい．．．」

「まったく、あいつらは．．．」

シグナムはため息を吐きながらレヴァンティンを構え、ザフィー

ラとキバに声を掛け、キバットは愚痴をこぼさずにはいらなかった。

むろん、全員が頭を抱えていたのは言うまでもない。

「むっ!？」

「錬矢、どうしたんだ？」

「いや、向こうで何やら面白そうな事が起きた気が……」

「そうか。というか……真面目にやってくれないかなっ！
？ 結構キツいんだけどっ!?!」

「んな事言われてもなあー。てか来たぞっ！ 撃てっ!?!」

「ああもっっ!?!」

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！！』

「………と、言う訳なんです」

そうヒビキ達に言うソラ。

その後、悪ノリした逆鬼とヴィータを剣の峰での打撃×2と鉄拳で止めた三人と一匹は、混乱していたヒビキ達を何とか（烈火の将がレヴァンティンをチラつかせたりして）落ち着せ、ソラが事情説明をした。

キバから変身を解いたのは、その見た目で刺激しないためと、子供であるソラなら相手も警戒せずに話を聞いてくれる、というザフイーラの提案があったからだ。

「なるほどな。これでアレ（ヤマタノオロチ）と……サカキがあれな理由が分かった」

ソラから説明を聞いたヒビキは、頭からタンコブを生やし正座させられている逆鬼とヴィータを、残念な物を見る目で見ると。他のメンバーも同じくだ。はじめの方ではキバットとザフィーラが、『最近、錬矢に似てきたなあ……』と、思っていた。

確かに、ソラやシグナム達が出会ったばかりの頃のサカキはこんな事しなかった。勿論ヴィータもだ。だが錬矢の“ふざけた”性格がサカキに悪影響を及ぼし、そこから精神的中身が近いヴィータに悪影響を及ぼしたと考えられた。

ちなみに、リインフォースはユニゾンを解いていない。というか、何故か解けない。なので逆鬼とシンクロしている状態のリインフォースも、理不尽にも鉄拳を喰らい、正座させられている感覚だった。

「まあ……アレだ」

『よつこいしょ』と言いなから、正座を解いて立ち上がる逆鬼夜天。途中、正座で足が痺れたのか、バランスを崩しながらもヒビキ達の前に来る。

「俺達だけじゃどうにもならないんだ。．．．．．頼む、手伝ってくれ」

逆鬼の行動に、ソラ達は驚いた。なんと、ヒビキ達に頭を下げるのだ。

ソラ達を知る限り、逆鬼が頭を下げるなんて行為を見た事がない。対するヒビキ達は、いきなり頭を下げた逆鬼に驚き、互いに顔を見合わせる。．．．．．そして、笑顔でこう言った。

「何言ってるんだ、当たり前だろ？」

「そうですね。こんな状況見せられて、何もしいって選択肢ありませんよ」

「そおつすよっ！ それに俺、またサカキさんと一緒に戦えると思うと嬉しいんっすっ！！」

「たった今、仏の声を聞いた。．．．．．戦い時だとな」

「．．．．．あの時と同じだ。ここで逃げたら、妻と子供に会わせる顔がない」

「そつだぜサカキっ！ もう逃げるのは御免だしなっ！！」

「で、お礼はどのくらいやっ？」

ベシッ！！

「いったあゝ！ ……何すんねんっ！？」

「愚か者。自分から見返りを求めるとは何事か、この罰当たりめ」

「まあまあ」

「そんじゃあ………行くぜっ！！」

キラメキの言葉を合図に、ヒビキ達は腰帯に下げていた変身音叉・音角を取り出し、自分の体の部分に叩き鳴らす。

イブキは変身鬼笛・音笛を取り出し吹き鳴らし、トドロキは左手首につけた変身鬼弦・音錠を掻き鳴らす。

炎に、風に、雷に、吹雪に、光に包まれ、七人の戦鬼が姿を現した。

『はあっ！！』

響鬼

- 威吹鬼 -

轟鬼

凍鬼

- 羽撃鬼 -

煌鬼

西鬼

そこに逆鬼夜天も列び、かつてオロチと戦った九人の戦鬼のうち、
八人の戦鬼が現代に集結した。

「……………うおっ！？」

頭の金色のシャチホコが特徴の煌鬼は、突然寒気を感じ声を上げた。

「どっした？」

「いや、急に寒気が……」

「そりゃそうやる。足元凍つとるし……にゃっ!？」

「うわっ!？」

虎がイメージの西鬼は、今自分達が立っている凍った海のせいだと思ったが、煌鬼と同じく寒気を感じた。

そして他のメンバーも、煌鬼や西鬼と同じく寒気を感じ、震え上がる。

「……なんだ今のゾクゾクってきたの」

寒気に身を震わせ、逆鬼は周りを見渡す。

だが周りには、同じように体を震わせている響鬼達やソラ達しか居ない。

・・・・・・・・ボオオオオオオ・・・・・・・・

その時、どこからか汽車の汽笛が逆鬼達の耳に届いた。

【今は・・・・・・・・】

ラインフォースがそう言った時、逆鬼達の前に青白い炎を先導に半透明の線路が伸び、さらにその線路の上を骸骨がついた半透明の汽車が、逆鬼達に向かって走って来る。

逆鬼達は突然の事に避ける事は出来ず、身構えるが、汽車はまるで実体が無いかの如く逆鬼達を擦り抜け、どこかへと消えていった・・・・・・・・。

「・・・・・・・・な、なんやったんや今のっ!？」

「ぶつかると思ったら擦り抜けた・・・・・・・・。あれじゃあまるで」

「おぼっ、おぼっ、おぼっ・・・・・・・・!」

「トウキっ！ お前ああいつのの専門だろっ！？ 早く答えねえとぶっ飛ばすぞっ！！！」

「すまん。アレが何なのか皆目見当もつかん」

「あははは・・・・・・・・・・。冗談だろ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「トドロキさんっ！ トドロキさんっ！？」

西鬼が喋り出したのを皮切りに、羽撃鬼は先程の汽車が何なのか予測を始め、煌鬼とヴィータは口をパクパクさせ、逆鬼は凍鬼に詰め寄り、響鬼は渴いた笑いをして威吹鬼は気絶した轟鬼を起こそうと必死だった。

【全員落ち着け、あれは・・・・・・・・サカキっ！！】

「んあ？・・・・・・・・あれは」

リインフォースに呼び掛けられ、凍鬼をぶん殴った逆鬼は気付いた。半透明の汽車が消えた方向から、誰かが近付いている事に。

取り乱していた響鬼達も、近付いて来る気配を感じ、それぞれの得物に手をかけ、警戒する。

逆鬼夜天や響鬼達やシグナム達が注目する中、近付いて来る人影が明らかになった。

人影は二つ。一人はボロボロの黒い鎧に、電車のレールのような模様の白いマフラー。仮面の額に髑髏があしらわれ、右手に片刃の剣を持っている。

もう一人は、逆鬼夜天や響鬼達と同じく鬼。左右が非対象に赤と緑で分けられ、左の角が大きく、反対に右肩に金色の肩当ての上から角が生えている。装備帯には音撃棒に音撃鼓、音式神と音角を下げている。

逆鬼達、鬼は、近付いて来る二人のライダー　特に鬼に見て、我が目を疑った。

「嘘だろ……………」

何故ならその鬼は、オロチに食われて死んだはずの友だったからだ。

半透明の汽車　幽霊列車の番人『仮面ライダー幽汽・スカルフォーム』。そして『仮面ライダー歌舞鬼』がゆっくりと、逆鬼達の前に現れた。

二十ノ巻に続く。

十九ノ巻『集う戦鬼』（後書き）

キャラ回しが難しい・・・途中、空気のキャラ出る・・・。

まあそんな事はさておき、ちょっとしたアンケート。今後、ソラが変身するキバに、ガルルフォームやバツシャーフォーム、ドツカフオームを追加していいですかね？ 好きなんです、特にドツカが。

それと、自分はシリアスが長持ちしません。どうしてもギャグを入りたい・・・。

では。

二十ノ巻『清める音撃』（前書き）

やっと終わった・・・。

決戦編・ヤマタノオロチはこの巻で終了です。

二十ノ巻『清める音撃』

逆鬼達の前に現れた『仮面ライダー歌舞鬼』と『仮面ライダー幽汽・スカルフォーム（以後、幽汽SF）』。

現れた二人のライダーに、逆鬼達は身を固めた。いや、正しくは歌舞鬼を見て固まった。

歌舞鬼は逆鬼達の友であり、人間に絶望し仲間達を裏切つて魔化魁側に付いた。

だが最終的に仲間を……子供を助けるためオロチに向かつて行き……食われた。その瞬間を逆鬼達は見ていた。歌舞鬼は死んだはずだった。

「カブキ、お前……」

逆鬼の呼び掛けに、歌舞鬼は答えずに装備帯に下げていた音式神のディスクを二枚持ち、音角で鳴らす。

二枚のディスクは黒く染まり、歌舞鬼は空中に投げる。すると、ディスクは変形し鳥型の音式神【消炭鳥^{けしずみからす}】になる。

歌舞鬼と幽汽SFは一気に跳躍し、二体の消炭鳥の背中に乗る。消炭鳥の背に乗った歌舞鬼は、逆鬼達を一瞥し……………。

「……………フツ」

鼻で笑った。

《クワアツ!!》

消炭鳥はひと鳴きし、翼を羽ばたかせヤマタノオロチに向かって行った。そして、その後ろ姿を見ていた逆鬼達は……………。

「……………なんだアイツはあああああああああああああああああああ
あああああああつ!?!」「」「」

キレた。主に逆鬼とヴィータと煌鬼と西鬼が。

【・・・・・・・・ねえ、カブキ、何であんな事したの？】

消炭烏の背に乗った幽汽・・・・・・・・否、ゴーストと契約し、彼にその体を貸しているアリシア・テストロッサは、もう一体の消炭烏の背に乗っている歌舞鬼に声を掛ける。

【だってあの人達って、カブキの友達だよ？ だったら何で挑発するような事したの？】

「・・・・・・・・頭の中空っぽな奴らには、ごちやごちや言うよりあやっただ方が思い通りに動く」

「・・・・・・・・ああ、つまりバカって事か。電王の赤鬼と一緒にだな」

【あ、あははは・・・・・・・・】

ゴーストはかつて戦った電王を思い出し、アリシアは苦笑する。

「それに後ろを見てみな。……………追って来てるから」

アリシアとゴースト……………幽汽SFは歌舞鬼の言う通り、後ろを見る。そこにはまさに鬼の形相の鬼三人と、幼女が一人追って来ていた。その後ろには、頭を抱えた状態で他のメンバーも来ている。

「な？」

「……………本当に頭空っぽなんだな」

【あは、あははは……………】

アリシアは、ゴーストの言う事を否定出来なかった。

たのだが…………。

デルタRの疑問に答えたのは、ラハブであった。

「デインゴ、アレを見る」

ラハブに言われた通り、デルタRはラハブの差す方向を見る。そこには消炭烏乗り、ガンモードにしたサヴァジガツシャーを両手に、ヤマタノオロチに向かって乱射している幽汽SFの姿が。

その姿を見たデルタRは納得する。

「幽汽…………。なるほど、幽霊列車か」

「だな。おそらく、サカキをこの時代に連れて来たのも……………」

「彼らか」

ラハブは以前、何故サカキがどうやって現代に来たのか考えた事がある。それで幾つかの可能性の中で、『死者の世界』を走る幽霊列車に行き着いたのだ。

だが疑問が残る。

「だが何故、逆鬼を連れて来たんだ？ それに今でこそこの世界は『逆鬼の世界』だが、元々は『響鬼の世界』のはず。それなのに何故響鬼ではなく逆鬼を……」

「まあ、確かにな。その所は分からないが……いや」

ラハブは一旦話を切り、漆黒の翼で飛来する鬼の姿を見て、再び言葉を続けた。

「もはやどうでもいい事だ。今俺達がどうこう言おうがここは『逆鬼の世界』だ。誰がどう言おうがな。それに……大事ななのは『今』だ」

ラハブの言葉に、デルタRはため息を吐きつつジェットスライガの操縦桿を握り直す。

絶望あぐむの終わりは……もうすぐそこ。

桜色の砲撃が襲う。

歌舞鬼を乗せた消炭烏はその砲撃を避ける。が、砲撃を避けた直後に衝撃が襲い、バランスを崩してしまふ。

衝撃の正体は、攻撃力と射程を抑える事で速射が可能になった不可視の砲撃。なのはの魔砲（誤字にあらず）で、本来は溜めの長い砲撃を撃つため、衝撃で相手を拘束するのに使う。

「しまっ………！！」

不可視の砲撃でバランスを崩し、歌舞鬼は消炭烏から落ちそうになる。そこを狙い、ヤマタノオロチが襲い掛かる。

『ガアアッ！？』

だが、何か見えない壁に阻まれたように首は上に弾かれた。

そして………漆黒の力に包まれた煌めきが襲う。

「【夜輝・・・・・・・・一閃っ!!】」

漆黒の斬撃に切り裂かれ、首は他の首を巻き込み凍った海に倒れた。

漆黒の斬撃を放った人物・・・・・・・・逆鬼・夜天は、ゆっくりと歌舞鬼の前に降りた。

「カブキ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・へっ、なーにシケた顔してんだ。

お前はウジウジ悩まねえで、周り迷惑や後先なんて考えずにやりたい事をやるのがいいところだろうが。だからお前にそんな真面目な面は似合わねえよ」

久しぶりに聞いた友の声・・・・・・・・。それはかつて、人間を憎んでいた時のものではなく、酒を飲み明かした友としてのものだった。

「そう、だったな。俺は周りの迷惑や後先なんて考えずに・・・・・・・・
・ちよっと待て、それってひょっとしてバカにしてる？　と言うか

バカにしてるよね？ 絶対そうだよな？ カブキ君、こっち見よっか。その頭がち割るから」

「んな事より、サカキ。あとサカキの中に居るのも、ちょっと耳貸せ」

「ねえ、話逸らさないでちゃんと聞こうか。ていうか最初の『・・・フツ』の事もあるし。・・・チョット頭、冷ソウカ？」

【サカキ、それは10年後のネタだ】

この短時間ですでにこの世界の色に染まっているリインフォースはさておき、歌舞鬼は逆鬼・夜天にその内容を伝える。

その内容を聞いた逆鬼は仮面の下で、笑みで顔を歪ませた。

「なるほどね、そいつは楽しそうだ」

「だろ？ だが“これは”俺達だけじゃ無理だ。ヒビキ達にもやって貰わねえと出来ねえ」

「分かってる。リインフォース」

【ああ。お前の友の近くには、シグナムやヴィータが居る。思念通話で、シグナム達から伝えて貰おう】

そう言うとリインフォースは、すぐにシグナム達に念話を送り、シグナム達を介して響鬼達に歌舞鬼の考え伝える。返事はもちろん……。

【……………話がついた。合流しよう】

「おお」

ヤマタノオロチの眼前に、ゲキライナーが横向きに停止し、その上に戦鬼達と騎士が勢揃いしていた。

『グルアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!』

「行くぜっ!!」

ヤマタノオロチの咆哮と逆鬼・夜天の声を合図に、歌舞鬼、威吹鬼、轟鬼が飛び出す。

「ふっ、音撃打・業火網爛っ!!」

音撃打・業火網爛

歌舞鬼はヤマタノオロチの首の一つの頭に着地、装備帯のバックル部分に装着している音撃鼓を首の頭に取り付け、音撃棒・烈翠を頭上で打ち合わせ音撃鼓を叩き始める。

「せいつ、音撃斬・雷電激震っ!!」

音撃斬・雷電激震

轟鬼は歌舞鬼とは別の首の頭に着地し、音撃モードにした音撃弦・烈雷を掻き鳴らす。

「ふっ、はっ、音撃射・疾風一閃っ!!」

音撃射・疾風一閃

威吹鬼は音撃管・烈風から鬼石を撃ちだし、ヤマタノオロチに当たったのを確認すると音撃鳴と合わせ音撃モードにし、吹き鳴らす。

「ふんっ！ 音撃殴・一撃怒涛っ!!」

音撃殴・一撃怒涛

ゲキライナーの車体の上で、凍鬼は音撃鼓をすぐ横に展開させ、音撃金棒・烈凍で力強く叩く。

「音撃拍・軽佻訃爆っ！！
せいっ！ せいっ！！」

音撃拍・軽佻訃爆

凍鬼と同様に、ゲキライナーの車体の上で煌鬼は両手に持った音撃震張・烈盤を叩き合わせる。

「音撃響・偉羅射威っ！ 偉羅射威っ！ 偉羅射威っ！！」

音撃響・偉羅射威

「ふっ、ふっ！ 音撃奏・旋風一閃っ！！」

音撃奏・旋風一閃

凍鬼、煌鬼の横に並び、西鬼は音撃三角・烈節を三角形に組み、トライアングルのような形にすると音角で叩き、西鬼の横に並んだ羽撃鬼は音撃吹道・烈空を吹き矢のように構え、鬼石を発射し、すぐに横向きにフルートのように構え吹き鳴らす。

そう、これが歌舞鬼の策。

一人だけの音撃ではヤマタノオロチは倒せない。ならば、ここに居る鬼達全員の音撃を共鳴させ、一つとなった巨大な音撃でヤマタノオロチを倒そうと言うのだ。

だがこの大合唱の中に、逆鬼・夜天と響鬼は入っていない。二人

には……否、三人には、彼らにしか出来ない役割がある。

「行くぜ、猛士。……響鬼、装甲……!!」

響鬼は逆鬼の持つ、紅葉の剣に似た短剣　猛士の剣を構える。
すると、響鬼は紅い炎のような覇気に包まれ、姿が変わってゆく……。

真紅の鎧を身に纏った鬼、響鬼・装甲である。

「【はあああああああ……!!】」

響鬼・装甲、逆鬼・夜天、そして逆鬼の中に居るリインフォースは、構えた太刀に声を吹き込み、力を与え、増大させていく……。

猛士の剣が変化した太刀は吹き込んだ声を増幅し、音撃波として放つ事が出来る。

そして、逆鬼が持つ紅葉の剣が変化した大太刀も、同様に吹き込んだ声を音撃波にして放つ事が出来る。……とリインフォースが言っていた。

そこで逆鬼・夜天と響鬼・装甲の役割は、歌舞鬼達の大音撃で弱ったヤマタノオロチにトドメをさす事。故に、逆鬼・夜天と響鬼・装甲は一撃必殺の音撃波を放つため、限界まで声を増幅させるのだ。さらに、それだけではない。

「行くぞ、ソラ」

「はいっ！」

ラハブの声に、キバは返事をする。

ラハブは跳躍、ヤマタノオロチの頭の一つに着地し、手に持っていた逆鬼の音撃武器の一つである、音撃モードにした音撃弦・烈断を突き刺し、掻き鳴らした。

そしてキバも、逆鬼の音撃武器である音撃モードにした音撃管・烈波を構え、吹き鳴らす。

ラハブとキバも交えた大音撃。ヤマタノオロチも黙って音撃を撃ち込まれている訳ではない。

『グウ………ガアアアアアアアアアアアッ！！』

歌舞鬼、轟鬼、ラハブが乗っている首や、威吹鬼、羽撃鬼が鬼石を撃ち込まれずに残った二つの首が、音撃を中断させようと口に桜と金色の力を溜め、放とうとする、が、それを阻む者達が居た。

「砲撃など、撃たせはせんっ！ 鋼の軛っ！！」

白銀の杭が、首の一つに突き刺さり、拘束し……………。

「駆けよ、隼っ！ シュツルムファルケンツ！！」

音速を超えた矢が撃ち上げ……………。

「轟・天・粉・砕っ！ ギガントシユラアアアアクッ！！」

巨大化した鉄槌が、その脳天を穿つ。

そして、もう一つの首には……。

《《Full Charge》》

「ぶっ飛べっ!!」

「消えろっ!!」

ゲキライナーのコクピットから飛び出た撃王SFは、ゲキガツシヤーをガンモードに組んだ上でベルトのバックルにライダーパスをタッチ。エネルギーがゲキガツシヤーに流れ、引き金を引く。

続いて幽汽SFもライダーパスをバックルにタッチ。青白い炎がアーマーから剣へと移り、その状態のまま剣を振り抜く。

《《Exceed Charge》》

「ハッ!!」

デルタRはジェットスライガーから跳び上がり、デルタフォンRを開きENTERボタンを押す。するとベルトからエネルギーが流

れ、フォトンストリームを伝い右足に集まる。

そして、デルタRが右足を首に向けると、右足から銀色のマーカ
ーが発射され首の動きを拘束する。

「喰らえっ！！」

デルタRがマーカーに突っ込み、マーカーがドリルのように回転、
ヤマタノオロチの皮膚を削る。

瞬間、デルタRの姿が消え、首の直下に現れる。

首に『』のマークが現れた直後、撃王SFが撃った【レールガ
ン】と幽汽SFの【ターミネイトフラッシュ】が直撃、首が弾き上
げられた。

「だあっ！！」

音撃鼓が響き。

「でいつ！！」

音撃弦が轟き。

「はあっ!!」

音撃管が息吹く。

七戦鬼とラハブ、キバの音撃が鳴り響き、ヤマタノオロチは徐々にその力を弱めていく。

『グル…………ガアア…………!!』

「『はああああああ…………!!』」

そして、逆鬼・夜天と響鬼・装甲が持つ太刀の力が増していき、刃が炎の刀身となる。

【よし…………。全員離れるっ!!】

太刀に力が溜まったのを確認したリインフォースは、ヤマタノオロチにとり付いていたメンバーに声を掛ける。

ヤマタノオロチの近場に居たメンバーは、リインフォースの呼び掛けに応じ離れる。それを確認した逆鬼・夜天と響鬼・装甲は太刀を振り上げ……巨大化した炎の刀身を叩きつけた。

「【あああああああああああつ！！】」

振り下ろされた二本の炎の刃……【音撃刃・鬼神覚声】により、ヤマタノオロチは×字に切られ、大量の木の葉となり、凍った海に舞い散った。

……絶望^{あくむ}は、終わった。

『おまけ・アースラでは……………』

リンディ「エイミー、現場の映像はまだ出ないのっ!？」

エイミー「すみません、まだ……………。あー！ サカキ君とリ
インフォースが光に包まれた所から急に映らなくなっただし、なんで
っ!？」

なのは「リンディさん、クロノ君、私達やっぱり行きますっ!！」

クロノ「待て、ブラックドラゴンの言った事を忘れたのか？ あの
相手には、魔法が効かない……………足手まといになるだけだ」

フェイト「でもクロノ、このままじゃ……………」

はやて「あー、皆さん。心配ありませんよ?」

なのは「はやてちゃん?」

はやて「うちの子達もサカキも、あれぐらいじゃやられませんで。
……………ちゅうか、今さっきシグナムから念話で連絡が来て、
倒したそうです」

なのは「フェイト・クロノ・エイミー・リンディ」えっ!？」

はやて「な、シャマル」

シャマル「はい。サカキ君とリンフォース、ファルコンちゃんに
錬矢さん……それに、サカキ君の友達が」

なのは・フェイト・クロノ・エイミー・リンディ『友達っ!?!』

二十一ノ巻に続く。

二十ノ巻『清める音撃』（後書き）

これにて戦闘パートは終了。A・S編も次回で終わり。次回はエピソード的なものをやります。では。

キャラ・ライダー設定（前書き）

今回は連続投稿。今までやってなかったキャラとライダーの設定です。

なお、リュウガ、オーガは公式と同じなので省きました。

キャラ・ライダー設定

名前/サカキ

年齢/見た目・10、12、実年齢・36

容姿/黒髪のザンバラセミロング、鋭い黒眼

概要

戦国時代で死んだと思ったら、現代に来て若返ってしまった本作の主人公。初対面ではやてにツッコまれるなど、中々のボケぶり。

巫女さんとメイドさんが大好き。妹が一人いる。

魔化魍や戦いに関する事には鋭いが、それ以外には疎い。

時代と“鬼”として生きてきたためか、個人差があるが人間が嫌い。そのため自分が人間と違う鬼である事を誇りにしている。

実はカナヅチと、どこかツンデレ（ツンアホ？）赤鬼を連想させる。キャラが定まっていなとも言える。

名前/ソラ・ザ・ファルコン

年齢/12

容姿/藍色の腰まであるポニーテール、綺麗な青い瞳

概要

聖王教会所属の騎士兼シスターで本作のヒロイン。

礼儀正しく、常に敬語で人には「様」を付ける。そのため周りからの受けはいいのだが、実はそれ以外で人の名前を呼べない。唯一「様」無しで喋れるのが幼なじみのカリム、シャツハ、ヴェロツサ（まっがーれ）、キバットぐらい。

まだ自覚はないが鬼に恋する乙女である（それ故に暴走することも・・・）。

ファンガイアの血族だが、代々の祖先が人間と子供を作ってきたためファンガイアの血は薄い。

名前／キバット・ブレード八世

年齢／人間で言うと15

見た目／体色・銀、眼・蒼

概要

ソラの幼なじみにして最大の理解者。八代目『蒼剣のキバ』の管理者でもある。兄貴分として、ソラの初恋の行方を温かく見守っている。

キバット・バット族とは分家。代々ファルコン家に仕えている。

名前／荒木錬矢

あらいぎねんや

年齢／不明（見た目は二十代後半）

容姿／ザンバラの茶髪、常に黒いサングラスを掛けて見えないが瞳は深紅

概要

全てにおいて謎の存在。無駄に広い人脈を持ち、複数の変身ツールを所持している。

今確認出来るのは、ラハブ、リュウガ、オーガ、G4、そして“アモン”である。

現在は海鳴市のマンションに住んでいる。

名前／デインゴ・サーペント

年齢／不明（見た目は鍊矢と同じか少し上）

容姿／揃えられた灰色の短髪、常時白衣を着ている

概要

鍊矢と同様、ほとんどが謎に包まれている。鍊矢の仲間である事は確かで、鍊矢にドラゴンメモリとラハブドライバーを渡した張本人でもある。他にもガイアメモリの研究。G4、デルタの改造など、科学者のようだ。

仮面ライダー逆鬼

変身者：サカキ

概要

サカキが変身した戦闘形態。【変身音叉・音角】を用いて変身する。

前に伸びる角が二本に後ろに伸びる左右非対象の長さの角。マスキの縁取り・腕の色は赤、体色は黒。炎属性。太鼓の鬼だが、音撃管・音撃弦も使える。他にも、響鬼の鬼棒術・烈火弾や烈火剣、歌舞鬼の鬼縄術、鬼傘術が使える。

本来の実力は響鬼、歌舞鬼と同等。子供になり身体能力が低くなつたが、今までの戦いの経験がそれをフォローしている。

音撃武器は

【音撃棒・烈撃】

【音撃鼓・爆鼓】

【音撃管・烈波】

【音撃鳴・爆鳴】

【音撃弦・烈断】

【音撃震・爆震】。

音撃技は

【音撃打・猛撃必壊】

【音撃射・爆風烈波】

【音撃斬・一刀両断】。

仮面ライダーラハブ

変身者：荒木錬矢^{あらいぎれんや}

概要

錬矢が龍の頭の形をした【ラハブドライバー】と『龍の記憶』が内包した【ドラゴンメモリ】で変身するライダー。全身に龍を模った黒い鎧を纏い、銀色の刺が生えている。

ベルトの横にあるボタンを押す事でマキシマムドライブが発動する。

マキシマムドライブは両足跳び蹴りの【ドラゴンインフェルノ】と回し蹴りの【ドラゴンフアング】。専用武装は【巨砲大剣・夜刀ノ神】^{きよほつたいけん・やこのかみ}。

仮面ライダーキバ・ブレードフォーム

変身者：ソラ・ザ・ファルコン

概要

ソラが変身するライダーで、ソラの一族である『ファルコン家』に代々受け継がれているキバの鎧。通称、『蒼剣のキバ』。

見た目は紅渡が変身するキバと同じであるが、両手に籠手、左足に具足、キバの赤い部分が蒼く複眼が白と細部が違う。ヘルズゲートも蒼であり、ベルトの左腰に銀の魔皇石を鍛え作られた【雪月牙】という日本刀型の剣を差している。

眷属にファルコン家の名前の由来となった『ファルコ族』の『ス

カイファルコン』がおり、フェツスルで呼び出す事が可能。

古代ベルカ時代にファンガイアの王からファルコン家に贈られた。必殺技はヘルズゲートを開いて蹴り込む【ブルーネスムーンプレイク】。雪月牙に魔皇力を注ぎ対象を切る【氷牙一閃】。

仮面ライダーキバ・レオフォーム

変身者：ソラ・ザ・ファルコン

概要

ソラが変身するキバが、【魔獣爪・レオクロー】を装備し、フォームチェンジした姿。キバの肩・胸が紅くなり、複眼も紅くなる。

この姿になるとブレードフォームでは不得手だった攻撃力・防御力が上がり、代わりに得意だったスピードが若干下がる。

さらに、まだ若いソラでは制御しきれず何の戦略も無しに敵に特攻する戦い方になる。ただ、これにはレオクローに変化したライオ族のレオの性格が反映されているせいもある。

使い方しだいでは、体ごと高速回転させドリルのように地中を進み事も可能。

必殺技は、レオクローで相手を掴み上げ空中で切り裂く【レオブラストブレイク】。

仮面ライダー撃王・ストレイフォーム

変身者：黒谷瞬くろたにしゅん

概要

『撃王の世界』の主役ライダーで、瞬が単体で変身する基本フォーム。

電王・ソードフォームと同じだが黒いオーラアーマーに、黒猫の形をした電仮面。猫のような身軽さとゲキガツシャー（デンガツシャーと同形状）をソードモードかガンモードにして戦う。

必殺技はソードモードが【ブラッククロウ】。ガンモードが【レールガン】。全フォーム共通の【ゲキライダーキック】。

仮面ライダーデルタ・リヴァーレ

変身者：デインゴ・サーペント

概要

スマートブレイン社が開発した『デルタ』を、デインゴが強化・改造した。

主な改造はデルタフォン。フェイスと同様に折りたたみ式のケータイになり、ベルトもそれに合わせて改造されている。それぞれ改造前と差異をつけるため名称の後にRリヴァーレが付けられる。

武装にベルトの左右に大型マグナムの【デルタマグナム】が装備され、専用バイクにオートバジンを基にした【デルタバジン】とサイドバツシャーを基にした【デルタバツシャー】が追加された。

ツール無しで必殺技が使用でき、元々あった【ルシファーズハンマー】に加え、【サタンインパクト】、デルタバジンに搭載されている【デルタエッジ】で相手を切り裂く【スパークカット】がある。

仮面ライダー 逆鬼・夜天

変身者：サカキ、リインフォース

概要

逆鬼とリインフォースが紅葉の剣（後に霊剣・紅と命名）を媒体にユニゾンした姿。

全身を黒い鎧で纏っており、背中に巨大な漆黒の翼があるのが特徴。この状態では魔法は使えないが、代わりに攻撃力・防御力・機動力などの全体の能力が上がっており、対魔力耐性が付与され対魔導師戦はこの姿で戦う事が多い。

音撃技は、大太刀に変化した紅葉の剣で逆鬼とリインフォースの声を増幅させ音撃波として放つ、【音撃刃・鬼神覚声】。【音撃打・夜天奏打の型】。

二十一ノ巻『エピローグ』……………だけど最終回じゃない。byサカキ』

あのクリスマスイブの決戦……………『闇の書事件』と呼ばれる戦いから三日。

八神家のリビング。そのソファで、リインフォースにひざ枕をされたサカキが横になっていた。

「ああ……………。ダルい」

「まだ、本調子ではないのだな」

「ああ……………。丸一日寝たのになあ」

「やはり、あの融合ユニゾンが原因だな。

……………本来、融合は主と融合騎しか出来ないからな。その分負担が大きい」

サカキはヤマタノオロチを倒した直後、急に意識を無くし、リインフォースとのユニゾンも変身も解け落下した。

間一髪のでリインフォースが抱き留めたため、海に落ちずに済

んだのだが、サカキはそのまま眠ってしまったのだ。
そして目が覚めたのは、決戦から一日経ったクリスマス夜の夜であった。

それは本来出来なるはずのない、リインフォースとのユニゾン・
・・・逆鬼・夜天が原因であった。

もちろん、主ではない者が融合騎とユニゾンした・・・と
いうのもあるのだが、リインフォースにも来るはずだった負担をサ
カキが全部持っていたのが、一番の原因だったりする。

「まあ、この姿（子供の姿）で変身した時も全身筋肉痛で動けな
かったし、そのうち慣れるだろ」

「そうか」

だがまあ、本人は気にしないし、シャマルの診察でもそこまで
深刻な物でもなかったため、“慣れ”の問題だろう。

「・・・そういや、はやてとヴィータ達、そろそろか？」

「そうだな。そろそろアースラから戻って来る時間だ」

現在、はやてと守護騎士達はアースラにて事情聴取を受けている。
本来はサカキも受けるはずのだが……。

「しるせえっ！ー！」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアツ！？」

・・・というふうには、担当官がサカキのガタツク風飛び回し蹴りによりノックアウト。日を改めて行う事になった。

そしてリインフォースは、実際にリンカーコアの蒐集を行っていなかったため罪状も軽く早々に終わり、まだ本調子ではないサカキの世話をするため残っていた。

「・・・にしても、はやての“アレ”には驚いた」

「ああ、“アレ”か・・・」

それは、サカキが目を覚ました時の事・・・。

「う……うん……？」

「あ、起きたか？」

「はや、て……？」

「動けるか？ もし動けないんやったら、誰か呼んで来るけど……」

「いや……ダルいが、動ける」

「そか。それやったら、食堂行こか？ みんな待っとるし」

「ん……分かった」

「ほなら行こうか。サカキ“お兄ちゃん”」

「……アレには思わず吹いた」

アレというのは、はやての『お兄ちゃん』発言であつた。突然の発言に、サカキはもちろん守護騎士達や魔導師組、鍊矢、ソラ、キバットも驚かされた。

当のはやては、『サカキお兄ちゃんって、お兄ちゃんっぽいし、何となく』との事。

「まあ、確かにはやては妹みたいなものだけども、まさか『お兄ちゃん』と来るとは……」

「嫌なのか？」

「いや、はやてが親しみを込めてそう呼ぶんなら、悪くない」

「そうか。主も喜ぶ」

「ん……」

そう返事すると、サカキは瞳を閉じ、別れを言えなかった仲間達の事を考えながら眠りにつく事にした。

実を言うと、ヤマタノオロチを倒し、サカキが眠った直後、ヒビキ達は撃王チームに眠らされ元居た時代に強制送還された。

ゲキライナーのオーナーとしては、今回の件は特例であり、過去の時間の鬼であるヒビキ達を早急に戻す必要があった。

さらにカブキも、幽汽と一緒に幽霊列車に乗り込み、姿を消しおり、故にサカキは仲間達にロクな別れ告げられなかったのだ。

(あーあ、結局カブキの奴、殴れなかったな……………)

そう思いながら、サカキの意識薄らいでいき、暫くして寝息を立て始める。

その様子を、リインフォースはサカキの額を撫でながら、微笑み見ていた……………。

サカキが眠りについた頃、時空管理局艦船・アースラの一室では、リンディと錬矢がテーブルを挟み向かい合っていた。

「……………では、貴方とサカキ君は、自分が持っている質量兵器を渡す気は無いんですね？」

「その通り」

沈黙。それがこの部屋の中を支配した。

リンディが錬矢と話している理由は、サカキの鬼の力と、錬矢のラハブ……………ライダーシステムの引き渡しを要求するためであった。

管理局では過去に起こった戦争……………ミサイルや銃器などの質量兵器で幾つもの次元世界が滅んでおり、環境への影響も少ない魔法文化が推奨された。そして質量兵器……………魔法技術が使われていない『戦う力』は管理局の法律で禁止されており、所持しているだけで罪となる。

故に、リンディは仮面ライダーの力を渡すよう言ったのだが、錬矢は拒否した。

ちなみに、ソラの『ファルコン家』が所持している『キバの鎧』はファンガイアの技術……魔法技術に近い技術を使用しているため、例外である。

「……………どうしても駄目なんですか？」

「駄目だねえ。……………てーか、アンタは勘違いしている」

「勘違い？」

「管理局の法律は『管理局が“勝手に”管理している世界』にのみ適用されるのであって、『勝手に”管理外世界”にしている』地球には適用されない」

“勝手に”という部分を強調しつつ、錬矢は言い放つ。

錬矢の言う通り、管理局は“勝手に”数多くの次元世界を管理局が管理する『管理世界』と、それ以外の『管理外世界』に振り分けており、『管理外世界』では管理局の法律は適用外であった。

錬矢の言葉を聞いたリンディは苦笑し、『時空管理局提督・アースラ艦長リンディ・ハラオウン』から、一人の『リンディ・ハラ

オウン』として話し始めた。

「うーん、そうなのよねえー」

「あら、ずいぶん簡単に納得するんだな」

「それはね？ 長い事管理局に勤めてるけど、私も管理局の法律は疑問なのよ。」

「あ、気分悪くしたのならごめんなさいね？ でも、私にも立場というものがあって、理解してくれると嬉しいんだけど」

「OKOK、理解したわ。……あんたも大変だな」

「そうなのよねえ。息子のクロノも、真面目なのはいいけど石頭な所があつて……」

その後、二人で日本茶に大量の砂糖を入れた『リンディ茶』を飲みつつ、雑談した。そして錬矢とリンディは10年来の友人みたいな関係になつたとか。……何これ？

深夜。海鳴市に住む人々のほとんどが寝静まった時間帯……

八神家の屋根の上で、朱色の着物を身に纏い、黒い髪を腰まで伸ばした少女が夜空を見上げていた。

ただ、少女がこんな夜中に歩いている、八神家の誰でもないのに八神家の屋根の上に居るのも不自然であるが、一番の不自然なのは少女の脚である。少女の脚は屋根の上についていないどころか、膝下から半透明になり、さらに下は無くなっていたのだ。

脚が無い少女は、悲しい訳でも、嬉しい訳でもなく、ただ夜空を見上げていた。

「……………何を見ているんだ？」

不意に声を掛けられ、少女が声の方向を向くと、そこにはリインフォースが立っていた。

少女はリインフォースの姿に安心し、微笑みながら答えた。

「空を見ていました。やる事が無いので」

「そうか……………」

リインフォースは屋根を歩き、少女の隣に並ぶ。

少女は再び、夜空を見上げた。

「……………こうして会うのは、初めてだな」

「そうですね……………。前は声だけでしたし」

「そうだな……………」

「……………」

「……………」

暫くの沈黙。そして、今度は少女の方から口を開く。

「私が何者なのか……聞かないんですね」

「聞かなくても大体分かる。……『兄さん』と言っていたからな」

少女は『あはは……』と苦笑する。さらにリインフォースは言葉が続けた。

「正体は大体分かる。……だが、名前は知らない。名前だけでも、お前から教えて貰えないか。
このままじゃ何と呼んだらいいか分からない」

リインフォースは気軽に聞いたつもりだった。だが少女は、急に困った顔になり、リインフォースは怪訝な顔になる。

「どうした？」

「いえ……すみません。名前はどうしても言えないんです……」

「そうか……」

「はい。……そうですね、私の事は『靈劍・紅』れいけん・くれな……
・紅と呼んで下さい」

「そうか。……では、くれな」

「いよう」

「いいいいっ!?!」

リインフォースの背後に、鍊矢が現れた

リインフォースは飛び上がった

「ドラクエかつ!?! と言つより荒木鍊矢つ! いきなり背後に現れるなっ!?!」

「なあに、屋根に出たら偶然お前の背後に出ただけだ。
つか、お前なに独り言言つてんだ?」

「な……」

リインフォースは少女……紅を見る。紅は可愛らしく片目をつむり、口の前で右手の人差し指を立てていた。どうやら、リインフ

オース以外には見えていないらしい。

リインフォースは紅の意図を理解し、ごまかす事にした。

「いや、なんでもない。……で、何か用か」

「あ、うん。リインフォース、ぶっちゃけ……体、壊れてるだろ」

「ッ!」

リインフォースは驚かされた。それは、まだ誰にも言っていない事だったからだ。

確かに、リインフォースの体……構成するプログラムは徐々に崩壊し始めている。理由は防衛プログラムを切り離したため。

防衛プログラムは、どんな形であれ、リインフォース……夜天の書の一部であり、それを切り離したという事は、リインフォースの体を構成している一部分を切り離したのと同じ。故に、リインフォースの体はその形を留める事が出来ず、徐々に崩壊が始まっていた。

遅かれ早かれ後半年の余命……。最初に言えれば良かったのだが、タイミングを逃し、言えずに今までズルズル延びていた。

「何故……その事を……」

「んまあ、ちよつとな。それで、単刀直入に言つぞ？ ……
お前の体、直せるぞ」

「なつ……!？」

再び驚かされた。

物を直す時、その物の完全な状態が分からなければ直す事は出来ない。それと同様に、リインフォースの完全な状態、つまり『改変される前の夜天の魔導書』の形が分からなければ、直しようがない。

しかし、元の夜天の魔導書の形はリインフォースも分からず、諦めていた。

だが目の前の男は何と言った？ 『直せる』と言ったのだ。

「本当に直せるのかっ!？ 元の形（夜天の魔導書）は誰にも分からないのに、直せると言つのかっ!？」

リインフォースはもう夜も遅いのも忘れ、声を張り上げ危機迫っ

た顔で錬矢に詰め寄る。その際に、隣の紅が驚いていたが、気にしてはいられない。

錬矢はリインフォースの剣幕に引きつつも、一旦落ち着かせる事にした。

「まあ落ち着け。俺も言い方が悪かった。……正しくは『直せる』んじゃない、『作り替える』んだ」

「何っ!?!? ……どついう事だ」

「つまりだな……」

つまり、いくら錬矢でも、元の形が分からない物を直す事は出来ない。ならば今の状態が完全な形のように作り替えればいい。

リインフォースの修復が出来ないのは、元の形が分からない『夜の魔導書』という大規模な端末の管制プログラムのまま直そうとするためで、『融合騎・リインフォース』として作り替えれば直すより遥かに簡単だ。

幸いにも、リインフォースの融合騎としてのプログラムは欠損しておらず、魔導師としての能力も今のなのはとフェイトよりも上であつた。

「なるほど……だが、いくら直すより簡単とは言っても、そう、上手くいくか……」

「大丈夫大丈夫。そこら辺はバッチリよ、コイツも使うし」

そう言っ て 錬 矢 が 出 した の は …… 口 元 を 塞 が れ、 縄 で エ ビ フ ラ イ に さ れ た サ カ キ だ っ た。

「むー！ むー！？」

「サ、サカキッ！？」

リインフォースは驚き、慌てて縄を解こうとする。……刹那、錬矢の口が三日月状に歪み……通称、『ティキ・ミック卿の笑み』を浮かべた。

「そいやあああああつー！」

錬矢は一瞬の内に縄を取り出し、リインフォースを縛り上げた。

・何故か亀甲縛りで。

「なっ!？」

「ありや? こんな縛り方するつもりはなかったんだけど・・・まあいつか」

錬矢はそのまま、エビフライなサカキと縛り上げたリインフォースをズルズルと引きずり移動を始めた。

「むがっ! むががががっ!!(訳:顔っ! 引きずってるー!!)」

「ひ、引っ張るなっ! し、締まるっ!！」

「大丈夫だって、俺と俺のダチがちゃんとやっから。あと目覚めても責任取るって、サカキが」

「むがっ!?(訳:俺かよっ!?)」

「レッツゴー」

「「待てー!!(むがー!!)」

「・・・・・・・・ふう」

とある次元世界のとある場所。研究室のような部屋で、ディンゴは一息ついた。

彼の横にあるカプセルには、彼が使っていたデルタギア・リヴァーレと、錬矢が牛鬼に破壊されたオーガギアが安置され、レントゲンのような機械でスキャンされている。

ディンゴはすぐ側に置いていたコーヒーカップを手に取ると、中身を少し飲み、再び画面に目を向ける。そこにはオーガギアの修復状況やデルタギアRのデータ。『G4-Ax』やAからZまでのアルファベット順に、多くの単語が列んでいた。

ディンゴがまた機械を操作し始めると、通信が来た事を知らせるアラームが鳴り、通信を繋げた。

『やあ、ディンゴ』

「ジェイルか。何か用かい？」

通信画面に映ったのは、濃い紫の髪に金色の瞳、白衣を着た男であつた。

『なに、美味しい紅茶が手に入ったから、友人と一緒にお茶でもと思ってね』

「そうか。でもすまない、今からやらなければならぬ事がある。……その後ならでいいなら構わない」

『ああ、構わない。終わったら連絡を貰えるかい？ チンクを迎えに行かせるよ』

「分かった。ああ、鍊矢も来るんだ、一緒に構わないか？」

『彼もかい？ 構わないよ。じゃあ』

それだけ言うと、男 ジェイル・スカリエッティは通信を切る。

通信を終えたディンゴは、懐から『P』と書かれた白い純正型の
ガイアメモリを取り出した。

「……………奴ら”の動向は、今だ掴めずか……………」

ため息混じりそう言うと、眺めていたガイアメモリのスタートア
ップスイッチを押し、内包された記憶を呼び起こす。

《PREDATOR!!》

「『AtOZ』、早く完成させないと……………」

暫くガイアメモリを眺めていると、今度は来客を告げるアラーム
が鳴る。

ディンゴはガイアメモリを懐に仕舞うと、椅子から立ち上がり黒
い友人と、無理矢理連れて来られたであろう人物達を迎えるため出
入口に歩き始めた。

二十二ノ巻に続く。

二十一ノ巻『エピソード』……だけと最終回じゃない。byサカキ

どーも、二十一ノ巻。軽目なお話にしました。

リンディさんはあんな感じにしました。

仕事中心のキャラとも考えましたが、これが一番しっくりしました。
今後は錬矢の親友キャラとなります。

はやての“お兄ちゃん”発言は、完全にノリです。

でもまあ、後悔はありません。

次回は黒服さんの『仮面ライダー剣&キバ 白き帝王』とのコラボ
です。

では。

二十二ノ巻『訪れる純白』（前書き）

今回からー、黒服さんの『仮面ライダー剣&キバ 白き帝王』との
コラボだってヴァよおー！！（若本ボイスで）

サカキ「何故に若本さんっ!?!」

二十二ノ巻『訪れる純白』

ここは海鳴市の街を見下ろせる、丘の上にある広場。今日は年末という事もあって、人の気配は無く、静かな時間を刻んでいた。

だが突然、広場に灰色のオーロラが発生。オーロラが消えると、広場に一組の男女と、コウモリ(?)が現れた。

「……………」

純白の髪に白い肌、コバルトブルーの瞳、腰に飾り気に無い剣を差し、服装が上下共に白という、錬矢とは真逆の男性 不知火
直人が口を開く。

「さっきまで路地裏に居たのに……………」

続いて、肩下まで伸びた黒髪に黒い瞳、ブラウンジャケットにスラックス、右目を包帯で隠しヴァイオリンケースを持った女性

東雲 優紀が口を開く。

「……やはり、あのオーロラが原因か」

続いて、ソラのキバット・ブレイド八世によく似ている……
・体色が銀ではなく白という所以以外は全く同じのキバット・バット
五世も口を開く。

彼らは『アンデットハンターの世界』と呼ばれる世界で、ファン
ガイアと日夜戦っているライダーで、直人は『仮面ライダーキバ・
エターナルフォーム』に、優紀は『仮面ライダーWホワイトラルク』に変身
する。つまり、別世界の住人なのだ。

だが何故、別世界の住人である彼らが『逆鬼の世界』に現れたか
というと、彼らは元の世界で人間に擬態したファンガイアを見つけ、
難無く倒したのだが、直後に灰色のオーロラに飲み込まれ現在に至
るのだ。

ちなみに直人達を飲み込んだオーロラは偶然発生した物であつて、
“錬矢が原因”ではない。

「直人さん、これからどうします?」

このまま足踏みしている訳にもいかないので、優紀は直人に聞く。

実は直人達は別世界に来た事はないが、別世界から来た人物達と会った事がある。その人物達は来た時と帰る時に、あのオーロラを潜っていたため、すぐにここは別世界では？ という考えに行き着いた。

直人は暫く考えた後、優紀の質問に答えた。

「あの街に降りてみる。……………ここが本当に別世界なのか調べる」

「はい」

「分かった」

直人の提案に優紀とキバット・バット五世は賛成し、二人と一匹は海鳴市の街に向かって移動し始めた。

「……………ん？」

「錬矢、どうしたんだい？」

ハラオウン家が滞在しているマンションの入口で、錬矢は何かを感じ、その方向に頭を動かす。その錬矢の頭の上に乗っているこいぬふぉーむなアルフが疑問に思い、聞いた。

「いや……………。(何か来たな)」

言葉とは逆に、錬矢は直人達の存在を感じとっていた。だが何もしないし、する気も無い。それよりも大事な事があるからだ。

「すみませんっ！ おまたせしましたっ！！！」

すると、慌てた様子でフェイトが走って来る。それを見た鍊矢は苦笑した。

「おいおい、そんな待ってないし、そんな慌てる必要もないから」

「でも、お待たせさせてる訳ですし……」

息を乱しながら言うフェイトに、また苦笑しつつ、鍊矢は手を延ばした。

「ほら」

「あ……はい……」

フェイトは恥ずかしそうにその手を握り、二人は手を繋ぎながら歩き始めた。

何故鍊矢とフェイトがこうなったのか？ それはサカキとリインフォースが連行された翌日に起きた事が原因なのだが……それはまた別のお話。

「ところですねー息乱れてるけど、そんなに全速力で走ってきたのか？」

「えと……。速さには自信があるので……。階段も」

「階段もかいつー!!」

「おいおい、俺の出番遅いじゃねえか。何考えてんだ作者は」

「……………いきなり何言ってるんだ」

いきなり神に対して暴言を吐いたのは、皆様お馴染みこの物語の

主人公・サカキ。彼には後に天罰が下るだろう。

そして、彼の向かいに座っているのは鍊矢とディンゴによって融合騎として生まれ変わったリインフォース。

彼ら現在、年末でもやっている24時間営業のファミリーレストランに、待ち合わせのため居た。

というのも、はやてとヴィータ達は時空管理局・本局で、今後管理局で働くための面接で不在。故に八神家では年越のお祝いは出来ない。

年末の大掃除も終わっており、暇を持て余していたところにソラから連絡があった。

「ほい、おらサカキ」

『あ、サカキ様』

「おおソラ。どうした？」

『はい、実は……』

話によると、ソラが間借りしているハラオウン家でもほとんどの事を終わらせており、暇なためサカキに鍛練を頼みたいとの事だった。

暇なサカキはすぐに了承し、同じく暇だったリインフォースも見学・結介要員として来るといふ事で、近場だったここで待ち合わせしていたのだ。

「にしてもリインフォース。お前ははやて達と一緒に行かなくてよかったのか？」

サカキはふと思った事を聞いてみた。

サカキと一緒にいる事が多いため忘れがちだが、リインフォースははやてのユニゾンデバイスである。管理局に入らないにしても、普通ならばはやてと一緒に行動する筈なのだが……………。

リインフォースは一瞬キョトンとした後、自身が思っている事を話始めた。

「そうだな……………。主に自由にしていいた言われたのもあるが、一番はサカキと居ると“楽”なんだ」

「“楽”？」

「ああ……………。私は永い間、騎士達と共に多くの主に仕えた。ある者は自らの欲望のために、ある者は理想のために、ある者は自らの力を固持するために、私達を利用した……………。ほとんどが私達を“道具”として扱っていたが、中には配下の者達と同格に扱った者も居た」

『もつとも、利用するという行動は他と同じだったがな』と自重気味に笑いながら、リインフォースは話を続ける。

「その中でたった一人……最後の主となった主はやては、私達を“家族”として接してくれた。これは今までの主には無かった事だが、私とつてもう一人、違った者が居た……。お前だ、サカキ」

今度はサカキがキョトンとした。

何故主の話をしていたのに、急に自分に話が回って来たのか分からなかった。

「サカキ、私はお前と居ると“楽”なんだ。主と居る時も違う、騎士達と居る時も違う、今までに経験した事が無い感覚だ」

リインフォースいわく、その“感覚”をどう表現したらいいのか分からなかったため、“楽”という単語を使っただけらしい。

「だから、私はお前と居る。主の許しがある限り、ずっとな」

「……なんか、こっ恥ずかしいな」

「言つな。……………私も自分で言つてて恥ずかしかった」

端から見たら告白とも見えなくもない会話に、サカキとリインフオースは少し頬を赤くした。

「いらっしゃいませー」

新たな来客が来たため、ウエートレスが挨拶する。

サカキはリインフオースから目を背けると、ソラが来たのかを確認するため、店の出入口に目を向けた。

「いらっしゃいませー」

ウエートレスの挨拶を聞きながら、直人と優紀は店内に入っていく。

あれから海鳴市の街を探索したが、嫌でも『ここは別世界』であると思知らされただけであつた。

まず、直人達の『アンデットハンターの世界』では必ずと言っていい程の『アンデット封印教会』や『ライダー』、『アンデット』の存在が無い。

『教会』は大小の違いはあるが、どの街にもある筈なのだがこの街には無いし、『ライダー』や『アンデット』は新聞や雑誌を読む事で存在しない事がすぐに分かつた。

幸いな事といたら、言葉とお金が通じる事である。

直人と優紀はウエートレスに案内された席に座る。

ちなみにキバット・バット五世は直人のコートの中に隠れており、直人が持つ剣、ザンバットソードは雑貨屋で買った袋の中に入れてある。それは優紀が、『ここが別世界なら、不用意に剣を出すべきではない』と機転効かせたからだ。

「……………直人さん、これからどうしましょう……………」

「・・・・・・・・」

優紀が不安げに聞くが、直人はなんと言っただら分らなかった。

二人は仮面ライダーとして、数多くのアンデットやファンガイアと戦い、それなりの修羅場を潜り抜けてきた。だがここは、自分達が住んでいる世界とは別の世界・・・・・・・・元の世界に帰れるか分からない上、今までの方法で生活出来るかも分からない。

例えばお金。今までは『ギルド』と呼ばれる組織の依頼をこなすか、アンデットを封印したラウズカードを教会に持って行くか、ダークローチという『一匹居たら三十匹は居る』と言われる黒光りするアレに似た怪人を倒す事で教会から収入を得ていた。

だがこの世界には教会が無ければ、アンデットも存在しない。まだ調べていないが、ギルドも存在しないだろう。

暫くは生活出来るくらいは蓄えはあるが、このままではすぐに底を付く。どこかで働くにしても、この世界の戸籍を無い。

どうすればいいのか・・・・・・・・。

「いらっしゃいませー」

また来客が来たのか、ウエートレスの声が聞こえる。

直人と優紀は出入口を見る気も起きない。

新たに店内に入って来た人物は、直人と優紀の横を通り過ぎる。その時、直人と優紀が持っている鈴……。ファンガイアに対して反応する鈴が、小さくて弱々しいが、確かに反応したのだ。

優紀はハツとなり、横を通り過ぎた人物を見る。その人物は、肩掛けのリュックを持ちジーンズ生地のスカーフと上着を着た、藍色のポニーテールの少女であった。

二十三ノ巻に続く。

二十二ノ巻『訪れる純白』（後書き）

まず、皆様が疑問に思ってたであろう錬矢とフェイトですが、別に恋愛ではありません。
ええ、絶対に。

今回はサカキ達と直人達が会います。でも一悶着あるかも……。では。

二十三ノ巻『出会う鬼と純白』(前書き)

コラボニ話目です。

サカキ達と直人達が会います。

二十三ノ巻『出会う鬼と純白』

ファミリーレストランで待ち合わせしていたサカキとリンフォースの元に、遅れて待ち人である、ソラが到着した。

ちなみに彼女が持つ肩掛けのリュックの中には、キバット・ブルード八世が隠れている。

「すみません、遅くなりました」

「よう、そんな待ってねえぞ？ 三分ぐらい前に来たばかりだし」

謝罪を言うソラに、サカキはそう言い返した。ちなみにサカキとリンフォースが来たのは、三十分前である。

ソラは「すみません」と言いつつ、“自然と”サカキの横に座る。

それを見たリンフォースはムツとなったが、「大人である自分の隣より、子供（の体型）であるサカキの隣の方がスペースが広いのだから、自然だろう」と考え、ムツとなった感情を仕舞った。

(……………ん?)

リインフォースが一人で葛藤している中、サカキは視線を感じその方向を見る。少し離れた席に、メニューを見ているのか下を見ている、良い意味でも悪い意味でも目立つ一組の男女……………全身真っ白な男と、怪我をしているのか右目に包帯を巻いている女が居た。

というよりも、他にも客は居たのだが、その一組……………特に真っ黒な男を知っている分、真っ白な男が異様に目に付いただけなのだが。

「サカキ様、どうしましたか？」

「ん、いや。それよりもなんか食ってから行こうぜ。腹減ったし」

気のせいだと思い、サカキはメニューを広げた。

だがやはり、“白”が気になった。“白”が。

直人と優紀は、メニューを見るふりをして小声で話始めた。もちろん、藍色の髪の少女についてだ。

「直人さん……………」

「分かっている。ここではマズイ」

直人は再び藍色の髪の少女を見る。少女が合流した、黒髪の少年と銀髪の女性の集団はウエートレスを呼んで注文をしていた。

鈴が鳴ったという事は、あの少女はファンガイアなのだろう。まさか、『協会』や『ライダー』が存在しない別世界にファンガイアが居るとは驚きだったが、直人の目的はファンガイアを倒す事。例え別世界に来てもそれは変わらない。

ただ、だからと言って今すぐに仕掛ける事はしない。人が多い場

所で戦えないのもあるが、あの少女が人間を襲い、“ライフエナジー”を吸った事があるかを確認してからである。

以前だったら問答無用に襲っていたが、優紀はそんな直人の様子を嬉しく思いつつ、怪しまれないようウエートレスを呼び、注文する事にした。

(あの子供と女……)

優紀は気付いていなかったが、直人の注意は少女だけでなく、その隣の少年、そして向かいの女にも向いていた。

特に、あの少年は直人達の視線に気が付いた。

直人は戦闘者としての勘から、少女より少年と女の方が厄介だと直感した。

ファミリールレストランで軽く食事を取ったサカキ達は、ファミリールレストランを後に、街中に出たのだが……。

「やはり、付けられてるか」

「ああ」

そう、付けられているのだ。

それを気付いたのは、ファミリールレストランを出て暫くしてからであった。

「変な視線感じて音式神出しといたんだが、まさか当たり引くとは……」

サカキはファミリールレストランで感じた視線がやはり気になり、音式神を不可視状態にして放っていた。

音式神・茜鷹、緑大猿は尾行してくる者の上から監察し、瑠璃狼はサカキの肩に乗り、正面から見張っている。これなら相手は何らかの行動を起こした時、すぐに反応出来る。

「なっ！」

サカキは突然、後ろを振り返る。人々が行き交う中に、その一組……ファミリーストランに居た、真っ白な男と右目に包帯を巻いた女の姿があった。

人々に溶け込もうと、道沿いにあった店の店頭にある商品を手に取って見ているが、真っ白の男が嫌でも目立つ。

サカキは再び歩き始め、両サイドに居るソラとリインフォースにのみ聞こえるように言う。

「狙いは俺か、リインフォースか、ソラが分からねえけどな」

サカキはこの世界で最後の鬼。

リインフォースは古代ベルカ式の融合騎。

ソラは『蒼剣のキバ』の装着者。

狙いは三人の誰かか、それとも全員か。はたまた管理局の提督と執務官、高ランク魔導師と顔見知りだからか。

理由は色々と考えられたが、どんな相手だろうと、サカキのやる事は変わらない。

「サカキ様、どうします?」

「とりあえず撤く。それでも付いて来るなら……」

「……………今のは驚きましたね」

再び尾行を始め、優紀は一安心する。

ファミリーストランから尾行していたが、突然少年が振り返った時は肝を冷やした。

だが一安心した優紀に対し、直人とコートの中に隠れたキバット・バット五世が否定した。

「いや、あの子供、こちらに気付いている」

「ああ。現に、こちらを撒こうとワザと人通りが多い場所を移動している」

「えっ!?!」

優紀は驚きの声を上げる。その時に周りの人々が優紀の声に反応して振り返り、優紀は慌てて口を塞ぐ。

「……………本当なんですか？　こっちに気付いているって」

「ああ」

尾行を続けつつ、優紀は聞く。

直人は視線を前の三人組に向けたまま答える。

「あの三人……特にあの真ん中の子供は、店で俺達の視線にも気付いていた。相当の手足れだ」

優紀はまさかあんな子供に気付かれていた思わず、驚いた。

思い返してみれば、店を出る時も、今道を歩いている間も、必ず少年が中心になり、その横か一步後ろを少女と女性が付いて行く形だった。あまりにも自然だったため気付かなかったが、おそらくあの三人組の中での少年がリーダーなのであると、直人は考えた。と同時に、『本当に子供か?』と少年の年齢を疑いたくなった。

その時、

「何っ!?!」

「えっ!?!」

直人達は“通常の空間”から切り離された。

街は突如、直人と優紀を残し無人のゴーストタウンと化し、空も青から緑へと色を変えている。そして……。

「よう、単刀直入に聞くぜ？ ……何が目的だ」

直人達に先に、例の三人組が立ち塞がっていた。

尾行して来る二人組をリインフォースが張った結界に閉じ込め、サカキ達は前方に立ち塞がる。

「こ、これは貴方達がやったんですかっ!?!? 街の人達は一体どこにっ!?!?」

女は何が起こったのか分からず、混乱している。

サカキはそんな女の様子に首を傾げた。

「(結界を知らない………? 魔導師関係の奴じゃないのか) 安心しろ、街の人間どもには何もしてない。むしろ巻き込まないようにしてやっただけだ」

「どっという事だ」

今度は男が怪訝な表情になる。

「そのまんまの意味だ。………で、目的は何? 答えによつては、消すよ?」

サカキがそう言った直後、その場を一触即発の空気が支配する。

男と女の答えよっては、サカキ達はすぐに動けるよう身構える。

「……………俺達はそっちの少女に用がある。

お前はファンガイアで間違いはないか」

男は観念……………というよりも、無駄な争いを避けるために
目的を話す。

ソラはファンガイアの名が出てきた事に驚いたが、正直に話す事
にした。

「……………その質問には、『どちらかと言えば違う』と答えさ
せていただきます。
確かに私はファンガイアの血を引いてはいますが、ファンガイアの
力は使えません」

それ聞いた男は驚いた顔になるが、すぐに納得し『そうか……………
』と漏らした。

「こちらは答えました。だから、次は貴方方が答えて下さい。
……貴方方は何者ですか？ 何故“滅んだ”ファンガイア
事を知っているんですか」

「何っ!？」

“滅んだ”という単語に、男が反応した。

隣の女も同様に驚いている。

「ファンガイアが……滅んだとっ！ どういう事だっ！
？」

男は形相を変え、ソラに詰め寄ろうとする。だが、その間にサカ
キとリインフォースが割って入った。

「待てっっっ！ さっきあんな事言った俺が言うのもアレだけど落
ち着けっっっ！！」

「そっだ。そんな勢いで詰め寄られたら、話せるものも話せない。
……それに、ソラも怯えている」

リインフォースの言葉に男がハツとなる。

ソラは我慢しているが、瞳に涙を溜めサカキの服の端を掴んでいた。いくらキバに変身出来るとは言え、まだ12歳の少女なのだ。

「直人さん……………」

女が冷静にさせようと男の腕を掴む。

それに男は頭が冷えたようで、『すまん……………』と漏らした。

「いや……………。そちらにも事情があるようだ。出来れば少し静かな場所で話せないか」

。 リインフォースの提案を受け、一行が向かったのは喫茶店『翠屋』

今日は年末という事で休みなのだが、翠屋の主人の高町士郎と高町桃子が快く店舗を貸してくれたのだ。

無人の翠屋の一席に、サカキ達の向かいに男と女は座っていた。

「まずは自己紹介だ。俺はサカキ。右に居るのがソラで、左がリインフォースだ」

「ソラ・ザ・ファルコンです」

「リインフォースだ」

サカキを中心に、ソラとリインフォースが自己紹介する。

「不知火直人だ」

「東雲優紀です」

続いて、直人と優紀が自己紹介する、が、双方何から話しているか分からず、会話が続かない。

と、そんな微妙な空気の場合に、ある意味救いの天使が舞い降りた。

「いらっしやいませー、サービスの紅茶です」

久しぶりの登場である、なのはと姉の高町美由希が紅茶の入ったティーカップと何故か湯飲み、翠屋特製シュークリームをトレイに乗せ、サカキ達の元を持って来たのだ。

なのはの無邪気な笑顔に、優紀は笑顔になる。だが……。

「居たのかよ双馬」

「また双馬って言ったあー!!」

そう、サカキだ。サカキは初めて会った時からなのは、『双馬』と呼び、遊んでいるのだ。

その様子にソラとリインフォース、美由希は苦笑。直人は我関せず。優紀は目を丸くした。

「なのはって呼んでって言ったよねっ！？　な・の・はってっ！！」

「だが断る」

「どっしてっ！？」

「何故なら・・・その方が面白いからっ！！　主に俺が」

サカキはそう言った直後、素早く立ち上がり、腰から下げている音叉・音角を鳴刀・音叉剣に変え、自分に向かって飛んで来た物を弾く。

弾いた物は、空中に舞った後、サカキ達が座っていた席のテーブルに刺さった。

「っ、これは・・・」

「暗器・・・だな」

これには直人も優紀と一緒に驚いた。

直人の言う通り、今テーブルに刺さっているのは『飛針』と呼ばれる暗器で、指で挟んで投げたりする物だ。何故そんな物が飛んで来たかと言つと……。

「……チツ」

なのはと美由希の兄、高町恭也が盛大に舌打ちをしているのを見ていただければお分かりだろう。

「お兄ちゃんっ!!」

なのはが怒り心頭といった様子で恭也に歩み寄って行く。

ちなみに彼女が持っていたトレイはソラが受け取っている。

「何度も言わせないでよっ！　なんでサカキ君に攻撃するかなっ！？」

「だってアイツはなのはを虐めただろ。つまり・・・敵だ・・・！」

「だからなんでっ！！」

あのねっ！　確かにサカキ君は意地悪だけどホントは優しい子なんだよっ！？　なのにお兄ちゃんはっ！！」

「だがなのは、アイツは・・・」

「・・・恭也？」

刹那、店内の空気が凍りついた。

恭也がまるで油が切れた機会のような音を出しながら後ろを振り返ると、そこには“笑顔の”桃子が立っていた。

「ちよつと店の奥で『お話』が・・・」

そう言っつて恭也の襟元を掴み、店の奥に連れて行く。

以後、奥から聞こえた声です。

『恭也？　なんで貴方は『サカキ君となのはが仲良くなつてなのはを貰つてもらおう』という私の計画を邪魔してくれるのかしら。あの子はなのはが“唯一”連れてきた男の子なのに……。少し、頭冷やそうか？』

『待て母さ……。ギヤアアアアアアアアアツ！』

奥から聞こえてきた悲鳴。高町桃子、高町家最強の人物である。

「あはは……。ごめんね、母さんと恭ちゃんが。シュークリームと紅茶はサービスだから」

そう言つて美由希は湯飲みと紅茶、シュークリームを“七人分”テーブルに置いた。

「あれ？　あの、数が多いんですが……」

優紀は疑問に思い美由希に聞いてみた。

ここに居るのはサカキ、ソラ、リインフォースに直人と優紀の五人。少なくとも、一般人の**はず**の美由希にはそう見える**と思**っていた。

「ああ、それは今ソラちゃんのリュックの中**に**いるキバツト君の分と、そっちの白いコートのお兄さんのコートに隠れてる子の分ですよ」

直人と優紀は驚いた。コートの中に隠れているキバツト・バツト五世に気付かれていたのだ。

それに、リュックの中**に**いるキバツトとは**ど**ういう事なのか？
優紀がその事を聞こうとしたが、美由希は『では、**ご**ゆっくり』
と言ってさっさと下がってしまった。

「あの人、普通に隠れてる奴の気配とか分かるの。だから気にしないの」

一人だけ湯飲みでお茶を飲みつつ言うサカキ。

一言言っておくが、海鳴市は魔窟である。

それを優紀は『は、はぁ・・・』と言っしかなかった。

「……………どう言う事だ。リュックの中のキバットというのは

「それは……………」

直人の問いに、ソラは持っていたリュックの口を開けた。

「……………事だ」

そしてリュックから、キバット・ブレード八世が出て来た。

「……蒼剣のキバ。お前がこの世界のキバか」

「はい。まさか別世界のキバに会えるなんて」

「んで、そつちは別世界からねえ。

ま、信じない事もないけどな」

ソラは自分がキバである事を、直人達は自分達が別世界から来た事と、直人がキバである事を話した。

ちなみにやつとコートの外に出たキバット・バット五世とキバット・ブレード八世は、性格が近い事もあって紅茶を飲みながら和んでいた。

「あの、本当に信じてくれるんですか？ 私達が別世界から来たって……」

こつ優紀が聞くのには理由がある。以前別世界から別のキバが来た時、直人達は別世界の存在を信じられなかった。

その事があり、優紀はあっさりと別世界の存在を信じたサカキに疑問を抱いたのだ。

「ああ。別世界に行った事は無えけど、似たような体験はしたからな。

それに、この世界の説明はしただろ？」

「魔法、だったな」

直人の言葉に、サカキは頷く。

サカキは特に理由は無いが、魔法の事や時空管理局がいかにかにつくかを話していた。

その際、なのはが割り込んできて横槍を入れたため、即座に意識を刈り取る事で黙らせた。

キバット・バット五世はそうでもなかったが、直人と優紀はさすがにサカキの頭を疑ったが、先程の結界やリインフォースに実演してもらおう事で納得させた。

「そういうのもあるから、疑う理由が無いんだよ。ほら、よく言うだろ？」 『現実には小説より奇なり』って。あ、これ小説だった」

「何の話した」

サカキはメタ発言を直人にツッコまれつつ、今度は面倒臭そうな顔になる。

「でも帰りかたは………さすがに分からん。そもそもあのオ
ーロラは俺らにはどうにもならんしな」

「え？ でもこの世界には次元世界というのがあるんですよ？
移動する術すべもある。だったら………」

「いや、そうとも言えん」

優紀の言葉を、リインフォースが否定し、理由を説明し始めた。

「以前、この手の話に強いのが聞いた事がある。

管理局が言っている“次元世界”と、お前達が元居た『世界』は大
きく違う。

まず管理局の言う“次元”は、例えるなら海だ」

「海？」

「そうだ。“次元という海”と“世界という大陸”。それが管理局の言う次元世界だが、この『世界』とお前達の『世界』はまったくの別物。“本当の意味での次元”で遮られている、まさに別世界だ。サカキの言う通り、私達に移動する術はない」

『そんな……』と漏らす優紀に、リインフォースは『だが……』と続けた。

「先程も言ったが、この手の話に強いのが居る。そいつは実際にあのオーロラで移動している上に、色々と顔も広い。……というよりも今回の事にも奴が絡んでいる可能性が高い」

「あ、錬矢に連絡する忘れてた」

瞬間、リインフォースの脳天チョップがサカキに直撃した。

ただ、はやてのハリセンに比べたら軽かった。

そして錬矢に連絡を取ったところ、『帰す事は出来るがどの世界か特定する時間が欲しい』との事。

それを聞いた優紀は安心してホッとしたが、そこで新たな問題が出た。

「あんたら、どこで寝泊まりすんの？」

何となく聞いてみたサカキの一言。だがその言葉に、優紀だけでなく直人とキバット・バット五世も固まった。

「もしかして……寝る所が無いのか？」

キバット・ブレード八世が聞くと、キバット・バット五世は頷いた。

お金が無い訳ではないが、いつ帰れるか分からない以上、あまり使わない事が好ましい。だが野宿するにしても、野宿するための道具はバイクと共に元居た世界に置いて来てしまったため難しい。

直人達がどうしようか悩み始めたと、それを見兼ねたサカキがある提案をする。

「……うちに来るか？」

「えっ!？」

サカキの提案に、優紀は驚いた。

「いいんですか？ 家の人に迷惑では……」

「いいんだよ。どうせ今日、俺とリインフォースだけだし。……
……年末なのに」

「……すまないが泊まっててくれないか？ 口ではなんとでも
言ってるが、やはり寂しいんだ」

「は、はぁ……」

こうして、直人、優紀、キバット・バット五世は八神家に滞在する事が決まったのだった。

「・・・・・・・・やすらかな永遠を・・・・・・・・」

「血と災いが渦巻く・・・・・・・・」

「永遠の闇を・・・・・・・・」

『GURURURU・・・・・・・・!』

二十四ノ巻に続く・・・・・・・・。

二十三ノ巻『出会う鬼と純白』（後書き）

こんな感じで、直人達は逆鬼ワールドに巻き込まれていきます。

ちなみに、海鳴市には色んな人達があります。ええ、色んな。

二十四ノ卷『闇の残滓』（前書き）

コラボ三話目。本格的に事件が動きます。

後書きでアンケートをやります。

二十四ノ卷『闇の残滓』

八神家に泊まる事となった直人達。それに何故かソラとキバット・ブレード八世も泊まる事になり、サカキとリインフォースの二人だけの筈だった年末は、五人と二匹で過ごす事になった。

だが、元々二人だけの予定だったため、ロクな食材が無く、そのため……。

「夜も遅いので、俺と直人と直人のキバットの男組で買い物に來てます」

「何を言ってるんだお前は」

その通りに近場のコンビニに買い物に出た、サカキと直人とキバット・バット五世。

ちなみに、サカキは相手を苗字で呼ぶ習慣が無いため、最初から直人達を呼び捨てである。

「……………サカキ、お前は何故ライダーになった」

直人は思っていた事を聞いてみた。

ソラの蒼剣のキバの事を聞いた際、サカキもライダーである事を聞いた。ソラがライダーになった理由は代々継いでいるからだだったため理解出来たが、まだ子供である（見た目は）サカキが何故ライダーになったのか？ 直人は気になった。

「ん？ うーん。色々あるけど、一番は復讐かなー」

「……………何？」

あまりにも軽く言われたので、一瞬何を言ったか分からなかった。

「どづいつ事だ」

「ああ、この世界にはその昔、魔化魍つてのがいてな……………」

それからサカキは話した。魔化魍の事や鬼と呼ばれるライダーの

事。親が魔化魍に食われ、妹を守るために鬼になった事。そして・・・鬼達に対し、人間が何をしたのかを。

「・・・・・・・・てな訳だ」

「そうか・・・・・・・・」

「お前も、壮絶な人生を送ったんだな」

キバット・バット五世に、サカキは『まーなー』と軽く返事する。

「・・・・・・・・俺も同じだ」

「ん？」

「直人？」

直人は話した。両親をファンガアに殺され、その復讐のために戦っている事を。

「……………それが直人がライダーになった理由、か？」

「ああ……………」

「そっか……………」

互いのライダーになった理由を話し、急激に会話が無くなるサカキと直人。二人の間には重い空気が流れていた。

（この二人、似た境遇なのだ。性格は似ていないが、しかし……………」

重い。そうキバット・バット五世は思った。

直人は昔を思い出したのか暗くなり、サカキは何を思い出したのか怒気を纏っている。

キバット・バット五世はこの空気を变えるべく、何気に気になっていたサカキとソラとリンフォースの三角関係について突こうとし、気付いた。

「なっ!?!? これはっ!?!」

「ん？」

キバット・バット五世の驚きの声に気付き、サカキと直人はキバット・バット五世を見ようとして、同様に気付いた。

空が緑やら紫といった訳の分からない……リインフォーアの境界内と同じ色をしていた。

「あれ？」

サカキは首を傾げる。いつ入った？　というか巻き込まれた？

「おい」

直人はサカキを呼び、顎で前方を指す。そこには、白髪に青い衣服、屈強な体に何故か犬耳と犬尻尾を生やした不審人物……人型形態のザフィーラがいた。

直人は不審人物を今すぐぶった切れるよう、隠し持っていたザン

バットソードを構える。と、サカキがそれを止めた。

「大丈夫。あれ一応身内だから」

「あの不審人物がか？」

「うんまあ……。おい、ザファイラー！ ザツファイラー！ お前こんなトコで何してんだー!?」

サカキの大声に気付いたのか、ゆっくりとこちらを見るザファイラー？ ……だが、その目は何故か血走っていた。

「……………わく」

「は？」

「渴く……………。喉が渴く……………!!
血が足りない……………! 貴様の血を、肉を……………我に
よこせええええええええええつ!!」

危ない事を言い、突っ込んで来るザファイラー？

いきなりの事に、変身も間に合わない……。。

「怖いわっ！！」

なので、サカキはザフィーラ？の顔面にドロップキックを叩き込むのであった。

「オiiiiiiiiiiiッ！！」

結界内に、直人とキバット・バット五世のツッコミシャウトが響き渡った。

時間は少し遡り、八神家では残った女性組＋キバット・ブレード八世がリビングに置いてある、コタツで入ってテレビを見ながら和んでいた。

そんな時、八神家の電話が鳴り、リインフォースがコタツから出て受話器を取る。

「はい、八神です」

『あ、リインフォース？ エイミーです』

電話の相手は、ハラオウン家のマンションに滞在しているエイミーからだった。

「リミエツタ執務官補か。どうした？」

『うん。リインフォースさ、今結界……………って、今電話に出てるなら違うか』

「？ いや、話しが見えないんだが……………」

『あ、ごめん。実はさ、今色んな所で結界が発生してるんだ。しかもベルカ式のもあって……』

そこまで聞き、リインフォースは理解した。

ベルカ式の術式を使えるのは八神家の人間のみ。しかもはやてと守護騎士達は本局に行っていて、そのため海鳴市にはベルカ式の使い手はリインフォースしかない。

だが、当のリインフォースは昼間に一回使っただけで、それ以降は使っていない。

『それで確認のために連絡したんだけど……。うん、一応調べてみるよ』

「そうか。ならば私も行こう。ベルカに精通している者がいれば、何か分かるかも知れない」

『うん。悪いけどお願い。じゃっ』

エイミィは通話を切り、リインフォースも受話器を置く。

「何かあったのか？」

キバット・ブレード八世が飛んで来たので、リインフォースは腕を平行に上げる。

キバット・ブレード八世はリインフォースの腕に乗った。

「ああ。今この街に、複数の結界が発生したらしい。中にはベルカ式の物があるらしくてな、調べに行ってくる」

「そうか……。俺達も行くか？」

「いや、客人を残すわけにもいかないからな、留守番を頼む。あと説明もな」

「分かった。気をつけるよ」

「ああ」

キバット・ブレード八世に返事を返し、リインフォースはすぐを外に出て、騎士甲冑を装着すると夜空へと羽ばたいた。

「……………ん？ あれは……………」

夜空を飛んでいたリインフォースは、サカキと直人、キバツト・バツト五世を発見。二人と一匹の前に降りた。

「サカキ、不知火、五世」

「リインフォースか。どうしたんだ？ 騎士甲冑なんか着て」

「少々厄介事があったな。そっちはどうしたんだ？」

「いやそれが……………」

サカキは先程、ザフィーラにバイオハザード的に食われそうになり、ドロップキックで黙らせた事を、そしてドロップキックでダウンしたザフィーラが、“白い破片となって消えた”事を話した。

「多分アレ偽者だと思っただよ。状況的にっつーか、展開的に」

「なんの事だ」

「だが直人、偽者というのは当たりかも知れん。俺達はサカキ達の家族を知らんが、アレは普通ではありえない」

キバット・バット五世の言う通り、いくらザフィーラがプログラムでも、ドロップキックでやられて破片になって消えるなど起きるはずがなかった。

リインフォースはサカキの話聞き、暫く顎に手を当て考えた後、サカキ達に話す。

「実は、リミエッタ執務官補から連絡があつて、複数の結界を確認したらしい。それで調べに行こうとしてたんだが、何か関係があるかも知れない」

「ていうより、大アリだろうな。タイミングにしても、状況からしても」

そう言い、『行くしかないだろ』とリインフォースに返したサカキは、今度は直人を見る。

「つー訳で直人。悪いけど五世と二人で戻ってくれねえか？」

「何故だ」

「何故って、こっちの厄介事に巻き込む訳にはいかねえだろ。だから……」

「それは賛成しかねるな」

キバット・バット五世が否定する。

「結界がいくつもあるなら、また巻き込まれるかも知れん。その場合、魔法をまったく知らない直人と俺だけより、魔法に精通しているお前達という方が安全だと考える」

「……そうだな。その方がいいかもしれない。サカキ、お前はどうか？」

リインフォースの問いに、サカキは『そうだな』と返す。

「だったら変身してから行こうぜ。不意打ちされたらたまんねえ」

そう言い、サカキは音叉・音角を持つ。

直人もその意見には賛成で、右手を上げた。

「さあ、終焉を奏しよう。ガブツ!!!」

「変身っ!!!」

キバット・バット五世は直人の腕に噛み付き、出現したベルトにぶら下がり、サカキは深緑の炎に包まれる。

そして、それぞれの変身プロセスを終え、仮面ライダー逆鬼と、仮面ライダーキバ・エターナルフォームが揃った。

一方、錬矢が変身した仮面ライダーリュウガとフェイトも、エイミーからの連絡を受け、複数の結界の一つに突入していた。

連絡を受けた時はアルフも一緒だったが、単独行動は危険だと判断したリュウガがなのは所に行くよう指示していた。

「……………見たとこ、普通の結界みたいだな」

「そうですね……………」

中を見渡しながら、リュウガとフェイトは歩を進める。普通じゃない結界がどういふのかは、関係者じゃないと分からない。

ちなみに何故今回はリュウガかというと、オーガギアは修理中で、ラハブドライバーはオーバーホールに出したためである（リュウガに変身した時には驚かれたが）。

暫く歩いていると、前方に人影がいた。

「あれは……………」

ピンク色のポニーテールに騎士甲冑、右手には炎の魔剣を握っている。

「シグナム……………」

烈火の将、シグナムだ。だがシグナムも、ザフィーラと同様に本局にいるはず。ならば目の前にいるのは……………。

シグナム？はレヴァンティンを構え、“敵”を見据えた。

「……………“闇の書”の完成のため、貴様の魔力を頂く」

『闇の書』。その言葉にフェイトは思考が鈍り、バルディッシュ

を構えるのが遅れてしまう。

シグナム？はその隙を見逃さず、一気に肉薄しレヴァンティンを振り落とす。……が、それを黙って見ているリュウガではない。

素早くフェイトの前に移動し、左手でレヴァンティンを握っているシグナム？の右手を掴む。

「くっ！」

「フンッ！！」

シグナム？は距離を取ろうとするが、右手を掴まれてるため離れられない。

リュウガはそのまま、シグナム？の顔面に右拳を叩き込んだ。

「がっ！？」

「ふっ、ふっ、フンッ！！」

続けて顔面に二撃、左手を放し腹部に蹴りの一撃を叩き込み、吹き飛ばす。

そしてバツクルのカードデッキから一枚の 暗黒龍が描かれたカードを引き抜き、左腕のドラグバイザーに装填する。が、すぐにはバイザーを閉じず、背を向けた。

「 はあああああああああつ！！」

『ガコン』というカートリッジが排出された音とともに、背後から脅威が迫る。

リュウガは慌てず、余裕をもってバイザーを閉じ、カードの効果を発動した。

《ADVENT》

『グワアアアアアアッ！！』

電子音とともに上空からドラグブレッカーが強襲。シグナム？に体当たりし、土煙りが上がった。

「……やり過ぎなんじゃ……」

「なに言ってるの。男はいつも全力投球。ルール無用の残虐ファイターよ」

助けてもらってなんだが、冷や汗を流しながら聞くフェイトに、リュウガは訳の分からない理論武装をするのだ。コイツはディケイド以上の悪魔だ。

『グル？』

そして気絶してるのか、グッタリしているシグナム？をくわえたドラグブロッカーが、『食べていい？』と見ている。と……。

「あ」

「シグナムツ！？」

リュウガとフェイトの目の前で、ドラグブラッカーがくわえているシグナム？が破片となって消えたのだ。

「この魔力反応……それにシグナムのあのセリフ……
ああ、なるほど」

「え？ あの、どういう事ですか？」

一人で納得しているリュウガに、フェイトは意味が分からず首を傾げる。……その後ろでは久しぶりのご飯を食べ損なったドラグブラッカーが泣いていた。

「うまあ。……フェイト、エイミィちゃんに連絡。あとそのままサカキ達にも連絡。……闇の書は、まだ消えてない」

「闇の書の残滓？」

『うん。観測データもそうだし、リインフォースと鍊矢さんも同じ事言ってるから、まず間違いないよ』

八神家。ソラの通信端末にエイミーから連絡が入っていた。

現在海鳴市に発生している結界は、闇の書の残滓が原因らしい。

闇の書の闇……消滅した防衛プログラムの一部が残っており、復元しようと無差別に結界を展開しており、闇の書事件に関わった人物の過去の記憶を再生・実体化させ、暴れさせている。

『今はフェイトちゃん達が対処してくれてるけど、数が多くて。リンディ提督やクロノ君、はやてちゃんと守護騎士の皆にも連絡したけど……多分間に合わない』

「分かりました。私も行きます」

『ごめん。お願い。私はここから指示出すから』

「はい」

ソラは通信を切る。そして優紀を見る。

「すみません。そういう事なので、留守をお願いできますか？」

「あの……話は聞いていて分かったのですが、直人さんとこっちのキバツトさんは……」

分かったと言っても、今大変な状況というだけで、ほとんど分かってないのだが。

「不知火様でしたら、先程リインフォース様から念話がありました」

「ね、ねんわ？」

「はい。単独で行動するのは得策ではないという事で、サカキ様とリインフォース様と一緒に行動するそうです」

それを聞いた優紀は『そうですか……』と言ったあと、

何か決心した表情になってソラを見た。

「ファルコンさん、私も行きます」

「えっ！？　しかし東雲様……………」

「あ、私の事は名前でもいいですよ？」

「でしたら、私の事も名前で……………優紀様」

「あの、私には『様』付けしなくていいですよ？　ソラさん」

「え？　でも……………。あと私には『さん』付けは……………」

「でも……………」

「ですから……………」

「でもでも……………」

「ですからですから……………」

「でもでも……………」

「ですからですから……………」

双方謙虚な性格のためか、譲り合いがエンドレスに続いている。
そんな訳で……………。

「お前ら……………いい加減にしろおおおおっ!~!」

キバット・ブレード八世のシャウトが響くのであった。

「いつまで続けるつもりだっ!? 互いに『さん』付けでも『様』付けでもいいだろっ!~!」

「で、でも私、『様』を付けられて呼ばれた事がなくて……………」

「そうだろうな。だが許して欲しい。

ソラは育ちのせいもあって、『様』を付けないと、人の名前を呼べないんだ。

あとソラ、別に『さん』付けくらいいいだろ」

「でも……………」

「サカキにお前の失敗談を」

「分かりました」

素早い変わり身。キバット・ブレード八世はため息が出る。・・・
同時に、世界が薄暗いものになった。

「これはっ!!」

「結界だっ!!」

素早くソラとキバット・ブレード八世は家の外に出る。その後ろには優紀も付いて来る。

外に出ると、八神家を中心に結界が張られており、ソラとキバット・ブレード八世はすぐに気づき、上を向く。

そこには、栗色のショートカットの髪にどこか冷たい青い瞳。漆黒のバリアジャケットに、左手に紅く染まった不屈の心を持った少女が、ソラ達を見下ろしていた。

二十五ノ巻に続く。

二十四ノ巻『闇の残滓』（後書き）

サカキと直人は変身したけど戦闘無しっ！！

ちなみにリュウガ（錬矢）の戦闘はリュウガVSファムを参考にしました。

錬矢は“敵”には容赦しませんから。

さて、前書きで書いたアンケート。もといアンケートなんですけど、二つあります。

まず一つは逆鬼のバイク！

響鬼やキバのようなタイプ（車種が分からない）にしようか、カイザのサイドバツシャーのようなサイドカー付き。
はたまたアギトのトルネイダーのようなタイプにしようか、クウガのビートチェイサーやファイズのオートバジンのようなオフロードタイプにしようか悩んでいます。

もしよろしければ皆様の案をお聞かせ下さい！（複数でも可）

二つ目はサカキをハーレムにするか否か！！

『もうリインフォースがいる時点であってるじゃん』というツッコミはさておき、そのお相手はフェイト。彼女を逆鬼ガールズに入れるかどうかです。

ただリインフォースのような愛人（一方的な）ではなく、フェイト
にとっての初恋の相手という意味です。

サカキの第一はあくまでソラですし、フェイトやはやては『手の掛
かる妹』的な位置ですけど……。

感想、メッセージにてお待ちしております。では。

二十五ノ巻『マテリアル』（前書き）

おはこんばんちわちわー

今回は逆鬼、リインフォース、直人は少なめでソラと優紀、フェイトが多いです。

二十五ノ巻『マテリアル』

ソラ、優紀、キバット・ブレード八世の前に現れた紅い不屈の心を持った少女。その姿はバリアジャケットや髪が違うが、『高町なのは』そのもであった。

「なのは様……………違う。貴女はいつたい……………」

「はい。私は『高町なのは』ではありません」

少女はあっさりと肯定する。

「私は『高町なのは』を元に、闇の書の闇より生まれた構築体……………
……………『理』のマテリアル、星光の殲滅者と申します」

少女……………星光の殲滅者は、自己紹介をしお辞儀をする。
だが、その姿には一片の隙が無い。

「………星光の殲滅者と言ったか。お前は話に聞いていた残滓と違い、意志があるのか」

「はい」

キバット・ブレード八世の問いに、星光の殲滅者は肯定した。

「私を含めた三体のマテリアルは、闇の残滓達と違い、自我を持っています。

………そして、私達の目的は『砕け得ぬ闇』の復活のため、最も障害になるであろう紅き鬼、黒き龍、そして蒼剣のキバ………
………つまりあなたを倒す事」

そして、星光の殲滅者は紅い不屈の心………ルシフェリオンを構える。

それに反応し、ソラは服の袖を捲くり右腕を出す。が、優紀は自身の変身ツールである白い【チェンジ・ケルベロス】のカードと【ラルクバツクル】を出す。相手が少女の姿であるためかそこで動きを止めてしまう。

「優紀様？」

「……………本当に戦うしかないんでしょうか。だって相手は……………」

「戦うしかないだろう。戦わなければこちらがやられる」

「でも……………」

「気にする事はありません」

悩む優紀に、意外な所から声が掛けられた。

優紀は声の主……………星光の殲滅者を見る。

「私は人のそれとは違います。ですので、私を倒しても殺した事にはなりませんので……………さあ、“闘い”を始めましょう」

星光の殲滅者は、ルシフェリオンを振る。すると、彼女の周りに紅い魔力スヒアが現れた。

「優紀様っ！ 戦っしかありませんっ！！」

「くっ……！！（やるしかないのっ！？）」

「行くぞっ！ ガブッ！！」

キバット・ブレード八世はソラの腕に噛み付き、優紀はチェンジ・ケルベロスを入れたラルクバツクルを装着した。

「「変身ッ！！」」

《Open Up》

ソラはキバット・ブレード八世を掴み、キバットベルトに装着。優紀はラルクバツクルのミスリルゲートを開き、そこからオリハルコンエレメントが放出され自動で彼女の体を通過する……。

そこに、キバ・ブレードフォームとWホワイトラルクが揃った。

「やすらかな永遠を、今度は過たず、あなたに送ります」

同じ頃、リュウガ・フェイト組の前にも、マテリアルが現れていた。

その姿は……………。

「ふふふふ……………」

「わ……………私……………?」

「あははは」

リュウガとフェイトの前に現れたマテリアル。その姿は青いフェイトそのもの。

刃の襲撃者。ハッキリ言っただけさ。

「……………あー、うん。で、何か用？」

「よく聞いてくれたね、黒き龍。ボク達の目的は今度は碎け得ぬ『闇』の復活。そしてもっとも邪魔になるであろう、君を倒す事だっ
！！」

『コイツ、サカキと同じだなー』と思いつつ、面倒臭そうに頭を掻きながら聞くりユウガ。

雷刃の襲撃者はさっきのフェイトの驚き顔がそれほど良かったのか、上機嫌にベラベラと喋り出し、他にも『紅き鬼や蒼剣のキバの所にも、他のマテリアルが向かった』や『ボク達マテリアル以外に、残滓を生み出す存在がいる』、『それを倒せば残滓は止まる』など、聞いてもいない事も喋った。

どうやらマテリアルは、見た目は元になった人物に近いが性格は大きく違うらしい。

ベラベラ喋った雷刃の襲撃者は、手に持ったデバイス……………バルニフィカスを蒼い刃の大鎌に変え、振りかざす。

「ボクは帰るんだ。あの温かな闇の中に……………血と災いが渦

巻く、永遠の夜に」

一方、闇の残滓を潰し回っていた逆鬼、キバEF、リインフォー
スは、全体が紫で稲妻が轟く、通常とは違う結界の中に閉じ込めら
れていた。

そして逆鬼達の前にも……………。

「フン、塵芥が」

いきなりけなし言葉を言ってきたのは、はやての姿をしたマテリ
アル。髪はグレーに近く毛先が黒。瞳はツリ上がり翡翠色で、騎士
甲冑は形状ははやてと同じだが色が紫と濃いグレーとなっている。

ちなみに、帽子は被っていない。

その表情は明らかに逆鬼達を見下しており、偉そうだ。

「なんだお前」

「我はマテリアルの『王』、闇統べる王ぞ」

見下されて事に、逆鬼はキレ気味に聞く。

それに応え、名乗る闇統べる王。

「………何が目的だ」

「フン。闇の書の復活のため、障害になる紅き鬼を我自らが闇の糧にしてやりに来たのだ。塵芥」

目的を尋ねるキバEFだが、見下しながら返された事により少々癪に障った。

闇統べる王は気にせず続ける。

「紅き鬼を誘い込んだつもりだったが、まさか管制プログラムと、星光の殲滅者が向かったはずのキバまでいるとはな。まあ、手間が省けたがな」

そう言つて今度は高笑いする闇統べる王。だが本来知っているキバは蒼なのに、目の前のキバが白なのを気付いていないようで、色など些細な事なのか、それとも素^{バカ}なのか……。

とりあえず、高笑いしてる自意識過剰は無視し、逆鬼、リインフォース、キバEFは互いに向かい合い、どうするか決める事にした。

「……………どうする？」

「無視する……………というのはどうだ」

キバEFが提案する。

関わりたくないといのものもあるが、先程の話から察するに、別のマテリアルが蒼剣のキバ……………ソラのもとに向かったらしい。つまり、一緒に居る優紀にも危険が及ぶ。

優紀もライダーに変身でき、強いとは言え、キバEF……………

直人としては一刻も速く戻りたかった。

が。まあ、子供の姿をした相手と戦うのは気が引けるといってもある

「確かにな。あんなの無視してソラ達のところに戻ったほうがいいだ
ろ」

逆鬼も同じ事を考えたが、リインフォースが難色を示した。

「難しいな……。今までのもそうだが、結界を張った存在
を倒さない限り」

「外へは出られない、か」

「そうだ」

それを聞いて、逆鬼は『はあ……。』と頭を掻き、後ろに両手を
回して音撃棒・烈撃を引き抜いた。

「……………とりあえず、ボ」るか

「パイロシューター!!」

なのはの【アクセルシューター】に炎熱付加をした紅い魔力弾が
殺到する。

「くっ……………!!」

Wラルクはボウガン型の専用武器、【醒銃・ラルクラウザー】か
ら光弾を発射し迎撃するが、撃ち落とし切れず残った魔力弾を転が
り避ける。

その間、キバBFが跳躍。空中にいる星光の殲滅者に接近し雪月牙を振るう。

だが、星光の殲滅者は右手を翳し前面に紅いミッド式の魔法陣の盾を展開、真つ正面から受け止める……。のではなく、盾を展開しつつ自身も動き、雪月牙の刃を受け流す。

「……………知っています。日本刀と呼ばれる剣は、切る対象に対し垂直に振るわなければその真価を発揮出来ない。こつやつて軸をずらせば、容易に捌けます」

雪月牙を捌かれ、地面に着地したキバBFに向かってパイロシユーターが殺到する。

キバBFは得意のスピードで避ける。が、キバBFが避ける先に魔力弾が着弾していき、最終的に動きを止められてしまう。

「しまっ……………!!」

「ブラスト……………ファイアアアアアアアアツ!!」

そこに、パイロシューターと同じくなのは【ディバインバスター】に炎熱付加された砲撃、【ブラストファイアー】が放たれた。

「ソラさんっ！！」

砲撃が直前にWラルクが飛び出し、キバBFを救う。

「優紀様……………ありがとうございます」

「いえ……………。しかし、強い」

「はい」

WラルクとキバBFは、まるでこちらが動くのを待っているような星光の殲滅者を見上げる。

二人のライダーの能力は決して低くはない。だが、それでも星光の殲滅者の方が上手であった。

キバBFの攻撃は先程と同じように軸をずらしてかわされ、Wラルクの射撃は火力の差で撃ち負ける。

あくまでも自分の得意の距離で戦い、接近されたら無理に対抗せずにかわす。元となったなのはよりも、力の使い方が上手い。

さらに言えば、Wラルクは初めての魔導師戦と相手が人の姿のため、攻撃に戸惑いが出てしまうのだ。

「どうする？　いくら接近しても、受け流されては意味が無いぞ」

「そうですね。私の攻撃では、届く前に撃ち落とされますし……」

「……私に考えがいらいます」

そうして、キバBFが策を話すと……Wラルクとキバツト・ブレード八世は驚きの声を上げた。

「ええっ!?!」

「お前……サカキに影響されてないか？　それは策とは言えんぞ」

「問題ありません」

しれつと返すキバBFに、キバット・ブレード八世はため息が出る。

「はあ………。仕方ない。一刻を争う事態だ。優紀、協力してくれ」

「あ、はい………」

「相談は終わりましたか？」

星光の殲滅者の声に反応し、キバBFとWラルクは見上げる。どうやら、本当に動くのを待っていたらしい。

「はい。お待たせしました。………行きます」

キバBFは右腰に備え付けてある、三つのフェッスルの内、レオフェッスルを取り出しキバット・ブレード八世に囁ませた。

「レオクロー!!!」

「はあっ!!」

金と蒼の閃光が飛び交い、交差、激突する。

「ハーケンセイバー!!」

《H a k e n S a b e r》

「光翼斬っ!!」

《K o u y o k u z a n》

互いの鎌から金と蒼の刃が発射され、ぶつかり相殺する。

その様子を、リュウガは少し離れた場所で眺めていた。というのも、最初はリュウガが戦おうとしたのだが、フェイトが自分が戦うと言ったのだ。それで、雷刃の襲撃者も別に構わないそうなので、リュウガは下がり、フェイトと雷刃の襲撃者の一騎打ちとなったのだ。

ただ、金と蒼の違いはあるが見た目がほとんど同じなため双子の姉妹喧嘩にしか見えない。

「プラズマランサー!!」

「電刃衝っ!!」

今度は雷の槍が飛び交い、互いに相殺する。と、リュウガは気付いた。

「もしかして、押されてる?」

思えば先程のハーケンセイバーもそうだが、今のランサーもフェ

イトが僅かながら押されてるように見える。

「フルドライブッ！！」

《Zamber Form》

フェイトはバルディッシュをザンバーフォーム変える。だが、雷刃の襲撃者に何か言われたのか、その表情は動揺しているようだった。

雷刃の襲撃者も対抗し、バルニフィカスをザンバーに変え真つ正面からぶつかる。

巨大な大剣で鏝ぜり合いをする中、雷刃の襲撃者は不敵な笑みを浮かべフェイトに何か言う。そして、フェイトの動揺が濃くなり・・・バルディッシュが弾き上げられた。

「電刃衝っ！！」

追撃に、雷刃の襲撃者はがら空きとなったフェイトの腹に蒼い雷の槍を打ち込み、吹き飛ばす。

吹き飛ばされたフェイトは、そのまま先にあったビルに墮ちた。

S i d e : フェイト・テストロッサ

・・・痛い。

お腹にランサーを撃ち込まれたのもそうだけど、フィールドの出力を上げられなかったから、墮ちた衝撃も殺せなかった。

「バル、ディッシュ・・・」

バルディッシュを捜す・・・けど、どこに飛ばされたのかも分からない。痛みで起き上がる事も出来ない。

そうして・・・込み上げてくるのは後悔。

何である人に任せなかつたんだろう。相手が自分の姿だから？
自分がAAAランクで、負けるはずがないと思っていたから？

そこで思い出すのは、蒼い私……雷刃の襲撃者の言葉だ
った。

『君は迷っている。伸ばされた手を取るかどうかを……。
裏切られるかも知れないからだ。
そう、君は怖いんだ』

違っつ！！……そう頭の中で否定しても、その言葉が
頭から離れない。耳に残って響いてる。

なのはは、アルフは、はやては、リンディ提督は、みんなが私を
『フェイト』って呼んでそばに居てくれるっ！！

でも……みんなが私から離れる光景が浮かんでしまう。

私は暗い場所に一人つきり……。そう思うと、急に寒く
なる。体が動かなくなる。

「碎け散れっ！」

だんだん薄れてく視界の中で、雷刃の襲撃者がバルディッシュによく似たデバイスを振るう。その際、カートリッジも使われて、あの子の魔力が跳ね上がる。

ああ………終わりなんだ。

多分あの子が使おうとしているのは、名前は違うだろうけど、私の魔法のジェットガンバー。ハーケンセイバーも、プラズマランサーもそうだから、多分そう。

込み上げてくるのは、羨ましさ。

私と同じ姿のあの子は、私とは違う。迷わないで、自分の行きたい道を真っ直ぐ進んでる。

「雷刃滅殺っ！ 極光おおおお斬っ！！！」

振るわれた蒼い大剣。薄れらいでく意識の中で、最後に

S U R V I V E

そう、聞こえた気がした……。

さて、偉そうに逆鬼達にケンカを売った閻統べる王はどうなったのか。他とは違う書き方を考えれば予想出来るだろうが、その前に思い出してほしい。

広域殲滅魔法は確かに強力だが、その分発射までに時間が掛かり、その間使用者は無防備になってしまう。

リインフォースはともかく、普通なら発射までの間、他の魔導師が騎士に守ってもらおう。はやてもそうであり、そのはやてを元に生まれだ閻統べる王も変わらない。

つまり何が言いたいかと言うと……。

「H A H A H A H A H A ! ! !」

「ひぎゃあああああああああつ!?!?」

一人じゃ絶対勝てない。結果、逆鬼に某嵐を呼ぶ幼稚園児のよう
にこめかみにグリグリやられてるわけである。

「おい……………。いいのか、あれは」

「なんと言うか、色々とストレスが溜まってるとみたいでな、その……すまない」

653

逆鬼の行為に引くキバEFと、謝罪するラインフォース。

「いやあ、チビツ子をド突き回すのは中々楽しいなあ」

（うわあ……………）

逆鬼のDS発言に、ドン引きする二人。

そんな時、闇統べる王が負け惜しみというか負け犬の遠吠え的な事を言う。

「ぐう………！ こうしているのも今のうちだ。我や他のマテリアルに勝てたとしても、最後に残った『荒ぶる鬼』が貴様らを………」

「てや」

「うぎやあああああああああつ！…！」

負け犬の遠吠えを言う闇統べる王を、手に力を入れて黙らせる。

その時、逆鬼達の近くのビルが吹き飛んだ。

「なっ!?!」

そして、元々ビルがあつた場所に、『荒ぶる鬼』………逆鬼が堕ちた姿である、牛鬼の姿があつた。

二十五ノ巻『マテリアル』（後書き）

なんだかんだでコラボ4話目。予定では、次話でコラボ終了です。

（まあ、その後すぐに海人さんとのコラボですが）

ソラの策とは？ フェイトの運命は？ そして現れた牛鬼は……
……どうでもいいや。

闇統べる王に関しては、相手が逆鬼だったのが不運。烈火弾の連射
ラインフォースのナイトメア（砲撃） バインドで捕獲 グリグ
リの流れ。

では。

二十六ノ巻『純白との別れ』（前書き）

すいません。かなり更新が遅れました。週一更新を目指していたのですが……。

今回で黒服さんの『仮面ライダー剣&キバ 白き帝王』とのコラボは終了です。

黒服さん、ありがとうございましたm(_____)m

逆鬼は闇統べる王を担いだまま、片手に音撃棒を持ち、先に炎を燈す。

「それに、その顔で死なれると目覚めが悪いっ！！
であっ！！」

音撃棒を振るい、烈火弾を放つ。だが、牛鬼の強硬な鎧に阻まれ虚しく四散しただけだった。

続いてリインフォースが上空から銀色の砲撃、【ナイトメア】を放ち、逆鬼が攻撃した事から牛鬼を敵と判断したキバEFが、接近しザンバットソードで脚に切り付ける。

だがやはり、砲撃は直撃しても耐え切れられ、ザンバットソードは弾かれる。そして、牛鬼はすぐ近くにいたキバEFを狙い、その巨大な腕を振るう。

「ちっ！！」

幸いにも、予備動作が大きいのとその巨体のため動きが遅いため、キバEFはすぐに反応し後ろに下がり避けた。

「つか、あれなんだよっ!? いや、牛鬼だって事は分かるよ?
てか何で牛鬼っ!?!」

「……………アレは、アレこそが『闇』の根本。残滓を生み出す
存在。『荒ぶる鬼』。フッフ、我に勝ってもアレには」

「てりゃ」

「うんぎゃあああああああああつ!?!」

とりあえず、何故か勝ち誇る闇統べる王を目潰しで黙らせる。

つまり、目の前にいる牛鬼は闇の書の闇が変化した姿であり、
マテリアルや闇の残滓を生み出している存在らしい。

「ちょっと待て、じゃあ何でお前がいるのにアレは突っ込んで来た
? 一応でも仲間だろ」

「アレには知性という物が無い。ただ破壊するために暴れているだ
けにすぎん」

『暴れているだけ』。それを聞いた逆鬼は、ギリツと奥歯を噛み締める。そして、キバEFを目標として突っ込んで行く牛鬼を見ながら納得した。

「……………なるほどな。つまり、俺の時と一緒にして事が……………
……。
しゃあねえ、リインフォースッ！ 来いっ！！」

音撃棒を仕舞い、代わりに靈剣・紅を持ち、リインフォースを呼ぶ。

リインフォースは逆鬼の声に反応し、逆鬼を見て頷く。

「分かったっ！！」

リインフォースが応えた事により靈剣・紅が黒く輝く。そしてリインフォースが黒い光りの球体に変化し、逆鬼の中に入りその姿を変えた。

「【 はあっ！！】」

漆黒の鎧に靈剣・紅が変化した大太刀。そして、漆黒の巨大な翼・
・
・
・
・

逆鬼・夜天、再び推参。・・・・・・闇統べる王を担ぎながら。

牛鬼の突進を大きく跳躍して避けたキバEFは、逆鬼・夜天の姿
に驚き、そして笑った。

「何でもアリだな、あいつらは」

そうしてザンバットソードを構え直し、唸り声を上げる牛鬼に向
かって行った。

「レオクローー!!」

レオフェツスルの旋律が響き渡る。

すると、何処からともなく紅い獅子の肖像が飛来し、一對の爪甲に別れる。そして、キバBFの両腕に装着されるとレオクローーから鎖が伸び、キバBFの肩、胸を包み、弾け、紅い勇ましい獣のような物に変わり、白い複眼も紅く染まる。

「グルル・・・・・・・・！！ ガアアアアアアアアアアアアツ！！」

「ソラさん・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

キバBFはキバ・レオフォームにフォームチェンジすると、レオクローーを装備した両腕を上げて雄叫びを上げる。その様子を、Wラルクが心配そうに、星光の殲滅者は何も言わず見詰めている。

そして、キバLFは両腕を振り払うように振り下げると、肩を上

下させながら後ろに居るWラルクを向いた。

「大………丈夫………です………」

口ではそう言うキバLFだが、明らかに無理をしている。

レオクローに変化しているライオ族は気性が荒く、好戦的な一族で、レオクローを装備しているキバもその影響を受ける。今、ソラは敵に襲い掛かる行為を必死に抑えているのだ。

その事を悟ったWラルクは大きく頷き、キバLFと共に星光の殲滅者を見据え、そして駆け出した。

「ルシフェリオン」

《Pyro Shooter》

星光の殲滅者は直ぐさま反応し、パイロシューターを発射する。誘導弾で牽制し、動きが止まった所に砲撃を撃ち込むつもりだった。

「ッ!？」

キバルFとWラルクはパイロシューターを避けるだろうと、星光の殲滅者は思っていた。だが予想に反し、キバルFが取った行動は予想外のものではあった。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

なんとキバルFは、雄叫びを上げ迫り来る紅い誘導弾を、両腕に装備したレオクローで薙ぎ払っているのだ。

だが誘導弾は絶え間無く撃ち続けているため、捌き切れずに体に当たる。だがそれでも、キバルFは足を止めずに星光の殲滅者の元へ向かっている。

何故こんな無謀な事を？ 目を見開いて驚く星光の殲滅者だが、キバルFの後ろにWラルクの姿を見つけ、その意図を理解した。

（キバルは盾であり囿。本命はその後ろに隠れた白い銃士……………
ならばっ!!）

星光の殲滅者は高速移動魔法を発動させ紅い光りに包まれ、キバLFとWラルクから距離を取る。そして、ルシフェリオンはその姿を突撃槍のような形に変えた。

「集え、明星。全てを焼き消す焰となれ……」

星光の殲滅者の足元に紅いミッド式の魔法陣が展開され、眼前に紅い光りが集まり、バスケットボール程の魔力スフィアが出来上がる。

そして、明星が集まった全てを焼き消す焰の球体に、ルシフェリオンを振り下ろした。

「ルシフェリオン、ブレイカアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

放たれた集束砲は地面をえぐり、キバLFとWラルクを飲み込む。星光の殲滅者からはそう見えた。

チャージタイムが短かったためか、集束砲は直ぐに細くなり、最終的には地面に砲撃が通った跡“だけ”が残る。だがそれは、星光の殲滅者にとっては予想外だった。

「居ないっ!?!」

星光の殲滅者はキバとWラルクを闇の書の糧とするため、非殺傷で撃った。ならばキバLFとWラルクが居なければならぬ。それが居ないのだ。

「一体どこに……………」

星光の殲滅者は顔を左右に振り二人のライダーを捜すが、その姿を見付ける事が出来ない。

その時、何処からか響くような音が聞こえた星光の殲滅者は、それが地面から聞こえる事に気づき、何か確かめるため高度を下げる……………。と、彼女の真下の地面がボコツと盛り上がったのだ。

それに気付いた星光の殲滅者は、直ぐにその場を離れようとするが、もう遅い。

盛り上がっていた地面がまるで爆発したかのように弾け飛び、その中から高速回転している紅い何か……………レオクローを装備した両腕を突き上げ、体ごと高速回転しているキバLFが現れた。

なんと、キバLFは全身をドリルのように使い地中に潜り、ルシフェリオンブレイカーを避け、そのまま星光の殲滅者の真下まで掘り進んだのだ。

避けられないと判断した星光の殲滅者は、バリアを張り守りに入る。だがレオクローには魔皇力が込められており、キバLF自身も高速回転しているため、星光の殲滅者が張ったバリアにぶつかり、直ぐにバリアにヒビが広がる。

(破られる……!!)

そう思った星光の殲滅者は体を僅かに移動させ、キバLFと正面からぶつかっていたバリアもズレる。

それにより、ドリルと化したキバLFは火花を散らしながら受け流される。同時に、バリアも砕かれた。

「くっ……!!」

怯み、高度が下がりながらも、星光の殲滅者は自身より上に飛んだキバLFに向けルシフェリオンの矛先を向ける。だが……

《M i g h t y》

不意に聞こえてきた電子音。星光の殲滅者がハツと気付いた時は……キバLFが掘った穴から飛び出したWラルクが、ラルクラウザーを至近距離で構えていた。

「ハアツ!!」

【マイティレイ】のカードをラウザーにスラッシュする事で発動する、Wラルクの必殺技である【レイバレット】が発射される。

その光弾は何にも遮られる事はなく、星光の殲滅者を貫いた。

「見事……です……」

それだけ言い、倒れる星光の殲滅者。

Wラルクは手に持っていたラルクラウザーを捨て、慌てて駆け寄り倒れる少女を抱き留めた。

「なんとか……………勝ちました……………ね」

そこにキバLFも来るが、肩を下げて仮面の上からでも分かるくらい疲労している。

それを見たWラルクは、安心させるように微笑む。と言っても、仮面の上からでは分からないが。

「ええ、ソラさんのおかげです」

「いえ、私はなに、も……………」

と、糸が切れたようにキバLF……………変身が解けたソラは倒れる。Wラルクに向かって。

「え、えっ!?!」

Wラルクは慌てながらもソラを受け止める。

「ソ、ソラさんっ!?!」

「すみません……………少し、疲れまし、た……………」

そう言って眠りにつくソラ。

(……………すみません、直人さん。そちらへは行けないかも知れませんが……………)

両腕に二人の少女を抱き抱えたWラルクは、心の中で謝るのであった。

不意に聞こえた電子音に、雷刃の襲撃者はキョトンとなる。・・・
・・・その直後、幾つもの黒炎弾が襲い、直撃した。

煙りが広がり、その中から真つ逆さまに雷刃の襲撃者が墜ちる。

すると、フェイトが居るビルで舞い上がった土煙りの中から暗黒の烈火龍「・・・」『ブラックドラグランザー』が飛び出し、噛み砕かないよう加減した上で雷刃の襲撃者をくわえ、ビルに戻って行く。

ビルでは既に土煙りは消えており、そこにはリュウガが【SUR VIVE - 烈火 -】のカードで強化変身した、『仮面ライダーリュウガサバイブ』がフェイトをお姫様抱っこの状態で立っていた。

リュウガSVは、Bドラグランザーが雷刃の襲撃者をくわえて戻って来たのを確認すると、雷刃の襲撃者をBドラグランザーの背中に移しフェイトも乗せる。

そして自分も乗り、Bドラグランザーに命じてビルからある地点に移動する。そこには地面に突き刺さったザンバー状態のバルディッシュがあった。

「よう、大丈夫かー？」

Bドラグランザーから降りたりリュウガSVは、バルディッシュを

引き抜く。

《問題ありません。しかし……まだ隠し札を持っていたのですか》

「ハハハ、男はいつでも謎の塊よ。それと持ち難いから形変えて」
《了解しました》

バルディッシュはアサルトフォームに戻る。

リュウガSVはバルディッシュを担ぎ歩き出す。その後ろをBDラグランザーがついて行く。

《……ありがとうございます》

「は？ 何が？」

いきなり礼を言うバルディッシュに、リュウガSVは首を傾げる。

《Sirを助けていただいた事です》

「ああ、その事。別にいいって」

《いえ、今日の事もですが、先日の事もです。

リンディ・ハラOWN提督からの養子のお話も断り、人に“甘える”事を拒んでいたSirが、あの日以来、貴方にだけは歳相応の子供のように“甘える”ようになりました。それはSirがしたくても出来なかつた事です。

ですから、私は感謝します》

それを聞いたリュウガSVは、『あー』という感じに空いている片手で頭を掻く。

リュウガSV・・・錬矢は、フェイトがアリシアのクローンであり、母親であるプレシア・テストロツサ・・・否、プレシアに取り憑いた“骸骨のような怪人”にどういう扱いを受けかをリンディから聞いていた。それにはある事が理由であるが、とにかく、何故バルディッシュがこんな事を言ったのか分かった。

「まあ、アレだ。リンディちゃんと約束しちまつたし、フェイトを支えてくれる奴が現れるまでは俺が支えるし、迷ったら叱ってやる・・・それが“父親”ってもんだろ」

バルディッシュはコアを輝かせ、感謝を表す。

リュウガSVはどこからかオーガフォンを取り出し、なにやらメルを打ち始める。

そして、Bドラグランザーの背中で眠っているフェイト・テストロツサ……フェイト・T・荒木は

「とう、さん……」

と、呟き、微笑むのであった。

一方、逆鬼・夜天とキバEF、牛鬼との戦いは二人のライダーが優勢であった。

「G A A A A A A A ツー!!」

「よっ、そいやっ!!」

牛鬼の拳を体を捻って避け、そのままの勢いで大太刀となった霊剣・紅で切り裂く。

「ハッ!!」

キバEFがザンバットソードで脚を切る。ただし脚の表面ではなく、鎧が覆われていない間接を狙う。

それにより牛鬼は脚を折り、駄目押しとばかりに逆鬼・夜天が脳天に踵落しを喰らわせ牛鬼は完全に膝をついた。

一週間前、闇の書事件でオーガ達を苦しめた牛鬼が劣勢をしいられていたのか？ここに牛鬼と戦った事のある錬矢とソラが居れば分かる事だが、ユニゾンして逆鬼はともかく、キバEFの攻撃が効

いているのだ。

それは今、目の前にいる牛鬼が、鬼から変化した魔化魍ではなく、闇の書の破片が牛鬼の姿と狂暴さをマネただけであって、魔化魍特有の“音撃でしか倒せない”という部分までマネ出来ていない。

故に、キバEFの攻撃で怯み、逆鬼・夜天の攻撃で致命傷のダメージを受ける。

今日の前に居るのは、牛鬼であって牛鬼ではない、『偽・牛鬼』なのだ。

キバEFはザンバットソードを撫でる。と同時に剣に魔皇力が流れ、真紅に染まり、逆鬼・夜天の霊剣・紅の刀身が黒く輝く。

「『ハアッ!!』」

逆鬼・夜天の【夜輝一閃】とキバEFの【殺陣一閃】が綺麗に決まり、牛鬼の巨体を吹き飛ばす。

それを逆鬼・夜天の小脇に抱えられた状態で見ていた閻統べる王は、ア然とし、そして心の底からの疑問を逆鬼に問いた。

「何故……何故だ。何故お前は雑種共を守ろうとするる。」

お前は雑種共を憎んでいただろ」

雑種……それが人間を指している事は誰にでも分かった。

キバEFも最初に逆鬼が人間からどういう扱いを受けていたのか聞いていたため、人間を憎むのも納得出来る。

逆鬼は『そうだな……』と呟き、霊剣・紅を肩に乗せる。

「俺は別に人間を守る気は無いんだよ。人間がどこで何人死のうが、世界が減びようが構わない」

落ち着いた口調で……それが当然のように喋る逆鬼に、闇統べる王は再びア然とする。

なら何故人間を守るような行動をするのか？

逆鬼、そして逆鬼の中にいるリインフォースは、錬矢から聞いていた仮面ライダーの行動理由の一つである、『人間を守るために戦う』。それに反するため苦笑しつつ、逆鬼は『ただ』と続け霊剣・紅の切っ先を、二人のライダーの斬撃で苦しんでいる偽・牛鬼に向けた。

「あんなのが暴れたら明日の飯も食べねえしジャンプも読めない。アニメも見れない、ゲームも出来ない。だから邪魔する奴は全部まとめてブツ飛ばす……！！」
「ただそれだけだ」

ハッキリと言い切る逆鬼に、キバEFとリインフォースは静かに笑い、闇統べる王は一瞬ポカンとした後、『ぷっ』と吹き出し大声で笑い始めた。

「アハハハハハハッ！！」
お前は馬鹿だっ！ それも正真正銘のっ！！ そんな事のために戦うとは……」

「なんだ、悪いか？」

「ああ。志を持つ塵芥が聞いたら、どう反応するか……」
まあ良い。

お前のその馬鹿さに免じて闇の復活は止めてやろう。さっさとあのデカ物を倒すがいい。我は離れて見物するでしょう」

そう言い、闇統べる王は逆鬼・夜天の脇から抜け出し離れようとして……再び逆鬼・夜天を見た。

「先程言った“じゃんぷ”と“あにめ”……………娯楽品か。今度我の元へ持って来い。暇つぶしに見てやる」

「……………あいよ」

闇統べる王はその返事に満足げな顔になり、離れていく。

「そんじゃ直人、決めるぞ」

「ああ」

逆鬼・夜天は大太刀霊剣・紅を音撃モードし、キバEFはウエイクアップフェッスルを取り出しキバット・バット五世に吹かせた。

「GUUUU……………GAAAAAAAAAAAAAAAAツ!!」

最期の抵抗とばかりに突っ込んでいく偽・牛鬼。

キバEFは跳び上がり、月をバツクに蹴りの体制に入り、逆鬼・夜天は大太刀霊剣・紅を水平に構え、そのまま横に振り抜いた。

「ハアツ!!」

「でいやあああああああツ!!」

逆鬼・夜天の【音撃刃・鬼神覚声】が偽・牛鬼を横に両断。その直後、キバEFの【ホワイトネスムーンブレイク】が貫き爆発が起こる。

そしてキバEFが立つ場所に、キバの紋章と爆発で起きた炎だけが残った……。

『闇の書の欠片事件』。略して『闇の欠片事件』から数日……

逆鬼・夜天とキバEFが偽・牛鬼を倒した直後、闇の残滓は自動消滅し、アースラのその後の観測で発生は確認されなかった。

クロノいわく、『防衛プログラムのような巨大な魔力を消滅させたんだ。その残留魔力が暴走する事はよくある』らしい。

それが今回ように、『事件に関わった人物の姿を模倣するとはと予想出来なかった』とも言っていたが、年を戦闘で明ける事になったサカキの怒りの蹴りを入れられたのは言うまでもない。

まあそれはさて置き、観測はしばらく続いたが発生する傾向は見られなかったので、完全消滅したと判断された。

余談だが、急いで帰って来たはやてと守護騎士が、間に合わなかった事をサカキとリインフォース、巻き込まれた直人と優紀、キバツト・バット五世に平謝りしたりする。サカキはその見返りに、直人達をしばらく八神家に泊まらせる事はやてに約束させた。

直人達が元居た世界に戻るまでの間、直人はサカキやシグナムと切り合ったり、優紀はソラにヴァイオリンを教えたり（ソラの腕が向上したかは優紀が苦笑したとだけ言わせてもらう）、キバツト・バット五世がブレバットと互いのパートナーの恋愛事情について語り合っていたりした。

ちなみに、ブレバットとはサカキが直人達のキバットと間違えるという理由からつけた、キバツト・ブレード八世のあだ名である。

そんなこんなで、日夜ファンガイアを狩っていた直人達なりに、ある意味休暇のような日々を過ごしていたのだが、どんな物にも終わりはある。

今サカキ、リインフォース、ソラ、ブレバット、錬矢と、直人、優紀、キバット五世が海鳴市を見下ろせる丘の広場……直人達が現れた場所に居た。別れの時が来たのである。

「じゃな、ありがとよ」

「ああ。こちらの不祥事に巻き込んでしまった……」

「別に構わん」

「優紀様、ありがとうございました」

「いえ、こちらこそ。はやてさん達にもよろしく言ってお下さい」

「またいつか会おう、キバット五世」

「ああ、ブレバット」

（もうブレバットって定着してんだ）

サカキとリインフォースと直人、ソラと優紀、ブレバットとキバット五世がそれぞれ会話している中、一人だけ違う事を考えている錬矢。

ちなみに、はやて達には直人達が別世界から来た事は話していない。というのも、話しても話がややこしくなるためである。

錬矢はオーガフォンの画面に表示されている時刻を確認し、全員に声を掛けた。

「全員、時間だ」

すると、錬矢の言葉を合図にしたように灰色のオーロラが現れる。

直人達はサカキ達に背を向け、オーロラに向かって歩き出す。

「待てよ。ほらっ！」

するとサカキが呼び止め、何かを投げ渡した。

直人は投げ渡された物を受け取り、見るとそれは何故か『安産祈願』のお守りであった。

「まあアレだ。それは入れる袋が他に無かったからそれにしたんだ。中身は鬼石の欠片だ」

そう言われ直人はお守りの中身を取り出すと、確かに赤い石の欠片が入っていた。

「だったら俺もこれを進呈してやろう」

そう言って鍊矢も、直人にお守り……の形状をした、獣の革で造られた袋を手渡した。

686

「それは“呪い袋”だ。お前達に危害を与えた奴らに一週間“地味な”呪いが掛かる。

ああ、ちなみに中身は見るなよ？ 中身を見たら逆に呪いが自分に掛かるから」

「いらん」

最初の“呪い”というワードで突っ返す直人であったが、鍊矢のこり押しにより結局貰う事となった。

完全に余談だが、直人達が元の世界に戻った直後、以前直人達に危害^{II}戦った色違いのグレイブ・ランス・ラルクの変身者には何故か頭上から金ダライが降って来たり、バトルジャンキー・イクサの変身者にはバナナの皮で滑るといった“地味な”災いが一週間あったとか無かったとか。

「そんじゃ改めて……………じゃーな。いや、“またな”」

「ああ、“またな”」

サカキに、直人はそれだけ言うとそのまま灰色のオーロラを潜って行く。続いて優紀が一礼して潜り、キバット五世が潜って行く。そして、二人と一匹が通るとオーロラは役目を終え消えていった……………。

直人達が戻ってから数日。サカキはここ………ディンゴ・サーペントと錬矢の秘密のアジト、その一室に居た。

「なあ……まだか？」

「まだだよ。もう少しデータが欲しい」

サカキはパンツ一丁で全身にコードを付けられ、椅子に座らされており、ディンゴは目の前の空間モニターを睨みながらキーボードを操作している。

サカキがこの状態になって数時間、流石に飽き始めていた。

サカキはチラリと自分とディンゴが居る部屋の隣、ガラスから見える向こうを見る。そこには、三つのカプセルが並んでおり、その中に三人の少女………星光の殲滅者、雷刃の襲撃者、闇統べる王が眠っていた。

「………なーんで俺のまで欲しいんだか。リインフォースのだけでいいだろ」

「まあ、そう言うな。確かに彼女達を闇の欠片のような“不安定”

な状態ではなく、リインフォースと“同じ”にするだけならリインフォースのデータだけで足りるが、サカキ君に合わせるのなら、君のデータは必ず必要だ。それは彼女達の望みである。君も了承済みだろうか？」

「へいへい」

「でも、流石に何もしていないというのも辛いだろうからね。これでも見て、暇つぶしでもしてくれ」

デインゴはそう言って別の空間キーボードを出して操作する、と、サカキの前に空間モニターが現れた。

「これは？」

「今まで確認された仮面ライダーのデータ。今回みたいに、また別世界のライダーが来るかも知れないからね。いざ戦う事になったら、何かしらの対策を必要だろうか？」

「ふーん……」

ジト〜とした目になり、サカキは空間モニターに出された仮面ライダーに関するデータを見る。その中で、全身がマゼンタで、バーコードのように顔に縦線が入ったライダーに目が留まった。

(世界の破壊者・デイケイド。他のライダーに変身出来る能力、ねえ……………)

そこまで読み、興味が無くなり別のライダーのデータを見始める。これが何を意味するかは、まだ誰も知らない……………。あの真つ黒の男以外は。

二十七ノ巻に続く。

二十六ノ巻『純白との別れ』（後書き）

前書きでも書いた通り、黒服さんの『仮面ライダー剣&キバ 白き帝王』とのコラボは終了です。

でも、今回は海人さんの『魔法少女リリカルなのはStrikes Sweet Sorgs Forver』とのコラボですが。

次回までにはマテリアル三娘の名前を決めて登場させたいと思います。では。

二十七ノ巻『旅人』（前書き）

今回は海人さんの『魔法少女リリカルなのはStrikess〜Sweet Songs Forever』とのコラボです。

二十七ノ巻『旅人』

荒木家の自宅。

『アンデットハンターの世界』のライダー、直人と優紀が帰ってから一ヶ月が経った日、錬矢は自宅のリビングでソファアーにもたれ掛かりながら端末を操作し、空間モニターに映し出された映像を眺めていた。

「何見ているの？ ……お、お父さん」

「ん？」

そこに横からひよっこりと、正式に錬矢の養子となったフェイトが覗き込む。まだ慣れていないためか、最後のセリフはぎこちなく恥ずかしそうだった。

錬矢はそんな娘に笑みを浮かべつつ、見ていた映像をフェイトに見せた。

映像は五つあり、一つは通常の逆鬼。もう一つはリインフォースとユニゾンした逆鬼・夜天。

そして残り三つは、大槍を携え、手から炎を撒き散らす逆鬼。

蒼いマフラーを靡かせ、鋭い蹴りを放つ逆鬼。

死神を思わせる紫色のボロボロのロープと鎖を纏い、大鎌を振るう逆鬼。

この五つが映されており、フェイトは首を傾げた。

「これって、サカキとあの子達の……」

「そ、逆鬼の新形態実験映像。結果は見ての通り大成功。ま、武器まで変わるとは思わなかったが」

端末をフェイトに渡し、鍊矢は立ち上がってキッチンに向かう。そろそろお昼で、こいぬふおーむのアルフと窓ガラスから頭を出したドラグブロッカーが先程からプレッシャーを掛けているからだ。

「後は実戦データが取れば終わりだ。

……チャーハンで良いか？」

「うん。実戦データって事は、お父さんかソラさんがサカキと戦うの？」

「うん、そうなんだが……」

フライパンに油を入れつつ、錬矢は難色を示す。フェイトは首を傾げた。

「どうしたの？」

「いや……。ホントはもっと幅広く戦りたいんだよ。俺じゃ偏ってるし、ソラはサカキ相手だと戦えなくなるからなあ……」

それが悩み所だった。逆鬼の新形態……というよりも、今後のために逆鬼自身のデータも詳しく取りたい。だが錬矢が変身したライダーが相手の場合、近接戦の殴り合いになるのは避けられない。だからと言ってソラが相手だと、戦いにすらならない。デイングはある物の調整が忙しく、手が離せない。

「だったら私が」

「フェイトー、サカキと模擬戦して何回ボコられたっけ？」

自分が相手になろうとしたフェイトに、錬矢が遠慮なく本当の事を言う。

実際、サカキは嫌々なのはとフェイトと模擬戦をして二人を負かしていた。経験の差である。

錬矢のツツコミにフェイトは『うう……』と漏らす。

そんな娘を尻目に、錬矢は溶いた卵とご飯を炒めつつ、思考の海に潜った。

(あー、マジどうしょ。幅広いつて言うか、色んな戦い方が出来るの……。例えばクウガとかアギトとか、電王みたいに自由自在に……ん？ 自由自在?)

瞬間、錬矢の脳裏に全身がピンク……もとい、マゼンタの『通りすがり』で『大体分かった』で大概の事を済ませるライダーの姿が思い浮かんだ。

そして、錬矢の顔に陰が入り、『ティキ・ミック卿の笑み』となる。

(あ、また何か思いついたみたい)

大の字に寝っころがるアルフ、ドラグブラッカーの頭を撫でているフェイトは、同時に同じ事を思ったのであった……。

錬矢が“邪悪な”笑みを浮かべてから数時間後、海鳴市のとある公園に灰色のオーロラが現れ、そこに一組の男女が居た。

男は二十歳程で赤い髪に青い瞳　不破飛翔。

女も二十歳程で金髪のポニーテール、真紅の瞳　“別世界の”
アリシア・テストアロッサ。

「・・・・・・・・あれ？」

「じじって・・・・・・・・」

飛翔とアリシアは周りを見渡す。そして、互い見合わせた。

「『魔導師の世界』・・・・・・・・だよね？」

「そうだよな・・・・・・・・海鳴市みたいだし」

飛翔とアリシアは首を傾げた。というのも、元居た『魔導師の世界』で夕食の買い出しに自宅を出たら灰色のオーロラに飲み込まれ、今に致る。

ちなみに『魔導師の世界』とは一般的に言えば、リリカルなこの世界である。

「場所だけ移動したのかな？」

「いや、よく似た別の世界かも知れないぞ？ 前に行った事あるし・・・・・・・・」

「その通りっ!!」

「……………え？」

飛翔の言葉に答えた突然の大声に、飛翔とアリシアは後ろを振り返る。そこには、黒いサングラスを掛けた全身真っ黒な男……………
・ 錬矢が、フライドチキン片手に仁王立ちしていた。

飛翔とアリシアは弾けるように動き、錬矢から距離を取る。錬矢が声を出すまで、存在に気付かなかったからだ。

「はぐ……………。そう警戒しなさんな。俺は敵じゃない……………
……………ぶぐ」

錬矢はフライドチキンをほお張りつつ言う錬矢だが、“怪しさを全身から醸し出している男が言っても説得力が無い。”

そんな訳で構える飛翔。だがそこで、ある事に気付いた。

(あれ……………?)

気付いたのは違和感。体の中に枷を付けられたような感覚。隣に居るアリシアも同じ感覚を感じたようで、困惑の表情を浮かべていた。

(解析、^{トレス・オン}開始……)

飛翔は魔法とは違う、魔術を使い違和感の正体を調べる。だが……

「なっ!？」

調べようとした。だが、“調べられなかった”。飛翔はハツとなり、自分が使える技・能力を使おうとしたが、使えない。今度は懐を調べ、【デイケイドライバー】、【ライドブッカー】、【ケータツチ】、【ナイトのカードデッキ】、【フォーカードバツクル】とスピードスート、JOKERの【ラウズカード】を取り出す。

「こっちはあつたか……」

「ああ、仮面ライダー以外の能力は封じられてるぞ? あんま別世

界の魔術とか持ち込まれるのは良くないんでな」

フライドチキンの骨をくわえ軽く、だが飛翔達には重大な事をサラっと言う錬矢。

飛翔とアリシアは目の前の得体の知れない男に警戒を最大限し、飛翔はスピードスーツのAカード【チェンジ・ビートル】を装填したフォーカードバツクルを装着し、アリシアは【ディエンドライダー】を取り出し【カメンライド・ディエンド】のカードを構える。

それを見た錬矢は慌てた……ふりのそぶり二人を止めた。

「いやいや待て待て、だから俺は敵じゃないって……俺は荒木錬矢。この世界、『逆鬼の世界』のライダーだ」

錬矢は証拠として、自分のカードデッキを見せる。ただそれがリユウガのカードデッキのため、余計に警戒されたが。

「まあ立ちながら話するのも難だし、どっかでお茶しようや」

海鳴市のある喫茶店。錬矢は飛翔とアリシアを連れ、この喫茶店に来ていた。いつもなら翠屋なのだが、アリシアの容姿が容姿なだけに、知人達……特にフェイトに知られる訳にはいかないので、高町家からフェイトの耳に入るのを防ぐため翠屋には行けなかった。

「……………てな訳で、分かった？」

「大体は……………」

錬矢の説明に、飛翔が相槌を打つ。

説明の内容はこの世界の事。飛翔達が居た『魔導師の世界』と似

ている事とどんなライダーが居る事か、そして自分が飛翔達を呼んだという事であった。

アリシアは確認の意味を込めて、鍊矢に問い掛けた。

「つまり、貴方……荒木さんは、この世界のライダーである逆鬼と、飛翔……デイクイドを戦わせたい、という事ですか？」

「そつ、別に殺し合いしろって訳じゃない。

サカキは確かにやるほうだが、それもこの世界の話。井の中の蛙になられても困るしな、こっちはデータが取れてサカキは経験を積める。

あ、そつちにも勿論礼はするし……どうだ？」

鍊矢の問い掛けに、飛翔とアリシアは顔を見合わせ相談する。

「どうする？」

「私は別に………というか、戦うのは飛翔だし、決めるのは飛翔だよ」

「そつか。……俺は別に構わない。難だったら今からでもいい」

飛翔の返答に錬矢は笑い、さっそく懐からオーガフォンを取り出しサカキのケータイに掛ける。そして短い会話の後、オーガフォンを折りたたみ懐に仕舞った。

「話がついた。戦り合う場所に案内する」

そう言っただち上がった錬矢は喫茶店の出入口に………向かおうとして何かを思い出し、何処からか取り出した紙袋をアリシアに渡した。

「えっと………これは？」

「悪いけど“それ”着けてくれ。サカキ達に見られるのもマズイし、今フェイトも一緒に居るから」

飛翔とアリシアは錬矢のその説明に納得し、紙袋の中身を着けた。ちなみに、喫茶店のお茶代は割り勘だった。

時間は少し遡り、八神家では一つのテーブルをなのは、フェイト、はやて、そしてサカキ……。改め、“八神サカキ”が囲み、特にサカキはペンを片手にテーブルの上に広げられたノートや教科書と睨めっこをしていた。

「ほい」

サカキは書き終えたノートをテーブルの真ん中に投げ、はやてがノートを持ち両脇からなのはとフェイトが覗く。……。そして、三人の少女は笑顔になった。

「わあ、凄いねサカキ君」

「本当だよ、昨日教えたばかりの数式なのに、もう完璧に出来る・・・」

ノートを見たのはとフェイトが感心する。対してサカキは『フッ』と笑った。

「まあこのくらい俺の実力があれば・・・」

「あんなあ、なのはちゃん、フェイトちゃん。お兄ちゃんな、昨日二人に教えてもらった後、部屋に籠ってずっと復習してたんだよ」

自慢しようとしたサカキのセリフを遮り、はやてがニヤニヤしながら真相を話す。

サカキは飲み込みが早いほうであるが、それも努力の結果である。それは師匠である、志鬼の教えでもあった。

「お兄ちゃんは出来ない事があると、いつも努力して頑張るんですよ。せやから二人を驚かそうと遅くまで・・・」

「だあ、あ、あ、っ！んな訳ねえだろっ！！
てー！かそんな事言っなっ！ほらコイツら『そうなんだ・・・』っ

て嬉しそうな顔するしっ！！
お前らもんな顔するなっ！ 難だったら俺が鉄拳で歪ませてやるっ
！！

その言葉を皮切りに、リビングにてフェイトとなのは、まさに鬼のサカキの鬼ごっこが始まった。……身体能力に圧倒的差があるのはが即刻捕まったが。

さて、何故サカキが似合わない勉強をしているかと言うと、なのはやフェイト達を通う『私立聖祥大附属小学校』への転入のためである。

事の始まりはリンディの『そう言えばサカキ君、学校は？』であった。

元々サカキには『学校』という物が馴染み無かった事と、はやてが脚が不自由な事を理由に休学していたのもあって『学校に通う』という概念が無かった。だがはやての脚が徐々に回復し、復学する事になりその流れでサカキにも話が回って来たのだ。

サカキ自身は行く気が無かったのだが、周りの説得（という名の圧力）によってはやて達と同じ学校に“転入”という形で入る事となり、今こうして転入試験に向けての勉強をしていたのだ。

ちなみに、転入するにあたりサカキの戸籍をどうするかで高町家、ハラオウン家、八神家、荒木家が名乗りを上げ、はやての笑顔（脅迫）によりサカキは八神の姓を名乗る事にし、その裏でひそかに兄弟に憧れがあったフェイトが残念そうな顔をしたのは、荒木家だけ

の秘密である。」

サカキの追跡を逃れたフェイトと、巻き込まれなかったはやては改めてサカキのノートを見る。そこには今やった数学を始め、国語や社会などの一般教科がビッシリと書かれていた。

「これで一般教科を全部だよね？」

「せやね。サカキの勉強が心配やったけど、これなら大丈夫やる」

今まで頑張ったお陰で、サカキの学力は一般生徒と大差ない物となった。いや、『漢字』の分フェイトよりも上かも知れない。

これなら転入試験も大丈夫であろう。ただ一つ問題があるとすれば……。

「『い』を『ゐ』って書いたり、『え』を『ゑ』って書いたりせん限りは」

「そうだね……」

はやてとフェイトは苦笑と疲れが入り混じった視線を、捕まえたなのはにコブラツイストを掛けている鬼に向けるのであった。

そんな光景を、ソラとリインフォース、キバット・ブレード八世
改めブレバット、そして……。

「まったく、騒がしいな」

「そう言わず、あれが彼らの良い所ではありませんか」

「はむはむはむ……」

30cm程の大きさの闇統べる王 闇璃、星光の殲滅者 星
奈が眺めていた。……同じく30cm程の雷刃の襲撃者
ライラはお饅頭をほお張っていたが。

彼女達は鍊矢、ディンゴの処置（魔改造）によりリインフォースと同じくユニゾンデバイス……しかもサカキ専用のユニゾンデバイスとなった。

それは彼女達の望みであり、彼女達を管理局から守るためでもあった。

閻璃、星奈、ライラは元が付くとは言え閻の書の防衛プログラムの破片であり、管理局が彼女達の存在を知ったら“保護”という名の『捕縛』をするであろう。

さらに彼女達はAAAランク魔導師であるはやて達とほぼ同等の魔力と技術を持っている。“管理局の閻”が閻璃達の生まれを理由に、どんな事をするかは簡単に想像がつく。

管理局の裏側を知る鍊矢とディンゴは、閻璃達を“はやて達を素にした個人所有のユニゾンデバイス”として扱う事により、管理局から隠そうと考えたのだ。

無論、はやて達には閻璃達が静かに暮らせるため、と一部を隠して事情を話している。まだ幼いはやて達には管理局の裏側は重過ぎるからだ。

「こら、その饅頭の半分、我に渡さぬか」

「やだ。……はむ」

闇璃がライラが食べている饅頭を分けるように言うが、ライラはそれに応じず食べ続ける。

闇璃はまた分けるよう言うが、ライラは拒否。二人の会話はその繰り返しで徐々にヒートアップしていき、最後には取っ組み合いになってしまう。

本来は止めるべきなのだろうが、この二人はいつもこんな感じで喧嘩をしては最後に双方ダウンし、次には仲直りしているため全員ほっとしていた。その横で、星奈はソラから分けて貰った饅頭を両手に持ってほお張っている。

そんないつも通りの光景の中、サカキのケータイが鳴った。

「ん？ ……ちっ、鍊矢か」

舌打ちし、コブライストからなのはを解放。嫌々ながらケータイに出る。

「死ね」

『ちよっ、おまっ、電話出たの第一声がそれっ!?!』

「うるせえ、お前からの電話は大概が厄介事なんだよ。……………で、今度はなに？」

『切り替えはえー。……………ああ、お前と星奈達との融合形態の相手、決まったからその連絡。相手さん、戦う気満々だから今すぐな』

「今すぐかよ。まあ、一段落したからいいけど……………」

『んじゃ、いつもの訓練場所。あ、ソラも居るだろうから一緒に連れて来いよ？ じゃなあー』

訓練場所……………と言っても、山の中の開けた場所に申し分程度に小屋を立て、大太鼓や武器各種を持ち込みサカキ達の鍛練に使っている場所である。

その場所に、錬矢と飛翔にアリシア、サカキと………ピニールシートを広げているソラとリンフォース、『楽しみだねー？』と話しているはやとフェイトとなのは、それぞれのオリジナルの頭の上でマツタリしている星奈達が居た。

「………おい」

「言っな」

完全にピクニック気分の方々を見て、珍しく頭を抱える錬矢とサカキ。

錬矢の横で、『フェイトさんのキャラが………』と呟く飛翔と、まるで空から落ちてきたエンジェロイドのようなピンク色の髪型のカツラを装着したアリシアも居る。

何故アリシアがカツラを被っているかと言うと、いくら大人と子供の差があるとは言えアリシアとフェイトは瓜二つ。そこまで似ていると、サカキはともかくリンフォースや星奈には流石にごまかせないので、錬矢がカツラで変装させたのだ。

ちなみにどうでもいい事だが、先に自己紹介した際、フェイトが居るため本名を言えないアリシアが、咄嗟に『アルフォンス・エリックです』と言い、フェイトに『錬金術師みたいな名前ですね』と言われた。

「何でフェイトとはやてちゃん、なのはちゃんも来てるんだ？」

「いや……確かにソラとリンフォース、星奈に闇璃にライラを連れて出て来たんだが……」

「成る程、付いて来てる事に気付かなかったと」

「……てへっ」

「……ドラグブロッカー、食え」

ペ○ちゃんみみたいな顔をしたサカキに、ドラグブロッカーが襲い掛かる。

錬矢は、サカキの悲鳴を無視してア然としている飛翔の方を向いた。

「じゃあ始めるから、準備して？」

「いや、いいのかアレ」

「大丈夫。ドラグブロッカーも加減して……」

そう言って振り返る錬矢。そこでは……ドラグブラッカーの口から、手だけがグツタリと垂れ下がっていた。

「……………ゴメン、戦うのちょっと待って」

「……………そうだな」

そして何とかドラグブラッカーの口の中からサカキを引きずり出し、サカキが錬矢を殴って二人の殴り合いに発展した後、“怪我一つ無い”サカキと、ディケイドライバーを片手に持った飛翔が対峙していた。

その光景を、審判のように二人の間に立つ錬矢。錬矢の両肩、頭に乗っている閻璃、星奈、ライラ。

ビニールシートに座りながら、アリシア、ソラ、ブレバット、リインフォース、はやて、なのは、ドラグブラッカーを撫でているフ

エイトが見つめていた。

「そんじゃ、両方共準備はいいな？」

「ああ」

「いつでも」

「うし。ルールは簡単。時間内に相手をボコッて再起不能にするだけだ。

時間は晩飯まで。それまでに決着が着かなかつたら罰として、晩飯の買い出しに行って貰う」

「「おいッ!?!」」

即座にツッコむサカキと飛翔だが、鍊矢は無視してルール説明を続ける。

「再起不能つっても殺すなよ？ 後始末大変だから。ただし手は抜くな。本気で戦え。以上だ」

説明を終えると、鍊矢は下がりソラやアリシア達と同じ場所まで

移動する。

鍊矢が下がったのを確認したサカキと飛翔は、専用の変身ツールで変身する。

《KAMEN RIDE……》

「変身ッ！！」

《DECADE!!》

そして、片や仮面ライダー逆鬼に。片やマゼンタのボディに胸に白い十字、バーコードのような仮面のライダー、『仮面ライダーデイクライド』に変身した。

二十八ノ巻『逆鬼VSデイケイド！ 大変化合戦？』（前書き）

二週間ぶりです。

すみません。色々と忙しかったもので、更新が遅れ、他小説への感想も送れませんでした。

コラボ編第二話。今回逆鬼の新フォームが出ます。

二十八ノ巻 『逆鬼VSディケイド！ 大変化合戦？』

対峙する二人のライダー、逆鬼とディケイド。

ギャラリーが見守る中、最初に動いたのは逆鬼だった。

「であっ！..！」

距離詰め、右拳を叩き込み。それをディケイドは冷静に払い、自分の左拳を打つ。

逆鬼は右腕でディケイドの攻撃を受け止め、今度は左拳をディケイドの胸に打ち込む。

「くう.....っ！ はっ!!..！」

逆鬼の攻撃を受け、ディケイドは数歩後退するが、直ぐさま反撃し逆鬼の右頬を捉えた。

「ぐっ……！！ ふんっ、おらっ、だぁっ！！」

「ふっ、はっ、であっ！！」

拳が交差し、蹴りも交えた攻防が続く。

「す、凄い……」

フェイトは思わずそう漏らす。フェイトやその友人・知人達には格闘戦で戦うのは逆鬼やザフィーラ位しか居ない。それ故、これ程の格闘での攻防を見た事が無かったのだ。

「はっ！！」

逆鬼とディケイドの声が重なり、互いの右ストレートが互いの胸を捉え、双方共後退する。

「格闘じゃ互角。だつたら………！」

ディケイドはベルトの左腰に装備している専用武装・【ライドブツカー】を手に持ち、折り畳まれていた刀身を展開させ【ライドブツカー・ソードモード】を構えた。

「剣で勝負だつ……！」

「音叉剣っ……！」

逆鬼も直ぐさま対抗し、鳴刀・音叉剣を構える。

ディケイドが駆け寄り、上段からライドブツカーを振り下ろし、逆鬼は音叉剣で受け止める。

逆鬼も反撃し、今度はディケイドがライドブツカーで受ける。

格闘戦に続いて剣による攻防。ディケイドが正しく剣士と呼べる剣捌きに対し、逆鬼のはまるでチンピラのような剣の使い方であった。

ライドブツカーを音叉剣で受け止め、左腕で相手を殴る。または

蹴る。

(まるでモモタロスみたいだな……………)

デイクイドは『電王の世界』で会った赤鬼を思い出しながら、横薙ぎに振るわれた音叉剣を跳び退いて避け、ライドブツカーから一枚のカードを取り出した。デイクイドの本領発揮である。

「デイクイドの力、見せてやる……………変身っ!!」

《KAMEN RIDE……………BLADE!!》

デイクイドに変身した時と同じようにカードをバックルに装填し操作すると、青いオリハルコンエレメントが飛び出しデイクイドの体を自動通過する。するとデイクイドの姿が変わり、アンデットを封印する剣士『仮面ライダーブレイド』に変身した。

デイクイドが変身したDブレイドデイクイドは、ライドブツカーからカードを取り出し先程と同じ様にバックルに装填する。

《ATTACK RIDE……MACH!!》

【マツハ・ジャガー】の効果を得て、Dブレイドは逆鬼に高速で接近。同じく効果を得たライドブッカーで逆鬼の体を何度も切り裂いた。

一瞬の事に対応出来なかった逆鬼は、ライドブッカーの切り上げで後ろに飛ばされ地面を数回転がった。

「痛つてえ〜……………。ホントに姿が変わりやがった」

逆鬼は以前、デインゴのアジトでデイケイドのデータを見た事があり他のライダーに変身する事は知っていた。だが、『ただ知っていた』だけで実際に対応出来るのとは別である。

立ち上がった逆鬼は、音叉剣から音撃棒・烈撃に持ち替えその先端の鬼石に火を燈す。

「だったらコレならどうだっ!？」

上に構えた音撃棒を振り下ろし【鬼棒術・烈火弾】を放つ。だが、Dブレイドの方が上手だった。

烈火弾は元々響鬼の技。響鬼にも変身出来るDブレイドにとって、対応出来ない道理は無い。

《ATTACK RIDE……METAL!!》

Dブレイドが使ったのは【メタル・トリロバイト】。使用者の体を鋼鉄に硬化させる効果がある。それにより、烈火弾はDブレイドの体に当たったが、あえなく四散した。

「嘘っ!?!」

これには予想外の逆鬼。Dブレイドは新たなカードをバックルに装填し、ライドブッカーを逆手に持ち地面に突き刺した。

《ATTACK RIDE……THUNDER!!》

「喰らえっ!?!」

「あびびびびびびっ!？」

「飛翔さんって凄い……………私も頑張らないとっ!」

「なのは、それは無理じゃないかな? 魔導師が仮面ライダーに勝てないのは超○がイ○ベーターに勝てないのと同じで……………」

「(フェイトっ!?!? 何言ってるのっ!?!?)……………終わりかな?」

二人のライダーの戦いを観戦していたアリシアは、そう呟いた。

最初の格闘戦で飛翔が変身するディケイドと互角に戦ったのには関心したが、ブレイドに変身した途端ペースを崩され、ただ今【サnder・ディアー】の効力で絶賛感電中である。このままDブレイ

ドの勝ちと思っただのだ。

だが、アリシアの考えを否定した者が居た。

「それはどうかな？」

錬矢である。

怪訝な表情になるアリシアに、錬矢は不敵な笑みを浮かべた。

「サカキはあの程度じゃやられない。………つか、あの程度の電撃ならすぐに立ち上がるって。ほら」

そう言っつて錬矢は指を指す。そこには、大の字に倒れていた逆鬼が両脚を上げ、脚を振り下ろした反動で立ち上がっていた。

体に付いた土や埃を叩き落としている様子から、まだ余裕らしい。

「な？」

「そうみたいです。でも、このままじゃ飛翔に勝てませんよ?」

確かにまだ余裕らしいが、Dブレイドに翻弄されていたのは事実。それに、自分の大切な人が負けるのは想像出来ない。

そんなアリシアの内心を知ってか知らずか、鍊矢は逆鬼に肩を持つわけでもなく、あくまで第三者の目線から意見を言う。

「確かにな。“さっきまでは”デイケイドの戦い方に翻弄されたが、それはもう無いだろ」

「どうしてですか?」

「アイツには『経験』がある。君よりもな? 最初はともかく、一度見た攻撃には遅れは取らんさ。……………それに、アイツにはまだ奥の手がある」

立ち上がった逆鬼は体に付いた土や埃を掃う。すると、Dブレイドが予想外という風に声を掛けた。

「……………驚いたな。あれを喰らって無傷とは」

「別に無傷じゃねえよ。ただ後輩の鍛練に付き合ってたら、間違っ
て電撃喰らって慣れてただけだ」

逆鬼は元居た時代……………戦国時代で轟鬼から間違っ
て電撃を喰らった事が“何度も”あったため、耐性が付いていた。無論、
轟鬼には抱腹はしたが。

逆鬼は『さて』と言い、霊剣・紅を取り出し刃の後ろに左手を添
え構える。

「可愛い妹分が見てるんだ、これ以上カッコ悪いところを見せる訳に
はいかないんでな……………閻璃っ!!」

「うむ、私の出番だっ!!」

いつの間にか逆鬼の隣には閻璃が浮いおり、自分の出番という事でかなり上機嫌であった。

「行くぜ……逆鬼・虚空ッ!!」

逆鬼がキーワードを言うと、閻璃が紫色の光りの球体になり逆鬼の中に吸収され、変化が起きる。

仮面が口元が銀色のゴーグル型、縁取りが紫に変化し、全身が紫色のシンプルな鎧姿になりその上にボロボロの死神を思わせるロブを纏い鎖が纏わり付く。

手に持っていた霊剣・紅は紫の刃を持つ大鎌に変わった。

これが逆鬼・夜天のデータを素に生まれた閻璃とのユニゾンした姿、『逆鬼・虚空』である。

「はあああああつ!!」

逆鬼・虚空は変化した肉体の感触を確かめる事なく、大鎌霊剣・紅を振るいDブレイドに向かって肉薄する。

「くっ!？」

Dブレイドは一瞬反応が遅れながらもライドブッカー振るう。直後、『ガキン』と金属同士がぶつかり合った音が響き渡る。

(ライダーとユニゾンデバイスがユニゾンするとは………っ
!!)

ライドブッカーと大鎌靈剣・紅が火花を散らす中、Dブレイドは踏ん張りつつここ(訓練場所)に来た時の会話を思い出す。

それはここに来た時、闇璃達を見て驚く飛翔とアリシアに鍊矢が、『あいつ等はフェイト達を素にしたユニゾンデバイスだ。心配しなくていい』と言われていた。その時はフェイト達と闇璃達が楽しそうに会話していたため気にしなかったが、誰が彼女達の主ローテなのか聞いていなかった。

ちらりと鍊矢を見る。鍊矢はニヤニヤ笑い、今のこの状況を楽しんでいるように見えていた。

(アイツ………ッ!!)

「よそ見とは余裕だなっ!？」

「しまったっ!？」

Dブレイドが錬矢を見たのは、ほんの一瞬。だがその一瞬に、逆鬼・虚空はライドブツカーを弾き横薙ぎに大鎌霊剣・紅を振るい、Dブレイドの銀色の鎧を切り裂く。

カードを使う暇もなく、胴を切られたDブレイドは吹っ飛び地面を転がる。その際、切られた衝撃でか全身にマゼンタのモザイクがかり、ブレイドから元のデイケイドに戻ってしまった。

「く………っ!!」

デイケイドは体制を立て直すため、ライドブツカーをソードモードからガンモードに変え、さらにカードをバツクルに装填、使用する。

《ATTACK RIDE………BLAST!!》

【ディケイドブラスト】と呼ばれる攻撃。ライドブッカー・ガンモードが幾つにも分身し、無数の弾丸を撃ち出す。

逆鬼・虚空は避けるのは無理と判断し、纏っているローブ・【エルシニアローブ】で全身を包む。それにより、ディケイドブラストはローブに阻まれ一発も逆鬼・虚空には当たらない。だが、ディケイドが体制を立て直すには十分な隙が生まれた。

「変身っ！！」

《FORM RIDE…… KUUGA TITAN!!》

電子音の後、ディケイドの姿が変わり、超古代の戦士・仮面ライダークウガ……その複数の形態の一つ、大地を司る戦士・仮面ライダークウガ・タイタンフェーム』に変身した。

ディケイド
タイタンフェーム
DクウガTFは、偶然足元にあった木の棒を持つと、木の棒が瞬く間に変化しクウガTFの専用武器・【タイタンソード】に変わった。

「また変わりやがった」

【問題なかつつ。姿が変わろうとも、貴様と我がやる事は変わるまい】

「ああ。そりゃそつだ……なつ!!」

デイクイド特有の能力に、驚きと物珍しい視線で見ていた逆鬼・虚空であったが、ユニゾンしている閻璃に言われ、大鎌霊剣・紅を一二振つて一気にDクウガTFに接近する。

DクウガTFは避けようとせず、タイタンソードを構え待ち構える。直後、大鎌とタイタンソードがぶつかり『ガキンツ!!』という音と共に火花が散る。

「ゲツ……アアツ!!」

DクウガTFは大鎌を受け止めた衝撃に耐え、弾き返すとタイタンソードを袈裟に振り下ろす。

それを逆鬼・虚空はDクウガTFの左側を回り込むように避け、そのまま相手の首を刈り取るように大鎌を振る。だがDクウガTFはしゃがんで避け、タイタンソードを切り上げる。大鎌で防がれるが、今度はライドブッカー・ソードモードを右手に持ち切る。

これには逆鬼・虚空も驚き、後ろに下がって間合いを取った。

片や大鎌を両手で持ち、片や紫色の両刃剣と特殊な形状の剣の二刀流。やはり接近戦は互角。

DクウガTFは、自前の防御力で防ぎ、一撃を叩き込むつもりだった。そのためにクウガ・タイタンフォームに変身したのだが、大鎌を受け止めた際に防げないと直感し、避けるのに集中した。

(ライジングフォームなら防げるだろうが、ここは……………)

次の手を思考するDクウガTF。対する逆鬼・虚空は、冷静にクウガ・タイタンフォームの能力を分析していた。

(あの手応え……………。あれから察すると、力と頑丈さに特化した姿か？ 素早さならこっちが上だから、このまま押し切るのもありだが、ここは……………)

そして、動いたのは同時だった。

《KAMEN RIDE…… KABUTO!!》

「逆鬼・迅雷ッ！！」

電子音と共にDクウガTFは、幾つもの六角形のパターンに包まれ、太陽の神と呼ばれる『仮面ライダーカブト』に変身。

逆鬼・虚空からは闇璃が抜ける。その代わりに、蒼い光りの球となったライラが入り、逆鬼の仮面の縁取りと腕が蒼くなり、肩には外側に尖った装甲と胸には肩や体の動きを妨げない程の軽装。両脚には膝から下を装甲が包み、斜め後ろに向かつて尖ったトゲのようなパーツが、片脚に二つずつ、計四つが付いている。最後に蒼いマフラーが靡き、霊剣・紅は鍔の無い小太刀に変わる。

Dカブトと『逆鬼・迅雷』は姿を変えた相手に構わず、予定していた行動に入る。

《ATTACK RIDE……CLOCK UP!!》

電子音の直後、二人のライダーの姿は消えた。

『クロックアップの世界』……それは、一部のライダーが動く事が出来る光速の世界である。当初は『カブトの世界』のライダーだけの独壇場だったのだが、ディケイドの登場以来ファイズ・アクセルフォームが来たりクウガ・ペガサスフォームに狙撃されたりする。

その光速の世界に、二人のライダーが戦っている。Dカブトと逆鬼・迅雷である。

「まさか、クロックアップに対抗出来るなんてなっ!!」

「考えてた事は同じって事かいつ!!」

二人のライダーは格闘戦を繰り広げながら、各々の感想を漏らす。

Dカブトが殴れば逆鬼・迅雷は払い、しゃがんで足払いをし、Dカブトはジャンプして避け、後ろ回し蹴りを放つ。

【烈雷電装っ!!】

ライラの声と共に逆鬼・迅雷の右足に蒼い雷が宿る。

(決め技かつ!?)

《FINAL ATTACK RIDE……KA・KA・KA・K
ABUTO!!》

逆鬼・迅雷の右足に宿った雷を見て、Dカブトは必殺技を発動す
ファイナルアタックライド
るFARRのカードをバツクルに装填。右足に雷に似たエネルギーが
流れる。

「【雷電脚っ!!】」

「ハアッ!!」

一方、錬矢とアリシア、ソラとリンフォース、ブレバットと闇璃を除いた、つまりはやて、フェイト、なのはは大騒ぎしていた。まあ、クロックアップを知らない三人の前で逆鬼・迅雷とDカブトが突然消え、周りの木が急に倒れれば当然であるが。

そんな少女達を尻目に、クロックアップを知っているリンフォースは顎に手を当てて呟く。

「しかし、これでは状況が分からないな」

「そうですね、私達は肉眼では光速戦闘を見る事が出来ませんから・
・・・」

「それだったら心配ないぞ？」

リインフォースに同意するソラ。錬矢は二人を向かず、正面を見ながらそう言った。

「どついつ事ですか？」

「それはな」

「がつ！？」

「ふんぎゃつ！？」

その時、逆鬼とDカブトが突然現れ地面に転がる。その際にDカブトはディケイドに戻り、ライラは弾き飛ばされた。

「ふにゃつ！？」「」

「なのはちゃんフェイトちゃんっ！？」

「クロックアップから弾き出されるからだ」

弾き飛ばされたライラが当たり、ぶつ倒れる娘とその友人を無視し、錬矢はしれっと言つのであった。

「痛……………って」

「くあ……………」

互いの必殺技を胸部に喰らい、ヨロヨロと立ち上がる逆鬼とデイケイド。二人のライダーはかなり消耗しており、そろそろ限界だった。

「はあ……………はあ……………お互いに、限界みてえだな……………」

「はあ……………はあ……………そうだな……………」

肩を上下に動かし、相手を見据える。

勿論、二人は殺し合いをするつもりは無い。だが、戦闘者として、強敵と出会い、闘うからには……。

（（勝つッ！！））

「星奈、行くぞっ！ 逆鬼・紅蓮ッ！！」

瞬間、星奈が変化した真紅の球体が入り、逆鬼の体が燃え上がる。

全身に武者を思わせる真紅の鎧。両腕には龍の頭部の形をした籠手・【ルシファーナックル】。霊剣・紅は矛先が船の碇のような形の大槍に変わる。星奈とユニゾンした姿、『逆鬼・紅蓮』である。

「炎か。だったら……」

《FORM RIDE……AGITO BURNING!!》

ディケイドは逆鬼・紅蓮を見て、燃え盛る業炎の戦士・『仮面ライダーアギト・バーニングフォーム』に変身する。

【サカキ、今の貴方の状態ではユニゾンを長くは維持できません】

「分かってる。……………一撃だ。後の事なんか考えねえで力を一撃に集めるぞ」

【分かりました。……………烈火炎装】

逆鬼・紅蓮は右手で拳を作り力を込める。すると拳に炎が灯り、燃え盛る業炎となる。

それを見たDアギトBFも、それに応えるようにFARのカードを装填した。

《FINAL ATTACK RIDE……A・A・A・AGIT
O!!》

奇しくも、二人が今から使うのは似通った技。それ故、DアギトBFも逆鬼・紅蓮と同様に燃え盛る右手で拳を作っていた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

静寂。両者とも右拳を構えた状態のまま、ジリジリと円を描くように移動しタイミングを計る・・・・・・・・。その場には、炎の燃える音だけが聞こえていた。そして。

「・・・・・・・・!!」

両者は同時に動き出し、右腕を振りかぶる。

「はあああああつ!!」

逆鬼・紅蓮の【紅蓮拳】、DアギトBFの【バーニングライダーパンチ】が真っ正面からぶつかった。

「あの馬鹿共っ!!！」

逆鬼・紅蓮とDアギトBFがぶつかる直前、鍊矢は懐からリュウガのカードデッキを取り出し、Vバックルに装填。

「変身っ!!！」

リュウガサバイブに直接変身し、一枚のカードを引き抜き、【ドラグバイザーツバイ】に装填する。

「間に合えよ」

すると、ライラとなのはと共に目を回していたフェイトを心配そうに見ていたドラグブロッカーが動き、ブラックドラグランザーに強化されるとそこに居た全員を囲むように渦を巻き、ガードベント・【ファイヤーウォール】を発動する。

直後、強烈な爆発と余波が襲うが、ファイヤーウォールで防ぎきる。そして、爆発の余波が止み、ファイヤーウォールも効果が切れる。

「サカキ様っ！！」

「飛翔っ！！」

ソラとアリシアが駆け出す。その先には、変身が解けたサカキと飛翔が仰向けに倒れており、星奈もユニゾンが解けサカキの胸の上で眠っている。

変身を解いた鍊矢は、それぞれの思い人にひざ枕をしている二人に近付き容態を聞いた。

「どうだ？」

「どうやら力を使い過ぎたようです。

眠っているだけです。心配ありません」

「そうか。そっちは？」

「こつちも同じです。．．．．．こんな飛翔、久しぶりだなあ」

そう言って、アリシアは飛翔の額を撫でる。飛翔の表情は、どこか満足したような顔で、それはサカキも同様であった。

鍊矢は二人に介抱を任せ、周りを見渡す。逆鬼・紅蓮とDアギトBFの激突で、二人のライダーが居た場所を中心に木々が倒れ、余波で燃えているものもある。それをリインフォースと閻璃が、ユニゾンデバイスとなった際に付加された風変換能力と氷結変換能力で消火作業をしていた。

（まさかアギト・バーニングフォームと互角とはな。紅蓮のパワーは申し分なし。迅雷のスピードもクロックアップに着いてったし、虚空は特殊型だからな．．．．．。サカキの奴、チートになりやがって）

愚痴る錬矢。だが問題が無い訳ではない。

(つつても、あの短剣が媒体になってるから、短剣がないとフォームチェンジが出来ない。
だがその反面、短剣があればどれだけ離れてようが、違う世界にしようがアームズモンスターみたいに呼び出してユニゾン可能、か。
……今夜試すか)

そう内心で呟き、突如口を三日月状に歪ませる。

(楽しみだなあ) (ヒヤハツ)

二十八ノ巻 『逆鬼VSディケイド！ 大変化合戦？』 （後書き）

戦闘メインの今回です。

逆鬼・虚空のイメージは第三次スーパーロボット大戦 の主人公機・
『デイス・アストラナガン』です。
よろつと出しましたが、閻璃が氷結変換能力持ちなので、属性は氷
結になります。

逆鬼・迅雷のイメージは第三次スーパーロボット大戦 の主人公機・
『雷凰』です。アクセルトライアル程ではありませんが、スピード
を出すため防御力が下がっています。

逆鬼・紅蓮。こちらはスーパーロボット大戦OG外伝で登場した『
ヤルダバオト』。ただ髪はやりません。

追加として、リインフォースに風変換能力を付けました。
風・氷・雷・炎。ブレイドですね（笑）。

錬矢、また何か企んでいます。

では。

二十九ノ巻 『暗躍するR／猛撃の角竜』（前書き）

タージャードルー

はい、昨日MOVIE大戦COREを見て来ました。

まさかあなるとは……………。スカルかけー！！

二十九ノ巻 『暗躍するR / 猛撃の角竜』

逆鬼とデイケイドが闘って数時間後。サカキ、ソラ、ブレバット、飛翔、アリシアは夜の海鳴の街を歩いていた。時刻は深夜という事で、人の姿は少ない。

「ふあゝあ。……………眠い。帰っていい？」

「いや、駄目だろ」

「……………」

「ソラちゃん？」

「ッ！ ね、眠ってませんよ？」

「何も言っていないけど……………」

「……………不安だ」

やる気のないサカキにブレバットが冷ややかにツッコミ、歩きながら寝るといふ芸当を見せたソラにアリシアが苦笑。そんなメンバー

に、飛翔は不安を覚えた。

何故、この四人と一匹が夜の街を歩いているかということ、それは夕食時の錬矢の一言が原因だった。

荒木家・リビング。ここでは、家主である錬矢と家族のフェイトとアルフ、荒木家に泊まる事になった飛翔とアリシア、そして錬矢に呼ばれたサカキ、ソラ、ブレバットがテーブルを囲み、夕食を食べていた。

ちなみに夕食は肉じゃが。こいぬふおーむなアルフと、窓ガラスから顔を出したドラグブロッカーは『こんがり肉』に嚙り付いていた。

「飯中で悪いが、全員聞いててくれ。あ、食いながらでいいから」

なんの前フリもなく、錬矢はそう言う。

飛翔と、フェイトが居るのでカツラ着用のアリシアはさすがに箸を一度止めるのだが、サカキ、ソラ、ブレバット、フェイトは箸を止めずに食べ続け、ドラグブラッカーはともかくアルフなんて聞いてすらいない。

錬矢は気にする事もなく、話し始めた。

「少し前、隣り街で行方不明者が出てたのは知ってるな？」

サカキ達、この世界の住人は頷く。

それは海鳴市の隣り街で起きていた事で、夜になると人が突然居なくなり、行方不明になった人物が最期に目撃された場所の周辺には灰が散らばっているという物“だった”。

「でもお父さん。それって最近起きてないよね？」

フェイトの言う通り、それは最近起こっていない。錬矢はフェ

イトに頷き、続ける。

「確かに、それは最近じゃ起こってない。だが、問題は事件を起こしてた犯人でな。……飛翔達なら分かるんじゃないか？」

「……オルフェノクか」

飛翔の答えに、錬矢は『その通りだ』と返す。

『オルフェノク』。死んだ人間が何らかの理由で蘇り、その際強力な力を持った怪人である。その体は灰色で、オルフェノクに殺された人間は青い炎を上げ灰になる。

「なるほどね。そのオルフェイスってのが夜な夜な襲ってたと」

「サカキ様、オルフェノクです」

「まあな。それで一回、俺がツツいて大人しくさせたんだが、また動き出そうとしてるみたいでな、今度はお前らに殺ってほしいのよ」

そんな訳で、ゾンビ退治（あながち間違いでもない）をする事になったのだ。

そして、サカキ達は夜の街を通り過ぎ、ある場所へ向かっていた。その場所とは……。

「で、何で墓場なんだ？」

「ゾンビならここかなーって」

「サカキ達、ゾンビではなくオルフェノクです」

そう、街から離れた場所にある墓場であった。

サカキを先頭に、一行は墓場を歩いていき一つの墓の前で止まる。その墓には『東郷家』となっていた。

「ここでもいいんだっけか？」

「はい。鍊矢様のお話ですと、事件のオルフェノクの名前は東郷志^{とこうし}度^ど。近所の学校の教師だそうです」

墓を指差すサカキに、ソラは端末を操作し確認しながら答える。

一度接触した事のある鍊矢が、調べてソラの端末にデータを送っていたのだ。

「死因は不明。犯行動機は一度死んだ事により……」

「他人にも同じ経験をさせてやる、っていう自己満足ではた迷惑な授業をしてる、って感じか？」

ソラはサカキの言葉に苦笑する。それは鍊矢が同じ事を言っていたからだ。

サカキはソラの端末を覗き、ソラは頬を染め、アリシアとブレバットは微笑ましくその様子を見ている。飛翔も、周りを警戒しつつ同じである。

「そういえば、フェイト……ちゃんって、最初っからあんな感じなの？」

ふと、アリシアがそんな事を聞いてきた。

無論、これには理由があり、フェイトはアリシアって妹にあたる。さらに言えば、元居た世界のフェイトと大人と子供の違いはあれど性格が若干違うのだ。ドラグブラッカーをペット扱いしている事を含め、心配にもなる。

ちなみにだが、飛翔も聞く耳を立てていたりする。

サカキは短く考えた後、こう言った。

「あんな感じだと思っが？ 最初から」

「いや、違っだろ」

そこにブレバットがツッコミを入れた。

フェイトが錬矢の義娘になってまだ数える程しか経っていない。だが、ジョジョに……もとい、徐々に錬矢の影響を受けていた。

「エルリック」

「え？ あ、はい」

違う名で呼ばれ、アリシアは疑問顔になるが、『アルフォンス・エルリック』と偽名を名乗っていた事を思い出し返事をする。

「錬矢は悪魔のような男だからな、まだ若いフェイトを心配する気持ちは痛いほど分かる。が、あれはあれで良い親子だ。錬矢も、フェイトの事をちゃんと考えている。」

だからこそ、フェイトも錬矢を父親として信頼しているんだ。
……まあ、遅かれ早かれ錬矢の影響を受けるだろう。サカキとヴィータの例もあるしな」

ひと言余計だ。

それを聞き、アリシアは落ち込んだ。飛翔も少なからずダメージを受けたようで、目元を押さえていた。

飛翔とアリシアが、別世界とは言えフェイトと深い関係だった事を知らないサカキ達は、二人の行動に怪訝な表情になる。

刹那、“敵意”がアリシアに向けられる。“敵意”に気付いたのは、サカキと飛翔だった。

「あの、エルリックさ」

アリシアを心配し、近付こうとしたソラだが、言葉の途中で後ろに引く張られた。サカキがソラの肩を掴み、引く張ったのだ。

ソラが何か言う前に、サカキは駆け出す。そして、アリシアを蹴っ飛ばす。

「うぎゃっ!?!」

アリシアの悲鳴を無視し、サカキは音叉剣を構えた。

「ハアッ!」

「がっ!?!」

強烈な一撃。

音叉剣で防ぐが、その一撃でサカキは吹っ飛ばされる。

入れ代わるように飛翔が接近。“敵意”に対し、蹴り込み内部浸透打撃を与える。

この世界で封じられたのは魔術や特殊な武器で、体術は封じられていない。

「ッ！ フンッ！！」

飛翔の蹴りは、右手の二本の角が生えた盾で防がれる。流石に内部浸透打撃は防げなかったようで苦悶の音が漏れるが、右手を思いっきり振る事で飛翔は吹き飛ばされる。

「ふっ！」

吹き飛ばされた飛翔は受け身を取り、体制を立て直すと改めて“敵意”の姿を見る。

情報通り、相手はオルフェノク。ドラゴンオルフェノクに似ているが、龍人態と魔人態を合わせたような灰色の外見。

特徴的なのはその右腕。先程飛翔の一撃を防いだその右腕は、巨大な盾から前に向かって二本の角が生えている。よく見れば、竜の頭部にも見える。

その姿は、サカキや飛翔達は知らないが、とある管理外世界に生息している角竜・ディアブロスに似ていた。

ディアブロスオルフェノクは、サカキと飛翔、後ろにいるソラとアリシア、ブレバットを一見すると、口を開いた。

「キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン。
……初めまして、今日の授業の講師を担当する、東郷志度
DEATHッ!!」

どうやら、授業気取りらしい。

そんなディアブロスオルフェノクに対し、サカキは音角、飛翔は
ディケイドライバーを。

ディアブロスオルフェノクの後ろではアリシアがディエンドライ
バーを構え、ブレバットは何時でもソラの腕を噛めるようにしてい
る。

だが直ぐには変身しない。変身している間に、殺られる可能性があったからだ。

それを知ってか知らずか、ディアブロスオルフェノクは不敵に笑い、下半身を疾走態に変化させる。

「……………着いて来い」

そう言ってディアブロスオルフェノクは走り出す。その姿は一瞬で見えなくなってしまう。

「チツ！ 追っぞっ！！」

追跡のため茜鷹を出し、サカキ達はディアブロスオルフェノクを追った。

暫くすると、横断歩道の前で立ち止まっているディアブロスオルフェノクを発見した。

サカキ達はそれぞれの変身ツールを構える。だが。

「待てっ！！」

意外な事に、ディアブロスオルフェノクに止められた。

思わず動きが止まったサカキ達を気にせず、ディアブロスオルフェノクは続ける。

「赤信号だ」

そう言われて見ると、確かに赤信号ではある。それがどうしたと

言わんばかりの視線を飛翔が向ける。

それを知ってか知らずか、ディアブロスオルフェノクは答える。

「俺は交通ルールを守る。そんな男だった」

「なるほどっ!!」

ドーンと言うオルフェノク。それに納得するバカ鬼。

飛翔とアリシアは、今まで経験した事のないオルフェノクに啞然としてしまう。

そうこうしてる間に青信号に変わり、ディアブロスオルフェノクは再び疾走する。

サカキ達も、再び追った。ただし徒歩で。

茜鷹の案内のもと、着いた場所は特撮でよくある廃墟であった。

ちなみに、徒歩で来たためか既に朝日が昇っていたりする。

「待っていたぞ」

そう言ったのはディアブロスオルフェノク。彼は仁王立ちで立っていた。

本当に律儀に待ってよう、廃墟の陰にコンビニ弁当の殻やお茶のペットボトルが置いてあったが、それはサカキ達に気付かれていない。

「俺達が来るまで、律儀に待ってたとはなー……………」

「……………この世界はあんなのしか居ないのか……………」

そんなディアブロスオルフェノクに対し、サカキは最初の緊張感
は完全に無く、飛翔は諦め始めていた。

それはそれとして、ディアブロスオルフェノクは角竜の頭部の形をした右腕を引き、構える。

「キーンコーンカーンコーン……。これより一限目の授業を始め、るっ!!」

そう言うと、ディアブロスオルフェノクは突っ込んで来た。

「ッ！ 変身ッ!!」

それに直ぐさま対応したのはサカキ。サカキは鳴らした音角を額に翳しながら駆け出し、深緑の炎に包まれる。

「ハアッ!!」

同時に双方の右腕が突き出され、拳と角竜の角がぶつかる。その際、ぶつかった衝撃で炎が弾け逆鬼の姿があらわになった。

そのまま両手をつかみ合い、カ比ベになるが、ドラゴンオルフェノク・龍人態と同等のパワーを持つディアブロスオルフェノクの前では、パワー型の逆鬼でも太刀打ち出来ず押され始める。

「ぐっ……！！！」

「ッ！ ブレバツトッ！！！」

「一意専心、一刀両断ッ！ ガブッ！！！」

「変身ッ！！！」

逆鬼のピンチに、ソラが直ぐさま動きキバに変身。そのまま逆鬼救出のため走り出す。

「飛翔ッ！！！」

「分かってるっ！！！」

《KAMEN RIDE……》

「変身ッ！！！」

《KAMEN RIDE……DECADE!》

《DI-END!》

飛翔とアリシアも、ディケイドとディエンドに変身し、キバの後を追う。

キバは跳び上がり、雪月牙を抜かず踵落とし要領でディアブロスオルフェノクの後頭部に蹴り込む。ディアブロスオルフェノクは堅く、重量の低いキバの攻撃では一瞬怯ませる程度しか出来ない。だが、その一瞬で充分だ。

「ッ！　だあああああつー！！」

一瞬怯んだのを見逃さず、逆鬼は口を開き鬼火を放ちディアブロスオルフェノクの顔を焼く。さらに腹を蹴り距離を取る。

「はあ………。ソラ、助かった」

「いえ………」

逆鬼に感謝され、よっぽど嬉しいのか、キバは仮面の下で頬を染め恥ずかしモジモジする。それに逆鬼は意味が分からず首を傾げる。

場違いにも二人は動きが止まってしまいが、入れ代わりにディケイドがディアブロスオルフェノクに肉薄したため問題は無い。

「ハッ!!」

ディケイドはライドブツカー・ソードモードで切り掛かる。が、ディアブロスオルフェノクの右腕の、角竜の角に引っ掛かるように受け止められ、圧倒的パワーでそのまま持ち上げられ、

「ぬらぁっ!!」

地面に叩き付けられた。

「がはっ………!!」

「飛翔っ!!」

デイエンドはディケイドを助けるため、ディアブロスオルフェノクに対し発砲する。だが、デイエンドの銃撃はディアブロスオルフェノクの右腕に阻まれ、弾かれてしまう。

「嘘っ!？」

銃撃が弾かれた事に、デイエンドは目を疑う。そうこうしている間に、今度は疾走態に変化したディアブロスオルフェノクが、デイエンドを標的に突っ込んで来た。

デイエンドはそれを何とか止めようと撃ち続けるが、右腕で防がれていないのに、銃弾はディアブロスオルフェノクの体に弾かれあらぬ方向に飛んでしまう。

「くっ………!!」

止められない。そうデイエンドは判断し即座に右に体を投げ出す。勿論、受け身など考えていない。

それが幸いし、ディアブロスオルフェノクはディエンドが避けたのに、急には止まれずそのまま先にあつた廃墟に突っ込み、その一部を粉砕。さらには何事もなかったように瓦礫の中から出てきた。

「おいおい……………」

「間違いなく、ラツキークローバークラスのオルフェノクだな」

ディアブロスオルフェノクを呆然と見ていたディエンドに、逆鬼、キバ、ディケイドが合流。あまりのタフさに驚きを通り越し、呆れていた。

ディケイドは、逆鬼、キバ、ディエンドを見る。

「どつやら、全員でやらないとダメらしいな」

「みただいな。仕方ねえ、協力してやるよ。」

「でどつする？」

コイツ、やっぱりモモタロスと似てるな。

そう思いつつ、ディケイドは考えていた事を言う。

相手は明らかにパワー型。ならば、同じパワー型の逆鬼を前衛に、
ディケイドが遊撃。ディエンドと装甲が薄いキバが後ろから援護、
というシンプルな物だった。

それにキバが異議を唱える。

「すみません。私、後ろから援護と言われましても……」

「あ、そういやソラって飛び道具無かったけか」

申し訳なさそうに言うキバに、逆鬼が納得する。

確かに、ソラのキバには遠距離用の武器は無い。だが、だからと
言って装甲が薄いキバが前に出れば、一撃貰えばすぐに終わってし
まう。レオフォームになればいいんだろが、暴走しなくなったと
は言え不安要素は拭えなかった。

だが、ディケイドはすでに解決策を用意していた。

「問題無い。コイツを使えばな」

《FORM RIDER……KIVER BASSY AER!!》

ディケイドはそう言うと、キバ・バツシャーフォームに変身。そして 持っていたバツシャーマグナムを、ソラが変身するキバに投げた。

「え？ ええっ!？」

慌てて、キバ（ソラ）はバツシャーマグナムを受け止め……
・変化が起きた。

バツシャーマグナムから鎖が伸び、右腕、右肩、胸を包み、弾ける。そこには緑色の右腕　バツシャースケイルに覆われたスケイルアームとアーマーフィン、緑色の胸　スケイルラング。キバペルソナも、白からエメラルドに変化し、ブレードキバ・バツシャーフォームにフォームチェンジした。

「ええええええええええええっ!？」

「こ、これは……」

突然の変化に、BキバBFは絶叫。ブレバット（エメラルドアイ）

も驚いていた。

「すげー、こんな事も出来るのか……。これも世界を旅した経験ってか？」

「……………ホントに出来るとは……………」

「つてっ！ 博打だったんかいつ！！」

「飛翔のキャラが……………」

逆鬼がいつの間にか戻ったデイケイドに関心するが、博打だった事に平手ツツコミ。デイエンドも、いつもと違うデイケイドに困惑していた。

「……………もういいか？」

『あ』

逆鬼達がコントをしている間、ずっと待っていたディアブロスオルフエノクがさすがにもう待てないと声を掛ける。というか掛けちゃった。

一方、戦いを見ている者達が居た。

「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤッ!」

「まったく、シリアスが長続きしない奴らだな」

「やれやれ」

「あら、楽しそうじゃない」

高笑いしている“真っ黒な”男。

呆れている茶髪でスーツ姿の男。

ため息を吐いている灰色の髪、白衣姿の男。

最後に、口元を扇で隠し、妖艶な笑みを浮かべる女。

さらに女の後ろには、頭、胴、足が赤い鷹、黄色の虎、緑の飛蝗のライダーと、ガシャポンの印象のライダーが……暇なのか将棋をしていた。

真つ黒な男はどこからかケースを取り出し、開ける。中には黒い、重厚な水色の複眼の仮面とアーマーが入っていた。

「さーてと、ウィーン、ゴーガッシャー、ドン、ペロペロー」

真つ黒な男は、その黒いアーマーを“装着音(?)”を口で言いながら”装着していく。

「ねえ、僕早く帰らないと霊夢に怒られるんだけど」

「言つな名無^{めいむ}。俺だって早くしないとぶっ飛ばされるのに……」

無理矢理連れて来られた。

将棋を差してた二人のライダーははあ、とため息を吐くのだった。

三十ノ巻に続く。

二十九ノ巻 『暗躍するR／猛撃の角竜』（後書き）

最初に言っておきますが、この小説はギャグが主なのでこうなります。

あと、今回の話にはモンスターハンターとMOVIE大戦COREの影響を大いに受けてます。特に最後のガシャポンライダーが。

タイトルと最後の方で大体は読めると思います。そう、あの男が・
・！

では、次回

三十ノ巻『暗躍するR/FFR・旅人との別れ』（前書き）

どうも。年末に更新が間に合いました！

モンハン3rdやっててペース配分間違えたり。オーズタイプのオ
リジナルライダー考えたりして過ごしてます。

今回で海人さんとのコラボは終了です。

三十ノ巻 『暗躍するR／FFR・旅人との別れ』

「はあっ!!」

ディケイドがライドブッカーで切り掛かる。が、ディアブロスオルフェノクは右腕で防ぎ左腕で殴り飛ばす。

「であっ!!」

反対側から、逆鬼が音撃棒を振りかざすが、ディアブロスオルフェノクは後ろを向いているにも関わらず、後ろ回し蹴りが飛び逆鬼は右腕で何とか防いだ。

「どうしたっ!? 挟撃のタイミングがズレているっ! それでは相手に簡単に反撃されるぞっ!!」

「敵にアドバイスとは余裕だなテメエツ!!」

「俺は教育熱心な熱血教師っ!!」

ディアブロスオルフェノクは右腕を逆鬼の脇に引っ掛け、そのまま反時計回りに回転する。

「そんな男だったっ!!」

「なあっ!?!」

「ぐあっ!?!」

遠心力が加わり、投げ飛ばされた逆鬼は再び切り掛かろうとしていたデイケイドに激突してしまう。

ディアブロスオルフェノクは追撃を掛けようとしたが、そこに十数発の弾丸が飛んで来たため後ろに跳び退く。

だが、跳び退いた場所に水の弾丸が飛び、ディアブロスオルフェノクは避けきれず右腕で防いだ。

勿論、この銃撃はデイエンドとBキバBFである。

デイエンドはデイエンドライバーの照準をディアブロスオルフェノクに向けたまま、BキバBFに聞いてみた。

「ソラちゃん、銃使えたんだね。ビックリしちゃった」

「はい。銃チャカの使い方は、五歳の頃から母に教わりましたから」

「へ、へえ……（チャ、チャカ？ ていうか五歳って、ソラちゃんのお母さん何やってるのっ!?!）」

「?????」

内心でソラの母にツッコんでいるディエンドに、BキバBFは首を傾げる。その時、

「戦闘中に考え事かっ!?!」

その声にハツとなり、注意を戻すが、ディアブロスオルフェノクがもうそこまで迫っていた。

避けられない!

そう判断し、衝撃を覚悟して身を固くする。だが、衝撃はいつまで待っても来なかった。

BキバBFが仮面の下で閉じていた瞳を開けると、そこには、

「ぐぬぬぬ……！！」

ディアブロスオルフェノクの突進を、真っ正面から受け止め、踏ん張っている逆鬼が居た。

《FORM RIDE……DEN・O AX！！》

《ATTACK RIDE……TSUPPARI！！》

続けて二回連続で電子音が聞こえ、ディアブロスオルフェノクの真横から、デイケイドが変身したD電王・アックスフォームの連続張り手が襲う。これには堪らず、ディアブロスオルフェノクも吹き飛ばされた。

「ソラっ！ ボサツとするなっ！！」

「は、はいっ！！」

逆鬼はBキバBFを叱咤し、音撃棒を構え直す。

デイエンドは、戦力強化のため一枚のカードを取り出し、デイエンドライバーに装填した。

《KAMEN RIDE……CHALISE!! THEBEE!
!》

「お願いっ!!」

デイエンドライバーのトリガーを引くと、赤、青、緑のシルエットが飛び出し二人のライダー………仮面ライダーカリスと仮面ライダーザビーを作り出す。

「……………俺は口〇コンじゃないっ!!」

「俺の扱い酷くないかカプト本編っ!?!」

まるで作者の言葉を代弁したかのような事を言う、カリスとザビ

！。

「ディエンドがあれ？　と思う中、二人のライダーは命を捨てたように特攻して行き……派手な爆発と共に吹っ飛んだ。」

「「出番もう終わりかああああああつ！？」」

「む、ミサイル」

汚い花火となったライダーを無視し、電王から戻ったディケイドと共に爆発から逃れた逆鬼は、某勇者王の腕原種のように呟いた。

「そう、ミサイルだ。ミサイルが何処からか飛来し、カリスとザビを吹っ飛ばしたのだ。」

その場に居たライダー達はミサイルが飛んで来た方向を見る。そこには、黒い重厚なアーマーに水色の複眼。角張った肩アーマーには『G4-AX』と描かれており、右肩に多目的巡航4連ミサイルランチャー【ギガント】を担いでいた。

ディケイドは乱入者の姿を見て、呟いた。

「G4……！！」

ディケイドの記憶が正しければ、乱入者は『アギトの世界』で開発された強化スーツ型ライダーの『仮面ライダーG4』。だが、目の前に居るG4は肩アーマーが角張っており、G3-XをG4の色に塗ったような見た目だった。

ディケイドの疑問に答えるように、ディアブロスオルフェノクがG4？ に近付き説明を始めた。

「紹介しよう。彼の名はG4 - A^{アクセス}X。二時限目の授業の特別講師だ」

成る程、とディケイドは内心呟いた。

名前から察するに、目の前のG4 - AXというライダーはG4の強化態であり、ディアブロスオルフェノクの味方。自分達の敵という事だ。

「キーンコーンカーンコーン……。これより二時限目の授業を始める」

ディアブロスオルフェノクのその言葉を合図に、G4 - AXは残

り二発だったギガントを発射。逆鬼、ディケイドは左に、BキバB
Fとディエンドは右に避ける。

それが狙いだった。

ディアブロスオルフェノクは疾走態に変わり、ミサイルを避けた
逆鬼とディケイド目掛け突進する。

「ッ!?」

逆鬼とディケイドは咄嗟に両腕を前に防御体制に入り……
ディアブロスオルフェノクの突進で吹き飛ばされた。

786

「サカキ様っ!!!」

「飛翔っ!!!」

逆鬼とディケイドと離されたBキバBFとディエンドは、吹き飛
ばされた二人に駆け寄ろうとする、が。

「「ッ!？」」

そこに何十発の弾丸が飛び、BキバBFとディエンドは足を止める。

二人は弾丸が飛んで来た方向を見ると、G4-AXがガトリング式機関銃【GX-05ケルベロス】を構えていた。

「……………どうやら、通してはくれないらしいな」

「そのようですね」

ブレバットにBキバBFは頷き、右手にバツシャーマグナム、左手に雪月牙を逆手に構える。

「エルリック様。申し訳ありませんが、後衛をお願いします。前衛は私が」

「……………分かった。でも気をつけてね」

ディエンドとしては、自分より年下の女の子を前に出すのは気が引ける。だが、銃しか持たない自分より、刀を持つBキバBFの方が適任であるのは直ぐに分かる。

故に、申し訳なさそうに頷き、BキバBFの身を按じるのだ。

「はい。……………では、行きますっ！！」

一方、逆鬼&ディケイドVSディアブロスオルフェノクは……………。

《KAMEN RIDE……HIBIKI!!》

《ATTACK RIDE……ONGEKIBOU REKKA!

！

「はあっ！」「」

デイケイドは響鬼に変身し、音撃棒・烈火を召喚。逆鬼と共に【鬼棒術・烈火弾】を放つ。が

「フンツ！！」

ディアブロスオルフェノクが角竜の頭部である右腕を地面に突き刺す。否叩き付ける。

それにより、手前の地面がひっくり返って壁になり、烈火弾を防いだ。

これには逆鬼とD響鬼も驚き……………を通り越して呆れる。

何このチート、と。

「チートではないっ！！」

読心術でも使えるのか、ディアブロスオルフェノクは言い返しな
がら突っ込んで来た。

「これは生前より鍛えてきた俺自身の努力によるものっ！ 鍛えれ
ば皆出来るっ！！」

「うんっ！ 言いたい事は分かる。でも理不尽だっ！！」

出来るかっ！！ とホントはツツコミたいところではあった
が、高町家の家長や長男長女を知っている身としてはそうとしか返
せない。

そもそも、鬼自体が鍛えてなるものなので、逆鬼は余計に、であ
る。

「フヌラアッ！！」

「ぐっ！？」

「どわっ！？」

再び吹っ飛ばされ、地面を転がる。その際にD響鬼はデイケイドに戻った。

「くそつ、紅蓮になれば……!!」

逆鬼は悪態づくが、今、星奈や闇璃達を呼ぶ訳にはいかなかった。

闇璃達は昼間の闘いの疲労が予想以上にあり、今は安静の状態であつた。

さらに言えば、逆鬼、デイケイドも昼間の闘いの疲労が抜けきつていなかった。それが、予想以上に動きを阻害している。

「……………キーンコーンコーンコーン。」

これより三時限目の授業を始める。ちなみにこの授業が終わると、お前達は 死ぬ」

場面は戻ってBキバBFとディエンドは……………。

「……ッ！」「」

ディエンドが呼び出した、シザース、ガイ、インペラーがそれぞれの専用武器でG4 - AXに襲い掛かる。だが、G4 - AXはケルベロスを右手に保持したまま、シザースの攻撃は頭を下げて避け、ガイは突撃したところを足掛けされ、倒れ、背中を踏まれる。

そこにインペラーが来るが……………。

「ガッ……………！？」

電磁コンバットナイフ【GK - 06ユニコーン】を腹部を深々と刺され、消滅する。さらに

「ガガガガガッ!？」

踏み付けていたガイの背中に向け、ケルベロスを発射。いくら防御力の高いガイでも、これには耐え切れず消滅する。

再びシザースが両腕のハサミを振って迫るが、G4-Axの左腕にデータパターンのエフェクトが現れ、左腕に超高周波振動ソード【GS-03デストロイヤー】が装備される。

そして、デストロイヤーをシザースに突き刺し、両断。シザースも消滅した。

「はっ!！」

その時、バツシャーマグナムを捨て、ブレードフォームに戻ったキバが、背後からG4-Axに雪月牙の切っ先を突き立てる。狙いは重厚なアーマーの繋ぎ目だ。

「!?!？」

流石に隙を突かれたためか、反応が遅れつつデストロイヤーで防ぎ、雪月牙の切っ先がズレてG4 - AXの仮面の側面を僅かに削る。

G4 - AXは近距離では邪魔になると判断したのか、ケルベロスを放り投げ、右大腿部に装備してある銃 スカルやW、デルタ・リヴァールと同形状の銃【G4マグナム】を引き抜き、キバに向ける。

《KAMEN RIDE…… KAIXA!! LEANGLE!!》

「はああああああつ!!」

そこに、カイザとレンゲルが召喚され、G4 - AXに襲い掛かる。それにより、G4 - AXの注意は一瞬だけキバから離れた。

「ソラちゃんっ!!」

ディエンドの声に即座に反応し、キバはカイザとレンゲルにその場を任せ、ディエンドのもとに戻る。

少し時間は戻り、逆鬼&ディケイドは……。

「ぬああああああつ!!!!」

「ぐっ……!!?! (何だコイツ等っ!?! いきなり力が……!!!!)」

逆鬼とディケイドの拳を、ディアブロスオルフェノクは右腕で防ぐ。が、苦悶の声を漏らし、内心では驚いていた。

ディアブロスオルフェノクがカツコ良くセリフをキメた直後、まるでタカが外れたように逆鬼とディケイドが暴れ出し手が付けられなくなっているのだ。

何故こうなったかというと……。

「もうやってられるかああああああつ!!!!」

「この世界にマトモな奴はいないのかああああああっ!?!」

本当にタカが外れただけだった。

《ATTACK RIDE……SLASH!》

「ぬらっ!?!」

「はあっ!?!」

「ぐはっ!?!」

逆鬼の右ストレート、ディケイドの【ディケイドスラッシュ】がディアブロスオルフェノクを吹っ飛ばす。

その時、ライドブッカーから六枚のカードが飛び出し、ディケイドの手に収まった。

「これは……」

飛び出したカードを見て、何度も同じ経験をした事のあるディケイドは『大体分かった』と呟き、その内の一枚 『逆鬼と猛牛、巨大な大砲が描かれたカード』を持って、逆鬼に近付いた。

「おい、逆鬼」

「あ？ 何だ？」

「ちよつとくすぐつたいぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

《FINAL FORM RIDE……SA・SA・SA・SAKAKI!!》

デイエンドは持っていた六枚のカードの内、『キバ・ブレードフォームと巨大な鳥が描かれた』カードをデイエンドライバーに装填し、ポンプアクションの要領で銃身を伸ばす。

《FINAL FORM RIDE……KI・KI・KI・KI
A BLADE!!》

「ソラちゃん……………ゴメンツ!!」

いきなり謝罪したデイエンドは、事もあるうちにキバに向けてデイエンドライバーの引き金を引いたのだ。

キバは何か言う前に撃ち抜かれ、変化が起きる。

人体の構造を完全に無視し、間接はありえない方向にまがり巨大な蒼い鳥……………『キバスカイファルコン』に超絶変形した。

『な……………ななな、何なんですかこれはあああああああ
あああつ!?!』

「本当にゴメンツ!!」

キバスカイファルコン、絶叫。ディエンドは両手を合わせて謝る。よく見れば、戦闘中のはずのG4 - AX、レンゲル、カイザですら気持ち悪くなったのか口元を押さえ目を逸らしている。

しかもこのカイザ、ホースオルフェノクの人らしく、カイザブレイガンを銃としては逆手、剣としては順手に持っている。

「とりあえず、行ってっ!!」

『とりあえずって何ですかっ!?!? ああもっっ!!!』

もうヤケになったらしく、キバスカイファルコンはその翼を大きく羽ばたかせ、G4 - AX目掛け突っ込んで行く。

『はあああああああつ!!!』

キバスカイファルコンの加速がついた体当たりが、G4 - AXを襲っ。

体当たりを受け、G4 - AXの重いはずの体は軽々と飛ばされ、さらに追撃と言わんばかりクチバシで連続で突かれる。

ディエンドはそこで、二枚のカードをドライバーに装填した。

《ATTACK RIDE……CROSS ATTACK!》

《FINAL ATTACK RIDE……KI・KI・KI・K
I V A B L A D E ! !》

カードの効果を受け、キバスカイファルコンは攻撃を止めディエンドの背後に移動。さらに、G4 - Axを黄色の三角錐のエネルギー体が拘束した。

ディエンドがディエンドライバーを動けないG4 - Axに向けると、ディエンドライバーの銃口とキバスカイファルコンの口に、それぞれシアンカラーと蒼いエネルギーが集まる。

同時にカイザとレンゲルが走り、跳び上がり、カイザは三角錐のエネルギー体に両足を突き出して突撃し、レンゲルは冷気を纏ったバタ足キックをしながらG4 - Axに落下する。

そして、ディエンドは引き金を引くと、ディエンドライバーとキバスカイファルコンから光線が発射された。

カイザの【ゴルドスマッシュ】。

レンゲルの【ブリザードクラッシュ】。

【ディエンドとキバスカイファルコンの【ディエンドロワイヤル】が、G4-AXに殺到した……。】

《FINAL FORM RIDE……SA・SA・SA・SAKAKI!!》

電子音の後、ディケイドは逆鬼の背中を軽く叩く。すると、こちらも同様にありえない変形を見せ、紅い猛牛……・サカキモウギユウオウに超絶変形した。

『な……俺牛いいいいいいいつ!?
てか、明らかに複雑骨折だぞコレッ!?!』

「大丈夫だ。……………多分」

「多分って何だっ!?!」

「とにかく行けって」

「横暴だなオイツ!?!? こうなりやヤケだあああああああああ
あつ!?!」

ヤケになったサカキモウギウオウは、高々と前脚を上げ雄叫びを上げると、ディアブロスオルフェノクに向かって突進していく。

口元を押さえ、目を逸らしてたディアブロスオルフェノクは、サカキモウギウオウの突進に気付き真つ正面から受け止める体制に入った。

「おおおおおおらあああああああつ!?!」

「ぐ……………! なあああああああつ!?!」

ディアブロスオルフェノクは正面から突進を受け止めるが、力負けして押されて行く。そこでディケイドは、逆鬼の紋章が描かれたカードをバツクルに入れた。

《FINAL ATTACK RIDE……SA・SA・SA・S
AKAKI!!》

すると、突進をしていたサカキモウギユウオウが突如浮き上がり、再び複雑な変形をして巨大な大筒……サカキモウギユウホウに超絶変形する。

変形は終えたサカキモウギユウホウは、引き寄せられデイケイドを手に収まると、デイケイドは銃口の先をディアブロスオルフェノクに向け、引き金を引いた。

「はあっ!!」

紅い極太の光線、「デイケイドバスター」が発射され、ディアブロスオルフェノクを飲み込み、爆発。爆発により発生した煙りが消えると、そこにはクレーターと炎だけが残っていた。

デイケイドはそれを確認すると、サカキモウギユウホウを投げると、サカキモウギユウホウは逆鬼に戻り……地面に落ちた。顔面から。

「がっ!?」

「おい。大丈夫か？」

「痛い」

「だろうな。ほら」

「やれやれ言わんばかりに、ディケイドは手差し出し逆鬼を立たせる。」

「ちょうどその時、G4-Axと戦っていたディエンドと
・何故かグツタリしたキバが合流した。」

「ああ、そつちもか。」

「逆鬼とディケイドは同時に悟るのであった。」

「倒したんだね」

「ああ」

クレーターを見て、呟く。

確かに倒したが、何か引っ掛かる。それがどうしても気になって
いる、と

「いや〜危なかった」

「死ぬかと思った」

『……………え?』

不意に聞こえた声。

両方とも聞き覚えのある声に、その場にいた全員が振り返ると…
……………

「「「よう」」」

ディアブロスオルフェノクとG4 - AXが居た。

逆鬼達は驚き、慌てて自分の得物に手を掛ける。だが、突然衝撃が襲い、地面に倒れる。

「な・・・・・・・・何だ・・・・・・・・？」

「まさか・・・・・・・・！」

逆鬼には分からなかったが、デイケイドは覚えがあった。

それに答えるように、電子音が響く。

《Hyper Clock Over》

倒れる逆鬼達の前に現れたのは、黄金のライダー・・・・・・・・青い薔薇ではなく、扇子で口元を隠した『仮面ライダーコーカサス』であった。

コーカサスがベルトの左側に備え付けている、『ハイパーゼクター』・・・・・・・・。これによりコーカサスはクロックアップを超える『ハイパークロックアップ』が可能になり、

「ッ………!!」

ディケイドは立ち上がり、コーカサスに拳を突き出す。

「フッ………」

だが、一閃。コーカサスは持っていた扇子でディケイドを一閃した。

その一撃により、ディケイドは崩れ落ち、変身が解けてしまった。

「飛翔っ!!!!」

「チイツ!!」

ディエンドが飛翔の元へ駆け寄ろうと立ち上がり、逆鬼、キバも続こうとする。が、突如逆鬼達の体が浮かび上がった。

「えっ？ ええっ!？」

「何だコレッ!？」

何かの力で浮かばされているようだが、どうする事も出来ず空中でジタバタするしかない。

暫くすると、その力は無くなり逆鬼達は落下。先程までの戦闘のダメージもあって、こちらも変身が解けてしまう。

「ぐっ………!」

歪む視界。

サカキはその視界の中、ディアブロスオルフェノクとG4-Axの後ろ。姿はよく見えないが、銀を基調とした重厚なライダーと緑色のライダー。

その隣には、白衣を着た男とスーツ姿の男も居たようにも見えた。

サカキは何とか立ち上がろうとするが、ダメージが大きく立ち上がれない。

その時、ディアブロスオルフェノクが同じように痛みで表情を歪ませていたソラに近付くのが見えた。

「ッー!!」

それを見た瞬間、サカキは体の痛みを忘れ、弾けるように動き倒れるソラの上に覆い被さる。そして、鋭い眼光でディアブロスオルフェノクを睨んだ。

「……………いいだろう。お前からだ」

ディアブロスオルフェノクは、“左手”を伸ばし……………。

「合格」

そう言って、サカキの頭を撫でた。

『……………はい？ ええええええええええええつ！？』

あまりにも予想外の言葉に、サカキ、飛翔、ソラ、アリシアは最初は意味が分からなかったが、直ぐに絶叫。

そこに、G4-Axがケラケラ笑いながら説明に入った。

「いや、女教皇とかからちょっと頼まれてね。これから大変になるからって。逆鬼とキバのカードも出たし、結果は大成功よ」

そう言っつてG4-Axは仮面を外す……………と、そこにはいつものサングラスを付けた鍊矢の顔があった。

鍊矢の顔を見て、サカキは愕然となる。

「おまつ……………！ ええつ！？ じゃあそいつは何なんだよつ！！」

サカキはディアブロスオルフェノクを指差して叫んだ。

全ては錬矢の暗躍。という事はディアブロスオルフェノクも錬矢とグルという事だが、実際に隣街で行方不明事件は起きている。それはどう説明するのか？

サカキがその事を問い詰めると、錬矢は「それなら……」
と言って説明する。

「確かに行方不明事件はあって、俺は調査しに行った。それでオルフェノクの仕業って事が分かって、次に狙われそうな奴を絞って張り込んでたのよ」

その後の錬矢の説明を簡潔にまとめると……。

「つまり、実際行ってみたら事件起こしてたオルフェノクは、そっちの奴に倒されて、お前らは意気投合、つと」

「そう言う事」

「すまなかつたなお前ら。俺は嘘をつかない男だったんだが……
・・それも生前の話だ」

「何だそりゃあああああああああああつ!?!」

「そ、そんな……………」

「この世界には本当にマトモな奴はいないのか……………!!」

「あはは……………。何だかドツと疲れた」

完全に私服に戻った鍊矢と、人間の姿になったディアブロスオルフェノクこと志度に、サカキは絶叫。ソラは涙を流し、飛翔は青筋を立て、アリシアはその場に座り込む。

こうして、鍊矢主催の

『ドキッ！ サカキ達で遊ぼう！！ くポロリはないよっく』が幕を閉じたのであった。

サカキ達が鍊矢と志度と話している頃、離れた場所で銀が基調の

ライダー……..
『仮面ライダーオーズ・サゴゾコンボ』は、大きく欠伸をして
いた。

「ふあゝあ。………眠い」

「確かにな。結局徹夜だし」

緑色のガシヤポンの印象のライダー………『仮面ライダー
バース』が、オーズの言葉に賛同する。

オーズとバースは、コーカサスと同じ世界に住んでいるライダー
だ。だが、本来敵であるはずの『グリード』が平和主義のため戦い
とは無縁の生活を送っていたりする。

なら何故彼らがいるのか？ それは簡単、コーカサスに無理矢理
連れて来られたからである。

しかも、同居人に断りなしに来たため、烈火の如く怒られるであ
ろう。

「………はあ」

帰った時の事を考え、溜息を吐くオーズとバース。

そこに、白衣の男……デインゴが苦笑しながら慰める。

「大変だね。でも、鍊矢と紫ゆかりに無理矢理連れていかれたと言えば分かってくれるんじゃないかな？」

「……まあ、確かに一応は納得してくれるかも知れないけどよ。名無は霊夢がスキマ妖怪の性格を理解してるからいいけど、問題はこつち。ナイフが……！ナイフが……！！」

仕事先の上司？を思い出し、バースはこめかみを押さえる。

そんなバースに、デインゴは苦笑。オーズは興味がないようで、
「霊夢達のお土産どうしよう……」などと呟いている。

さらにそこに、今まで空気だったスーツ姿の男が入って来た。

「あっはっはっはっ！ 情けないなあ、バース。それに比べ俺を見る。俺と真夜は一目合った時から……」

「うるさい。散々ストーカーした癖にいざ振り返ったら別の女にくら替えしやがった奴が。」

てーかそのせいでどんだけ息子さんが苦労したんだよ。つか、お前も今回グルだろ」

「人間のゴミだね」

「音也、太牙君や渡君に土下座したほうがいいんじゃないかな？」

バース、オーズ、デインゴの必殺技（という名の本音）により、スーツ姿の男 『紅音也』くれないおとやのライフは0となり、その場に崩れ落ちた。

「~~~~ あら、音也どうしたの？」

「何でもないよ、紫。それより早く帰ろう」

満足したようにコーカサスが来て、落ち込んでいる音也に首を傾げる。

それに、オーズが帰る事を希望したのでコーカサスは特に気に留めず“スキマ”を開き、オーズ達はそれを潜っていったのだった。

錬矢の暗躍から翌日。

海鳴市のとある公園にサカキ達は居た。……飛翔とアリシアとの別れである。

「全員、いいかい？」

そうその場にいるメンバーに聞くのは勿論錬矢。だが、その姿は包帯だらけのミイラ男だった。

それは、サカキがフェイトにチクリ、フェイトがドラグブロッカーに頼み、ドラグブロッカーが錬矢に噛み付いた（マジ噛み）したためである。

その時、錬矢から数枚の“メダル”が落ちたそうだが……それはフェイトしか気付いていない。

「すまねえな。うちの“アホ”のせいで」

「いや、こっちの知り合いもグルだったらしいしな。……
こっちはこっちで抱腹しておく」

サカキと飛翔が握手をする。それを、ソラとアリシア、ブレバツトが微笑みながら見ていた。

そして、飛翔とアリシアの背後に灰色のオーロラが現れ、二人は踵を返して歩いていく。

「あ、ちよつと待て」

すると、錬矢が二人を呼び止めた。

飛翔は錬矢を怪訝な表情で見る。

「少なからず、迷惑を掛けたから、これはそのお礼だ」

そう言って、鍊矢は二枚のカードを渡す。

飛翔は「少なからずかよ」と思いつつ、そのカードを受け取る。カードには『リユウガサバイブ』、『G4-Ax』が描かれていた。

「これは……………」

「さつきも言っただろ？ お礼だつて。

そいつは俺特製のカードだ。変身は出来ないが、召喚は出来る。……………俺の人格でな」

「返す」

即行でカードを突き返すが、鍊矢のゴリ押しにより受け取るしか出来なかった。

そうして、飛翔とアリシアは疲れた顔をして灰色のオーロラを潜って行く。

サカキ、ソラ、ブレバットは苦笑。鍊矢は盛大に笑っていた。

三十一ノ巻に続く。

三十ノ巻『暗躍するR/FFR・旅人との別れ』（後書き）

・リュウガサバイブ

鍊矢が変身したりリュウガが、SURVIVE - 烈火 - のカードで強化変身した姿。

見た目は龍騎サバイブを黒くし、禍々しくしたような物。召喚機も、龍騎サバイブと同型の黒い『ドラグバイザーツバイ』となっており、契約モンスターであるドラグブラツカーも、『ブラツクドラグランザー』にパワーアップしている。

アドベントカードもほぼ龍騎サバイブと同じだが、アクセルベント、スチールベントなど他のアドベントカードも所持している。

・G4 - AX

鍊矢とディンゴが音也がいる『ネガの世界』にあったG4を勝手に持ち出し、改造したライダー。

見た目はG3 - XをG4のカラーにしたもの。

G3 - X、G4の武装は全て使用でき、装着者の任意に応じて瞬間装着できる。

さらに、スカルマグナムと同型の『G4マグナム』が装備されて

おり、ガイアメモリを用いてマキシマムドライブを発動させメモリブレイクが可能である。

三十一ノ巻 『姿を現す悪魔王』 (前書き)

今回は時間軸が少し戻り、直人と優紀、キバット・バット五世が来る前です。

錬矢の正体が明らかになる、かも。

三十一ノ巻 『姿を現す悪魔王』

時期は『闇の書事件』が終わり、『アンデットハンターの世界』のライダー、直人達が来る少し前。

とある管理世界・錬矢・ディンゴのアジト。そこで、二人の男錬矢とディンゴ、そして一人の少年が一つのテーブルを囲んでいた。

少年は、現代風の七三分けにした黒髪に何の迷いがない黒い瞳。顔には幼さが残り、端から見たら少女と間違えてしまう。

服装はフード付きのトレーナーに半ズボンと簡単な物で、ファッションにはあまり興味が無いようだ。

少年の名は名無^{めいむ}。忘れられた都・『幻想郷』に住むライダー・『仮面ライダーオーズ』である。

何故、この三人が一つのテーブルを囲んでいるかというところ……

「フォーカード」

「4ペアッ!!」

「ストレートフラッシュ」

ポーカーをしていた。ちなみに4ペアは鍊矢である。

使用しているカードにはカブト虫やヘラジカ、イカなどが描かれており一般的に『ラウズカード』と呼ばれる物だが、これは絵柄が格好いいという理由で作ったレプリカである。

「ほら、さつさと払って」

「お前酷いなっ!！」

「ただでさえ少ない研究資材が……」

どうやら賭けをしていたらしく、名無は容赦なく賭け金を要求する。

鍊矢とデインゴは渋々賭け金であるメダル　セルメダルを名無のそばに寄せる。それを、名無は満足そうに見ると右手で掴み、そのまま体内にしまった。

このような賭けを既に何十回と繰り返しており、全て名無が全勝している。というのも、名無の能力である『全てのモノ事を検索す

る程度の能力』によりポーカーに勝利するための方程式を検索したのだ。

「くそっ、まだまだ………!」

(無断なのに………)

まだ諦めない錬矢はカードをシャッフルする。

名無は配られたカードを数回変え、手札を揃えた。ダイヤスートのロイヤルストレートフラッシュだ。

(これで………)

「勝負っ!!!」

錬矢も揃ったようで、名無は受ける。

ちなみに、ディンゴは役が揃わなかったので降りた。

そして、いざカードを出そうとした、その時、三人がいた部屋に侵入者を告げるアラームが鳴り響いた。

デインゴはそれに直ぐ反応し、空間キーボードを出し空間モニターに映し出す。と、二つの画面に、片方は槍を持った屈強な男を筆頭にした管理局の武装局員。

もう片方には、両腕にガントレット、両足にローラーブレードを付けたら薄い青紫のポニーテールの女性と、グローブを両手に付けた紫色のストレートヘアーの女性だった。

「これは……………」

「管理局の武装隊だな」

横から名無と鍊矢が覗き込む。

デインゴは顔認証を使いデータベースから武装局員らの検索を行い、数秒もしないうちに完了した。

「出た。管理局地上本部のトップの武装隊……………ゼスト隊か」

ゼスト・グランガイツを隊長にしたゼスト隊は、最近は主に“戦闘機人”について嗅ぎ回っているらしい。

そうデータを読み上げたディンゴに、鍊矢が抗議の声を上げた。

「おいおい。ここは戦闘機人研究なんてやってねえぞ」

「そうだね。大方ジェイルの所と間違えか、どこからか流れた仮面ライダーか怪人のデータを、戦闘機人と間違えたんだろ」

ディンゴは鍊矢の疑問に、考えられる事を口にする。

確かに仮面ライダーや怪人は見ようによつては機械と融合させた人間……戦闘機人に見えなくもない。だが、鍊矢達は外に情報を流すようなへまはしていないため、恐らく前者だろう。

828

「ま、どっちでもいい。人数が多いのは俺がやるから、こつちの二人組の方はお前らがやってくれ」

鍊矢はそう言うと足早に部屋の出入口に向かう。と、何かを思い出したように「あ」と言つて振り返った。

「言い忘れたが、殺すなよ？ あくまで振り返ちだ。殺さなきゃ手

足の一本へし折ってもいい」

そうして部屋を出て行く。名無も特に異論はなく、言われた通りに部屋を出て女性二人組が進んでいる通路へ向かった。

一人部屋に残ったディングゴは、先に出た友人の後ろ姿を思い出し
呟いた。

「錬矢、君は変わったね。僕と出会った時は皆殺しだったのに……」

その変化が、僕は嬉しく思うよ。

ディングゴは部屋を出る。と、先程やっていたポーカーを思い出し、戻って伏せてあったカードをめくる。名無のカードはダイヤのロイヤルストレートフラッシュ。

続いて錬矢のカードをめくり……少し驚いた表情になり直ぐに微笑んだ。

「……………錬矢、近いうちに良いことがあるかも知れないね」

錬矢のカードはスペードスートのロイヤルストレートフラッシュ。

錬矢に愛娘が出来たのは、この数日後の事であった……………。

ゼスト隊の隊長、ゼスト・グランガイツは、以前より追っていた違法研究・戦闘機人の情報を掴み、ここに踏み込んだ。

本来ならもう少し情報を集めてからだっただが、友人であり上司でもあるレジアス・ゲイツに異動の話聞き、何かあると思ったゼストは今日踏み込む事にしたのだ。

隊を二つに分け、自分は隊のメンバーを率いて正面から、主力であり移動力のあるクイント・ナカジマとメガーヌ・アルピーノは別ルートから進んでいた。

ゼストを筆頭にした面々は暫く通路を進むと、二体の石像が両脇に配置されていた。

二体の石像は屈強な肉体だが、首から上がなく、武骨で片刃の大剣を床に突き刺し立たずんでいた。

ゼストは悪趣味だな、と思いながらも警戒しつつ、二体の石像の間を通り抜けようとした。

「待て」

低い声が聞こえ、ゼストと武装局員達は足を止め、辺りを見渡すが、声の主は何処にも居ない。

「兄者、客人だ」

「客人だな」

さらに声の数が増え、姿が見えない声に局員達が狼狽え始める。

だが、隊長であるゼストは騎士の称号を持つ猛者。冷静に耳を清ませると、その声が二体の石像から聞こえるのが分かった。

「兄者、もてなすでしょう」

「そうだな、もてなすでしょう。だがもてなすにはどうすればいいのだ？」

「知らん。我らはもてなし方を知らん」

よく見れば、石像が持つ片刃の剣の柄尻に小さな顔があり、それがもう片方の石像を見て会話をしている。

局員達も声が石像から聞こえるのに気付き、デバイスを構える。

だが石像はゼストと局員達に構う事なく会話を続ける。片方の石像が提案すれば、もう片方の石像が疑問を投げ掛け提案した石像が返答する。

新たな提案を出せばまた疑問を投げ掛け返答し……。そんなイタチごっこな会話に、局員の中には溜め息を出す者まで出る始末。

石像達は、今度は溜め息に反応した。

「兄者、客人が溜め息を出しているぞ」

「溜め息？ 溜め息とはなんだ」

「溜め息とは……………」

「俺達はそのを通りたい。いつまでも喋っているなら通してもらおうぞ」

しびれを切らし始めた局員達を代表し、ゼストが自分達の用件を言う。すると、穏やか(?)だった石像達の口調が一変し、緊迫したものに変わった。

「なるほど、客人ではなく侵入者だったか……………」

「侵入者だな兄者……………」

二体の石像はゆっくりと動き出し、体に付着していた石の皮が剥がれ、赤と青の体が露になる。

「ここを守護するのが我らが役目……………」

「我が名はアグニツ!!」

「我が名はルドラッ！！」

『何者であろうと通す事は許さぬっ！！』

赤い肉体の兄者と呼ばれていた『アグニヤミー』と、青い肉体の『ルドラヤミー』は片刃の剣を振るい、ゼスト達の前に立ち塞がった。

一方、別ルートを進んでいるクイントとメガーヌは、あまりにも簡単に進めるため疑問に思っていた。

「……………メガーヌ、どう思う？」

「畏……………かな。いくら何でも簡単過ぎる」

周りを警戒しつつ、クイントとメガー又は進む。すると、通路の先に白衣を着た男とトレーナーを着た“少女”の姿を見つけ、足を止めた。

「残念だが、ここには貴女達が求めるモノは無い」

会合一回目に、少女……………いや、少年 名無に言われ、クイントとメガー又は目を丸くした。だが直ぐに意識を戻し、クイントは聞き返す。

「それはどういう事かしら？」

「そのままの意味だ……………ここでは戦闘機人の研究は行われていない」

白衣の男 ディンゴが返答する。

確かに確証があった訳ではない。だが、そう言われて「はいそう

ですか」と引き返すような事は、彼女達にはない。

目の前の男が嘘を言っているかも知れないし、戦闘機人以外の事が出るかも知れないのだ。

クイントは両腕のガントレット　リボルバーナックルを構え、メガー又は自身の足下と前に魔方陣を展開し、虫のような人型の召喚虫・ガリユーを召喚する。

「大人しく引き返してくれば良かったんだが………どうやらその気はないようだね」

構えるクイントとメガー又を見て、デインゴは仕方ないと呟くと、デルタギアRリヴァールを取り出し、装着。

名無も、長方形のバックル　『オーズドライバー』を装着した。

《Standing by》

「変身っ！ー！」

《Complete》

銀色のフォトンストリームに包まれ、デインゴはデルタRに変身。その隣で、名無は金の縁取り赤・黄・緑のメダル　コアメダルをオーズドライバーの窪みに嵌め込み、オースキャナーで読み込んだ。

「変身」

《タカ！　トラ！　バツタ！
タ・ト・バ！　タトバ！　タ・ト・バ！》

コンボが成立した歌と共に、名無の姿は仮面ライダーオーズ、その基本形態であるタトバコンボに変身した。

「……………何、今の歌」

「あら、カッコいい」

「メガーヌ、あなたのセンスはいまいち分からないわ」

オーズ特有の歌に、違う反応を見せるクイントとメガーヌ。だが直ぐに表情を引き締め、デルタRとオーズと対峙する。

アグニヤミーの深紅の大剣と、ゼストの槍がぶつかり、火花を散らす。

「ぬあっ!!」

ゼストが槍を振るい、アグニヤミーの剣が炎を吐き出す。

戦いは一進一退。いや、いくら魔法で身体能力を強化しているとはいえ、人間と化け物^{ヤミー}。ゼストが僅かに押されている。

さらに人間では致命傷の傷でも、ヤミーにとってはかすり傷程度でしかない。長期戦になれば、その差から雌雄が決するであろう。

だが、ゼスト程の腕をもってすれば倒さずとも致命傷を与える事

は可能であった。だが、ゼスト自身、アグニヤミーとの戦いに集中出来ないでいた。

『があああああああつ!?!?』

ゼストの耳に、部隊員達の悲鳴が届く。その瞬間、ゼストの動きが鈍りアグニヤミーの剣に反応が遅れる。

「ぐうつ……!?!?」

なんとか反応し、槍の柄で受ける。威力は殺せず、後ろに動かされた。

ゼストが戦いに集中出来ない理由、それはルドラヤミーと戦闘している部隊員達であった。

管理局地上部隊のエース部隊であるゼスト隊は、ゼスト、クイント、メガー又は勿論、部隊の武装局員は一般局員より能力は高い。だが、相手がヤミーなら話は別だ。

現に、ルドラヤミー一体に、部隊員達は翻弄され、打ち負かされていた。

「ぬおおおおおつ！！」

その時、アグニヤミーの声が聞こえ、ゼストは視線を前に戻すが、その時には深紅の剣が眼前に迫っていた。

「隊長つ！！」

こちらの状況に気付いた部隊員の一人の声が聞こえる。

ゼストは死を覚悟し、目を瞑る。……だが、その時である。

「待て」

新たな男の声。

短い一言。だがその一言で、アグニヤミーとルドラヤミーの動き

が完全に止まったのだ。

アグニヤミーとルドラヤミーは体と、剣の柄尻に付いた顔を声の方向へ向けた。

ゼストも釣られてその方向を見る。

そこに居たのは、真つ黒な男。全身黒づくめの衣装で、顔は左目を露出した仮面で隠され、唯一見える深紅の瞳が怪しく光る。

勿論、この男は錬矢である。

錬矢の登場に、アグニヤミーとルドラヤミーは錬矢の近くまで行くと、剣を突き刺し、膝を折り頭を下げるような（頭がないため）動きをする。

ゼストは理解した。この男（錬矢）が、あの化け物アグニヤミー・ルドラヤミーを動かしているのだ。

ゼストは改めて心を引き締め、槍を構える。

対して錬矢は戦う気満々のゼストを見て、「あー……」と頬を掻き眩く。

「戦う気満々ですか。こちらとしたり帰ってくれたら楽でいいんだが……しょうがないか」

そう言うと、鍊矢は右手を天に向かって伸ばす。すると、どこからか黒い陰が飛んで来た。

ゼストは、その黒い陰を見て目を見開いた。

「キ、キバット族だとっ!？」

飛んで来たのは、デフォルメされたコウモリの頭から直接羽と足が生えた不可思議生物、キバット族のモンスターだった。

ゼストは騎士の称号を持つため、何度か聖王教会に足を運んだ事がある。その際、『蒼剣のキバ』の鎧を所有する少女と、その相棒のキバット族を見た事がある。

今、ゼストの前に現れたキバット族は、全体が漆黒であり瞳だけが深紅という、禍々しく不気味な姿をしていた。

このキバット族の名は、キバット・バット一世。かつて、『闇のキバ』の鎧を管理していた、キバット族の一代目である。

「一世っ!」

「泣き叫べっ! 虐殺タイムだっ!!」

ガブリッ！！」

「変身っ！！」

一世が鍊矢の腕に噛みついた事により、鍊矢の腰に漆黒のキバットベルトが出現。変身の声と共に一世がベルトに逆さまに止まり、一世を中心に波紋が発生し鍊矢に『悪魔王』の名の鎧を装着する。

闇のキバのような体。だが色は漆黒で、深紅のラインが血管のように走っている。

仮面はレジェンドルガの王のような角が生え、こちらも色は漆黒で同じように深紅のライン。深紅の複眼が輝く。

「キ、キバ……！　なのか……？」

確かによく似ている。だが、“似ていない”。ゼストの中に、矛盾した言葉が交差する。

悪魔王。それが鍊矢が変身した仮面ライダーの二つ名。仮面ライダーアモンである。

「お前ら下がってる」

「はっ」

「そつちもだ。……………ゼスト・グライツ、あんたと俺の一騎打ちだ」

アモンは、アグニヤミーとルドラヤミーを下がらせ、ゼストにも武装局員を下がらせ自分との一騎打ちを要求する。

「……………要求を飲まなければ」

「皆殺し」

嘘ではないな。

「お前達は下がれ」

「隊長っ！…！」

部隊員の一人が彼のバリアジャケットを掴むが、ゼストは大丈夫だと頷き、一歩前に出た。

「……………一つ、約束してほしい」

「なんだ？」

「俺はどうなっても構わん。だが、部下達の安全は保証してもらいたい」

「男だね……。いいぜ、その約束、守ってやる。つか、そもそも殺す気はない」

つまり、殺さないで勝てる余裕がある、という事である。

「ゼスト・グライツ」

「仮面ライダーアモン」

「勝負っ！」

「推して参る」

瞬間、槍と拳がぶつかった。

オーズが、バツタレグの力で高々と跳び、通路の天井を蹴ってクイントの背後に回る。

「貴女の力は検索済み。このメダルが効果的だ」

オーズは傾けていたオーズドライバーを水平に戻し、真ん中のトラ・コアメダルを取り出し代わりにゴリラ・コアメダルを装填し、再びオーズドライバーを傾けオーズキャナーで読み込んだ。

《タカ！ ゴリラ！ バッタ！》

タカゴリバにチェンジし、ゴリバゴーンを装備した両腕を打ち合
わせる。

クイントは姿が少し変わったオーズに驚きながらも、ローラーブ
レードで加速しリボルバーナックルを装備した右拳を振り抜く。

「はあっ！..！」

「ふっ」

同じようにオーズも右腕を振り抜き、正面からぶつかると。

ガリユーの爪が、デルタRを襲う。だが、デルタRは右手に持っ
たデルタマグナムで最低限の攻撃は捌き、残りは避けている。

「フッ」

デルタマグナムをガリユーに向け、発砲。至近距離でだ。

だが流石わガリユー。至近距離で撃たれたにも関わらず、見事に反応し避け距離を取った。

こちらは一進一退。互いに相手の攻撃を避けられるが、自分の攻撃が当てられない状況だった。

(こっちは何とか・・・・・・・・隊長の方は大丈夫かしら?)

クイントとガリユーを援護しつつ、メガーヌは考える。

出来ればゼスト達が何かデータを手に入れ、そのまま撤退・・・・・・・・
・・という形にできれば楽なのだが。

(でも、これだと隊長の方も妨害されてそうだし・・・・・・・・。あ
あ、早く愛する夫と子供達のところに戻りたいのに)

場違いにも考えるのは、家族の事。

メガーヌの夫は局員ではなく自営業。ミッドでは珍しい探偵を営んでいる。だが、メガーヌ自身がこんな仕事をしているため、探偵の傍ら一歳になる娘の面倒を見る、主夫状態であった。

まあそれも、家で預かるようになった、息子のような子に娘を任せているが。

家族の事を考えながら、援護はしっかりとする。マルチタスクは魔導師には必須スキルだ。

同時に、メガーヌ・アルピーノ。彼女は恐ろしくマイペースな女性だった。

話を戻そう。

メガーヌが思考の海に潜っている間にも、戦いは続いていた。

「はあああああああつ！！」

「せいやあああああああつ！！」

クイントとオーズ・タカゴリバは相手の攻撃を防ぎつつ殴り合い。

「はあつ！」

「！」

ガリユーとデルタRは体術も交えた攻防を繰り返している。

どちらも至近距離で戦っているため、下手に援護も出来ない。

その中で、最初に拮抗を破ったのは、デルタRだった。

「……………そろそろ頃合いか」

デルタRはそう呟くと、突き出されたガリユーの腕を掴み、背負い投げで投げ、自分は直ぐに体制を立て直し『P』と書かれた白いガイアメモリを取り出す。そして、ガイアメモリをデルタマガナムに装填した。

《PREDATOR!! Maximum-Drive》

「プレデターバニッシュ」

そうして放たれた“口”は、その場を飲み込んだ。

拳と槍を交えていたアモンとゼストの耳に、何かが発した……
……いや、何かの雄叫びが聞こえた。

「今は……………」

「ああ、終わったか」

「何？」

「俺の仲間がそっちの別動隊……………家庭持ちの二人の足止めしててな、勝ったらしい」

それを聞いた瞬間、ゼストは目を見開いた。相手が嘘を言っている可能性もあったが、目の前の男（とっていいか分からないが）の言葉は妙に真実味を帯びていた。

アモンは「んじゃ」と言って左手を伸ばし手のひらをゼスト……武装局員達に向けた。

「こつちも終わらせるか」

「ッ!!」

ゼストは直ぐに動き、槍を上段から降り下ろす。相手が何かする前に止めるためだ。

だが、槍の刃が届く前に……ゼストの体から力が抜け、その場に膝をついた。

ゼストだけではない。ゼストの後ろにいた武装局員も次々と崩れ落ちる。

「な………なんだ………!?」

「アモンの能力の一つだ」

アモンが説明する。

「『魔力吸収・放出能力』。指定した範囲の魔力を吸収し、自分の魔力として放出できる。……魔力を主力にしてる奴にとつて、アモンは天敵だ」

そこまで聞いて、ゼストは意識を手放した。

その後の事を語ろう。

ゼスト隊の面々は、気付くと森の中に全員捨てられていた。

直ぐに先程まで居た錬矢とディンゴのアジトに向かったが、そこはすでにものけの空で、ゼストやクイント、メガーヌ隊が接触した仮面ライダーや怪人に関する事は何も残ってなく、代わりに違法研究者のデータが残されていた。

このデータがキツカケで、多くの違法研究者が逮捕され、ゼスト隊は有名となる。

そして、錬矢達は……………。

スカリエツティのアジト。そこに、錬矢達は居た。

「うし、引っ越し完了」

「錬兄い、お疲れ様」

いつもの格好に、頭に手拭いを巻いた錬矢がそう言うと、隣に居た水色髪の少女が錬矢を労う。

少女の名はセイン。スカリエッティが産み出した、戦闘機人である。

アジトを捨てた鍊矢とデインゴは、友人であるジェル・スカリエッティのアジトに転がり込んだのだ。

ここには居ないが、デインゴはスカリエッティと、セインの姉のウーノの三人でデータ整理をしている。

「ありがとな、セイン」

「いや、お陰でトーレ姉の地獄の特訓抜け出せたし」

「あはは」と笑うセインに、鍊矢は「やっぱりか」と笑い返す。

スカリエッティが産み出した戦闘機人、通称ナンバーズの中で、セインは一番鍊矢になついていた。

理由は分からないが、実の兄のように慕っているのは確かである。

鍊矢としては、フェイトとセインを会わせたいが………スカリエッティが色々アウトなため、それは難しかった。

「あ、俺そろそろ行くわ」

「え、もう?」

「わりいわりい。ちょっと約束があつてな」

セインは「むう……」と唸るが、約束があるのでは仕方ないと割り切る。

錬矢は「今度埋め合わせする」とセインを撫で、近場の鏡に向かってカードデッキを構える。

「変身っ!」

リュウガに変身すると、セインに「んじゃ」と言つて鏡に潜る。

「……荷物整理でもしよ」

リュウガを見送つたセインは、寂しそうに積まれた段ボールの身を出すのだった。

スカリエッツィの研究室。そこでディンゴとスカリエッツィが唸っていた。

「……ディンゴ、ガイアメモリは専門外だが、『喰らう』記憶を一つのメモリに集中させるのはやっぱり危険じゃないか？」

スカリエッツィが言う。

彼らの前のモニターには、『G』と『P』のガイアメモリから矢印が伸び、『E』のメモリに伸びているが、ERRORと表示されている。それに、ディンゴは溜め息が出る。

「みたいだね。やはり当初の設計通りに、三つに分けよう」

最初から分かっていたように言うと、ディングゴは操作しモニターを切り替える。そこには、『E』のガイアメモリと、ライダーの設計図が映し出されていた……。

三十二ノ巻に続く。

三十一ノ巻『姿を現す悪魔王』（後書き）

星奈「三十一ノ巻、いかがだったでしょうか？ 星光の殲滅者改め、星奈です」

閻璃「閻統べる王改め、閻璃だ。

今回は、鍊矢の仲間VSゼスト隊か」

星奈「はい。ただ、『魔導師より仮面ライダー・怪人の方が強い』という法則の元、こういう形になりました」

閻璃「ふむ。本来なら塵芥スガリエッティのアジトに乗り込み、ゼスト隊は全滅するはずなのだが、これでは間違えて鍊矢のアジトに乗り込んだな」

星奈「はい、あくまで間違えてです。

ちなみに、今回出たアグニヤミー、ルドラヤミーは悪魔系統のヤミーで、元ネタはデビルメイクライ3に登場したアグニ&ルドラです。勿論、生み出したグリードは鍊矢さんです」

閻璃「ぶつちやけたな。

以前、鍊矢が言っていたアモンが出たな」

仮面ライダーアモン

鎌矢が持つライダーの中で最強のスペックを誇り、『悪魔王』の二つ名を持つ。

ダークキバの胴体にアークの頭部を組み合わせ、全身を漆黒に血管のような赤いラインが走っている。複眼は深紅。

『魔力吸収・放出能力』以外にも能力があるようだが、その殆どが謎に包まれている。

現在はキバット・バット一世が管理している。

星奈「という感じですね」

闇璃「他にも色々あるが・・・今話べきではないな」

星奈「そうですね。・・・今回はここまで。私、星奈と」

闇璃「闇璃がお送りした」

三十二ノ巻『学校に通うsノ奴からは逃げられない』(前書き)

今回の話は、サカキが学校に転入する話です。

どうぞ。

三十二ノ巻『学校に通うSノ奴からは逃げられない』

AM6:00。海鳴市の住宅地を、サカキは走っていた。毎朝の
日課である。

「ふう。ただいまー」

「お帰りー」

走り込みを終え、八神家に戻る。家の中に入ると、はやてが朝食の準備をしていた。これもいつもの光景だ。

「はやて、朝飯はなんだ？」

「サケの塩焼きに卵焼き。それとお兄ちゃんの好きななめこのお味
噌汁や」

「お、いいねえ。んじゃ、俺シャワー浴びてくるわ」

そう言って、バスルームに向かう。

今日は、面倒でもあり……楽しみでもある聖祥大附属小学校への転入の日である。

「どや？ リンフォース」

「似合っていますよ、主」

朝食を食べ終え、はやては部屋で聖祥の制服に着替えた。

まだ車椅子のため、リンフォースに手伝ってもらったのだ。

リインフォースは本心で似合っていると聞いた。だが、はやては何故か不満そうな顔をしている。

「主、どうかしましたか？」

「リインフォース、その『主』っていうの止めてくれへん？」

「は？」

間抜けな声が出た。言葉の意味が理解出来ないリインフォースを置いて、はやては言葉を続ける。

「前々から思ってたんやけど、うちよりお兄ちゃんの方がリインフォースのマスターらしいんよ」

「は、はあ……………」

「それで、お兄ちゃんはリインフォースともユニゾンできるし、いつそのこと、お兄ちゃんがリインフォースの正式なマスターのほうがいいかなーって、思ったんよ」

「はあ……………」

「どやる？」と聞くはやてに、リインフォースは曖昧に相づちを打つしか出来なかった。

思い返すと、確かに自分は主よりサカキと行動する事が多い。いや、それは自分が望んだ事なのだが……。

「考えてもみ？ お兄ちゃんがリインフォースのマスターになったんを」

はやてにそう言われ、リインフォースは考えてみる。サカキが自分のマスターになった所を。考えて……。

「……………今とあまり変わりません」

「せやな……………」

どつちらはやても同じように考え、同じ答えに行き着いたらしい。

そこで、はやては話を切り上げる事にした。

「まあ、この話はええやろ。」

「……にしても、お兄ちゃん遅いなあ。初日から遅刻なんて嫌やで」

「そうですね……。少し、様子を見てきます」

自分の部屋で制服に着替えているサカキが遅いので、リインフォースが見に行こうとする。と、サカキの声が聞こえた。

「わりいわりい。着替えるのに手間取っちゃまった」

「もう、遅いでお兄ちゃ……」

部屋に入ってきたサカキを見て、はやては言葉が止まった。

一目見て、それは忍装束だと思われる。思われるというのは、それは袖がなく腕が露出しおり、顔には覆面をしていなく、身体中に鎖を巻き付けている。一般的にイメージされる忍装束とは大きく違っていた。

それは、真庭忍軍と呼ばれる忍者特有の忍装束だった。

「……………それで、アンタはいつもの格好なのね」

「そうなんよ」

呆れるアリサに、はやてが頷く。

現在、サカキとはやては月村家の車に乗り、アリサ、すずか、なのは、フェイトと共に学校に向かっていた。というのも、すずかが車椅子のはやてでは登校するのも大変だろうと気を効かせ、それなら皆一緒にとの事だった。

「まさか届いたのが制服やのうて、真庭忍軍の忍装束やとはなあ……」

「まーた錬矢が何か暗躍したんじゃないやねえだろうな」

「それは無いと……………言い切れない。お父さんならあり得る……………」

「だろ？」

「フェイトちゃんもサカキ君もひどくないかなっ!？」

ちなみに、サカキの今の格好はいつもの朱色の着物。さすがに殺人鬼が忍装束着て歩いてるような男の格好では不味い。

暫く雑談をしていると、アリサが「ところで」と話題を振ってきた。

「サカキ、アンタは、時空管理局だっけ？ そこには入らないの？」

「ああ」

サカキは短く答える。アリサは理由を聞いた。

「何で？ はやてやシグナムさん達は入るのに……」

「はやて達は関係ない。俺が嫌だから入らない。

そもそも、名前に『管理』なんて付いてる組織は気に入らない」

見下されているようだという、サカキらしい理由だった。

アリサは「そっか」と納得するが、なのはは不満顔であった。

クロノやエイミー、リンディの居る場所が悪く言われるのが嫌らしい。

「で、なのはとフェイトも入るのよね？」

「うん」

話が自分に回り、なのはは嬉しそうに答える。

「私は、どこの部署で働くか決めてないけど、自分がやれる事をやるうと思ってる」

（“やれる事”、ねえ……………）

サカキはなのはの話を聞きながら、内心ため息を吐いた。

まだガキの時に先の事を決めて、つまらなくないのか？ そう思ったからだ。

「フェイトちゃんもそうでしょ？」

と、なのははフェイトに問う。

サカキも、コイツもだったか、と再びため息を吐こうとした。だが、フェイトの答えは意外なものだった。

「なのは、その話なんだけど……私、管理局に入るのやめようと思っただ」

「「「「ええっ!?!」「」「」

（ほおー!）

なのはははやて達は声を出し、サカキは内心で驚く。

「フェイトちゃん、どうして……? だって、悲しい事にあった人達を助けられるように、執務官になりたいって言ったのに……」

「うん。そうだけど、その事をお父さんに話たら、怒られたんだ。」

『バカか？ バカでしょ？ てーかバカだろ？』って「

なのは以外の全員（運転手のノエルを含めて）が、『酷っ！？』
と思ったのは気のせいじゃない。

なのはは、フェイトがどういう想いで執務官になると言ったか知
ってる分、錬矢に対して怒りの感情を覚えた。

そしてフェイトは、「ちょっとへこんだけど」言い、言葉が続け
た。

「私が『どうして？』って聞いたら、『お前は執務官になって、不
幸な事になった連中を全員助けられると思ってんのか？ んな事無
理だ』」

『お前がどう頑張ろうと、それは変わらん。寧ろ、全部助けようとして、ボロ雑巾みたいになるのがオチだろう。』

……フェイト、お前は優しい奴だ。だから目の前で困ってる奴が居れば、助けようとするだろう。だがそれはいい。別に俺が止める事じゃない。

だがな、それでお前が潰れるような事は、一人の親として見過ごせない。……別に管理局に入ろうが、執務官になろうがそれはいいんだ。ただ、それは将来の一つとして、他の可能性を捨てないでほしい。

……つーか、25歳なのに水着同然のバリアジャケット着てる予知夢を最近見るからマジやめてくれ』

「だから、管理局に入るのは将来の一つとして、ジツクリ考えようと思うんだ」

「つーか、鍊矢の最後のセリフッ！　どんな予知夢だっ！？　てーか台無しだっ！！」

サカキが素早くフェイトの回想にツツコミを入れる。

だが、それは別世界では正夢だ。別世界では……………。

最後のセリフはともかく、鍊矢なりに娘を心配しての事だと、全員が理解した。

「皆様、そろそろ学校に到着します」

ノエルが全員にそう伝えた。

（あれが、学校か……………まあ、あのアホ（鍊矢）から解放されるのは良いか）

車の窓から見える校舎を見て、サカキは呟いた。だが、人生そんなに甘くない。

「少々無理矢理な感じもしますが、この後、クラス分けを見て高町なのはやフェイト・T・荒木達は割り振られたクラスに、サカキさんと八神はやては職員室へと向かいます」

「星奈ー、誰に向かって話てるのー？」

「いえ、何でもありませんよ、ライラ」

アリサ達と別れたサカキとはやては、職員室の前に来ていた。

ちなみにここまで、サカキ達は目立っただのは言うまでもない。

「ここやね」

「そうだな」

サカキは職員室の扉を開け、車椅子を押す。

「失礼しますー。今日から復学する八神はやてと、転入する八神サカキですー」

「おお。遅かったな」

「は……………」

サカキとはやては、返事を返した人物を見て固まった。

白衣を真つ黒くした黒衣。普段のサングラスではなく、眼鏡に何故かくわえ煙草。足には安物のサンダルと、いつもとはまったく違う格好だが、フェイトの父親で最早なんでもありの男、荒木錬矢がそこに居た。

「……………何で貴様がここに居るんだああああああっ！？」

「ん？ それはアレだ。俺がここの新任教師だからだ」

サカキにツッコまれ、錬矢はシレッと答える。

その答えの意味を理解したサカキは、その場に崩れ落ちた。

「俺は……………コイツから解放される事はないのか……………！？」

(あかん………！ お兄ちゃん滅茶苦茶美味しいっ！！)

「さーて、これからどう引っ掻き回すでしょうかな？(まあまあ、そんなに落ち込むな)」

絶望する鬼とお笑いに走る少女と、本音と建前が逆になってる悪魔。

「………何このカオス？」

同じくこの学校に赴任した、東郷志度は、そう言うのであった。

4年5組の教室。自分に割り当てられた席につき、すずかは教室内を見渡して……………。

「はあ……………」

ため息を吐いた。というのも、クラス分けてなのは達と離れてしまい、一人だけ知り合いの居ないクラスになってしまったのだ。

クラスメイト達は知り合い同士で喋っており、話掛ける雰囲気ではない。

そもそも、内気なすずかは初対面の相手に話掛ける事が出来ない。

(アリサちゃん達のクラスに行こうかな……………)

「あ……………」

「えっ？ は、はいっ!？」

新しいクラスメイトとの交流を早々に諦め、アリサやなのは達が居る隣のクラスに行こうと思うと、突然声を掛けられた。

人が近付いて来ているのに気付かなかつたため、すずかは驚きながら声を掛けてきた人物を見る。

そこには、薄茶のストレートヘアの女の子と、同じく薄茶で少女と同じ長さだが、首の後ろで纏めている少年が立っていた。

双子なのか、その顔はそっくりを通り越し、瓜二つであった。

「えつと……………」

「御坂 みさか 香里 かおり」

「御坂 みさか 香流 かおる」

すずかが対応に困っていると、少女と少年 香里と香流は自分達の名前を名乗る。

とりあえず、すずかも名乗る事にした。

「月村すずかです。あの……………何かご用でしょうか？」

「用、という程でもないけど」

「僕達、新しいクラスで知り合いが居ないから、恐らく同じ境遇の君に声を掛けてみた」

用件を聞くと、香里と香流はそう答える。

どうやら顔に出ていたようで、すずかは恥ずかしく思うが、同時に同じ人がいたんだと嬉しく思った。

すずかが笑うと、香里と香流は意味が分からず首を傾げ、すずかに尋ねる。

「どうかした？」

「ううん。何でもないよ、ええっと……」

「香里でいい。私もすずかと呼ぶから」

「僕も香流で」

「うん！ よろしくね、香里ちゃん、香流くん！」

新たな友人を得た三人は、携帯電話の番号・アドレスを交換し、

どこに住んでいるか、何が趣味か、休日には何をしているか等の雑談をしていた。

すると、香流が何かに気付き、香里とすずかに呼び掛けた。

「香里、すずか」

「何？ 香流」

「どうしたの？」

「アレ」

二人は香流が指差す方向を見ると、そこでは数人の男子が教室の扉に、昔懐かしい黒板消しトラップを仕掛けていた。

それを見た香里は……その男子達の行為を嘲笑った。

「あんな古典的なブービートラップ、仕掛けるのまだいたんだ」

「バカだね、香里」

「バカよね、香流」

(この二人つてもしかして……サカキ君や錬矢さんと同じタイプなのかな?)

二人の新たな一面を見たすずかは、そう思った。

香里と香流がドSの笑みを浮かべていると、鐘が鳴り、立っていた生徒達は自分の席に着き始める。

香里と香流も、すずかに「また後で」と言っただけで自分の席に着いた。暫くして、廊下から足音が聞こえ、教室の前で止まった。

数人の男子から、クスクスと笑い声が聞こえた。黒板消しトラップを仕掛けた男子だ。すずかとしては止めたかったが、時間が無かったのと……香里と香流のドS笑いに引いたため、結局そのままであった。

(先生、ごめんなさい……!)

すずかは、誰とも知らぬ教師に心の中で謝る。

そして扉が開かれ、誰もが黒板消しが当たったと思った。瞬間

黒板消しは“粉々に碎け散った”。

それを見て、教室内を静寂が支配するが、黒衣に眼鏡、くわえ煙草、サンダルのダルそうな教師　鍊矢は、何事もなかったように歩き、教卓に立った。その隣には、サカキもいる。

(つて、鍊矢さんっ!?)

黒板消しで反応が遅れたが、現れた鍊矢にすずかはビックリする。

サカキはこのクラスに転入するという事で納得出来るが、鍊矢がここにいるというは、教師、しかもこのクラスの担任であるという事だろう。

「え、これからお前らの担任になった、荒木鍊矢です。先生の事は“鍊八先生”と呼ぶように」

そうダルそうに言う鍊矢。金八先生のマネだろうか？　いや、銀八のマネだろう。

「で、このクラスに転入する事になった八神サカキ君ね。ほら、挨

拶」

「え〜っと、八神サカキです。これから夜・露・死・苦」

「因みに制服じゃないのは転入に間に合わなかったからだ。別にルール無用の残虐ファイターのおん畜生じゃないので、虐めなように。……じゃないと地獄を見るから」

ダルそうにサカキを紹介する鍊矢と同じくダルそうに自己紹介するサカキ。

鍊矢の最後の言葉は……恐らく黒板消しトラップを仕掛けた男子に向けられたモノだろう。

教室内がツツコミたい雰囲気になる中、鍊矢は「え〜っと」と教室内を見渡す。

「うし、八神は月村の隣の席な。因みにこれは俺の独断と偏見と面白さで決めた。文句なら来年聞いてやる」

「いや、聞く気皆無じゃん。別にいいけど」

サカキは鍊矢の横暴に軽くツツコミつつ、言われた通り移動して

すずかの隣の席に座る。

すずかが「よろしくね」と言うと、サカキは「おう」と短く答え
た。

「んじゃ、次は点呼取るんだが、面倒だから省くな。……
浅倉つてのが欠席か。まあいい、出席にしよう」

（（おいおい……））

錬矢以外の教室の全員が、同じ事を思ったのは言うまでもない。

海鳴市のとあるマンション

そのとある一室に、一人の少年がソファーに寝転がり、眠っていた。すると。

キイイイイイインキイイイイイイイン

何か響く音が少年の耳に聞こえた。

少年は閉じていた瞳を開き……不機嫌そうに言う。

「うるせえ。“エサ”なら後で採ってやる。……だから今は寝かせる」

少年がそう言うと、音はピタリと止み、部屋に静寂が戻った。

そして、少年は再び眠り始める。その様子を、窓ガラス、鏡、とにかく姿が映せる物に、『紫色の大蛇』、『鋼鉄のサイ』、『紅色のエイ』が少年を見詰めていた……。

三十三ノ巻に続く

三十二ノ巻『学校に通うS／奴からは逃げられない』（後書き）

書いてて「小学校ってクラス替えあつたっけ？」と思いつつ書いた今回の話、どうだったでしょうか？

サカキは敢えてなのは達とは別のクラスにしました。話の展開の都合です。

すずかも、話の展開の都合でなのは達とは別のクラスです。因みに、なのは達のクラスの担任は志度です。

新たなキャラも増え、益々カオスになっていく逆鬼の世界……

最後に登場したのは、皆さんの予想通りかと。

三十三ノ巻『ファルコン家』(前書き)

今回、ソラの両親と実家が出ます。

ファルコン家の屋敷の近くの森　そこに、ベルカ式の魔方陣が
現れ、複数の人影が現れる。サカキ、ラインフォース、星奈、閻璃、
ライラ、ブレバットの五人と一匹である。

「……………なあブレバット。もう一度聞くぞ？」

何で俺はソラの親父に呼び出された？　学校を休んでまで」

「それは、な？　久しぶりにソラが里帰りして、地球での事を両親
に話したんだ」

「ふむふむ」

「それでソラの父親も楽しそうに聞いていたんだが……段々ソラの話がサカキの事だけになってな。それで、だ」

『ああ』

「……なして？」

移動しながら、ブレバットの申し訳なさそうな説明に、リインフオース達は納得し、サカキだけが首を傾げる。

地球ではもう5月。新学期が始まり、はやては復学、サカキも私立聖祥大附属小学校に転入を終え、落ち着き始めたこの時期に、サカキは何故かソラの父親であるアラシ・ザ・ファルコンに呼び出されたのだ。……学校を休んでまで。

呼び出された理由はブレバットが説明した通りらしいが……サカキとしてはソラの土産話が自分の事だけになったのかすら分からなかった。

「にしてもソラの実家か……。どんな感じなんだ？
確か、この世界でも有名な家だって聞いているけど」

「まあ、確かに有名だな。……色んな意味で」

何故か言いよどむブレバットに、全員が首を傾げる。

「あ、見えてきたよ」

唯一、話を聞いていなかったライラが、ファルコン家の建物を見つめる。和風の屋敷に、サカキは風情があるなと思った。

「……………サングラスと黒服の“明らかな”男達が彷徨いていなければ。」

「……………えーっと、任侠道^{セレン}？」

「まあ、ある意味間違ではないが、その、な……………」

予想を斜め上いく出来事に、全員が啞然となる。

ブレバットの話では、ファルコン家は古代ベルカ時代から自治区として“最初からあの形で”この土地に居座っているとが。それで聖王教会と仲が良いのだから世の中分らない。

しかし、彷徨してる黒服達は殺気がただ漏れで、明らかに歓迎し

てくれるとは思えない。

「……………これ、出てっいたら蜂の巣にされそうですけど」

「そつだな。どこかに裏口は……………」

黒服達のただならぬ殺気に、サカキでも引いた。恐怖した訳ではないが、引いたのだ。

リインフォースも正面から入るのは無理と判断し、ブレバットに裏口を聞こうとした。だが

バカ（閻璃とライラ）がフルサイズとなり、砲撃をぶっ放した。

「……………何をやってるんだお前らあああああああ
あああつ!?!」「」「」

勿論、これにサカキ達はシャウトする。

それに対し、閻璃とライラは当然とばかりに答えた。

「フン、彼方が呼び出したのにこの対応だ。当然の報いであろう」

「そつだそつだ」

まあ、ある意味閻璃の意見は正しくはあるが、それでも砲撃を撃つか？ ライラに至っては閻璃が撃つたから自分も撃つたのだろう。

そして当然のように、黒服達が騒ぎ始める訳で……………。

「討ち入りじゃ討ち入りじゃあっ！！」

「どこの組の者じゃああああああああっ！？」

『……………』

流石にミッドチルダなので銃ではなくデバイスだが……………
黒服達がアレなのでサカキ達は無言で裏口に向かった。

「なあああにいいいつ!? 襲撃だどつ!!!」

部下の報告を受けた男　ファルコン家現当主・アラシ・ザ・フ
アルコンは怒声を上げる。

その隣には、白い着物を着たアラシの妻・ミオ・ザ・ファルコン
と藍色の着物を着たソラも居た。

「どいつのどいつだっ!?!」

「そ、それがどこにも居なくて……」

「親父っ!!!」

アラシが黒服に詰め寄っていると、別の黒服が部屋に飛び込んできた。

「どうしたっ!?!」

「裏口から侵入者ですっ!?!」

「数はっ!?!」

「ガキ一人ちっこいのが三人、女一人。それと、キバットの奴が……」

「何だと……!?!」

アラシは寄せていた眉間のシワをさらに深くし、怒気纏い始める。

「ほう。……つう事はサカキっちゅうガキか……。正面に攻撃して注意を逸らして自分は裏口からか。舐めたマネしてくれるじゃねえか……。! 右門っ! 左門っ!」

「へいっ!?!」

アラシの呼び掛けに、着物を着た二人の男が襖を開けて現れた。

アラシは二人の男　右門と左門に命令する。

「お前らっ！　今娘に付く虫が乗り込んで来やがったっ！！　死なねえ程度に追い返してこいっ！！」

「し、しかし親父……………」

「行ってこいっ！！」

「くへ、へいっ！！」

右門がアラシに意見しようとするが、アラシの怒気に圧され結局言われた通りに部屋の外に出る。

(どろどろしてこんな事に……………)

怒れる父を見て、ソラは自分を責めた。

こうなってしまったのは、自分のせい。自分のせいで、サカキに

迷惑を掛けた。

そう思い、ソラは自分を責めた。すると、ミオがそんなソラの手の上に、自身の手を重ねた。

「お母様……………」

「ソラ、そんなに自分を責めないの。可愛い顔が台無しよ？」

「でも……………」

ミオは、「我が娘ながら責任感が強いなあ」と思いつつ、サカキがソラにとってどういふ存在かを瞬時に理解し、娘の成長を喜んだ。そして、アラシには聞こえないよう、小声でソラに耳打ちする。

「ソラ……………様子を見て抜け出して、サカキ君の所に行きなさい」

「お母様……………!？」

ソラは思わず声を上げそうになるが、ミオにシッと口の前で人差し指を立てたので小声で返す。

「お母様………一体どうして………」

「どうしたもこうしたもないわよ。サカキ君の事が心配なんですよ？」

ソラは凶星とばかりにビクツと震えた。

サカキは強い。黒服の話から、恐らくリインフォース達も一緒なのだからユニゾンも使える。だが、右門と左門はそれぞれ『サガの鎧』と『レイの鎧』の使い手であり、相当な実力者である。いくらサカキが強いとはいえ、心配であった。

それを見透かしたように、ミオはクスリと笑うと、懐から三つのフエッスルを取り出しソラに持たせた。

「お母様、これは………!!」

「あの人の事なら私に任せて、あなたは行きなさい。それに………
………女は、ただ待つだけじゃないわよ」

そう言って、ミオは笑った。

まんまと裏口から入り込んだサカキ達は、ファルコン家の屋敷の廊下を走っていた。勿論靴を脱いで。

「アレッ！？ 目的が侵入になってるっ！！」

「サカキ、今さらだ」

道中、こんなコントを交えつつ先に進んで行く。

暫く進むと、眼前に二人組の男が立っていた。男達の横には、白

いキバツト族のモンスターと、円盤のような不可思議なモンスターが飛んでいた。

サカキ達は、自然とその足を止めた。

「悪いんだけどな」

「ここから先には通せんな」

二人組の男　右門と左門は、廊下を塞ぐように立っているため、二人を退かさなければ通れない。

リインフォースは、右門と左門が引き連れてるキバツト族のモンスターと円盤のモンスターを見て、サカキに警告する。

「サカキ、気を付ける。あの二人、恐らく“サガ”と“レイ”だ」

「サガ？　レイ？」

「キバに並ぶファンガイア族の鎧だ。一筋縄ではいかないぞ」

サカキは「なるほどね」言い音角を構え、右門は白い縦笛　ジ

ヤコーダーを取り出し、左門は左腕を出す。

「サガークツ！！」

「レイバットツ！！」

「　　？　　？ツ！！」

「行こうかつ！　華麗に激しくつ！！」

右門と左門の呼び掛けに応え、円盤のモンスター　サガークは古代ファンガイア語を話ながら右門の腹部に張り付くと、ベルトが巻き付き、右門はサガークの右側面にジャコーダーを挿し込み一気に引き抜く。

レイバットは、左門の左腕に噛みつき、左門の腰にキバットベルトが出現。ベルトのバツクル部分に逆さまに止まった。

「「変身つ！！」」

「ヘン・シン」

「変身つ！！」

二人はキバと同じようなエフェクトと共に、『仮面ライダーサガ』と『仮面ライダーレイ』に変身した。

サカキも、深緑の炎に包まれ、逆鬼に変身する。

「ほう、お嬢様から聞いていたが、本当に変身した」

「へへ、楽しみだ。……行くぜっ!!」

逆鬼に変身したのを見てそれぞれの感想を漏らしたサガとレイは、逆鬼目掛け駆け出した。

逆鬼は徒手空拳で迎え撃つ。

まず、レイが大振りの右フック。これは無難にかわす。

続いてやや下から左フックが来るが、こちらは敢えて避けずに受け止める。

「ぐっ……!!」

受け止めた際の衝撃で苦悶の音が漏れるが、耐えきり相手の左腕をしっかりと掴み、口を開け鬼火を吐こうとする。逆鬼お得意の手だ。

「はっ!!」

だが、いざ鬼火を吐こうとした時に横からサガが、ジャコーダーロッドで突かれ、中断されてしまう。さらに掴んでいたレイの腕も放してしまう。

「うらっ!!」

「ッ!!」

腕を放されたレイは、直ぐ様右ストレートを叩き込む。

逆鬼は両腕をクロスし、レイの一撃を防ぐが、勢いは殺せず後ろに下がった。

そこに、サガとレイが追撃をかける。

「らぁっ！！」

レイの大振りだが強力な攻撃に、

「ふっ、はっ！！」

サガの隙のない突き。

片方だけなら問題ないのだが、サガがレイの隙をカバーするように動いているため上手く対処する事が出来ないうでいた。

「穿て、ブラッディダガー！！」

そこに、深紅の短剣が撃ち込まれ、サガとレイは動きが止まる。

逆鬼はそれを見逃さず、二人のライダーから距離を取った。

「サカキ、大丈夫か」

「……正直、キツイ」

リインフォースの間に、逆鬼は正直な感想を漏らす。理由は先程の通りだ。

リインフォース、星奈達としては援護したいのは山々だが、相手がそれを出来ないよう逆鬼に密着して戦っている。さらに、この場所。

暴れるのには丁度よく、援護しにくい広さの廊下。下手に援護すれば、味方自身が邪魔になり、味方に当たる可能性だってある。

先程のブラッディダガーも、偶然逆鬼、サガとレイの間に入っただけで外れる可能性の方が高かった。

この場合、誰かがサガかレイを引き離し、一対一に持ち込めればいいが、いくらリインフォースでもライダー相手に一対一で戦うのは無理であり星奈達は論外だ。

(ソラか鍊矢の奴がいればな……)

逆鬼は内心でそう呟くが、鍊矢は学校の授業で出てこられないし、

ソラは……。

「ウェイクアップッ！」

レイバットがフェッスルを吹き、レイの両腕の何重にも巻かれた鎖が弾け、【ギガンティッククロー】が露になる。

それを見た逆鬼は、ユニゾンをしようとして霊剣・紅を取り出す。すると

「サカキ様っ！！！」

サガとレイの方の廊下から、ソラが現れた。

その頃、空間モニターでリアルタイムに見ていたアラシとミオは・
・・・・。

「ソラッ!? さっきまでここに・・・・あれっ! 居ないっ
!」

(ふふ。ソラ、頑張ってね)

両親がいる部屋を抜け出し、逆鬼とサガ達が戦っている場所に到着したソラは、一目散に逆鬼に駆け寄る。

「お嬢様っ！？ げふっ！！」

「えっ！ ちょっ、お嬢っ！？ がふっ！！」

途中に立っていたサガとレイをブツ飛ばしながら……。

「サカキ様、大丈夫ですかっ！？」

「ソラ、お前どうして……」

駆け寄ってきたソラに逆鬼がそう聞くと……ソラは急に真っ赤になり、慌てだした。

「そ、しよれはですねっ！ しゃかきしゃまのこりよをが……」

「おーい、落ち着け。噛み噛みだぞー」

ポン、と逆鬼はソラの頭の上に手を乗せる。余計に赤くなっただが・
・・・・。

「あう・・・・。と、とにかくっ！ 助太刀いたしますっ！！」

「？ お、おう」

「キバツトツ！！」

「応っ！ 一意専心っ！ キバツて行くぞっ！！
ガブツ！！」

「変身っ！！」

ソラは誤魔化すため、即座にキバに変身。

因みに、逆鬼は何故ソラが真っ赤になったか分かっていない。

そして、キバはミオから渡された三つのフェッスルの内、青い狼のフェッスルをブレバットに噛ませた。

「これは……………！ ガルルセイバー！！」

ブレバットは嘔ませられたフェッスルに驚きながら吹き鳴らした。すると、フェッスルの音色に呼ばれ青い狼の彫像が飛来する。

キバは左手で彫像に手を伸ばすと、彫像は狼の顔がついた波打った刀身の剣　ガルルセイバーに変形し、ガルルセイバーから鎖が伸びる。

鎖はキバの左腕、肩、胸を包み、弾ける。キバの左腕と肩、胸は蒼から青に変わり、キバペルソナも青く染まる。

『蒼剣のキバ』がガルルセイバーを装備してフォームチェンジした姿、キバ・ブレードガルルフォームである。

「ウウウ……………ガアアアアアアッ！！」

キバBGFは雄叫びを上げると、ガルルセイバーを振るいレイ目掛け突っ込んで行く。

「ガルルセイバー！？ マジかよっ！！」

レイはガルルセイバーに驚きながら、それをギガンティッククロ
ーで受け止める。

だが一撃で終わるはずもなく、キバBGFは二撃、三撃と獣の如
く剣を振るう。

「ちよっ、お嬢タンマッ！！」

レイはギガンティッククローを使い、上段から降り下ろされたガ
ルルセイバーを上手く挟んで受け止める。

「ラウッ！！」

しかし、キバBGFは右手で雪月牙を逆手に抜き放ちレイの胴体
を切った。

レイは崩れそうになるが、何とか持ちこたえる。普通ならここま
でやられる事はなく、即座に反撃するのだが、相手は自分が世話に

なっている人の娘。さらに、持っていなかったはずのガルルフエツスルを持っていたので動揺し、いつもの動きが出来ないでいた。

キバBGFの蹴りが迫る。流石にこのままやられる訳にもいかず、キバBGFの蹴りを受け止め足を掴む。

「お嬢、ちよつと待っ」

「ドツガハンマー!!」

「オイッ!!」

レイの静止なんて聞く筈もなく、ブレバットはいつの間にかくわえていた紫の拳のフェッスル　ドツガフェッスルを吹いた。

ガルルセイバーと同じように紫のフランケン彫像が現れ、キバBGFはガルルセイバーを放しこれを持つ。すると、キバの両腕、両肩、胸を鎖が包み弾け、キバ・ブレードドツガフォームに変身する。

キバBDFは、足を持たれた状態のままドツガハンマーを叩きつけた。

一方、逆鬼はサガと対峙しながら、キバの戦闘を眺めていた。

「ソラの奴、気合い入ってるなあー。……………何かあったのか？」

「……………サカキ、いいから行くぞ」

「？ おう。逆鬼・虚空っ！」

逆鬼は闇璃に言われるがまま、ユニゾン。逆鬼・虚空に変身する。

「はっ！…！」

サガはフェンシングのようにジャコーダーを突く。だが、ジャコーダーの切っ先が届く前に、逆鬼・虚空は自身が纏っているロープ
エルシニアロープを全身が隠れるように被せる。すると、逆鬼・
虚空の姿がスーッと消える。

「なっ！？ 消えたっ！？」

ジャコーダーは空を切り、サガは周りを見渡すが、逆鬼・虚空の
姿はどこにも居ない。

その時、大鎌となった霊剣・紅が、サガの背中を捉えた。

背中を切られたサガは不意打ちだったため、大きくバランスを崩
し膝を着く。

その後ろには、大鎌霊剣・紅を振り抜いた状態の逆鬼・虚空が立
っていた。

サガは、直ぐに体制を立て直し逆鬼・虚空に攻撃する。だが、逆
鬼・虚空はそれを避け、全身に巻き付いている鎖 エルシニアチ
エーンが伸びサガを拘束する。

「ぐ／＼うう……！！」

「【はぁっ！ー！】」

逆鬼・虚空は、鎖ごと動けないサガをぶった斬る。

それにより、サガは吹き飛び廊下を転がる。さらに

「がぁっ！？」

キバBDFにフルスイングされたのか、レイが飛んできてサガの上
に落ちた。

「がふっ！？」

「バツシャーマグナムッ！！」

潰されたサガはカエルが潰されたみたいなきな声を出す。キバBDF
はキバ・ブレードバツシャーフォームにチェンジし、間髪入れず

にバツシャーマグナムを連射した。

「んじゃ、そろそろ決めるか」

「はい」

【うむ】

逆鬼・虚空がそう言うと、キバBBFと閻璃は返事をする。

逆鬼・虚空は大鎌靈剣・紅を担ぎ構え、キバBBFはバツシャーマグナムを放しブレードフォームに戻り雪月牙の柄尻に備え付けていたフェッスルを取り出し、ブレバットに吹かせた。

919

【烈氷凍装っ！！】

「ウェイクアップッ！！」

閻璃の言葉に大鎌靈剣・紅の刃が紫に染まり、雪月牙の刀身が深紅に染まるとキバは一度雪月牙を鞘に納める。……そして、一気に駆け出した。

「痛た・・・・・・・・え？」

「【魔女狩りっ！！】」

「氷牙・・・・・・・・一閃」

「「ぎゃあああああああつ！？」」

逆鬼・虚空の袈裟斬りとキバの居合い斬りの一閃を喰らい、サガとレイは爆発。変身が解けた右門と左門が、ゴミと化した。

一方、アラシとミオは……………。

「右門と左門まで殺られるとは、こつなれば俺自ら……………！」

「落ち着きなさい」

「げふっ!？」

「まったくもう……………。ふふ、ソラ、頑張ったわね」

アラシをイクサナツクルで黙らせ、ミオは微笑むのであった。

「はっはっはっ！ すまんすまんっ！ 勘違いで殺害を試みてしま
ってっ！！」

「は、はぁ……………」

頭に包帯を巻いて豪快に笑うアラシに対し、サカキは苦笑気味に
返事する。

アラシとミオが観戦していた部屋に、サカキとソラ、リインフォ
ースに星奈と閻璃とライラ、ブレバット。さらに包帯を巻いた右門
と左門、サガークにレイバットまで居る。

あの後、アラシを説得（脅迫）したミオが、こうして話し合いの
場を設けたのだ。

そして実際話してみると、アラシは本来娘の恋路を応援するタイ
プなのだが、聖王教会と深い繋がりがあるファルコン家に取り入る
うとしてソラとの縁談を持ち込む輩が最近多いらしく、頭を悩ませ
ており気が立っていたそうだ。

それでサカキもソラに近づくゴミ虫と思ったそうだが……………
その誤解も解け、今こうして豪快に謝っていた。

「サカキ様、すみません。私のせいで……………」

「は？ 何でソラが謝るんだ？」

突然隣に座っていたソラが謝ってきたため、サカキは首を傾げる。

「私がお父様にちゃんと説明していれば、サカキ様やリインフォー
ス様達にご迷惑を………」

「……アホ」

「ひゃいつ!？」

自分を責めるソラに、サカキは軽めの拳骨を入れた。

ソラは剽軽な声が出た。

「サ、サカキ様？」

「お前アホか。んな事言い出したら最後は産まれてきてごめんなさ
いだろつが。だからそんな事言つな。
てーか、俺が面倒い」

「サカキ様………はい」

それを見たリインフォースと星奈達はやれやれと言った表情。ミオは微笑み、アラシはよしっと言って何か決めた顔をした。

「それでは、娘を頼んだぞ。 “ 婿殿 ” 」

そして、アラシの言葉に、ミオを除いた全員が絶叫した。

『は………はいいいいいいいつ!?!』

「おおおお父様っ!?! 一体何をっ!?!」

「いやー、今改めて考えると、ソラの奴が特定の男の事を、あんなに楽しそうに言うなんて初めて何だよな。

それに自分の娘が選んだんだ。親としちゃ応援するってのが筋だろ」

ソラが色々言ってるが、まったく聞いちゃいない。一人でうんうんと納得している。

「いや、親父さん？ 俺やソラはまだ子どもだし、そついう話は・・・」

「む、もう義父おやじと呼んでくれるのかつ！ オメエおんねらつ！ 今夜は婿殿祝むこむすめつて宴会ばんかいだつ！！」

「人の話を聞けええええええええええええええええつ！！」

三十三ノ巻『ファルコン家』（後書き）

今回はソラの実家という事で、色々やりました。

レイはファンガイアが作った鎧の一つにしましたが、スペックは元のまま。

右門と左門は、簡単に言えばルーク、ビショップの立ち位置です。

三十四ノ巻『鏡の世界ノ狂気の蛇』（前書き）

今回はついに、あのライダーが出ます。

そしてサカキとソラも、新たなライダーに・・・

三十四ノ巻『鏡の世界／狂気の蛇』

『 ああああああああああつ!!! 』

一人の男が、雄叫びを上げ走り出す。右手には鉄パイプ。男の向かう先には、警察の機動隊。全員銃で武装し、男に銃口を向けていた。

だが、男はそんな事構わず、機動隊に突撃していく。そして

……その一部始終を、鏡の中から見ている者がいた。否、者ではない。

『紫色の大蛇』、『鋼鉄のサイ』、『紅色のエイ』が、その一部始終を見ていた。

『紫色の大蛇』は男の最期を見届けると、体をくねらせ、踵を返す。『鋼鉄のサイ』と『紅色のエイ』も、それに続く。

すると、三体の前に灰色のオーロラが現れ、三体は構わずに灰色のオーロラを潜っていく……。そして、その場所には誰も居なくなつた。

こうして、この世界の物語は一人の男が全てを元に戻す事で

終結した。

だが、一つ気がかりなのが、『紫色の大蛇』が、金色の蛇の紋章が入った紫色のケースをくわえていた事か

「……………はあ~~~~」

本日最後の授業が終わり、学校の机で、サカキは盛大に溜め息を吐いて突っ伏した。

因みにさすがに届き、制服姿である。

「サカキ君、どうしたの？」

すると、サカキを心配してすずかが近付いて来た。その後ろには、面白い匂いを嗅ぎ付けてか香里と香流も付いていた。

「すずか。……と香里と香流が」

「ええ、香里と香流です。と、御坂はあなたを真っ直ぐ見て答えます」「」

声を揃えて答える香里と香流。

この二人がこの話し方をしている時は、大抵相手をバカにしてる時が見下してる時か……。とにかく、自分達が楽しむ時の喋り方だ。

サカキは、すずかから二人を紹介された時にこの喋り方をされたためスルーする。そして、突っ伏してる訳を話した。

「いやな。今朝家を出た時……」

「んじゃ、行ってきま」

『…！ おはよい！おはよ…！』

「……………てな感じに、家を出たら黒服の連中が……………」
「そ、そうなんだ……………」

前回のソラの父親・アラシに公認カップルにされてからと言うものの、ファルコン家の黒服達がサカキの登校の送迎に現れるのだ。その度にソラに連絡して強制送還して貰っているのだが……………。

香里と香流は肩をすくめ、すずかは苦笑するしかなかった。

「お前らー、席に着けー。ホームルーム始めるぞー」

そこに、PTAから苦情が来そうなダルそうな表情の錬矢が教室に入り、立っていた生徒達は各々の席に戻った。

諸々連絡事項が言われたが……………面倒なので省略する。

そして、ホームルームも終わり放課後。サカキは鞆を持って立ち上がり、すずか、香里、香流が近付く。この後隣のクラスなのは達と合流するのが恒例だった（サカキ、御坂双子はなのはで遊ぶ）。

「八神、ちょっと来い」

すると錬矢に呼び止められた。

サカキはすずかと御坂双子に「先に行ってる」と言い、錬矢に近づく。

「何だあ、錬矢」

「学校じゃ先生付けろバカ。まあいいや。……サカキ、悪いんだが、ソラと一緒に今夜、家に来い」

錬矢の声色が変わった。それは、前に魔化魍が出現した時と同じであった。

「……厄介ごとか」

「ああ。詳しくは家で話す」

それだけ言い、錬矢は早々に教室から出ていく。………
イダーがらみの事らしい。

サカキも、教室から出る。廊下に出ると、すずかと御坂双子、それにはやて、フェイト、なのは、アリサが待っていた。

「サカキ君、錬矢先生の用事ってなんだったの？」

「………今週のジャンプ買って持って来って」

「またお父さんは………」

すずかに尋ねられ、サカキは適当に誤魔化す。錬矢ならやりかねない理由だけに、全員が納得した。

丁度その頃、街のとある路地裏では……。

「ギヤアアアアアアツ!？」

「な……何なんだよこのガキツ!？」

「お、おいつ! 逃げるぞつ!！」

不良と思われる男達が、蜘蛛の子を散らすように路地裏から逃げだして行く。ある者は血を流し、ある者は気絶しているのか仲間の男に引きずられていた。

そして、路地裏には一人の少年だけが残された。

茶髪の無造作ヘアーにサカキ以上に鋭い、刃物のような瞳。右手には半分から割れ、一つの凶器となったピンを持っており、その尖った先には血が付着している。

「・・・・・・・・イライラするんだよ・・・・・・・・」

少年は持っていたピンを投げ捨て、ピンは派手な音を立てて砕け散る。

少年の表情は不機嫌そのもの。不機嫌を絵に描いたような顔である。

すると、ガラスを引っ掻いたような音が聞こえ、周囲に散乱したガラスに、紫色の大蛇　ベノスネーカーが映り、少年に何かを促す。

それを見て、少年ははあ、と溜め息を吐いた。

「ちっ、またかよ」

舌打ちし、少年は財布　先程の不良からカツアゲした　の中
身を確認する。

そして、また舌打ちし歩きだした。

夜。サカキとソラは、荒木家のリビングのソファに座っていた。向かい側のソファには、鍊矢が座っている。

フェイトとアルフは高町家に居る。ライダーがらみの話は、血生臭いモノもあるためライダーでない者には出来るだけ聞かせたくないのだ。

「お前ら、最近また行方不明事件が起きてるのは知ってるな？」

サカキとソラは頷く。

鍊矢の言う通り、最近また行方不明事件が発生している。以前の事件のように灰はなく、また、行方不明者に共通点がなく、捜査が滞っていると、ニュースで流れていた。

「デインゴに頼んで、警察のデータベースにハッキングしたんだが、事件の被害者が最後に目撃された場所の近くには、必ず“鏡”がある」

「つまり、魔化魍やオルフェイス」

「サカキ様、オルフェノクです」

「……………そのオルフェノクみたいなのがまた暴れてると？」

「ああ、しかも、俺のリユウガと同じ龍騎タイプのライダーか、ミラーモンスターか……………とにかく面倒だ」

それを聞いて、サカキは溜め息を吐き、鍊矢の最後のセリフに同意する。

「確かに面倒だな。で、俺達にどうしろと？」

鏡の中……………ミラーワールドだったか？ そこに行けるのは、その龍騎タイプのライダーだけなんだろう？ 俺とソラは無理だぞ？」

「それに、今キバットは……………」

そう、ブレバットは今、風邪を拗らせ寝込んでいるため、ソラはキバに変身出来ないのだ。

それ以前に、逆鬼とキバはミラーワールドに入れない。

無論、その対策を準備していない錬矢ではない。

「その点は問題ない。ほれ」

そう言って、錬矢はテーブルにある物を置いた。

それは、錬矢が持つリュウガのカードデッキと同じ、それぞれ蝙蝠とゴリラの紋章が入った二つのカードデッキだった。

「コイツは？」

「これは『仮面ライダーナイト』と、『仮面ライダーパワード』のカードデッキ。お前達用に用意した、特注品だ」

「壊すなよ？」と言い、ソラに蝙蝠の紋章のカードデッキ
イトのカードデッキ、サカキにゴリラの紋章のカードデッキ
パ ナ

ワードのカードデッキを渡し、自身もリュウガのカードデッキを取り出し目で聞く。今から行けるよな？ と。

それに、サカキは不敵に返す。

「当たり前だ。徹夜なんて魔化魍相手に日常茶飯事。それに、コイツ（パワード）を試したい」

「サカキ様が行くのでしたら、それに付き従うまでです」

新しい力を使いたいという欲望と、惚れた相手と一緒にいたいという欲望に、鍊矢は体のメダル反応しつつ、立ち上がり、リビングに置いてある鏡にカードデッキを掲げる。

サカキとソラも同様にカードデッキを鏡に向かい掲げ、三人の腰にVバックルが装着された

「変身っ！！」

カードデッキをVバックルの溝に装填し、オーバーラップと共に幾つかのシルエットが三人に重なり、

暗黒龍騎士リユウガ

闇の翼の騎士ナイト

剛腕の豪騎士パワード

に変身し、三人のライダーは鏡の中に飛び込んだ。

ミラーワールド。

それは、とある世界のシスコンの暴走で生まれ、それ以来各世界に存在するようになった、鏡の世界である。

ミラーワールドは鏡の世界とだけあって、そこは通常世界と全てが左右逆。ただし、ミラーワールドに入った人間やライダー、ミラーモンスターは逆にはならない。

そのミラーワールドに三人のライダーが歩いていた。勿論、パワー、ナイト、リュウガである。

ナイトは正しく騎士の名の通り、紺色のスーツに銀色の軽装の鎧とシンプルで、蝙蝠を模した仮面。左腰には蝙蝠の印象が入った剣型の召喚機【翼召剣ダークバイザー】を装備している。

対してパワーは、黒のスーツに重厚な『サゴーズ』に『アックスフォーム』のフロントアーマーを組み合わせた鎧。仮面には鶏冠とひかが付いている。その名の通り、パワーと防御に特化したライダーだ。

「……………しかし、奇っ怪な所だなあ」

「そうですね。……………全てが左右逆の世界」

パワーの言葉に、ナイトが同意する。

今歩いているのは、夜の海鳴の街であるが人の気配は全くなく、看板などの文字も左右逆で、慣れているはずの街が、違う街に見える。

「おいおい、見学もいいが、やる事忘れるなよ？」

「はい」

「フアブリーズ」

一応、注意するリュウガだが、ナイトはともかくパワードはやる気が無い。探すのはお前やって、戦うのは俺にやらせるという感じだ。

リュウガはそれに構う事なく説明を始めた。

「いいか？ ミラーワールドじゃいつもと違って活動に時間制限がある。それを過ぎたら体が崩壊し始めるから、近場の鏡かガラス・・・とにかく姿を映す物に飛び込め。
あと、これだ」

遠足の引率気分のリュウガは、何処からか真紅と蒼の二つの分厚い携帯電話　スタッグフォンを二人に渡す。

「これは？」

「スタッグフォン。特別製だ。何か見つけたらそいつで連絡しろよ？」

よし、解散」

《ADVENT》

『グオオオオオオッ！！』

リュウガは早々にドラグブラッカーを召喚し、その背中に飛び乗りそのまま飛びさってしまう。

「……………行ってしまいましたね」

「そだな……………」

「どうします?」

「とりあえず、言われた通り探してみるか。別々に探した方が効率いいだろ」

「はい」

残されたパスワードとナイトは、二手に別れる事にし、ナイトは契約モンスターである『闇の翼ダークウイング』を呼び出し背中に合体すると、一度パスワードに頭を下げてから夜空へ飛翔していった。

そしてパワードは、地道に歩いて搜索を開始する。ここまで来る間、リュウガからレクチャーを受け、パワードはリュウガのように契約モンスターに乗ったり、ナイトのように合体したりして飛べない事が分かっている為だ。

因みに、ライドシューターは変身者であるサカキがバイクの運転方法を知らないため、ダメだった。

「……………あ、ディスクアニマル持ってくれば楽しじゃね？ 探すの」

そんな今更な事を言いつつ、パワードは歩いて行った。

歩いて数分。パスワードは、ミラーワールドの中の学校に来ていた。

「やっぱ左右逆なんだなあ。……………やべ、何か気持ち悪くな
った」

逆の文字を頑張って読んだ為か、口に手を添えるパスワード。

瞬間、背後に裏拳を叩き込んだ。

ガンツと音と共に、裏拳は何か止められた。

「……………なんだ、お前は」

「……………」

そこに居たのは、紫の蛇。

紫の蛇を思わせる鎧に腰のバックルには、蛇の紋章の紫のカード
デッキ。狂気の蛇『仮面ライダー王蛇』である。

パワードの裏拳を、王蛇が召喚機【牙召杖ベノバイザー】で受け止めたのだ。

パワードは何も言わない王蛇から一旦距離を取る。すると、そこで初めて王蛇が仮面で隠れた口を開いた。

「イライラするんだよ……。俺を楽しませろ……。」

そう言うやいなや、王蛇はベノバイザーを振り回し襲い掛かって来る。素手で受け止めるのは無理と判断したパワードは、召喚機【鉄召斧デットリーバイザー】で受け流す。

王蛇は攻撃力の低い召喚機で攻撃するのを止め、カードデッキからカードを抜きベノバイザーにベントインする。

《SWORD VENT》

「おらアッ……！」

電子音と共に刀身がドリルのように捻れた突撃剣【ベノサーベル】が現れ、王蛇はベノサーベルを持つとそれをパワードに叩きつけよ

うと振るう。

パスワードはデットリーバイザーで受け止め、鏢迫り合いをしながら王蛇に詰め寄る。

「お前………。一体何なんだ………?!?」

「お前、もつと俺を楽しませろ………!!」

パスワードの問い掛けに答えず、自身の欲望に忠実に動く王蛇。パスワードに蹴りを入れ、鏢迫り合いから解放される。

(仕方ねえ………)

数歩後退し、パスワードは内心そう呟くと、再び接近し上段から降り下ろされるベノサーベルを避けようとせず、自身の体で受け止める。そしてベノサーベルを左手でしっかりと掴み、片手でデットリーバイザーを振った。

「ふんっ!!」

「ッ!？」

思わぬ反撃に王蛇はなんの対応出来ずに強力な一撃を喰らい、吹き飛ばされる。さらにその際、ベノサーベルを手放してしまう。

これがパワードの戦い方。攻撃を避けず、受け止め、一撃を叩き込むのだ。

吹き飛ばされた王蛇は立ち上がると新たなカードを、ベノバイザーにベントインした。

「もっとだ………。もっと楽しませろ………!!」

《STRIKE VENT》

電子音と共に、王蛇の右腕に装着されたのは王蛇の契約モンスターであるベノスニーカーの頭部を模した、「ベノクロー」だ。

王蛇はベノクローを装備した右腕を引き、パンチングモーションに入る。ベノクローの口からは、毒々しい液体が溢れ出していた。その時、

《STRIKE VENT》

「ッ!？」

王蛇とは別の電子音が聞こえ、パウードは即座にしゃがむ。その直後、後方から黒い炎の放流がパウードの頭上を通過した。

王蛇は構わず右腕を突きだし、ベノクローから毒の放流を発射。炎とぶつかり、爆発を起こす。

パウードは後ろを見ると、そこにはドラグクローを装備したリュウガと、こちらに急いで駆け寄ってくるナイトがいた。

「サカキ様、大丈夫ですかっ？」

「ソラ………それに錬矢っ！ 危ねえだろっ!!！」

「バカ、ああしねえと防げなかったろ。つか、連絡しろって言うたろっが」

声を荒上げるパウードに、リュウガは冷やかに返し、視線を明らかに苛立ち首を回している王蛇に向けていた。

「よくも邪魔してくれたなあ……?」

「ああ、悪かったな。そろそろ時間切れなんでな」

リュウガの言う通り、パスワード、ナイト、リュウガの体が粒子化を初めており、王蛇も同じ頃に入ったのか、粒子化が初めまっていた。

王蛇は舌打ちをし、近くの窓に歩き、いざ入ろうとした時に一度止まり、パスワード達を見る。

「お前、名前は？」

「………仮面ライダーパスワード」

「仮面ライダー？ まあいい。パスワード、もう一度だ」

そう言い、王蛇は窓に飛び込む。

これが、狂気の蛇との最初の邂逅であった。

三十五ノ巻に続く

おまけ『到着が速かった訳』

ミラーワールドから出ての事……………。

「……………なあ、ソラ」

「何ですか、錬矢様？」

「いくら何でも……………離れた場所から見てるのは、ストーカ
ーだと思っぞぞ?」

「……………ナ、何ノ事デシヨウ?」

「いや、ダークウイングがな」

『キイ』

『グオオ』

因みに、錬矢は強い欲望を感じたから、だそつだ。

続
く

三十四ノ巻『鏡の世界ノ狂気の蛇』（後書き）

王蛇の初登場、サカキのパワード、如何だったでしょうか？

パワードについては後に載せる設定にて。王蛇オリジナルカード【ベノクロー】についてはです。

【ベノクロー】

ベノスネーカーの頭部の形を象った手甲。王蛇の右腕に装備され、腕をすっぽり覆う。

龍騎・リュウガのドラグクローと同じモーションで毒の放流を発生する。この毒は、致死性の猛毒でありモノを溶かす溶解液でもある。

こんな感じに、王蛇にはオリジナルカードを持たせませぬ。また、ライアとガイの【コピーイベント】や【コンファインメント】も……

では、次回。

三十五ノ巻『鏡の世界ノ犯人は鏡』（前書き）

仮面ライダー逆鬼、前回までの三つの出来事！

一つ、サカキは黒服達の対応に悩む！

二つ、サカキとソラは仮面ライダーパスワード・ナイトに変身！

三つ、ミラーワールドで、仮面ライダー王蛇と接触した！！

三十五ノ巻 『鏡の世界ノ犯人は鏡』

とあるマンションの一室。窓から、狂気の蛇・・・・・・・・王蛇が飛び出し、部屋の中に着地した。

「ああ・・・・・・・・。パワード、あいつなら、俺のイライラを解消してくれるかもなあ・・・・・・・・」

首を一回し、バックルからカードデッキを引き抜く。すると、王蛇の姿が変わり、茶髪の無造作ヘア、刃物のような鋭い少年になる。

『シャアアアアア』

「ア？ ああ、飯か」

少年は、スーパーの袋からタツパに入ったステーキ肉を三つ取り出し、ベノスネーカーが映し出されている窓に頼り投げる。

ステーキ肉は窓の中に入り、ベノスネーカー、メタルグラス、エビルダイバーに届けられる。三体のミラーモンスターは……………
丁寧なタツパからステーキ肉を取り出してから食べ始めた。

丁度その頃、荒木家のリビングに、三人のライダー　パワー、ナイト、リュウガが床に着地。直ぐにカードデッキをバックルから引き抜き、変身を解いた。

「……………ふう」

そして一足先に、サカキはソファーに深く座りため息を吐く。

続いて、鍊矢、サカキの隣にソラが座った。

「だいぶ手こずったみたいだな」

「まあな」

鍊矢の間に、サカキは短く答える。

それは勿論、先程の王蛇との戦い。

ミラーワールドに入った直後は、新しい力に気分が高ぶっていたが、冷静に考えるとパワーの能力をまったく聞いていなかった。

未知の力程、恐ろしいモノはない。それが分からない程サカキは若くない。その為パワーの特徴　パワーと防御　が分かるまで、積極的に攻められなかったのだ。

故に、使ってみなければ効果が分からないカードも使えなかった。

因みに、直ぐ契約モンスター召喚のカード使ったソラは……
・表には出していないが、ソラも舞い上がっていたのだった。

「で、あの王蛇はどうだった？」

錬矢はサカキの王蛇の評価を聞く。

サカキは少し考え、思った事を口にした。

「……悪くない。寧ろ根っからの戦闘向きだろ。しかも、天才のな」

「その根拠は？」

「まず、攻撃に戸惑いが無い。相手を潰すのが第一に考えてんだろ
う。」

「ありゃかなり場慣れ……いや、ケンカ慣れか？ 多分一度も負けた事がないんじゃないか？」

素直に評価を言う。しかし、「だが……」と続ける。

「それでもケンカまでの話だ。実際の命懸けの戦いじゃ、まだこっ
ちが上だ。次は勝つ」

そう言い切るサカキに、錬矢はニヤリと笑う。そこで、ソラが話に入った。

「ところで、例の行方不明事件の犯人は、あの蛇のようなライダー・
……王蛇なのでしょうか？」

「……あぁっ!!」

「……忘れてましたね？」

忘れていたが、そもそも行方不明事件の犯人を探しにミラーワールドに行ったのだ。という事は、王蛇が犯人なのか？

錬矢曰く、王蛇なら十分あり得るが、蟹なら確定だったのに、との事。サカキとソラは意味が分からず、首を傾げるしかなかった。

「動機はイライラしたからか？ だって王蛇だし」

「いや、そんな理由か？」

「それがあり得るのよ。王蛇だと」

錬矢の中のイメージではそうらしく、サカキとソラはやっぱり首を傾げる。

「ま、確かにどんな奴が王蛇に変身してるか分からないしな、俺の方で調べてみるわ。」

あと、お前らどうする?」

「どうするって?」

話を切り上げた錬矢にそう言われ、サカキは意味が分からず聞き返す。ソラも同意見だ。

それに対し錬矢は、リビングの壁に掛けてある時計を指差した。

「あれ」

「……………泊まらせて下さい」

サカキとソラは、まったく同じタイミングで頭を下げた。

時刻は午後10時。自宅には遅くなると連絡していない。

今帰っても、家主の説教が待っているので帰りたくないのだ。

因みにフェイトとアルフは、高町家に泊まると、鍊矢のオーガフオンにメールが入っていた。

鍊矢は「やつぱりな」と呟くと、オーガフォンを取り出し八神家とハラオウン家に連絡する。

数分、話をすると、鍊矢は二人を泊める事で電話を切る。内容は……サカキとソラの顔が青くなつた事で察してほしい。

「そ、それより、パワードのカードを教えてください。な、ソラっ!？」

「は、はいっ! そうですね、サカキ様っ!？」

誤魔化すためか、慌てて話題を変えるサカキとソラ。

鍊矢はそれをほくそ笑みつつ、それに乗っかる事にした。

「そうだな、ちょうど明日は土曜で休みだし、もっかいミラーワールドに行くか」

そう言い、錬矢はニヤニヤしながらリュウガのカードデッキを持ち立ち上がる。こうなった時、錬矢に頭が上がらない。

サカキとソラもそれぞれのカードデッキを持ち、リビングに置いてある鏡に向かって構えた。

「「「変身っ！」「」「」

「な、何なんだっんだあいつらは……。畜生、あんなのが居たら……。くくくっ、そうだ。消せばいいんだ、今までみたいに……。！」

《MIRROR!》

そして、一週間後。

王蛇のカードデッキを所持する少年は、マンションの自宅で、いつものようにソファーに横になっていた。すると……。

『シャアアアアアアツ!!』

ベノスネーカーの、“何か”に対して威嚇する声が聞こえ、少年は身を起こし部屋に置いていた鏡を見る。ベノスネーカーは、大概

その鏡に映っているからだ。

だが、そこに居たのはベノスニーカーではなく、暗黒の龍騎士。パワードとの戦いを邪魔した、リュウガであった。

窓ガラスには、ベノスニーカーとドラグブロッカーが互いに睨みあい、唸り声を上げている。

勿論、少年は邪魔された時の事を覚えており、直ぐ様リュウガに噛みつく。

「お前、あの時の……！！」

『よう、一週間ぶりだな』

対するリュウガは、涼しい声で挨拶する。

あれから一週間。少年はパワードと再戦できず、“イライラ”が最高潮まで達している。そこにリュウガの軽い声が逆撫でし、“イライラ”は限界を越え、カードデッキを構える。

「なんだア……お前が代わりに相手してくれるのかア……！！？」

『まあ待て。こつちにも色々準備があつてな。…………その準備が終わつたから、呼びに来たのさ』

「ほオ……………」

リュウガの言葉に、口がニヤリとつり上がる。自分の欲望が……………
……パワードとの再戦ができるのだ。

リュウガは少年の反応を見て、仮面の下で同じくニヤリと笑う。

『場所は前と同じ……………聖祥大附属小学校。時間は今日の午後4時だ。』

「じゃっ、待ってるぜ?」

そう言い、リュウガは鏡から姿を消す。ドラグブロッカーも、主人の後を追い、姿を消していた。

「くくくく……………」

「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤッ!」

そして、部屋には、狂気の笑いが響いた……………。

午後4時・聖祥大附属小学校校門前。

そこにサカキ、ソラ、錬矢の三人がもうすぐ来るであろう人物を待っていた。

そして、その人物……………狂気の蛇に変身する少年が三人の前に現れた。

こうして、変身前に会うのは初めてだ。だが、サカキとソラは直ぐに、少年の異常性に気が付いた。

それは、少年の瞳。

刃物のように鋭いその瞳は、通常の人生……特に少年のように、産まれてまだ10年しか経っていない子どもには異常だった。

錬矢はそれに構わず、少年に話掛けたい。

「お前が浅倉 淳一……王蛇だな？」

そしてリュウガのカードデッキを見せ、自分達が関係者である証明にする。

少年 淳一は一瞬だけ錬矢を見て、すぐにその鋭い瞳でサカキを見据える。

ソラはその瞳に怯んだが、サカキは負けじと見据え、パスワードのカードデッキを見せ自身の証明とした。

それを見て淳一は、ニヤリと口を吊り上げ、狂気的笑みを浮かべた。

「能書きはいい……。さっさと戦うぜ」

そう言い、淳一はカードデッキを取り出し足早に昇降口に向かい、サカキも無言でついて行く。

二人から少し距離を取りながら、ソラと錬矢もついて行く。

そして、昇降口の扉のガラスにカードデッキを掲げ、二人の腰にVバックルが装着された。

「あア……………変身っ!!」

「変身っ!!」

淳一は右手を前に突きだしてから素早く胸元に持っていき、脱力したようにカードデッキをVバックルに装填。オーバーラップと共に王蛇の姿となる。

サカキは手のひらを鏡を向け両手をクロスし、Vバックルに装填。パワーに変身する。

王蛇は首を一回りさせ、パワーは両手を打ち合わせミラーワールドに突入する。

「サカキ様、どうかご無事で……………」

二人のライダーが鏡に入ったのを見送り、ソラは呟いた。

ミラーワールドのグラウンドにて、金属同士　デットリーバイ
ザーとベノサーベルがぶつかる音が響く。

「ぶんっ！ー！」

両手で持ったデットリーバイザーを、上段から降り下ろす。

王蛇は回転し、それを避け回転の勢いを利用してベノサーベルの

柄でパワードの横顔を狙う。

パワードはデットリーバイザーから右手を放し、右手の甲で防ぐ。そして、片手でデットリーバイザーを振り王蛇の背中を狙う。が、王蛇は咄嗟にしゃがみその一撃を避けた。

「はアッ!!--」

デットリーバイザーを振った事により、がら空きになったパワードの腹に、王蛇はベノサーベルを叩きつけた。

「ぐっ………! ぬっ!!--」

「ッ!!--」

「なあっ!!--」

腹部に衝撃が走り、少し怯むが耐えきる。そうしてベノサーベルを右手でしっかりと掴み、抑える。

それに王蛇が驚くが、パワードはデットリーバイザー………を持つたまま、左の裏拳を王蛇の顔に叩き込む。距離が近いため、

デットリーバイザーでは十分な威力が出せないからだ。

強力な一撃を喰らった王蛇は吹き飛ばすが、すぐに立ち上がりベノバイザーにアドベントカードを入れる。それは、蛇の頭部の模したガントレットが描かれたカードだ。

「楽しいなあ………もつと楽しませろ………!!」

《STRIKE VENT》

《SWING VENT》

王蛇がベントインしたのを見て、パワードも直ぐ様アドベントカードをベントインする。

王蛇の右腕にはベノクロウが装備され、対するパワードには先が船の錨状の鎖付きアンカー………【デットリーアンカー】が持たれた。

パワードはデットリーアンカーを振り回し、投擲する。

投擲されたデットリーアンカーの先は突き出されたベノクロウに見事に絡まり、その動きを封じ込む。勿論、これで終わりではない。

「おりゃあああああああつ!！」

パワーはベノクローが絡んだまま、背負い投げの要領でデットリーアンカーを振る。

そうする事により、デットリーアンカーが絡んでいるベノクローを装備している王蛇も、それに引っ張られ投げられた。

「がつ!？」

投げられた王蛇は、弧を描きながら先にあった校舎の窓を破壊し、校舎内に落ちる。その際にベノクローは外れ、パワーが遠くに投げ捨てた。

「……………があアああアアツ!！」

《STRIKE VENT》

王蛇は雄叫びを上げ、校舎から飛び出ると新しいカードをベントインする。装備されたのは、メタルガラスの頭部を模した「メタル

ホーン】である。

パワーも対抗するため、同様のカードを使用した。

《STRIKE VENT》

「アアアアアアアアアアアアツ！！！」

「おりゃあああああああああつ！！！」

王蛇はメタルホーンで、パワーは両腕に装備した【デットリーナックル】で相手に殴り掛かる。

火花を散らしながら、重厚な金属音がミラーワールドに響く。

「ふんっ、ぬあつ！！！」

「あアツ、らアツ！！！」

パワーが殴れば王蛇も殴り返し、またパワーが殴る。最初は避けるなどしていたが、途中から避けないで殴ったら殴り返すを繰り返していた。

「ハッ！！」

デットリリーナツクルとメタルホーンの一撃が胸部に当たり、双方とも後ろに飛ばされる。

王蛇はメタルホーンを捨て、二枚のカードを続けてベントインした。

《SWORD VENT》

《ADVENT》

電子音と共に、王蛇には逆手持ちの双剣【エビルセイバー】が握られ、背後にベノスネーカーが現れパワードに襲い掛かった。

「ちっ！！」

舌打ちしながらパワーは襲い掛かるベノスネーカーの牙を避け、続けて来る王蛇の斬撃を前転でかわす。そして、カードをバイザーにベントインした。

《ADVENT》

『シャアアアアアアアアッ!』

だが、させないとばかりにベノスネーカーが再び襲い掛かる。その時、校舎の屋上から何かが飛び降り、ベノスネーカーの背中に一撃を叩き込む。

それは、黒と鉄色の二足歩行のゴリラ………パワーの契約モンスター『デットリーアイアン』だ。

ベノスネーカーは標的をパワーからデットリーアイアンに変え、二体の怪獣の取っ組み合いが始まる。

そして、主である二人のライダーも、己の得物を相手に振るった。

『シャアアアアアアアアアアッ!』

『ゴオオオオオオオオオオッ!』

「らあああああああつ！！」

「おおおおおおおつ！！」

二体のミラーモンスターが暴れ、斬撃と金槌が鉄を打つような音が響き、火花が散る。

両者共に死力尽くした戦い。いや闘いだ。

だがそんな時、闘いを邪魔する輩が現れた。

「ハアアアアアアアツ！！」

まるで鏡が集まったような、独特な外見の怪人　ミラードーパントが、パスワードと王蛇に襲い掛かってきたのだ。

実は、今までの行方不明事件はこのミラードーパントが犯人であり、最初は自分をクビにした会社の奴らへの復讐が、『ガイアメモリ』の力にとり憑かれ、無差別犯行になったのだ。

それで自分の独壇場だったミラーワールドにパスワードや王蛇達が現れ、邪魔になると判断したミラードーパントは、再びミラーワールドで戦うのを待ち伏せし、始末しようと考えた。だが……。

《SWING VENT》

「らアッ!」

「がふっ!」

飛び上がり、襲い掛かった時、図ったように二人のライダーは離れ、ミラードーパントは二人のライダーに挟まれるような形で着地。そこに王蛇の【エビルウィップ】に叩かれ……。

《SHOOT VENT》

「ふんっ!」

「ぎゃあああああああっ!」

パワードの背面に装備された【デットリーキャノン】が火を吹き、直撃。

その衝撃でミラードーパントは吹っ飛び、パワードと王蛇がミラーワールドに突入した昇降口のガラスに入り、現実世界に戻ってし

まった。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・』

パワードと王蛇は、ミラードーパントに気づかずに攻撃したので、吹っ飛んだミラードーパントを見て、硬直。デットリーアイアンとベノスネーカーも、取っ組み合いをしたまま硬直していた。

「・・・・・・・・・・なして？」

パワードの音が、やけに響いた。

時間は少し戻り、昇降口前。

その窓ガラスから、ソラと鍊矢がミラーワールドを覗いていた。

闘いは一進一退。手に汗握るものだ。だが、そんな時……

。

「ソラさん！ 鍊矢さん！」

「いつ!?!」

「なのは様っ!?!」

突然聞き知った声に呼ばれ、鍊矢とソラはその声の主に驚く。

慌ててそちらを見ると、手を振って近寄ってくるなのは、フェイト、ノエルに車椅子を押されながらはやてと、アリサにすずか、更に香里と香流もいる。

「ちよつ、何でいるのっ!？」

「みんなですずかちゃんの家で遊んでいて、それでサカキ君はどうしてるかなーって。

それでフェイトちゃんから、ソラさんと鍊矢さんと一緒に学校に行ったって聞いたので、来ちゃいました」

満点の笑顔で言うのはだが、他の面々は苦笑顔。

フェイトやはやて達は、サカキ、ソラ、鍊矢の三人が一緒の時は大概ライダー柄みだと予想していたし、御坂双子は何か用事があるのだろうと思っていたため、こっちに来る事は消極的だった。

なのははこう………空気が読めない子なのだ。

鍊矢がどうしようか悩んだ、まさにその時である。

「ぎゃあああああああつ!？」

黒焦げになったミラードーパントが、ミラーワールドから弾き出され、鍊矢達の前に転がったのだ。

突然現れたミラードーパントに、全員が一時的に思考が止まる。

「はっ……ちっ!!」

ミラードーパントは立ち上がると、鍊矢とソラ、なのは達を見比べ、なのは達に向かって走り出す。人質にしようと考えたのだろう。

鍊矢とソラは、一歩遅れて動きですが、変身するのに1アクション必要なため、間に合わない。

はやて、なのは、フェイトは突然の事に、魔法を使うという所まで思考が働かなかった。

ノエルもはやて達の前に出ようとするが、ミラードーパントの方が早い。

そして、ミラードーパントの手が届こうとした時、

《 》
《 》
《 》

どこからともかく二体のバッタ型のメカが現れ、ミラードーパントに体当たりをしたのだ。

それにより、ミラードーパントは体制が崩れ、怯む。

「ホッパーゼクター!?!」

流石の錬矢も、そのバツタ型のメカ　ホッパーゼクターを見て
驚く。

二体のホッパーゼクターは何度も跳躍し……資格者である香里と香流の手に収まった。二人の腰には、いつの間にか【ゼクトバツクル】が巻かれている。

全員が驚く中、香里と香流はゼクトバツクルを展開。それよって出来たテーブルにゼクターをセットした。

「変身……………」

《Hensin》

電子音が発せられ、バツクルを中心に六角形のパターンに包まれ、成人男性と同様の背丈に変わる。

《Change Kick Hopper》

《Change Punch Hopper》

香里は緑を基調とし、左足にアンカージャッキを装備したバツタをモチーフとした『仮面ライダーキックホッパー』に。

香流は灰色を基調とし、右腕にアンカージャッキを装備した『仮面ライダーパンチホッパー』に変身した。

「なっ、なんだお前はっ!?!」

新たに現れた二人のライダーに、ミラードーパントは困惑する。

その場に居た全員がミラードーパントと同様の視線を向けるが、KホッパーとPホッパーはそれに気にも止めず、ベルト横のスライドスイッチを押す。

「クロックアップ」

《Clock Up》

瞬間、KホッパーとPホッパーの姿が消えた。タキシオン粒子を全身に巡らせる事により超高速行動を可能にする、クロックアップだ。

クロックアップによって超高速行動が可能になったKホッパーとPホッパーは、ミラードーパントを蹴り、拳で滅多打ちにしていく。ミラードーパントは決して能力が低いわけではないが、流石にクロックアップには対処出来ない。

《Clock Over》

そうこうしている間にミラードーパントの鏡のような体は全身ヒビが入り、割れ鏡のようになっていく。もはや粗大ゴミだ。

「がっ………があ………」

「あらら、もう虫の息だな。まあ」

《DRAGON!!!》

「だからって手加減しないけどな」

《DRAGON!! Maximum-Drive》

「ドラゴンファンゲツ!!」

久々にラハブに変身した錬矢は、容赦なくミラードーパントに回し蹴りを喰らわせる。勿論、爆発しても大丈夫なよう、空中に蹴り上げた。

それにより、ミラードーパントは空中で爆発。砕けたガイアメモリと、ミラードーパントだった男が地面に落ちた。

「え？ 何このカオス？」

「……………」

さらにそこに、興が削がれたのか闘いを止めたパワーと王蛇もミラーワールドから戻って来る始末。

面倒になったぁ……………。

そう思い、ラハブは頭を掻くのであった。

「……………ガイアメモリの売買は上手くいったらしいな」

「ああ、“ ”。お前のお陰で、ライダー共に気付かれずにガイアメモリを運搬できた、感謝する」

「いって事よ。俺達は運命共同体だ。

全ては、“今度こそ勝つ悪の組織”のため、にだ」

「その通りだ。だが、まだ俺達自身は動くには早い……………もっとガイアメモリを流通させ、資金、そして駒を増やすんだ」

「ああ、分かっている。「ワールド」」

「ふふふふ……」

《WORLD!》

三十六ノ巻に続く

三十五ノ巻『鏡の世界ノ犯人は鏡』（後書き）

犯人はヤス、的な今回のタイトル。ただ、犯人はヤスって意味知らないんですけどね！！

淳一はちよつとやり過ぎたかな・・・？ 王蛇だから忘れてたけど、小学生なんだよな・・・。

ホッパーライダーに変身した香里と香流。というか、ホッパーに変身させるための双子設定。

では、次回。

キャラ・ライダー設定2 (前書き)

簡単な設定です。

キャラ・ライダー設定2

名前：星奈^{せいな}

容姿：ほぼなのはと同じだが、髪がショートカットで青い瞳でツリ上がっている。

デバイス：ルシフェリオン

概要

闇の書の防衛プログラムがなのはを元に生み出した、マテリアルの少女。

キバ・レオフォームと^{ホワイト}ワラルクに敗れた後、錬矢から連絡を受けたディンゴに保護され、リインフォースのデータを応用してサカキの新たなユニゾンデバイスとして生まれ変わった。命名はサカキ。

名前：ライラ

容姿：ほぼフェイトと同じだが、髪は青く毛先が藍色で、瞳はツリ上がり薄紫。

デバイス：バルニフィカス

概要

闇の書の防衛プログラムがフェイトを元に生み出した、マテリアルの少女。

リュウガサバイブに敗れた後、ディンゴに保護され星奈と同様にサカキのユニゾンデバイスとなった。名前の命名はサカキ。

名前：闇璃 あんり

容姿：ほぼはやてと同じだが、髪がグレーに近く毛先が黒。瞳がツリ上がっており翡翠色。

デバイス：エルシニアクロイツ、曇天の書

概要

闇の書の防衛プログラムがはやてを元に生み出した、マテリアルの少女。

逆鬼、リインフォースによるフルボッコ（キバ・エターナルフォームは状況について行けず傍観）により敗れた後、同じようにディンゴに保護され、星奈、ライラと同じようにサカキのユニゾンデバイスになった。命名はサカキ。

名前：東郷 とうきょう 志度 しど

年齢：30（生前）

容姿：肌が日本人のソウルイーターのシド・バレット（生前の）

概要

とあるしょうもない理由でオルフェノクになった男。

ある事件がキツカケで錬矢と出会い、友人へ。私立聖祥大附属小学校の教師で、なのは、フェイト、はやて、アリサがいる4年4組の担任である。

オルフェノク態はディアブロスオルフェノク。右腕の角竜の頭部の形をした腕が特徴。疾走態になれる。実力はラッキークローバー以上である。

名前：浅倉 淳一あしかわ じゅんいち

年齢：10

容姿：無造作な茶髪。サカキ以上に悪い目つき。

概要

サカキのクラスメイト。IQ200の天才だが、天才故の歪みで今の生活に不満を持っており常にイライラしている。そのためケンカや無断欠席が絶えない。

王蛇のカードデッキを手に入れ、新たな刺激を得た。

サカキ、香里、香流の四人で狂気四重奏マッドカルテットと不良グループに有名である。

あとマヨラー。

名前：御坂^{みさか} 香里^{かおり}

年齢：10

容姿：薄茶で背中までのストレートヘア。水色の瞳。香流と瓜二つ。

概要

サカキのクラスメイト。常に双子の弟である香流と行動し、分厚いブーツを使った足技が得意。

サカキ、淳一、香流の四人で^{マッドカルテット}狂気四重奏と不良グループに有名である。

名前：御坂^{みさか} 香流^{かおり}

容姿：薄茶の長い髪を首の後ろで纏めている。水色の瞳。香里と瓜二つ。

概要

サカキのクラスメイト。常に双子の姉である香里と行動し、ボクシングスタイルのような拳技が得意。

サカキ、淳一、香里の四人で^{マッドカルテット}狂気四重奏と不良グループに有名である。

仮面ライダー逆鬼・紅蓮

変身者：サカキ、星奈

特殊技

【紅蓮拳】：拳に炎を灯し殴る技。通常形態の逆鬼と同名の技だが、威力は段違い。最大出力ではアギト・バーニングフォームのバーニングライダーパンチと互角。

【紅蓮脚】：脚に炎を灯し蹴る技。通常形態の逆鬼と（以下同上）。

概要

逆鬼が星奈とユニゾンした姿。

仮面が口元が銀色のゴーグル型に変化し、全身に夜天とは別の真紅の鎧を纏っており、両腕に龍の頭部の形をした籠手・【ルシファ―ナツクル】を装備している。霊剣・紅は矛先が船の碇のような形の大槍に変化する。

夜天が全体の能力の強化に対し、紅蓮は攻撃力が強化され星奈の炎熱変換能力でさらに攻撃力が上がっている。

元々炎属性で攻撃型のライダーである逆鬼とは最も相性が良い形態でもある。

仮面ライダー逆鬼・迅雷

変身者：サカキ、ライラ

特殊技

【雷電脚】：雷を纏った足で蹴る技。

概要

逆鬼がライラとユニゾンした姿。

仮面が口元が銀色のゴーグル型に変化し、仮面の縁取り、腕などの赤が蒼に変わる。胸部、両肩、両脚に蒼い装甲が追加され、首には蒼いマフラーを付けている。霊剣・紅は鎧の無い小太刀に変化する。

攻撃力は通常形態よりも劣るが、スピードは全形態の中で一番でありカブトライダーズのクロックアップやファイズ・アクセルフォームに匹敵し、小太刀霊剣・紅、具足・【バルフィニレッグ】を装備した両脚での多数の脚技で戦う。また、ライラの雷撃変換能力の恩恵で攻撃に雷撃が付与される。ただ、スピードを得るため防御力が下がっている。

仮面ライダー逆鬼・虚空

変身者：サカキ、閻璃

特殊技

【魔女狩り】：大鎌霊剣・紅で物体と魔力を切る技。

概要

逆鬼と閻璃がユニゾンした姿。

仮面が口元が銀色のゴーグル型に変化し、仮面の縁取り、腕が赤から紫に変わる。死神を思わせるボロボロのローブと鎖、鎧を纏っている。霊剣・紅は大鎌に変化する。

纏っているローブ・【エルシニアローブ】は全身を包む事で姿を隠す事が出来、盾としても使用可能、また形状を悪魔の翼に変える

事で飛行可能である。鎖・【エルシニアチェーン】は伸縮自在で、それを利用して相手を拘束する事も出来る。また、アンチマギックワールドAMFと同じ効果があるため、この鎖で縛られた魔導師は脱出が不可能。

共通事項

夜天・紅蓮・迅雷・虚空はそれぞれ得意属性を持ち、夜天は風、紅蓮は炎、迅雷は雷、虚空は氷です。

特殊技などを使う際、ユニゾンしているユニゾンデバイスが『烈風嵐装・烈火炎装・烈雷電装・烈氷凍装』と唱えると任意の部分・または全身に得意属性を纏う。

逆鬼のユニゾン形態は全て響鬼・装甲を素にしているため、響鬼・装甲をイメージしていただければいいかと・・・。

998

仮面ライダーパワー

召喚機：鉄召斧デットリーバイザー

変身者：サカキ

概要

サカキが変身した龍騎系ライダー。ゴリラ型のミラーモンスター

『鉄剛猿デットリーアイアン』と契約しており、その名の通りパワーと防御に特化している。

『サゴーズ』と『アックスフォーム』のフロントアーマーを組み合わせた重厚な鎧に、鶏冠うねかが付いた仮面。

ファイナルベントはデットリーアイアンが対象を投げ、パワーが殴り返し、デットリーアイアンも殴り返し、数回それを続けた後にパワーが対象を地面に叩き付ける『デットリープレス』。

ADVENT：デットリーアイアンの召喚

STRIKE VENT：デットリーナックルの装備

SHOOT VENT：デットリーキャノンの装備

SWING VENT：デットリーアンカーの装備

BLAST VENT：デットリーアイアンがデットリービートを発動

FINAL VENT：デットリープレスの発動

王蛇オリジナルアドベントカード

STRIKE VENT：ベノクロー

ベノスネーカーの頭部の形をした手甲。致死性・溶解液の猛毒の放流を発射する。

STRIKE VENT：メタルレッグ

メタルガラスの脚を模した具足。蹴りの威力が上がる反面、重いため動きが鈍くなる。

SWORD VENT：エビルセイバー

エビルダイバーの両ヒレを模した逆手持ちの双剣。

三十六ノ巻 『鏡の世界ノ鬼と悪魔の悩み』 (前書き)

仮面ライダー逆鬼！ これまでの三つの出来事！！

一つ！ サカキノ仮面ライダーパワーと淳一ノ仮面ライダー王蛇が激闘を演じる！！

二つ！ 二人のライダーの激闘にミラードーパントが乱入するが、簡単に退けられる！！

三つ！ 御坂双子がキックホッパー・パンチホッパーに変身、仮面ライダーラハブがミラードーパントをメモリブレイクした！！

三十六ノ巻 『鏡の世界／鬼と悪魔の悩み』

数週間前……香里と香流は、学校から下校の途中だった。

学校の用事で多少、帰るのが遅くなってしまったため、日は既に傾き、二人が歩いている道には人通りがない。

すると、二人の歩く先に卑屈な笑みを浮かべた高校生くらいの男が現れた。もしかしなくても不良だ。

その男とは別に、二人を囲むように複数の男達が現れる。

カツアゲが目的だろう。

人通りはなく、助けはない。そのためこの不良共は、路地裏などに連れて行く事なく堂々とカツアゲするつもりだ。

対して、香里と香流は怖がる事なく、不良達を呆れた目を向ける。
ゴミがいる、と。

こういう時のために香流はメリケンサックを持ち歩いているし、香里が履いているブーツは硬く、当たれば顎が碎けるだろう。

不良の一人が、二人に手を伸ばす。その時だ……。

カッン……カッン……と、足音が聞こえてきた。不良達と香

里と香流は足音のした方向を見る。

そこに居たのは、ボロボロのロングコートにブーツといった格好だが、ロングコートには肩から切り落とした袖なしにジャラジャラと鎖を巻き付けており、男の顔には傷がある。

男の異様な雰囲気、不良達は勿論、香里と香流も息を飲む。

そして、男は不良達の前に来るや。

トゴッ！

正面の不良に、蹴りを決めた。

それにより、不良はくの字に曲がり、吹っ飛ぶ。それを見た残りの不良達は、一瞬ポカンとしたが直ぐに顔を怒りで染め、男に襲い掛かった。

……一瞬だった。

香里と香流が居る前で、男は不良達を薙ぎ倒したのだ。しかも腕を使わず、両脚だけでだ。

不良は男を恐れ、逃げ出す。

香里と香流は一瞬の出来事に啞然とするが、男はズレたロングコ

トを直す。そして、二人と目が合った。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

男は何も言わない。二人は何も言えない。

暫くの静寂が支配したが、それを壊すモノが現れた。

突如、灰色のオーロラが現れ、オーロラが消えるとそこには緑色の虫のような怪人『ワーム』が五体、現れた。

男はワームを一瞥すると、腰に巻かれたベルトのバックルの上部のスイッチを押し、バックルが開いてテーブルとなった。

「・・・・・・・・ワームか」

《 ！ 》

男がそう言うと、何処からともかく飛蝗型のメカ ホッパーゼクターが現れ、男の手中に収まる。

男はゼクターをバツクルのテーブルにセットし、呟いた。

「変身……………」

《Hensin》

《Change Kick Hopper》

キックホッパーに変身し、ワームが襲い掛かる。

キックホッパーは大胆に、正面からワームに近づくと先頭のワームに、不良に放ったように蹴りを入れる。別のワームが襲い掛かるが、同じように蹴りで対処。

ハイ、ミドル、回し蹴り、後ろ回し蹴り。

多種多様の蹴りが、ワームの体力を削っていく。

キックホッパーはトドメを差すため、ホッパーゼクターの足を動かす上に向ける。

「ライダージャンプ」

《Rider Jump》

電子音の後、ホッパーゼクターから脚にエネルギーが流れ、キックホッパーは高々と飛び上がる。

そして、ゼクターの足を元の位置に戻す。

「ライダーキック」

《Rider Kick》

キックホッパーは左足を前に出し、一体のワームに落下。ワームの一体にライダーキックが決まると、左足に装備されているアンカージャッキが動きワームを撃つ。その反動でキックホッパーはワームから弾かれ、空中で身を捻り今度は別のワームにライダーキックを叩き込む。

そして、五体のワーム全てにライダーキックが決まり、ワームは爆発。緑の炎が立ち直ぐに消える。

キックホッパーはゼクターをバックルから引き抜き、変身を解くと、何事もなかったようにその場を立ち去ろうとした。だが。

《 ！ ！！ 》

「な、なに……………」

ホッパーゼクターが男の手を離れたとたん、あまりにも“非常識の世界”を見て思考が止まっていた香里と香流に近寄り、二人の周りを飛び回っていた。

さらには、もう一体ホッパーゼクターが現れ、同じように双子の周りを飛び回る。それは、嬉しそうに……………何かを見つけたように……………。

「そうか……………」

と、男は何かを悟ったように呟くと、双子に近づき腰に巻いていたベルトを外し、ロングコートの内側から同じベルトを取り出し二本のベルトを押し付けるように渡した。

突然の事に双子は戸惑う。

「俺と、相棒の“だった”物だ……………俺達にはもう必要な

い
「」

男はそれだけ言うと、歩きだしどこかに去っていった。

その場には、双子と二本のベルト。二体のゼクターが残された・
・
・
・

「それが、ホッパーゼクターを手に入れた経緯か……」

「はい」

鍊矢が聞くと、御坂双子は即答する。

その後、ミラードーパントだった男を簀巻きにしてゴミ捨て場に捨て、警察に匿名で連絡し、鍊矢はあの場に居た全員を引き連れ自宅に戻っていた。

王蛇 浅倉 淳一と御坂双子からライダーシステムの入手経路を聞く必要があったのと、何よりフェイト達に説明する必要もあったからだ。

御坂双子から話を聞き終えた鍊矢は、「そうか・・・」と言い今度はリビングの隅・・・そこに不機嫌そうに（実際不機嫌）座っている淳一に視線を向けた。

「で、お前はどなんんだ？」

「・・・・・・・・」

鍊矢の問い掛けに、淳一は答えない。直ぐに視線を反らし、そっぽを向いてしまう。

その淳一の反応に、イラついたアリサが噛みつく。

「アンタッ！ 無視しないで答えなさいよっ！！」

「ア、アリサちゃん」

さすががアリサを止める。それに、サカキ、錬矢、ソラのカードデッキを持ち、ミラーワールドが見える者は内心冷や汗を掻く。

何故なら、アリサが噛みついた瞬間ミラーワールドのベノスネーカー・メタルゲラス・エビルダイバーが彼女を襲おうとしていたからだ。

ドラグブラッカー・デットリーアイアン・ダークウイングがそれぞれ邪魔をしたので事なきを得たが、危ない所であった。

淳一は、ベノスネーカー達に指示を出した様子はない。つまり、ミラーモンスターが主を守るため、主に害なす者に襲った、という事だ。

ドラグブラッカー・デットリーアイアン・ダークウイングは錬矢がこの世界に連れて来たため“契約者を守る”という行動を取るが、ベノスネーカー達は違う。本来、契約者が命じた場合・食欲を満たす場合に人間を襲うミラーモンスターだが、これも世界の修正力だろうか。

錬矢は、「話したくないなら話さなくていい」と切り上げる。すると、なのはが口を開いた。

「……………ねえ、それ、渡してくれないかな？」

は？ と、その場に居た全員が首を傾げてしまふ。

なのはが言っている“それ”とは、ライダーシステムの事だ。なのははその場に流れた空気を読まず、言葉を続ける。

「だって、危ないよ。それに、戦う必要もない。うん、必要ないよ。だから」

「駄目だ」

なのはの言葉を、錬矢が遮る。

なのはは文句を言おうとしたが、その前に錬矢が口を開いた。

「それは本人が決める事だ。なのはちゃんが口出す事じゃない」

「でも」

「それを言うなら、俺はなのはちゃんの事にも口出しするぜ？」

そこまで言われ、なのはは黙るしかなかった。

言葉にはない。錬矢の雰囲気は、『黙ってる』と言っているからだ。

錬矢は「さて」と言い、全員顔を見る。

「何か、聞きたい事はあるか？」

「はい。あの鏡みたいな怪人はなんなんですか？」

拳手をしフエイトが質問する。

鏡みたいなの怪人、とはミラードーパントの事だ。香里と香流も、とりあえず襲ってきたのでボコったが、あれが何なのか聞きたかった。

「あれはドーパント。ガイアメモリを使って変身する怪人だ」

「ガイアメモリ？」

「ガイアメモリってのは、地球の一つの記憶を内包したメモリだ。

例えば……」

「そう言い、自身が持つガイアメモリ……ドラゴンメモリを見せる。」

「俺のドラゴンメモリには、『龍の記憶』が内包されてる。ガイアメモリを体に挿すと、内包してある記憶を読み込んで肉体が変化し、ドーパントになる。その際、内包してある記憶の能力が使える。さっきのやつは、ミラードーパント……つまり『鏡の記憶』を内包されたミラーメモリを使ってたって事だ」

「サカキ、淳一、なのは以外の全員が「なるほど……」と納得する。そこですすが、錬矢がガイアメモリを持っている事を疑問に思い質問する。」

「あの、錬矢さんは何でガイアメモリを持っているんですか？」

「あーそれは、ガイアメモリの副作用を最初に説明する必要があるな。」

「ガイアメモリは使用者に超人的な力を持たせるが、反面、強力な毒素で使用者の精神を犯して壊す。簡単に言えば麻薬とかと一緒に」

と、錬矢はガイアメモリと副作用を防ぐドライバーについて説明していくが、これ以上は割合とさせていただく。

ただ、サカキは後半から右から左へと聞き流していた。

「それで、ガイアメモリの破壊……メモリブレイクするにはガイアメモリじゃないと出来ないから、俺もガイアメモリを持つてる。分かった？」

「な、何とか……」

サカキ、淳一、なのは以外の全員が苦笑混じりでそう答える。

錬矢も、天才の淳一はともかく、流石に小学生の知識で理解しきれないと思ってるので、まあそうだと咳く……リビングの脇で腕立て伏せしているバカ鬼には冷たい目を向けたが。

「……あれ？　そういやなのはちゃんは……」

「ああ、煩いから意識刈り取った」

「何やってんのこのバカ鬼っ!？」

その後、時間ももう遅いので解散となった。

と言っても、淳一はガイアメモリの説明を聞いた後直ぐに出たのだが……。

そして帰り道、淳一は以前カツアゲした不良達に襲撃され……
・見事に返り討ちにしていた。

「が………が………」

「???!&」

「………」

細い、大人一人がやっと通れる程しかない路地で、数人の不良達
が、一人は苦悶の声を漏らし、一人は意味不明の声を上げ、また一
人は口から泡を出し気絶していた。

考えれば簡単だが、襲撃を受けた淳一はこの細い路地に移動した。
大人一人がやっと通れる程の幅しかないので、不良は一人ずつ動き
を制限されながらしか動けず淳一は子どももの体型を生かし素早く動
き……不良達の股間を蹴り上げたのだ。全力で。

淳一は、道の邪魔になっっている不良達を踏んで、帰路に戻った。

気分は、上機嫌だった。

退屈だった日々に、突然ベノスニーカー達が現れカードデッキを
渡された。最初は未知の力に、新しい刺激を得たが振るう相手がい
なかつたため、またイライラし始めていた。

だが、自分以外のライダーの存在を知り、力を向ける相手（怪人）
の存在も知った。

ようやくイライラが晴れる。

淳一は口の端を吊り上げ、笑みを浮かべる。

「ああ？　そういやアイツらどこ行った？」

と、カーブミラーがある場所まで来て気付いた。

いつもなら自分の周りを彷徨っている三体のミラーモンスターが、何処に行ったのかカーブミラーに映っていなかったのだ。

契約者の特権なのか、近くに居るなら気配がするのだが、それもない。

「……………まあいいか」

アイツらも勝手に動く事もあるか、と思い、そのまま歩いて行った。

一方、自宅に戻ったサカキは自室に籠り、畳の上に寝転んでいた。

サカキの部屋は他の部屋と同じくフローリングなのだが、サカキの趣味で部屋の大半に畳が敷かれている。

「はぁ……」

ため息が、虚しく響く。

サカキが考えているのは、ソラとの関係であった。

ソラの父親・アラシに婚約者にされて以来、どう伝わったのか八神家全員は勿論、ハラオウン家や高町家、最悪な事に荒木家にまで伝わり、全員から『ソラと付き合っている』と思われる。

サカキは見た目は確かに子どもだが、中身は36だ。いくら何でも、12歳であるソラをそういう風に見るのには抵抗がある。それに、ソラがどう思っているかという事もある。

戦国時代では、政で好きでもない相手と結婚するのは珍しくない。ただ、こういう事は必ず女が嫌な思いをする。サカキは、ソラに嫌な思いをさせたくないのだ。

「どうすっかなあ……」

サカキは上半身を起こし胡坐をかいて頭を捻り、考えるが良い考えが浮かばない。ここは手っ取り早く、ソラ本人にどう思っているか聞けばいいのだが……こういう場合、そこまで頭が回らないのが通例である。

誰かに相談するというのも手だが、以前ザフィーラに相談したら凄い勢いで謝られ、逆に申し訳ない気持ちになった。

「だからつってもなあ……シグナムは脳筋だしシヤマルは昼ドラのドロドロ知識しかないし、はやては狸だし……」

ヴィータ・リインフォース・閻璃・星奈には相談したら呆れた目で見られ、ライラに至っては論外。

と言うよりも、知り合いの子ども組は論外で、大人組はそこまで

親しい訳でもない………。以上の条件から、相談できそうなのは錬矢に絞られる。だが。

「アイツにだけは、相談したくない………!!」

絶対からかわれる。錬矢の性格からして、絶対にだ。

この後、一晩考えたが、いい考えは浮かばなかった。

「はぁ………」

サカキがため息を吐いた丁度同じ頃、鍊矢もまた、自宅のリビングでため息を吐いて悩んでいた。

あの鍊矢が悩んでいる。

鍊矢を知る者がこの光景を見たら、自身の目を疑い、気絶する程頭を打ち付けるだろう。

もう一度言おう。あの鍊矢が悩んでいるのだ。

「どっしょ……」

鍊矢が悩む理由、それは、愛娘のフェイト、そして自分の正体にあった。

「……ぶっ」

鍊矢はポケットから4枚の金の縁の漆黒のメダル 悪魔系統のコアメダルをテーブルの上に並べ、深く息を吐く。すると、鍊矢の体が黒いオーラとメダルに包まれ、本来の姿である悪魔系グリード・ウルの姿に戻る。

その体は漆黒の鎧に血管のような深紅のラインが走り、背中には巨大な翼が生えている。だが、左肩・右腕・左足は不完全状態であり、背中の右の翼に至っては形が定まっていないのか、黒い霧のようになっている。

錬矢　ウルは、窓ガラスに映る自分の姿を見て、またため息。と言うのも、愛娘のフェイトに、自分の正体をいつ告げるかを悩んでいたのだ。

人間ではない、人外の存在だ。受け入れられない可能性があるが、ウルとしては“話さない・一生隠す”という選択肢はない。

娘に、隠し事をしたくないのだ。

ウルが人間社会に暮らし初めて早800年。姿形を変え、今まで正体を明かしたのは……結構ある。

そこまで考え、ウルは考えるのを止めた。昔を思い返し、今までずっと隠せた試しがない。寧ろ、バレても『あー、やっぱりかー』と、逆に納得された。

ドンッ！！

そんな時、扉が乱暴に開けられた音が　フェイトの部屋の方から　聞こえ、ウルは直ぐに錬矢になる。

ドタドタ、キキー！ と音と共に、こいぬふおーむなアルフが二足歩行で走り、滑ってリビングに現れた。

血相を変えて現れたアルフに対し、鍊矢は極上の冗談を言い落ち着かせる事にした。

「どうしたアルフ。トイレでズボンのチャックに金 挟めたか？」

ガブツ！

「うぎぢやああああああつ！？」

当然、アホな事を言ったアホ悪魔は頭を某万事屋の巨大犬よろしく噛まれる訳で。

「アホな事言ったらガブツていくよ？」

「来てるっ！ もうガブツて来てるからっ！？」
「で、どうしたの、よっ！-！-！」

ひっぺかされ、前方に投げられたアルフは見事な三回転を決め、テーブルに着地。思い出したように錬矢に向き直る。

「そうだったっ！ 錬矢、フェイトが大変なんだよっ！！」

「何っ！？ チャックに挟めたのはフェイトなのかっ！？」

「まだ言うかっ！！」

とにかく来ておくれっ！ このままじゃフェイトがっ！！」

アルフの必死な表情に緊急性を感じた錬矢は、頭にアルフを乗せ、クロックアップ並みの速さで移動しフェイトの部屋に来る。そして、部屋の中へと突入する。

「フェイトッ！ どうしたっ！！」

「フェイトッ！！」

「っ、これは……！！？」

錬矢が見た、部屋の中。そこには……………。

……………以前、サカキが月村邸宅で体験したような猫の木、ならぬ ドラグブロッカーを筆頭にした ミラーモンスターの魔界樹になったフェイトの姿であった。

「……………あーうん。居るよね、特に理由なく動物に好かれる人って」

「おと、うさん……………苦しい……………」

「って、呑気に眺めてる場合じゃなかったっ!!」

そうして、錬矢は愛娘を救出するため、ミラーモンスターをひっぺがしていくのであった。

三十七ノ巻に続く

三十六ノ卷『鏡の世界ノ鬼と悪魔の悩み』(後書き)

三十七ノ巻『蛇と吸血鬼と自動人形・前編』(前書き)

今回は仮面ライダー王蛇ノ浅倉淳一中心のお話。

前後編です。ではどうぞ。

三十七ノ巻 『蛇と吸血鬼と自動人形・前編』

海鳴市のとある山中……サカキ達が普段使っている鍛練場所。

今そこで……緑と灰色の閃光と、蒼の閃光が超光速で交差していた。そして。

《Clock Over》

「ぐっ!？」

「がつ!？」

蒼の閃光に弾き出され、緑と灰色の閃光　キックホッパーとパンチホッパーが地面に倒れ、ゼクトバツクルからホッパーゼクターが外れる。

ゼクターが外れた事により変身が解かれ、香里と香流の姿に戻った。

そして蒼の閃光　逆鬼・迅雷も超光速世界から戻り、香里と香

流の前に立つ。

「大丈夫かー？」

「何とか……………」

逆鬼・迅雷は二人に声を掛け、一番キツそうな香里に手を伸ばす。

香流は答えつつ、何とか立ち上がり、香里は逆鬼・迅雷の手を取り立ち上がる。

そこへ、3本のスポードリンクを持ったソラと、人数分のタオルを足に掴んだキバットが近寄った。

御坂双子とキバット、ライラ、ここには居ないがリインフォース、閻璃、星奈は紹介を終えており、既に顔見知りである。

「皆様、お疲れ様です」

「おう、ありがとよソラ」

「あ、いえ……………」

変身・ユニゾンを解いたサカキはライラと別れ、ソラからスポーツドリンクを礼を言っ受取り、ドリンクの蓋を開け喉に通す。

ドリンクは少しぬるめの物。冷えすぎると、体に悪い。

礼を言われ、ソラは恥ずかしそうに頬染めた。

その様子を、香里と香流がニヤニヤしながら、キバットは温かい目で見ていた。……ライラは宮城県の銘菓『萩の月』を頬張っていたが。

何故、サカキ達だけでなく香里と香流までここにいるかと言うと、ライダーの力に慣れるためと、特訓させるためだ。

“力”を持つ者として、その“力”をちゃんと理解しなければならぬ。“力”を理解したら、“力”を制御出来るようになるければならぬ。

そのための特訓なのだ。

「ふう。香里も香流も、悪くはないな。連係も俺とソラより上手い」

スポーツドリンクから口を離し、サカキは先程の組み手から御坂双子を評価する。

実際、双子の能力は高い。話によれば街の不良相手に、股間を蹴りあげ、顎を砕き、警察が駆けつければ泣いたフリをして猫を被るとか。……黒い。

ともかく、キックノパンチホッパーも御坂双子と相性が良く、大抵の童子や姫相手なら楽勝まで言わないが、余裕を持って勝てるだろう。

「でも、力に振り回されてる感捨てられないな。さっきだって、決め技使おうとしてバランス崩したし」

「う………」

とは言っても、それでもライダー一年生。

先程の組み手で二人はライダーキックノパンチを使おうとして、その前段階のライダージャンプで予想以上の高さにバランスを崩し、落下してきた所を雷電脚で蹴り飛ばされたのだ。

痛い所を突かれ、香里と香流は唸る。

そんな双子をさて置き、サカキは朱色のスタッグフォンを開き液晶画面に映るデジタル時計を確認する。

「7時6分………。朝はここまでにすつか」

今日は平日。学校は普通にある。家に戻ってから朝食を食べ、準備をして学校に向かうとなると、結構ギリギリである。

サカキとソラ、キバットはキビキビと後片付けをし、香里と香流は疲れた体を動かす。

作業中、ライラを頭に乗せながら、サカキはふと思った。

「そっいゃ、王蛇の奴どうしてんだ？ あの後から見ないが……」

そして放課後。

え？ 授業風景？ 描写して何が面白い。一般の学校と全く同じだから省略する。

とにかく今は放課後だ。

ホームルームも終わり、4年5組月村すずかも教室を後に帰ろうとしていた。

「行くぞ涼斗っ！！」

「待ちなさいっ！ 涼斗は私と翠屋に行くんだから邪魔しないでよっ！！」

「何い……！！？」

「箒も鈴も腕引っ張らないでよ、痛いって」

クラスメイト達も、数人のグループで帰って行く。

だが、すずかは珍しく一人だ。

サカキと御坂双子は、鍛練場所にて修行。

はやてとなのはは管理局での仕事。

フェイトはソラと一緒に、美由希に剣の稽古をつけてもらっている。ただ美由希が翠屋の手伝いがあるため、二人も昼間は翠屋の手伝いをし、夜に稽古をしている。

普段は“唯一の”一般人であるアリサと一緒にのだが、今日は忙しい両親が休みなのため、大急ぎで帰って行った。

そのため、すずかは一人なのだ。

「おい、月村」

「錬矢先生？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・じゃなくて錬八先生」

「おう」

すずかを呼び止めたのは、我らがチート・荒木錬矢。

そのうちノリと勢いで世界を破壊しそうな人物・・・・・・・・グリ
ード？だ。

錬矢は学校で呼ぶ時、『錬八先生』と呼ばないと描写出来ない顔をする。

「あの、錬や……錬八先生、何かご用ですか？」

「ああそうだった。これ」

すずかに訪ねられ、錬矢は思い出したように手に持っていたプリントを渡す。

すずかはプリントを受け取り、首を傾げた。

「これは？」

「連絡事項のプリントだ。それを浅倉のバカに届けて欲しいんだよ」

「浅倉？」

首を傾げる。“浅倉”という名前は、すずかは一人しか思い浮かばない。

あの目付きが鋭い、刃のような目をした、仮面ライダーの少年だ。

「浅倉つて…………あの浅倉淳一君ですか？」

「そ、その浅倉。あいつ俺の担当クラス…………月村と同じクラスなんだよ」

お、同じクラス、というか同じ学校だったんだ…………。

苦笑と驚きが混じった表情を浮かべるすずか。

そこで、今まで…………始業式が始まってから見た事がない。

それを察したのか、鍊矢は説明する。

「あのバカ蛇、一回も学校来てねえんだよ。面倒くせえけど、俺担任だから、色々面倒見なきゃならんのよ」

「あはは……………」

「で、このプリント、バカ蛇に届けなきゃならんのだが、俺は今からかつたるい職員会議でな。そのくせバカ鬼と双子飛蝗は居ないよきた。」

悪いが届けてくれないか？」

「ああ、分かりました……………」

「うし、これバカ蛇の家の住所と地図な。んじゃ、頼むぞー」

そう言っ て立ち去る錬矢。

すずかは錬矢を見送り……………自分のミスに気が付いた。

「……………アレッ!? いつの間にか引き受けちゃったっ!?」

彼女も、この世界に染まっていた。

引き受けてしまったものは仕方ない。

すずかは、迎えに来ていた車に乗り直ぐに渡された住所の場所へ向かった。

(浅倉君か……………。正直、怖いな……………)

あの鋭い、刃物のような、常に獲物を探す肉食獣のような瞳孔が開いた瞳。

近付いたら飲み込まれそうな雰囲気。

まだ小学生のすずかが恐怖の感情を抱くには、充分過ぎる要因であつた。

だが……………。

(でも、それでも浅倉君は人……………私とは違う)

「すずか　すず　様　お嬢　すずかお嬢様？」

「・・・・・・・・え？ あ、ごめん。何？」

「いえ、目的地に到着したのでお伝えしたのですが」

どうやら考え込んでいる内に着いたらしい。

すずかお嬢様は運転手をしているノエルに謝ってから車を降りる。

目の前には、どこにでもある特に高級でもない普通のマンションが建っていた。

「すずかお嬢様、私も行きましようか？」

「大丈夫だよ。ただ届けるだけだし」

「分かりました」

ノエルに断り、マンションの敷地内に入る。

「浅倉君の家は・・・・・・・・六階」

エレベーターに乗り、六階のボタンを押す。

特にこれといって変わった所はない。

エレベーターが六階に到着したので降り、廊下を歩いて住所の部屋に向かう。そして目的の部屋に直ぐ着いた。

『浅倉』と書かれた表札の部屋の扉の前に立ち、息を吐いてから、呼び鈴を鳴らす。……返事は、無い。

「留守なのかな……?」

もう一度呼び鈴を鳴らす。やはり返事は無い。

今度はドアノブに手を掛ける。すると……。

「あれ? 開いてる?」

鍵が掛かっていなかったようで、軽くドアノブを回しただけで扉が開いた。

開いた扉から中を覗く、と、そこには予想外の光景が広がっていた。

「こ、これって……！！」

壁はズタズタにされ、フローリングの床には靴の足跡が大量に付
けられている。

殺伐とした光景に、すずかは恐くなる。すると、部屋の奥から、
声が聞こえた。

「……………げほっ……………げほっ」

「ッ!? 今のって……………」

声に反応し、すずかは部屋の中へと入って行く。床が足跡・泥だらけで床の役目を果たしていなかったため、失礼を承知の上で靴は履いたままだ。

「失礼します……………」

ゆっくりと奥へ進む。奥の部屋……………リビングに来ると、そこは更に酷かった。

窓ガラスは割られ、カーテンなどただの布切れ。ソファアは刃物で切られ、切られた所から綿がはみ出ている。

と、ソファアに小汚ない毛布にくるまれている何かが乗っているのを見付けた。

すずかは疑問に思い、ソファアに近付く。

「浅倉、君？」

「ア？ お前、月村だったか……………何のようだ」

それは、浅倉淳一だった。

淳一は、ソファアの上で横になり毛布にくるまって、すずかをいつもの目で見ている。だが、その視線は前に見た時よりも弱々しく、顔も若干赤かった。

「先生にプリントを届けるように言われて。それより、浅倉君大丈夫？ 苦しそうだけど」

「うるせエ、お前に関係ねエ……………」

「でも、もしかして風邪？」

「うるせエ、止める……………」

淳一は額を触ろうとするすずかの手を払おうとするが、力が入らない。

「ッ！ 凄い熱……………。待っててっ！！」

淳一の額を触り、思わず手を引っ込めた。凄い熱だったのだ。

すずかはケータイを取り出しどこかに連絡する。

面倒だ、そう思った淳一は変身しミラーワールドに逃げようとするが、やはり力が入らず、意識が薄らいでいく。

最後に見たのは、心配そうに見詰める少女の顔であった。

「39度2分……完全に風邪だね。よくここまで酷くなるまで放つといてたよ」

ベッドに横たわる少年から体温計を取り、呆れた声を出すすずかの姉、月村忍。

淳一はあの後、月村家の屋敷に運ばれ今こうしてベッドとお友達状態になっていた。

「……この子の家、襲撃されたみたいにボロボロだったんだよね？ その辺りは？」

「はい。調べてあります」

忍は、淳一の額にタオルを乗せるノエルに聞く。

家としての機能を失ったマンションの一室。淳一自身の私生活もあるが、生活する環境が悪いのが明らかな原因だ。

すずかにケータイで呼ばれ、慌てた声に急いで向かい部屋の中を見たノエルは、その異常性に淳一を屋敷連れ、体の汗を拭き着替えさせた後、淳一の近辺を調べていた。

「まず、浅倉淳一様のご家族ですが、浅倉様が幼い時にご両親、弟が交通事故で他界しています。浅倉様はご自宅で留守番をしていたため無事でした」

「……………それで？」

「親戚の方で引き取る話があったようですが、浅倉様本人が拒否したため現在住んでいるマンションの手続きだけをしたようです。……………その親戚の方も、去年病で亡くなったそうです」

「両親の実家は？」

「そちらも方も、既に」

「そう……………。じゃあ、天涯孤独なのね」

「はい………。それで、現在は一人暮らしなのですが、不登校で街の不良相手にケンカの日々だそうです。不良達に相当恨まれています」

「それで報復に、この子の家を壊したと」

「そのようです」

「……………」

ここで厳しく言えば、自業自得になるだろう。世界は子ども一人だけで生きていける程優しくはない。

ただ、ベッドで横になっている少年の境遇を思うと、優しくない世界で生きるために、他者に牙を向き、他者を信じられない気持ちも分かる。……………曾ての自分もそうだったから。

忍は、はぁ、とため息を吐く。

「しょうがないか。ここで見放すのも違うし、この子、暫くうちで預かるう」

「はい。すずかお嬢様も喜びます」

微笑むノエルに、忍は「そうかな？」と笑いながら返した。

「じゃあ、浅倉君はもう大丈夫なの？」

「うん。熱は高いけど、このまま安静にしてたら大丈夫」

姉の言葉を聞き、すずかは安心する。

忍は淳一が休んでいる部屋を出た後、妹に淳一を泊める事を説明するためにすずかの部屋に来ていた。別の部屋では、ノエルがフアリンにも淳一の説明をしている。

「それで、とりあえず風邪が治るまでうちに泊まらせようと思っただけど、すずか、いい？」

「うん、良いよ。あんなに苦しそうなんだもん、ほっとけないよ」

予想通り、すずかは喜んで賛同した。

「私、浅倉君の様子見に行きたいんだけど………いい？」

「うーん。今寝てるから、静かにしてね」

「うん」

すずかは忍を残し、部屋を出る。

「………大丈夫だよ。疲れてるだけだから」

淳一が眠る部屋に向かう途中、すずかは不意に、廊下の窓ガラスに視線を向け語り掛けた。

その窓ガラスには、ベノスニーカーが映っていた。そこには映っていないが、メタルゲラス、エビルダイバーもすずかを見ているだろう。

すずかがミラーワールドに居るベノスニーカーを見れるか、それは、すずかが王蛇のカードデッキを持っているからだ。

淳一が意識を失った時、手に持っていたカードデッキが落ち、それが何なのか知っていたすずかが拾っていたのだ。

最初は常に監視されているようで落ち着かなかったが、ドラグブラッカーを撫でるフェイトのように、顔を出したベノスニーカーの頭を撫でたりしたら思いの他慣れた。

淳一が寝ている部屋の前に到着し、起こさないよう小さくノックをし中へと入る。

中に入り、ベッドに近づく。淳一はまだ眠っているようだ。

「早く良くなってね。この子達も心配してるから」

眠る少年に、すずかは小さく語り掛け、ベッドに備え付けの小さな机の上にカードデッキを置いた。

カードデッキを手放した途端、窓ガラスに映るベノスニーカーが見えなくなり、少々寂しい気持ちになるが、眠るのを邪魔したくは

ないので早々に退散する。

「……………それじゃあ、お休みなさい」

そして静かに、すずかは部屋を後にした……………。

「……………あ？」

淳一は目を覚ました。寝起きが悪いのか、かなり不機嫌な顔をしているが。

まだダルい上半身を起こし、部屋を見渡す。近くの机にカードデ
ッキが置かれたので、直ぐに手に持つ。

「見覚えがない部屋だ。」

怪訝な顔をして部屋を睨む。

「……………おい、どう言う事だ?」

淳一は誰も居ない空間に語り掛ける。すると、備え付けの鏡にベ
ノスニーカーの姿が映った。

『シヤアア』

「……………ちっ、アイツの家か……………」

ベノスニーカーの鳴き声から、大体の事を理解した淳一は舌打ち
する。

余計な事を……………。

と思いながら、紫髪の白いカチューシエを付けた少女を思い出す。

右手にカードデッキをしっかりと持ち、ベッドから抜け出す。

まだ体はダルいが、動けない程ではない。それに、他人の世話に
などなりたくなかった。

机の上に置いてあった時計を見ると、今は午前2時。殆んどが寝
ている。出て行っても誰にも気付かれないだろう。

「服は……………ちっ、探すか」

現在の格好は今朝に着ていた物ではなく、大人用のパジャマ、し
かも女物。

汗を掻いていたから着替えさせたのだろうか……………淳一の
機嫌を損ねるのには充分であった。

淳一は元の着ていた自分の服を探すべく、カードデッキを持って
歩き出す。いくら女物でも、10歳の淳一には大きくダボダボでズ
ボンの裾を引きずっていた。

部屋から廊下に出る。だが、見知らぬ屋敷な上に広い。さらに淳一は今の今まで意識がなかったので、玄関までの道順も分からない。

淳一は再び舌打ちをし、しらみ潰しに探す事にした。

そうして歩きだし、最初の曲がり角を曲がって……………。

「は……………」

と、声を漏らした。

曲がり角を曲がった先に、チャイナ服を着た金髪の女性が居た。居たのだが、整った顔に生氣と呼べるものがなく、機械のように冷たい。

さらに、女性の右腕が肘から先がブレードになっており、生氣のない顔と相まって異常性を醸し出している。

「……………」

淳一は何も言えなかった。不良相手に圧勝している彼であるが、こんな金髪女性が右腕がブレードで目の前にいる“非日常”は初め

てだった。

思考も止まっている、故に、金髪チャイナ女性がいつの間にか上げ、降り下ろしたブレードに、反応が遅れた。

三十八ノ巻に続く

三十七ノ巻 『蛇と吸血鬼と自動人形・前編』（後書き）

皆様、今回のお話であるノベル／アニメキャラが出ていたのですが、お分かりでしたでしょうか？

それはさて置き、ライダー、これ以上増やしても大丈夫ですかね？
逆鬼・キバ・王蛇・キックホッパー・パンチホッパー、錬矢ライダー（リュウガ・オーガ・ラハブ・アモン）などが主なレギュラーライダーですが、もう一人くらい増やしてもいいでしょうか？

候補のライダーは、

クウガ・ブレイド・ギャレン・カリス・オリジナルブレイド系ライダー

のどれかです。

では、次回は後編の更新です。

三十八ノ巻 『蛇と吸血鬼と自動人形・後編』 (前書き)

仮面ライダー逆鬼、前回の3つの出来事。

1つ、淳一の家を訪ねたすずかは、風邪で寝込む淳一を発見する。

2つ、忍は淳一の過去の境遇を知った。

3つ、淳一にブレードが振り下ろされた。

更新遅れました、すみませんっ!!

三十八ノ巻 『蛇と吸血鬼と自動人形・後編』

降り下ろされたブレード。

淳一が気付いた時には、刃が眼前にまで迫っていた。

「ッ!！」

間に合わない、そう思った。だが、瞬間、金髪チャイナ女性の体がくの字に曲がり吹っ飛び、その先の壁に叩きつけられクレーターを作った。

『オオオ』

「お前か」

そこに居たのは、淳一の契約モンスターの一体、メタルゲラス。ブレードが降り下ろされた瞬間、近くの窓ガラスから飛び出し勢い

のついた体当たりを喰らわせたのだ。

メタルグラスを確認した淳一は、今は床に倒れる金髪チャイナ女性に近付く。

近付いた瞬間にまたブレードを振られる可能性を考えたが、メタルグラスの突進をまともに喰らったのだ。死んでる可能性の方が高い。

いくら“浅倉”とは言え、淳一は子ども。殺しなどやった事はなし、やるうとも思わない。

始末が面倒くさいのだ。

淳一は人の……生物の生死に何の関心も無い。生物はいつか死んで朽ちる、そう考えているからだ。

故に、例え目の前で誰かが死んでも、例え誰かを殺しても、何とも思わない。だが、殺しをすれば後々が面倒だ。

特に警察（国の犬）だ。アレは鬱陶しい。

普通じゃないのだ。そもそも、王蛇の装着者が普通なわけがない。

それに、淳一の持つ王蛇のカードデッキの前の持ち主、その残留思念が淳一の“狂気”を加速させているのかも知れない。

（ああ、面倒だ……）

そう思いつつ、ゆっくりと覗く。

「……………なっ!!」

淳一は驚いた。

金髪チャイナ女性は、間接はあり得ない方向に曲がり、間接ではない部分も曲がっている。ブレードは途中から折れ、メタルガラスの角が刺さったのだらう腹部からは“火花が走り”、“ケーブル”や“機械部品”が覗かせていた。

よく見れば、他の部分からも同様の物が見れる。

「人間じゃない……………？ アンドロイド、いやガイノイドか」

淳一はしゃがみ、金髪チャイナ女性……………ガイノイドを改めて見て、そう判断した。

因みにガイノイドとは、アンドロイドの女性型を指す。

淳一は10歳だが、IQ200の天才だ。故に、現代の技術で簡単な行動を行えるロボットならともかく、見た目完全な人間のアンドロイド/ガイノイドを作るなど不可能という事は理解している。

だからこそ、このガイノイドが居るこの屋敷、延いては屋敷の住人に疑問・疑心が生まれた。

「何なんだア？　ここは………おい」

『オオオ』

後ろに立つメタルガラスに呼び掛ける。

自分が寝ている間、コイツら（メタルガラス他二体）はミラーワールドから屋敷の内部を見ていただろうし、人間の気配には敏感だ。道案内に使える、と淳一は思った。

メタルガラスも淳一の意図を理解したようで、一旦ミラーワールドに戻り、窓ガラスから顔を出し行くべき道の方向に顔を向けた。

「この奴らに、色々聞かないとなア………」

そう呟き、彼はメタルグラスが指した道に歩き出した。

同時刻、忍は自室にて、ノートパソコンの画面に視線を向け、高速でキーボードにうち込んでいた。

「ああもう私のバカッ！ 完っ全に平和ボケしてたっ！！」

常人ではあり得ないスピードでキーボードを叩きながらイラついた声を上げる。

忍の後ろでは、ノエルが何かを警戒するように立っていた。

何故忍はイラつき、ノエルが警戒……戦闘体制かと言うと、突如月村家の警備システムがダウンし、同時にチャイナ服姿の右腕がブレードの女性　淳一を襲ったガイノイドと同じものが乗り込んで来たからだ。

月村家の警備システムは異常と言っていい程性能が高く嚴重だ。“忍自身が”開発したのだから、簡単に破られる筈がないのだ。

「ノエル、すずかと浅倉君の所にはっ!？」

「ファリンが向かっています。恭也様に連絡は……」

「さっきしたっ!　今こっちに向かってるっ!！」

恭也とは、高町なのはの兄、高町恭也の事だ。忍の恋人・婚約者である恭也は、“裏の世界”の事情を把握しているため、一般警察を呼べない、今の状況では頼りになる。

忍はノエルと会話をしながらも、ノートパソコンを操作する手を止める事はない。

そしてノエルも、会話をしながら“複数の”ガイノイドを相手にしている。

「よしっ！ これでこの屋敷は私の城に戻ったっ！！」

そうこうしている間に、忍はダウンしていた警備システムを立て直した。同時に、屋敷の電気がつきノートパソコンの画面に屋敷の監視カメラの映像が映る。

システムがダウンしてから凡そ四十数分、驚異的なスピードだ。

「ファリンは現在移動中。あともう少しですずかの部屋に着くわね……。って浅倉君っ！？ 起きちゃったんだ……。」

監視カメラの映像を見て、移動中のファリンを見つけた忍だったが、別の監視カメラの映像に歩いている淳一を見つけ驚く。

淳一は、偶然かすずかの部屋に向かっているようだった。

「どついう訳かすずかの部屋に向かっているみたいね……。ノエルツ！ 私達も行くわよっ！！」

「はいっ！！」

淳一は、メタルガラスの案内のもと屋敷の廊下を進んでいた。

途中、ガイノイドの襲撃もあったが、全てメタルガラスの窓ガラスからの奇襲で破壊している。

「まったく、一体何なんだこの屋敷は……」

また一体、破壊されたガイノイドを見て呟く。

一応、仮面ライダー、ミラーモンスター、ミラーワールドなど“非常識”を見た淳一であるが、こつも技術を先倒ししたガイノイドが何体も現れたら、そう言わずにはいられなかった。

しかし、愚痴ばかり言っている場合ではない。そのため、淳一は歩を進める。

暫く廊下を進むと、T字状に別れた場所の前まで来た。

最初のガイノイドは、曲がり角の先にいたため、淳一は壁に背中を預けるようにゆっくりと進む。

すると、右に曲がった方の廊下から、何かが廊下を歩く音が聞こえた。

淳一は思考を巡らせ、どう対応するか考える。

まず、遭遇を避けもと来た道を引き返すか、と考えたが、引き返したところで音の主がこちらに来る可能性もある。結果、却下。

音はまだ遠いため、メタルガラスが指示する方向に直ぐに移動する、とも考えるが、メタルガラスの指す方向は淳一から見て左の廊下。つまり、音の方向の直進の方向になる。

もし音の主がそのまま直進した場合、自分の移動スピードでは直ぐに追い付かれる。そうなれば、接触は避けられない。

ならば変身し、ミラーワールドに入ってやり過ぎすか移動……
・・とそこまで考え、淳一は考えるのを止めた。

何故隠れる必要がある？

「チツ！……………イライラする……………!!」

イライラする。隠れて動いてる自分にイライラする。

何故隠れる必要がある？

何故自分は隠れている？

気に入らない。イライラする。

イライラするなら壊せばいい。そう、今まで通り。

イライラするイライラするイライラするイライラするイライラする
イライラするイライラするイライラするイライラするイライラする
イライラするイライラするイライラするイライラするイライラする
イライラするイライラするイライラするイライラするイライラする
イライラするイライラするイライラするイライラするイライラする
イライラするイライラするイライラするイライラするイライラする

「……………変身……………!!」

淳一は王蛇のカードデッキを掲げ、腰に装着されたVバックルにカードデッキを装填する。

変身した王蛇は、【牙召杖ベノバイザー】を軽く振るい、頭を回

しながら廊下に出る。そして、右に体を向けると、そこには案の定ガイノイドが居た。

ガイノイドは、右腕のブレードを王蛇に向ける。だが

「 イライラするんだよ」

本来、召喚のために使う攻撃力のない杖が振るわれ、ガイノイドのブレードは砕ける。

ガイノイドの表情は変わらず、無表情のままだ。ここまで無表情だと、もはや不気味だ。だが、今の王蛇には関係無い。

ブレードを砕いたベノバイザーを再び振り回し、ガイノイドを砕く。

力なく倒れるガイノイド。

王蛇はそれを見もせず、進む。イライラの原因を壊すために。

「イライラするんだよオ……………!!」

月村すずかは、目を覚まし自身の部屋から移動していた。

それも当然だろう。何せ、先程から何が叩きつけるられたような、砕かれたような“轟音”が響いているからだ。

何事かと思ったすずかは、当然真相を知るために轟音のする方へ廊下を進み……現在進行形で王蛇に壊されてるガイノイドと同型のガイノイドと出会ったの“だった”。

そう、“だった”のだ。

何故過去形なのか。

何故なら、ガイノイドがすずかに襲おうとした瞬間、廊下の窓ガラスからベノスネーカーが飛び出し、一瞬でガイノイドに一撃を加え機能を停止させたのだ。……いや、停止させたというよりは壊したと言っべきか。

すずかが状況を飲み込めず、ただ呆然としているうちにベノスネーカーは早々に窓ガラスに飛び込み、ミラーワールドに戻ってしま

う、が、すずかに自分の存在を教えるように、によきつと顔だけ出した。

『シャアアア』

「助けて……………くれたの？」

恐る恐る、窓ガラスから頭だけを出した大蛇に尋ねてみる。すると、ベノスネーカーはまたひと鳴きして頷いて見せた。

ミラーワールドを見る事が出来ないすずかは分からなかったが、ベノスネーカーを筆頭とした王蛇の契約モンスター達は、淳一の側に一体、すずかの側に二体ローテーションしながら護衛していたのだ。つまり、ここにはもう一体、エビルダイバーもいる。

……………本来の主である淳一より、すずかの護衛の方が数が多いのは、あえて触れないでおく。

「ねえ、何が起きてるか分かる？」

『シャアアア……………』

「……………だよね」

すずかは家で何が起こっているか聞いてみる、が、ベノスネーカーは申し訳なさそうに頂垂れる。

顔を出していないエビルドライバーも同様だが、ベノスネーカーは先程すずかを襲ったガイノイドと、同じガイノイドが暴れているのは分かる。だがそれが何を意味するかまでは分からない。

すずかも、あまり期待していなかった　寧ろ申し訳なつたので、苦笑しながら呟いた。

何せよ、状況を確認しなければならぬ。

そう思った時、前方から誰かが走っていた。ファリンだ。

ベノスネーカーは頭を引っ込め、ミラーワールドに隠れた。

「すずかお嬢様っ！　ご無事ですかっ！？」

「ファリンっ！　一体何が起きてるの？」

駆けつけたファリンに、すずかは直ぐに尋ねる。

「すみません、訳は後から話しますので今は避難を」

普通のほんわかしているファリンからは想像出来ない、真剣な口調に、すずかは無言で頷いた。

今屋敷で非常事態が起こっている事はすずかにも分かる。今無理に聞いても、迷惑になるだけだと思ったからだ。

ファリンはすずかの手を引き、淳一が眠っていた部屋に向かう。淳一を連れした後、地下にあるシェルターに向かう手筈になっている。

ファリンとすずかの後ろ姿を、ミラーワールドからベノスネーカーとエビルダイバーが見送っていた。

『シャアアアア』

『キュイイイイ』

ベノスネーカーとエビルダイバーは頷き合い、その場から移動した。

「ハツハツ！」

突撃剣を袈裟に降り下ろし、切り裂く。

それにより、一体のガイノイドが機能を停止し沈黙、その場に倒れる。

王蛇は気にする事なく、ベノサーベルを引きずりながら機能停止したガイノイドを踏んで進んで行く。

王蛇が歩いた道には、同じように壊された数体のガイノイドが倒れていた。

「イライラする………！」

壊しても、まだイライラが晴れない。

………いつそのこと、この屋敷を壊すか？ 王蛇が危ない
すでに手遅れだが 考えし始めた時、それは現れた。

「随分派手にやってくれたね」

突如声が聞こえ、けれども王蛇は驚く事なく、面倒くさそうに声のした方に視線を向ける。

そこに居たのはほぼ今までのガイノイドと同じ外見の女性。身に纏うチャイナ服は紫色で金の龍の刺繍が入っている。

因みに、今までのガイノイドは全員青の簡易な装飾のチャイナ服だ。

だが、目の前にいる女性は今までのガイノイドと外見こそ似ているが、何かが違う。

それは、表情。

今までのガイノイドは全員生氣のない無表情なものに対し、目の前にいる女性は何か目的のある、決意の秘めた表情、瞳をしていた。

「(ほう……) 何だお前」

その瞳を見て、王蛇は女性にほんの少し興味を持った。

「私はイレイン。分かっているだろうけど“自動人形”で、アンタの後ろで倒れてるのの指揮官機さ」

「……………」

なるほど、と、王蛇は心の中で納得する。

今までのガイノイドは動きが機械的すぎた。おそらく、目的……命令を実行する事しか出来ないのだろう。なら、ガイノイドに命令する指揮官機がいた方が納得出来る。

それに、“自動人形”。ガイノイドも言い方を変えれば、そんなだろう。

「それで、アンタは一体何なんだ？ この屋敷の連中は僚機が追っている。つまりアンタはこの屋敷の人間じゃないって訳だけど、可笑

しな格好をしてるね。それも“夜の一族”の物かい？」

「夜の一族」？」

女性　イレインは饒舌らしい。彼女の言葉の中で聞き慣れない、重要そうな単語に王蛇は首を傾げる。

「何だそりゃ」

「夜の一族”を知らない？　それじゃあ眷族って訳でもないし・・・」

「・・・おい、その“夜の一族”ってのは何なんだ？」

考え始めたイレインに、王蛇は熱くなった頭を一旦冷やし、冷静に聞く。

彼女がここまで考えるという事は、“夜の一族”というのとはかなり重要な事らしい。故に、王蛇は有益な情報が入る可能性があったため、聞く事にした。

尋ねられたイレインは、「本当に知らないんだね・・・」と呆れながら漏らす。

「まあいいさ、冥土の土産に教えてやるよ。」

“夜の一族” っていうのはね、簡単に言えば吸血鬼の一族なのさ。不死
ってわけでもないけど不老長寿。身体能力は高いし頭も良い・・・
・私みたいな、自動人形を作れるくらいにね」

「・・・・・・・・」

「この屋敷に住んでる姉妹、その姉妹が“夜の一族”なのさ。そして、
“夜の一族”の姉妹を世話するメイドは、私と同じ“自動人形”
”というわけ」

「・・・・・・・・」

「何？ ショックで何も言えない？」

「・・・・・・・・」

王蛇は何も言わない。

ショックを受けたのだろうと思っていたイレインも、違うと思い
直し仮面に隠れた表情を読めず、怪訝な表情を浮かべる。

そして、王蛇が口にしたのは、予想外の言葉だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・で？」

王蛇が言ったのは、たった一言。だが、その一言には、心底どうでもいい、という意味も入っていた。

イレインは王蛇の言葉に驚愕しているが、『浅倉 淳一』という人間の性格を抜きにしても当然の反応かも知れない。

そもそも王蛇／淳一はずかの事を知らないし、姉妹がいるという事も知らない。ついでに言えば、メイドがいるという事も知らなかったし面識もない。

風邪で意識がなかったので、当然である。

イレインの言った事は確かに大きいが、それが知人・友人ならともかく、“月村家”を知らない淳一からしたら『へー、そうなんだー』くらいの事であった。

王蛇は手に持っていたベノサーベルを数回振るい、その切っ先をイレインに向けた。

月村家が襲撃された理由は大体分かった。イレインに月村家の襲撃を命じた者がいるだろうが、それは自分が気にする事ではない。

後は、目の前の女を壊すだけだ。

「イライラするんだよオ……！ どうでもいいから壊れろ」

「……へえ、やれるもんならやってみなっ！！」

イレインの言葉を合図に火蓋が切られ、両者は走り出す。

王蛇はベノサーベルを肩に担ぐように。イレインは肘から先のブレードを後ろに向けながら。

そして、有効範囲に入ると、得物を振るった。

すずかの元へと急ぐ忍とノエル。だがその途中の大きな部屋を通る時、本来居るはずのない襲撃された時点で予想していた人間が目の前に現れた。

月村安次郎。

忍とすずかの親族に当たる男だが、性格は強欲かつ傲慢で典型的なヒーローマンガや番組で必ず出てきそうな悪役気質の男が、数人の護衛だろう黒服と、数体のガイノイドと居た。

この月村安次郎、忍とすずかの両親が他界した際に二人を引き取るうとしたが、目的は“夜の一族”である二人の体であった。

当然、忍は安次郎を拒否したが、忍が“夜の一族”の技術の結晶である“自動人形”、ノエルとファリンを起動させると、今度は二人を差し出せと言ってくる始末。

それが今まで続いていたため、忍は勿論、ノエルやファリン、温厚な性格のすずかでさえも毛嫌いする程である。

忍とノエルは、ガイノイド 自動人形を持ち出し、自分達を襲撃しそうなのはこの男ぐらいだろうと予想していた。

そんなこの世から 作者にも 嫌われた男は何か勝ち誇ったようにニヤニヤしている。

ムカつく、だが、言葉にしなくても相手が何を言いたいのか忍もノエルも分かっている。

人間の黒服だけならノエルだけで充分対応出来るが、相手に自動人形がいる以上ノエルはそっちの相手になる。

そうになると、丸腰の忍が狙われる。ノエルは自動人形の相手で手一杯で忍を守れない。そうなれば……詰みだ。

「なあ、もう分かっとするやる？ 怪我せんうちにノエルとファリンを」

「誰が家族をあんなんかに渡すかつ！！」

安次郎の言葉を遮り、忍は怒号を上げる。

興奮状態になったため、“夜の一族”特有の反応で忍の瞳が深紅に染まる。

それに安次郎は怯むが、引きつつも表情は勝ち誇ったようにニヤついている。

「そ、そうか……なら、力づくで言う事聞かせたるわ」

安次郎がそう言うと、数体の自動人形と数人の黒服が構える。

忍とノエルも、苦虫を噛んだような表情をしながら身構える。だがその時、部屋の扉が破られ、そこから二つの影が飛び出した。

「シャアアッ!!」

「あああっ!!」

毒のような紫の鎧姿の人物と、自動人形と同じ顔立ちだが、紫のチャイナ服の女性……仮面ライダー王蛇とイレインだ。

王蛇とイレインは互いの得物をぶつけ合い、相手の命を食い干切ろうと虎視眈々に狙う。

「イ、イレインっ！ 何しとるんやっ!？」

「イレインツ!? 安次郎、あんたまさか……!!」

イレインの名に、忍は驚愕の表情になる。

ノエルとファリンを起動させるため、忍は夜の一族が残した自動人形に関する資料を片っ端から読み漁った。その中に、イレインの事も載っていた。

イレインは、ノエルの後継機にあたる自動人形で、より人間に近づいた自動人形らしい。

だが当時、完成したばかりのイレインを起動させた時、何を思ったのかイレインはその場にいた技術者を皆殺しにしたのだ。

「どうやら、より人間に近付けたため自動人形……… 当時にあったか疑問だが ロボット三原則の『人間に逆らわない』『人間に危害を加えない』に縛られなくなっただけらしい。」

何とか停止させ、リミッターを付けた上でイレインを封印したが……… よりにもよって安次郎に発見され、起動させられたようだ。

いくらリミッターがあるとは言え、危険なのは変わらないし、いつリミッターが外れるか分からない。それに、イレインと戦っているのは誰なのか。どうやって自動人形のイレインと互角に戦っているのか。

だが忍の心配をよそに、王蛇とイレインは戦い続ける。

「シャッ!」

王蛇がベノサーベルを振るう。イレインは避けるが、ベノサーベルはその後ろにいた自動人形を捉え、壊す。

「ハアッ!」

今度はイレインが、左手から電磁鞭を出し横薙ぎに振るう。王蛇はしゃがんでかわすが、電磁鞭はその後ろにいた黒服達を捉え薙ぎ払う。

安次郎が叫ぶが、王蛇とイレインの耳に入っていない。相手に集中し過ぎて、周りが見えていないようだ。

「アンタ、中々やるわねっ!!」

「俺は全然だア、もっと楽しませろ……」

「蛇みたいな見た目通りデカイ口ねっ!!」

周りを気にせず、暴れる王蛇とイレイン。それに巻き込まれ、安次郎の護衛の黒服と自動人形は既に全滅している。

「ええ加減にせんかあああああああああつ!!」

安次郎の怒号が響き、やっと、ようやく聞こえたようで、王蛇と

イレインはようやく止まる。

そして、安次郎に『何コイツ、空気読めよ。てかKY?』という視線を向ける。

「イレインッ！ 何やっとなるんやっ!?!? そんな変な奴より忍を捕らえるやっ!?!」

「え、やだよ」

安次郎の命令にイレイン拒否。

「なっ!?!」

「最初はおんたの言う事聞いたフリして後ろからバツサリ、そして夜の一族の奴らに復讐、と思っただけど、コイツと殺り合っただら楽しくてどうでもよくなっただね。」

そんな訳だから、おんたの言う事聞かずに芝居も辞めるわ」

イレインは殺し合いの相手（王蛇）に笑みを向けながら、安次郎にシッシッと手を振る。

安次郎は勿論、忍とノエルでさえイレインの発言に呆然としている。

ただ分かる事は、護衛が全滅した安次郎の方が詰みという事だ。

「……………ま、まだやつ！ ええか、よう聞けよっ！？ こちらとら忍とすずかの友人関係を調べて部下を向かわせたんやつ！！ 言う事聞かなどうなるか」

刹那、安次郎の後ろの方の 王蛇とイレインが破壊した 扉
があつた場所が爆発、炎が上がった。

『 安眠の邪魔するの』

『 だーれだア？』

『 ……』

全員が見る中、地獄から響くような声出しながら炎の中から現れたのは、仮面ライダー逆鬼・紅蓮、仮面ライダーオーガ。

そして無言で、ドッガハンマーを引きずっている仮面ライダーキ

バ・ブレードドッグフォームであった。

幽鬼の如くゆらゆら歩いて来る三人のライダーの、静かな怒気の
オーラ 特にキバBDF にその場いた全員が引く。

「これ、お前だな？」

安次郎を見ながら、オーガはそう言うとかかを投げた。

安次郎の前に落ちたのは、安次郎が忍・すずかの友人の元へ送った部下、なのだが、関節は全て逆方向に曲がり、顔は原形を留めないほどボコボコにされていた。

「言つとくが、他の場所に向かった奴らも“それ以上”だぜ？ 俺の知り合いが向かったからな……」

「 まったく。ウルの奴、こんな事に俺達を呼びやがって。なあ？ カザリ」

「まあアंक、セルメダル一人100枚が報酬なんだから損はないよ。……もし断ったら“また”コアメダル1枚にされそうだし」

「うおおおおおおおっ！ 子どもは宝あああああああああああ
あああっ！！」

「ウヴァうっさいっ！ 近所迷惑だっ！！」

「　　という感じに」

何故か、鳥っばいのと猫っばいのと虫っばいのがコントをしているのが見えた。

安次郎は絶句し、プルプル震え、何かを言おうとした。だが、何か言う前にキバBDFがドツガハンマーをフルスイングし安次郎を壁に埋めた。ギャグ的に。

「……………煩いので喋らないください。私、すごく眠いんです」

【……………怒ってますね】

「そっぴやソラって、飛翔達が来た時も寝ながら歩いてたくらいだしな」

不破　飛翔が来た時の事を思いだし、納得する逆鬼・紅蓮。

こうして、月村安次郎による月村家襲撃は幕を閉じたのであった。

新発見：ソラは睡眠の邪魔をされると凄く怒る

S i d e : 月村 忍

さて、その後の事を話すと、安次郎は警察にご用になった。

ただ、夜の一族の事が絡んでるから、土郎さんや恭也の知り合いの警察……そういう“裏”の事を知ってる人が担当してくれた。

そう言えば恭也なんだけど、安次郎の部下の相手をして遅くなっただけ。腕は大した事なかったらしいけど、数が多かったらしい。

安次郎の部下全員、安次郎と同じように捕まっただけ……
・・恭也が相手した以外の連中、酷い怪我で病院に搬送された。多
分、すずかの担任の荒木 錬矢さんの知り合いがやったんだろうけ
ど、あの人何者なんだろ？ 悪い人じゃないらしいけど。

それにあの紫の鎧の人が浅倉君だったのにも驚いた。だって身長
が全然違うしね。

すずかとノエルは知ってた。何でも前に見たらしい。……
後でOHANASSIね。

それで浅倉君……淳一君なんだけど、正式にうちに住む
事になった。これには夜の一族の掟とその他の事情があつて、夜の
一族を知った場合、眷族になる、まあ秘密を共有するって感じなら
いいらしい。因みに、恭也は私の恋人なので問題なし。

淳一君はまだ子どもだから眷族は無し。だから、一緒に生活する
事で秘密を漏らさないよう監視って事。名目上は。

淳一君は渋々了承してくれた……というか、了承させた。
私が。

元々住んでたマンションがアレだしね？ でも、夜の一族の事を
知っても私とすずかを怖がらないで普通に接してくれた事は嬉しいか
つたな。

海鳴市は昔、8人の鬼に助けられた村だつて話だけど、やっぱり
“人じゃない者”に対して恐怖を抱く人もいるしね。

因みにサカキ君、ソラちゃん、錬矢さん、なのはちゃんにそっく

りな星奈ちゃんとキバツト君だけど、夜の一族の事とか聞かないで帰っちゃった。ソラちゃん、すっごく眠そうだったし。

それとイレイン。あの子もうちで引き取って、淳一君専属メイドとして働いてる。

何だか、淳一君が変身した王蛇だっけ？ まあ淳一君と戦ってる内に淳一君の事が気に入ったみたいで、ノエルに仕事を教えてもらいながらノリノリで働いてる。

あ、実は淳一君、サカキ君達が帰った後、倒れたの。風邪なのを忘れて暴れたから、当然かな。

でも今は完治して、すずかと学校に行ってる。

淳一君は乗り気じゃなかったけど、風邪が治った次の日に鍊矢さんが来て無理矢理登校させて（人さらいして）たっけ。今じゃ恐怖からか、自分から登校してる。

でも、友達が出来たのかな？ 最初に比べると随分楽しそうだったな。

Side out

海鳴市のとある路地裏。

そこに、四人の10歳前後の少年少女と、大量のゴミ……不良共が積み上げられ山になっていた。しかも丁寧な、不良共の山の天辺に『雑魚』と書かれた白旗が立てられていた。

「……………やっと終わった？」

「そうね。まったく、不良って数“だけ”は多いから困るわ」

「雑魚と言え雑魚と」

「足りねえなア……………」

不良（雑魚）共の山を尻目に、各々の感想を漏らす少年少女
御坂 香流、御坂 香里、八神 サカキ……………そして、浅
倉 淳一。

四人は不良（雑魚）共をひと蹴りし、路地裏から出ていく。

淳一が登校するようになってから、波長が合うのか四人はつるむようになり、こうして不良（雑魚）を潰したりしていた。

高笑いしながら無情にギャグ殺・・・・・・・・もとい虐殺するのを見て、誰かが言った。

『マッドカルテット狂気四重奏』と・・・・・・・・。

三十九ノ巻に続く

三十八ノ巻 『蛇と吸血鬼と自動人形・後編』 (後書き)

淳一は月村家に住む事になりました。

理由は忍sideで書いた通りですが、実はもう一つ、ベノスネーカー達がすずかの側を離れようとせず、置いて行こうとすると淳一に巻き付いて放さなかったためだったりします。

イレインなんですけど……自分はとらいあんぐるハートをプレイした事がないので、実際の口調を知らないのでこんな感じになんかアルフっぽい……。

サカキの設定に『人間嫌い』とありますが、普通に接してるので『?』な方々が多いと思いますので説明させていただきます。

サカキは人間に対して普通に接してるように見えるが、それは表面だけ。笑顔でも、内心では笑っていない事が殆んど。それは敵を作らないため、自己防衛のため。

そのため、目の前で誰か死んでも『自業自得』と判断して我関せず。ただ、身内には普通で鬼として迫害された経験もあり種族問わず身内には心から笑える。

一緒に過ごして、気に入った相手には身内と同じように接する。

錬矢の影響からか、幾分か人間嫌いは払拭されつつある。

こんな感じですよ。

今までコラボで出会った相手は、『気に入った相手』のため普通に接します。

では次回。

三十九ノ巻『二代目祝福の風と混沌（カオス）な来客と晴れない恨み』

第1管理世界『ミッドチルダ』。首都『クラナガン』を中心に、西部にある街『エルセア』。

その街に、とある建物があつた。

『アルピーノ探偵事務所』。

建物に掛けられた看板に、そう書かれていた。ミッド文字と日本語の二つでだ。

その『アルピーノ探偵事務所』の前に一組の男女が来ていた。

紫の髪に黒いネクタイとスーツ、黒いサングラスと、簡単に説明すると男女は似た姿をしている。

細かく言うと男性は濃い色の紫の髪で、鍊矢ほどではないが怪しい雰囲気……というか胡散臭い空気を出している。

女性は薄い色の紫髪で、キリリとした印象を受ける。そして手にはスーツケースを持っていた。

「ふむ。ここかいウーノ？ 『イーター』の適合者がいるのは」

「間違いありません、ドクター。ディンゴさんのデータ通りです」

ドクターと呼ばれた男性は、隣に立つ女性に尋ね、女性は肯定する。

男性はもう一度『ふむ』と呟き、『アルピーノ探偵事務所』をサングラスの奥の金色の瞳で見る。

「まさか、以前錬矢とディンゴの隠れ家に“間違つて”押し入った管理局の魔導師の中に、一級危険指定世界の出身の少年を預かっている者がいたとは……。いやはや、世界は意外に狭いね」

男性はそう言うと、視線を移し女性を見る。

女性は男性の意図を読み取り、スーツケースを中身が男性に見えるように開いた。

スーツケースの中には、スロットが一つある赤色のバックル『ロストドライバー』が二つ。そして、『J』のロゴが入った黒いガイアメモリと、『E』のロゴが入った赤いガイアメモリが嚴重に、大事に納められていた。

これが今回、管理局に見つかる危険を犯しても絶対に届けなければ

ばならない物であり、友人から預かった大切な物。

男性が中身を確認し終え、女性はスーツケースを閉じる。

「さて、行くうか」

「はい」

男性と女性 ジェイル・スカリエツィと、戦闘機人ナンバーズ
ズのウーノは『アルピーノ探偵事務所』の扉をノックする。

『 はい。開いてますのでどうぞ』

すると、扉の向こうから男の声が聞こえた。

時空管理局・本局。

次元の海に浮かぶ巨大な艦であり、次元航行艦が停泊する港や各部署。さらにはショッピングモールや娯楽施設など、充実した設備が揃っている。

その本局の部署の一つ、技術開発部に、八神はやたと守護騎士ヴォルケンリッター。八神サカキとサカキの専用融合騎のラインフォース、閻璃、星奈、ライラからなる『鬼戦乙女』。八神組……
・もとい、八神家が訪れていた。

何故なら、新たな“家族”を迎えるためである。

「それじゃあ、起動させるよ」

「はい、お願いしますマリエルさん」

マリエル・アテンザが空間キーボードを操作し、連動して台に固定されたカプセルの中のモノに、起動信号を送る。

サカキ、はやて達はそれを静かに見守っていた。

カプセルの中には、空色の髪の30?程の少女が目覚めるのを今か今か待っていた。

少女は、起動信号を受け取りゆっくりと、両目を開ける。

「おはよう、そして初めましてや。早速で悪いけど、自己紹介お願いな?」

「はい。私は二代目祝福の風、リインフォース? (ツヴァイ) です。マイスターはやて」

カプセルから出た少女 リインフォース? はペコリと、礼儀良くお辞儀する。

彼女、融合騎リインフォース? はその名前の通り、リインフォースの後継機であり妹である。

リインフォースは兼ね兼ね、自分が持つ古代ベルカの魔導の力と技術を後世に残し、尚且つはやてのサポートをする事が出来ないかと模索していた。

それは、自分がサカキと共に歩くため。

リインフォースは気づいていた。サカキは、管理局が次元管理する世界……はやてやなのは、守護騎士達も順応し始めた世界に順応出来ない。将来、どこか遠くへ行くかも知れない。

そうだったら、ソラとキバットはサカキと共に歩くだろう。闇璃達は勿論、自分も共に歩く。

はやてのスキルは、どうしても単体では使い辛くサポートがいる。特別捜査官として既に第一線で活動しているので、戦闘は避けられない。

なので、本来サポートの役目を果たすリインフォースの代わりにはやてをサポート出来る融合騎……ユニゾンデバイスが必要だった。

故にリインフォースは、自身のリンカーコアをコピーし、それを新たな祝福の風、リインフォース？のリンカーコアにし自分の技術を継承したのだ。

「すげーゆかなボイスだ。ちょいこのセリフ试试看？」

「えっ？ えーっと、『さあ、踊りなさい。わたくし、セリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！』」

「おおーそっくりそっくり」

「因みに今のセリフは原作IS1巻108ページ10行目から引用だ」

目覚めたばかりの末っ子に早速ネタをやらせるバカ鬼とすっかり影響された鉄槌の騎士。

無論、はやてによるハリセンの一閃が入った。

「なあ子タヌキ」

「誰がタヌキやっ!?!」

ツッコミという責務をしたはやてに、闇璃が問い掛ける。

「どうでもいいが、呼び方をどうするのだ？ リンフォースが二人いるぞ」

『あ』

闇璃に言われ、星奈と早速リンフォース？と打ち解けているヲイラを除いた、全員が口を揃えた。

言われてみれば、リインフォースとリインフォース？の二人がいる。

リインフォースは言わずもがな、リインフォース？も先程のバカ鬼のボケに付き合う所から素直で真面目なタイプなのだろう。

サカキ達の誰かが『リインフォース』と呼ばば、二人とも『はい』と答えるだろう。その様子がすぐに想像出来る。

「そ、そうやった。二代目だからリインフォース？ってだけ考えとって、そこんとこ考えとらんかった……」

「だからお前は子タヌキなんだ」

「私はてつきり考えていたかと」

「何の話ー？」

「「「「……」」」」

「「はやてエ……ゲラゲラゲラ」」

そこまで頭が回っていなかったはやて。

そんなはやてを呆れた視線を向けながら言う闇璃。

対策を考えていたと思っていた星奈。

話を聞いていないライラ。

無言で視線を逸らすリインフォース、ザフィーラ、シグナム、シヤマル。

はやてにニヤニヤした顔を向けるサカキとヴィータ。

リインフォース？はどうすればいいかオロオロし、マリエルは苦笑を浮かべていた。

「うっ、うるさいわっ！　うちをそんな顔で見んなやっ！？
てーかお兄ちゃんもヴィータも、闇璃に言われた時に『あ』って言うたやんっ！　あとその笑い方ムカつくで自分らっ！」

「いや、空気を読んで言みただけ。っーか気づくだろ」

「あたしもサカキと同じ。てっきりはやては考えてるかと思っただから」

バカ鬼とチビツ子騎士の方が上手だった事実。はやては『ぐうっ！』と唸るしかなかった。

「そ、それで呼び方ですがどうします?」

「そ、そうですね! 呼び方を考えないと!」

「「シグナムエ、シャマルエ……ゲラゲラゲラ」

「「う、煩いっ!」」

「……そうですね、私がリインフォース?(アインス)、そしてリインフォース?ですから、“アインス”、“ツヴァイ”と呼んでは?」

「そっやね、そっしょか」

リインフォース? アインス、リインフォース? ツヴァイ
という事で落ち着いた。

「でもさ、アインスとツヴァイって……ガンダム・スロー
ネぼくて死亡フラグじゃね?」

「黙れやっ!」

「がふっ!」

同時刻・荒木家。

今日は色々な偶然が重なり、荒木一家は家でくつろいでいた。

そんな時、荒木家宅に来客があった。

「いやあ、まさかお前ら二人が一緒に来るとはな」

「いえ、ここに来る途中にたまたま一緒になっただけです」

荒木家家長、鎌矢に言葉に答えたのは、薄着の着物一枚を着た女性。

身長は低く、緑かかった長い髪を腰の辺りで纏め、“死体のよう

な”青白い病的な肌をしている。

「そうか。で、お前はどんなんだ？ 最近」

女性の返答に軽く返し、もう一人の来客に聞く。

こちらは男。ただし、その体長は優に二メートルは超え、はち切れんばかりの筋肉。

眉間に何重にシワが刻まれ、その顔は常に険しい表情のまま固定されている。

その姿は、正に“世紀末の霸王”。

「 錬矢よ。貴様の言う通り世界は広い。我を満足させる強者があれほどいるとは……ケンシロウに敗れ、生き恥を晒しただけはあつたぞ」

「そうかそうか。てか、喋り方固いし喋る度に威圧感出すな。食器割れる」

荒木家のリビングは、あまりにもカオスな空気に満たされ常人な

ら耐えきれず発狂する程であつた。

その空気の中で、平然と正気を保ち会話出来る三人の人外度がどれ程か窺える。

フェイトとアルフは、外で世紀末霸王の二メートルは超える黒い馬と戯れている。

人外三人は湯飲みを持ち、中のお茶を啜る。ただ世紀末霸王の持つ湯飲みだけ、異様に小さく見える。

「それにしても鍊矢さん。……貴方、また孕こつたんですか？」

「ぶふっ!？」

死人のような女性の発言に、鍊矢は口に含んだお茶を吹き出した。

「ナ、七実サン? 一体何ノ事ヲ?」

「いえ、先程の金髪の子、相変わらず手が早いと思つたので」

「違ちがつつ! 違ちがつからねっ!?! フェイトは養子! 引き取つただけだからっ!?!」

弁解する鍊矢だが、世紀末霸王と死人のような女性はジトーっとした目で鍊矢を見る。

「そうですか。……なら私を貰ってください」

「何故そうなる！？ 何の脈略もないだろっ！！」

「いえ、私もそろそろ身を固めたほうがいいかと思ひまして。……
……何でしたら体だけの関係でもいいんですよ？」

「やーめーてー！ ぶっ飛ばされるっ！ 粉々にされるっ！ 達磨
に、サンドバッグの形状にされるー！！」

「七実よ、そろそろ止めてやれ」

「そうですか。そうですね」

珍しく狼狽え翻弄される鍊矢。これをサカキが見たら、爆笑もの
だろう。

そんな鍊矢を哀れみ、世紀末霸王が女性を止める。

女性は鍊矢の反応を楽しんだのか、これ以上虐めるを止めた。

「なら、そうですね。以前聞いた鬼の子の居場所を教えていただけますか？ ちょっと行ってきますので」

だがしかし、今度はターゲットを鬼の子サカキに変えた。

「おいしいおいしいっ！ お前サカキに何する気だああああああっ！」

「何って、ナニですけど？」

「お前本気で止めるよっ！？ ソラは自分を傷つけるヤンデレなんだぞっ！？ んな事したら血だらけで部屋で倒れてるかも知んないだぞっ！？ ソラがそんな事なったらサカキも後追っつわっ！」

「へえ………」

「そこで邪悪な笑みを浮かべるなっ！ サカキって実年齢アレだけど見た目子どもだから犯罪なるわっ！」

「ドンと来いです」

「アレッ！？ 寧ろストライクッ！？ つーかお前ここ数十年で性格変わったなっ！」

「まあそんな事は置いといて、場所を教えてください」

「お前本気で行く気かっ!？」

「・・・ズズ」

「お前も呑気に茶飲んでないでツツコミ入れええええええええええええ
っ!!」

「はぁ・・・」

鍊矢が珍しくツツコミになっていた頃、いつもの鍛練場所ではソ
ラが木の根元に座りながらタメ息を吐いていた。

今日はサカキがいないため、香里と香流のホッパーライダー、ついでに淳一の王蛇を相手に、さらに今回はナイトに変身して三人を相手にしていたのだが、どうにも元気がない。

やはりサカキの事が気になって鍛練に身が入らないようである。

そのため、ナスティイベントで足止めし、トリックイベントで袋にしてファイナルイベントでトドメという、クロックアップもカードも使わせない程のオーバーキルをした事に、全く気づいていなかった。

ソラから少し離れた木には、オーバーキルされた淳一達＋キバツトが休んでいた。

「お前達、大丈夫か？」

「な、何とか……………」

「いつもの倍以上にキツイ……………」

「……………」

キバツトの言葉に香里と香流は返事をするが、淳一は喋れない程消耗していた。

変に反撃しようとした分、重点的に攻撃されたからだ。

（サカキ様……今頃何をしているんでしょうか？ サカキ様……）

（まったく。ソラも一緒に行けばいいのに遠慮するから。性格が災いしたな）

青空を見上げながらサカキの事ばかり考えるソラを、キバットは手の掛かる妹を、娘を見るような目で見ていた。

ソラはサカキに、恋心を抱いている。しかし、端から見たら一目瞭然なそれも、ソラ自身はそれが“恋”だという事に気づいていない。

初恋なのだ。

『蒼剣のキバ』の継承者として、先代である父の、家の部下の恥にならないよう常に気を張っていた彼女にとって、“恋をする余裕”がなかった。

だが、地球に来て、力強い瞳を持つ鬼 サカキと出会い、自分をバケガニから守ってくれた、その背中を見て、魅せられ、心から本能から惹かれたのだ。

しかし今まで“恋”を知らなかった少女にとって、その感情に気づくのは容易ではない。

「ちっ、あのタヌキめ……!!」

所戻って本局。

サカキは愚痴を言いながら通路を歩いていた。ボケをした責任に、はやてに全員分の飲み物を買ってくるよう言われたのだ。

休憩スペースに置かれている自動販売機を見つけ、渡されていたミッド通貨を投入する。

全てミッド文字で書かれていたため、サカキは勘で購入する。

因みに、購入した缶ジュースの銘柄を日本語に直すと、『ホットコーラ』である。

「あ、やっぱりサカキ君だ」

「やあ」

音式神も出し、数本を持たせ自分も缶ジュースを持つサカキに声を掛ける人物が居た。

クロノとエイミィの二人である。

「お前らか。何で居るって、当たり前か」

「ここは僕達の仕事場でもある。居るのは当たり前さ」

クロノはそう言うと、休憩スペースに置かれている椅子に腰掛け、サカキにも座るよう促す。その間に、エイミィは人物とクロノの分のジュースを買う。

サカキは断る理由がないので、クロノの隣に座り自分の分の缶ジュースを開ける。

サカキとクロノの関係はかなり友好である。

厳しい、固いとよく言われるクロノだが、サカキのような戦闘者からしたら、その固さは寧ろ好印象であり、逆に、なのはのようなタイプは嫌いであった。

「サカキ、グレアム提督……いや、元提督の事なんだが」
「許さねえよ」

クロノの言葉を、サカキの鋭い声が遮った。

「……まだ最後まで言っていないんだが」

「知らねえよ。あのジジイがどうなるうが、俺は一生許さねえ。一生な」

サカキの言葉に、クロノは苦笑するしかなかった。エイミイも同じである。

ギル・グレアム。

クロノの師匠であるリーゼアリア、リーゼロツテの主であり親戚と偽り、はやての生活支援をしていた人物。そして、はやての目の前で家族を消した憎むべき相手。

彼、グレアムは『最後の闇の書事件』の後、リーゼアリア、リーゼロツテと共に管理局を退職している。

表向きは年を理由に、本当の理由は責任を取って、だ。

グレアムは、今はクロノのデバイスの『デュランダル』を使い、主を吸収した闇の書を永久氷結封印しようとした。主……………はやてごことだ。

だが誤算だったのは、逆鬼・激情態が乱入した事。そして、逆鬼・激情態が魔化魍・牛鬼となった事だ。

終わり良ければ全て良し……………という訳にもいかない。

故に、『最後の闇の書事件』後グレアムと対面したサカキは彼を殺そうとした。……………同席していたクロノに止められたが。

グレアムがはやての生活支援をしていたのは、『永久に眠る前に人並みを幸せを』という、身勝手なもの。

グレアムにも、リーゼアリアやリーゼロツテにも犯行をする理由があるらしいが、サカキには関係ないし興味もない。

“二度も”家族を失い、“妹”が泣いた。

サカキがグレアムを、リーゼ姉妹を憎む理由はそれで充分だった。

クロノもエイミィも、リンディもそれを咎めはしない。

グレアム等がしようとしたのは、“正義”などではなく“罪”だ。罪は裁かれなければならない。何も知らぬ少女を犠牲にしようとしたのだから、余計にだ。

だから、“罪の重さ”を忘れないために、サカキのような憎む者

が必要でもあった。

それに、グレアム等をどう思うかはサカキの勝手だ。周りから言うべき事でもない。

因みに、はやてはグレアムが自分ごと闇の書を封印しようとした事を知らない。

今まで生活支援してきてくれた親戚は実は嘘で、全ては“復讐”するための演技だったなど、まだ子どものはやてには耐えられないからだ。

はやてが成長し事実を受け入れられる年齢になったら、グレアムの口から直接伝えられる事になっている。

「そうか。そうだったな。ならもう、この話は止めよう。……
・はやてと守護騎士達の事だ」

クロノはグレアムの話から切り替える。

はやてと守護騎士達は、管理局の内側にも外側にも敵が多い。

過去数十年に渡り……管理局が設立された時から多大な被害を出してきた闇の書。故に、恨む者は多い。

もう闇の書……夜天の書は被害を出さない。守護騎士達も管理局の仕事をして償っている。などと言って、誰が納得するか。

怨みというのは、理屈ではないのだ。

さらに直接的な恨みを持っていない高官でも、はやて達を快く思っていない者がキツイ仕事を回す。

中には、怨み辛みではなく何気に出世コースに乗っているはやて達の邪魔をしようと、これまでの『闇の書事件』で家族や親しい者を亡くした武装隊の魔導師や、管理局の外の魔導師に情報を売り命を狙う者までいる始末だ。

つい先日、はやて達を狙った魔導師がちょうどイライラしていた王蛇にボコられたばかりである。

「襲撃犯が喋ったよ。これで今回の主犯者を逮捕できる」

「そうかい。てか、何で俺に言う?」

「君の家族に関する事だ。君に話すのは当然だろう?」

「それもそうだな。……さて、そろそろ行くか」

「による? もう行くの?」

「ああ、あんまり遅いとタヌキが煩いからな」

サカキは購入した缶ジュースを持ち立ち去って行く。

クロノとエイミィは、そんなサカキの後ろ姿を見送った。

再び荒木家。

世紀末霸王と死人のように女性は既に帰っており、代わりに緑色のショートカットの少女が訪れていた。

「今日はよく客が来る日だなあ。今度はお前か」

「今日は仕事が休みなので、たまには“外の世界”に行ってみようと思ってます」

鍊矢の言葉にそう返し、少女は出されたお茶を啜る。啜って、『はあ』とタメ息を吐いた。

「どうしたあ、タメ息なんか吐いて。小町がまた仕事サボってるのかあ？」

「小町が仕事をサボるのはいつもの事です。

今タメ息を吐いたのは、行ってみようと思って簡単に来れる“この世界”の事です！」

そもそも、世界というものは別世界と交わらぬよう管理者がいるものです！ 幻想郷なら博麗の巫女や八雲 紫のような存在です！なのに貴方はこの世界の管理者を『キュツ』としてドカーン』しました！ 本来なら貴方が新たな管理者として責任を負うべきなのに貴方はそれをせず、そのまま放置！ そのせいでこの世界は“拒絶”をせず“受け入れる”まま！ 私のような強すぎる存在が簡単に入り出来る世界になっているんですよ！？ このままだったらこの世界は膨張し過ぎていずれ

「あー、はいはい。わあってるわあってるの」

少女が始めた説教を、鍊矢は手をヒラヒラさせて遮った。

目の前の少女の説教は、ディケイド・激情態だろうが黒目アルティメットクウガだろうが、正座して意識を失うほど長い。なので鍊

矢は適当な所で止めたのだ。

少女もタメ息を吐いて止めた。

この男とは長い付き合いで、説教が意味ない事はよく知っている。

当の錬矢は全く気にしていない。

「で、映姫よ。……ゆかりんから平行世界の幻想郷が見つかったって聞いたが、どうだ？」

錬矢の声が、真剣みを帯びたものになる。

少女もそれを受け、先程までの空気から一転する。

お茶を一度啜り、湯飲みを置く。

「……八雲 紫が“あちらの”八雲 紫とコンタクトを取りました。結果、“幻想郷に関しては”相互不干渉を決めました」
「それはつまり、“幻想郷以外なら”弾幕ごっこするなりしても構わないと」

錬矢がそう言うと、少女は途端に苦笑する。

つまり、もし争うような事になれば他の世界……特に破壊者だろぅが閻魔だろぅが拒絶せず受け入れる、『逆鬼の世界』が戦場になり得るといふ事だ。

それは、錬矢にとっても本意ではない。

「ま、俺の方でも動いてみるか」

「そうですか。まあ貴方の方が動きやすいでしょうから、そうしてくれとありがたいですね。

あ、稗田 阿求がそろそろ『幻想郷縁起』でグリードの頁を更新したいそうだから、顔を出したほうがいいですよ？」

「あれ、もうそんな時期だっけか？ 前に更新したのいつだっけ……」

「八代目の最後では？」

錬矢は『そんな前だっけか？』と言い、頭を掻く。

先程までの真剣な空気は完全に消え、穏やかな空気になっていった。

錬矢はシリアスが長続きしない。直ぐにおちゃらけた空気になる

のだ。

その後、錬矢と少女は、少女の部下のサボリ癖や何故か女性に人気になっている虫頭グリードについてなど、世間話をして過ごし、ドラグブラッカーと空の散歩に行っていたフェイトが帰ってくるまで続いた。

四十ノ巻に続く

三十九ノ巻 『二代目祝福の風と混沌（カオス）な来客と晴れない恨み』（後書き

二代目祝福の風 リインフォース？

混沌カオスな来客 世紀末霸王と刀が語るチート姉ちゃん

晴れない恨み 目の前で家族を消されて妹を泣かされた

な今回のお話。いや、これ以外にもありましたが。

以前から出ていた『E』のメモリは『EATER』^{イーター}でした。

『喰らう記憶』ですが、相手の能力を喰らって自分の能力に……という事ではありませんので、悪しからず。

今回二代目祝福の風、リインフォース？が登場しました！ マスコットです。

ソラはもうこんな感じなので見守っててください（苦笑）。

錬矢の無駄に広い人脈（？）を表現しようとしたらこうなったっ！
特に刀が語るチート姉ちゃんなんて遊びすぎてこうなっちゃったし、
けど反省も後悔もないっ！！

サカキは本編で語った通り、グラムを恨んでいます。

理由は本編で書いた通り。牛鬼になるほどですから、簡単に晴れま

せん。

それに、サカキは身内主義なので世界を守るためだとか、理由以前に言い訳にもなりません。

次回は仮面3さんの『仮面ライダー龍騎 闘いの火種は幻想の都へ』のコラボです。

錬矢と少女、てか閻魔の四季映姫・ヤマザナドウの会話はコラボの伏線だったり。

ただ、4年後に時間が跳びます。つまり中二です。人生でもっともバカになる時期です。

四十ノ巻『本能と時の守護者と欲望の王の来訪』（前書き）

今回からコラボ編。

仮面3さんの『仮面ライダー龍騎 闘いの火種は幻想の都へ』とコラボです。

でも龍騎は出ません。

そして、前回から四年後の世界。淳一達が14歳で、ソラが16歳。サカキは実年齢40歳です。

では、お楽しみください

四十ノ巻『本能と時の守護者と欲望の王の来訪』

『逆鬼の世界』は、前回より四年の月日が過ぎていた。

別に“イボ”が大量発生したわけではない。本当に四年が経ったのだ。

四年も経てば当然成長し、当時10歳だったサカキ達　サカキ
本人は除いて　は14歳。中学二年生である。

中二。即ち、人生でもっとも“バカ”になる時期だ。

今回は、そんな時期の初めに起きた出来事である……。

海鳴市のとある道沿いにあるとある公衆電話ボックス。

携帯電話の普及でほぼ使う者はいなくなり、さらに市街地からも少し離れているのもあって、使われる頻度が皆無な電話ボックス。だが、その電話ボックスの扉が開き、中から二人の人間が現れた。

一人は、寝癖が強く残った髪で表情は不機嫌と眠いのが両方出ている青年。

もう一人は、短いポニーテールの女性……に見えるが、れっきとした男性。こちらにも、もう一人の青年ほどではないが、不機嫌そうな顔をしている。

「……つい……た……」

「……久しぶりだな、外の世界も」

二人の青年は、各々の感想を漏らす。

この二人の感想から、二人は『逆鬼の世界』とは別世界から来た事が窺える。

寝癖が強く、片言で喋る青年の名前は『時森将斗』。

女性に見える短いポニーテールの青年は『楯神詩織』。

二人はライダーであり、将斗は時の運行を守る『仮面ライダー鎧王』。

詩織は『獣王の記憶』が内包されたガイアメモリで変身する『仮面ライダーリオン』である。

二人は現在は幻想の都 『もう一つの幻想郷』のライダーであるが、二人はある理由のため『逆鬼の世界』に訪れていた。

「まったく、何で僕達が……」

「……………」

詩織が腰に手をあて、溜め息を吐きながら愚痴を言う。

口にはしないが、将斗も同意見のようだ。

何故この“三人”が『逆鬼の世界』に来たかと言えば、それは詩織達と同じ世界に居たライダーが原因だった。

仮面ライダーオーズ。

それが詩織達がこの世界に来た原因を作ったライダー。

最初に断っておくが、その原因のオーズは名無ではない。

確かに名無も仮面ライダーオーズで幻想郷のライダーであるが、別人だ。

世界はいくつもある。平行世界も数えられないほどある。いくら結界で隔離された幻想郷でも、例外ではない。

その『もう一つの幻想郷』のオーズが、同行者と共にこの世界に来ており、詩織達はオーズと同行者を連れ戻すよう言われて来たのだ。

【そう言うな二人共。前にも言ったが、私達はあの人……あの世界に世話になっている。少しばかりも恩返ししなければ】

「分かつ………てる………」

姿が見えない第三者に、将斗は嫌々返す。

この第三者は将斗と契約した孔雀がモチーフのイメージ、『メルカバ』である。

今のは、メルカバが将斗の中から二人に語りかけたのだ。

「分かってますよ先生。………それで、リュウガが言ってい

た現地の協力者というのは……」

「……これし……か……手懸かり……ない……」

将斗は一枚のカード　時の列車のチケットを取り出す。

本来、時の列車のチケットには行き先の時間が書かれているのだが彼が取り出したチケットには書かれておらず、イメージやライダーの姿が描かれている部分にはライダーの姿が描かれているのだが、見る角度によってリュウガ、オーガ、G4-Ax、ラハブ、アモン、そして唯一悪魔のような怪人に変わる。

このチケットは、『逆鬼の世界』に来るために詩織達が出た『もう一つの幻想郷』の将斗達の司令塔とも言える謎の多いライダー、リュウガ（正体不明）より渡された物だ。

リュウガから現地協力者について、『とにかく真つ黒』としか伝えられておらず、手懸かりは複数のライダーが描かれているチケットだけしかない。

無論、この小説を長らく読まれている方々なら誰を指しているかお分かりだろう。

「これだけの手懸かりでどうやって会えと」

「無理」

詩織の言う通り、これだけの手懸かり、しかも見知らぬ土地で特定の人物を探すのは並み大抵の労力では不可能だ。

片言でしか喋れない将斗ですら、ハッキリと言う始末。

さすがのメルカバも、これではフォローの言葉が見つからない。

【とにかく、街に行ってみよう。何か手懸かりが掴めるかも知れない】

「……………そうですね。確率は低いですが、それしかありそうにないですから」

「……………う……………ん……………」

メルカバの提案に、詩織と将斗はとりあえず頷いた……………。

海鳴市のとある山の中。

森の開けた場所に、一人の少年がいた。

Tシャツにズボン、その上からド派手な朱色の着物を着流しており、右手で支えたキセルをくわえている。

腰からは折り畳まれた音叉と、石でできたディスクと金属でできたディスクを3枚ずつ、計6枚のCDほどのディスクを下げている。

少年はキセルを口から離し、空を見上げ口を開いた。

「……………面白い事が起きそうだ」

口を歪ませ、少年は笑う。

そして再びキセルをくわえ、踵を返して歩き……………ちよう

ど足下に落ちていたバナナの皮をふんずけ、派手にズッコケた。

「ギャフンツ!？」

少年はマンガのように足を高々と上げ、後頭部を強打した。

「いっでエっ! ……アイアンツ! バナナ食ったら皮は埋める言ったるうがっ!！」

『ゴォ』

文句を言う少年に、鉄色の巨大な二足歩行のゴリラは、バナナ片手にすまなそうに鳴く。

……いまいち締まらなかった。

詩織達は、海鳴市の商店街に到着していた。

ここまで来る途中で、詩織はほぼ、将斗は幾分か機嫌が戻っていた。

「賑やかな商店街だね、将斗」

「・・・・・・・・・・う・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

商店街の賑やかさを見て、詩織の言葉に将斗は頷く。

『もう一つの幻想郷』にも街・・・・・・・・と言つか、人里はあるが建物や家が全て木製と一昔二昔前（江戸時代から明治時代の間）で、“現代”出身の二人にとってこの街並みは懐かしい物だった。

「た、助けくれええええええつ!!」

暫く歩き、路地の入口前を通ろうとした時、路地から高校生ほどの男が飛び出してきた。

進行方向に詩織と将斗が居たが、男は構わず突き飛ばしてでも進もうとする。なので、詩織と将斗は男を避けた。

男は二人を突き飛ばそうとしていたため、避けられたのでバランスを崩し顔面からコンクリートの地面に倒れる。

「つてつ！？ 何しやがるっ！？」

「貴方が突っ込んできたので避けただけです」

逆上した男が突っ掛かってくるが、詩織はシレッと返す。将斗にいたっては、興味がなく欠伸をしていた。

男は将斗に反応に腹を立て、二人に因縁をつけようとする。……だが、興奮のあまり男は一瞬忘れていたが、すぐに思い出した。

自分が、その路地から“逃げてきた”事を。

「おい」

「ひっ!?!」

路地から聞こえた声に、男はビクッと震える。

声の主　新たに路地から現れた、無造作に伸ばした茶髪に蛇柄の革のジャケットを着た中学生ほどの少年に、詩織達に突っ掛かるうとした男は怯えていた。

「途中で逃げるなよ。イライラが止まらないだろう……? 潰れる」

「ッ!?!」

一撃。

少年は男に近づくなり、鳩尾に一撃を入れ、宣言通り男を潰す。

詩織達は、目の前の光景に驚いた。

いきなり少年が男を殴った事ではなく、格好だけ見ればただの不良の少年の動きが、乱暴ながらも玄人の物だったからだ。

「アア？ なんだお前」

ジッと見ていたためか、ガラの悪い少年は詩織の視線に気付く。

詩織は内心しまったと呟いた。

こういふ輩には、関わらない方がいい。

「淳一、噛みつかないの。その人達、明らかに通りすがりよ」

すると、また新たな声が聞こえ、ガラの悪い少年は声のした方に顔を向けた。

そこに居たのは薄茶の髪の瓜二つの中学生ほどの少年少女。

どうやら双子のようで、腰まである薄茶の長髪を少女はそのままストレートに下ろし、少年は眼鏡を掛け首の後ろで髪を一つに纏めている。

格好は色違いのシャツの上に右肩から先を切り落としたロングコートと上半身は似たような格好だが、少女はスリットの入った膝上までのスカート。スカートの裾の下からスパッツが見える。

「お前らか……………」

「ホントに蛇だね、君は。目に入ったモノ全部に噛みつく」

「ごめんなさい。知り合いが突っ掛かろうとして……………」

ガラの悪い少年が睨むのに対し、眼鏡を掛けた少年は戒め、少女は詩織達に謝罪する。

双子の少女と少年はガラの悪い少年とはよく見知った仲らしく、通常なら避けるだろうガラの悪い少年に、普通に接していた。

「いえいえ、こっちもジツと見てたのが悪かったですし、実害は
ありませんから。
ね、将斗」

「だいじょう……………ぶ……………」

謝られた詩織は、自分にも非があると返す。

人間誰しも、ジツと見られたらいい気分はしないだろう。

それに睨まれただけで、実際に何かされたわけでもない。

「そうですねか……では、私達は失礼します。そちらも、面倒事に巻き込まれる前にここから離れたほうがいいですよ？」

少女はそう言うと、足早に離れて行く。

ガラの悪い少年も、眼鏡を掛けた少年に引つ張られ舌打ちしながら少女を後を追った。

周りには、いつの間にか人混みが出来ていた。さらにその向こうから、警官らしき人間がこちらに向かっていった。

先程のガラの悪い少年が、今も足下で寝ている男と一悶着あったのを聞きつけたのだろう。

詩織と将斗は絡まれただけで、別に何もしていないが、二人にはこの世界（逆鬼の世界）の戸籍がない。そのため、警察などに関わると面倒な事になる可能性があった。

なので、詩織と将斗も、人混みに紛れてその場から離れていく。

「どじ……した……？」

【いや……気のせいだったみたいだ】

だが、気づいていなかった。

足早に歩く二人を、金色の光の玉が追っていた事に……。

海鳴市のとあるビルの屋上。

本来、関係者以外立ち入り禁止のその場所に、長い金髪の青年と、唾つきの帽子を弄んでいる橙・黄・薄黄の色が混じった髪の少女が居た。

「この青年が詩織と将斗、メルカバが探していたライダー、仮面ライダーオーズ　魅空。」

そして魅空と行動を共にしている少女が、とある少女の体を間借りしているグリード　猫系グリードのカザリだ。

やはりこちらのカザリも、以前月村家の騒動で錬矢に呼び出されたカザリとは別人の、『もう一つの幻想郷』のカザリである。

「　ヤミー作ってセルメダル稼いでいるわけでもないみたいだね、そのウルってグリード。て言うか、本当にいるの？」

「それは間違いないって！　あいつが、平行世界の幻想郷にもグリードが居て、一人だけこの世界に居るって」

街を一望している少女の姿をしたカザリの疑いの言葉に、魅空はそう返す。

魅空の言うあいつとは、詩織達を派遣したリュウガの事だ。

そもそも、魅空とカザリが『逆鬼の世界』に来たのは、リュウガが“誰か”と平行世界の　名無がいる　幻想郷……強いては『逆鬼の世界』に滞在するグリードについて話しているのを盗み聞きしたからだ。

そのグリードの名は……ウル。あの悪魔の事だ。

とある事情により、魅空の持つコアメダルは力を失っており使用出来ないでいた。

これでは目的が果たせない、とコアメダル不足に悩んでいた魅空は、リュウガが“誰か”と話している所を盗み聞きし、そのウルというグリードのコアメダルを盗もうと企んで魅空の持つ特殊な道具を使って『逆鬼の世界』に来たのだ。

本当は平行世界の幻想郷に居るグリード アンクやカザリからも奪おうと考えたが、そちらにもオーズが居て、さらにあと二人ライダーが居るとの事で断念した。

「あそう。でも、このまま見つからなかったら不味いよ？」

「そうだよなー。あいつも俺達がこっち来てる事気づいてるだろうし、追つてが来るかも。」

「ま、多くて二人三人だろうけど」

さらに魅空には、リュウガの仲間のライダーの能力諸々の理由で追つてが誰かというのも予想がついていた。……詩織と将斗、将斗のおまけにメルカバだ。

だが、予想出来たからと言って、油断できない相手というのも重々承知している。

できるなら、見つかる前にコアメダルをかつ拐いたところだ。

「よしカザリ。テキトーなヤミー作って誘き出せ。グリードなら、ヤミーに直ぐに気づいて来るだろうからな」

「……………それもそうだね。僕もセルメダルも欲しいし、少し稼ぐかな」

魅空の提案に、カザリは少し考え同意した後、手摺に手を掛け飛び降りた。

十階建てのビルだが、カザリの反射神経と身体能力があれば問題ない。それに、カザリが使っている体も人間ではないのだ。

「だって、猫だしなー」

そして魅空も、動きだした。

(.....どうしてこうなったっ!?)

魅空と別れ、ヤミーを作るため動いたはずのカザリは心の中で叫んだ。

そんな彼(彼女?)の格好はTシャツにパーカー、ショートパンツ。そしてパーカーの上から、胸の上部に小さく『翠屋』と描かれた黒のエプロン。

「い、いらっしやませー」

新たなお客様がくれば、営業スマイルで出迎える。

何故こうなったか。

カザリは、魅空に言われた通りヤミーを作ろうと、手頃な欲望を持つ人間を探していた。

暫く歩いていると、何やら悩みながら歩く女性を見つけ、この女性をヤミーの親にしようとセルメダルを持って近づき、いざメダルを投入しようとした時、突如女性が振り返り、カザリの方を向いた。

予想外の事に硬直するカザリ。女性はカザリの顔をマジマジと見た後、カザリ両肩を掴んでこう言った。

『今日一日、うちのお店で働かないっ!?!』と……………。

「シヨウちゃん、これお願いい」

「は、はい」

その女性　桃子がケーキと紅茶が乗ったトレイを渡し、カザリはそれを受け取り配膳する。

何でも、バイトの子が彼氏と駆け落ちしてしまい、知り合いやらも用事を出払っていたり接客能力に不安があったりと頼りにできず、悩んでいた所を近くにいた少女　カザリを見つけたとか。

桃子の勢いに負け、首を縦に振ってしまったカザリは喫茶『翠屋』

で接客をする事に……。

その際、体の元の持ち主のである少女の名前を偽名として使用した。

「シヨウちゃん、本当にごめんね。ラッシュ時間が終わったらあがつていいし、ちゃんと給料も払うから」

「い、いえ、お気になさらず……（何で僕がこんな事を……）」

桃子の娘である美由紀に謝罪され、カザリは丁寧に返しつつ内心悪態ついた。

ヤミーを作るために近づいたのにこんな事になり、更に愛想よく笑っていれば客の男共が鼻下を伸ばす。

カザリ　の体の少女　の顔が良いせいであるが、鼻の下を伸ばした男共がああ男……・魅空を彷彿とさせ、かーなーイライラする。

カザリが魅空と『逆鬼の世界』に来て数日。魅空が見切り発車で来たため資金に不安があり毎日ジャンクフード。

更に出費を抑えるため、寝泊まりは近所の公園なのだが……
・魅空が必ず引っ付いてくる。卑猥的な意味で。

中身はカザリだが見た目は美少女。魅空は面食いで、見た目が美少女なら性格に問題あるうがポジティブに捉え　カザリの性格＋美少女♡ツンデレ美少女という図式で　必ずセクハラしてくる。・・・・してくる度に手足を折るが、効果無し。

コアメダルも盗られ、セクハラの数々。逆らえば、鳥でもないのにコアメダルが真っ赤になる目に会う。非常に腹立たしい。・・・・でも一緒に行動すると面白いのも事実。

(やっぱり、ガメルと留守番してた方がよかつたかな。・・・・?)

「シヨウちゃん、これ七番テーブルにお願い」

「はい。・・・・ってデカツ!?!」

「お得意様専用の超ジャンボパフェ。その名も『悪魔も大満足パフェ』よ」

何そのネーミング。

と思うカザリの前にあるのは、通常ジャンボパフェと呼ばれる物の優に5倍。

あり得ない大きさのパフェに引くカザリだが、仕事なので他のバイトの店員に手伝ってもらいつつ『悪魔も大満足パフェ』を運ぶ。

超ジャンボパフェを運ぶテーブルに座っているのは全身真っ黒な怪しい男。

「おおー来た来た！ ……って新人ちゃん？」

「今日一日だけですけど。ではごゆっくり」

カザリは一礼し、背を向けすぐに離れていく。興味がなかったからだ。

真っ黒な男はカザリの背中を見ながら、影の入った不気味な笑みを浮かべ

「おお頑張れよ、“カザリ”」

そう、言った。

だがカザリは、真っ黒な男の言葉に気づかなかった。

同時刻、海鳴市の住宅街を歩く二人の少女がいた。

一人は、藍色の腰まで届くポニーテールに青い瞳。ジーンズ生地のジャケットにロングスカート姿の少女。肩掛けのリュックサックを肩に掛けている。

もう一人は、長い金髪をストレートにルビー色の瞳の少女。こちらの服装は白のシャツの上に黒のジャケット、黒のスカートなのだが……何故かボロボロで俯きながら歩いている。

この二人の少女、歳は16、14なのだが……歳不相応なプロポーションの持ち主だった。

つまり分かりやすく言うと、“ボンツキュッボンツ”なのだ。

藍色の髪の少女 ソラ・ザ・ファルコンはミッドチルダの実家に。

金髪の少女　フェイト・T・荒木はちょっとした所に出掛けていて、今帰ってきたところであった。

「フェイト様……大丈夫ですか？」

「……うん、大丈夫……私はまだいける……」

フェイトを心配し、ソラが尋ねるがフェイトは俯いたまま、焦点が合っていない目をして呟いた。

全然大丈夫じゃない。

フェイトはここ最近、ある事に挑戦しており帰ってくる度にボロボロになってくる。

ソラは気になって、以前に事情を知っているだろう彼女の父親に尋ねたら、苦笑をしながら

『これはフェイトだけでやらなきゃならん事だから、そつと見守ってやっててくれ』

と言われた。

フェイトの父親がそう言うのだから、命の危険はないのだろうし自分が手出しする問題ではないのだろう、とソラは判断していた。

だがこう毎回ボロボロになっているのを見ると、どうにも心配になる。

「あの、フェイト様……………」

チャリン……………」

《Sir、御守りが落ちました》

ソラが意を決して聞こうとした時だ。

何か硬い物が落ち、コンクリートの地面に当たった音が聞こえ、フェイトのデバイス　バルディッシュが知らせた。

「あー危なかった。ありがとう、バルディッシュ」

《いえ》

バルディッシュに知らされ、フェイトはすぐに反応し落とした物を拾う。

お礼を言うと、バルディッシュは短く返事をした。

フェイトが拾ったのは、金の縁取りの黒いメダル。表面には何か異形……悪魔の顔が描かれている。

ソラはそれが気になり、フェイトに聞いた。

「フェイト様、それ……メダルですか？」

「うん。父さんが御守りにって、中学校に入学した時にくれたんだ」

そう嬉しそうに語るフェイトを見て、ソラは成る程と納得した。

フェイトの父親なら、悪魔が描かれたメダルを御守り代わりに渡すのは十分に考えられる。

彼からの贈り物は、ソラを含めた『逆鬼の世界』のライダーとフェイトに渡された大型の携帯電話、腕時計、デジタルカメラなどの『メモリガジェット』。

ソラ“は”断ったが、移動に便利という理由で渡されたバイクなど、普通のプレゼントとは違う物を贈ってくるのだ……

ソラ以外のライダーは全員、14歳なのだが。

メダルをスカートのポケットに入れ、フェイトとソラは自宅に向かって再び歩きだす。すると、背後から声を掛けられた。

「あの、ちょっといいですか？」

「はい？」

ソラとフェイトは声を重ね、後ろを振り返る。そこには、金髪の青年 魅空が笑顔を浮かべ立っていた。

「そのメダル、見せてもらっていいですか？」

四十一ノ巻に続く

四十ノ巻『本能と時の守護者と欲望の王の来訪』（後書き）

本能 詩織／仮面ライダーリオン

時の守護者 将斗／仮面ライダー鎧王

欲望の王 魅空／仮面ライダーオーズ

な今回のお話、いかがだったでしょうか。

自分も東方Projectと仮面ライダーのクロス小説を書いており『仮面ライダー逆鬼』とリンクしているので、仮面3さんの幻想郷は平行世界の幻想郷という設定です。分かり難くてすみません（
^ー^；）

『逆鬼』のキャラは、ソラとフェイト以外は名前無しですがちゃんと出てます。

次回は戦闘を予定。意外な展開になる、かも？

現在、闇丸EXE・さんの『けいおん！ 仮面のヴァイオリン弾き』にサカキ・ソラ・悪魔・・・もとい鍊矢がコラボで行っています。そちらも是非ご覧ください。

四十一ノ巻『シユークリームはマヨの味』（前書き）

コラボ二話目、バトルにする予定でしたが予定を変更しました。

淳一がぶっ壊れます。

四十一ノ巻『シユークリームはマヨの味』

「そのメダル、見せてもらっていいですか？」

ソラとフェイトの前に現れた金髪の青年　魅空。

魅空は人の良さそうな笑みを浮かべ、二人に話し掛けてきた。

メダル、というのはフェイトの持っている悪魔の顔が描かれた黒いメダルを言っているのだろう。

ソラは、メダルはフェイトの物のため何も言わない。相手は人が良さそうな人物に見えるので、見せるくらいなら何の問題もないだろう、とソラは思っていた。

だが、フェイトは違った。

フェイトは即座に金色の槍　プラスマランサーを一つ造りだし、魅空に向かって撃ち出した。

魅空は咄嗟に、片刃の大剣　メダジャリバーを取り出しプラスマランサーを受け止めた。

「……いきなり攻撃とは、どういう教育受けてんだ？」

「普通の教育ですよ？ それに、父さんが言っていました。『このメダルの事で近づいて来た奴は敵だ』って」

メダジャリバーを軽く振り、先程までの笑みから一転し魅空はフエイトを睨む。

対してフエイトは、怯む事なく周りに魔力スフィアを四つ生成し、いつでも撃ち出せる体制に入っていた。

ソラも、最初こそフエイトの行動に驚いたが、目の前の青年が大剣を取り出し雰囲気を一転させた事により、只者ではない事を察知した。

「成る程ねえ。……さっきの攻撃、電撃込みの魔力弾みたいだっただけ、お前、魔法使い？」

「いえ、私は“魔砲使い”じゃありませんよ？ ただの魔導師です」

「あ、そっ」と魅空は切り捨て、メダジャリバーを右手から左手に持ち替える。代わりに、右手には黒に水色の線が入った長方形のバツクル オーズドライバーが握られていた。

「適当に騙してメダル奪えば良かったんだが、まあいいや。こっちの方が楽だし」

オーズドライバーを腹の下の部分にあてると、ドライバーからベルトが伸び魅空の腰に固定する。

魅空はドライバーの窪みに、向かって左から赤・黄・緑のメダルを入れ、左手で斜めに傾ける。同時に、右手でベルトの右側に装備されているオースキャナーを持ち、ドライバーの前で滑らせ・・・
・ようとした時、ソラとフェイトが、自分の後ろを見ている事に気がつき動きを止めた。

「・・・志村、後ろ後ろ」

「誰が志村だっ！？ てか、後ろ？」

フェイトに言われ、魅空はツツコンだ後後ろを振り向いた・・・
・。

『ゲル』

そこには、暗黒龍　ドラグブロッカーが『いただきます』と大口を開けていた。

「ええーつと……………」

『バクッ』という音と共に、ドラグブロッカーは魅空の頭からかぶりつく。

頭を上に向け、下半身だけ出ている魅空を完全に口の中を含む。

『クチャクチャクチャ……………』

“しっかりと”噛み、口の中をモゴモゴさせる。そして、

『シッ。』

吐き出した。

『グル』

「不味い、だつて」

「えええ………」

ソラは、何とも言えない空気にただそうとしか言えなかった。

ちょっとシリアスな空気だったのに、この感じ。

そのままバトルに入りそうだったのに………。リュックサックの中でスタンバってたキバットに謝ってほしい。

そんな事を思いつつ、ソラは唾液でベトベトン……。ベトベトになりギャグな意味でポロポロの魅空に同情しながらどうするかフェイトに尋ねた。

「フェイト様、あの方はどうしましょう」

「放置でいいんじゃないかな？ どうせ父さん絡みだろうし」

『グルグル』

“ どうせ ” と言う、完全に染まったフェイト。ドラグブロッカーもうんうんと頷く。彼女の父親・ドラグブロッカーの主人はこれがデフォの扱いだ。

「 あ、もしもアルフ？ 今から帰るから。うん、ブロッカーのご飯もね 」

戸惑うソラの横で、フェイトは黄色のスタッグフォンで自宅に連絡しながら歩きだす。

ソラも数秒迷ったが、すぐにフェイトの後を追う。愛しの鬼に、お土産があるのだ。すぐにでも渡したい。

ドラグブロッカーもミラーワールドに戻ったため、魅空はそのまま放置となった。

放置だ。

大事な事なので二回言った。

所変わって喫茶翠屋。

詩織と将斗（インメルカバ）はここに居た。というのも……

「先程はすみませんでした」

「ここは僕達の奢りで、好きな物を頼んでください」

「……………」

先程会った双子の少女と少年　御坂香里と御坂香流に再び会ったからだ。

何も言わずそっぽを向いていたが、ガラの悪い少年　浅倉淳一

も居る。

「いえ、そこまでしてもらわなくても……」

苦笑しながら詩織は断ろうとするが、御坂双子は頑として譲らない。

その後、探索を続けていたのだが、手懸かりが少なく、そもそも個人を特定出来る物でもなく、街をさ迷っていた。そんな時香里と香流、淳一と会い、先程のお詫びと言われ連れて来られたのだ。

年下の少年少女に奢らせるのは大人として情けないので尚も断ろうとする詩織を、将斗の言葉が遮った。

「……まか………せる………」

「将斗」

「こと………わ………るの、無………理………」

断るのは無理と判断した将斗は、詩織を止め香里達の判断に任せ、断る事にしたのだ。………実際は面倒になっただけだが。

詩織は将斗の性格（本年）を知っているので、タメ息を吐く。おそらく将斗の中にいるメルカバも同じだろう。

しかし、将斗の意見（建前）ももつともなので詩織は折れる事にした。

「……分りました。ですけどお任せしていいですか？僕達、メニューは知らないの」

「分かりました。すみませーん」

香流は店員を呼ぶ。

店員が来ると、翠屋のオススメメニューの『シュークリームセツト』を人数分注文し店員は一礼して去って行った。

「ところで、楯神さんと時森さんは何をしてたんですか？」

ふと、注文した物が届くまで暇だった香里がそんな事を聞いた。

詩織は話すか少し考えたが、重要な部分を省けば問題ないだろう

と考え話す事した。

「ちよつと人探しをね。でも僕達は土地勘がないし、その人の特徴もアバウト過ぎて見つけれないんだ」

「『真つ黒』……て……しか……分からない……」

() () 『真つ黒』……() ()

将斗としては、チケットを見せてもいいのだが、それだけでは分からないだろうしチケットを無闇に見せる訳にはいかない と、メルカバに言われているので、『真つ黒』以外の単語を話さなかつた。

だがしかし、香里・香流・淳一は『真つ黒』という言葉に思い当たる節があつた。

自分が知る限り、『真つ黒』なんて呼ばれる男(？)など、奴(あの悪魔)以外居ない。

正直に言うべきか悩んでる間に、注文していたシュークリームセツトをトレイに乗せた橙・黄・薄黄の髪の少女が、何故か“ぎこちない”動きでやって来ていた。

「おお、お待たせしました……………。シュークリームセット、ととです……………」

「？ すみません、どこかで会いませんでしたか？」

「いつ！？ いいいえ、人違いではっ！？ うん、確実に人違いですっ！！」

「はあ……………」

その少女の店員に見覚えのあった詩織は尋ねるが、少女は詩織の勘違いと決めつけ早々に立ち去ってしまった。

詩織は不信に思ったが、早々に立ち去ってしまったため、おそらく自分の勘違いだろう、こんな所で働いてる訳がない と思い、思考の隅に追いやった。

運ばれたシュークリームセットは、翠屋自慢のシュークリームに紅茶が付いた物で翠屋の一番人気。特に女性に人気の物だ。

だが男性にも人気なのは確かで、将斗は早速手を伸ばそうとした、しかし、目の前の光景に硬直してしまった。

将斗・詩織の向かいに座っている、香里を真ん中に将斗側に座っている淳一は何を思ったか、懐から“黄色の物体”が入った赤いキヤップのボトルを取り出すと、キヤップを開け中の“黄色の物体”をシュークリームにかけ始めたのだ。

しかも、親のガタキリバ……もとい親の仇と言わんばかりに大量にぶっかけシュークリームを覆い隠す。最早シュークリームはシュークリームではなく、“黄色いやつ”に早変わりしてしまった。

これには将斗の中でメルカバが体の主導権を取り、淳一に物申した。

「君イイっ！ 一体何をかけてるんだあああああっ!?!」

「マヨ・ネーズ」

「マヨネーズねっ！ 変な所で区切らなくていいからっ!!!」

メルカバ将斗 M将斗がシャウトするが、淳一はマヨ・ネーズぶっつけマヨネーズが大量にかかったシュークリームが変貌した物体を手に取り、そのまま口に運んだ。

さらにはセットの紅茶にもマヨネーズをぶっかけ、飲む。

これには常識人・M将斗は放心。詩織も苦笑も何もできず口をあぐり開ける。

そんな時、新たな声が割って入った。

「おいこらマヨ倉、お前まだそんな犬の工サ食ってんのか？」

「あア？ テメエはまだ『浅倉スペシャル』の味を理解でねエのか？」

いきなりの売り言葉に買い言葉。

淳一　マヨ倉淳マヨにケンカを売ったのは、淳マヨと同じくらの少年。

ズボンシャツの上から朱色の着物を着流し、腰には音角と3枚の音式神とディスクアニマル。

銀魂の銀さんみたいな格好なのに、声は子安武人な少年　八神
サカキは更にケンカ言葉を言う。

「テメエの犬の工サ、誰が理解するか。ね、お兄さん」

「えっ！？ お兄さんって私かっ！？」

「あア？ 食いもんの上にマヨネーズをかけるのはな、昔別の食いもんとマヨネーズを別々に食うのが面倒だったバルバロッサ将軍が開発した、由緒正しい食い方なんだよ。
ね、お兄さん」

「そんな由来はないっ！　というか、私を巻き込むなっ！！」

バカとマヨはM将斗を巻き込み、言い争いを続ける。当然M将斗の意見など聞いていない。

そして、バカでアホでマヨな争いはヒートアップする。

「たく、この味が分かんねエから、テメエはいつまで経っても力ナツチであの悪魔に遊ばれるんだよ」

「そんなばっか食ってっから……アレだ、その……」

「……………」

「……………」

「なんだとコラアアアアアアアッ！？」

「誰がカナツチでソラの気持ちに伝えられない、“まるでダメな男”、略して『マダオ』だっ！？」

「誰も言ってねエっ！　っーか自覚してんじやねエかよっ！！
お前も何か悪口言えよっ！？　反論しようとしてただろうがっ！
！」

下らない。あまりにも下らない争いだ。

香里・香流、詩織・M将斗も呆れるがバカとマヨの争いは止まらない。

サカキは鉄色でゴリラの紋章のカードデッキを取り出し淳一は紫色で蛇の紋章のカードデッキを取り出す。・・・・ライダーバトルを始める気だ。

詩織・M将斗は驚き、香里・香流はさすがに止めようとホッパーゼクターを呼ぼうとした。

その時だ。

「あらあら、はしゃぎ過ぎよっ」

「ッ!?!?!」

バカとマヨが、天井に突き刺さった。

「・・・・・・・・ええええええええええええつ!?!?!」

突然の事に、詩織・M将斗はシャウト。

バカマヨを打ち上げた女性　高町桃子はトレイを持った右手を
上げたまま、微笑むばかり。

「もう、サカキ君も淳一君も若いのはいいけど、お店の中で暴れち
や駄目よ？　他のお客様に迷惑になるから。分かった？」

「い、イエスロード………」

(ええええええええええええつ！?)

レジカウンターの影で、詩織達と同じように驚きの声を、口に出

さず上げている者がいた。シヨウこと、カザリである。

さつきは危なくバレそうになったので、かなりドキドキだった。

そんな時、カザリの行動に不信に思った美由紀が、声を掛けてきた。

「あれ、シヨウちゃんどうしたの？」

「えっ！？ あっ、あれ……」

「あーアレ？ 天井に突き刺さってるのは、サカキ君と淳一君って言うて知り合いなんだけど、ちよつとケンカっ早いところがあって、店の中でケンカしようとするといつもあなの。

お陰でお客さんも慣れちゃって。しかも一種の名物になってアレ目的で来るお客さんもいるの」

苦笑しながら言う美由紀の説明に、カザリは曖昧に返事するしか出来なかった。

だがそれとは別に、危機感も抱いていた。

詩織と将斗 リオンと鎧王は、オーズと同じ仮面ライダーという事で警戒していた。

ただでさえ厄介な相手が増えるのだ。これでは目的が果たせない

可能性が高くなる。

(やっぱりヤミー、造ったほうがいいかな?)

セルメダルを持ち、考える。

ヤミーを造れば、最低でも困にはなるだろう。しかし、そこから足が付く可能性もある。

どうしたものか悩んでいると、騒いでいる一団(サカキ達)に近づくと“真っ黒”がいた……。

「おいおい、騒ぎ過ぎだろうが。中学生の修学旅行ですか? この野郎」

そうやってきたのは、全身“真っ黒”な男。

全身から“怪しい”を惜しげもなく出している、怪しい・胡散臭いが歩いているような男だ。

皆のバグキャラ・荒木錬矢である。

錬矢は来るなり、桃子に向き直り軽く謝った。

「いやあー、すまんね桃子ちゃん。うちのバカ鬼とマヨ蛇が。あと今日も綺麗だ。今度夜景の見えるレストランで食事でも」

「あら嬉しい。考えておこうかしら」

と、謝るのをついでに社会的挨拶を交わす大人二名。

勿論、レストランで食事というのは、“家族ぐるみで”というのが暗黙の了解である。

「それじゃあ、仕事に戻るから後お願いしますね」

「へいへーい」

仕事に戻る桃子を見送り、頭が天井に突き刺さったバカ鬼とマヨ蛇の足を掴み、引き抜き床に叩きつける。

サカキと淳一が蛙が潰れたような声を出したが、鍊矢はそれを無視し淳一が座っていた席に腰掛けた。

「よう、初めましてだな。俺の名は荒木鍊矢。このバカ共の学校の担任だ」

「は、はあ………」

詩織は曖昧に返す。

確かにリュウガの言っていた“真っ黒”という特徴は合致するが、いきなり現れた男が、我が物顔で席に座りいきなり自己紹介してきたのだ。反応に困る。

というか、こんな“怪しい男”が学校の教師という事が疑わしい。

それに、詩織とM将斗は鍊矢よりも気になる事があった。

「ああ、お察しの通りこのバカとマヨはライダーだ。ついでにうちの双子も、俺もな」

すると詩織達の思考を見透かしたように、鍊矢は言った。

「あ、一つ訂正。俺はライダーでもあり怪人でもある。まあ、あんま珍しい事でもないがな」

「あの、いきなり過ぎて話が……」

「ああ、すまんすまん。とりあえず、リュウちゃんから話は聞いているぜ？ 仮面ライダーリオン、仮面ライダー鎧王」

それから鍊矢は語った。まずは『逆鬼の世界』のライダーの構成を。そして『もう一つの幻想郷』から、“自分のコアメダル”を狙ってオーズ 魅空が来ている事を、リュウガから聞いていた事を。

途中からサカキと淳一も復活し興味深げに聞いていた。

話の中に気になる単語があった詩織は、鍊矢に質問した。

「あの、“自分のコアメダル”と言ってましたが、それだと荒木さんは……………」

「そうだよ、俺はグリード。そして皆のお父さんだよ」

「いや意味分かんねえよ最後。

「つかオーズつて、名無と同じかよ。やっぱりカザリとか苦労してんのかな」

と、三年位前に知り合ったこっちの幻想郷にいる猫グリードの友人の姿を思い出すのはサカキ。

出会った原因は勿論、そこの悪魔のせいだ。

なお、サカキの考えはある意味当たっていた。

「へえ……………お前らライダーなのか。だったら遊んでくれよ」

そう空気をあえて読まず言ってきたのは、皆さんにマヨラーの印象が頑固強く付いたであろうマヨ倉……………もとい浅倉淳一だ。その片手には、“自作の”マヨネーズが入ったボトルを持ちキャップにストローが刺さっていた。

やっぱりマヨ倉淳マヨだった。

ボトルと逆の手には、王蛇のカードデッキを持っている。

詩織・M将斗としては、ライダー同士で戦うつもりは毛頭もうとうない。自分達の目的は、あくまで魅空を捕まえて連れ戻す事なのだ。

断ろうとした時、鍊矢が割って入ってきた。

「そうさな、確かりオンのメモリは『RAIIONESS』……
・獣王の記憶だ。上手く応用すれば『GLUTTONY』の制御の
ヒントになるかもな。」

うし、淳一、詩織。ついでに香里と香流もYARE」

「ええっ!? と言うか三体一っ!?!」

「あ、サカキー、ソラも呼んどけ」

「はいよー」

「無視っ!?! 僕の意見は無視ですかっ!?!」

「まあまあ、そんな興奮すんなって、“お嬢ちゃん”」

「僕は男だああああああああっ!?!」

「ええっ!?! 何となく分かってたけど」

「ふざけるなあああああああああああっ!?!」

再び、レジカウンターに隠れているカザリ。

「そうか……あの男がウル。この世界のグリードか」

錬矢達の会話を盗み聞きしつつ、カザリは呟いた。

言われてみれば、何となく同じグリードの感じがする。

カザリは体内に隠し持っていた赤の缶を取り出しプルタブを開ける。すると缶は鷹の形に変形した。

「魅空、呼んできて」

《 ！ 》

タカカンドロイドは 周りに聞こえないよう小さく ひと鳴きすると、開いてる窓の隙間から外へ飛んで行った。

とその時、タイミングを見計らったように桃子がやって来た。

「シヨウちゃん、ラッシュ時間も終わったからあがって大丈夫よ。無理言っでごめんなさいね」

「あ、いえ大丈夫です」

「はい、これお給料。ありがとうね」

桃子から封筒を手渡され、カザリはエプロンを外して一礼。店の裏口から出て行く。

鍊矢達はすでに店から出ており、カザリは少し離れた場所から尾行する。

正直、カンドロイドに尾行をさせれば楽なのだが、カザリ自身、自分の知らないグリードに興味があった。そしてもう一つ……

。

「あのグリードのコアメダルを取り込めば、魅空を出し抜けるかもね……」

そう呟き、カザリは口を歪ませた。

だがカザリも、サカキや詩織達も気づいていなかった……
。三日月状に口と目を歪め、笑っていた悪魔がいた事を……
。

四十一ノ巻『シユークリームはマヨの味』（後書き）

淳一の好物はマヨネーズ。食べ物には必ずマヨネーズを掛け、同時に飲み物でもあります。

御坂双子の格好は、矢車兄貴を意識した物。双子にとって矢車は憧れの対象です。

香流の眼鏡は伊達眼鏡です。

サカキは簡単に、銀魂の坂田銀時の格好です。でもサカキ（14歳）は高杉晋助。

次回は全員、鍊矢の罫にはまります。特に魅空が……。あとカザリ（爆）

四十二ノ巻『鬼VS本能とメダル強奪とカザリ爆』（前書き）

仮面ライダー逆鬼、前回までの3つの出来事！

- 1つ・魅空がドラグブロッカーに食われ、吐き出された。
- 2つ・サカキと淳一が、マヨネーズで言い争いをした。
- 3つ・詩織はなんやかんやで戦う事になった。

四十二ノ巻 『鬼VS本能とメダル強奪とカザリ爆』

海鳴市のとある山中・鍛練場。

申し訳程度に建てられた古小屋に、大太鼓や打ち込み用の木に打ち付けられた藁人形などがある、サカキ達が勝手に鍛練場として使っている場所だ。

その鍛練場に、二人の男が対峙していた。

八神サカキと、楯神詩織である。

「おーし、準備はいいかー？」

「おう」

「いつでも」

鎌矢に聞かれ、サカキは音角を持ち詩織は腰にロストドライバーを装着して右手に『R』のロゴが書かれたガイアメモリ 【ライオナスメモリ】を持ち、答える。

少し離れた場所では各面々が見守っているが、その中で一人だけ不機嫌・・・ぶっちゃけ不貞腐れているのが居た。マヨ蛇 淳一だ。

「チツ・・・・・・・・」

「マヨ・・・淳一、かなり不機嫌ね」

「まあ、マヨ・・・淳一だしね」

不機嫌な淳一を横目に、香里と香流はいつもの事と流す。

淳一が不機嫌な理由は簡単、自分が戦れなかったからだ。

元々は淳一・香里・香流対詩織の対戦だったのが、鍊矢がサカキ対詩織に変更したのだ。

「んじゃ、特にルールはないが殺しはするな。相手の変身を解かせたほうの勝ち。じゃ・・・・・・・・始めっ!!」

「変身」

合図と共に最初に動いたのはサカキ。音角を左手の甲に当てて鳴らし、額に翳す。深緑の炎が包み、サカキは炎を払い逆鬼に変身した。

(あれが音撃戦士……ライダーの鬼か)

《RAIINESS!》

「変身」

《RAIINESS!》

音撃戦士の名だけ聞いていた詩織は逆鬼を珍しそうに見つつ、ライオネスメモリのスタートアップスイッチを押す。

ガイアウイスパークが響き、メモリをロストドライバーのスロットに装填、メモリが入ったスロットを傾ける。

バツクルの前に『R』のロゴが現れ、それが碎けて破片が包んだ。

メタリックゴールドの鬚たてがみにアーマー。マスクのクラッシュャーからは二本の牙が生えている。変身完了を知らせるように、ワインレットの複眼が輝く。

『獣王の記憶』を内包したライオネスメモリで変身したライダー、仮面ライダーリオン』である。

「はっ！」

最初に仕掛けたのは逆鬼。リオンの変身完了と同時に駆け出し、数歩前で跳び右ストレートを浴びせる。

勿論リオンもただ喰らう訳でもなく、左腕でガード。逆鬼は構わず攻撃を続ける。

「ふっ、だっ、ふんっ！」

「くっ………！（見た目は雑で乱暴な攻撃だけ的確で重い………けどっ！）はぁっ！！！」

今度リオンが反撃する番だ。

逆鬼の右ストレートを受け流し、お返しに右の裏拳を放つ。

逆鬼は咄嗟にガードするが、そこからリオンの連続攻撃が始まった。

ラッシュブローの嵐が、逆鬼を襲つ。

逆鬼は両腕を交差させしっかりと守りを固める。

”今の”リオンは純粹に戦闘に特化した状態。故に、パワー型の逆鬼相手でも正面から戦える。

「危ねっ!？」

防御をすり抜けるようにリオンの貫手が眼前に迫り、逆鬼は慌てて上半身を後ろに反らし避ける。

リオンの指先には鋭い爪があり、そんなのが矛先になった貫手を喰らえば痛いでは済まない。

貫手を避けた状態から、そのままバック転する。その時、貫手で突き出されていたリオンの右腕を足で絡め、回転の勢いで投げた。

「くっっ………!？」

投げ飛ばされたリオンは空中で体制を入れ替え、着地。だがその時には、炎を纏った逆鬼の蹴りが迫っていた。

「紅蓮脚っ!!」

「がっ!？」

着地した姿勢が姿勢だったため、蹴りはリオンの横顔にヒット。逆鬼がパワー型であるため、横に大きく吹っ飛ばされた。

地面を転がるリオン。

逆鬼は追い討ちとばかりに、リオンに走りよりボールを蹴るように、再び紅蓮脚を放った。

だがその瞬間、リオンの複眼が赤から、黒に変わり姿が消える。

紅蓮脚は対象を失い、リオンが先程まで居た場所を虚しく砕く。

「なっ!？」

突然リオンが消えた事に逆鬼は驚愕した。

キックホッパーやパンチホッパーのようにクロックアップが使えるのか？

一瞬そう思ったが、クロックアップのように高速で動いてような感じではない……………。

これは、リオンの複眼が赤から黒に変わった事で発動した”捕食本能”の能力である『ゼロカラー』によるものだ。

リオンは戦闘状況によって戦い方……………”本能”と言う武器を変える事が出来る。複眼の色は、今の”本能”を表している。

赤は”フェイト闘争本能”……………純粋な正面からの戦いを得意とする力の本能。

黒は”捕食本能”……………獣が獲物を狩る時、看を隠し死角から仕留める、狩猟の本能だ。

つまり……………。

「オムニウォルスバイト」

「あだだだだだだだだっ！？」

左肩に激痛が走る。

”捕食本能”を発動したりオンは自分を景色の中に溶け込ませ、死角から忍び寄り二本の牙が生えたクラッシュシャーで、逆鬼の肩に噛

みついたのだ。

これで終わらせるつもりだったリオン。だが、逆鬼はリオン（詩織）よりも戦闘経験のある猛者だ。

「痛いわっ！！」

「ッ！？！？」

逆鬼はリオンの頭を掴むと、素直な感想と共に片手の背負い投げで足下に叩きつけた。

噛みついていたので無理矢理剥がしたため肩から出血するが、力を込め直ぐに傷を塞ぐ。

逆鬼は戦国時代で魔化魍と戦ってきたのだ。ぶっちゃけ、後ろから噛みつかれるなど日常茶飯事。そんな相手を引き剥がすなど朝飯前であった。

投げられたリオンは既に立ち上がり、体制を立て直しており対峙していた。対し、逆鬼は肩を動かし調子を確かめていた。

「たくつ、いつてえな」

「すみません。…………でも、驚いた。今を外すとは」

「後ろから噛みつかれるのは慣れてる。しかし、お前にも驚いた。目の色が変わったと思ったら、動きが変わりやがって。中々面白い」

実際、リオンの戦闘方法は逆鬼が知ってるライダーの中でもかなり異端であった。

ソラや錬矢を始めとした、仲間のライダーや、異世界のライダー。

四年前錬矢の策略で出会った、桜井黒乃が変身するキバ・レプリカフォームのような、鬼ではないのに音撃を使うのも居た。

だが自らの牙や爪で戦闘するライダーは、錬矢のデータで見せられたアマゾンやギルスなどごく少数。更に、リオンのようなタイプはまず居ない。

逆鬼はまだ知らない事だが、リオンの【ライオネスメモリ】と同じガイアメモリ 『EATER』 『GLUTTONY』 『PRE DATOR』 は、リオンと同じ部類に入る。

「さて……………続きといこうや」

「そうですね」

逆鬼は仮面の下で笑う。

リオンも仮面の下で微笑む。

リオンの複眼が黒から赤「フインレット」から「ト」”捕食”から”闘争”に戻る。

相手（逆鬼）は強い。”捕食本能”のゼロカラーによる奇襲はもう意味がないだろう。

リオンが使う本能の中で、最も凶力な本能 ”惨殺本能”があるが今回は使う必要がない。

使うに値しない訳じゃない。”惨殺本能”はリオン（詩織）の精神にまで悪影響を及ぼす。こんな”楽しい闘い”を長くするには的さない。

「……………フフッ」

「ん？ 何が可笑しい」

「いえ……………こんな楽しい”闘い”は初めてだなと思いまして」

「そうか……………」

正面から対峙する鬼と獣王……だが、闘いを無粋な輩は何処にでも居る。

《ライオン！ トラ！ バッター！》

戦いが闘いに昇華した様子を、錬矢達は見守っていた。

”一人を除いて”全員が逆鬼とリオンに集中している時を狙い、奴らは動き出した。

《ライオン！ トラ！ バッター！》

突然聞こえた電子音。そして、強烈な光がその場を満たす。

「なっ!？」

「うっ!？」

「ぐっ!？」

「きゃっ!？」

突然の強光に全員が目を潰され、身動きが取れなくなる。

その隙を狙い、一人の影が現れる。

獅子の鬣。たてがみ

虎の強靭な腕。

飛蝗の足。

亜種形態の一つである、ラトラバに変身した魅空　オーズが、
【トラクロー】を展開し錬矢に迫っていた。

「がっ・・・・・・・・！！」

錬矢の口から、苦悶の声が漏れる。

オーズが両腕の展開したトラクローを、深々と錬矢の体に突き刺していた。

錬矢達の異変は、戦闘中だった逆鬼とリオンからも見えていた。

強烈な光・・・・・・・・オーズのライオンヘッドから放たれた『ライオディアス』の射程範囲外だったため、目を潰されずに済んだ。だが、異変に気づいた時には錬矢の体にトラクローが突き刺さっていた。

「ソラ香里香流キバツトっ！ ついでにマヨ」

「荒木さんの心配はっ!？」

「しないつ!!」

ソラ+数名>錬矢。

ソラ達の身を案じた逆鬼は駆け出し、リオンも遅れて続く。

しかし、突如黄色の竜巻が二人の行く手を阻んだ。

「ぐっ………!!」

「こいつは………」

「悪いけど、邪魔しないでくれる？」

逆鬼とリオンの前に現れたのは、本来のグリードの姿になった力ザリ。先程の竜巻も、力ザリが放った物だ。

リオンは警戒し構えるのだが、逆鬼は自分達の前に現れたカザリを見て、怪訝な顔を　仮面の下で　向けていた。

「カザリ、お前何やってんだ？　今日は『幻想郷ねこの会』の集まりだろ？」

「何それっ!?!」

思わぬカーブボールに、カザリは思わずツッコんでしまう。

こつちの世界（正しくはこつち幻想郷）にも自分が居るのは聞いていた。相手もそつちの事を言っているのだろう……。

そう頭の中で納得させるが、この世界（こつちの幻想郷）の自分は一体何をしているんだっ!?!

カザリは頭を抱えずにはいられなかった。

「　カアザリイツ！　撤退いっ!!!」

そんな時、オーズ（魅空）の音が聞こえた。オーズは既にバツタレッグの跳躍力で空中に跳んでいた。両腕のトラクローには、数枚

のコアメダルが挟んでいる。

カザリは考えるのを全力で投げ捨て、オーズの後を追おうとした。
その時だ。

「させつかアツ!！」

逆鬼は近くあった”メタリックゴールド”を掴み、オーズへ向け
投擲した。

「ええええええええええええつ!?!?!」

「え? でええええええええええつ!?!」

カザリと投擲されたメタリックゴールド　　リオンは悲鳴に似た
絶叫を。

そして、オーズもミサイルとなったりオンに気づくが・・・時既
に遅し。そもそも空中にいて避けられるはずもなく、迎撃用リオン
ミサイルで撃墜される。

その際、鍊矢から盗ったコアメダルが何枚か落ちた。
そして逆鬼は・・・ガッツポーズをする。

「よしっ！」

「よくないっ！ 味方を投げる普通っ!?!」

カザリはバカ鬼に律儀にツツコミ、ジャンプして頭から落下する
オーズを回収。着地する。

ライオディアスの目眩ましは、そろそろ解ける。

「コアメダル・・・・・・・・拾ってる暇はないか」

再び黄色の竜巻を発生させ、それを目眩ましに逃げる。

あの場に居るのは全員ライダー・・・・・・・・戦って勝てる見込み
はないと判断したからだ。

逆鬼はオーズを抱えて撤退するカザリを見送る。

別人とは言え、オーズとカザリの能力は熟知している。無闇に追

っても、下手をしたら自分がやられる可能性があった。

逆鬼は変身を解き、オーズが盗ってリオンミサイルの激突で落としたコアメダルを拾う。

錬矢　悪魔系グリッド・ウルを構成するコアメダルの内、『アモン・コア』と『ルシファー・コア』の2枚。

それを錬矢の元まで持って行き、投げ渡した。

「ほら。……何枚持ってかれた」

「ベリアルとルシファー。あとシャチとゴリラ」

コアメダルを受け取りつつ、錬矢は答える。

錬矢がグリッドである事は、サカキ達全員は知っていた。その時の反応は『ああ、やっぱり人間じゃないんだ』だった。……フェイトも含めて。

錬^{ウル}矢を構成するコアメダルは『アモン』 『ベリアル』 『ルシファー』の9枚。そして盗られたのは2枚。

更に他のグリッドの10枚目を持っていたため、その内の2枚、計4枚持つて行かれた事になる。

「お前らしくないな。不意討ちとは言え、メダル3枚持ってかれるなんて」

「俺も完璧じゃないって事だ。

おーい、全員大丈夫かー？」

錬矢は残りの面々の確認をする。

と言つても、強烈な光で一時的に目を潰されただけでなので、特に外傷はなかった。・・・シヨックでメルカバが将斗の外に出たくらいだ。

「まだよく見えませんが・・・大丈夫です」

「こちらと同じくだ」

「あの上半身黄色が・・・」

「将斗、大丈夫か？」

「目・・・チカチカする・・・」

上から、ソラ・キバット・淳一・メルカバ・将斗。香里と香流も目を擦っているが、大丈夫のようだ。

因みにメルカバの姿を見ても、サカキ達は驚かない。二頭身コウモリもどきやミラーモンスター、悪魔を既に見ているのだから当然だ。

無事なのを確認したサカキは、錬矢に聞く。

「でだ錬矢、どうする？」

「当然追いかける。………メズールとガメルのコアを盗られたのは流石にミスったしな」

「何か言ったか？」

「いや」

錬矢は当然の事。サカキと淳一、香里と香流は借りを返すつもりだし、サカキが行くならソラも着いて行く。将斗とメルカバは元々魅空を連れ帰るのが目的だ。

全員が魅空をボコる　カザリは大量のセルメダル没収する
事で話が纏まるうとした時、将斗が周りをキョロキョロ見していた。

「どろした？ 将斗」

「……詩織……は……？」

『あ』

迎撃ミサイルとしての役目を終え、地面に落ち変身の解けた詩織は、目を回して気絶していたのだった……。

その後サカキ達は、鍊矢が住むマンションの荒木家自宅に移動していた。

気絶した詩織を介抱するためと、もう日が傾いてしまったためだ。

サカキ達がリビングで待機していると、客間として使っている奥の方の部屋から、メルカバと大人モードのアルフが出てきた。

「まったく。帰って来たかと思えば気絶した人間連れて来るし、錬矢は少しぐったりしてるし、あんた達は毎回問題起こすね」

リビングに顔を出した第一声に、呆れ混じりに言うアルフ。

アルフから見た錬矢は、自分のコアメダルを抜かれたためかぐったりしているらしい。端から見たら普段通りだが、それは家族だから分かるのであろう。

因みにアルフは、フェイト共々仮面ライダー・怪人・妖怪・妖精その他諸々と関わってしまったため、メルカバを見ても動じない。

だから犬耳と尻尾を出したままだ。

「あはは・・・悪いなアルフ。で、容態は？」

「特に怪我はないけど、よっぽど強い衝撃を頭にぶつけたみたいだね。ありゃ暫くは起きないよ」

錬矢の質問にアルフはそう返し、続いてメルカバが言う。

「だが暫く休めば大丈夫だろ。寧ろゆっくり休めて、いい機会かもしれない」

「じゃ、アタシはフェイトの様子を見て来るよ。あの子、今日も無茶したからね」

と、アルフはさっさとリビングから出て行ってしまふ。

これは話安いようにと、彼女の気遣いだ。

錬矢はアルフに内心感謝しつつ、話を切り出した。

「さて、詩織の無事が確認された所で、今後の方針・・・・・・・・と
言いつか、もうオーズ見つけてボコるで決定してるよな？」

『うん』

「私はそうじゃないんですが・・・・・・・・」

「私と将斗と詩織は、連れ戻すのが目的なのだが」

当然とばかりに頷く狂気四重奏。

そして一応、ソラとメルカバは捕捉を入れる。

と言っても、魅空とカザリは、連れ戻すと言って大人しく捕まる相手ではない。戦って打ち勝ち、大人しく（動けなく）なった所を捕まるしかないだろう。

しかし、戦う以前に問題があった。

「しかし、見つけるにしてもどうやって見つける。あの二人は、一旦隠れたら中々見つけられないぞ。

それに、もうこの世界に居ない可能性もある」

メルカバの言う通り、まず見つけなければ、戦う以前の問題だ。

元居た『もう一つの幻想郷』でも、魅空の行動は把握出来ず、予想も出来なかった。

それに『コアメダルを手に入れる』と言う目的自体、4枚だけとは言え達成したようなもの。シャチとゴリラ、ベリアルとルシファ―でメダルのコンボは使用出来ないが、手に入れたメダルだけを持つて『もう一つの幻想郷』に戻る可能性もある。

メルカバがその事を懸念していると、鍊矢はニヤリと笑った。

「その事は心配ない。あいつらはこの世界に居るし、必ず現れる」

「錬矢、随分な自信だな。何か策でもあるのか？」

こいつが策もないのにこんな顔をするはずがない……………

そう思いつつ、サカキは錬矢に尋ねる。すると、錬矢は三日月状に目と口を歪ませた。

そうしていつの間にか手の指の間に挟まれていたのは、5枚のメダル。孔雀が3枚、コンドルが2枚の赤いコアメダルであった。

海鳴市のとある公園・・・・・・・・の端。

そこにある簡易テントの中で、怒号と笑い声が響いていた。

「クソオオオオオオオオオオオツ!!」

「あひ、あは、あははははははっ!!」

怒号を上げているのは魅空。

壊れているように笑い転げているのは、少女の姿になったカザリだ。

因みにこのテントは、武蔵っぽいホームレスの人が暫く旅に出るからと貸してくれた物だ。

魅空が怒号を上げている理由は勿論、鳥系のコアメダル5枚を盗られた事・・・・・・・・以外にもあった。

魅空の足下には、

『鳥のコアメダルもーらい　だっふんだー』

『俺のコアメダルはコンボじゃなきゃ使えねえんだバーカ!!』

『お前の母ちゃんこっちじゃ忍者ー』

と書かれた紙。

全て、オーズに変身中だった魅空の背中に貼られていた物だ。

さらにペ？ちゃん顔の簡易な錬矢のイラストまであるから殺意が増してくる。

そしてカザリが爆笑している理由は、まんまとコアメダルを盗られ貼り紙までされた魅空を見て、も勿論あるが、近くに落ちてる写真。

キモいくらいに良い汗を掻きながら畑仕事に勤しむ虫頭ウツアと、どこぞの写真集ばりに決めたポーズをしているアングの写真であった。

・・・そりゃ爆笑ものだ。

「上等だっ！ お前の持つてるコアメダル、全部盗つたらあああああああああっ！！！」

「ウ、ウヴァが・・・アングが・・・あひっ、はひっ、はひっ・・・！？」

いい感じに乗せられた魅空と、呼吸困難に陥ったカザリであった。

S i d e : ? ? ? ?

漸く見つけたぜ、鎧王っ！

ターミナルから遙々来たつてのに、どこに居るか分からなくてぶらついてたら灰色のオーロラに巻き込まれ…………ぐすっ。

けど、何だか厄介そうな雰囲気だな。

さっさと憑いて契約したいところだが、暫く様子でも見るとするかっ！

四十三ノ巻に続く

四十二ノ巻『鬼VS本能とメダル強奪とカザリ爆』（後書き）

コラボ第三話、いかがだったですか？

錬矢の持つコアメダルは、アモン・ベリアル・ルシファーの三種類。さらにアंक達の
タカ・トラ・バッタ・シャチ・ゴリラ・???x?
のコアメダルを所持してます。

最近、マテリアルズの名前の公式の方に直すべきか悩んだり、オ
ーズ系オリジナルライダーのコンボで猫コンボではなく犬コンボ（
山犬・ジャツカル・狼）にしようか悩んだりしたり。 本編関係
無し

今回は、コアメダルを奪還する、淳一と将斗ノ王蛇と鎧王がメイン
となります。

四十三ノ巻 『私は途中でフェードアウト。byメルカバ』（前書き）

錬矢「カウントザメダルツ！ 今魅空が使えるメダルの数は？」

タカ×1
ライオン×1
トラ×1
チーター×1
クワガタ×3
カマキリ×3
バッタ×3
ゴリラ×1
ゾウ×1
シヤチ×1
ウナギ×1

錬矢「と言う感じっ！！」

サカキ「この中にベリアルとルシファーもあるけど、コンボじゃないと使えないから省いた」

前回のあらすじ、魅空・カザリがフラグを立てた。

詩織「スツゴい大雑把だっ!!」

四十三ノ巻 『私は途中でフェードアウト。 byメルカバ』

翌日。

海鳴市の街を、二台の真紅のバイクが走っていた。

その内の一台 仮面ライダーカイザの専用ビークル、サイドバツシャーに酷似した真紅に黒のラインのバイクが道路の脇に停止し、運転していた人物はフルフェイス型のヘルメットのアイシールドを開く。

「……………中々出てこねえな」

「そうですね……………」

サイドバツシャーに酷似したバイク 『グレンベンダー（サイドカー装備型）』を運転していたサカキは、人々が行き交う街中を見ながら呟く。

サイドカー側に乗っていたソラも、サカキに同意した。

「いやいやいやっ！ おかしいからっ！！」

と、グレンベンダーの後ろに停止した仮面ライダークウガのビートチェイサー2000に酷似した、真紅に銀のラインのバイク『ランブルチェイサー2011』に搭乗していた詩織が叫ぶ。

それにサカキは怪訝な顔を向けた。

因みに、ランブルチェイサー、グレンベンダー共に鍊矢からサカキに贈られたマシンビークルである。

「いやサカキさん『こいつ何言ってるの？』、みたいな顔じゃなくてっ！ サカキさんってまだ14歳ですよねっ！？ 何でおもいきりバイクの乗り回してるんですかっ！？」

「何でって・・・変？」

「変以前にルール違反っ！ 無免許運転っ！！」

「ならばそのルール破ろう。世界には、そうしなければ見えない明日がある」

「意味分からないからっ！！」

詩織のツッコミを早々に切り捨て、サカキは懐からある物を取り出す。

因みにサカキと詩織は名前で呼ぶようになり、ソラも名前で呼ばれている。

サカキが懐から出した物は、昨日錬矢が魅空から盗ったクジャク・コアとコンドル・コアメダルだった。

「確か名無も持ってたやつだが、こんなんでホントに釣れるのか？」

「さあ………。錬矢様が言うには、『確実に取り返しに来る！』と言っていましたか……。」

「多分ですが、現れると思います。アイツ……。オーズは、それを手に入れるためなら何でもする奴ですから。と言っか、人の話聞いてます？」

サカキとソラはいまいち分からなかったが、詩織が言うにはこの策は魅空を誘き寄せる、もっとも確率が高い方法らしい。

策とは、三人一組となり魅空から盗ったコアメダルを持って海鳴市中をぶらつく、と言う簡単な物。

サカキ達は半信半疑であったが、錬矢からこの策を聞いた詩織・

将斗・メルカバは妙に納得したようだった。

「ま、これ以外に大した策がある訳でもねえし、このまま続けるか。ディスクアニマルも動かしてるしな」

「はい」

「駄目だ、この人聞いてくれない……………」

サカキはコアメダルを仕舞い、グレンベンダーを発車させる。

その後ろを、詩織はもう諦めながらランブルチェイサーで追うのであった。

同時刻、サカキ・ソラ・詩織組とは別のルートを、淳一・将斗・メルカバの組が進んでいた。無論バイクで。

こちらも、クジャク・コアとコンドル・コアを持っている。

淳一が乗るバイクは、マシンゼクトロン。専用バイクが間に合わなかったからだ。

淳一が運転するマシンゼクトロン（フロントに王蛇の紋章入り）と並走しているのは、専用バイクのマシンガイバード。運転しているのは将斗。メルカバは将斗の中に居る。

【やはり、中々見つからない】

「……う……ん……」

「……」

（………会話が続かないな）

将斗の中で、メルカバは頭を悩ませる。

将斗の片言は出会った時からこうだったので慣れているので、いい。問題は淳一だ。

メルカバは、淳一の将来が心配だった。

昨日初めて出会った時はケンカ中……一方向的な暴力を振るっている途中で偶然通り掛かった将斗達にも襲い掛かりそうになり、翠屋では将斗達がライダーだと知るとその場で変身し、襲い掛かりそうな雰囲気であった。

特にあの瞳孔が開いたギラついた目。生まれつきなのか、それともそうなる環境に居たのか分からないが、あのような狂暴性は将来の障害になるであろう。

淳一が将斗と年が近いためか、保護者メルカバとしてはどうにも気になって仕方がない。

(いつまでこの世界に滞在出来るか分からないが、出来るだけ社会に適應できるよう協力しよう！)

「……？ どうし……たの……？」

【いや、何でもないぞ？】

一人内密に、淳一を立派な社会人にする計画を考えるメルカバ。

将斗は首を傾げるも運転に集中する。

その時、緑色の電撃が降り注ぎ、淳一達はバイクを急停止させる。

「かかったか」

淳一は短く呟き、ヘルメットのアイシールドを開き一点を見据える。そこには、グリードの姿になったカザリと、亜種形態の一つであるガタトラバとなったオーズが立っていた。

先程の電撃は、クワガタ・コアで変化したクワガタヘッドから放たれた物だ。

「出て・・・来た・・・」

【ああ】

オーズとカザリを見据え、将斗は面倒そうに黒いベルト　ガイ
オウベルトを腰に巻く。

将斗とメルカバは、この場で戦闘が起ころうと思っていた。だが、
そうはならなかった。

「……………行くぞ」

淳一はマシンゼクトロンをUターンさせ、走り出してしまふ。

これには将斗も驚き目を見開くが、すぐにガイドボードをUターンさせ後を追う。

「……………どう……………いう……………つ……………もり……………?」

「ここじゃ街に近い。騒がれても面倒だしな……………」

将斗の質問に答えながら淳一は後ろをチラリと見る。

予想通り、脚をチーターに変えたガタトラーターとカザリが追いかけて来ていた。

紫色のスタッグフォンを取り出し、連絡を取る。相手は鍊矢だ。

数回もコールしない内に相手は出た。

「おい、かかったぞ」

『あー、やっぱりそっちな』

「ああ？」

『いやー実はな……』

「はっ！」

「ふっ！」

「ヴオウツ！」

キックホッパーのハイキックとパンチホッパーのジャブが放たれるが、防がれ、反撃に鋭い爪が襲う。

今二人のライダーが戦っているのは、ライオンヤミー。

バイク（御坂双子はマシンゼクトロン。錬矢はダークエクステンダー）で走行中の所を襲われたのだ。

少し離れた場所で、錬矢はダークエクステンダーに股がったままオーガフォンを耳に当てていた。

「こつちにヤミーが来てな、今双子飛蝗が戦闘してる。それとさっきサカキにも連絡取ったんだが、そつちにもヤミーが出たらしい」

『足止めか……』

電話の向こうで、舌打ちの音が聞こえる。

錬矢も、淳一と同意見だった。

コアメダルを持って移動している三組の内、二組の前にヤミーが現れ、最後の一組の所にオーズとカザリが現れたと言う事は、少数でも確実性を優先したからだろう。そのための足止めだ。

「つーわけで、俺らもサカキ達もそつち行けねえから。それとも、三人だけじゃ不安か？」

『あア？ 一人でも十分だ』

「そうか。ま、危なくなったら将斗とメルカバ抱えてミラーワールドに飛び込めや」

そう言つと、『ご忠告感謝しますよオ』と乱暴に切られた。

鍊矢は苦笑しながら、懐から黒い携帯電話とデジタルカメラを取り出しUSBメモリより大きめな長方形のメモリを側面に挿した。

《Stagg》

《Bat》

「淳一の方よろしく」

すると電子音かなり携帯電話とデジタルカメラ スタッグフォンとバットショットはライブモードに変形。そして指示通りに、淳一達の元へ飛んで行った。

「さて、サカキの方は大丈夫だろうし、こっちも双子飛蝗だけで大

丈夫だろ。

問題は、淳一と将斗、メルカバかな？」

鍊矢は視線をキックホッパー・パンチホッパー、ライオンヤミーに向けながら呟いた。

スタッグフォンを素早く仕舞い、淳一はさらにマシンゼクトロンを加速させる。横には、将斗のガイバードがしっかり並走している。

一瞬だけ後ろを確認すると、ガタトラーターとカザリもこちらの加速に合わせて加速し、後を追いかけて来ている。

視線を前方に戻す。眼前に広がるのは海、海岸。

道路から外れ、道路から海岸に降りる階段を飛んで降り、砂浜にマシンゼクトロンを着地、横に滑らせ停止させる。当然、ガイバーでも同様に停止する。

「う．．．み．．．」

【なるほど。ここなら周りに気にせず戦えるな】

「ああ．．．．．」

淳一はすぐさまヘルメットを取り、自分達が来た道を見据える。

オーズは加速したまま淳一達の前に来ようとし、

「あ」

僅かな段差に足を取られ、回転。そのまま淳一達の前を通り過ぎ、海面を数回跳ね水しぶきを上げて海にドボンした。

カザリはちゃんと減速し、淳一達の前に綺麗に停止。”何事もなかった”ように話しかける。

「ふーん、周りに被害が出ない場所に移動したわけか。逃げたわけじゃなかったんだ」

「誰が逃げたつて？ ……イライラするんだよ」

淳一はマシンゼクトロンの車体を鏡代わりにカードデッキを翳し、Vバックルを装着。そのままカードデッキを装着する。

「変身」

カードデッキが装填されると、オーバーラップが起こり仮面ライダー王蛇に変身した。

将斗も、腰に巻いていたガイオウベルトのバックルの横にある四つのボタン、その一番上の白いボタンを押す。すると、変身待機音が鳴り響いた。

「変身」

《Knights For》

バックルにライダーパスをセタッチ（セット&タッチ）するとフリーエネルギーが発生。フリーエネルギーが将斗の体を包み銀と黒のプラットフォームになる。

そして直ぐに白いオーラアーマーが現れ、プラットフォームの上から装着される。肩アーマーには、白い馬の飾りが付いている。

馬の形をした電仮面が走り展開され、最後にベルト状のレールが前部分と後部分を繋ぎ大剣の刀身部が装着される。

将斗が単体で変身した姿、仮面ライダー鎧王・ナイトフォームだ。

王蛇はグルリと首を回し、鎧王KFはベルトの両側に装備された四つのパーツ　ガイガツシャーを組み合わせハルバードモードにする。鎧王KFの隣にメルカバも実体化し並ぶ。

カザリも両腕の爪を伸ばし構える。その時だ。

「　　ちよつと待てっ！！」

海の中から、クワガタの角（正しくは顎）に海藻を引つ掛けたオーズGTTガタトラーターが出現した。

オーズGTTの出現に、王蛇・鎧王KF・メルカバ・カザリは口を揃える。

「……何だ、居たんだ」「……」

「居たよっ！ さっき目の前転がっただろっ!？」

あまりの”アレっぷり”にオーズGTTの存在を無かった事にしていた面々にツツコミ、オーズドライバーからクワガタ・コアとチーター・コアを抜き取り、タカ・コアとバツタ・コアを入れスキヤナーで読み込んだ。

《タカ！ トラ！ バツタ！ タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ!》

「メダル返せ。 って言ってもどうせ聞かないだろうし、こっち（力づく）の方が分かり安いだろ？」

「当たり前だア。その歌、イライラするんだよ……!」

その瞬間、オーズ^{タトバコンボ}TCのトラクローと王蛇のベノバイザーが衝突した。

その頃、サカキ・ソラ・詩織組。ソラが変身したキバ・ブレード
フォームが雪月牙を振るう、だが。

「通らない……………!?!」

「ブニャアッ!」

「きゃっ!?!」

「ソラさんっ!」のっ!」

「ブニャッ」

「弾かれた……………じゃない、跳ねたっ!?!」

「ブニヤッ!？」

重量系ライダー限定奥義、と言うか丸パクリの全力体当たりがネコヤミーの三段腹の真ん中に当たる。すると、パワーのパワー、ネコヤミーの腹の弾力が相俟ってネコヤミーはセルメダルをバラ蒔きながら吹っ飛んだ。

それを見て、リオンは乾いた笑いを漏らしキバは尊敬の眼差しを向けていた。

「あはは………」

「流石はサカキ様………」

「斬って駄目ならぶっ叩けっつな。ソラ、ドツガだ」

《STRIKE VENT》

「はい」

「ドツガハンマー!」

パワーはデットリーバイザーにカードをベントインし、両腕にゴリバゴーンのような『デットリーナックル』を装備。

キバもキバットにドツガフェッスルを吹かせ、ドツガハンマーを召喚。ブレードドツガフォームにチェンジする。

「さて、カザリのヤミーは寄生型だったな。まずはボコボコに殴って、中からヤミーの親出すか」

「はい」

(ホントこの世界の人達は、頼りになると言うか何と言うか……)

指を鳴らすパワードと、彼に付き従うキバBDの後ろ姿を見て、リオンは仮面の下で苦笑していた。

「しゃアッー！」

王蛇がベノサーベルを袈裟に振るう。対し、オーズTCはメダジヤリバーで弾く。

その近くでは、鎧王KFがカザリに向けガイガツシャー・ハルバードモードを突きだしたり、薙いだりしていた。

「とうっ、やあ〜」

「……………ちょっと、君やる気ないでしょ？」

「……………う……………ん……………」

ガイガツシャーの矛先を爪で弾きつつ、カザリは鎧王KFの返答に呆れた。

鎧王KFの戦い方は型もあつたもんじゃなく、ただ相手がいる所に得物を振ってるだけの単純で、何とも煮え切らない物。

今カザリの前にいるライダーは、自分とオーズ（魅空）を連れ戻

すと言いながらやる気がないのだ。これにはカザリでなくても呆れる。

突き出されたガイガツシャーを弾き上げ、左の爪で鎧王KFのアイマーを一閃する。

「ぐう……………」

「将斗っ!」

斬られ、倒れる鎧王KFにメルカバが駆け寄る。

「大丈夫か?」

「う…………ん……………け…………ど……………やっば…………り……………
面…………倒……………こつた…………い……………」

「はあ。将斗、お前な……………仕方がない、代わる……………」

「悪いけど、させないよ」

「ぐああああああつ!?!」

メルカバの言葉をカザリが遮り、同時に黄色の竜巻が襲つ。

黄色の竜巻が直撃し、メルカバは大きく飛ばされる。

「彼が中入って戦うのは厄介そうだからね、邪魔させてもらったよ」

「メルカバ……」

「ん？ やつとその気になった？」

「うあああああつ……！！」

叫び声を上げ、鎧王KFはガイガツシャーを振り回す。

王蛇は乱暴にベノサーベルを振る。

オーズTCはベノサーベルをかわしつつ、オーズドライバーから一旦全部のコアメダルを外し、青と白のコアメダルを入れオースキヤナーを通す。

「盗ったコアメダル、使ってみるか」

《《シャチ！ ゴリラ！ ソウ！》》

タトバコンボからシャゴリゾにメダルチェンジし、左腕のゴリバ
ゴーンでベノサーベルを防ぎ、残った右腕で王蛇の胸を殴る。

王蛇は攻撃を喰らい数歩下がるが、また直ぐにベノサーベルを振
る。だがまたゴリバゴーンで防がれ、二回殴られてゾウレグで蹴
り上げられ空中で一回転、うつ伏せに倒れる。さらに、蹴り飛ばさ
れた。

「がアツ!？」

ゾウレグの強力な蹴りで飛ばされ、砂浜を転がる王蛇。そのす
ぐ横に、竜巻で飛ばされたのか鎧王KFも倒れてきた。丁度、オー
ズSGZとカザリに挟まる形だ。

鎧王KFはダメージがあるにも関わらず、ガイガツシャーを杖代
わりに立ち上がりカザリに向かって行こうとする。

流石に驚いた王蛇は、思わず鎧王KFの肩を掴んで止めてしまっ
た。

「お、おい………」

「はな……せ……アイツ……メルカバ……を……」

(こいつ……)

王蛇 淳一は鎧王KF 将斗を、いつもぼーっとしていて何を考えているか分からない、訳の分からない奴だと思っていた。だが今の将斗は大事な相棒を傷つけられ、仮面の下に怒りの感情を露にしている。

淳一はここ四年でかなり丸くなった。

危ない奴と思われている淳一だが、上(担任)や横(同級生)が問題だらけで、フォーラーだらけの四年間。

王蛇に変身する時は 前の持ち主の影響か 危ない性格になるが、周りで何か問題が起きればフォーラーしてしまう、『フォロ倉淳フォーラー』になってしまったのだ。

つまり、熱い感情を表に出し突っ込もうとする鎧王KFを見ると、フォーラーしたくなるのだ。

「おい、落ち着け。そんなんじゃ相手の思う壺だ。いいか？ よく聞けよ……」

王蛇は鎧王KFにマスクを近づけ、有無も言わず自分の考えを話す。

それを聞いている間に鎧王KFは落ち着きを取り戻し、そして静かに、無言で頷いた。

「何か考えてる？」

「無駄だと思うけど、なっ！」

カザリは竜巻、オーズSGZはゴリバゴーンを射出する【バゴーンプレシヤー】を放つ。

王蛇と鎧王KFは左右に離れる事で避け、鎧王KFは再びカザリに。

王蛇はベノバイザーに新たにカードをベントインしベノクローを召喚。オーズSGZに挑む。

《STRIKE VENT》

「シューッ！」

「うおっ!?!」

王蛇は右腕にベノクローを、左手にベノサーベルを装備し軽やかなフットワークでシャチヘッド目掛け攻撃する。

対してオーズSGZは頭目掛け襲い掛かる蛇の牙と尻尾の応酬を慌てて避ける。

重量系のメダルを2枚使ったシャゴリゾはパワーはあるが重い。重い故に避けるのではなく受け止めるタイプなのだが、唯一水棲系のシャチヘッドはそうもいかず、当たれば痛いしダメージも大きい。頭も重量系のメダルに変えればいいのだが、生憎サイ・コアメダルは持ち合わせていなかった。

一方、鎧王KFとカザリは……………。

「やあゝ、と」

「っ、また……………」

再び、煮え切らない戦いを繰り広げていた。主に鎧王KFが。

最初は呆れていたカザリも、徐々にイラつき始めていた。

テキトーに振られるガイガツシャーをかわし、爪で反撃しようとするれば鎧王KFはすぐに距離を取りガイガツシャーを横薙ぎに振ってカザリを近づけさせない。

ハルバードモードのガイガツシャーとカザリの爪ではリーチに差があり、こうされるとカザリの攻撃は届かない。

だが鎧王KFは踏み込んだ攻撃をする訳でもなく、のらりくらりとテキトーに攻撃しては反撃されそうになればすぐに距離を取る。

こんな戦い方をされれば、誰だろうとイラつくのは当然だ。

「この、いい加減に………!」

鎧王KFの戦い方にイラついたカザリが、多少のダメージを覚悟で一気に踏み込む。しかし、その瞬間こそ鎧王KF、そして王蛇がまった瞬間だった。

「い……ま……っ………!」

鎧王KFは声と共にガイガツシャーを地面に突き刺し、棒高跳び

の要領で飛び上がり事でカザリの爪は空を切る。

そして、オーズSGZと戦闘していた筈の王蛇が鎧王KFの声に反応してオーズSGZから距離を離し、カザリに向かってベノクロIを突き出した。

発射された毒・溶解液の放流をカザリはすんでのところ回避する。

飛び上がった鎧王KFは王蛇を飛び越し、オーズSGZ向けガイガツシャーを降り下ろし、見事にシャチ・ゴリラ・ゾウが描かれた胸アーマーを捉える。さらに、横薙ぎに切り、突き出す。

「のがっ!?! この……………!」

オーズSGZは反撃にバゴーンプレシャーを発射。……………だが、鎧王KFと進路上に居た王蛇はかわし、その先に居たカザリに当たる。

「へぶっ!?!」

「あっ、やぐ……………」

《《SWING VENT》》

カザリがセルメダルをバラ蒔いて吹っ飛び、オーズSGZは冷や汗を流す。

そうこうしている内に、王蛇はベノクロー・ベノサーベルを捨てエビルウィップを装備。鎧王KFと共にオーズSGZに襲い掛かる。

「しゃっ!」

「やあゝ……」

「えっ、ちよっ、虐め……!?!」

「喜んでっ!?!」

「よ……ろこ……んで……?」

「鞭はやめ……ギヤーツ!?!」

エビルウィップとガイガツシャーが一閃。その一撃が上手く入りオーズドライバーから2枚のコアメダル……。シャチ・コアとゴリラ・コアを弾き上げ、鎧王KFが跳んでキャッチ。盗られた4枚の内2枚を取り戻した。

「ゲツ……ト……」

「これで最初の借りは返した」

「………淳……—………ん………」

「んア？」

初めて名前を呼ばれ鎧王KFを見ると、手の甲を向けている。

王蛇はふっ、と笑い自分も手の甲を鎧王KFとコツンと合わせた。

「畜生、何青春してんだアイツら……」

「うん。君ああ言うの絶対！ 無かったからね」

「うっさいカザリッ！ 俺だって青春くらい………
………ぐすっ」

「無いなら溜めないでよ」

「………！ 無駄に傷つくんだよ………」

いつの間にか合流していたカザリとタトバコンボになったオーズは、何やらコントを初めていた。

目の前の蛇が、美少女と同棲の上専属メイド付きだと知ったら、白いハンカチをくわえて引つ張る事（魅空が）受け合い会話だ。

それを見ていた王蛇と鎧王KFは、一度顔を見合せそれぞれファイナルベントのカードとライダーパスを構える。すると、金色の光の玉が急に現れ、王蛇と鎧王KFの周りを飛び回る。

王蛇と鎧王KFは怪訝な表情をマスクの下で浮かべる。と、金色の光の玉は鎧王KFの中に入り鎧王KFから砂が吹き出す。砂は一ヶ所に集まり、空中に下半身が浮き、地面から上半身が生えた何とも奇つ怪な怪人 イマジンを形成した。

「なんだア、この砂は」

「イ・・・マジ・・・ン・・・」

「イマジン？ メルカバも確かイマジンとか言うのだったな・・・
・・・見た目全然違うぞ」

「イマジ・・・ン・・・は・・・人間・・・と・・・け・・・
い・・・約・・・しない・・・と・・・こん・・・な・・・
す・・・な・・・に・・・なる・・・」

『そおつ！ 俺達イマジンは人間と契約して初めて体が持てるのさ。
ま、例外はいるけどな』

王蛇は現れたイマジンに怪訝な顔を向けると、鎧王KFが説明。
更にイマジン自身が補足する。

更に補足すれば、イマジンは光の球体の状態から人間に憑依し今
目の前のイマジンのように砂のようになる。この状態から憑依した
人間の望みを聞きそこで初めて契約。そこから契約完了して自由
になる。

となると、このイマジンは鎧王………将斗と契約しよう
としている事になる。

「で、そのイマジンが何の用だ」

『おつと蛇の兄さん、そんな殺気立たないでくれよ。俺はただ、電
王やデンライナーのオーナー、ターミナルの駅長に頼まれたて鎧王
の手助けに来ただけなんだから』

「え………?」

『ずっと見てたけど、もう我慢出来ねえ………。踊る阿呆に
見る阿呆！ 同じ阿呆なら踊らにゃ損損っ!!』

そう言ってイマジンは再び光の球体になり、鎧王KFに突入・憑
依。その影響か、ナイトフォームのオーラアーマーが外れプラット

フォームになった。

突然の事に王蛇が呆気に取られる中、鎧王はバックル横の上から三つ目の朱色のボタンを押しライダーパスをセタッチ。ベルトから新たなフォーム名が告げられる。

《Crazy Form》

両肩にデフォルメされた金色の雲。胸に胸盾、三つの渦巻き絵があり朱色と金色で塗られている。

最後に、頭の線路を猿型の電仮面が降り変形して新たなマスクを形成する。

仮面ライダー鎧王・クレイジーフォーム。

新しい姿となった鎧王は、ベルトの両側に戻ったガイガツシャーを取り外し組み立て、ロットモードにして軽く振って見せた。

その姿はさながら、西遊記の孫悟空を彷彿とさせる。

「さて蛇の兄さん。踊る阿呆に見る阿呆、アンタはどっちの阿呆だい？」

「・・・はっ！ 当然、壊す方だ・・・」

《FINAL VENT》

「いいねえ・・・乗ったっ！」

《Full Charge》

二人のライダーの必殺技を告げる電子音が鳴り響く。王蛇の標的はオーズTC、鎧王CFはカザリだ。

これにはコントをしていたオーズTCとカザリも気付き、慌てて迎撃に入る。

「また猫耳つけさせて・・・ってやばっ!？」

《スキヤニングチャージ!》

「くっ・・・!!」

オーズTCはオースキヤナーでドライバーに納められてる3枚のコアメダルを読み込み、足を本物の飛蝗のような脚に変化させ高々とジャンプ。

カザリは両腕の爪を伸ばし、加速する。

王蛇の背後にベノスネーカーが出現。王蛇は跳んでベノスネーカーが吐いた毒液と一緒に発射され、まるで蛇の口のように両足を上下に交差させオーズTCに向かって飛んで行く。

王蛇の必殺技である、【ベノクラッシュ】だ。

対してオーズTCは空中に現れた三つの赤・黄・緑のリングを通り、タトバコンボの必殺技の【タトバキック】を発動させ正面から王蛇とぶつかる。

鎧王CFもフリーエネルギーが溜められたガイガツシャー・ロッドモードを振り、カザリも自身のコアメダルの力を両爪に集め、こちらも両者、正面からぶつかる。

「　　しゃああああああああああああアッ!！」

S i d e : ? ? ? ?

うーん。心配になって私も来てみたけど、これは大丈夫かな？

ライオン君の方は、経験豊富なアカオ二君が居るし、ヨロイ君は新しいイマジンを憑いてへび君が何だかんだフォローしているみたいだし。

でも、用心は必要。相手が相手だから、何をするか分からない。一応、レンちゃんに連絡取ろうかな……。

私はそう思い、レンちゃんが飛ばしてくれたスタツグフォンに手を伸ばす。

その時だった。

「　　しゃああああああああああアアアアアッ!!」

へび君の雄叫びと共に各々の必殺技がぶつかり、その場を大きな爆発が支配したのは。

四十四ノ巻に続く

四十三ノ巻 『私は途中でフェードアウト。 byメルカバ』（後書き）

コラボ第四話でした。

ちょっと淳一のキャラがブレたかな？ と思いつつ、ま、いっかと開き直ります。

今回登場したサカキの専用ビークルの簡単な説明です。

ランブルチェイサー2011

サカキの専用ビークルの一つ。クウガのビートチェイサー2000を元に逆鬼用に調整し直した。

造形はそのままに、カラーを変更。真紅のボディに銀色のラインになった。

ゴウラムとの合体・某種ガンダムのようなフェイズシフトをオミットしたため、コストダウンに成功。更に頑丈さ、走行時間が大幅に向上している。

グレンベンダー

サカキの専用ビークルの一つ。作中でカイザのサイドバツシャーと表現したが、オプションのサイドカーを装備した状態で本体はライドベンダー寄り。カラーは真紅のボディに黒のライン。

今回出たサイドカーのようにオプションが存在し、オプションを喚装する事でどんな空間でも対応出来るように設計されている。

(例：トラカンドロイド+グレンベンダー＝トラグレンベンダー)

次回でコラボも終了予定。次回もお楽しみに。

四十四ノ巻『決着と別れと新たな力』（前書き）

コラボ第五話、今回でコラボ終了です。

淳一って王蛇っぽくするために浅倉威みみたいな性格にしたつもりが、
どンドン変わって・・・2号ライダー位置に・・・。

四十四ノ巻 『決着と別れと新たな力』

「はあああああああつ！！」

リオンの右ストレートがネコヤミーを捉え、ネコヤミーの体を構成するセルメダルを削る。

続けて、キバBDのドツガハンマーが襲う。

「やあああああああつ！！」

「ブニヤアアアツ！？」

ドツガハンマーの重い衝撃が襲い、ネコヤミーは大きく揺さぶられる。すると、あまりの衝撃にネコヤミーに取り込まれていたヤミーの親であろう小太りの男が飛び出しネコヤミーと分離する。

それを見たキバBDはパワードへと叫ぶ。

パワードはデットリーバイザーにカードを装填。必殺技を発動す

る。

「サカキ様っ！」

「ああっ！」

《FINAL VENT》

『ゴオオオオオオオオッ！！』

ネコヤミーの背後に、デットリーアイアンが現れネコヤミーを掴み振りかぶって投げる。その先に待ち構えているのは、デットリーナックルを装備したパワード。

パワードは投げ飛ばされたネコヤミーをカ一杯殴り、殴り飛ばす。その先には、デットリーアイアン。

今度はデットリーアイアンが殴り飛ばし、返ってきたネコヤミーを再びパワードが殴り飛ばす。そしてまたデットリーアイアンが殴り返し。

キャッチボールの球となったネコヤミーは、殴られる度にセルメダルを散らし、徐々に弱っていく。

そして、何度目かのデットリーアイアンが殴り飛ばした時、パワードはドラミングをした後、ネコヤミーを上から地面に殴る。

衝撃でネコヤミーを中心にクレーターが出来直後に爆発。セルメダルが大量に散らばる。

これがパワードのファイナルベント、【デットリypress】である。

パワードは右拳を地面に向けた状態から姿勢を直し、Vバツクルからカードデッキを外し変身を解除。サカキは、青空を見上げる。

「こっちは終わったが、他はどうかね……」

そう呟き、サカキは変身を解除したソラと詩織と合流するのであった。

「　　しゃああああああああアアアアアッ！！」

ベノクラッシュとタバキックがぶつかり、爆発が起きる。

爆発から発生した黒煙の中から、オーズTCが砂浜に落ちる。

どうやら相殺出来たようだ。

オーズTCの隣にカザリもセルメダルを散らしながら転がって行く。こちらにも相殺出来たようだ。

「痛た・・・・・・・・おーいカザリ、大丈夫かあー」

「何とか、ね・・・・・・・・」

「コアメダル落としてないだろうな？」

「まさか。君こそまた盗られてないだろうね？」

「それこそまさか」

多少はダメージを受けたが、動けない程ではないのを確認する。

だが、オーズ 魅空が確認したのはコアメダルの無事。カザリの心配など、これぼっちもしていない。

それを分かっているのか、分かっていないのか、カザリはオーズTCから視線を移し………気付いた。

王蛇と、鎧王CFが居ない事に。

「ッ！ 居ないっ!?!」

「跡形もなく吹っ飛んだ、訳ないよな」

さっきのぶつかり合いで此方の攻撃が上手く入り倒した など
と話が良いすぎる。さっきのはあくまで相殺なのだ。

となると、あの二人のライダーは攻撃が相殺に終わって直ぐ姿を隠し、何処からか狙っているはず。

カザリは感覚を最大限まで広げ、オーズTCは万が一を考えドライバーのコアメダルを、タカとトラからクワガタとカマキリに入れ換える。

その時だ。

《FINAL VENT》

必殺技を告げる電子音。

海から、海面を鏡にし、メタルホーンを前に突き出し両脚をメタルグラスに乗せ運ばれる王蛇が飛び出す。

【ヘビープレッシャー】。

本来は仮面ライダーガイの技だが、メタルグラスと契約している王蛇にも使えるファイナルベントだ。

充分に加速し威力の乗った一撃だ。当たればタダでは済まないだろう。

ただし、当たればの話だ。

「避けるっ！」

「同じくっ！！！」

ヘビープレッシャーは、と言うか殆どの必殺技は一直線である事

が多い。普通は避けられない速度のため避けられないが、オーズTCにはバツタレッグの跳躍力、カザリには猫特有の瞬発力がある。

ギリギリではあるが、避ける事が出来た。

オーズTCとカザリは互いに逆方向に避けたため、王蛇と王蛇を押ししているメタルゲラスはその間を通り過ぎる。

だがそれも、予想通りだった。

「
でやああああああつ！！」

上空から声が聞こえ、オーズTCとカザリは上を見る。

そこには太陽をバックに、エビルダイバーに乗った鎧王CFが迫って来ていた。

【ハイドベノン】。エビルダイバーと協力して行く、ファイナルベントだ。

王蛇はヘビープレッシャーを発動した際、一緒にハイドベノンを発動させ鎧王CFが使用したのだ。

鎧王CFを乗せたエビルダイバーが突っ込む。目標はカザリ。

「ぐっ……あああああぁあつ!？」

カザリは身を捻りかわす。が、完全にはかわし切れず掠める。

掠めただけでもカザリの体は吹っ飛び、体内からセルメダルと、コアメダルが1枚飛び出す。

そしてコアメダルを、鎧王CFはキャッチして王蛇の隣に着地する。

「ゲット！ 上手くいったねえ、蛇の兄さん」

「ああ……まだ一人残ってるがな。
てーかお前、将斗はどうした」

【此処……に……居る……】

鎧王CFの中から、将斗が自分の存在を教えるように声を出す。

あの必殺技のぶつかり合いで発生した煙の中、王蛇はエビルダイバーを召喚し自分はミラーワールドへ、鎧王CFはそのままエビルダイバーに乗り上空へ身を隠していたのだ。

まあ、詳細のよく分からないイメージと共闘する羽目になったが。

王蛇は首をグルリと回しベノバイザーを持つ。

切り札は残してあるが、カードをかなり消費している。特に必殺ファイナル技のカードを三枚使ったのは痛い。

故に、ここからは慎重に戦わなければならない。

対して、オーズTCは仮面ので隠れていても分かる程の殺気を、王蛇と鎧王CFに向けていた。

「テメエら……！！ 出し惜しみは無しだ。徹底的に鬪つてやる……！！」

《クワガタ！ カマキリ！ バッタ！ ガッタータガタガタキリバ！
ガタッキリツバツ！》

解放されたのは昆虫系のメダルの力。

緑に統一された姿は仮面ライダーオーズ・ガタキリバコンボ。

その能力は……。

『はあああああああああつ！！』

「「なつ！？」」

ガタキリバコンボの能力は、分裂。オーズGCが50人に分裂し、迫って来た。

これには王蛇と鎧王CFも驚愕する。

「何この数の暴力っ！？」

「チツ！！」

《ADVENT》

《ADVENT》

《SWORD VENT》

王蛇はベノスネーカーとメタルゲラスを召喚。さらにエビルセイバーを装備する。

だが、この数の差、ミラーモンスター二体と武装で補えるものではない。

ベノスネーカーとメタルゲラスはオーズGCが五人ずつに抑えられ、残りが雪崩のように王蛇と鎧王CFを襲う。

「があっ!？」

「おわっ!？」

案の定、王蛇と鎧王CFは押し負け吹き飛ばされる。

その際、鎧王からあのイメージが飛び出し、鎧王はナイトフォームに戻った。

《スキヤニングチャージ!》

50人のオーズGCがオースキヤナーでメダルを読み込む。

王蛇は身を強張らせる。鎧王KFも何とか立ち上がるが、今からでは何も間に合わない。

王蛇は切り札を使おうと、カードデッキに手を掛けた。

《FINAL VENT》

「グオオオオオオオオオオツ！！」

「　　だあああああああつ！！」

その時、暗黒龍ドラグブロッカーの咆哮と共に、仮面ライダーリュウガが【ドラゴンライダーキック】を放ちながら、ガタキリバ集団の真ん中に落下した。

約10人のオーズGCが吹っ飛び、残りのオーズGCは驚愕と言ったふうに動きを止めた。

《FINAL VENT》

「グオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！！」

更にそこに、SURVIVE - 烈火 - によって強化されたブラックドラグランザーが、リュウガサバイブを背に乗せて現れた。

ブラックドラグランザーはファイナルベントの効果で変形し、砂浜に降り滑走。進行方向にはオーズGCの集団がいる。

ブラックドラグランザーはウイリー走行になると口から黒炎弾を発射。数人のオーズGCを吹っ飛ばし、そのまま進行方向にいたオーズGCを轢いた。

リュウガSVのファイナルベント【ドラゴンファイヤーストーム】である。

「・・・助か・・・た・・・？」

「あいつか・・・」

鎧王KFは首を傾げ、王蛇はリュウガSVに視線を向け呟いた。

リュウガSVには見覚えがあるし、その変身者も知っている。

とそこである事に気が付いた。

リュウガが二人居るのだ。

片やブラックドラグランザー・バイクモードから降りている、リュウガSV。

片やリュウガSVの隣に立つ通常形態のリュウガ。

片方 恐らくサバイブの方 は王蛇の予想の悪魔 錬矢だ
ろう。ならばもう一人のリュウガは誰なのか。

「まずっ！ カザリ、逃げるぞっ！！」

ワリュウガのファイナルベントで一人に戻ったオーズGCは、コンボの反動とダメージで痛む体に鞭打ち背中を向け脱兎の如く逃げようとする。

オーズ（魅空）にはもう一人のリユウガの正体が分かったのだらう。

だがその逃走を、悪魔（リュウガSV）が見逃すはずもなく、

《SHOOT VENT》

「おりゃっ」

「ギヤアアアアアアアアアアアッ！？」

容赦なく【メテオバレット】をぶっ放し、ぶっ飛ばすのであった。

その後、気絶した魅空と降参した力ザリを捕獲し、別行動のサ力キ達も含め全員が鍛練場に戻っていた。

今日はこのままキャンプを張る予定である。

香里と香流もライオンヤミーを倒したそうだが、疲れたので自宅に戻ったため此処にはいない。

「ギヤアアアアアアアアアアアッ！ 何この感覚っ！？ プールで溺れた時の感覚っ！？」

「？」

「よし、その感じだ」

「ケケケケケケケケケケケケケケケケ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

捕獲された魅空とカザリは簀巻きにされ、木から逆さに吊り下げられていた。

身動きの取れない魅空は、逆さの状態で鼻からコーラを入れられていた。将斗に。

将斗はこれでいい？ と淳一に視線を向けると、淳一は頷く。満面の邪悪な笑みを浮かべながら。

サカキは楽しそうに笑い、それを見て、少女の姿のカザリは顔を蒼白に染めた。

「……………ねえ、レンちゃん。止めなくていいの？ ヘビ君とアカオ二君がSに目覚めるよ？ 下手したらヨロイ君も」

「サカキと淳一は我がサドステイック星の勇敢なる戦士だぞ？ もう手遅れだ。」

あと将斗は本人しだいだ。寧ろ目覚めた方が嬉しいだろ？」

「まあねっ！ ぞくぞくするよっ！…！」

そんな下らない会話をしているのは、鍊矢とリュウガ。

このDM発言をしているリュウガは、鍊矢の友人の一人であり、『もう一つの幻想郷』のライダーで将斗達に魅空とカザリを追うよう指示出した張本人なのだ。

「あの、リュウガと荒木さんはどうやって知り合ったんですか？」

と、現実逃避のため詩織が話題を振ってきた。

悲鳴と笑い声がBGMだ。

「そうだな。俺が映姫からリュウちゃんが居る幻想郷の事聞いて、そんで行ってみて……四年くらい前だな」

「私からしたら二週間くらい前だけだねー」

「え？」

当時の事を思い出して話す鍊矢とMリュウガ。

詩織はそこで、鍊矢とMリュウガの出会った時期にズレがある事に気づいた。

四年と二週間では、いくら何でも違い過ぎる。

詩織がその事に疑問を抱くと、それを察したリュウガは説明を始めようとす。

「む、ライオン君不思議そうな顔してるね。きっとレンちゃんが四年、私が二週間って言った事だね？ いいよー、教えてあげるよー。それはね」

「簡単に言えば、世界が違ければ過ぎる時間も違っって事だ。こっちが一週間経てば、そっちは一日。その逆もある」

「ちよつ、レンちゃん私のセリフ」

と、鍊矢が横槍を入れる。

リュウガが文句を言うが無視する。

鍊矢の言う通り、世界が違えば過ぎる時間も違っ。こちらが一年過ぎれば、あちらは一週間、または半年。逆にこちらが一週間の時、あちらは三年経っている場合がある。

別世界に移動する事は、時間を移動する事でもあるのだ。

鍊矢はある程度、別行動に移動する灰色のオーロラを操作し時間を合わせる事が出来る。

別世界のライダーが『逆鬼の世界』から戻って来た時、別世界に行った時からあまり時間が経っていないのは、それが理由なのだ。

詩織は鍊矢の説明に納得し、魅空は嫌いだが将斗が鬼と蛇と一緒に笑い始めたため魅空は嫌いだが止め行く。

「いやー、レンちゃんごめんね。迷惑掛けて。これで魅空も少しは懲りてくれればいいんだけど」

「これだけじゃ無理だろ。根性曲がってるとか魂腐ってるとかの問題じゃねえし。

やるなら精神壊すつもりで殺らないと」

「あーやっぱりか。せっかく”わざと”レンちゃんとの会話聞かせてこっちに来るよう仕向けたのになー」

「結果がこうなっちまったんだからしょうがねえよ」

などと、詩織がいなくなったのを待っていたように話す悪魔とドM黒騎士自宅警備員。

まずサカキに聞かれたら、とりあえず音撃打を叩き込まれるだろう会話である。

「うーん、こんなもんかな？」

「どれ。うん、旨い」

テントの近くで夕食のカレーの準備をしているのは、月村家のメイド服を着たイレインとメルカバ。

さらに側ではリインフォース・アインスが付け合わせのマカロニサラダの準備をしていた。

リインフォースとイレインは、今晩はキャンプをしようと言う事で夕食を作るため、香里と香流と入れ替わりに来たのだ。

因みに魅空は美人二人が鬼と蛇にべったりなのを見て、この世の終わりとはばかりに泣き叫んだのは言うまでもない。

「そお）・・・・・・・・」

すると、リインフォースが目を話した際にマカロニサラダに手を伸ばす者が居た。

メルカバは直ぐに気付き、その手を叩く。

「じぶん！」

「いでっ!？」

「もう少しで出来るんだから我慢しろ」

「ええー、少しくらいいいじゃねえかよ兄貴」

そうメルカバに言うのは、猿 西遊記の孫悟空がモチーフのイマジン。戦闘中に、将斗に憑いたイマジンだ。

このイマジン、元は”派遣イマジン”なのだが、ターミナルの駅長やデンライナーのオーナー、電王からの願いで、将斗（鎧王）の元へ来たのだが中々出会えず 将斗とメルカバ、時の列車ガイライナーは『もう一つの幻想郷』に居たため、色々あつて漸く辿り着く事が出来たのだ。

将斗はこのイマジンと契約。『ゴクウ』という名前を与えた。

契約内容は『メルカバの手伝いをする』事。これは将斗が、メルカバに迷惑を掛けている事を負い目に感じていたからだ。

こうして正式に鎧王の仲間になったゴクウは、親しみと尊敬の意味を込めて将斗を”大将”。メルカバを”兄貴”と呼んでいた。

補足だが、ゴクウは将斗の元へ来る際に派遣イマジンを辞めてお

り、将斗とは普通の契約をしたため派遣イマジンのように一定期間過ぎたら契約解除、と言う事にはならない。

「ホント兄貴は真面目なんだから。摘まみ食いくらい・・・」

「お前もあなりたいか？」

「・・・すみません」

メルカバの真面目さに軽く小言を言うゴクウだが、メルカバが親指で指差した方向を見て直ぐに謝った。

メルカバが指差した方向では、魅空を縛った縄の先をバイクにくくり付け発車しようとする面々を、詩織が止めている所であった。

そんな訳で夕食。

サカキ・淳一・将斗も魅空で遊ぶのを止め、食卓を囲んでいた。

「サカキ様、口元にカレーが」

「ん？」

「しょうがないな。ほら」

「ん」

「淳一……ま、た……マヨネーズ……？」

「おお、旨いぞ。将斗、お前も掛けてみるか？」

「う、ん……」

「将斗ストオオップッー！」

「やれやれー」

「ははは、淳一のこれ（マヨ）は一生治らないからな〜」

「笑ってる場合じゃないっ！ あと猿は黙ってる」

「兄貴ひでっ!?!」

「流石リュウちゃん。変身したまま食うなんて、俺にも出来ねえよ」

「良いよお、もっと私を誉めて。そして私に惚れなさい」

「そして椅子にしてやるよ。俺がな」

「よっしゃこいつ!?!」

(ついてけない……………)

サカキの左右に座り、忙しく世話をするソラとリインフォース。

淳一特製マヨネーズをカレーに掛けようとする将斗を止めようとするメルカバ。それを見て笑うイレインとゴクウ。

S 発言の悪魔にカモンなMリュウガ。

ただ一人、詩織は食卓の光景を見て頭を抱えていた。

「畜生、アイツらこっち放つといて飯かよ。畜生、旨そうだな。畜生、あの鬼と蛇、あんな美人と。畜」

「畜生煩いよ。言いたい事は分かるけどさ」

「妬ましい妬ましい……パルパルパルパルパルパル
ル」

「煩いよウザいよ。そしてキモいよ」

魅空は縄で縛られ逆さに吊らされたまま、妬ましそうに食卓を見ている。

カザリは同じ状態で、ウザそうに横目で魅空を見ていた。

結局、バカ鬼とマヨ蛇、将斗は魅空で遊ぶのに夢中になってカザリには何もしてなかった。”まだ”。

「てーかカザリよ。お前グリードだろ。縄くらい切れるだろうが、何やってんだよ」

「やるうとは思ってたんだけど、どうにも力が入らなくて」

カザリは肩をすくめ、抜け出せない事をアピールする。

魅空とカザリを縛っている縄は、サカキが普段鬼縄術で使う物で簡単には切れない上に異能の力を封じる呪術を掛けてある。”異能の力”ではまず切れない。

魅空は内心舌打ちし、おちゃらけた雰囲気から一転、目付きを鋭くする。

魅空が持つコアメダルの一部（盗られていたメダルも含む）とオーズドライバーは没収され、サカキ達が食卓を囲んでいるテーブルとは別の小さなテーブルに、纏めて無造作に置かれていた。

（んっ………よっ………）

魅空は数度体をくねらせ、”体内から”カンドロイドの一つ、クジヤクカンドロイドを手に回し、親指でプルタブ（起動スイッチ）を開く。

クジヤクカンドロイドは起動すると、扇状の羽根カッターが展開され回転。縄を切断する。

確かに”異能の力”には切れないが、普通に物理的に切られるのには弱い。

縄を切り、地面に着地すると魅空はクジヤクカンドロイドを放り投げ、自律行動でカザリを縛る縄を切らせる。そして自分はコアメダルとオーズドライバーの回収に走り、見事に回収。その間、僅か数秒。

「あつ!？」

誰かが声を上げた時にはもう、時既に遅し。魅空とカザリは、森の中に消えた後だった。

サカキは腰から下げてたディスク　音式神とディスクアニマルを二枚持ち、音角を軽く当て放り投げる。

《　!　》

《　!　!　》

「追え」

二枚のディスクは音式神・茜鷹とディスクアニマル・アサギワシに変形し、サカキの指示で森の中へ向かった。

「直ぐに追います。サカキさん、山の中は勝手が分からないので案内をお願いします」

「いいぜ」

詩織が立ち上がり案内をサカキに頼む。

サカキは快く引き受け、他の面々も魅空とカザリを追うべく森の中に入るうとする。

「まあ待てつて。そんな急ぐ必要ねえよ」

だが、その言葉で全員が止められた。

言ったのは勿論、真つ黒な悪魔、錬矢だ。

錬矢はサカキ達が動いている間も、食事の姿勢から動いていなかった。

「でもさあレンちゃん。ここでしっかりぶん捕まえとかないと、今度は何をするか……」

「だから大丈夫だって」

友人のリユウガですら、錬矢の発言に怪訝に思い首を傾げる。

しかし鍊矢は、顔を歪ませ口と目を三日月状に変え笑っただけだった。

「ヒヤハッ」

その頃、まんまと逃げられた魅空とカザリは森の中を、山を降りるため進んでいた。

「これからどうするっ？」

「あっちに戻るぞ。ぶっちやけ無理だ」

カザリにこれからの事を聞かれ、魅空は『もう一つの幻想郷』に戻ると答えた。

錬矢からコアメダルを奪うのは、無理だと判断した。下手をしたら、自分の持っているコアメダルを全部盗られるかも知れない。

暫く山を下り、追跡は来ないだろうと気を緩めた時だった。

魅空とカザリの前に、二メートルは越す黒馬に股がった二メートルを越す巨体の男が現れたのは。

世紀末霸王、拳王様とその愛馬の御降臨である。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

魅空とカザリは自然と、当然の如く巨大な男の前で足を止めた。

汗が大量に吹き出し、体が言う事を聞かず戦う構えを取る事も、逃げる事も出来ない。

この世に生ける者としての本能で悟ったのだ。

勝てない・逃げられないと……。

気絶している魅空とカザリをサカキ達が発見したのは、それから数分後の事であった。

全員が気絶している二人を囲み、どうしようか見合わせる。

「埋める」

「沈^{ちん}する」

「魅空はバラす」

「売る」

上からサカキ・淳一・リュウガ・鍊矢。

以上の四名はツッコミの意味で額にブラッティダガーを撃ち込まれた。

「……………とにかく、また逃げないようにしましょう」

血塗られた短剣が人の額に刺さったのに引きつつ、詩織はそう言う。

こうなった原因は分からないが、寧ろ都合だ。

メルカバは頷き気絶している二人に近づこうとして、

「うじやっ」

鍊矢に蹴り飛ばされた。回復が恐ろしく早い。

「ええっ!?!」

「いきなり何をするんだっ!」

「……コイツらが悪いように言っな」

詩織は驚き、メルカバは当然文句を言う。

だが錬矢は、何故か怒りがこもった静かな声を出した。

大事な事なのでもう一度言おう、何故か、だ。

「お前らは真面目過ぎるし本気すぎるっ!

そもそも、正義感が強すぎるし仲良く団結しすぎて仲間思いすぎだ
っ!!!

いい加減にしろっ!」

(何で怒られてるか分かりませー!ー!ーんっ!!)

詩織とメルカバはそう思う。

錬矢は気絶している魅空を立たせ肩を組んで並び、笑いながら魅

空を指差す。

「魅空^{ミソラ}は性格が悪くて責任感がないだけだ」

「いや、その二点は組織に必要な人間の代表的な欠点ですよっ！？」

「うるせえっ！ みーちゃんは”わんぱく”なだけだっ！！
なー、みーちゃん」

何故か魅空の肩を持つ錬矢。

詩織とメルカバは完全に混乱するが、その他面々はなにくわぬ顔。

とその時、魅空が目を覚ました。

「はっ！ ……くっつくな気持ち悪いっ！！」

「ギャハンツ!?!」

目を覚ました魅空は、顔の近いアホを即座に殴り飛ばす。

「くっ、魅空。お前の味方をしてやってる俺にパンチするとは」

アホは立ち上がり、顔を伏せた状態で声を静かに出す。

そして、

「ホントにわんぱくだなー　もうっ」

と言つて、例の灰色のオーロラを発生。魅空と今だに気絶してるカザリに向け、こちらのメズールが流しそうめん等に使っている水流を発射。魅空とカザリを無理矢理オーロラに押し込み完全に入るとオーロラを消した。

「よし………。くっ、逃げられたかつ!!」

オーロラが完全に消えたのを確認してから、悔しそうに言うアホ。

詩織とメルカバは、大口を開けもはや何も言う事が出来ない。

それを見兼ねたサカキが、代表して”一応”聞く。

「あー、鍊矢。一応聞くが、何で逃がした？」

「逃がしたんじゃない、逃げられたんだ。（笑）」

「いや、（笑）って言っちゃってるし」

因みに行き先は『もう一つの幻想郷』の何処か。

「だってさ、別世界とは言え孫娘？ の思い人だしさ。一回くらいは・・・・・・・・」

「えっ！？ レンちゃん、あの噂本当なのっ！？ レンちゃんがアリ」

「ハッ！！」

鍊矢が小さく言ったつもりの言葉。それは全然小さくなく、その場に居た全員が聞いていた・・・・・・・・。

”ある噂”を知っていたリュウガがいの一番に反応し噂の内容を言おうとすると、鍊矢は自分が言っちゃった事に気が付き、ある行動に出た。

まずサングラスで隠れている両目がビコーンと光り、体をグリードの姿になる。

初代仮面ライダーのように、右腕を左上に真っ直ぐ指先までピンと伸ばし右に動かし、左腕も同じように、右上に伸ばしてから左に動かす。

次に両手の人差し指と中指だけを伸ばし、その両手を平手の方を外に向け額に添えた。

「必殺 悪魔光線（記憶強制消去）っ！！」

そして、発射された深紅の極太のビームは、見事にサカキ達を飲み込んだのであった。

翌日、早朝。

”完全に魅空に逃げられた”リュウガ御一行は、『もう一つの幻想郷』に戻るため、時の列車・ガイライナーの側面に並んでいた。

それと向き合う形で、サカキ達がいる。

「お世話になりました」

「貴重な経験だった」

「またなっ!」

「ま、た・・・会え、た、ら・・・」

「それじゃーね」

上から詩織・メルカバ・ゴクウ・将斗・リュウガ。

それぞれの手には翠屋の箱があり、翠屋特製ケーキをそれぞれがお世話になっている所のお土産として鍊矢が渡した物である。

向かいには、『逆鬼の世界』の面々が並んでいる。

「おっとそつだ。詩織、ちよつと」

「はい？」

鍊矢は詩織を呼び、列から離れて詩織の肩を組み周りから見えないよう、懐から”ある物”を取り出した。

それは、写真だった。

「こ、これは・・・！」

「こつちの鈴仙のだが、欲しいか？」

「ぜつ、是非っ！」

詩織が興奮して欲しがる写真。

それは、ロングヘアに赤いバンダナとマントのウサ耳の少女が、小さな正義の味方と一緒にケーキを食べて頬を緩ませている写真だった。

気づいていないのか、それとも隠し撮りなのかもう緩みっぱなしの表情である。

「将斗」

「何……これ……？」

「俺特製のマヨネーズだ。全ての食い物に対応出来る」

マヨ蛇がマヨ信者を増やそうとしていたが、そんなこんなで将斗達はガイライナーに乗り込み、ガイライナーは発車する。すると、将斗が扉から半ば身を出して姿を見せた。

「淳、……！ いつ、か……未来、で……！！」

「っ！ 応っ！」

手を振る将斗に、淳一も手を振り返す。

そうして、時の列車は時空の穴に入り見えなくなった。

この出会いが、狂気しかなかった少年にどんな変化を与えるか。

”聖王の写し身”である少女を守るため、少年が”加速の記憶”の仮面を被る事は、まだ誰も知らない……。

「いやー　実はリュウちゃんに渡したケーキ。その中に一つに大量の”わさび”が仕込んで、俺の能力　『影を操る程度の能力』で存在するギリギリまでわさびの影を薄くして隠してたんだよなー

ヒヤハッ
」

台無しだ。

その日の夜。錬矢はマンションのベランダで、一人でいた。

その手には、数枚のセルメダル。ただし、絵柄は隼や鳳凰、鮫、豹、蜘蛛、狼、アルマジロやカバなどであった。

錬矢は黙ってセルメダルを見る。

「貴方が物思いに耽るとは、珍しいですね」

すると、何処からともなく声が聞こえた。

錬矢は驚く事も、慌てる事もなく声のした方向　空に視線を移す。そこには、空に逆さに地面があり、逆さの地面に一人の男性が立っていた。

管理者の一人、『紅　渡』。

「よう。『ライダー大戦の世界』で会って以来か？
説教でもしに来たか？　それとも消しに来たか？」

「貴方に説教するつもりはありませんし、僕ら全員で戦ったところで貴方に勝てません。」

今日、貴方の前に現れたのは、ある物を渡しに来たからです」

そう、管理者・紅 渡はその”ある物”を投げ渡した。

黒のカードデッキに金の龍の紋章 龍騎のカードデッキだ。

龍騎のカードデッキを受け取り、見た鍊矢はものすんごく嫌な顔をした。

「貴方が僕達が変身するライダー、所謂”主役ライダー”を持たない・使わない主義なのは知っています。ですが、その龍騎のカードデッキを、逆鬼に渡して欲しいんです」

「サカキに？ 何でまた」

「貴方にも分かっているでしょう？ この世界に、近い未来に危険が迫っている事に。それ（龍騎）は、謂わば保険です」

言われるまでもなく、それは鍊矢にも分かっていた。

五年前のクリスマス、ヤマタノオロチを倒した後でも、数は圧倒的に少なくなっただとは言え魔化魍は出ているし、魔法世界ミッドチ

ルダではドーパントが出ている。

魔化魍は専門であるサカキが、ミッドチルダのドーパントはミッドチルダのライダーが対応している。

とは言え、何が起ころのは明白だった。

「それではお願いします。仮面ライダーアモン」

最後にそう言い残し、紅 渡は去った。

彼が立っていた逆さの地面も消えており、いつもの夜が広がっていた。

「保険、ねえ？」

紅 渡が去った後、鍊矢は龍騎のカードデッキから3枚のアドベントカードを引き抜き、見て、タメ息混じりに紅 渡が言った言葉を復唱した。

3枚のアドベントカードの名称は、

『SURVIVE - 疾風 -』

『SURVIVE - 猛毒 -』

『SURVIVE - 暗黒 -』

錬矢がリュウガのカードデッキに仕舞う『SURVIVE - 烈火 -』
と合わせて、4枚のSURVIVEのカードが揃った。

四十五ノ巻に続く

四十五ノ巻 『避暑と避難とラッキースケベ』 (前書き)

久々の逆鬼更新です。

ここ3日(関東・西日本方面)は台風の影響が涼しく過ごしやすかったですが、また明日から暑くなるそうので、皆様熱中症には気を付けてください。

フロストからのお願いでした。

四十五ノ巻 『避暑と避難とラッキースケベ』

「死ぬ…」

何の因果か、戦国時代から現代に来てしまった『逆鬼の世界』最後の鬼、サカキは、うつ伏せに倒れ、残った力で声を絞り出した

真紅の下着一枚で。

「いや一応客がいる前でその格好はないと思う」

学生が大いに羽根を伸ばし、終盤で地獄を見る夏休み期間中の八神家。

リビングのソファーにサカキはうつ伏せに横になっていた。文字通りパンツ一枚で。

そしてそんなサカキにツッコミを入れたのは、グレーのセミロングの髪に黒のTシャツとジーパン姿の青年。Tシャツには、ライオン・トラ・チーターのオーランドサークルの絵が描かれている。

「うつせカザリ。お前に今年は猛暑だったのに節電だからエアコン

が使えない俺の気持ちが分かるか！」

「それには激しく同意するけどだから下着一枚はダメだと思っただ僕は！」

サカキの暑さでやけになった発言に青年は肯定しつつツッコむ。

このツッコミ役になっているのは、”此方の（幻想郷の）”猫系グリードのカザリ。サカキの”マトモなタイプ”の友人の一人だ。

オーズ本編と違い、腹白く常識シュル人なのが特徴である。

そんな腹白いカザリが西瓜を土産に訪ねた所、サカキがパンツ一枚でぐーたらしてた、と言う訳だ。

「っーかよう。お前此方よかそっち（幻想郷）のがマシだろうが。何で来たんだよ」

「あれ、ウルから聞いてない？」

今年は此方（幻想郷）も猛暑で、暑さで頭をやられた名無が紫のメダル暴走させて幻想郷氷河期にしたって」

「…はっ！？」

「いや大変だったよ。避暑で湖の中泳いでたメズールが氷付けになるし、寒さでウヴァは冬眠しちゃうし。

だから何人かはこっちに避難してるって訳」

氷河期の原因のオーズは、ライオンやクジャクで氷を溶かしたり
ゴリラ・ゾウ・ワニで砕いたりとしてるそうだ。

サカキは「アホか…」と思った。

確かにこの暑さだ、

こんなに暑いのも、全部乾巧って奴のせいなんだ

草加テメエ

乾君…！

お前も信じるな木場。殴るぞ

なんて幻聴が聞こえてきたり来なかったしそうで、頭がやられる
のも無理ない気がする。

P i P i P i ! P i P i P i !

「ん？」

サカキとカザリが駄弁だべつてしていると、朱色のスタッグフォンが飛来

し、ライブモードとなってサカキの手に収まる。

「ほい、もしもし」

『あ、サカキ？ 私よ』

「んあ？ なんだくぎみーかー」

『くぎみー言うなっ！』

電話の相手は、アリサ・バニングス。別名バーニンググアリサ、海鳴の燃える女。

何だかんだで、長い付き合いの相手である。

『ところで、あんた暇？』

「はっ」

「夏だっ！」

「かき氷だっ！」

「プールだっ！！！」

「バカですか？ とミサカは貴方方を見下した目で見て言い放ちます」

御坂双子の容赦ない氷のツッコミ（と言う名の罵倒）により、騒いでたバカ鬼と虫頭は撃沈する。

サカキ達が居るのは、海鳴市の隣街に新しく出来たウォーターパーク。

実は、アリサはクラスメイトで友人のセシリア・オルコットからこのチケットを貰ったのだが、セシリア自身はイギリスの実家に。他の友人達も、夏休み期間中は実家（祖国）に帰っている者が殆どで、誘う相手がサカキ達にしかなく話が回って来た、と言う事らしい。

ちなみに、サカキのクラスは何故か男女バランスがおかしく、男子三割女子七割と言う状態。男子も、サカキや淳一・香流+ と見

知った顔ばかりだったりする。

あと、担任は悪魔（錬矢）だ。

今回、ウォーターパークに来たのはサカキ・香里・香流・アリサ。そしてその場に居たカザリと、カザリに誘われたウヴァ・ガメル・メズール（グリード陣は人間態）である。

ちなみにウヴァ達の擬態姿は、ウヴァが茶髪のオールバックの男性。メズールが薄紫色の肩まで伸ばした10歳程の少女に、ガメルが毛先が跳ねた褐色肌の『俺達がガンダムだっ！！』と言いそうな10歳程の少年である。

他の者は、仕事だったり囑託資格の更新だったり聖王教会に呼ばれて居なかったり、呼び出しに応じなかったり除雪ならぬ除氷作業中と、結局集まったのはこの八人であった。

サカキ・香流・カザリ・ウヴァ・ガメルの水着は見た目こそは普通のトランクスタイルだが、色は各人のイメージカラーで、裾の部分にはそれぞれのライダーズクレスト（カザリはラトラーター・ウヴァはガタキリバ・ガメルはサゴーズ）が描かれている。

対して女子陣は、香里は緑のビキニ。腰に緑のパレオを巻いていて、やはりパレオの端にはキックホッパーのライダーズクレスト。

メズールは青のワンピースタイプ。左胸の部分には、シャウタのライダーズクレスト。

そしてアリサは、香里とは別タイプのライトイエローのビキニ。
アリサの水着姿を見て、香流はいの一番に感想を述べた。

「アリサ、その水着似合ってますね」

「なっ!?! お、お世辞ならいらないわよ…!」

「いえいえ、お世辞なんてとんでもない。僕は思った事を口にした
だけですよ?」

「~~~~~ツ!?!」

「泳ぐ!」

「その前に、準備運動しなさい」

顔赤くしたアリサとアリサをからかう香流をスルーして、直ぐに
プールに飛び込もうとしたガメルをメズールが止める。

カザリは「マリサ達とこようかな…」等と考えながらビーチボー
ルを膨らませ、ウヴァはメロンシロップ・練乳を大量に掛けたかき
氷を頬張る。

(グリートの五感の設定は入れる余地がないので普通の人間と同
じになります)

そしてサカキは…。

「さて、今日の目標はジンオ ガ10匹連続狩猟つと」

『待て待て待てっ!!』

P S を持ち、雷狼竜を狩らんとしていた。

これには各々の行動を中止し、全員がツッコんだ。

「あんだ、プールに来て何でゲーム!? おかしいからっ!!」

「サカキ、空気読もうよっ! 鳥頭・虫頭のアंकとウヴァでもこれはないよっ!?!」

「そうだっ! 狩りに行くななら俺も連れて行けっ! ジ オウガの素材欲しかったんだ」

「その通りです。とミサカは自分のP Pを取り出します」「

「お前らもかっ!!」「

ツッコミと思わせてボケの虫頭と双子飛蝗を、アリサとカザリは得物(アリサはハリセン・カザリはネコちゃんスリッパ)でブツ叩き、ついでにメズールが放水する。

「全員、プールに来たんだから泳ぎなさいっ!!」

「「「はい」」」

「……」

アリサの鶴の一声で頭にタンコブを作っせず濡れになった虫頭と双子飛蝗は手を上げて返事をするが、ただ一人サカキだけはタンコブを擦るだけだった。

まず最初は泳ごうと言う事で、七人はプールに入る。

ちなみにカザリは猫だが水は平気であり、ガメルは浮き輪着用だ。

そんな中、香里が一人足りない事に気が付いた。

「あれ…？ サカキは？」

「そう言えば…」

「あ、あそこ」

姿が見えないサカキを、七人は周りを見渡し探す。そして、ガメルが発見し指差した。

ガメルが指差した先には、プールサイドでプールの中を覗き込む

サカキの姿が。

「…何やってるんだろ？」

「プールの深さを確認してる…？」

「あ」

ポチャン！

「あ、落ちた」

「たしゆけてええええええつ！！」

『ええええええええええええつ！？』

全員が絶叫し、溺れたサカキを陸に上げ、体育座りをしてるサカキを香里達七人が囲む。

「サカキ、あんた”カナヅチ”だったのね…」

「カナヅチじゃないもん。ただ泳げないだけだもん」

「それを世間ではカナヅチと言っんですよ？」

本人は隠す気があるのかないのか、サカキは泳げないようだ。

それを見兼ねたメズールは、ある提案を出した。

「仕方ないわね…。このまま泳げないままって言うのもアレだし、この中の誰かが鬼の坊やに泳ぎを教えましょう。私はガメルに付かなきゃいけないから無理よ」

と、サカキに泳ぎを教える事を提案し自分は辞退する。

ここで誰が教えるかと言う事になるのだが、男共はまず教えると言う行為が苦手（約一名無理）のため論外。残ったアリサ・香里のジャンケンの結果…。

「それじゃ、最初はばた足からね」

「あい」

香里が、サカキの手を引いてばた足をさせる。同時に、息継ぎの練習も行っ。

香里がサカキに泳ぎを教えている間、他の面々はビーチボールで遊んだり、夏なので無駄にテンションの高い虫頭は世界を余裕で狙えるスピードで泳いでたりと、自由だ。

「でも、サカキが泳げないなんて、意外だったな。運動神経いいのに」

「…悪かったにや、意外で」

香里にからかわれたと思い、サカキは拗ねたように言う。

いつもの、バカばかりしているギャップだろうか。拗ねて、手を引かれて泳いでいるサカキを、香里は可愛く思い「ごめんごめんと頭を撫でようとした。

それがいけなかった。

香里がサカキの左手を引いていた右手を放したため、サカキの左手は急に支えをなくし空を、水中を切る。それでバランスを崩し、同時に残った手も放してしまった。

「がぶっ！ げっ！ がぶぶぶぶっ！？」

「サカキっ！」

サカキは支えを無くし、バランスを崩したため支えを求め何度も腕と足バタつかせる。だがサカキの体格を考慮して、深いプールで練習していたので手足が付く事なく、余計にバランスが悪くなり混乱する。溺れる典型的な例だ。

香里はサカキの名を呼び手を伸ばした、が、混乱していたサカキは無我夢中に支えを求め声のした方…香里に飛び付くように抱き付いた。

「きゃっ!?!」

不意、踏ん張りが利かない水中、サカキとの体格・重さ等の条件が重なり、香里もバランスを崩す。

何とか持ち直そうとする者と、必死にしがみつく者。

そうして漸く落ち着いた時には…

「……………」

(…あれ?)

…サカキの顔面が、香里の胸に埋もれていた。

ここでアニメ・マンガなら顔動かすだろうが、サカキの戦闘者の経験が警告を鳴らす。しかし、状況が理解出来ず「離れる」と言う警告までは聞こえない。

(ま・さ・か…!)

サカキは冷や汗を流し、目だけを動かして上を見る。案の定、状況が理解出来ていない香里が目をパチクリさせていた。

（ああ、やっぱり…こんなアニメ・マンガでしかないような状況になるとは。いやこれも小説だけどさ。

…そう言えばよくアニメ・マンガで巨乳キャラの胸が揺れるシーンがあるが、ぶつちやけ好きじゃないんだよね。こつあからさまで引くって言うか…。いや嫌いじゃないよ大きいの？ ただやっぱり手頃な大きさが…。

つてっ！ 俺は何を考えているっ！？ 前回のコラボの魅空の生き霊でも憑いたかつ！？ あとカブキの霊っ！！）

等と、年の割には大きく、だが大き過ぎない香里の胸で思考した時間0・3秒。

最初は目をパチクリさせていた香里も、次第に赤くなって行き…。

「！！」

言葉にならない悲鳴と共に、サカキは蹴り上げられる。

まるで足だけ変身したのでは？ と思える程、威力のある蹴りで打ち上げられたバカ鬼は綺麗に弧を描きながら飛翔・降下していく。

そして降下（落下）先には全力で泳ぐウヴァが…。

チュドーン！！

まるで爆撃されたかのような音と水柱と共に、バカ鬼とウヴァは
激突・ブツ飛ぶ。

その際にウヴァからセルメダルが出て一般人の頭に入ったが、ど
うでもいい。

「「……………」」

P i P i P i ! P i P i P i !

《 ！ 》

頭にデツカイトンコブを作り力無く浮かぶバカ鬼と虫頭グリード。

朱色のスタッグフォンが、どうすればいいか着信を鳴らしながら
頭上を旋回していた。

四十六ノ巻に続く

四十五ノ巻 『避暑と避難とラッキースケベ』 (後書き)

避暑 プールへ

避難 グリード達が

ラッキースケベ サカキが

な今回の話。錬矢・ソラが居ない珍しい回でもありました。

今回『東方欲望録』からカザリ達が出演しました。『東方欲望録』は、『逆鬼』より時系列は前になりますので、今回出たグリード達は『東方欲望録』完結後のグリード達です。今回アंकが出ませんでした、ハブられた訳ではありません。炎属性なので除氷作業に駆り出されています(笑)。

夏はウヴァさん元気な時期。明日のオーズに期待(笑)。

ちなみにグリード達の擬態姿ですが、

ウヴァ TV基準の繋ぎ作業着姿。

カザリ TVのまま。

メズール 『東方四季一家』、四季レティ。

ガメル 『ガンダム00』、幼少期の刹那・F・セイエイ。髪の色は白・銀・グレー。

サカキが香里の胸にダイブ。何故? 何となく。

香里は鍛えてますから、スタイルは良いです。特に足が。

ソラとフェイトが異常なだけで目立つだけです。

実は2話構成で、次回はこの続きの魔化魍戦。相手は響鬼さんも嫌いなアイツです。

四十六ノ巻『河童とダイバーと切り札の風』（前書き）

仮面ライダー逆鬼、前回までの三つの出来事。

一つ！ 仮面ライダーオーズノ名無の暴走で、幻想郷に居たグリード達が『逆鬼の世界』に避難する。

二つ！ アリサ・バニングスの誘いでウォーターパークに行くも、サカキが重度のカナヅチである事が判明する。

三つ！ 気絶したサカキの元に、一本の連絡が入った。

四十六ノ巻 『河童とダイバーと切り札の風』

サカキはウォーターパークの出入口から飛び出し、走りながらスタツグフォンを操作する。

車道に来た所で、真紅に黒のラインのバイク　グレンベンダーが無人でサカキの前に停車し、サカキは直ぐに跨がりヘルメットを被ってグレンベンダーを発車させる。

その後、水着から着替えた香流やメズール達がウォーターパークの出入口が出て来る。その時既に、グレンベンダーに乗るサカキの後ろ姿は小さくなっていた。

ちなみに、ウヴァはぐったりしてガメルが運んでいる。引きずりながら。

「鬼の坊や、急にどうしたのかしら？」

「おそらく、魔化魍が出たのでは？　魔化魍はサカキしか相手出来ませんかから」

メズールの疑問に香流が答える。

しかし、魔化魍が出たのなら一言言ってもいいはず……。

疑問に思った香流は香里に聞こうとした、が、香里は胸を両腕で隠すようにし若干顔を赤くしていた。

「香里、どうしたんですか？」

「……何でもない……」

香里は、顔を赤らめたまま、既に姿が見えない鬼に一言だけ呟いた。

「……バカ」

とある山中の、川辺。そこでは……。

《DRAGON! Maximum-drive》

「ドラゴンファンゲツ！」

ラハブが回し蹴りを放ち、眼前に居た二体の異形　怪童子と妖姫を両断する。

怪童子と妖姫は、白い血を出血させ木の葉となって爆せた。

「……夏の奴か……」

怪童子と妖姫を倒したのを確認し、ひと息もせずラハブに変身した錬矢は漏らす。

夏限定で出現する魔化魍には、厄介な能力がある。『辺境の世界』のライダー、仮面ライダーキバ・レプリカフォーム/桜井黒乃のように、ラハブ（錬矢）も音撃が使えない訳ではないが、夏の魔化魍相手ではやはり本家音撃使いのサカキが相手をした方がいい。

「（連絡はしたから、直ぐに来ると思うが……）……一回戻って、サカキと合流するか」

その場を離れようとするラハブ。

その時、近場の茂みで何かが動いた。

ラハブは構え直し、臨戦体勢に入る。

若干の静寂。ラハブは思い過ぎしかと思った、その直後草むらから白い塊　粘液が飛んで来た。

咄嗟に左腕で防ぐ、が、それは間違いだと思い知った。

「っ！　やっべ……」

ラハブは今回の童子と姫の種類。そして今の白い粘液を見てそう漏らす。

左腕には、白い粘液がへばりつき、次第に硬化していく。

更に先程と同じ白い粘液が、幾つも飛んで来てラハブの右腕、両足にへばりつき硬化する。

この白い粘液、硬化するとそれなりに重くなるのだが、そこはグリード。重さなど感じさせない動きで粘液が飛んで来た茂みを見据える。

『キユカカカツ！』

すると、ラハブの威圧込みの視線に負けたのか、全身緑色の甲羅を背負った等身大の魔化魍　カツパが飛び出した。

カツパはラハブに覆い被さるように襲い掛かる。だがラハブは軽く避け、その背中に一発入れる。

『キユカツ！？』

「オウラッ！」

倒れるカツパをラハブは無理矢理立たせ、その顔に右ストレートを叩き込む。続けて、左、右、左と、連続で拳を叩き込んでいく。

そしてヤクザキックを入れた所で、ある事に気が付いた。

「…あつ！　音撃棒忘れたっ！」

ここに来て、音撃武器を忘れた事が発覚。

一瞬動きが止まったラハブに、背後から別のカツパが現れ飛び掛かる。

『キユカカカツ！』

「うおっ！？ もう分裂してたかっ！」

夏の魔化魍は、等身大までしか成長しないが代わりに大量に分裂する事が出来る。その上、音撃弦や音撃管では倒す事が出来ず逆に分裂してしまい、太鼓でしか倒せない。

ある意味大型の魔化魍より厄介な相手だ。

ラハブは背中に付いたカツパを振りほどこうとするが、中々離れない。

その間に、ヤクザキツクで倒れていた最初のカツパが起き上がり、ラハブに攻撃しようとした、その時だ。

「よっー！」

何処からともなく現れた逆鬼が、最初に居たカツパにドロップキックを浴びせた。

吹っ飛ぶカツパその1。その隙にラハブは片手の腕力だけで背中に付いたカツパその2を投げ飛ばす。

カツパその2は、倒れたカツパその1の上に落ちた。

「よお、苦戦してたみたいだな」

「別に苦戦してた訳じゃねえよ。ただ音撃棒忘れて倒せなかっただけだ」

「いや苦戦してたよりカツコ悪いから」

『キユカツ！』

『キユカカカツ！』

「ん？」

逆鬼とラハブがコントをしている間に、カップ達は体勢を立て直し怒りからか高く鳴き声を上げていた。

逆鬼はぐるりと首を回してから霊剣・紅を取り出す。

「錬矢、あと俺やつから帰ってる」

「おお、任せたぞ」

と、ラハブさっさとその場から去って行く。元より逆鬼に任せるともりだったようだ。

「毎年毎年……カッパは嫌いなんだよなあ……。逆鬼、紅蓮ッ！」

ラハブが去ったのを見送ってから愚痴ってから、キーワードを発する。すると、何処からともなく真紅の光球が飛来し逆鬼の中に入り直後、燃え上がる。

カッパ達は変化を起こした逆鬼を脅威と感じ、口から粘液を発射する。だが粘液は炎の壁に阻まれ一瞬で蒸発した。

「【 はっ！ 】」

炎が弾け、姿を現したのは真紅の鎧を纏った逆鬼……逆鬼紅蓮である。

逆鬼紅蓮は霊剣・紅が変化した大槍を軽々と担ぎ、中にいる星奈に語り掛ける。

「悪いな星奈、仕事だ」

【いえ、ナイスタイミングですサカキ。またあの横馬に管理局に入れとしつこく言われていた所だったので】

「タイミングバツチリじゃねえか」

『キユカカカッ！』

「おっと」

会話中に仕掛けて来たカッパの攻撃を避け、続いて突っ込んで来た別のカッパの首を掴み倒す。そして、後ろから迫る最初のカッパを回し蹴りで迎撃する。

「よいしょっ！」

『『キユカッ!?!』』

二体並んだ所でヤクザキックを放ち、川に落とす。

「さーって、殺るか」

逆鬼紅蓮は仮面の下でいい笑顔で言い、音撃棒・烈撃を両手に持ち、起き上がった二体のカッパに急接近し思いつきり腹部を叩いた。

「紅蓮強打の型っ!!」

音撃打・紅蓮強打の型

音撃棒で打たれた二体のカツパは軽々と吹っ飛び、腹部に炎で形成された音撃鼓が出現。音撃鼓が高速で回転しカツパが破裂、木の葉となる。

逆鬼紅蓮はパワーと逆鬼の元々の属性であつた炎を強化する。そのため響鬼紅のように音撃鼓を取り付ける事なく、一撃で魔化魍を倒す事が出来る。

逆鬼紅蓮は音撃棒を腰に戻し息を吐く、が、まだ終わってはいなかった。

「ふう……。あ？」

『キユカ、キユカカ』

逆鬼紅蓮が見た先では、川をカツパの首が泳ぎ、岩の裏に隠れたかと思つたら体を生やし、そそくさと逃げて行った。

ちなみにカツパの分裂は、体から首から先が抜け、抜けた首から体が生える。そして残った体から、新しい首が生えると言うものがある。

【逃げましたね】

「あーもー分裂なあ……。待ちやがれこのカッパッ！」

逃げたカッパを、逆鬼紅蓮は追う。

だが待てと言われて待つ筈もなく、カッパは素早い動きで森を駆け抜け、崖にまで来るとそこから跳び、飛蝗のように跳ねて下山して行く。

「変な声しやがって」

無論逆鬼紅蓮もただ見てる訳でもなく、崖の上から装備帯に吊り下げていた3枚の音式神のディスクを持ち音角で軽く叩く。すると、音式神は普段の茜・瑠璃・緑に染まった後、更に深紅に『装甲化』する。

「よろしくな」

《《 ！ 》》

投擲され、変形した『鋼鷹』ハガネタカ、『鉄狼』クロガネオオカミ、『兜大猿』カブトオオサルはカッパの追跡を開始。

逆鬼紅蓮もスタッグフォンの遠隔操作でグレンベンダーを呼び出し、追い掛ける。

グレンベンダーを操り、舗装された山道を走る。途中、鉄狼や兜大猿が首や腕で指差したり鋼鷹が先導したりと道案内をする。

装甲音式神の案内通り進むと、大きな川の上に架かる橋を、跳ねながら渡るカップパを発見。そのままバイクによる体当たりをしようとするまま突っ込む。

『キュカツ！』

「うおっ!?!」

しかし、バイクが当たる寸前でカップパは反応し、跳躍して避け、更に逆鬼紅蓮の背中に蹴りを浴びせた。

予想外の反撃に完全に反応が遅れ、逆鬼紅蓮は崩れかけたバランスを何とか戻しグレンベンダーを停車させる。

「おととと、危ねえ…!」

『キュカツ！ キュカツ！』

「うおっ！ のわっ!?!」

しかし安心するのもつかの間、カップパが粘液を吐き出して来た。

初撃こそは避けたものの、二撃、三撃と連続して撃たれかわし切れず両腕で防いでしまう。

「うっわキタねえ…」

【唾液みたいな物ですからね。と言つか、私ベタベタなんですけど】

「嘘つけっ！ お前中に居るから当たってないだろっ！」

平然と嘘^{ボケ}を言う星奈に対し、逆鬼紅蓮はツツコミながら平然とバイクから降り歩を進める。

カップは驚き粘液を再び発射するが逆鬼紅蓮は腕で防ぎながら止まらない。

先に述べた通り、カップの粘液は硬化すると重くなり動きを阻害する。だがサカキは、普段から重りを四肢に付けて鍛えているため、この程度重くなったからと言って動きに支障をきたす筈もない。

『キユカカツ！』

「待ちやがれっ！」

【サカキっ！？ 止まってくださいっ！】

勝てないと判断したのかカップは川に向かって飛び降り、逆鬼紅蓮も後を追って飛び降りようとする。

星奈が制止しようとするが、逆鬼紅蓮は聞かず川に目掛け飛び込んだ……。

《 ！ 》

「……か」

タカカンドロイドの案内の元、鍊矢は橋に到着した。

橋の手摺の上に、装甲音式神が何やら川の状況を見ている。

錬矢も川を覗く、と、水中から逆鬼紅蓮が上がって来て、水面で大騒ぎしていた。

「 たあああしゅうううけええええええつ！ 泳げないの忘れてたあああああああつ！！！」

【だから止めたのに。ああ、私も炎属性だから水は…ブクブクブク……】

「役立たねえつ！！！」

溺れてるバカに、錬矢がツッコむ。そして自分のスタッグフォンを取り出しボタンを押していく。

すると灰色のオーロラが現れ、中から赤が基調となった巨大装甲車両 『アームドギャリー』が現れる。アームドギャリーの車体が開くと、停車していたグレンベンダーが自動で動き出しアームドギャリーの車内へと入る。

グレンベンダーが入ると、アームドギャリーの内部に備えられた小型アームが動き、グレンベンダーの側面・後部に次々とパーツが付けられ、グレンベンダーは『グレンダイバー』へと形を変えた。

アームドギャリーはオープンハッチを開けたまま、車体を動かして微調整すると、グレンダイバーを射出した。

川では、カップに引っ張られ逆鬼紅蓮が水中に沈んでいた。

「あぶぶぶぶぶっ！！」

カップは足を掴まれ、水中に引き込まれた逆鬼紅蓮。抵抗しようにも、逆鬼紅蓮時の弱点である水の中で力が落ちた上、両腕に付いて硬化した粘液の重りが、水中で思った以上に弊害となった。

カップは水を得た魚のように、地上で見せた以上の速さで水中を泳ぎ逆鬼紅蓮に体当たりを始める。このまま弱らせ、溺死させるつもりだ。

逆鬼紅蓮はまともに動けず、もはや息も持たない。

その時だ。体当たりするカップに体当たりを浴びせ、鉄の塊グレンダイバーが逆鬼紅蓮を乗せ上昇を始めた。

水面に出ると、逆鬼紅蓮は車体の上でぐったりしていた。

「……し……死ぬかと思った……」

【……だから止めたのに。サカキ、後で覚えといてくださいね……？】

「……………はい」

逆鬼紅蓮に死亡フラグが立った所で、体力がほぼ回復しグレンダイバーのアクセルを吹かしカッパを追跡する。

カッパは逆鬼紅蓮が復活したのを見るや、泳いで逃走を始めた。

「さつきはよくもやってくれたな……これでも喰らえっ！」

逆鬼紅蓮はグレンダイバーのコンソールを操作しボタンの一つを押した。すると両サイドの追加ユニットから、魚雷が発射。

魚雷は真っ直ぐ進み……カッパに直撃して爆発した。

音撃ではないので倒されなかったが、カッパは爆発で軽く吹っ飛び、近場の岸に落ちた。

逆鬼紅蓮もグレンダイバーから跳び岸に着地する。

【そろそろ終わりにしましょう】

「ああ、腹減ったしな」

『キュカカカツ！』

「【 おうら（はあ）っ！！】」

襲い掛かって来たカップを、大槍靈劍・紅で打ち上げる。

幾ら俊敏な動きのカップでも、空中では身動きが利かない。

大槍靈劍・紅をその場に刺し立て、音撃棒を両手に逆鬼紅蓮は跳んだ。

「紅蓮強打の型っ！ はっ！！」

音撃棒でカップを打つ。

先のように音撃棒で打った部分に炎の音撃鼓が出現し……カップは爆散。逆鬼紅蓮は再び岸に着地した。

「…………ふう…………」

「サカキ、お疲れ様です」

「おう。…………後はコレだな…………」

息を吐くと共にユニゾンアウト。星奈が逆鬼から外に出る。

更に顔だけ変身を解き、両腕にあるカップの粘液が固まったソレを若干諦めながら見ると、右手の甲から鬼爪を伸ばし左腕のソレを削り始めた。

削る度にソレからは埃が出た。

「ゴホっ！　ゴホっ！」

数時間後、八神家。居間に置いてある電話が鳴った。

「マイスター、お電話ですよー?」

「あー、今手え離せんからツヴァイ代わりに出てくれへんか?」

「はい、ですう」

現在、晩御飯の支度をしているはやてに代わりリインフォース?
(ツヴァイ)が受話器を取る。

ちなみに、現在のツヴァイはフルサイズ(小学校低学年程の大きさ)になっている。

「はい、八神です」

『……アノ、モシモシ。アインスオ願イシマス』

「はい……? あの、どちら様ですか……?」

『エト……トニカクリインフォース・アインスサンオ願イシマス』

電話の相手は変声器で声を変えているのか甲高い声をしており、誰かと聞いてもツヴァイの姉、リインフォース?(アインス)に代

われと言つばかり。

この手の事に耐性がないツヴァイは、涙目になりどうすればいいかオロオロする。そんな時、居間に入って来たヴィータが声を掛けた。

「ん？ どうしたツヴァイ」

「ヴィータちゃああああああんっ！！」

ヴィータに泣き付くツヴァイ。

そして「かくかくしかじか」と、事情を聞いたヴィータは受話器を引ったくり電話の向こうの相手に怒鳴る。

「テメエ、どこの誰だっ！ 言わねえとミンチにすんぞっ！！」

『イヤアノ……』

「ちよっ、ヴィータ何物騒な事言ってるんっ！？」

「どうしたヴィータ」

更には怒鳴り声を聞きつけはやて、シグナム、シャマル、ザフィーラ。それにアインスや閻璃、ライラまで集まる始末。

ヴィータから事情を聞いた夜天の主と守護騎士達は、順に受話器を持ちそれぞれ文句を言う。

「……ねえ、アインス、閻璃」

「どつしたライラ？」

そんな中、はやて達から一歩引いていたアインス、閻璃、ライラ。

ライラはアインス、閻璃に聞いた。

「これってさ……」

「ああ、そうだろうな」

「星奈が呼ばれたようだからな。…十中八九そうだろう」

事情　カッパの“アレ”を知るアインス、閻璃、ライラは電話の向こうの鬼に同情した。

「アアモウツ！ カツパノ“ガス”吸ウトネツ、コンナ声ナツ
チャウンダヨツ！
ダカラ嫌い何ダヨアイツツ！！」

電話の相手 カツパの吐いた粘液が固まった重りを削った際に
出た埃を吸い、ヘリウムを吸ったように甲高い声になったサカキは、
スタッグフォンを耳に当てながら吠えるのであった。

同時刻、魔法世界ミッドチルダ。

ミッドチルダのとある街のとある場所に、白い帽子とスーツを着た男が居た。男の腰には赤いバツクルのベルト　ロストドライバーが装着されていた。

その男を取り囲むように、数十体の黒いスーツ姿の怪人　マス
カレイドドーパントが周りを囲んでいる。

男は帽子を外し、懐から『J』のロゴの黒いガイアメモリを取り出しながら、呟く。

「……やれやれ。仕事でガイアメモリを使っつもりは無かったんだがな……」

《JOKER!》

「変、身」

《JOKER!》

その場所に“切り札”を意味するガイアウィスパーが響き、風が吹き込んだ。

「さあ、お前達の罪を……数えろ」

四十七ノ巻に続く

四十七ノ巻 『怪盗Cノ襲いくる無双龍』 (前書き)

勢いで買った『BLACK ROCK SHOOTER THE
GAME』が意外に良く楽しくやっています。

今回の話は、銀魂のあの回を元にしてます。

四十七ノ巻 『怪盗Cノ襲いくる無双龍』

「 は？ 下着ドロ？」

学校の生徒会室で、サカキが言ったのがそれだった。

私立王頭大附属中学校。それがサカキ達が通う学校の名だ。

元は私立聖祥大附属、だったのだが、二年前に現理事長の更識^{サラシキ}リ
ユウベイが大学やその他関連施設を丸々買い取り、現在の名前に変
更したのだ。

生徒第一を考えた設備が多く人気が高く、また制服が自由（私服
可）なのも人気の一つである。

なのでサカキや淳一達ライダーの登校用の服が、NEVER
な方々と同じ制服でも、問題ない。

そんな中学校でも、今は夏休み。本来ならサカキが来る必要もな
いのだが……。

サカキが夏休みの学校に居る理由は、黒衣に伊達眼鏡、ペロペロ

キャンディーをくわえた鍊矢と、サカキの向かい側に座って扇子を扇いでいる女子にあった。

「そ、他にも体操服にスパッツ、水泳部は水着もね。

最近夏休みの部活動中に、運動部の女子更衣室にある着替え用の服から着替えた後のまで根こそぎ盗まれてるのよ。

鍵も掛けて、南京錠もしたんだけど無理矢理壊されてて、こっちはお手上げよ」

と苦笑しながら肩をすくめる女子。

この女子は更識サラシキタチナン無。サカキより一つ上の学年の三年生、この学校の生徒会長でもある。

名前から分かる通り、理事長の孫娘だ。

下着（女子服なら見境なし）泥棒の話をされ自分が理由が呼ばれた理由は大体分かった。だが何で自分なのか？

サカキの思考を読み取ってか、鍊矢が説明を引き継いだ。

「職員会議でも問題になってな。それで面白そうだから俺が立案して、その下着（女子服なら見境なし）泥棒を捕まえる事になったんだよ。俺主導で。

それで話の都合上お前を呼んだわけ。OK？」

「オイコラ」

ようするに暇潰しで呼ばれたんかい……。

サカキは一応ツッコむが、ここで何を言っても無駄なのは分かっていたので、諦めた。

そして巻き込める奴は巻き込もうと思った。

「前は俺一人だったし、今度はマヨとかも巻き込むか」

「そうだな。（その方が面白そうだし）」

「決まりね。……錬八先生、八神君、宜しくね」

そう言い、楯無は笑顔を浮かべ閉じていた扇子を広げた。が、扇子には『女の敵必殺』と殴り書きで書いてあった。

余談だが、部活の助っ人をしていた楯無も盗まれたそうなの。

一方、高町家ではソラを初めとしたメンバーが集まっていた。

「ううー、終わらないよぉー！ はやてちゃん手伝ってー！！」

「なのはちゃんの自業自得や。きりきりやりー」

頭に巨大なタンコブを作ったなのは（横馬）は、はやてに助けを求め、はやては突き放す。

彼女は孤独だった。

一人でこの“敵”と戦わなければならない…。

そう、この“夏休みの宿題”とは。

……まあ簡単に言えば、夏休み前半も管理局の仕事ばかりして宿題に一切手を付けておらず、つい先日家族にそれがバレてこっぴどくシバかれ、現在必死に終わらせようとしていた。

はやては当然終わらせており、同じくここに居る香里・フェイトも終わっている。サカキもソラの実家の黒服達が勝手にしたため、終わっていた。

泣きながらペンを動かすなのはと、マンガ本を片手にジューズで涼むはやての横、縁側から見える庭で足に脛当てを着けた香里と、木製のトンファーを持ったフェイトが軽く打ち合っていた。

「どう？ フェイト」

「うーん……やっぱり違うかな？」

フェイトは打ち合い中断させ、自分の持ったトンファーを見て首を傾げる。

フェイトは今、新しい自分のスタイルを探し試行錯誤していた。

彼女のデバイス・バルディッシュの形状は戦斧・鎌・大剣などのどれも大振りの物。それらの重量がそのまま重りになり、フェイトの持ち味の“速さ”を殺している部分があった。そのためフェイトは、自分に合った武器を探していたのだ。

しかし中々見付からず、こうして香里かソラに相手を頼み色んな武器を試していた。

「今度はイケると思ったんだけど……」

「私は基本足だから、武器については何も言えないけど、こうして相手はするから色々試してみましよう?」

「うん、ありがとう香里」

フェイトは香里に礼を言つと、トンファーを置き用意してあった別の武器から、鉄扇をチョイスする。

また縁側では、ソラと美由希は物騒な会話をしていた。

「ソラちゃん、コレなんだけど……」

「コレは、日本刀……? いえコレは……!」

「そう、それは日本刀と呼ぶにはあまりにも攻撃的な刀。所謂人切り包丁だよ」

「直刃（刃紋（波状の線）がない刀身）ですか……。刀の造形に遊びがない……。しかもコレ、ここ数十年に造られた物ですね」

「うん。お父さんが言ってたんだけど、『多分、この刀を造った刀匠は刀は斬る物。美しくするなら宝石でいい、そう思ったのだから』だつて。」

それに近年だからこそ、ここまでの刀が出来たのかも」

ソラは美由希の説明を聞きながら、うっとりした表情で刀を見る。
そんな“日常”の中、香里の緑色のスダッグフォンが鳴った。

香里はフェイトに一言断り組手を中断すると、相手を確認してから電話に出る。相手はサカキだ。

『おお、香里。今ソラとマヨと香流居るか？』

「淳一と香流は居なくて、ソラは刀を見てうっとりしてるけど、どうしたの？」

『おお、実はな』

そして電話の向こうで、サカキは下着（女子服なら見境なし）泥棒を、悪魔の暇潰しで捕まえる（生死問わず）事になり、香里達を巻き込む事にしたのを伝えた。

『と言う訳だ』

「（この鬼と悪魔は……）……分かった。ソラ達には私から伝える。その犯人、個人的にも許せないし」

『おー。俺と鍊矢はこれから聞き込み行くから、お前は別で聞き込みしてくれ。んじゃ後で』

「うん」

用件を終え、電話を切る。

さて、と香里はまずはソラに伝える事にした。

生徒会室を後にし香里に連絡したサカキと錬矢は、まずは目撃情報をとると思い、女子水泳部が使用しているプールに来ていた。

最初に女子水泳部なのは、知り合いがいるからだ。

「おーっす」

「あ、八神さんに荒木せ」

「……………」

「…………… 錬八先生」

プールサイドに来ると、スクール水着を着た、顔見知りの女子生徒が居たので声を掛けた。

水泳部の女子生徒は“荒木先生”と言おうとして、錬矢が描写出来ない顔をしたため、言い直す。

「二人が来たって事は、例の泥棒ですか？」

「まあな」

また大変ですね、と女子生徒は苦笑する。

実は以前にも下着泥棒が現れ（仮面3作『レッツゴー仮面3 極・スピンオフ！ ショート茶番劇場2011』参照）、その被害者の一人でサカキと錬矢が事情を聞くため会ったのが彼女（女子水泳部2年・真田^{サナタユキ}幸）なのだ。

そして今回の下着（女子服なら見境なし）泥棒の被害者でもある。

「っーかさあ、うちの学校って何でこんな、どこぞのお嬢様女子校

並みに粒揃いな訳？」

「アニメ・マンガ・小説の学校なんて大抵そうだろ。あと魔法少女の世界だし」

「薬莢をガチャンと杖から出す魔法少女など、俺は認めん。

俺が認めるのは“カードキヤ？ターさ？ら”とか、なか？しとかのに連載されてるのだ」

鬼と悪魔がかーなり、メタ発言するが真田幸は意味が分からず（理解しない方がいいと判断）首を傾げる。

完全にどうでもいい事だが、「僕と契約して魔法少女になってよ」と言い白い生物ナメモが居たが、腹を空かしていたドラグブリーダーの餌になったそう。

脱線したので話を戻そう。

「で、生徒会長（尻軽）から聞いたが、今回“も”鍵掛けてもダメだったんだろ？」

「はい。あ、でも鋭利な刃物とかで切られたんじゃないなくて、無理矢理壊されてて」

「……ゴリラ使って殴り壊したか？」

「いや、リュウちゃんに確認したけど今は大人しくしてるって」

サカキ少し考え呟くが、鍊矢も同じ考えに至っており先に確認を
していたらしい。

これで前下着泥棒（魅空）の線は消えた…。

サカキは舌打ちする。すると、真田幸が思い出した。

「チツ！」

「あ、でも同じ水泳部の娘が犯人らしい人影を見たって……」

「女の勘が危ないと警告を鳴らすような奴か!？」

「まだ疑うか。仕方がないが」

「いえ今度は、すごく速く動いて見たのは一瞬だけど、見た瞬間に
全身鳥肌が立って、その姿はまるで【黒光りする魔弾】だって言っ
てました」

「なんじゃそりゃ」

そうとしか言えない目撃詳言だ。

サカキと鍊矢はこれ以上収穫はないと判断。真田幸に礼を言い、
最後に壊された更衣室の鍵を見て、プールを後にした。

「それじゃーなー」

「役立ったか分からないけど、頑張りなさいよ」

サカキはクラスメートの鳳鈴音ファンゼンインに礼を言いうらクロス部の部室を後にする。

そしてスタッグフォンのメモ帳に打ち込んだ、鈴から聞いた内容を確認。……頭を掻いた。

「収穫はなし、か……」

女子水泳部を後にし、近くから剣道部、薙刀部、空手や合気道などの各格闘技の部活、今入ったラクロス部を聞いて回ったが、犯人を見ていない、見たとしても水泳部と一緒にの詳言と言うのが殆どであった。

「フーか何だよ【黒光りする魔弾】って。他にも【黒い悪意】とか【台所の悪魔】とか、もうアレじゃん。???リじゃん。と言うか俺の人間嫌いつて設定どこ行った？ もう普通に話してんじゃん」

もはや特定の虫の事を言ってると思えない目撃詳言に呆れるしかなかった。

錬矢は職員室に行っており、このまま一人で情報を集めるにも飽き……疲れてきた。

更に現理事長が学校を買い上げる際、学校の敷地も巨大に広げ至る所に部室があり移動する疲労もあるため、拍車を掛けている。メタ発言の一つや二つ、したくもなる。

あとから来るソラ達を待ちながら休憩しようか……。そう思った時、サカキの耳に悲鳴が届いた。

「キヤアー!!! 下着泥棒ー!!!」

悲鳴は二つある体育館の一つ、主に球技系の部活が使う第一体育館だろう。

悲鳴の発生源をおおよそ予想しながら、サカキは駆ける。

飽きたからさっさと終わらせて、家で闇璃とツヴァイ抱いてゴロゴロしよう。

そう、思いながら。

氷結魔法を使える闇璃とリインフォース・ツヴァイは、天然クーラーになります。邪な考えはありません。

予想通り、悲鳴は第一体育館だった。

騒ぎを聞きつけた教師や生徒がいないあたり、サカキが一番乗りらしい。

だがそんな事気にも留めず、サカキは悲鳴の発生源である女子更衣室に向かう。

女子更衣室の近くまで来ると、黒い人影が女子更衣室から逃げるように飛び出して来たので、反射的に跳び上がりその人影にドロップキックを浴びせ、女子更衣室に逆戻りさせる。

サカキも、そのまま女子更衣室に突入した。

突入してサカキがまず見たのは、下着泥棒と思われる人影。独特の光沢を持つ体。

その姿はまるで、【黒光りする魔弾】、【黒い悪意】、【台所の悪魔】。つまりゴキブリだ。

『キヤアアアアアアアアアアアッ！！』

「いやガチでゴキブリかよっ！」

更衣室に居た数名の女子は先程とは比べものにならない悲鳴を上げ気絶する。

ゴキブリ怪人は『うう…』と頭を振りながら立ち上がる。

サカキはゴキブリ怪人に対し、頭を掻きながら言う。

「あー……そのゴキブリ怪人、最近出てる下着ドロって事でOK？」

『下着泥棒……だと……！？ 私をそのような下種な輩と一緒にするなっ！！』

「一緒だろ。その右手に持ってるもんが証拠だ」

容疑を否認するゴキブリ怪人に対し、サカキはゴキブリ怪人の右手に持っている布（下着）を指差して言い放つ。

だがしかし、ゴキブリ怪人は布（下着）を握り締め高々と宣言した。

『だから違っっ！』

私の名は怪盗ゴキ仮面っ！ この世のモテない男達に美少女の下着をプレゼントするのが使命の正義の使者だっ！！』

「やっば下着ドロじゃねえかあああああああっ！！」

アレか？ 毎回うちの学校の更衣室に忍び込んで下着盗んで、夜な夜なモテない男共に配ってたってかつ！？」

サカキのツッコミシャウトが響く。

怪盗ゴキ仮面　ぶっちゃけコックローチドーパントは戦利品（下着）を持ちながら、後ろに跳び更衣室の窓枠に着地する。

『去らばだ少年！ 私は今日もモテない男達にコレ（下着）を届けなければならんだ！』

「テメっ、待てやコラアアアアアアアアッ！！」

そのまま窓から逃げようとするコックローチドーパントを、サカキは当然追いかける。

コックローチドーパントは、“手に持っていた物”をサカキに向け投げた。

サカキは投げられた物を掴む。だが掴むと言うワンテンポを置いた事で、コックローチドーパントは窓の外に出てしまった。

窓の外を見るが、コックローチドーパントは捨てセリフを残してその名の如く、壁をはずり上に逃げて行く。

『あーはっはっはっ！ それはプレゼントだ。去らばだー！！』

「……クソッ！」

自分の失態にサカキは悪態つきながらも、後を追おうと窓の外を見た状態から、踵を返す。

だが気付いていなかった……。

「……あれ？ そっぴゃコレ……」

コックローチドーパントに投げられ、咄嗟に掴んだ物を見る……。それは、女性用の下着……。

それに、今居る場所は女子更衣室……。周りには着替え途中の女

子達が……。

大量の嫌な汗が流れる。

「えーつと……」

『キヤアアアアアアアアツ!!』

「すんませーんっ!」

持っていた下着を捨て、女子達が投げってくる物を避けながら更衣室を出て行く。

更衣室を出ると、窓ガラスの前に移動し懐から“龍の紋章が入ったカードデッキ”を取り出し、窓ガラスに向け掲げた。

「変身っ!」

コックローチドーパントは、そのまま壁を移動し体育館の屋根の上に出る。

『今日は三つか……』

今日は運が悪かった。

充分にリサーチしたつもりだったが、今日は予想外にも部活の練習が早く終わり見付かってしまった。

見付かっても、いつもなら高速移動で姿を見られず逃げられたのだが、運悪く邪魔が入り姿を見られてしまった。

ヒーローは姿を見られてはならない。

今日はもう無理と判断し、“夜に備え”一度帰路に付こうとした。その時だ。

「オウリヤっ!!」

赤い影が、襲って来た。

赤いスーツに銀の鉄仮面と鎧。左腕には龍を模したバイザー（召喚機）。

サカキが変身した、仮面ライダー龍騎だ。

龍騎はコックローチドーパントに掴み掛かると、コックローチドーパントの腕を掴み体勢を入れ替え、背負い投げで投げ飛ばす。

投げられたコックローチドーパントは、突然の事に受け身が取れずまともに背中から落ちた。

『グハッ！……………何者だっ！？』

立ち直ったコックローチドーパントが叫ぶが、龍騎は答えず走り出し、先程の恨みを込めコックローチドーパントに殴り掛かった。

「さっきはよくもやってくれたなドチクシヨウオオオオオオオオ
ッ！ー！」

『ぐおっ！？』

龍騎の拳はコックローチドーパントの左頬を捉え、殴り倒す。

『くっ！』

コックローチドーパントは落とした下着を取ろうとするが、龍騎の右腕に装備された龍の頭部をしたガントレットを見て、その脅威を感じ取り下着を諦め逃走を謀る。

直後、龍騎がパンチングアクションをするとドラグクローから炎の放流【ドラグクローファイヤー】が放たれコックローチドーパントを焼こうと追う。

やがて放流が止まると、龍騎は舌打ちした。

ドラグクローファイヤーが焼いた場所には、ゴキブリの丸焼きどころか、何もなかったのだ。

「チツ、逃がしたか……」

どうやら間一髪の所で、ドラグクローファイヤーから逃げられたらしい。

運のいい奴、そう思いながら、龍騎は早々にその場を離れようとする。

勢いでドラグクローファイヤーなど使ったが、あの技はかなり目立つ。コックローチドーパントの発見もあって、直ぐに誰か来るだ

二十八ノ巻に続く

【おまけ・BLACK ROCK SHOOTER THE GA
MEをプレイして思い付いた】

とある世界のとある場所、そこに灰色のオーロラが現れ、オーロラから一人の青年が現れた。そして

「 寒っ!?!? 」

この世界に来て最初の言葉がそれだった。

一面見渡す限り雪。所謂白銀の世界と言う物だ。“晴れていれば”また違った言葉が出ただろう。

しかし、天気は最悪な事に吹雪。一寸先まで見えず、その上今の青年の格好。厚手のズボンとブーツ、シャツの上からジャケットと明らかに今居る場所には適さない物。

早くなんとかしなければ、凍死する危険があった。

「ん……？」

その時、青年は何かを感じ取った。

目を細め、何かを感じた方向を見る。よくは見えないが、何かおそらく人が倒れているようだ。

青年は駆け出し、倒れている人物に駆け寄る。

倒れていたのは、まだ幼い少女。黒い衣服はポロポロで、軽傷のようだが、戦闘に巻き込まれたのか。

何にせよ、こんな吹雪の中では危険だ。何処か吹雪を防げる場所を探さなければ

「人類は全滅してグレイが残った……。と思ったけど、まだ生

き残りが居たのね」

声が聞こえ、青年は振り返る。吹雪は弱くなっていたので、直ぐに視認出来た。

声を掛けてきたのは、オレンジの髪飾りを付けたショートヘアの少女。倒れている（髪も服も黒一色のため）黒い少女と同じ雰囲気があった。

「その娘、助けたいんでしょ？ 付いて来なさい。案内するわ」

「……………ああ」

一瞬、従うか迷ったが、この世界について何も知らない。率先して敵を作る必要はないし、何より黒い少女を助けるのが先決だった。

（軽いな……………）

青年は黒い少女を背負い、歩き出したオレンジの少女の後を追う。

「なあお前……………そっぴや名前聞いてなかったな」

「……………ナナよ。ナナ・グレイ」

「それじゃあナナって呼ぶぜ。それで」

「相手に名前を聞いておいて、自分は名乗らないのかしら」

「おおっ、悪い悪い。俺は」

青年は片手で黒い少女を背負いながら、器用にズボンのポケットから、“紫の戦士”が描かれたカードを見せた。

「俺は、仮面ライダーディゲイン」

【おまけ・終わり】

四十七ノ巻 『怪盗Cノ襲いくる無双龍』 (後書き)

王頭大附属中学校、

牙吠、

更識リュウベイ、

今回は結構遊びました(笑)。

おまけは完全な思いつきなので、連載する予定は今のところ一切ありません。

四十八ノ巻『怪盗C / 激怒のKS』（前書き）

土曜日に更新予定でしたが、内容を変えたため遅れました。すみません。

それとは別に、昨日リリカルなのはVivid4巻を購入したのですが表紙に疑問が……。

なんでちよい役のはずなのは・フェイト・はやてが表紙出てるんですかね？ かなり疑問です。

「女子更衣室にまで突っ込んだのに、逃がしたと……。バツッ
カじゃねえの？」

「バーカ」

「役立たず」

「……スケベ……」

「テメエら……！」

その後合流した鍊矢達と共に、学校の空き教室に移動しコックロ
ーチドーパントとの経緯を説明……。ソラ以外の全員から罵倒されて
いた。

特に香里の視線が痛い。

ソラが「まあまあ」と納めようとするが、サカキはプルプルと震
えながら立ち上がり、

……教室の隅っこのの字を書き始めた。

「鬼だつてへこむんだぞー……」

「サカキ様ー！」

へこんだサカキをソラが慰めるが、錬矢は無視して話を始めた。

「さて、へこんでる役立たずなバカ鬼からの情報だと、件の連続盗難事件の犯人はコックローチドーパント。……ガイアメモリを使った犯行だ。

何でもこのゴキブリ怪人は、自らを『怪盗ゴキ仮面』と言うふざけた通り名を名乗ってるそうだ」

ふざけたってお前が言うな……。

香里・香流・淳一はそう思うが口には出さない。……だって言ったら何されるか分からないし。

錬矢は香里達が考えている事を知ってか知らずか、続ける。

「んでコックローチドーパントの犯行なんだが、実は学校以外でも派手にやらかしてるみたいでな。街中のレベルの高い女は手当たり次第やられてるようだな……。それで盗んだ下着を、街中のモテない野郎共に配ってるようだ」

夜中、干しっぱなしの下着を狙うらしい。昼は学校、夜は街、と言っ事だ。

錬矢は「ふむ……」と呟くと懐からある物　モテない男の象徴、女性用の下着を取り出した。

「なるほどな……コレはそう言う意味だったのか……」

「貰ってるじゃんっ！ モテない男の象徴貰ってるじゃんっ！
と言うかそれ（下着）を持ち歩くなっ！！」

役立たずな鬼の代わりに香里が吠えた。

そして、自分の周りの野郎がモテない男の象徴を持っていないか
睨みを利かせる。

すると、香流が笑顔で言ってきた。

「そう睨まなくても大丈夫ですよ香里。

僕も淳一も……そこでいじけている鬼もモテない男の象徴は貰って
いません」

「は？ 何で言い切れるのよ」

「何でも。とにかく安心してください」

「そう。……変なの」

（ここだけの話、よくサカキと淳一宛てのラブレター渡されるんで
すよね。断ってますけど）

親友を思ってたか、姉を思ってたかのお節介。

話が脱線し始めたので、淳一が軌道修正に入る。

「で、そのゴキブリをどうするんだ？」

「ああ、当然ぶん捕まえるよ？ 生徒会長直々の指名だしな。……
っーかモテない野郎って、俺は二児のパパだぞ」

悪魔が黒いオーラを出し始めるが、捕まえると言っても相手は神出鬼没な上、目撃詳言から高速移動能力がある事が予想出来る。

そんな相手をどうやって捕まえるのか。

しかし、鍊矢はちゃんと奇策を用意していた。

「フフフ、覚悟しろよゴキブリめ……」

そして夜。体育館の前で、サカキ・錬矢・ソラ・香里・香流・淳一の六人が集まって居た。

六人の前には、不自然な物干し竿。そこに干されていたのは……。

「ちよつと待てええええええええつ!!」

と、そこで香里が吠えた。今日は彼女がツッコミらしい。

香里が叫ぶ理由がある。物干し竿に干されていたのは女性物の下着……香里、ソラの物だ。

吠えた香里に、ソラ以外の全員が不思議そうな顔を向けた。

「『え、何?』って顔するなっ! 何で私とソラの下着が干されているのっ!?! 持って来いって言われた時嫌な予感はしたけどっ!?!」

「何って、囀作戦だよな?」

「ああ。囀作戦だ」

香里のツツコミに、サカキと鍊矢が当然のように言う。

香里を説得するため、鍊矢が語り出した。

「いいか香里。情報を纏めた結果、コックローチドーパント、いや怪盗ゴキ仮面は真正の変態だ。奴は下着を見ただけで、その下着の所有者がどんな人物か見分ける事が出来る。

そして極めて高い危機察知能力も持っている。だからミラーモンスターが徘徊してる俺の家や八神家と月村家、マスタークラス達人級がいる高町家とお前と香流が下宿してるさざなみ寮には手が出せなかった……」

「だがここで、手が出せなかった所の、ソラと香里の下着を無防備な状態で晒せばどうなる？ 奴、怪盗ゴキ仮面は必ず現れるっ！！」

更にサカキも説得に加わる。

コックローチドーパント 怪盗ゴキ仮面は追いかけても高速移動能力と危機察知能力があるため、撒かれる可能性が高い。そこで此方が追いかけるのではなく、あっちから来て貰おうと言う訳だ。

しかし、理由は分かってもだからと言って自分の下着（+ついでに干されたスパッツ）が訳の分からないドーパントに……強いて言えば怪盗ゴキ仮面が届ける変態・電波男・チエリーボーイ・スケベロリビッチモウソウスキーに盗られる可能性があるのだ。サカキ達は勿論、盗らせるつもりはないだろうが、やはり賛成しかねる。

香里は同じく囿に使われている下着の持ち主にも止めさせて貰おうと、ソラに声を掛けた。が

「ソラ、あんたからも何か言つてよ」

「……うう……人様の前で下着を見せるのは……しかしサカキ様の頼みなら……しかし……」

常識とバカ鬼の頼みの間で揺れていた。いや、鬼をダシに悪魔がやっただらう。

とにかく、バカ鬼を信仰してる彼女は役に立たない。

即座に判断した香里の横で、鍊矢が何処からともなく何かが含まれた、大きな風呂敷袋を取り出した。

香里は嫌な予感をしながらも、とりあえず聞いてみた。

「ねえ、それって……」

「ああ。なんと言うか、地雷、みたいな？」

風呂敷を開けると、中には地雷みたいな、と言うか地雷がギッシリ詰まっていた。

「ちよつとおおおおつ!?!」

「持ち出すの結構苦労したんだぞ? 管理厳しいから」

「蛇の道は蛇だな」

「サカキもあつさり言っていないでツッコみなさいよつ!?!
地雷って言ったら兵器よつ!?! ジュネーブ条約に違反してるじゃないつ!?!」

「他所は他所。うちはうち」

「そんなおかんルール持ち出してもダメでしょつ!?!」

「香里、勘違いするんじゃない。これは地雷じゃなくて、正式名称『地雷、みたいな?』だ」

「地雷でしょうがつ!?!」

香里がいくら吠えようが、悪魔と鬼は聞き入れない。

双子の弟にも止めてもらおうと、香流の方向を向く。そして、固まった。

「フフフ……。不逞な輩と難癖付けて問答無用で叩き潰す……。!
久しぶりだア……。」

「いえ淳一。ここは罠り殺すの方が」

「もっと良いのは罠り潰すだな」

「掻き篋り、引き千切る」

「捻りを入れ、叩き潰して丸めて茹でる……！！」

「怖いわっ！ あんた達なに怖い事言ってるのよっ！？」

香流っ！ そんな爽やかな顔でそんな事言っとなっ！！ 淳一はセリフに似合う邪悪な顔するなああああっ！！」

怪盗ゴキ仮面の処刑方法を爽やか&邪悪な笑みで話合っ拳飛蝗とマヨ蛇に、香里のツッコミシャウトが入る。

淳一はデフォだが、香流も一緒なのは何故か。それはミラーモンスターも達人級マスタークラスも居ないバニングス家、強いてはアリサが被害を受けていたからだ。

「あ痛たた。腰にくるなあー」

その横では悪魔が世界一危険な土木作業（地雷埋め）を始めており、香里は「あー！！」と吠える。

そんな彼女に、サカキは香里の肩に手を置いて言った。

「大丈夫だ香里。お前とソラの下着は必ず守るって。それに、こうしてアレ（下着）を見れるのはある意味役得」

それがいけなかった。

只でさえイライラしていたのに、サカキの言葉で完全に頭に来た香里はサカキの横顔に回し蹴りを入れる。

サカキは受け身を取る事も出来ず、校舎の壁に頭から突っ込んだ。

「バカッ!!!」

香里はそんなサカキに一言言い放つと、その場から去って行く。

「香里、どこに……」

「帰るっ!!!」

香流がどこに行くか聞くが、香里は一言だけ行ってしまった……。

そして、校舎の壁のすぐ下で倒れるサカキに、鋭い視線が集まった。

「サカキ、香里怒ったじゃないか」

「バーカ」

「お前何やってんの？」

「サカキ様……」

香流・淳一・鍊矢の順番で言われ、これにはソラもフォローが出
来ない。

しかし、当たり所が悪かったのか……当のサカキは何も言わずグ
ツタリしていた。

結局、帰ってしまった香里を除き五人で怪盗ゴキ仮面を捕まえる
事になり、**囀作戦は継続。**

体育館の前に囷の下着（+スパッツ）があり、その前にグラウン
ドが広がっている。サカキ達全員が草むらに身を隠し見張っていた。

「フーかよう……」

と、囷を見ながらサカキがボヤク。

「何だよ怪盗ゴキ仮面って。ネズミ小僧の下着バージョン？ 下着
ドロのくせに義賊気取りかコノヤロー」

「さあ？ 変態が何を考えてかは分からないが……俺達のやる
事に変わりはないしな」

サカキのボヤきに、鍊矢が答える。

「まあな。だけだよ、そもそもこの囷作戦……上手いくのか？
相手は危機察知能力があるんだろ。俺達が張ってるので来ないんじ
や？」

「それについては問題ない。
確かに今までは避けて来ただろうが、怪盗ゴキ仮面はソラと香里の
下着をいつか盗もうと狙っていたはず。そろそろ我慢の限界だろう。
何せ、相手は下着を見ただけで持ち主を判断出来、量より質を求め
る真正の変態だからな」

サカキの疑問に錬矢は答える。

サカキは納得するが、そのサカキの隣で恥ずかしそうに俯くソラの姿が。やはり自身の下着を人に、特にサカキ見られるのは恥ずかしいようだ。

ちなみに、キバットは居ない。ファルコン家の屋敷に戻っているからだ。

何でも、キバの鎧に関する事で調べたい事があるそうだ。

「そついや錬矢よお。あの赤トカゲどうにかしてくれよ。タイミン
グ考えずに絡んで来るんだけど」

「赤トカゲっておま……。
しゃあねえだろ。お前のドラグレッダー、無駄にプライド高いんだから。飼い主なんだからちゃんと面倒見るよ」

ミラーモンスターが完全にペット感覚なのはさて置き。ドラグレッダーは自分の主を見定めようとしているらしい。

サカキとしては迷惑な話だ。

「あ、言い忘れてたけどドラグレッダー、メスだからな？」

「え、ミラーモンスター雄雌あんの？」

新たに発覚した事実もさて置き。

いつ来るか分からない相手を待つのは思いのほか疲れる。

サカキ達は囿を見る目を五割開きしてソラに至っては、夜も遅いのでサカキの背中に体を預けて眠っている。

「もう面倒だから誰でもいいじゃねえか？ テキトーにその辺の奴で済まそうぜ？」

「口裏を合わせればバレねえか」

「ZZZ……」

もはややる気のない鬼と蛇。あと寝てるキバ娘。

悪魔もジャ プを読み始めてる中、やる気のない連中に文句を言うのは香流だ。

「皆さん真面目にしてください。アリサの下着を取り戻した上で、下着を盗んだそいつを血祭りにあげるんですから」

「オイオイっ！ お前怖えよっ！ 何爽やかな顔で言ってたんだ、お前こんなキャラだっただけかっ！？」

「アリサの下着が掛かっているんですから当然です。と言うか煩いですよ、怪盗ゴキ仮面の施しパンツ貰ったくせに」

「んだとコリアツ!? コンタクトにしてやんぞコリアツ!」

「残念ですねえ。これは伊達眼鏡です」

香流のキャラ崩壊?(キャラが定まっていないため疑問系)にツッコむ錬矢だが、施しパンツの事を言われ取っ組み合いの殴り合いに発展する。

更に、殴り合いに巻き込まれ、サカキがとばかりを受けソラが最悪の目覚めをした。

「ギャー!?!」

「……煩いんだよおおっ! こちとら眠いんだよおおっ! お前らの血は何色だああああっ!?!」

「ソラー!?!」

「面白そうだなア、俺も交ぜろオ……!」

ソラがキャラ崩壊を起こし面白がった淳一が殴り合いに交ぜる。

もはや大乱闘。

それに呆れたサカキが、手を叩きながら仲介に入った。

「あーもう、お前らケンカしない。今日はムシムシして暑いから、全員イライラしてるんだろ。」

よし、ちよっと休憩だ」

「暑いバカ」

「ぐっ……」

「暑い巫女好き」

「うっ……！」

「暑いメイド好き」

「ぶがっ……！？」

「暑いスケベ。……言ってくればいつでも見せるのに……」

「さっ！ぞっ！ー！」

……暑いのがいけないだよね……！ みんな暑いのがいけないんだ……！」

乱闘を止めようとしたサカキだったが、鍊矢達の（特にソラの）言葉が深々と突き刺さり涙を流す。

「……何か、冷たい物でも買って来るから、注文、ある？」

「イチゴ牛乳！」

「ホヤの酢の物！」

「マヨネーズ500？ボトル！」

「パピコ！」

「はいはい。大人しく待ってるよ。」

……たく、しょうがねえな」

涙目になりながら、呆れたながら歩き出すサカキ。だが

P i i !

「え……」

ドゴオオオンツ！

爆発。

これには乱闘していた面々も止め、呆然となる。

「サカキ様が……爆発しました」

「きつと暑かったからですね」

「そりゃ爆発もするな」

「んな訳ねえだろ。自分が埋めた地雷踏んだんだろ。まったく何処に地雷埋めたか分かってねえのに動くから」

「……アハハハハハ」

サカキのミスに笑う三人。

その中で、ソラが重大な事に気がついた。

「あれ、ちょっと待ってください。もしかして、何処に地雷を埋めたか、誰も分からないんじゃない……」

「……ハハ……」

全員が固まった。

罎の下着（+スパッツ）が干された物干し竿を中心に、そこから中に地雷が埋められている。かなりの数を埋めたため、誰も把握していない出来ていなかった。

その時、奴が現れた。

『フッフ、フハハハハハ！』

「あ、あれはっ！」

『光りある所に影がある。一つ人よりテカリがある。パンツのゴムに導かれ、今宵も駆けよう漢浪^{オトコ}漫道……。

怪盗ゴキ仮面っ！ 只今参上っ！！』

怪盗ゴキ仮面 コックローチドーパントが体育館の上に現れた。

最悪のタイミングでの登場に、ソラは頭を抱えて叫んだ。

「さ、最悪ですっ！ 最悪のタイミングで現れましたあー！！」

『フハハハハハ！ 滑稽、滑稽だよお前ら。何かオレのために色々用意してくれたみたいけどな、そこで指をくわえて見てるがいい！ 己のパンツが、変態、電波男、チエリーボーイ。スケベロリビツチモウソウスキー達の手渡る瞬間をなあ！！』

「ああ……あああ……！！」

コックローチドーパントの言葉に、ソラは蒼白になる。変態・電波（以下略）に下着が渡った瞬間を想像してしまったのだ。

背筋が寒くなり、動けなくなったソラの横を、何かが駆け抜けた。

地雷を踏んで爆発したサカキだ。

サカキは音叉剣を片手に突っ込んで行く。

「誰が渡すかあああああっ!!」

P i !

「あ
」

ドゴオオオンツ!

再び、爆発。

これには鍊矢もツツコミを入れた。

「何がやりたかったんだアイツはあああああっ!!?」

「サカキ様ー!!!」

「あっ! バカッ!」

P i !

ドガアアアンツ！

キバ娘、バカ鬼を追いかけて爆発。

コックローチドーパントは嘲笑う。

『フハハハハハ！ 愚かなり。とうっ！』

体育館の上から飛び降り、壁の僅かな凹凸を使い下手に地面に降りないよう降りて行く。

そしていざ下着の前に降り立とうとした時、真横からタキシオン粒子が籠った蹴りをまともに受けた。

『フハハハハハッ！』

《R i d e r K i c k》

『ぐおっ！？』

「まったく、嫌な予感がして戻ってみたら」

そう言うのは、飛び蹴りをして地面に着地したキックホッパー。

どうやら下着の周辺には地雷を埋め“忘れていた”らしい。

キックホッパーは錬矢達 特に黒焦げになっているバカ鬼に呆れた視線を向ける。

「まったく、結局盗られそうになってるじゃない。だから反対だったのよ！ 戻って来て正解だわ。

……べ、別にやっぱり心配になったんじゃないんだからねっ!？」

(((何故ツンデレ……?))))

突然のツンデレ発言に錬矢達は思うが、言ったら蹴られそうなので黙っておく。

その時、ライダーキックをまともに受け、大ダメージを受けた筈のコックローチドーパントが立ち上がった。

ゴキブリの怪人だけにしぶとい。

『まだ……、まだだ……！ こんなものじゃ、オレは倒れない……！ 変態・電波男・チェリーボーイ・スケベロリビッチモウソウスキー達がおれの帰り待っているんだ！ お前達に聞こえるか、彼らの声が……！』

ゴキ仮面よ頼む！ 希望を分け与えてくれ。

ナイロンのシャカシャカ、シルクのツルツル、コットンのふわふわ、どれでもいい。ただ一枚のパンツさえあれば明日も生きられる。前を向いて、胸を張って歩いて行けるんだ！

『 呼び叫ぶ、彼らの心の声が、聞こえるかあつ！？ 』

ゴキ仮面の名誉に掛けて、彼らの元戻らねばならんだあつ！！』

「 知るかあつ！！ 」

どんな大層な訴えをしようが、やってる事は最低行為。バツサリと切り捨てられる。

キックホッパーは、怒りに燃えながらホッパーゼクターを引き抜き、変身を解く。そして、長方形のバツクルと青いメダルを3枚取り出し、バツクルを腰に装着しバツクルの窪みにメダルを入れた。

「 結局やってるのは下着泥棒じゃない！ 」

来る途中、プテラ・トリケラ・テイラノのカメラに『 試した事がある 』からって渡されたコレで…… 今まで盗まれた娘達分の怒りも纏めて受けなさいっ！！ 』

《 シャチ！ ウナギ！ タコ！ シャシャシャウタ シャシャシヤウタ 》

特有の歌が流れ、水が弾ける。

怒りの香里が新たに変身したのは、オーズ・シャウタコンボ。

オーズSCの力を感じ取ってか、コックローチドーパントは高速移動に入る。……下着を確保するために。

しかし、オーズSCの黄色の複眼が輝きウナギアームとなった右腕を突きだし、放水する。

放水の先には何もいなかった筈が、高速移動していたコックローチドーパントが自ら突っ込み、放水の勢いに負け押し飛ばされた。

『な、何っ!?!』

「ハ!」

驚くコックローチドーパントだが、オーズSCが左手に持ったウナギウィップを振るい、コックローチドーパントを拘束。自分の方に引き、近付いた所で回し蹴りを叩き込んだ。

「ハッ! やあああああっ!」

『ぐあああああっ!?!』

更に蹴りを入れる瞬間、右足のタコレッグが四本に分かれ四倍のダメージを与える。

これにはコックローチドーパントも堪らなずウナギウィップの拘束も解かれ、蹴り飛ばされた。

オーズSCはオースキャナーを持ち、オーズドライバーに滑らせ必殺技の体勢に入る。

《スキヤニングチャージ》

オーズSCの体が液化化し、高々と飛び上がる。ウナギウィップを振るいコックローチドーパントを再び 今度は雁字搦めに拘束し、自分の方に引き寄せ体勢を入れ替え両足をつき出す。するとタコレッグが展開、ドリルのような形になると回転する。

そして、身動きが取れないコックローチドーパントに、【オクトバニッシュ】が決まった。

必殺技が決まりオーズSCは着地し、コックローチドーパントは頭から地面に落ちる。オーズにはガイアメモリをメモリブレイクする機能がないため、ドーパントを“倒す”事は出来ないが、もう動けないだろう。

『ぐっ……オオオオオッ!!』

その時、動けないと思われていたコックローチドーパントが立ち上がり、雄叫びを上げたのだ。

予想外の出来事にオーズSCは驚き、構える。
そしてコックローチドーパントは、右拳を天に向かって突き上げた。

夜空には、北斗七星が輝きその横に紅い星が輝く。

『我が右手に、一片のパンツ無 』

《DRAGON! Maxima-Drive》

「おりゃっ」

『ぐあああああああつ!?!』

「散り際の一言潰したあああああああつ!!」

最期の言葉を言おうとしていたコックローチドーパントの脳天に、
錬矢が変身したラハブが容赦なく一撃を叩き込む。

因みに地雷の埋められた所をどうやって来たかと言えば、爆発した鬼の後頭部に足跡が付いているのを見れば分かるだろう。

(この悪魔、教え子を踏み台にしゃがった……)

オーズSCがそう思ったのは当然である。

「 錬矢テメエエエエエツ！ よくも踏み台にしてくれたなああああああつ！！！」

と、復活したサカキが龍騎サバイブに変身。龍騎SVはラハブに殴り掛かり、そのまま乱闘を始める。

そして、エビルダイバーの乗って来た王蛇とパンチホッパーが、コックローチドーパントだった変態のケツにベノサーベルを突き刺していた。

「フハハハハッ！」

「このままコンクリートに詰めて海に沈めましょう」

「いい加減にせんかあああああああつ！！！」

オーズSCは騒ぐバカ共に放水し、ウナギウィップの電氣ムチで感電させ黙らせる。

バカ共への制裁が終わわり、肩を上下させるオーズSCに、復活し直感で地雷を避けて来たソラが肩を叩いた。

「香里様、アレを……」

「え？ ……………」

ソラが指差した方向をオーズSCは見る。

見たのは、まだ回収していなかった下着とついでのスパッツに、
体育館の屋根から糸で逆さに吊られた蜘蛛の怪人　オニグモヤミ
ーが手を伸ばしていた所であった。

読者の方々は覚えているだろうか？ サカキがラッキースケベを
起こし、作者も予定してなかったフラグ建てたウォーターパークで
の事を。

あの時、サカキがウヴァに激突した際に零れたセルメダルが一般
人に入った。しかしその時の一般人は、異性に強い興味を持ってお
り、その時にウォーターパークに居たのも水着姿の女性を見るため
……。つまり女性の敵だ。

その女性の敵から生まれたヤミーは、親の欲望を叶えるため昼夜
問わず下着や、水着やスパッツを盗んでいた。

つまり、怪盗ゴキ仮面の犯行と思われていた一部は、オニグモヤ
ミーがやった物なのだ。

因みに、怪盗ゴキ仮面は下着しか盗んでいない。

そんな事など知らないオーズSCは、怒り再燃させ、ウナギウイ
ップでオニグモヤミーを拘束……重量系、恐竜系を彷彿とさせる勢

四十九ノ巻に続く

四十八ノ巻『怪盗C / 激怒のKS』（後書き）

KS 香里シャウタでした。

本当はドラグレッダーが絡む予定でしたが、シリアスになってギャグの話には合わないので中止・書き直しました。そのせいで更新遅れましたが（苦笑）。

ドラグレッダーはメス>

ドラグレッダーは女の子。完全な思い付き（笑）。描写していませんが、ドラグブラツカーより一回り小さいです。

ついでに、他のミラーモンスター達は、

ドラグブラツカー：オス

ダークウイング：メス

ベノスネーカー：オス

メタルゲラス：オス

エビルダイバー：オス

こんな感じですよ。

皆さんお気づきかも知れませんが、サカキが龍騎なのでパスワードはデイスってます。龍騎でやりたい事があるので……。勝手ながらもみません。

香里がオーズ（シャウタ）に変身>

前々からやりたかった、オーズ変身。やっと出来ました。

自分の所のオーズは変身条件が『コアメダルに適性する者』で、オーズドライバーは誰でも“装着は”出来ますが、コアメダルに適性がなければ変身出来ません。
適性するコアメダルも人によって違い逆鬼のメンバーだと、

サカキ：サゴーズ

ソラ：タジャドル

香里：ガタキリバ・タジャドル・シャウタ

香流：ラトラーター

淳一：ブラカワニ

錬矢・名無：特別で全適合

こうなります。単色だけの場合、一部スペックが強化されます。これの元はハルルさんの小説より、許可は貰ってます。

ハルルさん、ありがとうございました。

作者も予想外な香里フラグマジです。

ただ当初は出番を回そうとしたのが……何故こうなったっ!?

ちゃんと整理はつけさせます。ハーレムにする予定は(多分)ありません。

では、次回もお楽しみに。

四十九ノ巻 『誘拐のVノライターと毒のSURVIVE』 (前書き)

サカキ

「……orz」

ソラ

「あの……サカキ様どうしたんですか？ 確か八神家の皆様で江戸村に行ったんですよ」

はやて

「転送魔法^{つぎ}使うての日帰りだな。それでお兄ちゃん、クナイのキーホルダー買って財布に付けとったんやけど……」

ヴィータ

「家に帰ったら、クナイの先端が無くなってたんだよ」

シグナム

「サカキはよくキーホルダーを無くすからな……」

シヤマル

「でも今日で最短記録なのよね、無くすの」

ザフィーラ

「不憫な奴め」

ツヴァイ

「よしよしですよー」 頭に狐のお面を付けて頭を撫でる

サカキ

「……orz」

はやて

「あ、これお土産の模造刀」

ソラ

「ありがとうございます。…サカキ様……」

四十九ノ巻 『誘拐のVノライターと毒のSURVIVE』

とある日の日曜の昼下がりに。

淳一と香流は、マシンゼクトロンを駆り前を走る一台の黒いワゴン車を追いかけていた。

「チツ、面倒くせエ……！」

舌打ちし、前を走るワゴン車を睨む淳一。

そんな淳一に、口には出さないが気持ちでは同意する香流。

何故二人はワゴン車を追いかけているのか。それは少し前に遡る……。

その日、淳一はずすかに（無理矢理）連れられ海鳴市から離れ、別の街にある大型ショッピングセンターに来ていた。

（何で俺が……）

面倒臭い。そう内心で愚痴り顔にも出している。

しかし、そんな淳一とは対象的にずすかは始終ニコニコ顔で淳一の腕に組み付いている。

一度は腕を振り払おうとした淳一だが、ずすかの力が予想以上に強く離す事は叶わなかった。

周囲から見たら男の方は瞳孔が開きっぱなしで危なそうだが、二人は容姿が良くデートに見えない事はない。

「やあ淳一、ずすか」

「あア？」

すると声を掛けられた。

淳一は気ダルそうに向くと、そこには香流と、香流と腕を組んでいて「ゲッ！」っと言うアリサの姿が……。

それを見た淳一は、察してニヤリと笑った。

「ほー。そちらさんはデートって訳か」

「な、ななっ！　べ、別にそんなんじゃ……」

「ええデートですよ」

「こら香流っ！　と言つか腰に手を回すなっ！！」

全力で淳一の言葉を否定しようとするアリサだが、香流が全てを台無しにする。

もうお分かりの通り、香流とアリサは付き合っている。だいたい、半年程前からだ。

この二人の交際は変わっており、香流が始終自分のペースで引っ掻き回し、アリサがツツコンで行くがやはり香流のペースに乗せられ……と言う物。香流曰く、「アリサの怒った可愛い顔が見たいから」だそうだ。思えば香流が敬語で喋るようになったのも、付き合い始めてから……アリサをからかうためだろう。

ある意味鍊矢の影響を受けたのは、香流だろう。

とはいえこうして普通のデートもする。あくまで二人だけの時は、

だ。

「ふ、フン！ そう言うアンタ達もで、デートみたいね！ 奇遇ね！」

と、恥ずかしい思いをした腹いせか、顔を赤くして淳一とすずかの状態を指摘するアリサ。

もう自分がデートしていたのは認めたようで、そんなアリサを香流は灰色のバットショットで撮影していた。

しかしアリサの仕返しはあっさりと破られた。

「んな訳ねエだろ。コレ（腕）はコイツが……！」

「……（ニコニコ）」

「……離さねエだけだ……」

淳一は言いながら“全力で”すずかを引き剥がそうとするが、すずかは涼しい顔で全く離れない。

すずかは夜の一族のため、本気を出せば一般人では対抗出来ない程の筋力を持つので、当然と言えば当然と言える。

それを察して、アリサは「うん、ゴメン……」とだけ呟いた。

なんにせよ、こうして会ったのも何かの縁と言う事でこのまま四人でダブルデート(?)をする事になり、四人はショッピングセンターを散策する。まあただ散策しただけなのでその様子は割合とする

そして淳一と香流が少し離れた時、それは起こった。

アリサとすずかが二人を待っていると、突然口元を何か布で抑えられ意識を失う。

淳一と香流が戻った時には二人の姿はなく、代わりにアリサの携帯電話が落ちていた。直ぐ様何かあったと思い、探そうとした時ベノスネーカーが顔を出し、二人を案内。

地下駐車場で警備員の格好をした男がアリサとすずかをワゴン車に乗せているのを見つけ……冒頭に至る。

マシンゼクトロンのアクセルを吹かし追いかけるが、相手はこの辺りの地理を熟知しているらしく、車がやっと通れる入り込んだ道など使い、時々見失いそうになる。

その度にエビルダイバーが指示してくれるため、見失わずにすんだ。

そもそも、ベノスネーカー達がすずか達を助ければよかったのではと思われるが、相手はアリサとすずかを連れ去る際非常階段を使ったため反射物がなく、反射物がある所は相手にとっては死角に入る場所でもベノスネーカー達には人目に付く場所だった。人目に付く場所では出来るだけ出ると言う教えが、こんな形で裏目に出ってしまった。

それにミスは淳一達にもある。

アリサは有名企業の令嬢であり、すずかは夜の一族の事を抜きにしても両親が残した多額の資産がある。当然、身代金目当てに二人を狙う輩はいる。今までは殆ど未遂で終わり、最近は全くなかったため、油断していた。

警備員の制服を用意していたあたり、入念に計画し、すずか・アリサの行動を見張っていたのだろう。

「……チッ！」

再び舌打ちする淳一。

それは面倒な事を起こした相手にか、油断していた自分にか。

香流は耳で淳一の舌打ちを聞きながら、横目で周囲を見る。

そろそろ頃合いかな……？

まだ慣れない土地故、どう来たか分からなくなったがいつの間にか廃倉庫が密集した場所に来ていた。

ここなら少々派手にやってもバレないだろう。

そう思い、大型トレーラーが走るだろう大きく開けた道を疾走しながら香流はゼクトバツクルに手を伸ばす……。

しかし、人目に付かない所に来たかったのは向こうも同じだった。

突如、ワゴン車の荷台のドアが開き、男が一人飛び降りた。

男はアスファルトの地面に着地する前に、手に持っていた物Vと描かれたガイアメモリのスイッチを押し、首に差し込んだ。

《《VIOLENCE!》》

『フン！ ……アアッ！！』

「「ッ！」「」

男が変化した灰色の筋肉の塊のような怪人　バイオレンスドーパントは、アスファルトの地面に着地し、右手の鉄球を淳一達目掛け発射する。

淳一と香流はマシンゼクトロンを横に反らして避け、停車。バイクを降り変身ツールを構え、バイオレンスドーパントを見据えた。

「……ドーパントか」

「向こうは随分と入念に計画していたみたいですね。……迷惑な話ですが」

「ああ。……変身」

「変身」

《Hensin》

《Change Punch-Hopper》

《SWORD VENT》

淳一と香流は王蛇・パンチホッパーに変身。王蛇はベノサーベルを装備する。

すると王蛇とパンチホッパーを見たバイオレンスドーパントは、ハハんと鼻で笑った。

『なるほどな、お前らが仮面ライダーか。聞いた通りだな』

「ああ？ 聞いた通りだ？」

「どう言う事ですか？」

『ハッ！ これから死ぬ奴に誰が教えるかっ！！』

そう言うと、バイオレンスドーパントは正面から突っ込んで来た。

パンチホッパーは横に動いて避け、王蛇はその場から動かさずバイオレンスドーパントを正面から迎え撃つ。

『アアッ！！』

「シャアッ！！」

バイオレンスドーパントは鉄球の腕を、王蛇はベノサーベルを振る互いの得物がぶつかり合う。

最初の初撃で競り負けたのは……王蛇だ。

力負けした王蛇は後退し、舌打ちする。

「チツ……」

『ハツハツハツ！ パワーはオレの方が上のようなな！』

「よそ見をしていいんですか？」

隙だらけのバイオレンスドーパントの背後から、パンチホッパーが強襲する。

パンチホッパーが放った右ストレートはバイオレンスドーパントの背中を捉え……ガツンと言う鈍い音を立てて止められた。

素手で鉄の塊でも殴ったような衝撃が右手から伝わり、パンチホッパーは仮面の下で表情を歪めた。

「くあつ……！ 硬い……！」

『んん？ その程度、かつ……！』

「グウツ……！！！」

かほども効いていないと言う風に、バイオレンスドーパントはゆっくり振り返りパンチホッパーに右手の鉄球での一撃をお見舞いする。

パンチホッパーは両腕でガードするが、後ろに大きく吹き飛ばされてしまう。

今の数撃で分かったが、バイオレンスドーパントは力に物を言わせるパワー型の怪人のようだ。さすが『暴力の記憶』のドーパントだけある。

筋肉の塊のような見た目も見かけ倒しではなく、あの筋肉がそれだけで強固な鎧にもなっている。正面からぶつかるのは、逆鬼などのパワー型ライダーでなければ辛い。

ただし、それは“正面からぶつかる場合”の時だ。

「シャアアアツ!!!」

王蛇はベノサーベルを担いだ状態で駆け出し、バイオレンスドーパントに向かう。

当然、バイオレンスドーパントは気付き自慢の鉄球で殴り倒そうとした。しかし王蛇は、バイオレンスドーパントが腕を振る直前で跳び、バイオレンスドーパントの攻撃は空振りに終わる。

そして跳び上がった王蛇は、バイオレンスドーパントの頭上を通り過ぎる際に体を回転させ、ベノサーベルでバイオレンスドーパントの頭に強烈な一撃を叩き込んだ。ベノサーベルは斬る武器ではないし、頑丈なバイオレンスドーパントには目立った傷はない。しかし衝撃は伝わったようで、バイオレンスドーパントは頭を押さえてふらつく。

追撃にパンチホッパーが動き、ふらつくバイオレンスドーパントの足を払う。バイオレンスドーパントは重心が上半身にあるので、簡単に転んでしまった。

「力で勝てないなら、相手の弱点を突くだけです」

「さっさと終わらせるかア……」

まだ頭に受けたダメージが抜けないのか、上手く立てないバイオレンスドーパントに対し、王蛇はカードデッキから自らの紋章が描かれたカードを引き抜き、パンチホッパーもホッパーゼクターに手を掛けた……。

王蛇・パンチホッパーと、バイオレンスドーパントの戦闘を廃倉庫の上から見ている影があった。

黒のスーツに薄紫色のアーマー。アーマーには、水色の炎のような模様が描かれている。薄紫色の複眼にも同じように炎の模様がある。

更に腰にはT型の絵が入ったバックルの銀色のベルト……。電王系統の仮面ライダーだ。

そのライダーは、左手に持った黒い箱　　ライダーパスをバックルに翳す。

《Full Charge》

電子音の後、バックルから発生したエネルギーが右手に持った銃に集まり銃口にエネルギー球が出来る。

そして、銃を王蛇達に向け引き金を引いた。

王蛇とパンチホッパーが必殺技を発動しようとした時、突如赤黒のエネルギー弾が飛来し二人の……パンチホッパー寄りの足下に着弾、爆発した。

「グアッ!？」

「ガッ……!？」

爆発により王蛇とパンチホッパーは吹き飛ばされた。

王蛇は直ぐに起き上がり、バイオレンスドーパントがいた場所を見るがそこには影も形もなく、今の一瞬で逃げ去ったようだ。

「チッ」

「どうやら、仲間がいたみたいですね……」

舌打ちをし王蛇は変身を解く。既に変身を解いた香流は服に付いた埃を払いながら、先程の攻撃を思い出す。

するとマシンゼクトロンの車体を鏡代わりに、エビルダイバーが出て来た。

エビルダイバーは淳一達の頭上に来て、ある方向を向いた。

『キユイイイイ』

「見つけたようですね」

「行くぞ」

淳一はメタルグラス、エビルダイバーにワゴン車を追わせていた。それを見つけたようだ。

淳一と香流はマシンゼクトロンに乗り込み、エビルダイバーの案内でずかとアリサが連れられたであろうその場所に向かった。

王蛇達……淳一達を攻撃したライダーは、廃倉庫の壁にもたれ腕を組んでいた。

そのライダーに、バイオレンスドーパントが話し掛けた。

『さっきは助かったぜ』

「なあに、ちよっとしたアフターサービスだ。

それより、早めに行った方がいいぜ？ どうやらお前のアジトに向かったみたいだしな」

『おお、そうさせて貰う』

そう言いバイオレンスドーパントはバイオレンスボールという球体状に変化し、跳ねてその場から移動する。

その場に残ったライダーはベルトを外す。そして変身が解けた姿は、黒に赤い装飾の鬼のような怪人だった。

怪人は頭の横から生えた角を撫でながら言う。

「……王蛇なら引き込めると思って来てみたが、無理そうだな。ま、せいぜい頑張ってくれ」

それだけ言い残し、怪人は去って行った……。

淳一と香流がエビルダイバーの案内の元たどり着いたのは、海鳴市の街外れにある廃病院。学校で死んだ患者の幽霊が彷徨っていると噂になっているのを聞いた事がある。

どうやら先程の廃倉庫の密集地は、自分達を撒くために通っただけらしい。

結局海鳴市に戻った事に、淳一は何回目か分からない舌打ちをした。

「チツ、結局この街か」

「そうですね。聞いた話では、そう言う事が起きやすいそうですよ？ この街は」

「どつ言つ事だ？」

「僕と香里がお世話になっている、さざなみ寮に以前住んでいた人から聞いた話では地脈がどうか。まあ詳しい話は分かりませんけど」

オカルトか、と淳一は流しカードデッキを構え腰にVバックルが装着される。

香流もホッパージェクター……ではなく、以前香里が使用したオーズドライバーを装着。黄色の3枚のメダルを入れた。

オーズドライバーと3枚のメダルは、ここに来る途中現れたプテラ・トリケラ・ティラノのキメラに『試したい事がある』と無理矢理渡された物だ。

「おい、それ、使うのか？」

「ええ。香里も使ってみましたし、大丈夫かと」

一応聞いてみた淳一だが、使う本人が大丈夫と言ったのでそれ以上言わなかった。

「変身っ!!」

《ライオン！ トラ！ チーター！ ラタラター ラトラータ》

淳一は王蛇に、香流は黄色の輝きと共に仮面ライダーオーズ・ラトラーターコンボに変身、ラトラーターコンボの固有能力・熱線放射【ライオディアス】で廃病院の入口を溶かし突入する。

廃病院内に突入すると、入って直ぐにバイオレンスドーパントが待ち構えていた。

予想通りの展開に、王蛇はオーズRCに指示する。

「行け」

「ええ。任せましたよ」

『ッ！ 待ちやがれっ！！』

オーズRCは頷くと、チーターレッグによる高速移動で、バイオレンスドーパントの脇を駆け抜けて行く。

バイオレンスドーパントは追おうとしたが、振り向いた時に背後から、エビルウィップによる一撃を喰らい阻止された。

《SWING VENT》

「シャッ！」

『グウツ！？ …… テメエ …… ！』

「イライラするんだよ……。俺と遊んでくれよ」

廃病院の最上階である四階。

その階に、バイオレンスドーパントを除いた誘拐犯グループのメンバー十人全員が集まっていた。

誘拐の際に使った警備員制服は既に脱ぎ捨て、ラフな格好。武装もナイフだけと、下の階で暴れてるバイオレンスドーパントに比べたら貧相な物であった。

メンバーは一室に集まっており、奥に扉が一つ。誘拐されたすずかとアリサは、扉の向こうに閉じ込められている。

メンバーの中の一人が、ナイフ一本を持って不安そうに口を開いた。

「な、なあ……。本当にこんなんで大丈夫なのかよ？ 警察が来たら俺達一瞬で……」

「おいおい、そんなんでどうする」

「そうだけ。確かに車やら服やら、リーダーがあのメモリを買うのでナイフしか用意出来なかったけどよ、でもあの力思い出してみよ。サツが来たって負けねえよ」

どうやらバイオレンスドーパントがリーダーらしく、不安だった一人はメンバーの言葉に「そ、そうだな…」と不安が和らいだ。

あの力メモリさえあれば捕まる事はない。その自信がメンバーの中にあつた。

「それにしても、あの連れて来た二人、レベル高いよなあ」

「ああ、中学生とは思えねえ」

「アイツらの家に電話すんのはまだ後だろ？　リーダーが戻ったらヤっちまつか？」

「このロリコンが」

「言ってる。ちょっと便所行ってくら」

リーダー（バイオレンスドーパント）が戻った後の事を想像し、嫌らしい笑みを浮かべるメンバー。

しかし、その笑みは直ぐに失せる事になる。

『ぎゃああああああああああっ!!!』

突如聞こえた悲鳴。メンバーの間に緊張が走る。

見張り二人を残し、七人で見に行く。先程トイレに行くと言ったメンバーが行ったトイレはそう遠くない所にある……。

トイレに到着し、中を見る。しかし誰も居ない。

個室か？ そう思い、個室を見ると

下半身丸出しで洋式便器に頭から突っ込み、無惨な姿とメンバーが。

「……なんでっ!?!」

「……おい、アイツどうした?」

メンバーの一人がツッコむ。そして別の一人が、一番後ろにいたメンバーが居ない事に気付いた。

メンバーがトイレ出て廊下に出る。そこには身包みを剥がされ全裸で天井に刺さってる、一番後ろにいたメンバーが……。

全員が愕然とし固まっていると……。

「ぎゃ
」

僅かの声だけ残し、また一人メンバーが消えた。

一瞬だが黄色い影が見えた気がするが、それが余計に恐怖心を掻き立てる。

誰かが言ったのか、メンバーは一目散に最初に居た部屋に戻る。

しかし、一人、また一人と後ろにいた者から消えていく。一瞬だけ、後ろを何かが通ったのを感じるため何者かがいるのは分かる。だが姿が見えない。

気付けば、部屋に向かっているのは一人だけになっていた。

「はあ、はあ………！」

「お、おいどうした!？」

部屋に着くと、見張りをしていた二人が駆け寄って来る。

息を荒上げながら、言おうとした、その時

《スキヤニングチャージ!》

「ああもう！　こんな所に座ったら服汚れるじゃない！」

「帰り遅くなるって、電話したいのになあ」

誘拐された本人達…アリサとすずかは、誘拐された恐怖心などなくマイペースに過ごしていた。悪魔やら鬼やらマヨ蛇やらと過ごしていたため、神経が図太くなったようだ。

因みに手足を縛られていたが…ディアアプロスオルフェノク体育教師の東郷志度から体育の授業で縄抜け術を教わっていたため、既に脱出済みだ。

すると、二人がいる部屋の唯一の出入口の扉が、超高温で熱せられたように中心部から黄・橙・赤に変わり

「　　セイヤアアアアアツ！！」

オーズRCが必殺技【ガツシユクロス】を使い、部屋に突入して来た。

オーズRCは、部屋に突入すると数回スピニングしてスピードを殺すと、アリサとすずかの前で綺麗に停止した。

「アリサ、すずか、無事ですか？」

「その声香流？ ええ大丈夫よ。て言うかアンタはイメチェンしたの？ 黄色一色って……」

「淳一君は？」

「淳一は下で戦っています。建物の中では危険なので、外に出ているはずですが……」

そう言い、アリサとすずかと共にオーズRCは窓ガラスがない窓から、外を見下ろす。

そこでは、王蛇がカードデッキから一枚のカードを抜き取っていた。

使われなくなり、ポロポロの廃病院内でバイオレンスドーパントが暴れるのは危険なので、王蛇は手筈通り外に出て戦っていた。

王蛇は武器をメタルホーンに変え、バイオレンスドーパントの攻撃をいなし、隙を突いて反撃する。

「……………面倒だな」

と言っか飽きた。王蛇の素直な感想だった。

と言うのも、相手は戦闘系に関してズブの素人のようで、寧ろバイオレンスメモリの力に振り回され、単調な攻撃パターンになっていたからだ。

日も傾き、さっさと帰らないとメイド三人が煩い。と言う事で、王蛇はカードデッキからカードを抜き取る。

波打つ“毒”に、銀色の翼が描かれたカード 【SURVIVE - 猛毒 -】だ。

すると、王蛇の左手に持つベノバイザーが変化し、コブラを模した手甲型の召喚機【ベノバイザーツバイ】となる。そして、王蛇はSURVIVEのカードをベノバイザーツバイの上部の専用投入口に入れる。

《SURVIVE》

電子音の後、王蛇の鎧がベノスニーカーを模した物に変わる。

王蛇がSURVIVEのカードで強化された『仮面ライダー王蛇 サバイブ』だ。

『こけおどしがああああああっ!!』

バイオレンスドーパントは王蛇SVに突っ込んで行く。

対し、王蛇SVは慌てる風もなくベノバイザーツバイを装着している左腕を向けた。すると、ベノバイザーツバイの蛇の頭が勢いよく発射、バイオレンスドーパントの顔面に噛みついた。王蛇SVに新たに追加された武装【ベノハンマー】だ。

サバイブとなったライダーは、一部の武装をカード装填なしで使える。ベノハンマーも、その中の一つだ。

突然前方を塞がれ、更に頭に走る激痛にバイオレンスドーパント

は狼狽える。

王蛇SVは追撃に、カードを左腕に残ってるバイザーの下部（頭の付け根）の投入口を手動で上にスライドさせ開き、カードを入れ閉じた。

《SWORD VENT》

そうして装備されたのは、鋸のようなギザギザの刃の剣【ベノスラツシャー】。この剣には、近づく以外に相手を斬る方法がある。

「シャアッ！」

『ギヤアッ!?!』

王蛇SVが一度振るうと、ベノスラツシャーは刀身が伸び、蛇腹剣となってバイオレンスドーパントを斬った。

更に数回、視界が塞がった相手を斬り、最後にベノハンマーの拘束を解き最後にベノスラツシャー・ハンマーの一撃を与える。

大ダメージを負い、満身創痍のバイオレンスドーパント。王蛇SVはトドメにと、最後のカードを入れた。

《FINAL VENT》

『シャアアアアアッ!!』

すると、ベノスネーカーが現れ一瞬白い幕に包まれ、その姿を変えた。

更に大きくなった体。胴体部から腕が生え、その姿はさしずめ神蛇ナーガ。

王蛇SVは後ろに跳び、後ろに来た『ベノヴァイパー』の背中に乗る。

王蛇SVを乗せたベノヴァイパーは突進、途中形を変え、王蛇SVを乗せたバイクモードとなる。

『シャアアアアッ!!』

ベノヴァイパー・バイクモードの口から紫色の毒の放流が発射され、毒がバイオレンスドーパントの体の自由を奪う。

動けないバイオレンスドーパントに、ベノヴァイパー・バイクモードは容赦なく牙を突き立て、地面に叩き付けながら引きずる。そして、牙を離し、車輪の下敷き轢いた。

直後、爆発。

これが王蛇SVの必殺技【ポイズントルネードクラッシュ】だ。

王蛇SVはバイク（ベノヴァイパー）を止め、降りる。爆発が起きた場所には、バイオレンスドーパントだった男が倒れており、近くバイオレンスメモリが落ちている。

バイオレンスメモリに近付き、迷わず踏む。するとバイオレンスメモリは音を立てて砕けた。

そして廃病院の入口からは、すずかとアリサ、オーズから変身を解いた香流が近付いて来ていた。

その後、「全裸の変質者の集団がいる」と、誘拐グループを全裸にして縛った上で警察に連絡。到着した警察に香流が事情（嘘）を話し淳一達はその場を離れた。

そしてアリサを香流が送るため二人と別れ、淳一とすずかは、家である月村邸に帰って来た。

「ただいまー」

「……………」

「お帰りなさいませ、すずかお嬢様、淳一様」

「お帰りなさい、すずかちゃん、淳一君」

「おう、お帰りお二人さん」

すずかと淳一が月村邸に入ると、メイド三人　ノエル、ファリン、イレインが出迎えてくれた。

「お帰り、二人共」

そして、エントランスの階段を上がった廊下に、忍の姿もあった。

淳一はそれらに「ん」と答え、“いつも通りに”行動する。

「飯」

「まだまだよ。先に風呂に入っちゃいな」

「……………わあっ たよ」

腹が減ったため飯を要求したが、まだ出来てないようだ。

仕方なく、イレインに言われた通り風呂に入る頃にした。

……風呂に向かう淳一の後を、イレインは当然のように付いて行き、

「待ちなさい」

ノエルにメイド服の襟を掴まれ止められた。

「イレイン？ 貴女はどこに行くつもりかしら……？」

「どこって風呂に決まってるだろ。専属メイドが、主人の体を洗わないでどうする」

ニッコリ笑いながら話すノエル対し、イレインは悪びれもせず……。寧ろ当然のように言い返す。

確かに、ノエルは忍の、ファリンはすずかの専属メイドとして主人の世話をするが、淳一は14歳の思春期真っ只中。自動人形とは言え女性のイレインが共に入るのには頂けない。

ノエルがその事を諭そうとした時、ファリンから爆弾が投下された。

「でもお姉様。お姉様忍お嬢様とすずかちゃんとイレインが居なかった時、淳一君と一緒に入って、背中を流してませんでした？」

「ファリンツ！」

「へえ……。ノエル、ちょっとOHANASSIしようか……？」

「す、すずかお嬢様、これには訳が……」

「淳一、一緒に入るのに水着がいいか？ それともタオル……寧ろいらぬか」

「イレイン、私も一緒にいいかな？ またには義姉弟の親交を深めたいし……。……寧ろ全員で行く？」

「誰が入るか。俺は前から思案していた“マヨネーズ風呂”を試すんだ。邪魔すんな」

「「「「それはマジ止めてっ!?!」「「「「」

……とまあ、月村家は本日も平常運行。

その後、勝手にひとつ風呂していたメタルガラスが発見され、全員からツッコミハリセンを受けたそう。

五十ノ巻に続く

四十九ノ巻『誘拐のVノライターと毒のSURVIVE』（後書き）

という事で四十九ノ巻でした。

タイトルは思いつかなかったのでテキトー。前書きは自分が本日経
験した事……orz。

今回出た王蛇サバイブ。

S・I・Cで見た目は見たのですが、FVとベノヴァイパーの名
称以外不明だったので九割オリジナルです。

【王蛇サバイブ】

王蛇がSURVIVE・猛毒で強化した姿。胸の鎧がベノスネ
ーカーを模した形状になり、召喚機もベノスネーカーを模した盾と
もとれる手甲型のベノバイザーツバイになる。

ベノバイザーツバイの頭部を飛ばす武器、スイングベント【ベノ
ハンマー】はカード使わなくても使用可能。

【ベノスラッシャー（ソードベント）】

鋸状の刃の剣。通常の剣として使えるが、刀身を伸ばして蛇腹剣
としても使える。

【ベノハンマー（スイングベント）】

ベノバイザーツバイの頭部を飛ばす武器。頭部はワイヤーでバイ
ザーと繋がっている。

カードを使わなくても使用出来る。飛ばした頭部は敵に噛みつき
拘束出来る。

【ベノヴァイパー】

SURVIVE・猛毒・で王蛇と共にベノスネーカーが強化された姿。神蛇ナーガのように、胴体から腕が生えている（イメージはドラグランザーの足を無くし頭をコブラにした紫色のモンスター）。

【ポイズントルネードクラッシュ】

王蛇サバイブの必殺技。ベノヴァイパー・バイクモード（ドラグランザー・バイクモードと似た形状）に王蛇SVが乗り、敵に体当たりする技。

ベノヴァイパー・バイクモードが毒の放流を吐き出し敵を拘束。敵に噛みつき、地面に叩き付け引きずりその後轢く。

五十ノ巻 『暗殺者S/鬼が出会う兄妹』 (前書き)

かなり久々の更新になりました……。いやスランプに入ってたもんで。

バトスピの構築済みデッキを購入したものの対戦相手がないフロストです。

五十ノ巻 『暗殺者S / 鬼が出会う兄妹』

ある日、サカキは錬矢に呼ばれ荒木家に向かっていた。一人だけではなく、リインフォース・アインス、星奈、闇璃、ライラも一緒だ。

「あー、行きたくね」

サカキは愚痴りながらも住宅街の道を歩く。

荒木家は去年、住宅街に一戸建ての家を作ってそこに引っ越している。

愚痴るサカキの後ろを苦笑しながらアインス、星奈達が続いていた。

錬矢に呼ばれた時は、大抵厄介事がある時だ。あの悪魔はそれに遠慮なくサカキやソラ達を巻き込むため、サカキは錬矢に呼ばれた時は必ず嫌な顔をする。その事をアインス達も重々承知しているので苦笑するしかないのだ。

住宅街にある二階建の荒木家、あの悪魔の家にしては普通の家が見えてきた。と、荒木家の玄関の前に人影があった。

「 それではミスターデビル。失礼します」

「 おっ」

玄関の前の人影は、鍊矢と黒いスーツと黒いサングラスをしたスキンヘッドの黒人と金髪の白人。

黒人と白人が鍊矢に頭を下げ、立ち去って行く。

暫く見ていたサカキ達は、黒人と白人が去つたのを確認して鍊矢に近寄つた。

「 おい悪魔」

「 おっお前らか。よく来たな、まあ上がれ」

「 いやそれより、今のは何なんだ？ 明らかにカタギの奴じゃ……いや、普通の奴が好き好んで悪魔の巣窟に来る訳ないか」

「 どういう意味だそりゃ。っーか、それ自分も含まれてるからな？」

とまあいつものやり取りをして、サカキは改めて鍊矢に聞く。

「 まあ冗談はここまでとして……さっきのはマジでカタギの奴じゃないだろ。何者だ？」

「ああ、今の連中はアメリカ中央情報局　CIAの連中だ」

一瞬、全ての時間が止まった。

再起動したサカキ、そしてアインズ達は錬矢から目を反らしながら言う……。

「……お前……そうか、ついに尻尾捕まれたんだな」

「はい？」

「荒木……安心しろ、残された家族は私が責任を持って面倒を見よう」

「何でそうなる？」

「この街も、静かになりますね……」

「おーい」

「錬矢、居なくなっちゃうの？」

「もしもーし、人の話を聞こうかー？」

「今まで散々苦い思いをさせられたが……今思い返せば良き思い出だ」

「……悪魔光線っ!!」

「で、何でCIAがお前のところに着たんだけ？」

荒木家のリビング、若干焦げたサカキ達がテーブルを囲むように設置されたソファの一本に並んで（星奈、闇璃、ライラはミニサイズなのでテーブルの上で）座り、サカキが向かいのソファに座っている錬矢に聞く。

CIAとは、殆どの方が知っている通り簡単に言えばアメリカ所属の諜報員の組織。数多くの人々に知られている組織の一つである。

何故そのような大きな組織の人間が、悪魔の巣窟に来たのか……。

「元々、CIAとかFBIとか、そういうのと繋がりがあってな。たまーに何かしら荒事があると依頼がくるんだよ。教師になってか

らは教師の仕事中心にして、その間の依頼はウヴァにバイトでやらせてな。

ただ今回は久しぶりに、俺自身が行こうと思った訳よ」

「……で、アレは？」

サカキは右手人差し指だけをリビングの隅に向ける。そこには鍊矢の義娘であるフェイト・Ｔ・荒木が何故か鎖で体を縛られ、口からエクトプラズマを出していた。

それを一瞥した鍊矢は目と口を三日月状に変化させ、

「なーに、フェイトも大きくなったしな、そろそろ“裏”社会見学に連れて行こうと思ったんだ。行き先を言ったら騒ぎ出したから気絶させただけだ

どーせこっちの世界にドツツツツプリ浸かる訳だし、遅いか早いかの違いだつてえ」

と笑いながら言った。

「この悪魔は娘にも容赦がないのか？」、そう思ったが口には出さない。だって巻き込まれたくないから。

アルフ？ ドラグブラッカー？ 悪魔に敵うはずがない。

「……それで、私達を呼んだ理由はなんだ？」

自分達に話が振られる前に、アインスが呼んだ理由を聞く。もちろんフェイトがエクトプラズマを出している原因で呼ばれたのなら、直ぐに脱出出来るよう転送魔法の準備をした上でだ。

しかし、錬矢の口から出た言葉は予想外……アインス達を恐怖させる物だった。

「ああそうだったな。アインス、星奈に閻璃にライラ、……お前ら定期検査サボったろ？」

瞬間、名前を挙げられた四人は『ピシッ！』という音が聞こえる勢いで固まった。

アインス、星奈、閻璃、ライラは普通の融合騎ユニオンデバイスとは違い、管理局が持っていない先人達の技術。ロストテクノロジーを応用した物や魔術・呪術エトセトラ……かなりアウトな物がふんだんに使われており、簡単な検査なら局の検査でバレる事なく出来るが、たまに錬矢の友人デインゴ・サーペントの所で定期検査を受けている、はずがアインス達はサボっていたのだ。

「デインゴの奴、かなり怒ってたぞー。耳元まで口裂けてたし、覚悟しとけよ？」

「……………（ガクガクブルブル）……………」

「あー、つまりコイツらを検査に連れてけと。俺は監視で呼ばれたんだな？」

「そういう事 俺は今から用事あるから行けんが、ディンゴの所には送ってやるよ」

とまあなんやかんやでサカキは恐怖で震えるアインス達を連れディンゴの元……ジェイル・スカリエツィのアジトに送られた。

そして残った鍊矢は、未だ意識が三途の川に逝っているフェイトを肩に担ぎ……顔に影が入り目と口を三日月状にして笑った。

「亡命機関だか亡国機関だか知らんが、久しぶりに、少ーしだけ大暴れしちやおうかな」

その日の夕方、某国の某所で謎の大爆発が起こったそうなの……。

所変わってジェイル・スカリエツィの（錬矢とデインゴも間借りしている）アジト5代目。

「……まったく、ちゃんと決めた日に来てくれれば手間が少なかったのに」

そう愚痴り、空中に浮かんだコンソールを操作しているのは、灰色の髪に白衣姿のデインゴ・サーペント。デインゴの視線の先には、横に寝かせられたカプセルが四つ、一列に並んでおりカプセルの中にはアインス達が全裸の仮死状態で入っている。

なおカプセルは頭の前から鎖骨の部分までしか中が見えない物なので、悪しからず。

「やっぱり無理矢理検査して正解だった。魔力運用の効率が悪くなっているな」

「危ないのか？」

「いや、そこまで深刻な物じゃない。心配しなくても大丈夫さ。ただ他にも不具合がないか調べた上で調整するから、今日一日はそのままかな。……だから定期的に検査にすればこんな手間には」

ディンゴの口が耳元まで裂け始めたので、サカキは視界からディンゴ（つばい何か）を外す。

そんな時、

「ディンゴ、口が化け物になっているよ」

と、そう言ってきたのはいつもの白衣姿のジェイル・スカリエッティ。前世は黄金勇者ゴドラン。来世はブライ・ノアになっているだろう。

「作者っ！ メタ発言は止めたまえっ！！」

「ツッコむなよ、メタいから」

「ジェイル、君自身がこっちに来るなんて珍しいね。どうしたんだいっ？」

作者にツッコミを入れるスカリエッティにツッコミを入れるサカキ。そして尋ねるディンゴ。

ここ、スカリエッティのアジト（別名：悪魔の魔窟）は山の斜面の入口から、地下にかなり広大に作られており、いくつもの区画に分けられていてディンゴとスカリエッティの研究場所も分かれている。広大なアジトのため、移動するのも徒歩では一苦労でアジト内

の移動に色々と使う程。そのため何か用がある時は通信が殆ど、本の虫ならぬ研究の虫のスカリエッティ自身が来るのはかなり珍しい。

デインゴの問い掛けに、スカリエッティは軽く笑いサカキに視線を向ける。

「なに、彼が来ると聞いてね。ちょっと挨拶でもしようと思っ
ね」

「ああ？」

「私は生態系のモノを特に研究していてね。……肉体を鍛える事
姿を変化させる。フフツ、興味深いよ」

何か意味深げに笑うスカリエッティ。

サカキが怪訝な表情を浮かべていると、デインゴが補足を入れて
くれた。

「ジェイルはさっき自分で言った通り、生態系を中心に研究してい
るんだ。それで科学者として、何か改造手術をした訳でもなく鍛え
て肉体を変化させる君に興味があったんだろう」

「ふーん」

「それで、彼女達は今日一日はこのままだけど、君はどうする？
一度地球に戻るかい？」

サカキは考える。そこを考えていなかった。

向こう（海鳴の家）に戻っても、特にやる事はない。アジト内の探索も、ここに来る度に行っていたので見る所がない。

「うーん……」

「だったらミッドチルダの街に行ってみたらどうだい？ 君はまだ行った事がないだろ？」

どうするか悩んでいると、スカリエッティが提案した。

確かに魔法関係の知り合いが多いながら、サカキはミッドチルダの街に行った事がない。この際に行ってみるのもいいかも知れない。

「そうだな。行ってみるか」

「なら私の娘達の一人を付けよう。案内させるよ」

そうして、サカキはミッドチルダの街　首都クラナガンにやって来た。実はアジトはミッドチルダにあるので、グレンベンダーで一時間程で着いた。

「なんつーか……魔法世界って言ってもこっち（地球）の都市と変わらねえな……」

「そうなのか？　姉はミッドの出身と言えばそうだから、これが普通なのだが」

ミッドの街を見たサカキの言葉に、案内のため一緒に来た銀色の長髪と黒い眼帯……あと幼児体型が特徴の、チンクが聞き返す。

サカキの言う通り魔法世界の街……と言っても、地球の都市と何ら変わらない。普通に店やビルが並び、人々が行き交い、道路を車が走る。

違う所と言えば、店や道路の看板の文字が英語に見えなくもないミッド文字である事と、街の何処からでも見える街の中心に高々と聳える塔そび　時空管理局地上本部くらいだ。

「まあ、ここは地上本部のある中心街だからな。北の方に行けば自然の多い観光地、西は市街地になっている」

「そうなのか？ ラウラ」

「……姉の名はチンクなのだが」

「ああワリ、知り合いに似てたから」

「鍊矢もたまに同じように間違えるのだが……そんなに似ているのか？ 姉とそのラウラという者は」

「そっくりつーか瓜二つだな。銀髪だし金目だし眼帯だし、声も似てる。違う所って言ったら眼帯が右か左かくらいだな。あと性格？」

「そこまでか」

「へきちっ!」

「ラウラ、風邪? いつも裸で寝てるから」

「むう……。そんな事より、早く限定版ボン太くん人形を手に入れねば! 行くぞシャルロット!」

「あ、待ってよラウラー!」

見た目・声ネタはさて置き、サカキとチンクはクラナガンの街を散策する。

と言っても目的がある訳ではないので、ただブラブラしたりするだけだが。

「……ん?」

「どうした？」

「あ、いや」

クレープを片手にブラブラしていると、サカキに視界に一つの店が目に入った。どうやら雑貨店のようだ。

その雑貨店に気になる物を見つけた。サカキにとってはどうしてもいい物だが……。

「退けっ！！」

「ん？」

「なんだ？」

雑貨店の前で止まっていると、後ろから大声が聞こえた。

サカキとチンクは頭に疑問符を浮かべながら、とりあえず道を譲るように左右に一歩後退し……足を出した。

すると大声を出したであろうニット帽・サングラス・マスクを着けた男が、サカキとチンクの間を強引に通ろうとして、二人が出した足に躓き前のめりに倒れた。

無意識に足掛けをして止めたが、サカキとチンクは倒れた男に更

に疑問符を浮かべる。

すると、

「トウッ！」

更に橙色の影が現れ、その影は跳び上がって倒れた男の背中に着地する。倒れた男が「ぐえっ!？」と潰れたカエルのような声を出す。気にしない。

橙色の影 オレンジ髪の若い青年が男の腕を後ろに回して抑え、男の持っていたバツクを回収した。

更に青年は、男に乗ったまま手を翳す。すると男に橙色のバインドが掛かり拘束する。

そうして漸く青年は男から降りて、サカキ達に話し掛けた。

「いやあ、助かった。この男は引つたくりで、それで追い掛けていたんだけど、君達が足止めしてくれたお陰で捕まえる事が出来た。ありがとう！」

「いや別に」

「おつと自己紹介が遅れたな。俺はティータ・ランスター、管理局の魔導師をしている。

出来ればお礼をしたいから名前、教えて貰っていいか？」

「……八神サカキだ」

「チンクだ」

と青年　ティード・ランスターは聞いてくるので、隠す必要がないのでサカキは名乗る。しかし管理局の魔導師と言いながら私服姿だ。

チンクも同じ考えらしく、同じように名乗った。しかし管理局の魔導師と言いながらティードは私服姿。休日だろうか。

ティードは二人の名を聞いて何回か頷き、そしてサカキを見て納得するように頷く。

「八神サカキにチンク……。ああなるほど、君が八神サカキか……」

「あ？」

「おつと悪い。そろそろこの引ったくり犯を近くの警邏隊にでも引き渡さねえと。それにバックの持ち主にも返さねえとな。じゃあ。また会ったらその時礼するからな」

そう言ってティードは引ったくりの男を連れ、去って行く。

……なんとというか、台風一過のような人物だ。

騒ぎを聞いて集まった野次馬が解散し、サカキとチンクも去ろうとする。その時、ティータと似たようなオレンジ色のツインテールの少女が走り込んで来て、何かを探しているのか周りを見渡していた。

「もうー！ 兄さんったら、どこ行ったのよ！」

「……失礼、もしかして君が探している兄というのは、ティータ・ランスターという者か？」

そのまま無視して行ってもよかったが、直ぐ隣で、しかも先程会ったばかりの人物と似た少女をほっとく事も出来ずチンクは声を掛けた。

少女は急に声を掛けられ驚いたが、相手が小さい女の子だからだろうか、直ぐに驚きが収まる。

「そうだけど……何で兄さんの事を？」

「……先程色々あつてな。引ったくり犯を近くの警邏隊に引き渡すと言っていた」

「そうなんだ。……せつかくの買い物に急に居なくなっと思ったたら……！ ありがとう！ それじゃあっ！」

チンクから話を聞き少女はティータが行った方向に走り去る。

話から推察するに、ティードの妹なのだろうが、似た兄妹だ。

サカキが呆れ気味に既に小さくなった少女の後ろ姿を見る。……
その隣で、チンクがしゃがんで地面に『のの字』を書いていた。

「……絶対、同い年に見られた……」

「……………」

何のフォローの出来ないサカキであった。

「ひ、ひっ、助け……ギャアッ……!?!」

どこかの部屋の一室で、鈍い鉄の煌めきが走り、一人の人間が絶命する。

事切れ、仰向けに力なく倒れた管理局の高官の制服を着た人物の直ぐ横に、男が一人立っていた。

その男の右手には、一人の人間の命を奪った鈍い鉄の刃……日本刀が握られており、刀の刀身には血がべっとり付着している。

「……依頼完了。……まったく、今回もつまらない仕事だったねエ」

刀に付いた血を振り払い、鞘に納める。

男の表情はまさに退屈といった物で、一人殺した後とは思えない。

色眼鏡を掛けたその男は、懐から、濃紺色のUSBメモリ　ガイアメモリを取り出す。ガイアメモリの側面には、刃物で斬って書かれた『S』の一字。

「せっかく手に入れたコレを使う程でもない。次の相手は、俺にコレを使わせてくれるかねエ？」

そう呟き男はその場を去る。

次のターゲットの顔と名前、諸々の情報は既に頭に入っている。

次はただ甘い蜜だけを吸っていたクズな高官ではない、現役の魔導師。それも『黄昏の黒猫』の二つ名で名高い相手……。ククッ、楽しみだねエ、ティーダ・ランスタール。

五十ノ巻に続く

五十ノ巻 『暗殺者S/鬼が出会う兄妹』（後書き）

という訳で五十ノ巻。錬矢の悪魔振りには娘にも（たまに）及ぼします。

今回は何気にサカキのミッド初上陸。そしてリリカルなのはStSより原作開始時では既に死亡しているティード・ランスター、原作での性格設定がなかったため、オリジナルの飛んだ性格になります。うちの小説マトモなのがいけません。

チンクの見た目・声ネタは前からやりたかったんです。はい、反省はしてません。

前書きでも書いた通り久々にカードゲームに興味を持ってデッキ購入、でも対戦相手がいないこの悲しさ（苦笑）。

ロード・ドラゴンがカッコいい。ロード・ドラゴンが桃太郎モチーフなので、ウラ・キン・リュウがモチーフのカードが欲しい……。電王好きです（笑）。

五十一ノ巻『暗殺者Sノ迫る狂刃』（前書き）

だいぶ更新が遅れてしまいました……。

結構難作でした。

五十一ノ巻『暗殺者Sノ迫る狂刃』

サカキが暇潰しがてら、ミッドチルダに初上陸してから一週間後……リンディ・ハラウンとクロノ・ハラウンは、自宅のリビングで、リンディの同僚提督であるレティ・ローランと通信で会話していた。

「本局所属の高官が殺害された？」

「ええ。休暇にミッド地上の街外れのホテルに居た所を、ね。斬撃強化の魔法を使ったのか、かなり切れ味の鋭い物で正面から」

「それでレティ提督、犯人の目星は」

「それがさっぱり。担当の執務官が当時同じホテルに居た魔法資質者を調べたけど、全員アリバイがあつてね」

画面の向こうで、レティが苦い顔をする。

先程も言った通り、犯人が見つかっていないのもそうだが、原因はもう一つある。犯行場所がミッド地上、そのため、その犯行場所となったホテルが管轄内にある地上部隊が「ミッド地上で起きた事件なのだから我々だけで捜査する」と、本局所属の執務官の協力を事実上拒否し、執務官側も意地になり捜査が思うように進まないのだ。

サカキや錬矢が聞いたら、「何で同じ組織なのに仲が悪いんだ」と呆れる所。本局と地上の仲の悪さが、捜査の邪魔をしている状態だった。

現に、事情を聞いたリンディとクロノは、頭を抱えるのを通り越して呆れていた。

「リンディ提督、いえ母さん。管理局はもうダメかも知れませんか」

「そうねえ……。今の内に再就職先でも探そうかしら」

『気持ちは分かるけど止めて欲しいわ。冗談なら尚更』

「ごめんなさい。こっちに住むようになって自分のやりたいように自由に過ごす子達を見ると、管理局のルールに拘っていた自分が可笑しく思えて。だから私も力を抜こうと思って」

「彼らの自由さ……不条理さは、僕達の常識を簡単に破壊しますからね」

二人が思い浮かべるのは、やはり鬼と悪魔。

「それでレティ。その不条理さを見る私達からのアドバイス。さつき斬撃強化の魔法って言っていたけど、犯人が必ず魔法を使ったとは限らないわよ？」

『え……どういう事？』

母が友人にアドバイスをしているのを聞いて、クロノは思い出す。

仲のいい家族同士の新年会で、酒に酔ったなのは父・高町士郎が、何の強化魔法もなしに魔導師の使用するシールドを、小太刀で両断した光景を……。

魔導師にとつての不条理は、何も鬼と悪魔だけではないのだ。

リンディのアドバイスを聞いたレティは意味が分からないという表情をするが、事情を説明すると信じられないという顔になる。

『……それって、マジ？』

「マジよ。見た瞬間酔いが一気に醒めたわ」

『そ、そう……。分かったわ、担当の執務官に、魔法資質のない者も調べるように言っておくわ。』

それと、大丈夫だとは思うけど、貴女達も気を付けて』

「ええ。それじゃあ」

『じゃあ』

通信を終え、リンディはタメ息を吐く。

魔導師……管理局は、どうしても魔法絡みに考えてしまう。自分達も前まではそうだったが、この街に来てからそれは間違いだと思いき知らされた。

管理局の魔法至上主義をどうにかしたいと思いつつ、明るい話題に変えるためクロノに話を振る。

「クロノ、そう言えばサカキ君はミッドに行っているのよね？」

「ええ、今朝に向こうに。しかし先程の話を考えると……」

「……巻き込まれないか心配ね」

その頃、不条理その一・八神サカキは再びミッドの地を踏み締め
ていた。

というのも、前回の散策で気になる物を見つけたが、直後にオレ
ンジの嵐との出会いで綺麗さっぱり忘れてしまい、思い出したのは
海鳴の家に戻ってから。しかしどうしても気になり、前回来たのは
日曜日だったため、一週間後の土曜日である今日再び訪れたのだ。

今回は正規のルート、クロノヤリンディが使う転送ポートを通り、
ミッドに来ている。前回はチンク任せだった言葉も、前もって翻訳
魔法を掛けて貰っているので問題はない。

そして前に見付けた店　　雑貨店で目的の物を購入、店から出る。

「……さて、どうすっかなあ？」

購入した物が入った紙袋を見ながら首を傾げる。

思ったが吉日、とばかりに勢いでかったが“コレ”をどう渡
すか考えていなかった。いや普通に渡せばいいんだろうが、そう思
うと気恥ずかしくなってしまう。

はやてやヴィータにプレゼントした時は全く感じなかった感覚。
戦国時代でも感じなかった感覚だ。

雑貨店の前で頭を悩ませていると、

「やあ」

声を掛けられた。

サカキは声のした方を見ると、そこには管理局地上部隊の制服を着たオレンジ髪の青年。前回のミッド訪問で出会ったティード・ランスターが居た。

サカキに視線を向けられながら、ティードは気さくに話し掛ける。

「お前は……」

「また会えるなんてね。管理外世界出身だから、会えないと思ってたよ」

前のお礼も出来ないし、と、ティードは笑う。

しかしサカキの表情は険しくなった。

「おい、何で俺がこっち（ミッドチルダ）に居ないのを知っている」

サカキが前回、ティードと会った時には名前しか名乗っていないかった。名前の響きからミッド出身でないのが察する事は出来たかも知れないが、ティードは前回会った時、の名前を聞いた際サカキの事を知っているような素振りだった。

「前会った時も何か知ってそうな感じだったな……。お前、何者だ

「？」

「ああそう警戒しないでくれ。確かに俺も悪かったな……。よし、この前のお礼も兼ねて説明するから、ちよつといい？」

サカキとティーダが来たのは近くの喫茶店。そのテラスで、ティーダは注文したコーヒーを一口した後、口を開く。

「まずは改めて自己紹介だな。」

俺はティーダ・ランスター、管理局地上部隊首都航空隊一等空尉なんて肩書きを持つてる」

一息置いて続ける。

「それで呼び捨てで呼ばせて貰うが、サカキ、君を知っているのは簡単に言えば君が有名だからだ。家族も含めてね」

家族　八神家のが管理局で有名・注目されているのは以前クロノに聞いた事がある。

僅か10歳で管理局に入局した高ランク・レアスキル『蒐集行使』を持つ少女。古代ベルカ式を使うニアSランクの固有戦力　騎士を持つ。また『闇の書事件』の真実を知る僅かな高官にも　悪い意味で　注目されていて、表でも裏でも目立たない要素がない。……そうだ。

しかしそれで自分が有名だと言うのが分からない。妹や家族と違ってそもそも魔導師でもないし、何か　管理局に目を付けられるような　目立つ事をした覚えはない。ライダーの事がバレたかとも思ったが、その辺りの情報を錬矢が消さない筈がない。

意味が分からず首を傾げるサカキ。そんなサカキの様子を見て察したか、ティードが苦笑しながら説明する。

「その様子じゃ分かってないみたいだな。君が有名なのは、ロストロギア　『鎧』を個人所有しているファルコン家の一人娘、ソラ・ザ・ファルコンの婚約者だからだ。ファルコン家はミッドでもかなり有名でね、取り入ろうとするのは幾らもある」

それはソラの父・アラシ・ザ・ファルコンから聞いた事がある。

ファルコン家は管理局所属ではないが、所謂スポンサーをしていてそれなりに発言力もある。更に『キバの鎧』、『サガの鎧』、『レイの鎧』（管理局がロストロギア指定している）を個人所有していて、聖王教会にも強い繋がりもあって、そんなファルコン家に取り入ろうとする輩は数多い。それで“なんやかんや（当主が話を聞かないのとその奥さんの笑顔の圧力で）あつて”、公式上ソラの婚約者になってしまっていた。

「持ちかけられる縁談の話全て断るファルコン家当主が、公式に一人娘の婚約者を発表したんだから有名じゃない方が可笑しいって」

「オヤジさんか……！！」

盛大に頭を抱えるサカキ。話を聞く限り、ぶっちゃけ手遅れなレベルで有名な話らしい……。

俺の人生先決まっちゃったの？　なんか外堀埋められてるし……。これってもう詰み？　詰みなのかな……？

「NOOOOOOOOOOOOOOOOOOOツ!？」

「うおっ!？」

紫のグリード（Dr・M）でもないのに終末を目前に半熟卵のように絶叫する鬼。

ティーダは驚いて仰け反る。

「マジかよ……！」

「……君も大変みたいだな……。でも」

テーブルに突っ伏したサカキにティーダは同情する。そして続けた。

「俺は君じゃないから分からないし、こう言ったら何だが……いい話だと思うぞ？ ファルコン家の力は強い。婿入りすれば権力も」

「何言ってるんだ」

ティーダの言葉を、サカキが遮った。

「俺はそんなんに興味ねえよ。ソラの奴やオヤジさん達と知り合ったのだって偶然だ。つーか、そんなの（権力）目的だったらオヤジさんに取り入ろうとしてる奴らと一緒にだろ。俺は嫌だね」

ティーダを真っ直ぐ見据え、サカキは言う。その言葉に、嘘は一切ない。

……しかし、直ぐにテーブルに突っ伏した。

「でも婚約者はなあ……！？」

「うん、サカキ、今日家来る？ 俺外回り終わって帰るだけだし、相談乗るから。というか飲もう！ 飲んで忘れようっ！」

という訳でランスター家。ティーダが局員で高給料のため持てた一軒家で……サカキとティーダは、ベロンベロンに顔を赤くしていた……。

「いいよなー！ 映像で見た事あるけど、あんな可愛い娘の婚約者になってよー！？」

「アヒヤヒヤヒヤヒヤッ！ 羨ましいか？ 羨ましいだろっ！
！」

「ああ羨ましいさっ！ おっぱい大つきいしっ！！
俺頑張っても、ついついアドバイスしちゃって……親友以上恋人未
満ばかりだ畜生！ お陰で年齢〓恋人無しだっ！！」

「ぶっちゃけ俺ソラと付き合った覚えないけどなっ！！」

「豆腐の角に小指ぶつけて死ねっ！！」

缶ビールを片手に飛ばすバカ鬼とオレンジ……。

その二人を少し離れた所で、ティータの妹 ティアナ・ランス
ターが呆れた視線を向けていた。

兄が知らない（一週間前に会ったのは後で思い出した）男を連れ
て来たと思ったら、いきなり飲み初めてこの通りである。これには
呆れる他ない。

ティータはビールを一飲みし、サカキに言った。

「で、実際どうなんだ？ あんな可愛い娘の婚約者なのは確かなん
だし、うはうはなんだろ？」

「……それなんだけど、正直微妙なんだよ……。いや、ソラやオヤ
ジさん達が受け入れてくれるのは嬉しいよ？ でも、なんつーか、
な……」

缶ビールをテーブルの上に置き、サカキは漏らす。酒が入っているせいか、本音が漏れてしまっているようだ。

ティーダはそれを赤い顔で怪訝な表情を浮かべ……次の瞬間大声を上げた。

「つてあああああああつ!!」

「うおっ!?! どうした?」

「兄さん?」

「ヤバイ! 明日使う資料、外回りの時の警防署に忘れて来たつ。この時間だと……よし、まだ誰かいるだろ」

バタバタと、私服から制服に着替えティーダは身支度を整える。

「兄さん、明日じゃ駄目なの?」

「いや、明日の朝一の会議に使うのだからどうしても……。という訳でサカキ! ティアナ任せたつ!」

「あーはいはい。……って何っ!? 普通初めて家に入れた奴に妹任せるかっ!?!」

しかしサカキのツッコミも虚しくティータは既に家の外。

そして残されたサカキとティアナは……。

「……片付けしよ」

「……手伝うわ」

飲み食いした物を片付ける事にした。あとサカキは家に、今日は泊まると連絡しようと思った。

暫く時間が経って、クラナガンのとある路地。そこで……。

「ッ……」

管理局の制服姿のティードが、壁に手を着き下を向いて、盛大にゲロツていた。

家を飛び出し、身体強化の魔法を使用した上で外回りで来た警防署に忘れた書類を回収、一安心して帰宅しようとしたのだが、酒が回った状態で急な運動をしたせいで気分が悪くなり……この有り様だ。

ある程度スッキリした所で、ティードは真っ青な顔を上げ千鳥足で歩き出そうとする。

「ふう〜気持ちワリ……。いい感じで頭シェイクした。やっぱりコンビニ寄って“ウ　の力”でも……　　ッ!」

歩き出そうとして、再びゲロる。

「……ちよいとお尋ねするがね」

そうしていると、声を掛けられた。路地の奥からだ。

ティードは青い顔のまま路地の奥を見ると、そこには色眼鏡を掛けた男が……。月明かりの角度で体の一部が見えないが、顔は見える。

「管理局地上部隊首都航空隊の、ティード・ランスター一等空尉殿とお見受けするが、よろしいかね？」

「……ああ、確かにそうだけど、用があるなら後にしてくんない？
今気持ち悪……ウエっ！」

「ああ確かに取り込み中みたいだね。でもねっ……！」

生じたのは、鈍い光りを放つ銀の一閃。

ティードは勘で体を仰け反らせ鈍い銀の光りをかわす。

体勢を考えずかわしたため、地面に背中から倒れる。その隙を見逃す筈がなく銀の光りは突き出された状態のまま、横になっているティードに振り下ろされた。

「ッ！？ ハーデイスッ！！」

《Set Up》

ティードの声に応え、右腕の腕輪が光り、光りは右手に集約して形を作った。装飾銃型インテリジェンスデバイス『ハーデイス』。ティードの愛機だ。

ティードは一瞬でセットアップしたハーデイスの銃身の下部分最も頑丈な場所で銀の光りを防いだ。

防いだ事で動きが止まり、銀の光りの正体が見えた。日本刀だ。
ミッドチルダでは質量兵器に数えられる、物理的な人を傷付ける物
……。

日本刀を振るう男が更に日本刀を押し込もうとするが、咄嗟に蹴りを放ち男を蹴飛ばす。男が離れた所で、ティーダは起き上がり体勢を直しバリアジャケットを展開する。

黒いズボン、白いシャツ、黒いロングコートのバリアジャケットだ。

「……いきなり何すんだ。誰かに恨まれるような事………結構あるけど。つか、それ質量兵器だろ」

「ああそうだねエ。コイツは日本刀って言って、ある管理外世界の物でこっちに流れた来たのを手に入れてねエ。」

俺はミッド出身で魔法資質がないが、仕事する上でコイツは丁度よくてね、何せコイツの切れ味はかなり良くて管理局の連中は、コイツで切ったのを『魔法を使ったんだろ』と勘違いするもんだからお陰で資質のない俺は楽に仕事が出来るのさ」

なるほどね、とティーダは内心で頷く。

管理局は魔法至上主義。ティーダのような一部を除くと、魔法を絶対の物と考えてる節がある。

……そのせいもあって、魔法資質のない管理世界から反感を買っ

てもいた。

「それで最初の質問だけど、俺個人はアンタに恨みはないさね。でも仕事でね、悪いけど死んでもらうよ」

「ああそう。……って、素直に『じゃあどうぞ』って言う訳ないだろ」

「ああ言う訳ないねエ……。こつちもその方が楽しめるしねエッ！！」

男は言うやいなや、日本刀の鋭い突きを放ってくる。

ティードは冷静に、右手に持ったハーデイスを構える。

別に刃物を向けられた事がない訳じゃない。前に立つ魔導師なら当然だ。確かに目の前の男は今まで相手にした犯罪者より格上だが、対処は可能だ。

突きをかわし、続いて繰り出される斬撃をかわしていく。

男が使う得物、日本刀の事はよく知っている。友人に管理外世界の地球日本に熱狂的なのがいる、聞きたくもないのに聞かされた事があるからだ。

日本刀はその特性上、振る対象に対し刃を垂直に振るわなければ刃は対象を斬る事が出来ない。つまり刃の軸をずらせば斬られないのだ。

……といつても、目の前の男はこちらが軸をずらしても合わせ、垂直に刃を振る腕はある。

なのでティータは、日本刀の刃を紙一重で避けつつ別の方法を使用する。

「シュートッ！」

ハーデイスの銃口、ティータの周囲に展開された魔力スフィアを発射、誘導弾だ。オレンジ色の誘導弾は一発は一直線に飛び、他は回り込むように飛ぶ。

「この程度っ！」

しかし男は日本刀を振り誘導弾を切り裂く。

それに若干引きつつ、ティータは予定通りある魔法を使う。ハーデイスの銃口に冷たい冷気が集まった。

《Freeze Shot》

ハーデイスがそう発すると同時に冷気を纏った魔力弾を発射。

男は発射された魔力弾に反応し誘導弾と同じように日本刀で切り裂こうとする。

「……ッ!？」

しかし日本刀が魔力弾に触れた途端、魔力弾が弾け男の手に冷たい冷気が伝わった。

凍ったのだ。

日本刀の刀身に氷がまとわり、刃を閉じ込めてしまっていた。

男は驚き、色眼鏡の奥の目を見開いた。

「こいつはっ……!？」

「フリーズショット……。お前の武器は封じらせて貰ったぜ」

【フリーズショット】。ティードが持つ技能の一つ、氷結変換で魔力弾に氷結属性を持たせ当たった対象を凍らせる手札だ。

最初に放った誘導弾はフリーズショットを日本刀に当てるための陽動。まさか誘導弾を斬られるとは思わなかったが、反って当てやすくなった。正確に狙わなくても、相手が勝手に当たりに日本刀を振るのだから。

男は腕にかなりの自信があつた。撃ち出す射撃魔法を全て斬り伏せるつもりだったが、その慢心が仇となつた。

「氷結変換……。アンタの情報は調べた筈なんだがねエ……」

「悪いね。俺は資質が低いもんで手札は多く持つてるんだ」

怨めしそうに聞く男にティータは答える。

今回使つた氷結変換は、ティータが先天的に持っている技能ではなく、プログラムを弄つて組んだ物だ。

管理局の魔導師の平均ランクはB〜C前後。フェイトやはやてのようなニアSランクのような者は少ない。ティータはその中でも資質が高いとは言えず、決して高くない資質をカバーするため氷結変換のような手札を数多く隠し持っているのだ。

これらの手札は対策を取られるのを警戒し、滅多に晒す事がないので管理局のデータにも載っていない。男はどうやったか管理局のデータを盗み見たのだろうか、そのために氷結属性技能を知らなかつた。

ティータは武器を封じられた男に対し、ハーデイスを向ける。

「ともあれ、これで武器は封じた。殺人未遂の現行犯で逮捕だ、一緒に来てもらつて」

「……ククク、流石『黄昏の黒猫』と呼ばれる男だ。俺の期待通りだ……。『コイツ』をやっと試せるっ!!!」

男はティーダの警告を聞かず、狂喜したように叫び右手に日本刀を保持したまま、左手を懐に突っ込みある物を取り出した。

濃紺色の、中央に『S』と書かれたガイアメモリだ。

男はガイアメモリのスタートアップスイッチを押し、起動。首筋に挿す。

《SLASH!》

『フハハハッ！ もっと楽しませてくれっ!!!』

男が変貌した怪人 スラッシュドーパントは高々と笑い、濃紺色に、幅広く長く、禍々しく変貌した刀を振りティーダへと肉薄する。

ティーダはドーパントの登場に驚愕した。しかし声に出す暇もなく、直ぐに防衛のために攻撃しようとする……。

「…………ツ!?!」

『ハハハハハッ!!!』

だが、ハーデイスを構えようとした時には、スラッシュドーパー
トが既に刀を、突き出していた。

咄嗟に、ティーダはワザと姿勢を崩す。

その咄嗟の判断が幸をそうし、刀は左肩を薄く切るだけで済んだ。
しかし今のティーダの体勢は隙だらけであり、スラッシュドーパー
トが見逃す筈がなく容赦なくティーダの腹に蹴りを叩き込んだ。

ティーダは力に従い後ろに飛ばされコンクリートの地面を転がる。

そして、切られた訳でもないのに切れ、腹部から血が吹き出
た。

「がっ………！ なっ………！？」

『 凄いだろう？ コイツの力は何でも斬る事が出来てねエ。刀
を使わなくても俺の攻撃は全て斬撃になるのさ』

スラッシュドーパートはティーダの疑問に答えながらゆっくりと、
近付いて来る。

ティーダはスラッシュドーパートの言葉を聞いていなかった。

肩の傷は大した事はないが、腹部の傷、出血が酷い。

(くそっ……このままじゃ……!)

『アンタはコイツを試させてくれたからねェ……。せめての情けに、一撃で殺してやるさね。』

お別れだっ!!!』

スラッシュドーナツの刀が、振り下ろされた。

五十二ノ巻に続く

五十一ノ巻『暗殺者Sノ迫る狂刃』（後書き）

という訳で五十一ノ巻でした。

当初2話構成の筈だった『暗殺者S』ですが、予想より長くなってしまい3話構成になってしまいました。

更新が遅れた理由としては、急遽引越しが決まりその手続きとついで中々執筆出来なかったのが一つ。

そしてついつい妄想で考えた逆鬼IF『サカキとソラ（空）が魔導師だったら』というのをついつい書いてしまい、そっちにスイッチが入ってしまいました……。

魔導師戦の資料にガンダムOOのDVDを借りたり！？

ああ、自分ってホントダメだなあ。

五十二ノ巻 『暗殺者Sノ妹を守る炎の重量コンボ』 (前書き)

漸く更新出来た……。

前半がサカキ、後半がティータのターンになります。

五十二ノ巻 『暗殺者Sノ妹を守る炎の重量コンボ』

ティーダが飛び出した後のランスター家。

今夜ランスター家に泊まる事となったサカキは、ソファアーに腰を下ろしていた。

そのサカキの前で、ティアナは洗濯物を畳んでいた。

最初、酔いも覚めてきたため手伝おうとしたサカキだが、ティアナが「お客さんだから座っててください」と言われ、大人しくいる。

……まだ、はやたと自分だけだった八神家で、“ヒモ”と言われ落ちて込んだのはここだけの話だ。

「……なあ」

「何ですか？」

「こつ言つのもアレだが……よく俺を泊める気になったな。殆ど初対面だろ」

何となく聞いてみた。

約一週間前に一度会ったとは言え、それは顔を見た程度、サカキ

がティードに連れて来られた時が初対面と云っている。

いくら兄が連れて来たとは言え、よく泊める気に、そして二人つきりになるのに抵抗が無かったものだ。

聞かれたティアナは、うーん、と少し考え答えた。

「兄さんが連れて来たから、ですね。兄さん、人を見る目はありますから」

曰く、これまでもティードは酔ったりした勢いで、ティアナの見知らぬ人物を連れて来たりしたそうさ。

ある時はとある地上部隊の部隊長、ある時はとある探偵、ある時は白いスーツの査察官、地上本部のトップのレジアス・ゲイズ、伝説の三提督……。

いずれも良い人達で、ティアナ自身も可愛がってくれたそうさ。

管理局関係者が見たら絶叫しそうなメンツがいるが、生憎サカキはよく分かっている。

「ちと……」

と、洗濯物を畳み終えたティアナは立ち上がる。

「それじゃ、兄さんを迎えに行つて来ますから留守番、お願いしていいですか？」

「はいっ!？」

ティアナの突然の申し出に、サカキは裏返つた声を出してしまつた。

時間はもう21時過ぎ。女子が一人で、ましてやティアナのような子どもが出歩く時間ではない。

当然、サカキは止めようとする。

「おい、いくら何でも時間が時間だぞ？ それに何でお前が兄貴を迎えに行く」

「兄さん、前に同期の人と遊びに行った時、酔い潰れてゴミ捨て場で寝てた事があるんです。あの調子だと、多分……」

「ちよつと待て。お前の兄貴つてエリート魔導師つて設定じゃなかったか？ 設定詐偽じゃねえのかっ!？」

前例持ち。こでまたなつてたらご近所で噂になつて恥ずかしいと、ティアナ談。

あまりの酷さにサカキもつい、メタいツッコミをしてしまつ。

『なっ！？』

刀がティードの首に触れる触れないかの所で、音式神とディスクアニマル 茜鷹、瑠璃狼、緑大猿、アサギワシ、キアカシシが乱入し、スラッシュードーパントに襲い掛かった。

スラッシュードーパントはまわりつく音式神とディスクアニマルを振り払おうとするが、五体の小型動物メカは巧みにかわし更に攻撃してくる。これにはたまらず、ターゲット（ティード）から離れてしまう。

『何なんだコレは……！？ ぐっ……！？』

更に突然、何者かに飛び蹴りを貰い後ろに飛んだ。

ドーパントとなり、体の構成自体が変貌したスラッシュードーパントには蹴り程度何のダメージはない。しかし、注意を逸らすには充分だ。

飛び蹴りを放った人物 サカキは、地面に着地すると直ぐに懐から手の平サイズの黒い玉を取り出し、地面に向け叩き投げた。

瞬間、路地内に光が破裂する。

『ッ！ ……居ない！』

光が収まった時には、邪魔した人物も、ターゲットの姿も居なかった。

残っているのは血溜まりのみ……。

スラッシュドローパントは元の色眼鏡を掛けた男に戻った。

「……逃がしたか。まあいいさね、大体的見当は付く」

翌日、クラナガンの某病院。

病院の一室、一人用の個室の名札には『ティード・ランスター』となっていた。

その病室の前に、Tシャツとズボンの上から着物を着流した人物

サカキが居た。

サカキはノックをせず、扉を開ける。

扉の向こう、病室にあるベッドの上に服の上からで見えないが、肩と腹に包帯が巻かれたティータが居た。

「……よう」

「おう。というか部屋に入る時くらいノックしろよ」

「お前には必要ないだろ」

「おい」

「で、どうだ？」

「肩はともかく腹がザックリだからな。暫く入院生活だ」

ティータは肩を　　左肩が傷があるため右肩だけで　　竦めた。

「それにしても、手酷くやられた。一応でもエースって呼ばれてるんだが、こりゃ返上かな」

「別に自分で名乗った訳じゃねえだろうが」

「それはな？　しかし、アイツ何者なんだ？　急に化け物みたく強

くなりやがって」

「その事なんだが、何か恨みでも買ってるのか？」

そうサカキが聞くと、ティータは再び右肩を竦ませて「奴自身には無いが、それなりにな」と答えた。

理由は聞こうとは思わない。たった一日の付き合いであるが、ティータの性格は概ね理解しているからだ。

「それよりもティアナは？」

「今は受付で、入院手続きなんかをしてるよ。なんと言っか、出来た妹だな」

サカキの言葉に、ティータは苦笑いを浮かべた。

サカキがスラッシュドーナツに割って入った時、ティアナもあの場に居た。ティアナがハーデイスの反応を辿ってあそこに来たのだから、当然だ。

ティータの傷を見て、最初顔を青くして取り乱したティアナだったが、今では冷静さを取り戻していた。

あくまで表面上では、であるが。

「俺が色々無茶する事が多いからな、ティアナには苦労掛けるよ」

「だからお前よりしっかりしてるんだな。幼い時から母性本能でダメ男の世話とは、可哀想に」

「おいコラ」

軽い談笑をしていると、受付を終えたティアナが病室に来たのでサカキは退室する。

サカキが向かったのは、病院の屋上。洗濯物が干され、誰も居ない屋上で柵に寄り掛かった。

すると、後ろから風が吹きサカキはゆっくりと振り返る。

「やあ」

そこに居たのは、脇が露出した特徴的な紫白の巫女服と紫のリボンを後頭部に付けた少女（少年） 博麗 名無だった。

「久しぶりかな？ 八神サカキ」

「そうだな。……香里と香流から聞いてたから、もしかしたら、とは思ってたけどな」

「それなら話は早い」と、名無の瞳が紫色に光り“体内から”三枚のメダル　コアメダルを飛び出し、名無の周囲を旋回する。名無は長方形のバツクル　オーズドライバーを差し出した。

「オーズの可能性を見たい。検索の結果、君はガメルの重量系のメダルと適合する事が分かっている。使いたまえ」

「使うのはいい。ただ、その代わりに調べて欲しい事がある」

「構わない。何を検索すればいい？」

「ティータ・ランスターが命を狙われる理由……いや、ティータ・ランスターを襲ったドーパントについてだ。刀を持ったドーパントだ」

「了解。……さあ、検索を始めよう」

名無は瞳を閉じ、両腕を広げた……。

深夜。ティードが入院している病院の前に、スラッシュドーパーンの、色眼鏡を掛けた男が居た。

「……………ふっ……………」

男は薄く笑みを浮かべ、病院に近付こうとする、が、直ぐに足を止めた。

病院の入口の前に、朱色の着物の少年　サカキが立っていたからだ。

「おやおやア？　ボク、こんな時間にどうした　」

「ニゾウ・ギンザンだな？」

夜中に彷徨っていたガキ、そう思っていた。しかし自分の名を、仕事の依頼主にも知られていない本名を口にした事で男　仕事名、SLASH　ニゾウはサカキに対する認識を変えた。

先程までの小馬鹿にしたような態度から、殺気が込められた物に変わる。

「……お前さん、っ！ ……そうか。あの時邪魔してくれた奴か」

ニゾウは漸く気付いた。

あの時は月明かりしか明かりがなかったため、ニゾウからはサカキの顔が見えなかった。今サカキの着る派手な着物と、戦闘者の雰囲気で気付いたのだ。

「ああ、そうだ。何でティードを狙う？ ……なんて在り来たりな事は聞かねえ。ただな……」

そこで言葉を切る。

思い出すのは、ティードの怪我を見た時のティアナの顔。

ダブって見えた。

戦国時代に、最後に見た妹……紅葉の浮かべていた表情。

「他人のでも、妹を泣かす訳にはいかねんだよ……！」

「……知った事かあああああつ……！」

《SLASH》

ニゾウはスラツシユドーパントに変わり、一気にサカキに肉薄し切り裂かんと刀を振る。

サカキは背中に背負っていたギター　音撃弦・烈断で防ぐが、力負けして後方に押されてしまう。

「ぐうつ……！」

『どうしたいつ！　こんなもんかアツ！？』

スラツシユドーパントは追撃に、力任せに刀を振る。

首を狙った一閃をサカキはしゃがんで回避、スラツシユドーパントの脇を前転して潜り抜け、立ち上がり様に烈断で左上に切り上げる。

烈断の刃は確かにスラツシユドーパントの肉体を切るが、斬るには至らず浅く裂いただけであった。

ドーパントの肉体は硬く、変身していないサカキの筋力ではドーパントの肉体を斬る力はない。

「チツ！」

『そんなもんかアアアアアアアアアアツ！！！？』

声を上げ、スラッシュドールパントは刀だけでなく左腕、両脚とスラッシュメモリの記憶である『斬撃』でサカキを狙う。

サカキは烈断でそれらを防ぐが、全てとはいかず服や体を切られていく。

チツ……！

内心舌打ちし、烈断を横薙ぎに振るう、同時に、後ろに下がる。

そうしてスラッシュドールパントの猛攻から脱したサカキは、音角ではなく名無に渡されたオーブドライバーを装着し、三枚のメダル
白の重量系コアメダルをバツクルに入れる。

その間にもスラッシュドールパントが襲い掛かるが、それら全てを紙一重でかわし再び距離を取り、ベルトの右脇にあるオーブスキャナーでバツクルに装填したコアメダルを読み込んだ。

「変身！」

《サイ！　ゴリラ！　ゾウ！　サゴーズ……サゴーズ！》

「ハアツ！」

『何っ！？　「あっ！？」』

サカキが変身したオーズ・サゴーズコンビ。オーズSCの登場に動きが一瞬止まったスラッシュシュドーパントに、オーズSCは烈断を持っていない左腕で殴り飛ばした。

しかもオーズSCが左拳を繰り出した瞬間、拳に炎が纏い、スラッシュシュドーパントに当たると爆発が起き多大なダメージを与えたのだ。

『ぐう……何なんだお前はっ!?!』

「フンッ!」

予想外の事態、ダメージに、冷静さを失ったスラッシュシュドーパントは問い掛けるが、オーズSCは聞く耳を持たず左右のパンチ、膝蹴り、蹴り上げ、リアットを惜しげもなく全力で繰り出していく。そのいずれも、炎を纏い当たった部位を暫く焼く。

このままじゃられると、スラッシュシュドーパントは反撃するがオーズSCはダメージを気にせず、無理矢理にでも攻め続ける。

烈断を袈裟に叩き込み、更に本来オーズが使えないはずの、口（にあたる部分）から緑の炎を吹き出しスラッシュシュドーパントを追い詰めた。

「はっ! フンッ!」

スラッシュドーパーントに背を向け、その状態から烈断を突き刺し音撃震・爆震を烈断にセットし音撃モードに変える。

そして、

「音撃斬・重断炎震じゅうたんえんしんッ！！」

音撃斬・重断炎震

鬼ではなく、オーズとして掻き出す音撃。

音撃モードの烈断に付けられた鬼石から赤と、白の波紋　音撃の波がスラッシュドーパーントに伝わる。

やがて音撃を止め、オーズSCはスラッシュドーパーントを蹴り飛ばした。

直後、爆発。

ガイアメモリが抜け、人の姿に戻ったニゾウは地面に倒れる。スラッシュメモリも直ぐ近くに落ちた。

オーズSCは、烈断を肩に担ぎニゾウに近付き、スラッシュメモリを踏み壊した。そうして、直ぐにその場を離れる。

派手に戦ったため、暫くすれば管理局が来るだろう。管理局に見つかる訳にはいかない。

ニゾウだが、ダメージが大きく動けないし、ガイアメモリは壊した。後は管理局の仕事、ティータの詳言で捕まるだろう、と縛りもせず放置した。

……だが、管理局の調べで『誰かが悪戯で何かを爆発させた』となり“その場には誰も居なかった”となった事は、サカキが知る事なかった……。

翌日、ティータは病室のベッドの上で一枚の紙切れを見ていた。今朝、備え付けの台の上にあった物だ。

『またな』

『逆鬼』

たったそれだけ書かれた置き手紙。

ティーダはフツと、笑みを浮かべた。

コンコン、と誰かが扉をノックする。

どーぞ、とティーダが返事すると扉が開かれ、金髪の癖毛の男と、眼鏡を掛けた栗色髪をポニーテールにした男が入ってきた。

どちらも、ティーダのよく知る人物だ。

「よっ、グラハム、ビリー」

「久しぶりだな。怪我の具合はどうだ？ ティーダ」

「いやはや君が怪我したって時は驚いたけど、元気そうで何よりだよ」

ティーダの様子に、二人の男　　グラハム・エーカーとビリー・カタギリは笑みを浮かべた。

どちらも管理局に所属して士官学校の同期で友人、グラハムはティーダと同じ首都航空隊で同じ階級、ビリーは技術開発部でグラハムとティーダのデバイスを作った人物だ。

友の様子に安心したグラハムは、直ぐに真剣な表情になり切り出した。

「ティード、君ほどの人物が遅れを取るとは……襲撃者はまさか」
「いきなりそれかよ。まあ、ああ。俺も見た時は驚いたが、ありゃ噂の“怪物”だな」

グラハムの言葉にティードは頷く。

今ミッドチルダ……クラナガンでは不可解な事件が起きている。

魔法使っても、不可能な事件……。目撃詳言で、犯怪物を見たという声が多数上げられている。故に『最近起きている不可解事件の犯人は怪物』という噂が流れているのだ。

そして、噂はもう一つ……。

「ティード、“仮面ライダー”の方は」

「悪いな。そつちは見てない」

『怪物が出た時、何処からともなく仮面の男が颯爽と現れ、怪物を倒す』。バイクに乗って走り去るその姿を見た者が、いつの頃から“仮面ライダー”と呼んだ。

グラハムは一度仮面ライダーと相対し、その素性を見る事が出来ず逃がしてしまった事があった。その日以来、グラハムは仮面ライダーを追い続けているのだ。

あの黒い体に赤い複眼、Wの角を持つ仮面ライダーを……。

「そうか……」

「グラハム、お前相変わらず仮面ライダーにご執心なんだな」

「当然だ。一目した瞬間から、仮面ライダーに心奪われた。乙女座の私には、センチメンタリズムな感情を抱かずにはいられない」

ハッキリと真顔で言い切るグラハム。それにティータとビリーは苦笑いを浮かべるしかなかった。

それを構わず、グラハムはビリーに向き中心に白いクリスタルが埋め込まれたドックタグ　待機状態の己のデバイスを取り出した。

「カタギリ、私のデバイス　フラッグを、更に私色に染め上げて欲しい。仮面ライダーに負けないように」

「了解。何か要望は？」

「最高のスピードと、最強の剣を所望する」

「合点承知。そうだティータ、ついでに君のデバイスも強化するか
ら出してくれるか？」

グラハムからフラッグを受け取ったビリーは、次はティータに向

かつて手を出す。

ティードとしては頼む気だった（ビリーは分かっていたと言った）ので、素直に待機状態のハーデイスを渡した。

「ティード・ランスター！！」

とその時、扉が開かれ……あたりの強く開かれたため外れ、その人物が入ってきた。

二メートル近くの巨体に、スキンヘッドの頭、額のみ伸びカールした小さな金髪が目を引く。

病室に入ってきた巨体の人物　グラハムの部下、アレックス・ルイ・アームストロングは号泣しながら、ベッドの上のティードに突撃する。

「我輩！　知らせを聞いて飛んでまいりました！　無事で何より……我輩、感動して涙があっ！！」

「ギャー！　抱き付く暑苦しいっ！　それよりぎゃあああああああああっ！！」

ベギバギボギバギッ！！

アームストロングは感動の涙を流しながらティーダを締め上げ…
…訂正、抱き締める。

その際にアームストロングの腕力により、ティーダの体からかなりヤバい音が響いた。

「兄さんどうしたの？ 騒がしい…きゃー！！ 兄さんー!？」

アームストロングの暑い“抱擁”は、ティアナが来て殴り止めるまで続いた……。

「くそっ！ 失敗するとは……!!」

その日の夜、クラナガンの時空管理局地上本部の一室で一人の高

官が悪態吐く。

まだ若いこの高官は、ティードの直属の上司であり……ニゾウにティード殺害を依頼した人物だ。

親のコネで今の役職に着いた高官は、ティードの事を妬み嫌っていた。航空隊のエースで部下からの信頼を得て、上部の人間も、一目置いていた。いずれ今の自分の地位も引きずり降ろされる……。

その恐怖から、ティード殺害をSLASHと名高い殺し屋に依頼したが……失敗した。

高官は焦った。ティードの事もそうだが……ティード殺害に成功したら、更に新しい依頼……ファルコン家の一人娘、ソラ・ザ・ファルコンの婚約者と発表された八神サカキの暗殺を依頼しようとしていたからだ。

聖王教会と親しく、管理局にも強い発言力を持つファルコン家。取り入れれば自分は上に昇格出来る。更には、美しい女性……ソラ・ザ・ファルコンも手に入る。

だがそのような旨い話、自分以外の奴らも狙っている。だから先を急いだというのに、前段階で失敗しまった。

「こうなったら……！」

自分自らで、そう思い立ち上がるうとした時、後頭部に冷たい感触を感じた。

「 どうも」

声が聞こえ、高官はよっくり、後ろを振り返る。そこには、銃型のデバイスを高官の頭に押し付けたティータ・ランスターがそこに居た。

「……っ！？ ……ッ！！」

「不吉を届けに来ました」

驚愕する高官に対し、ティータはニヤリと笑う。

黒いロングコートに、黒い銃型のデバイス、黒に不釣り合いなオレンジの髪。

自由気ままの猫のように、組織に所属していながら組織に縛られない男。奴の邪魔をすれば、不吉を届けられる……。

『黄昏の黒猫』。

男の、ティータ・ランスターの見た目と行動から名付けられた二つ名。

「じゃあな」

「ま、待」

ガツン、と、ティードはハーデイスの代わりに銃型デバイスで高官を殴って気絶させる。

「ふっ……。イテテ、アレックスの野郎、後で覚えてろよ……」

直ぐ様、その場を離れるティード。病院から抜け出したので看護師に見付かる前に戻らなければならない。

……数時間後、査察官が数人の武装隊の魔導師と踏み込み、気絶していた高官を捕まえた。

匿名で、高官が隠していた汚職のタレコミがあったそうだ……。

五十三ノ巻に続く

五十二ノ巻『暗殺者Sノ妹を守る炎の重量コンボ』（後書き）

そんな訳で五十二ノ巻でした。

あともう少しで最終章の下準備が出来ます。

サカキが変身したサゴーズコンボですが、ハルルさんの所のオリジナル設定を使わせてもらいメダル一種類適合だと能力上昇or追加されます。

サカキサゴーズ 炎属性追加・身軽

香流ラトローター 腕力強化・チーターレッグの制動力強化

淳一ブラカワニ 攻撃力狂化・ベノサーベル装備

ソラタジャドル クジャク弾（クジャクオーラの追尾弾）、タジャスピナーの弾が刃化・雪月牙装備

みたいな感じ。香里は赤・緑・青メダル適合なので追加能力はありません。

暗殺者S編の敵、ニゾウ・ギンザンは銀魂のあるキャラがモデル。今後も登場予定。

ティーダの同僚達は自分の趣味です。グラハムも今後登場します。

今回はソラと香里がメインです。

只今、黒服さんの『仮面ライダー剣&キバ 青く輝く炎』にサカキ
達が出張中。そちらも是非読んでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6067j/>

仮面ライダー逆鬼と夜天と魔法少女と

2011年12月11日19時52分発行